

八尾市

# 八 尾 南 遺 跡

一大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

第2分冊（遺物・分析・総括編）

付編 大和川右岸堤防の調査

—若林地区三箇用水樋撤去に伴う—

2008年3月

財団法人 大阪府文化財センター

# 八尾南遺跡（第2分冊）—遺物・分析・総括編— 正誤表

上記図書について以下の誤りがございました。訂正してお詫び申し上げます。

真	行	題	→	正	真	行	題	→	正
12	7	207・208・209	→	198・200	139	35	1397・1401・1403・1409・	→	1397・1398・1400・1404・
* 8	207		→	198		140	1410・1414	→	1407・1410
* 9	208・209		→	199・200	153	1	1421・1423・1433・1434・	→	1421・1424・1427・1433・
14	-	【地内】土器埋納土坑1	→	土器埋納土坑1	2	1443・1445・1460	→	1435・1442・1445・1460	
* -	-	【地内】土器埋納土坑2	→	土器埋納土坑2	3	1437	→	1436	
79	11	輪筒瓦 (886~891)	→	輪筒瓦 (885~891)	4	1423	→	1424	
129	17	1212・1213	→	1206・1207	5	1418・1425・1434	→	1408・1431・1435	
* 23	1223		→	1227	6	1427・1442	→	1423・1449・1461	
* 24	1224・1223		→	1230・1231	7	1422	→	1424	
* 25	1211		→	1215	10	1416	→	1419	
* 30	1211		→	1215	11	1476	→	1475	
* 31	1212		→	1216	12	1462	→	1466	
* 37	1223		→	1227	13	1484・1485	→	1482・1486	
123	4	1222	→	1226	14	1484	→	1482	
* 9	1224		→	1230	15	1437・1444	→	1436・1450	
* 11	1225		→	1231	16	1508	→	1509	
* 14	1232・1236		→	1254・1257	17	1513	→	1515	
* *	大型が2点 (1251~1255)		→	大型が5点 (1251~1255)	18	1515	→	1512	
* 15	1256		→	1253	19	1506・1509	→	1509・1510	
* 16	1232		→	1234	20	1496	→	1494	
* 25	1252		→	1254	21	1527	→	1529	
* *	1253		→	1956	22	1502・1508	→	1500・1506	
* 26	1254・1255		→	1253・1256	23	1509・1540	→	1510・1541	
* 1*	1254		→	1253	24	1524	→	1522	
* 27	1255		→	1256	25	1519・1524	→	1522・1523	
* 28	1256		→	1253	26	(1533・1534・1537~1540)	→	(1533・1534・1537~1540)	
* 32	1227~1229		→	1222・1228・1233	27	1558~1563	→	1558~1561	
* *	1228・1231・1233~1236		→	1223~1223・1229・1236	28	1569	→	1574	
* 33	1223		→	1223	29	1574	→	1572	
* 34	1222		→	1229	30	1579	→	1578	
* 35	1230・1234・1235		→	1233~1235	31	1580~1588・1593	→	1580~1586・1593	
* 36	1231・1233		→	1239~1235	32	1590	→	1629	
* *	1231		→	1229	33	1695	→	1645	
* 37	1223		→	1235	34	1653	→	1649	
* *	1226		→	1232	35	1643	→	1639	
126	18	1283	→	1289	36	1636・1639・1644・1655	→	1630・1636・1639・1644	
179	23	1310	→	1312	37	1661	→	1664	
* 24	1205・1312		→	1310・1316	38	1662~1665	→	1660・1661・1665・1666	
* *	1311		→	1315	39	1661	→	1664	
* 25	1313		→	1317	40	1664	→	1660	
* *	1308・1309		→	1310・1311	41	1665	→	1667	
* 27	1308		→	1310	42	1717	→	1716	
* *	1308・1310・1311		→	1310・1312・1315	43	1718	→	1717	
* 28	1314		→	1298	44	1716	→	1719	
* 39	1317		→	1314	45	1719	→	1718	
* 31	1317		→	1314	46	1719	→	1718	
* 34	1315・1316		→	1309・1313	47	1721~1726	→	1721~1726	
* 36	1316		→	1313	48	1721・1727	→	1721・1722	
* 36	1315		→	1309	49	1738~1742	→	1738~1740	
131	9	1326~1331	→	1326~1328	50	1742~1746	→	1741~1746	
131	31	1362	→	1361	51	1744	→	1747	
139	5	1381~1387	→	1387~1387	52	1766	→	1761	
* 9	1374~1376~1384		→	1373~1376~1378	53	1765	→	1764	
* 10	1382		→	1372	54	1765	→	1766	
* 11	1377~1384		→	1377	55	177	→	1767	
* *	1383		→	1378	56	1782	→	1834	
* 12	1383		→	1381	57	1787	→	2055	
* 26	1397~1415		→	1397~1401・1403~1407・	58	2390	→	2388	
* *	1408~1413・1415~1418		→	1408~1413・1415~1419	59	19	壁穴建物8 (図241)	→	壁穴建物7 (図241)
* 27	1416~1537		→	1405・1408・1414~1419	60	2551	→	2961	
* *	大型 (1539~1549)		→	~1537	61	壁穴建物8の床面から	→	壁穴建物7の床面から	
* 31	1398・1409・1405		→	1399・1403・1409	62	29	(図8)	→	(図249)
* 32	1401~1402・1406~1414・	1415	→	1398・1404・1405~1407・	63	29	(図8)	→	(図249)

(財) 大阪府文化財センター

八尾市

# 八 尾 南 遺 跡

一大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

第2分冊（遺物・分析・総括編）

付編 大和川右岸堤防の調査

—若林地区三箇用水樋撤去に伴う—

財団法人 大阪府文化財センター

## 凡　例

1. 現地調査にあたっては、当初、国土地標軸（使用測地系「日本測地系〔改正前〕」）第VI座標系を基準に、「(財)大阪文化財センター 発掘調査マニュアル」（1988）に定めた地区割法に準拠していたが、調査途中で「(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」（2003）が導入されたため、の内容に準拠した。その詳細については第Ⅱ章第1節に記述している。
  2. 本書で用いる遺構番号は、遺構の種類とは関係なく、調査時において検出順に付与した1からの連番号であり、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付して「10戸」などと表記した。また、掘立柱建物やピット列など、すでに番号が付与された複数の遺構から構成される遺構については、「掘立柱建物1」のように遺構番号と遺構の種類を逆転させて表し、調査時における各遺構の番号については、遺構図中に個別に表示している。また、整理作業の過程において、遺構番号を新たに付与した遺構もあり、発掘調査時の遺構番号とは必ずしも一致しない。遺構の対照表は第2分冊の巻末に示している。
  3. 遺物番号は、挿図・写真ともに一致する通し番号である。なお、生駒山西麓産の胎土を用いている土器については、遺物番号に下線を引き、その他のものと区別した。
  4. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、基本的に土器類を4分の1とし、大型の土器類や石器・木器等その他の遺物については、各遺物の寸法に応じて適宜縮尺を変更した。
  5. 遺物実測図に用いたトーンは2種類あり、赤色が赤色顔料の塗布を、灰色が異種胎土及び被籠土器の編籠状圧痕の存在をそれぞれ示している。
  6. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版 標準土色帖』2003年版を基準としている。
- 遺構・遺物の観察・記述に当たっては、下記の文献を参照した。編年観等についてもこれに準拠している。
- 松井章編 2003『環境考古学マニュアル』同成社  
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』貞陽社  
守沢薰・森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編I』木耳社  
(財)大阪府文化財センター編 2006『古式土師器の年代学』  
若林邦彦 1999「河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷」『河内平野遺跡群の動態VII』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター  
奈良国立文化財研究所編 1993『木器集成図録 近畿原始編』  
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

# 本文目次

## 第2分冊（遺物・分析・総括編）

### 凡　　例

### 第VI章 出土遺物の記録

#### 第1節 土器

1. 第1面〔古代～中世〕 .....	1
2. 第2面〔古代・古墳時代中期・弥生時代後期末～古墳時代初頭〕 .....	17
3. 3層中検出遺構〔弥生時代後期末〕 .....	115
4. 第3面〔弥生時代後期〕 .....	171
5. 第3b面〔弥生時代後期〕 .....	293
6. 第4面以下〔弥生時代前期～中期・縄紋時代〕 .....	296

#### 第2節 石器

第3節 木製品 .....	314
---------------	-----

第4節 士製品・鉄製品・石製品 .....	336
-----------------------	-----

### 第VII章 自然科学分析

第1節 分析の目的と概要 .....	338
--------------------	-----

第2節 縄紋～弥生時代の形成地層の微化石分析 .....	339
------------------------------	-----

第3節 第3面竪穴建物9の堆積地層分析 .....	365
---------------------------	-----

第4節 弥生～古墳時代遺構出土種実の同定 .....	375
----------------------------	-----

第5節 中世土坑墓出土人骨の分析 .....	380
------------------------	-----

第6節 八尾南遺跡出土木製品の樹種 .....	383
-------------------------	-----

第7節 大阪府八尾南遺跡出土試料の <sup>14</sup> C年代測定 .....	433
---------------------------------------------	-----

### 第VIII章 総　　括

第1節 遺跡の構造変遷 .....	441
-------------------	-----

第2節 弥生時代後期の竪穴建物について .....	453
---------------------------	-----

引用・参考文献 .....	462
---------------	-----

遺構番号対応表 .....	466
---------------	-----

付編 大和川右岸堤防の調査—若林地区三箇用水樋門撤去に伴う— .....	471
--------------------------------------	-----

# 挿 図 目 次

- 国 1 戸戸 2 ~ 4 出土土器  
 国 2 清 1, 4, 5, 11, 15 出土土器  
 国 3 清 14 出土土器 (1)  
 国 4 清 14 出土土器 (2)  
 国 5 「坑 30 ~ 13 壁」 1, 1 砂  
 国 6 上坑 9 ~ 15, 16 ~ 21 出土土器  
 国 7 土坑 4 坑上土器 (1)  
 国 8 土坑 4 坑上土器 (2)  
 国 9 土坑 4 坑上土器 (3)  
 国 10 「壁 30 ~ 13 壁」 26 出土土器  
 国 11 土器 1 砂 1, 2 出土土器  
 国 12 ピット 1 ~ 3, 5 ~ 7 出土土器  
 国 13 1 ~ 2 豊出土土器  
 国 14 出土土器 分類 (1)  
 国 15 出土土器 分類 (2)  
 国 16 清 26 出土土器  
 国 17 年代 1 ~ 7 出土土器  
 国 18 「壁 30 ~ 13 壁」 1 砂  
 国 19 「壁 30 ~ 13 壁」 2 砂  
 国 20 大坑 1 ~ 2 出土土器  
 国 21 大坑 2 出土土器  
 国 22 丹 26 出土土器  
 国 23 清 28 (八地 X 13) ~ 36 土坑 58 ~ 60 出土土器  
 国 24 上坑 1 ~ 3 砂 1 砂 23 ~ 26 出土土器  
 国 25 井口 1 出土土器  
 国 26 通路 1 ~ 4, 8 八地南 4, 5 号壙所 1, 1 砂  
 国 27 通路 1 ~ 100 砂 1, 1 砂  
 国 28 通路 1 ~ 100 砂 1, 1 砂  
 国 29 通路 11 ~ 12, 13 砂 1, 1 砂  
 国 30 通路 13 ~ 14, 15 砂 1, 1 砂  
 国 31 通路 15 ~ 16, 17 砂 1, 1 砂  
 国 32 通路 17 ~ 18 砂 1, 1 砂  
 国 33 通路 19 ~ 20 砂 1, 1 砂  
 国 34 通路 21 ~ 22 砂 1, 1 砂  
 国 35 通路 23 ~ 25 砂 1, 1 砂  
 国 36 通路 26 ~ 28 砂 1, 1 砂  
 国 37 通路 29 ~ 31 砂 1, 1 砂  
 国 38 通路 32 ~ 35 砂 1, 1 砂  
 国 39 通路 36 ~ 38 砂 1, 1 砂  
 国 40 通路 39 ~ 41 砂 1, 1 砂  
 国 41 通路 42 ~ 44 砂 1, 1 砂  
 国 42 通路 45 ~ 47 砂 1, 1 砂  
 国 43 通路 48 ~ 50 砂 1, 1 砂  
 国 44 通路 51 ~ 53 砂 1, 1 砂  
 国 45 通路 54 ~ 56 砂 1, 1 砂  
 国 46 通路 57 ~ 59 砂 1, 1 砂  
 国 47 上器 1 砂 1 砂 1, 1 砂  
 国 48 下器 1 砂 1 砂 1, 1 砂  
 国 49 壁 17 ~ 18, 30 出土土器  
 国 50 壁 19 ~ 22, 26 ~ 29 出土土器  
 国 51 壁 31 ~ 32, 35 出土土器  
 国 52 壁 33 ~ 34, 37 出土土器  
 国 53 壁 35 ~ 37 出土土器  
 国 54 壁 38 ~ 40, 42 ~ 44 出土土器  
 国 55 壁 40 出土土器 (2)  
 国 56 壁 40 出土土器 (4)  
 国 57 瓢 40 出土土器 (5)  
 国 58 瓢 40 出土土器 (6)  
 国 59 瓢 40 出土土器 (7)  
 国 60 瓢 40 出土土器 (8)  
 国 61 瓢 40 出土土器 (9)  
 国 62 瓢 40 出土土器 (10)  
 国 63 瓢 40 出土土器 (11)  
 国 64 瓢 40 出土土器 (12)  
 国 65 瓢 40 出土土器 (13)  
 国 66 瓢 40 出土土器 (14)  
 国 67 瓢 40 出土土器 (15)  
 国 68 瓢 40 出土土器 (16)  
 国 69 清 38 ~ 39, 43 砂 1, 1 砂  
 国 70 上坑 7, 8, 10 ~ 12, 14 ~ 17, 20 ~ 22, 24 ~ 27, 30 ~ 35, 38 ~ 41, 44 ~ 47, 49 ~ 53, 54 出土土器  
 国 71 上坑 49 ~ 51, 53 ~ 55, 57 ~ 59, 61 ~ 63, 65 ~ 67, 69 ~ 71, 73 ~ 75, ピット 21 ~ 22 出土土器  
 国 72 亂 1, 2 砂 1, 1 砂  
 国 73 亂立柱植物 4 ~ 6 壁 4, ピット 27 ~ 29, 44 出土土器  
 国 74 流路 1 上層 1, 2 砂  
 国 75 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 76 亂立柱植物 4 ~ 6 壁 4, ピット 27 ~ 29, 44 出土土器  
 国 77 亂立柱植物 4 ~ 6 壁 4, ピット 27 ~ 29, 44 出土土器  
 国 78 流路 1 上層 1, 2 砂  
 国 79 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 80 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 81 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 82 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 83 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 84 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 85 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 86 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 87 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 88 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 89 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 90 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 91 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 92 流路 1 下層 1, 2 砂  
 国 93 老 1, 2 砂  
 国 94 虎 1, 2 砂  
 国 95 虎 1, 2 砂  
 国 96 虎 1, 2 砂  
 国 97 虎 1, 2 砂  
 国 98 虎 1, 2 砂  
 国 99 虎 1, 2 砂  
 国 100 虎 1, 2 砂  
 国 101 虎 1, 2 砂  
 国 102 虎 1, 2 砂  
 国 103 虎 1, 2 砂  
 国 104 虎 1, 2 砂  
 国 105 虎 1, 2 砂  
 国 106 虎 1, 2 砂  
 国 107 虎 1, 2 砂  
 国 108 虎 1, 2 砂  
 国 109 虎 1, 2 砂  
 国 110 虎 1, 2 砂  
 国 111 虎 1, 2 砂  
 国 112 虎 1, 2 砂  
 国 113 虎 1, 2 砂  
 国 114 虎 1, 2 砂  
 国 115 虎 1, 2 砂  
 国 116 虎 1, 2 砂  
 国 117 虎 1, 2 砂  
 国 118 虎 1, 2 砂  
 国 119 虎 1, 2 砂  
 国 120 虎 1, 2 砂  
 国 121 整立柱物 1 出土土器  
 国 122 整立柱物 1 砂 1, 1 砂  
 国 123 整立柱物 2 出土土器 (1)  
 国 124 整立柱物 2 出土土器 (2)  
 国 125 整立柱物 3 砂 1, 1 砂  
 国 126 整立柱物 4 ~ 外筒 1 坑 1 出土土器  
 国 127 整立柱物 4 ~ 外筒 1 坑 1, 1 砂  
 国 128 整立柱物 5 ~ 外筒 1 坑 1, 1 砂  
 国 129 整立柱物 5 出土土器  
 国 130 整立柱物 6 ~ 外筒 1 坑 3, 4, 廻 1, 2 砂  
 国 131 整立柱物 6 ~ 外筒 1 坑 3, 4, 廻 1, 2 砂  
 国 132 整立柱物 6 ~ 外筒 1 坑 3, 4, 廻 1, 2 砂  
 国 133 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 2, 3 (1) 出土土器  
 国 134 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 2, 3 (2) 出土土器  
 国 135 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 2, 3 (3) 出土土器  
 国 136 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 2, 3 (4) 出土土器  
 国 137 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 2, 3 (5) 出土土器  
 国 138 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 6 (1) 出土土器  
 国 139 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 6 (2) 出土土器  
 国 140 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 6 (3) 出土土器  
 国 141 整立柱物 7 ~ 外筒 1 坑 6 (4) 出土土器  
 国 142 整立柱物 7 ~ 廻 1, 2 砂  
 国 143 整立柱物 7 ~ 鋼 1, 1 砂  
 国 144 整立柱物 7 ~ 鋼 1, 1 砂  
 国 145 整立柱物 7 ~ 鋼 1, 1 砂  
 国 146 整立柱物 10 ~ 外筒 1 坑 2, 6 坑 10 (1) 出土土器  
 国 147 井 10 (1) 出土土器  
 国 148 井 10 ~ 11 砂 1, 1 砂  
 国 149 井 11 出土土器  
 国 150 井 11 砂 1, 1 砂  
 国 151 井 12 砂 1, 1 砂  
 国 152 井 12 ~ 13 砂 1, 1 砂  
 国 153 井 13, 32 ~ 35 砂 1, 1 砂  
 国 154 井 13, 32 ~ 35 砂 1, 1 砂  
 国 155 井 14 砂 1, 1 砂  
 国 156 井 15 砂 1, 1 砂  
 国 157 井 16 砂 1, 1 砂  
 国 158 井 17 ~ 19 砂 1, 1 砂  
 国 159 井 17 ~ 19 砂 1, 1 砂  
 国 160 井 17 ~ 19 砂 1, 1 砂  
 国 161 西側居住地 a ~ c 出土土器 (1)  
 国 162 西側居住地 a ~ c 出土土器 (2)  
 国 163 西側居住地 b ~ c 出土土器 (3)  
 国 164 西側居住地 b ~ c 出土土器 (4)  
 国 165 西側居住地 c ~ d 出土土器 (5)  
 国 166 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (6)  
 国 167 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (7)  
 国 168 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (8)  
 国 169 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (9)  
 国 170 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (10)  
 国 171 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (11)  
 国 172 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (12)  
 国 173 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (13)  
 国 174 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (14)  
 国 175 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (15)  
 国 176 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (16)  
 国 177 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (17)  
 国 178 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (18)  
 国 179 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (19)  
 国 180 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (20)  
 国 181 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (21)  
 国 182 西側居住地 c ~ d, e ~ f 出土土器 (22)

図183	谷2-b 残留土器	図227	堅穴植物6出土木製品(1)
図184	谷2-c 残留土器(1)	図228	堅穴植物4出土木製品(2)
図185	谷2-c 残留土器(2)	図229	堅穴植物9出土木製品(1)
図186	谷2-f 残留土器	図230	堅穴植物9出土木製品(2)
図187	東側居住地-c 残留土器(1)	図231	芦戸10出土木製品
図188	東側居住地-c 残留土器(2)	図232	堅穴植物4出土木製品(1)
図189	東側居住地-d 残留土器(1)	図233	堅穴植物4出土木製品(2)
図190	東側居住地-d 残留土器(2)	図234	堅穴植物4出土木製品(3)
図191	東側居住地-d-e 残留土器	図235	堅穴植物3出土木製品(1)
図192	東側居住地-f-i 残留土器	図236	堅穴植物3出土木製品(2)
図193	流路3上層帯-i 残留土器(1)	図237	堅穴植物3出土木製品(3)
図194	流路3上層帯-i 残留土器(2)	図238	堅穴植物4-5遺物-i 建築物6出土木製品
図195	流路3上層帯-i 残留土器(3)	図239	堅穴植物4-5出土木製品
図196	流路3上層帯-i 残留土器(4)	図240	堅穴植物4-5-6-7-8-9-10出土木製品
図197	流路3上層帯-i 残留土器(5)	図241	八戸市農業生産地の土壤試験結果(5)、八戸市農業生産地の土壤試験結果(7)、八戸市農業生産地の土壤試験結果(9)
図198	流路3上層帯-i 残留土器(6)	図242	八戸市農業生産地の土壤試験結果(8)、八戸市農業生産地の土壤試験結果(10)
図199	流路3上層帯-i 残留土器(7)	図243	八戸市農業生産地の土壤試験結果(10)、八戸市農業生産地の土壤試験結果(11)
図200	流路3上層帯-i 残留土器(8)	図244	八戸市農業生産地の土壤試験結果(12)
図201	流路3下層帯-i 残留土器(1)	図245	堅穴植物4-5-6-7-8-9-10出土木製品
図202	流路3下層帯-i 残留土器(2)	図246	主要緑美化に群衆の被災分布
図203	流路3下層帯-i 残留土器(1)	図247	主要花粉化に群衆の被災分布
図204	流路3下層帯-i 残留土器(2)	図248	植生被災率と被災量の被災分布
図205	流路3下層帯-i 残留土器(3)	図249	花粉化で引いた人災の海岸と調査平野に立地する考古遺跡
図206	流路3下層帯-i 残留土器(4)	図250	花粉化で立地した人災の海岸と調査平野に立地する考古遺跡
図207	流路3下層帯-i 残留土器(5)	図251	堅穴植物地のX線写真とトレス線及び堅穴植物改進過程
図208	第3出土土器の各種構成	図252	堅穴植物地のX線写真とトレス線
図209	4種の土器	図253	北陸標準地のX線写真とトレス線
図210	第3出土土器の各構成	図254	骨格埋葬部
図211	清原-68 土坑36-86-88 ピト46-49-51 露天面土	図255	木材の方向と表面観察
図212	土坑34 土坑2-2層 初瀬基35 井戸3-8出土石器	図256	堅穴植物-(改修前直構造) 建築物内基盤設材の樹種と木取り
図213	土坑34 土坑2-2層 初瀬基35 井戸3-8出土石器	図257	堅穴植物-(改修前直構造) 建築物内基盤設材の樹種と木取り
図214	土坑34 土坑2-2層 初瀬基35 井戸3-8出土石器	図258	堅穴植物-(改修後直構造) 建築物内基盤設材の樹種と木取り
図215	堅穴植物2-3-6-8出土石器	図259	堅穴植物-(改修後直構造) 建築物内基盤設材の樹種と木取り
図216	堅穴植物7-9-7-外壁土坑3-8-8-扶手溝 穴空植物10 挖立柱植物	図260	八戸市農業生産地のX線写真とトレス線
図217	堅穴植物9-9出土石器(1)	図261	先代時代初期-中期農業配列図(上)、先代時代後期-中期農業配列図(下)
図218	堅穴植物9-9出土石器(2)	図262	先代時代後期中農業配列図(上)、記号歴史出土紹介図
図219	堅穴植物9-9出土石器(3)	図263	先代時代後期から中期時代初期農業配列図、先代時代後期から中期時代初期農業配列図
図220	堅穴植物3-4出土石器	図264	先代時代後期から古代時代初期頭高付込茎葉族グラフ
図221	井戸3-8出土石器	図265	中世前期-中世-近世遺構配列図、先代時代
図222	井戸3-8出土木製品(1)	図266	周辺-因縁(外延土石)を有する建物(1)
図223	井戸3-8出土木製品(2)	図267	周辺-因縁(外延土石)を有する建物(2)
図224	井戸3-8出土木製品(3)	図268	周辺-因縁(外延土石)を有する建物(3)
図225	井戸3-8出土木製品(4)	図269	周辺-因縁(外延土石)を有する建物(4)
図226	堅穴植物2-3-8出土木製品	図270	周辺-因縁(外延土石)を有する建物(5)

## 表 目 次

表1	堆漢分析結果(1)
表2	堆漢分析結果(2)
表3	化粧土器
表4	堅穴植物地分析結果
表5	堅穴植物地分析結果
表6	木炭の骨灰封筒
表7	八戸市農業生産地の植物
表8	出土小型石-灰瓦(1)
表9	出土小型石-灰瓦(2)
表10	堅穴植物9-9内部施設観察(1)
表11	堅穴植物9-9内部施設観察(2)

表12	堅穴植物9-9内部施設観察(3)
表13	試料の選定と収集
表14	簡便な土器と蓄積器正形化
表15	八戸市農業生産地の植物
表16	人和田川付近の開拓年表
表17	遺構等対応表(1)
表18	遺構等対応表(2)
表19	遺構等対応表(3)
表20	遺構等対応表(4)
表21	遺構等対応表(5)

## 図 版 目 次

図版1	住居化石	図版24	堅穴植物2-3
図版2	竹筋化石	図版25	堅穴植物2-3
図版3	漆器の漆滓	図版26	堅穴植物2-3
図版4	南側居住地の文化層等	図版27	堅穴植物2-3
図版5	南側居住地の文化層等	図版28	堅穴植物2-3
図版6	堅穴植物2-3	図版29	堅穴植物2-3
図版7	堅穴植物2-3-4出土土器(1)	図版30	堅穴植物2-3
図版8	堅穴植物2-3-4出土土器(2)	図版31	堅穴植物2-3
図版9	堅穴植物2-3-4出土土器(3)	図版32	堅穴植物2-3
図版10	堅穴植物2-3-4出土土器(4)	図版33	堅穴植物2-3
図版11	堅穴植物2-3-4出土土器(5)	図版34	堅穴植物2-3
図版12	堅穴植物2-3-4出土土器(6)	図版35	堅穴植物2-3
図版13	堅穴植物2-3-4出土土器(7)	図版36	堅穴植物2-3
図版14	堅穴植物2-3-4出土土器(8)	図版37	堅穴植物2-3
図版15	堅穴植物2-3-4出土土器(9)	図版38	堅穴植物2-3
図版16	堅穴植物2-3-4出土土器(10)	図版39	堅穴植物2-3
図版17	堅穴植物2-3-4出土土器(11)	図版40	堅穴植物2-3
図版18	堅穴植物2-3-4出土土器(12)	図版41	堅穴植物2-3
図版19	堅穴植物2-3-4出土土器(13)	図版42	堅穴植物2-3
図版20	堅穴植物2-3-4出土土器(14)	図版43	堅穴植物2-3
図版21	堅穴植物2-3-4出土土器(15)	図版44	八戸市農業生産地-中期化物行動状態(1)
図版22	堅穴植物2-3-4出土土器(16)	図版45	八戸市農業生産地-中期化物行動状態(2)

## 第VI章 出土遺物の記録

### 第1節 土器

本節では、八尾南遺跡で出土した遺物のうち、土器について記述する。今回の調査で得られた土器はコンテナに換算して約600箱を数え、うち図示し得た点数は2961点を数える。以後、第1分冊との整合を図るために、第1面から順に各遺構面・遺構単位で出土した土器についての記述を行っていく。

#### 1. 第1面 [古代～中世]

##### (1) 出土土器の概要

第1面の遺構からは、12から15世紀までの土器が出土した。検出遺構そのものはそれほど多くはないが、出土土器の上では、井戸や土坑を中心にまとまった数量が出土しており、当該期の良好な資料を得ることができた。なお、土器の組成は、第V章でも詳述したように、瓦器・土師器が主体を占め、少量の須恵器・瓦質土器・輸入陶磁器から構成される。

##### (2) 遺構出土土器

井戸2・3・4(図1) 井戸より出土した土器は、極少量である。帰属時期も概ね似通っているため、ここでは、一括して記述する。なお、ここに掲げた資料はすべて井戸側内より出土している。

土師器皿(1～4)は法量によって中小2者に分けられる。また、胎土の上でも極めて精緻で乳白色を呈するもの(1・3・4)と、黄灰ないしは黄褐色を呈しやや粗めの胎土を用いるもの(2)がある。1は、いわゆる「て」字状口縁を呈する小皿である。端部のつまみ上げは弱く、やや崩れた印象を受ける。切り込み凹盤技法による成形を行っている。京都編年ではV期(新)に相当すると考えられる。

瓦器には皿(5・6)と椀(7～9)がある。皿は、いずれも精緻な胎土を用いており、焼成も良好である。ヘラミガキは極めて密で、5の見込み部には斜格子状の暗紋が施されている。椀はすべて和泉型で、口径は15.5cm前後、器高は6.0～6.2cmの幅に収まり、法量上は類似している。外面のヘラミガキは9を除けば極めて密に施され、5分割されている。内面のヘラミガキは、幅2mm前後の精緻なヘラミガキが施されている。見込み部の暗紋は、斜格子のもの(8)、乱れた平行線あるいはジグザグ状のもの(7・9)がある。8の体部外面には、直径1～3mmの凸形の剥落が多数認められた。以上のように、これ

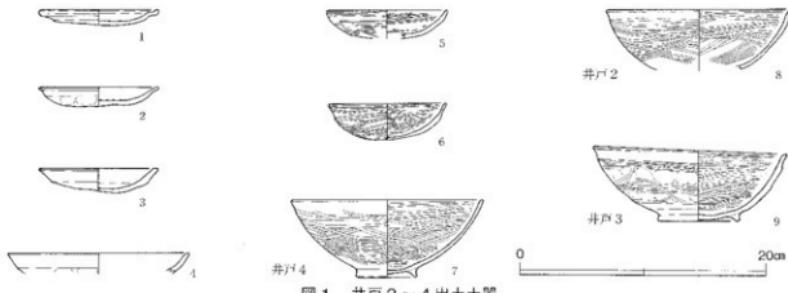


図1 井戸2～4出土土器

らの井戸出土土器は、瓦器椀が尾上編年のII-1~2期に該当し、土師器皿との関係も整合的であることから、12世紀前葉に帰属すると考える。

溝1・4・5・15(図2) 10・11は溝1から出土した。土師器皿(10)は、溝の底に貼りつくようにして出土したことから、溝1の帰属年代を示している可能性が高い。やや丸みを帯びた底部から緩やかに内湾して立ち上がる体部に、外反気味に伸びる口縁部を有する。端部は丸く收めている。胎土はやや精良で色調は灰白色を呈する。器壁は約6mmと厚めであり、全体的に鈍いつくりのものである。1点のみの出土であることから、積極的には時期を比定し難いが、概ね11世紀前半に帰属すると考えられる。11は、白磁IV類皿である。11世紀後半~12世紀前半に帰属すると考えられる。

溝4・5からは、瓦器皿(12)、瓦質鉢(13)、瓦質火鉢(14)、青磁碗(15)が出土している。15の青磁は、高台裏に溶着物が認められる。15世紀代の所産。14は、細片のため詳細は明らかではないが、ほぼ直立する体部に口縁部外面向上・下部に突線を二条巡らし、その間に渦紋のスタンプを押捺することから、深鉢I類に相当し、14世紀末から15世紀にかけてものと推測できる。また、13の鉢は、口縁端部の形状から15世紀代の所産と考えられる。12の瓦器皿は、ここでは混入資料と考えておきたい。

溝15からは、土師器小皿(16)が出土している。胎土は精良で、色調は灰白色を呈する。口縁部外面には、横ナデが一段施されており、緩やかに外反して立ち上がる。底部外面には、放射状に伸びる工具痕らしきものが認められる。また、内面には体部から口縁部にかけて焼が明瞭に認められた。

溝11(図2) 土師器(17)・瓦器(18~23)が出土した。17は土師器皿である。体部は強く内湾し、口縁部は強い横ナデによって直立気味に立ち上る。胎土は精良で、色調は乳白色を示す。

瓦器には、小皿(18)と椀(19~23)がある。瓦器椀はすべて和泉型である。全体的に摩滅が著しく詳細は不明であるが、いずれの資料についても本来的には、内外面ともに密なハラミガキが加えられていた可能性が高い。19は、法量・高台の断面形状・口縁端部の様相とともに20・21よりも古相を示す。尾上編年II-1~II-3期の特徴を示すことから、12世紀前葉から12世紀後葉に帰属すると考えられる。

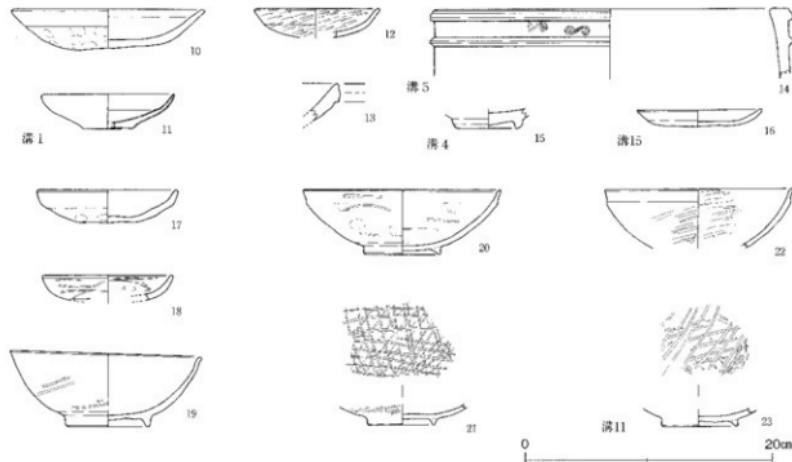


図2 溝1・4・5・11・15出土土器

満14(図3~4) 土師器・瓦器を中心とし、良好な資料を得ることができた。

土師器皿(24~48)は、法量によって口径9.5cm前後をピークとして、8.7~10.3cmに収まる小皿(24~43)と、14.4~16.8cmに収まる中皿(44~48)に2分できる。

小皿は、口縁部の形状より分類が可能である。24は、低平な体部に口縁端部を短くつまみ上げたもので、所謂コースター状を示す。25・26は2段ナデを施している。そのほかは口縁部に1段ナデを施すものであるが、27や28のように内湾気味に立ち上がるもののほか、29や31のように緩やかに外反しながら立ち上がるものの2者がある。

中皿は、やや外反気味の端部をもつものが多い。口縁部に明瞭な2段ナデを施すものと、2段ナデが形骸化して1段ナデに変容したようなものの2者がある。胎土は、いずれも乳白色の色調を呈しており、概して精緻である。以上の土師器皿は、京都編年ではV期(新)に該当する器形・法量を示しており、2段ナデが形骸化し始めている様子も見て取れることから、12世紀中葉に帰属する一群と考えることができる。

49は、土師器の鉢である。接地面は強いナデを施すことによって高台状を呈している。全体の器形は、上げ底状を示す底部から、緩やかに内湾しながら立ち上がる体部を経て外反して口縁部へと至る。口縁端部は、ナデによって丸く取められている。外面にはタタキ等の痕跡は認められず、粗雑な指頭圧痕が残存するのみである。胎土は粗く、3~5mmのチャート疊を含む。焼成は甘く、褐色味を帯びている。類例に乏しく、詳細は明らかでないが在地の土器であると考えておきたい。

土師器の煮炊具には土鍋(53)、土釜(54~57)がある。土鍋(53)は、内湾する体部に外反する口縁部がつく。外面には、粗いハケが施されている。

土釜は、54を除くと、口縁部を強く外反させ、やや下がり気味の鋸を付け加えることで、森島氏の示す河内A型式に該当し、12世紀中葉前後の所産と考えられる。

58は東播系須恵器の壺である。焼成は悪く、色調は灰白色を呈する。口縁部は強く外反し、口縁端部はやや丸みを帯びる。また、上面にはわずかな凹線状の窪みがあり、肩部にはタタキ目が残存する。以上の諸特徴から、12世紀前半に帰属するものと考えられる。

輸入陶磁器としては白磁の皿・碗がある。50は白磁皿、28は白磁V類碗、29は白磁IV類碗である。

瓦器皿(59~72)は、いずれも極めて密なヘラミガキを施し、焼成も堅緻である。底部外面には、69がジグザグ状のヘラミガキを施すほかは、4ないしは5つに分割したヘラミガキを施している。見込み部の暗文は、斜格子のものが大半を占める。

瓦器椀(73~97)は、いずれも和泉型である。法量は比較的安定しており、口径14.3~16.6cm、器高5.1~6.3cmに収まる。外面には指頭圧痕が明瞭に残存する。口縁端部は、直下に強い横ナデが施されることで、外反するものが多い。外面のヘラミガキは、4ないしは5分割のものが施されており、56・61・69・73などの数点を除けばやや疎らなものが主体である。内面見込み部のヘラミガキは、認可可能なものは79・80・90・96が平行線状のほか、73~75・77・78・81~84・86・88・89・92~94が斜格子状、76・85がジグザグ状である。高台は、強く外側に張り出すしっかりしたつくりのものが多く、61・64などの台形のものほかに鋭角の三角形のものがある。以上の特徴により、これらの瓦器椀は、尾上編年のII-1~2期に属し、12世紀前葉~中葉の所産と考えられる。

以上のように、本遺構出土の土器は輸入陶磁器や土師器皿、瓦器椀の示す年代から総合すると12世紀前葉から中葉を中心とした時期に帰属するものと考えられる。

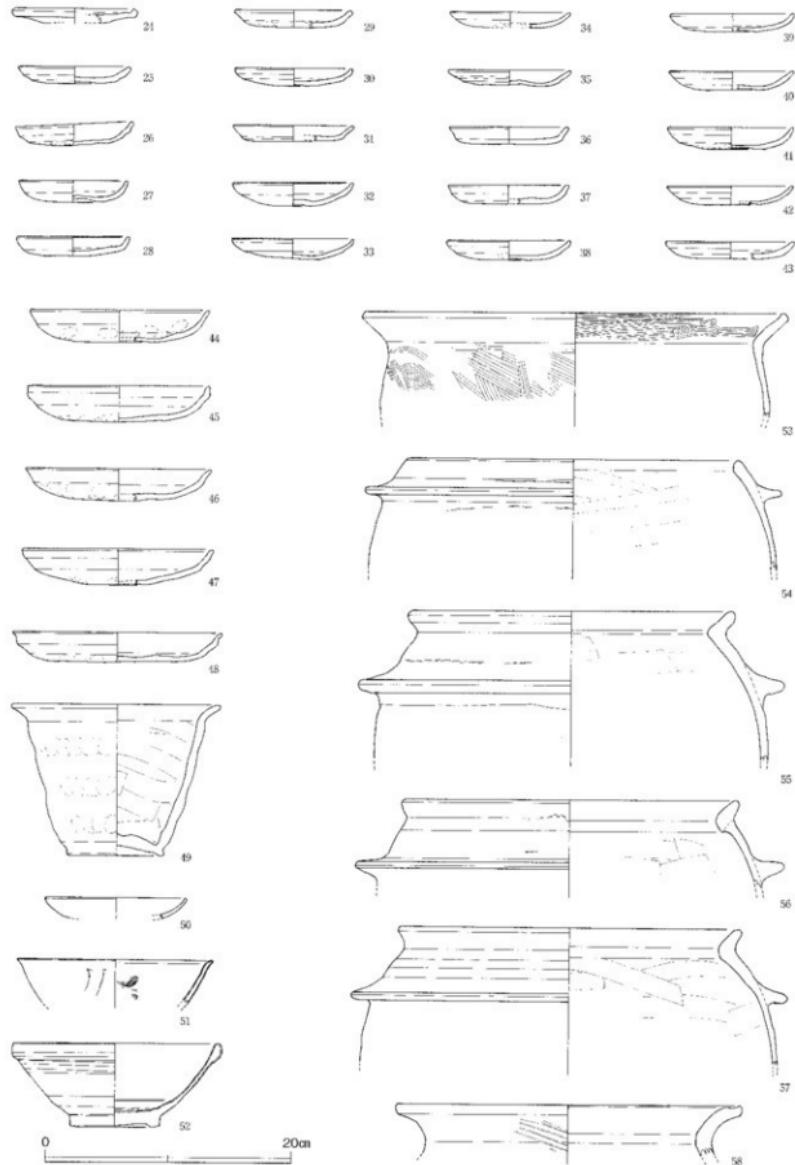


図3 满14出土土器（1）

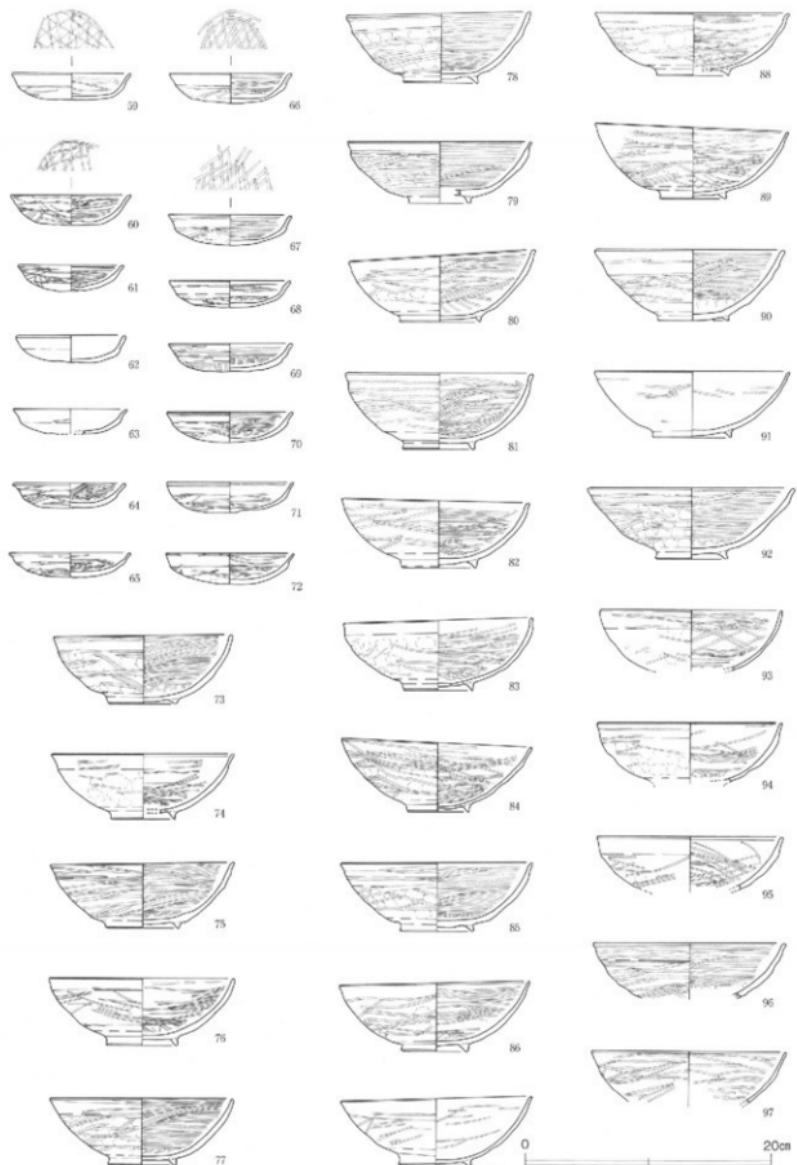


図4 溝14出土土器(2)

土坑10～13（図5） 土師器皿は土坑11より出土しており、法量から中小2種に分けられる。99と100は、口縁部に2段ナデを施している。なお、98・100の底部外面には、それぞれ工具痕跡が明瞭に残存する。98には平行する板状圧痕、100は中心から放射状にのびる条線状の工具痕が認められる。胎土は灰白から浅黄色を呈し、精良なものを用いている。京都編年Ⅵ（古）から（新）期に帰属すると考えられる。瓦器椀（101・104～111）は、4ないし5分割のヘラミガキが密に施される。107は、例外的にヘラミガキが疎らに施され、指頭圧痕が明瞭に残存する。口径は15.0～16.0cmと他遺構出土土器と比較してもほほ変化は無いが、土坑13については、107が器高5.0cmと著しい低下を見せる点から、尾上編年Ⅱ～Ⅲ期に位置づけることができる。その他の遺構については、尾上編年Ⅰ～ⅢからⅡ～Ⅳ期の所産であろう。見込みの暗紋には、斜格子のもの（101・104・105・110）と平行線ないしはジグザグ状のもの（106・107・109・111）の2者がある。

そのほかの土器としては、土坑11より、龍泉窯系青磁I類碗（102）、東播系須恵器鉢（103）が出土している。103は、短く外傾して面をもつ口縁端部を有する。内面には不定方向のナデが施されている。12世紀中葉の所産と考えられる。

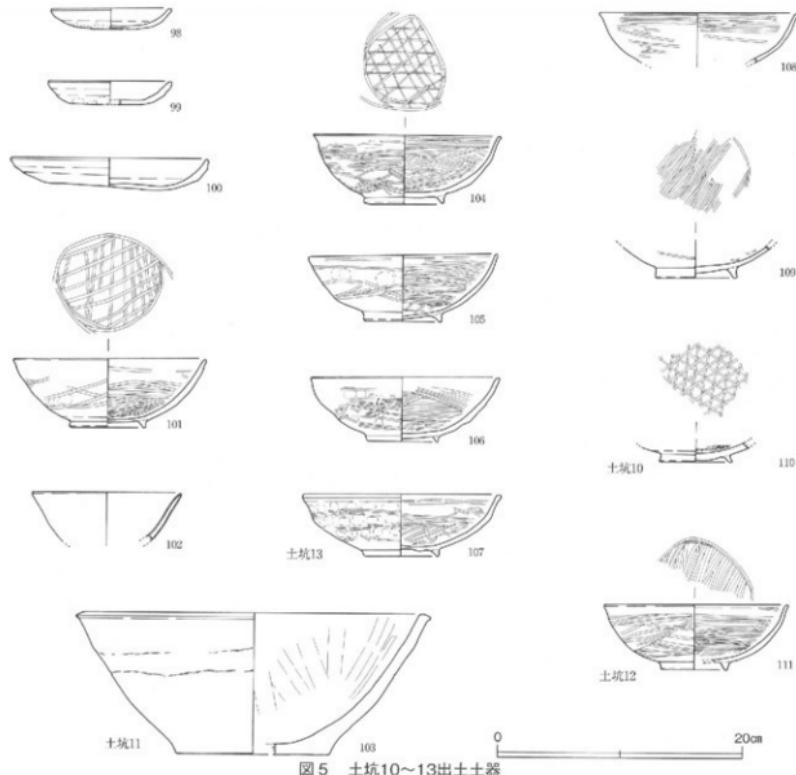


図5 土坑10～13出土土器

土坑9（図6） 土師器小皿（112～116）は、口縁部に1段ナデを施すものが大半を占める。瓦器は小皿（117）、椀（118）がある。椀は細片のため、口径の復元に疑問が残る。いずれも12世紀後半代の所産。122・123は、羽釜である。以上の土器は、12世紀後半に位置づけられる。

土坑15・16（図6） 資料数が少なく、時期も近似するため、一括して記述する。土師器小皿（124）は、口縁部に2段ナデを施す。胎土は精良で色調は灰白色を示す。焼成は良好である。瓦器椀（119・120・125）は、緩やかに内湾して立ち上がるるもので、いずれも和泉型である。ヘラミガキは、内外面ともに全体に及んではいるものの、やや疏らである。129の見込み部の暗紋は、ジグザグ状を呈する。羽釜（126～128）は、いずれも土師質で、口縁部は「く」の字に屈曲する。12世紀代の所産。

土坑24（図6） ほぼ完形の土師器の壺（121）が1点出土した。体部下半には指頭圧痕が残り、口縁端部は緩く外反する。色調は内外面ともに赤褐色を呈し、胎土は粗い。10世紀代の所産と考えられる。

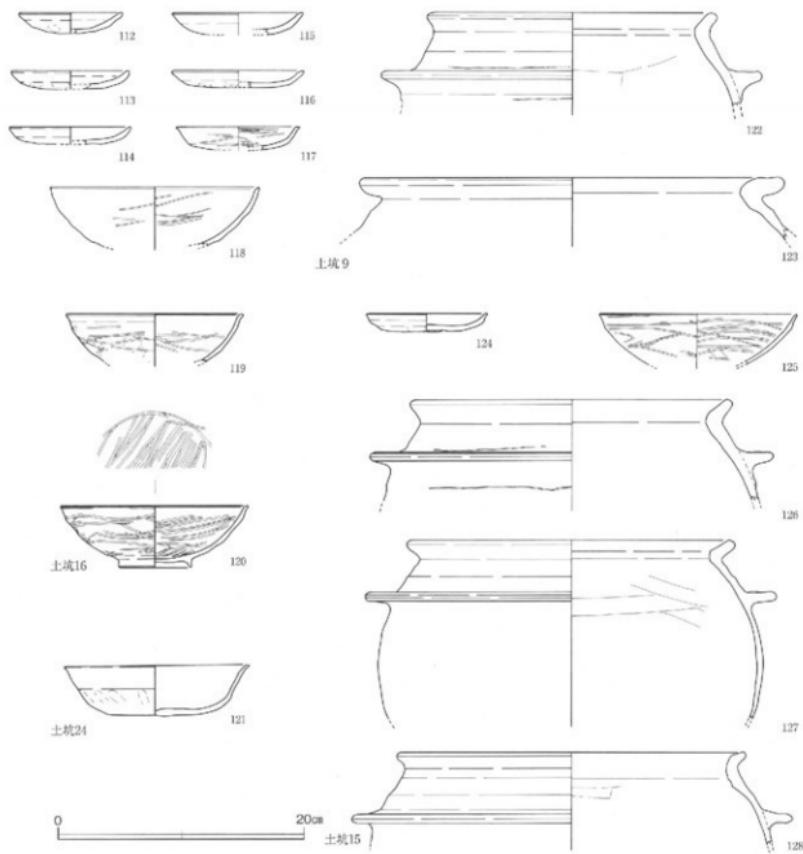


図6 土坑9・15・16・24出土土器

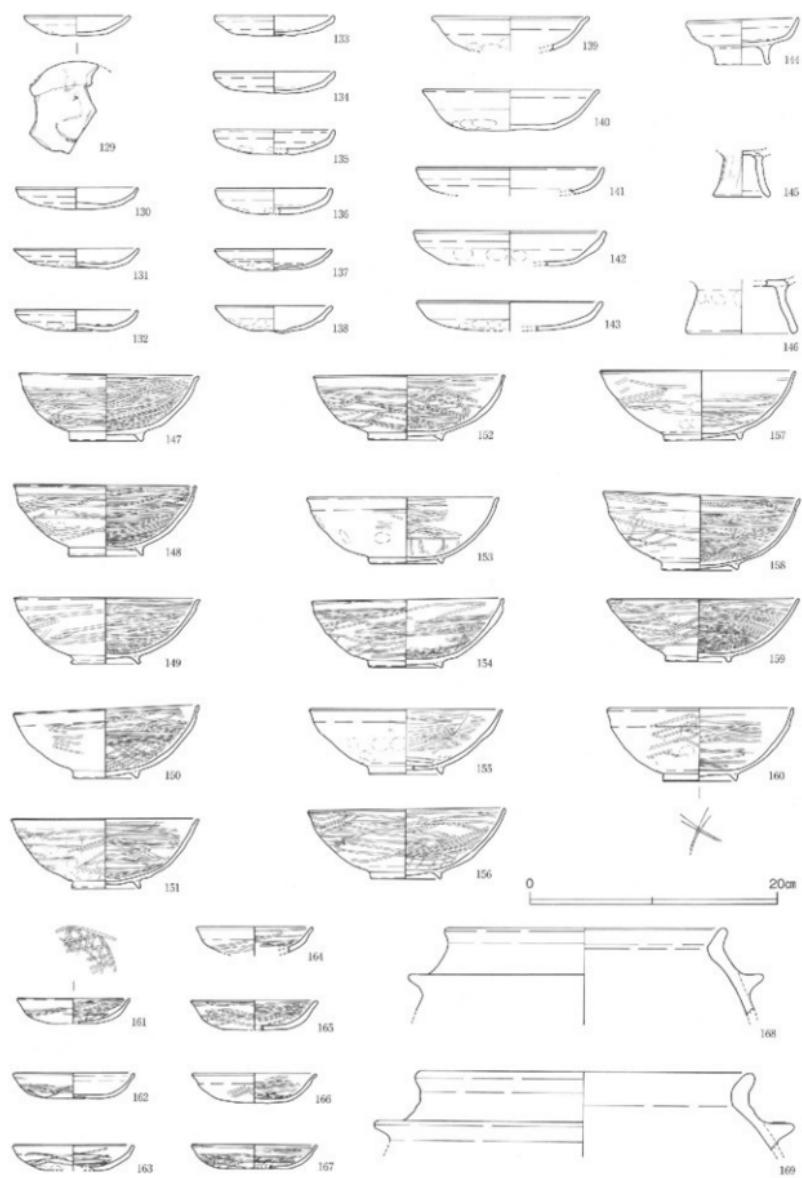


図7 土坑14出土土器(1)

土坑14(図7・8) 土師器・瓦器を中心に、輸入陶磁器や須恵器等、豊富な内容の土器が多数出土した。また、図には掲げていないが、方形の縁も多数出土している。

土師器皿(129～143)は、法量によって中小2者に分けられる。小皿(129～138)は、口縁部に2段ナデを施すもの(130～134)、1段ナデを施すもの(129・135～138)の2者がある。129は、底部外面に墨書きが認められる。記載内容は判然としない。139・140は、土師器壺の混入資料である。色調はいずれも赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。139は、口縁端部を短くつまみ出した後直立気味に内傾させ、内面に一条の沈線を施す。10世紀中葉前後の所産と考えられる。土師器の中皿(141～143)は、口縁部に2段ナデを施すもの(141・142)と1段ナデを施すもの(143)の2者が認められる。色調は乳白色を呈し、胎土も精緻である。このほかに台付の皿(144～146)がある。脚台部の形状は、一定でない。以上の土師器皿は、小皿・中皿とともに口縁部に2段ナデを施すものが多く、1段ナデを施すものも現れている点、口径も小皿が9.7cm前後をピークとし、8.3～10.0cm内に収まることや中皿が15.1～15.6cmに収まるという点から京都編年のV期(新)からVI期(古)に相当すると考えられる。

瓦器碗(147～160)は、いずれも和泉型である。口径は14.3～15.9cm、器高は5.3～6.2cm前後に収まり、法量的には安定している。また、器形の上では、159がやや異質な体部の伸び方を示すのを除けば、概ね近似している。体部下半の張りは強い。口縁部の形状は、端部を強いナデによって外反せるもの(147・149・153)のほか、端部直下の強いナデによって器壁の厚みが減じるものが大半を占める。高台はいずれもしっかりとしたもの貼り付けており、幅の太い断面逆三角形状のものや断面方形で外側に強く張り出すものの2者がある。ヘラミガキは、内外面ともに密に施されている。外面の分割ヘラミガキは、4ないしは5分割されており、体部下半にも及んでいる。体部内面の圈線ミガキは極めて密である。また、内面見込みの暗紋は、斜格子状のもの(147～152・154～156・158～160)、ジグザグないしは平行線状のもの(153)の2者が認められる。傾向としては、斜格子状のものが圧倒的な数量を占める。いずれも焼成は堅緻で胎土も密である。なお、160の高台裏には、十字の線刻が2回施されている。尾上編年II-1～2期に帰属する。161～167は瓦器皿である。内外面ともに極めて精緻なヘラミガキが施され、焼成堅緻、胎土精良である。内面見込みの暗紋は、碗同様に大半を斜格子が占め、極少量のジグザグないしは平行線状のものが認められる。

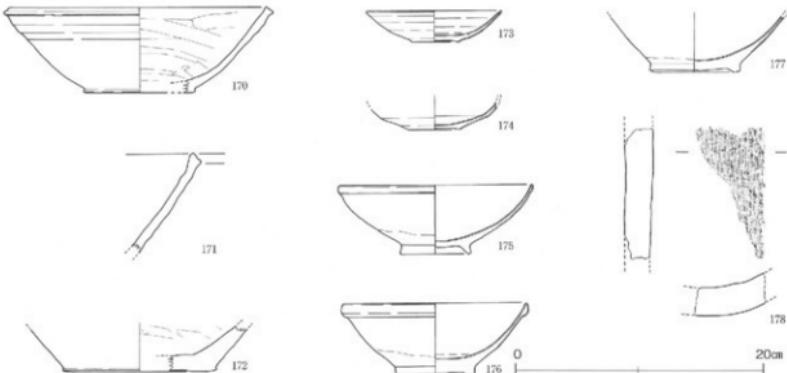


図8 土坑14出土土器(2)

土師質羽釜(168・169)は、球胴形の体部に短い鉢をやや上向きに貼り付ける。口縁部は緩やかに外側に開く。森島編年河内A型式に該当し、12世紀前葉から中葉のものと考えられる。

170～172は東播系須恵器の鉢である。170の口縁端部は、やや肥厚し下方にむけて拡張される。171の口縁端部は、やや上方に向けての拡張が指向されてはいるものの、顕著ではない。内面は回転ナデを施した後に不定方向のナデが施されている。底部径は広い。12世紀前半代の所産と考えられる。

輸入陶磁器には、青磁の皿(173・174)と白磁碗(175・176・177)がある。173・174は、同安窯系のI類皿。175は白磁II類碗、176は白磁IV類碗である。12世紀前半代に帰属する一群である。178は瓦である。遺存状態が悪く、詳細は不明である。

以上の特徴から本遺構出土土器を概観すると、12世紀前葉に帰属する一群と言える。

土坑19(図9) 土師器・瓦器・須恵器が出土した。

179は土師器小皿である。口縁部に1段ナデを施す。口縁端部は横ナデによってやや直立気味に立ち上がる。12世紀前葉の所産と考えられる。

瓦器皿(180～182)は、やや深手のものが多い。ヘラミガキは、内外面ともに極めて密である。

瓦器椀(183～185・187～192)は、すべて和泉型である。口径は14.7～15.8cm、器高は5.4～6.1cmに収まる。概ね口径15cm前半、器高5.5cm前後にそれぞれピークがあり、法量的には安定している。いずれも緩く内湾して立ち上がる体部に口縁端部直下の強い横ナデによって外反する口縁部を有する。口縁端部は丸く收めるものと、やや面取り気味に平坦面を有するものの2者が認められる。高台の形状は、断面三角形のものと逆台形のものの2者が認められるが、両者ともに強く外方に張り出すしっかりしたつくりのものを貼り付けている。ヘラミガキは、内外面ともに極めて密に施されており、外面には4ないし5単位の分割ヘラミガキが器面全体にわたって施されている。体部内面のヘラミガキは、196・201のように乱方向のものと圓線状にめぐらすものの2者が認められ、いずれも幅2mm前後のヘラミガキを密に施している。見込み部の暗紋は、斜格子のもの(183・184・185)、ジグザグないしは平行線状のもの(188・191・192)、乱方向のもの(187・189)の3者が認められる。傾向としては斜格子のものと平行線状のものが拮抗する状態にあるといえる。以上の特徴からこれらの瓦器椀は、尾上編年I～3からII～1期に該当するものと考えられよう。

186は、土師器の鉢である。胎土は粗く、焼成も甘い。器形は異なるものの、平底に近い形状や調整・焼成等の点からしても溝15出土の鉢(49)と同様の様相を呈しており、在地の粗製鉢と考えてもよいのかもしれない。しかしながら類例に乏しく、詳細は不明である。

198は土師質の羽釜である。球胴形の体部上方に、端部を面取りするしっかりとした鉢を貼り付けている。口縁部は外側に折り曲げられ、端部はさらに上方につまみ上げられて内傾している。体部の調整は不明である。諸特徴からして大和型の可能性もあるが、焼成はやや悪く、胎土も粗い。

193は東播系須恵器の鉢である。口縁端部は、わずかではあるが下方にむけて拡張される。底部径は広い。内面は器面に直口するようにナデが施されている。12世紀前半代の所産と考えられる。

以上の出土土器を通観すると、本遺構出土土器の示す時期は12世紀前葉である。

土坑21(図9) 194は土師器小皿である。口縁部はいわゆる「て」字状を呈する。端部のつまみ上げはやや鈍く、体部と口縁の境もやや不明瞭で、器壁も4mmと厚手である。口径は8.9cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は精良、焼成も良好である。京都編年ではV期(古)から(中)段階に相当する個体と考えられるが、量的に確保できていないため、詳細は不明である。

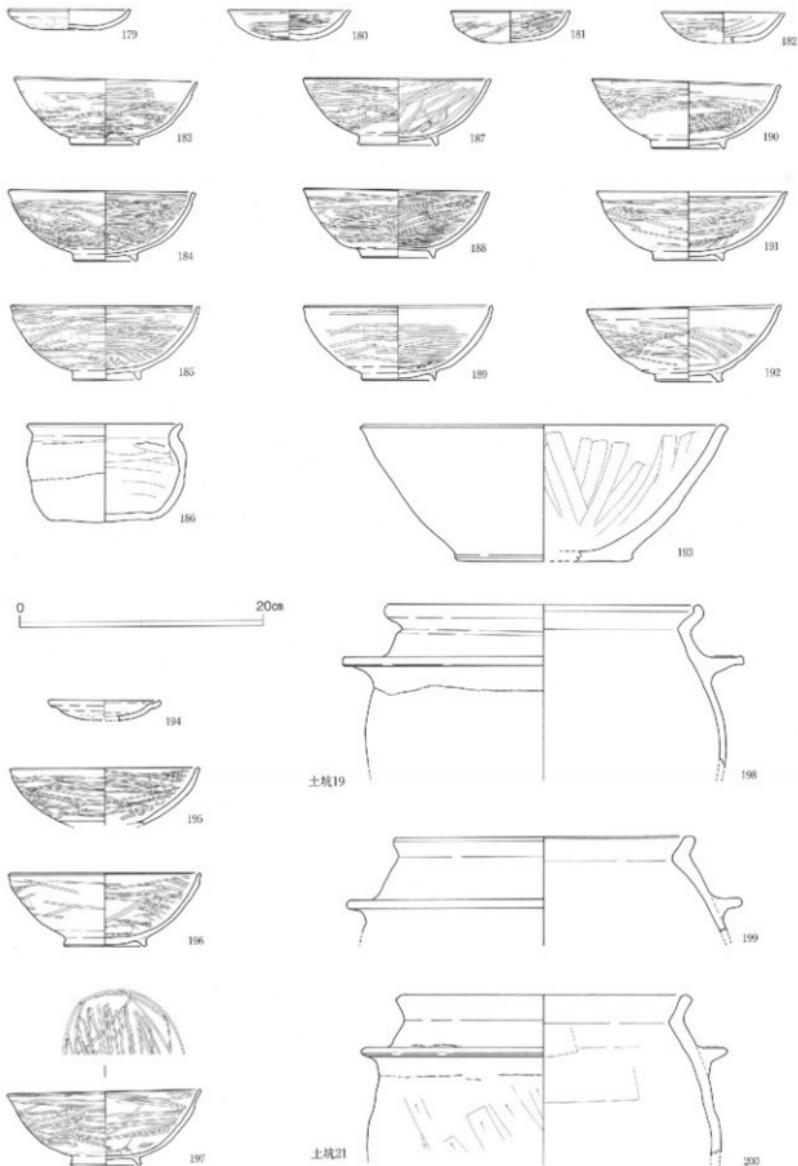


图9 土坑19·21出土土器

瓦器柄(195～197)はすべて和泉型である。口径15.3～15.7cm、器高6.0cmとほぼ同じ法量を示す。高台の形状は、断面逆台形で強く外方に張り出すしっかりとつくりのものを貼り付けている。ヘラミガキは、内外面ともに極めて密に施されており、外面には4ないし5単位の分割ヘラミガキが器面全体に施されている。見込み部の暗文は、格子状のもの(196)、ジグザグないしは平行線状のもの(197)の2者が認められる。以上の特徴から、これらの瓦器柄は尾上編年I～3期からII～1期に相当すると考えられる。

207・208・209は土師質の羽釜である。球胴形の体部にしっかりと貼り付けている。口縁部の形態は、外側に折り曲げられ、端部はさらに上方につまみ上げられて内傾するもの(207)のほか、短く外側に折り曲げられ、端部を丸く収めるもの(208・209)の2者がある。体部の調整は不明である。焼成はやや悪く、胎土も粗い。いずれも、12世紀代前葉から中葉の所産と考えられる。

以上のことから本遺構出土土器の帰属年代は、12世紀前葉に求めることができる。

**土坑30(図10)** 土師器・瓦器が出土している。土師器小皿(201～206)は、口縁部形態から所謂「て」字状を示すもの(201・202)と口縁部外面に1段ナデを施し、端部を弱く外反させるもの(203～206)に分けられる。前者は、口径9.0～9.8cmを測り、口縁端部のつまみ上げは比較的明瞭で、器壁の厚さは約3mmとやや薄手である。胎土は精良で灰白色を呈するもの(201)と褐色でやや粗い胎土を用いるもの(202)の2者がある。後者は、いずれも胎土が精良で灰白色を呈するものを用いている。

201・202の存在から、京都編年V期(古)に該当すると考えられる。

瓦器柄(209～211)は、すべて和泉型である。体部下半が強く張り、口縁端部直下で器壁を最も厚くさせる。ヘラミガキは、内外面ともに極めて密に施されている。焼成は良好で胎土は精緻である。高台は、逆台形でしっかりとつくりのものを貼り付けている。尾上編年I～3からII～1期に帰属する。

212・213は土師質の土釜である。球胴形の体部に端部を丸く収める短い鍔を貼り付け、口縁部を「く」の字に屈曲させている。口縁部の折り曲げ方、体部上半の段の有無などの違いがあるが、概ね12世紀前葉の所産と考えられる。

以上のことから本遺構出土土器は、概ね12世紀前葉に帰属すると考えられる。

**土坑32(図10)** 223は、完形の高台付瓦器皿で、やや深めの体部に外反する口縁部をもち、断面二角形の高台を貼り付ける。内外面に精緻なヘラミガキが施され、外面は5分割されたヘラミガキ、見込み部の暗文には、極めて密な平行線状のものが施される。高台の接地面は、磨耗が顕著である。詳細な帰属時期は不明であるが、後述する220とほぼ同様のものと見られ、12世紀前葉の所産と考えられる。

**土坑36(図10)** 土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。

214・215は、土師器小皿である。214は口径の復元にやや疑問が残る。いずれも口縁部外面に1段のナデを施している。215の端部はやや面取り気味に立ち上げられている。焼成は良好で、胎土は黄橙色を呈する精緻なものを用いている。

瓦器には、皿(220)と碗(216・217・221)がある。220は完形の高台付瓦器皿である。先述した223とはほぼ同様の特徴を有し、高台の接地面がほかの箇所と比較して著しく磨耗する。瓦器碗は、口径・器高とともに明らかなものは、221のみである。口径15.5cm、器高6.0cmを測る。ヘラミガキは、内外面ともに密に施される。外面には4ないしは5分割のヘラミガキを全域に施し、見込み部暗文には、斜格子状を呈するもの(216・217)、乱方向で密なもの(221)の2者が認められる。尾上編年II～1期に帰属する。

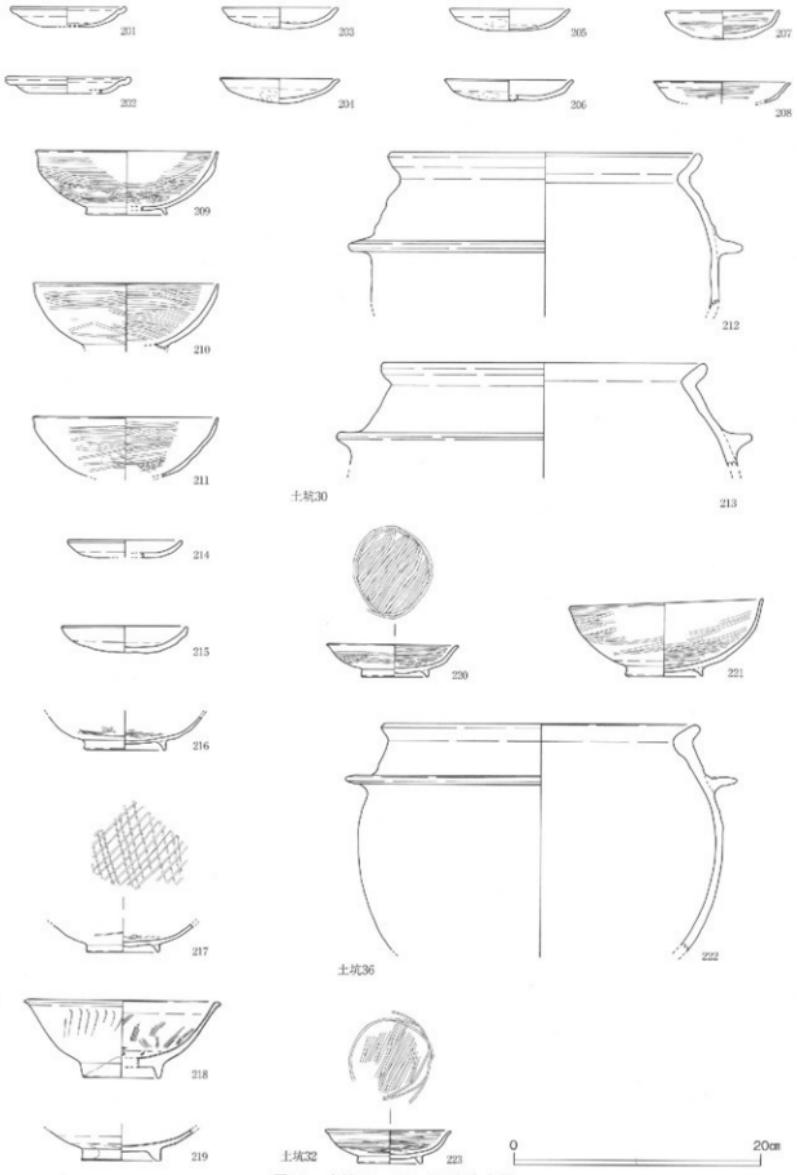


图10 土坑30·32·36出土土器

輸入陶磁器は、白磁が2点出土した。218は白磁V類碗で、底部付近が一部露胎する。219は口縁部を欠くため詳細は不明であるが、高台の様相から白磁II類碗と考えられる。いずれも12世紀前半の所産。

222は、土師質の羽釜である。口縁部はやや短くつまみ出されるもので、器壁も厚い。体部上半には短く端部を丸く收める鋸を水平に貼り付ける。胎土はやや粗く、石英や長石を中心とする3mmまでの細礫を多く含む。焼成は良好で、色調は褐色を示す。森島A型式に該当し、12世紀前半の所産である。

以上の土器の諸特徴から、本遺構出土土器は12世紀前葉から中葉に位置づけられる。

**土器埋納土坑2**（図11） 土師器皿が10点以上密集して出土した。取り上げ時の問題によるものか、完形のものが少ない。残存率は少なく、大半が50%程度である。出土した土師器皿は、法量によって口径9.3cmをピークとして8.7~10.0cmに収まる小皿（236~243）と、15.2~15.6cmに収まる中皿（244~246）に分けられる。小皿は、概して立ち上がりが鋸く外反する口縁を有する。口縁部には、やや強めの1段ナデが施されている。中皿は、立ち上がりは鈍いものの、明瞭な2段ナデが施されている。胎土はすべて精良で、乳白色を呈している。以上の諸特徴から考えると、これらの土師器皿は、京都編年のVI期（古）段階に相当する一群と考えられ、12世紀後葉に帰属時期が求められる。

**土器埋納土坑1**（図11） ほぼ完形の土師器皿が12点出土した。現地での取り上げ時にもほぼ同程度のものと認識できていたことから、本来納められた点数に近いと考えることができる。土師器皿（224~235）は、すべて小皿で、底部と口縁部の境界は比較的明瞭である。概して立ち上がりは鋸く、口縁部に1段のナデを施す。口径は9.3cmにピークを持ち、8.7~10.0cmに収まる。胎土は精良で灰白色を呈する。京都編年のVI期（古）段階に該当すると考えられ、12世紀後葉の所産と考えられる。

**ピット1~3・5・6**（図12） ピットから出土した土器はごく少ない。よってここでは一括して記述を行う。ピット5からは、土師器小皿（247）が出土した。口縁部には1段ナデが施され、端部は丸く認められている。胎土は精緻で、灰白色を呈する。12世紀代の所産と考えられるが、詳細は不明。

ピット6からは、瓦器皿（248）が出土した。見込み部には斜格子状の暗紋を施している。内外面とも

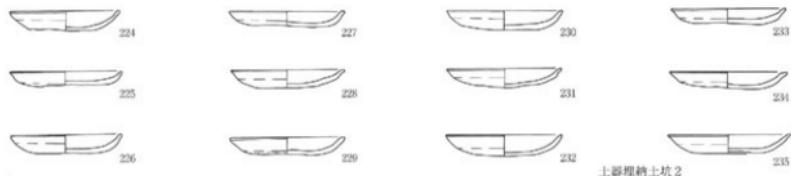


図11 土器埋納土坑1・2出土土器



図12 ピット1～3・5・6出土土器

に密なヘラミガキを施す。瓦器輪はピット3(249)、ピット1(250・251)から出土した。249は、口径15.2cm、器高5.5cmと、法量的にやや縮小していることや外面ヘラミガキが疎らになっていることなどからして、尾上編年II-2期前後の所産と考えられる。一方、ピット1出土資料は、250に認められるように、口径・器高とともに大きく、体部外面に顕著なヘラケズリを施す点やヘラミガキが極めて密に施されることなどの諸点をもって、尾上編年I-3からII-1期の所産と考えることができる。252はピット2から出土した土師質の土釜である。やや短い鐸の端部には、やや内傾する面を形成している。口縁部は強く「く」字に屈曲し、端部は水平な面取りが施される。

以上のことから、ピット1は11世紀末葉から12世紀前葉、ピット2は12世紀前半、ピット3は12世紀中葉、ピット5・ピット6は12世紀代にそれぞれ位置づけられる。

### (3) 1・2層出土土器

大きく2時期に分けられ、中世前期から近世・古墳時代初頭から飛鳥時代にかけての土器が出土した。

1層(図13) 253～260は陶磁器である。255は染付碗、257は唐津系の陶器皿である。胎土は陶器の素地を用いており、釉はやや青味がかった灰白色を呈している。釉の厚さは1.5mm程度と肉厚である。高台裏には胎土目が残存する。16世紀末から17世紀初頭の所産。258・259は、瀬戸・美濃系の天目茶碗である。262は瓦質の羽釜、263は瓦質の鉢である。細片のため、口径の復元に疑問が残る。胎土は精緻で、焼成はやや悪い。264は東播系須恵器の壺である。口縁端部は丸みを帯びる。焼成は悪い。いずれも14世紀代の所産。265は瓦質の深鉢である。14から15世紀の所産。266・267は土師器皿である。いずれも胎土は精緻で、焼成も良好である。268・269は瓦器碗である。体部外面のヘラミガキはほぼ全面に及ぶ。焼成は悪く、外面の一部は灰白色を呈する。12世紀前葉の所産。270～272は白磁である。270は壺口縁、271はIV類碗、272はV類碗である。11世紀後半から12世紀前半に位置づけられる。273～276は龍泉窯系青磁I類碗である。外面に片彫り蓮弁紋を施す。13世紀前半の所産である。

2層(図13) 須恵器(277～283)・土師器(284・286)・埴輪(285)が出土している。277は宝珠状つまみが付く壺蓋、281は壺もしくは壺の底部で、いずれも飛鳥時代のものとみられる。278・279の壺蓋はそれぞれTK10型式、TK43型式に位置づけられる。280の壺身は口縁部の立ち上がりが短く内傾し、TK10型式に位置づけられる。282の高壺は口径8.9、器高7.5cmを測る。透かしは外から内に向かって穿孔されている。284の土師器壺は5分の4が残存し、口径12.6、器高4.9cmを測る。色調は浅黄色を呈し、内面に放射状暗紋、外面底部にヘラケズリを施している。飛鳥時代のものとみられる。285の形象埴輪にはヘラ描きによる線刻と円形透しが残る。形状から見て家形埴輪の屋根の一部と思われる。286は土師器の壺である。頸部に竹管紋、肩部に線刻を施している。

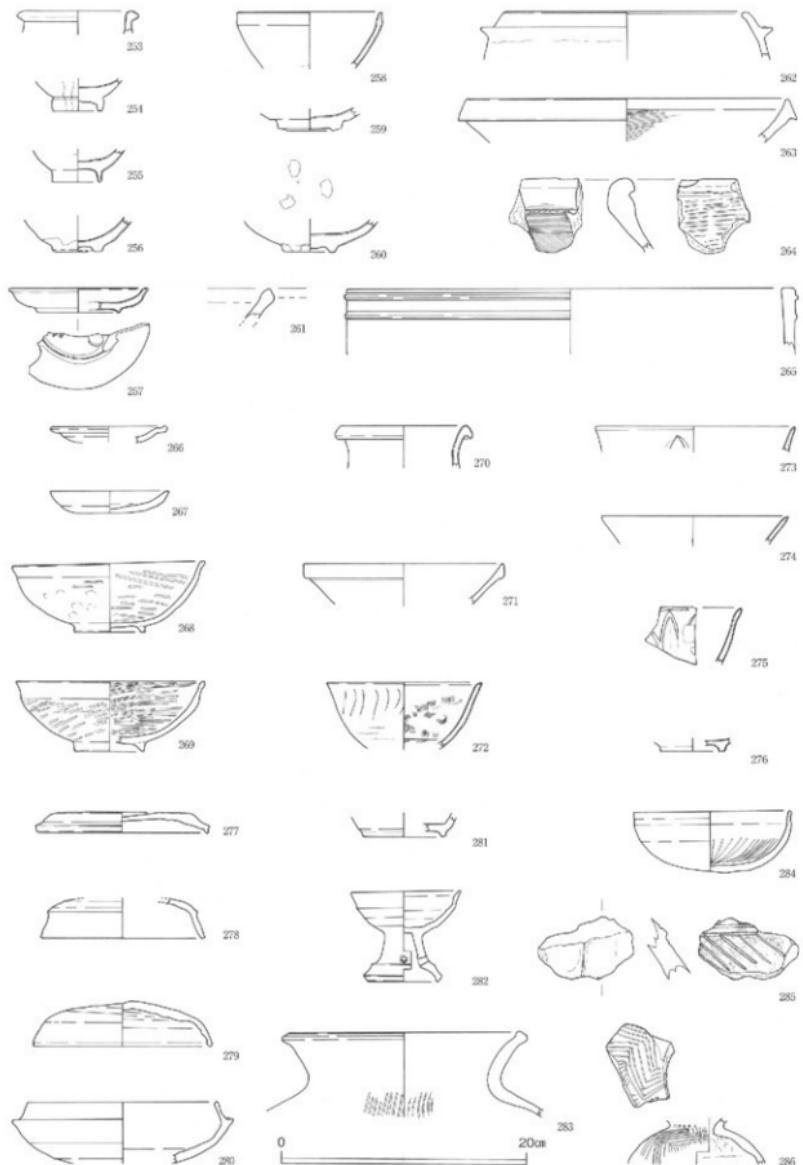


図13 1・2層出土土器

## 2. 第2面 [古代・古墳時代中期・弥生時代後期末～古墳時代初頭]

### (1)出土土器の概要と分類

第2面は、第V章で詳述したように複数の時期にまたがる遺構・遺物を検出した遺構面である。出土遺物からみると、その時期は大きく3つに分けられ、このうち、総数36基に及んだ周溝墓や全長80mにも及ぶ40牋等を代表とする各遺構からは、弥生時代末～古墳時代初頭に帰属する弥生土器及び古式土師器が多数出土した。また、周溝墓の上層や古墳・井戸・溝などを代表として、古墳時代中期から後期にかけての遺物が出土したほか、極少量ではあるものの、一部の溝や土坑からは古代の遺物も出土した。本項ではこれらの遺物の記述を行っていく。

加えて、ここでは、本項以後主体を成す弥生時代後期以後、古墳時代初頭（庄内式段階）前後までの弥生土器・土師器について、主要5器種（壺・甕・鉢・高杯・器台）内の細分を行い、分類の基準を示しておくこととする（図14）。

壺：口縁部形態を主たる要素として以下の9類に分類した。

広口壺（球形の体部を有し、口縁部が外反して広がるもの。）

二重口縁壺（球形の体部をもち、外反する口縁部にさらに外上方に伸びる口縁部を付加させるもの。）

直口壺（球形の体部に直線的ないしは緩やかに外反して伸びる口縁部を有するもの。）

長頸壺（倒卵形の体部に上方に伸びる口縁部を有するもの。）

短頸壺（球形体部に短く直線的に上方に伸びる口縁部を有するもの。）

細頸壺（無花果形あるいは球形の体部に長頸壺よりも細い頸部を有し、直線的な口縁部を持つもの。）

無頸壺（体部上縁を口縁部とする。）

台付壺（底部に脚台を設けるもの。）

小型壺（器高10cm以下の壺の総称。）

甕：弥生時代後期を通じて一般的に用いられる所謂V様式系甕は、調整を主たる要素として2類に分類した。このほか、特徴的な甕については、学史的な呼称方法に則った。

V様式(系)甕A（外面に粗いタタキ調整のみをとどめ、内面調整にナデないしは板ナデを施すもの。）

V様式(系)甕B（外面にハケ調整をとどめるもの。）

庄内型甕（外面に細筋のタタキ調整を施し、頸部内面に明瞭な屈曲を有するもの。）

布留型甕（口縁端部を内側に肥厚させ、外面にハケ調整を施すもの。）

その他（通常に認められるもの以外で、外来系の土器と考えられるもの。）

なお、甕はその法量によって小型・中型・大型・超大型に分けることができるが、それぞれの時期において法量分布のピークが異なる。

したがって、記述を行うにあたって法量の分化に触れる必要があるものについては、個々に法量の相対的な大小を事前に規定し、それに従うこととする。

さらに、ここに掲げたもののうち、小型の甕と外反口縁鉢のように、場合によっては、その峻別に困難を生じるものもあった。主に器高と最大径の比率を基準として介別を図ったが、外面調整に明瞭なタタキをとどめている場合には、その当否はさておき小型の甕として記述を行っている。

鉢：口縁部形態を主たる要素として、以下の2類に分類したほか、底部に穿孔を施すものを加えて3類に分類した。

直口鉢（口縁部が直線的に外上方に伸びるもの。）

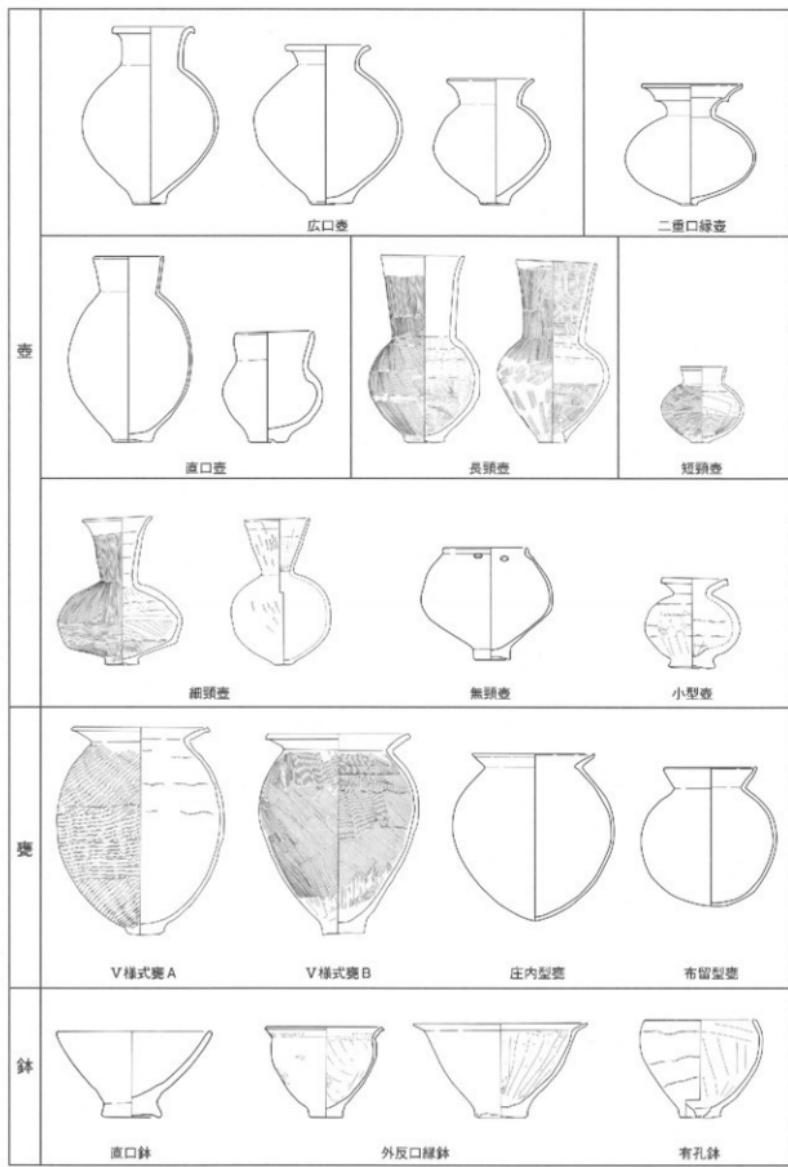


図14 出出土器分類図（1）

外反口縁鉢（口縁部が屈曲して外上方に開くもの。）

有孔鉢（底部に焼成前の小孔を穿つもの。）

高坏：坏部の形態を主たる要素として以下の4類に分類した。

椀形高坏（椀状の坏部を示すもの。）

低脚高坏（浅い皿形の坏部と裾広がりの低い脚部を有するもの。）

有稜高坏（坏部中半に口縁部と底部を画する稜を持ち、外反して外方に伸びるもの。）

有段高坏（ほぼ平らに伸びる坏底部から段を持って外上方に伸びるもの。）

器台：受部及び脚部の形態を主たる要素として、以下の2類に分類した。

筒形器台（筒状の体部に大きく開く受部と裾部を有するもの。）

有段器台（ほぼ水平方向に伸びる受部から強く屈曲して上方に立ち上がる口縁部を有するもの。）

その他：主要5器種以外のもの。

蓋（壺ないしは壺と組み合わせて用いる土器の総称。ハの字状に広がるものと板状のものの2者がある。）

手焙形土器（鉢部に覆部を付加させた上器。）

皮袋形土器（皮袋の形をした土器。）

ミニチュア土器（上記いずれかの土器を模した小型品。器高5cm以内に収まるものが多い。）

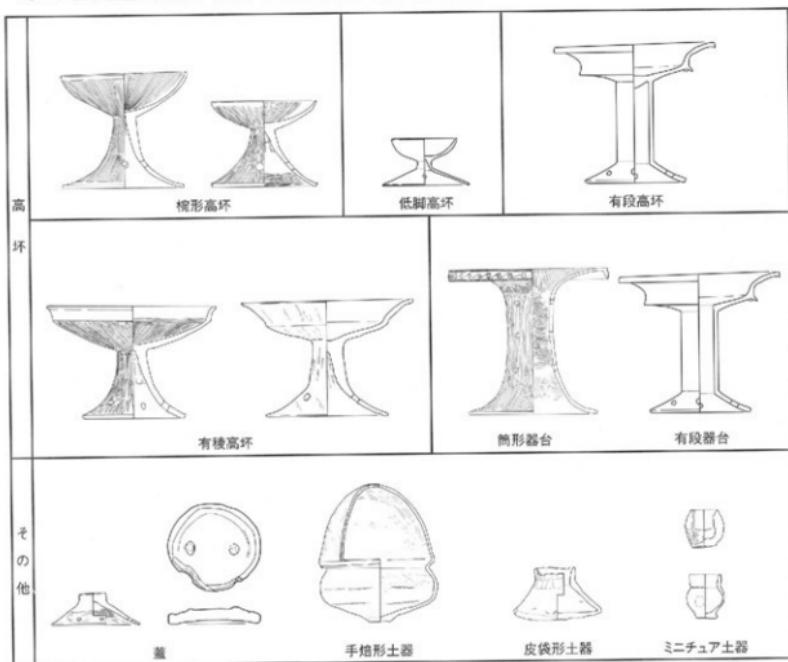


図15 出土土器分類図（2）

(2) 造構出土土器 [古墳時代中期～古代]

溝25(図16) 須恵器(290・291)、土師器(287～289、292～297)、黒色土器(298～300)がある。

須恵器坏身(290)、壺底部(291)の色調はいずれも灰白色を呈し、291の内面には自然釉と付着物が認められる。290はTK217型式に位置づけられ、7世紀前半のものと考えられる。

土師器坏(287～289、292・293)は、体部の立ち上がりが緩いもので、体部中半には指頭圧痕が明瞭に残存する。高台は、断面三角形で外側に向けて強く張り出しあつかりしたつくりのものを貼り付けている。口縁部直下には強い横ナデが施されており、壺部は緩く外反する。胎土はいずれも粗く、色調は黄褐色～浅黄色を呈し、焼成も甘い。294・295は、台付皿ないしは碗の底部である。296・297は土師器鍋の把手である。体部は認められなかった。

黒色土器(298～300)は、いずれも両黒のもので、底部片のみを確認している。全体的に摩滅が著しく、詳細は不明であったが、299や300のように内面に密なヘラミガキをとどめるものも認められた。300は、高台裏面に極めて細い線刻が施されている。

土師器鍋把手の附属時期は明らかではないが、土師器坏及び、黒色土器はいずれも10世紀末～11世紀初頭に位置づけられ、当造構の埋没時期を示しているものと考えられる。

**井戸6** (図17) 土師器が出土し、高坏、壺がある。高坏(301～303)は碗形の坏部を持ち、外面をナデ調整する。301・303は口縁端部がまっすぐ上方に延びる。305の壺は体部が緩やかに内湾して延び、口縁端部は短く外反する。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土に2mm以下の長石・チャート・石英、微粒の雲母を含む。306は角状を呈する把手で、胎土からみて305と同一個体である可能性が高い。高坏は辻編年3段階に位置づけられることから、これらは5世紀前半のものとみられる。

**井戸7** (図17) 土師器が出土し、直口壺、壺、把手付鍋、高坏がある。直口壺(307)はほぼ完形で口径10.55、器高14.6cmを測り、ヒヨウタシ種子が入っていた。胎土は密で色調は橙色を呈する。308・309・311は壺である。311は完形で口径12.4、器高18.9cmを測り、底部は平底状に整形される。外面下半はハケをナデ消している。把手付鍋(312)は約4分の3残存し、口径25.0、器高21.8cmを測る。左右の高さが若干合わない把手は体部の内側から挿入している。大型の有段高坏(313)はほぼ完形で、

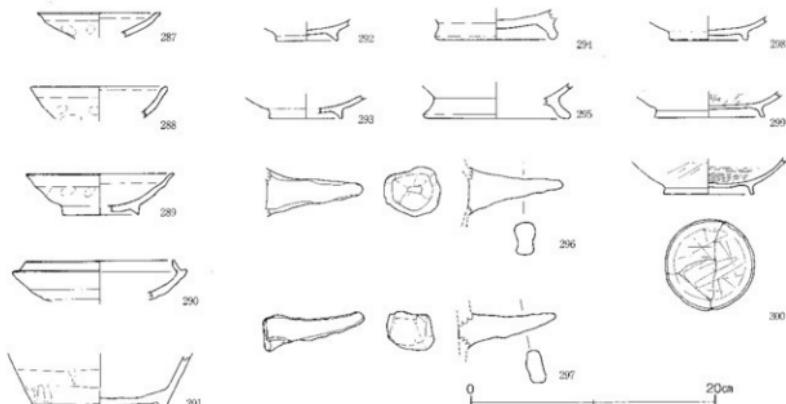


図16 溝25出土土器

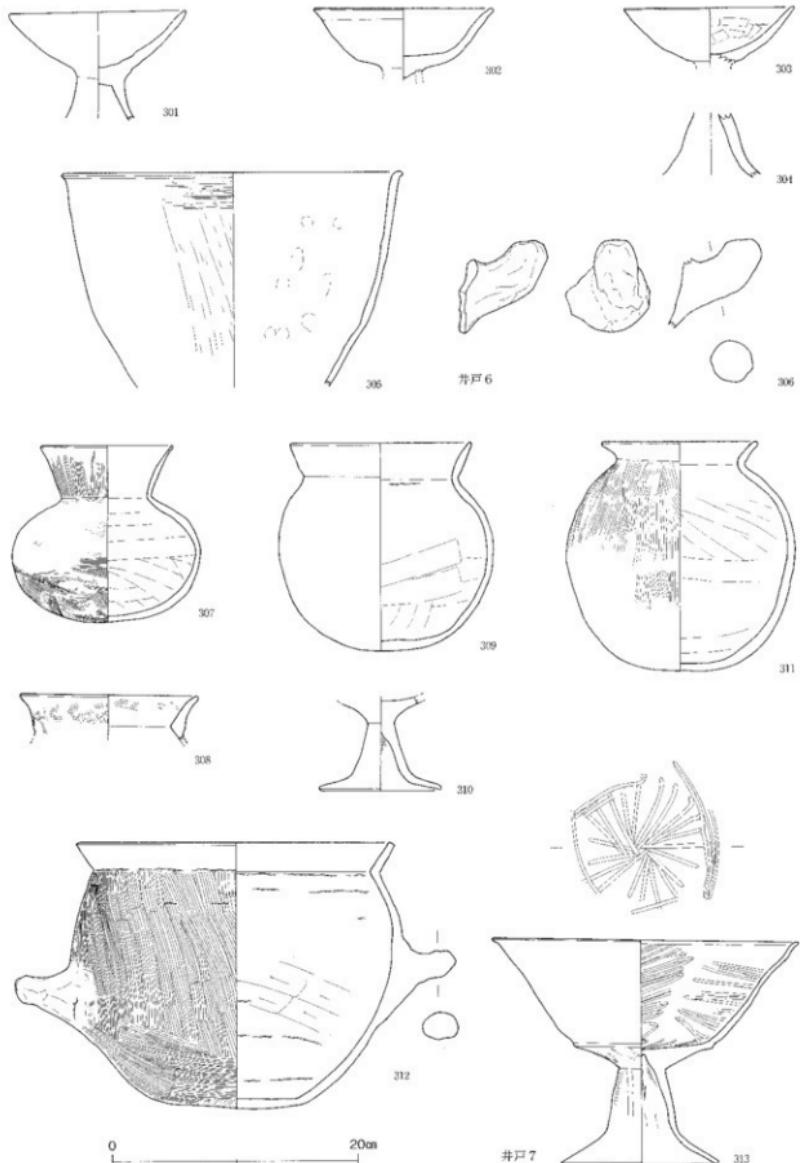


図17 井戸6・7出土土器

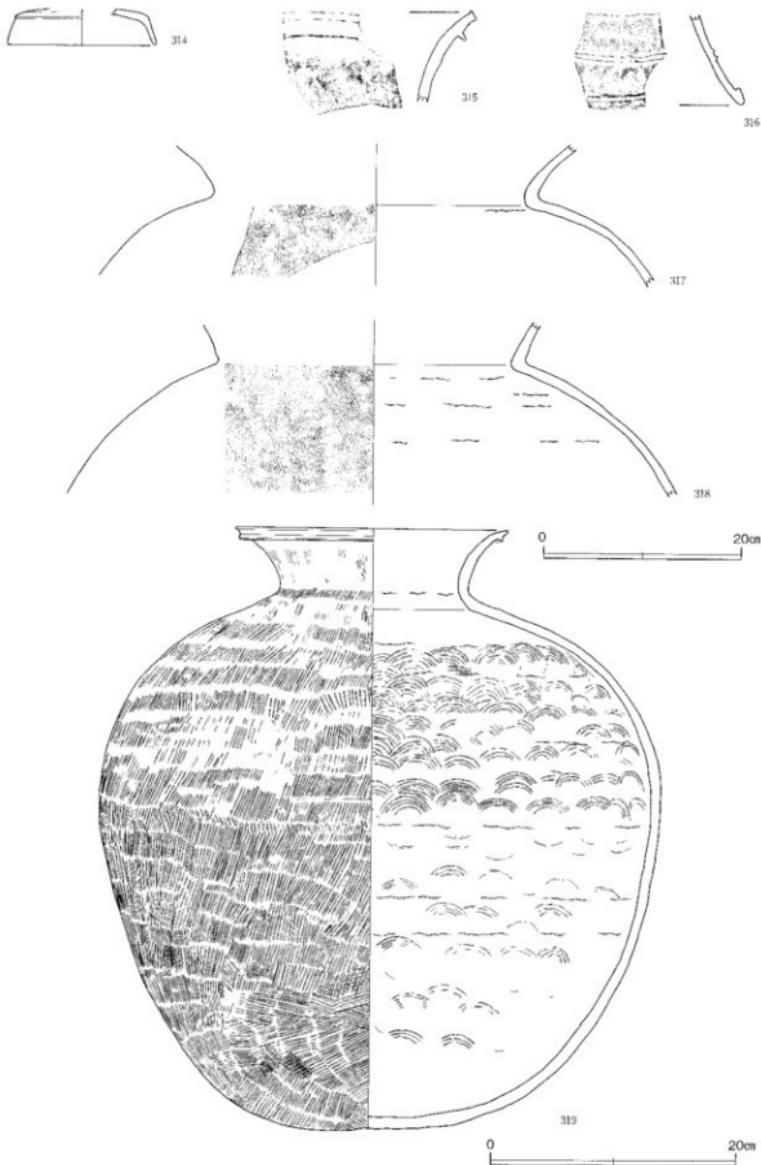


図18 井戸8出土土器（1）

深い壺部を持ち口径24.5、器高18.6cmを測る。胎土は精良で色調は黄橙色を呈し、壺部内面に横方向の粗いヘラミガキを4分割で施している。313は辻輪年4段階に位置づけられることから、これらの土器は5世紀中葉から後葉のものとみられる。

**井戸8(図18・19)** 須恵器・土師器が埋土中・下層から出土した。須恵器には壺蓋、甕、器台がある。壺蓋(314)は天井部が平坦でヘラケズリが全面に及ぶとみられる。甕体部(317・318)は内面を丁寧にナデ調整するもので、いずれも焼成は堅密で断面の色調は赤灰色を呈する。甕(319)はほぼ完形で口径22.0、器高19.0cmを測る。口縁部下に突帯が巡り、内面の同心円状タタキはナデ消される。甕口縁部(315)は外面に波状紋を巡らせる。316は器台の脚部で、櫛搔波状紋と長方形透かしの一部が残る。

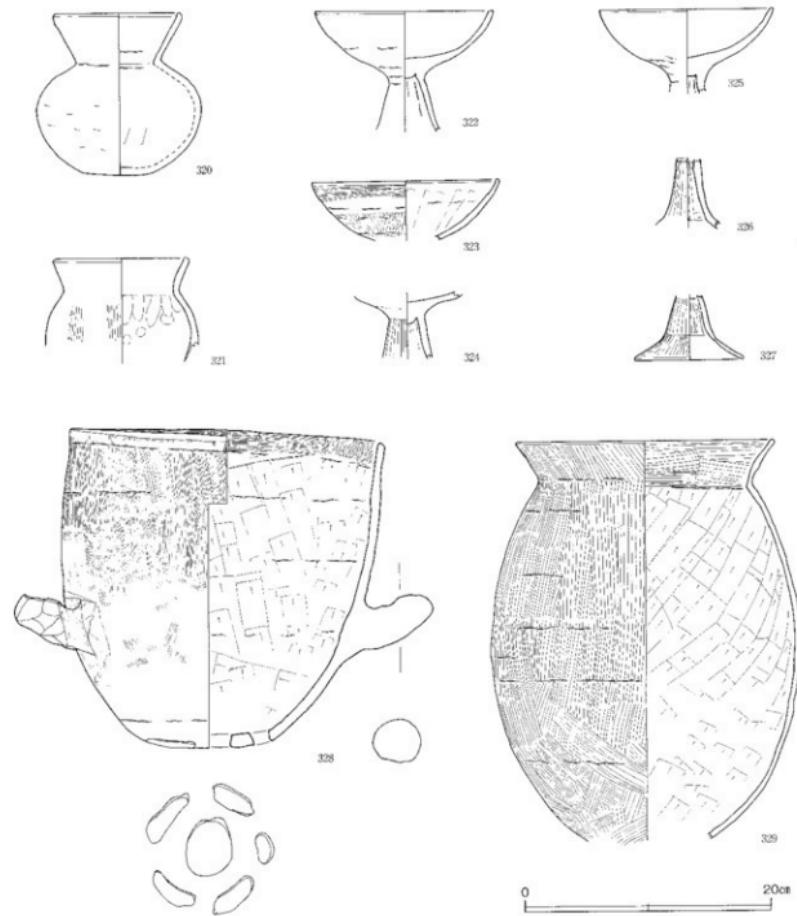


図19 井戸8出土土器(2)

土師器には直口壺、高坏、甕、甑がある。直口壺(320)は井戸底から完形で出土したもので、口径10.2cm、器高13.2cmを測る。高坏(322・323・325)は椭形の坏部を持つもので、外面をナデ調整するもの(322・325)とヘラミガキを施すもの(323)がある。高坏脚部(324・326・327)は縦方向のヘラミガキを施す。甕(328)は完形で口径25.4cm、器高26.0cmを測る。口縁部は体部からわずかに内傾して立ち端部を丸くおさめる、体部下半から底部にかけて丸みを帯びる。把手はやや下寄りに付き、蒸気孔は円形のものの周りに長條円形のもの5孔を配する。長胴甕(329)は底部を欠損する。口縁部が大きく開き端部を面取りする。須恵器はTK208型式、土師器は辻編年4段階に位置づけられることから、これらの土器は5世紀中葉のものとみられる。

古墳1(図20) 須恵器、土師器、埴輪があり、北側周溝から339、東側周溝から300・332・333・338・341～344、南側周溝から331・335・337・340、西側周溝から334・336が出土した。

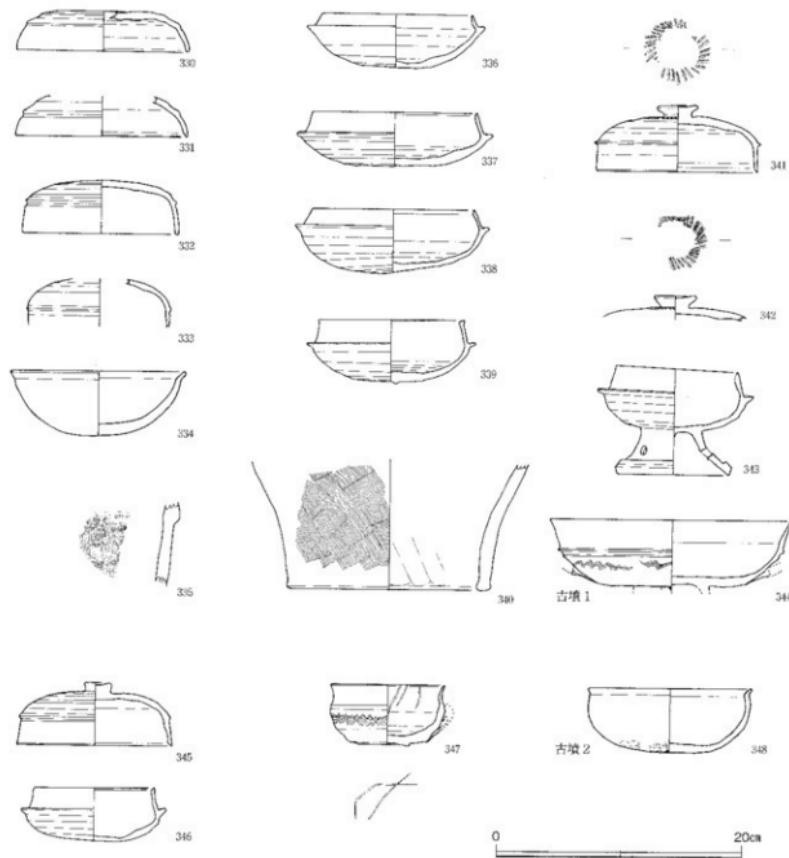


図20 古墳1・2出土土器

須恵器には坏蓋(330～333)、坏身(336～339)、高坏(343・344)、有蓋高杯蓋(341・342)がある。

坏蓋の口径13.9cm前後のもの(330・331)はTK10型式に位置づけられる。332はヘラケズリの範囲が3分の2以上だが天井部がやや丸みを持つことからTK23型式、333は天井部が丸くTK47型式に位置づけられる。坏身は口径11.8～13.4cmがあり、336はほぼ完形で口径12.15cmを測り、胎土に黒色砂粒を含む。339はTK23型式、336はMT85型式、337・338はMT15～TK10型式に位置づけられる。有蓋高杯蓋(341・342)はつまみの周りに櫛描列点紋を時計回りに施し、341は復元口径13.1cmを測る。有蓋高坏(343)は約3分の1が残存し、復元口径9.85cmを測る。外から内面に円形透かしを穿孔する。無蓋高坏(344)は外面に櫛描波状文1帯を施す。底部に透かしを切り抜いた際の工具痕が残る。341～344はいずれもTK23型式に位置づけられる。土師器坏(334)はほぼ完形で口径14.0、器高5.3cmを測

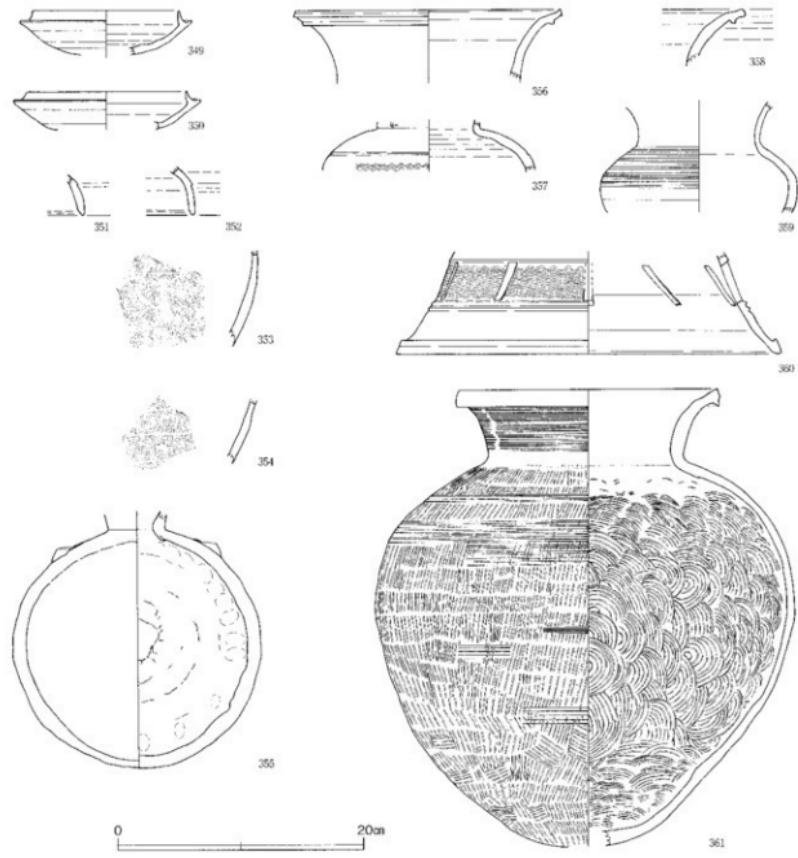


図21 古墳3出土土器

る。色調は橙色を呈し、外面底部には黒斑が見られる。辻編年4段階に位置づけられる。

埴輪(335・336)は円筒埴輪の細片である。いずれも焼成は良好で外面にタテハケを施す。

須恵器はT K23～MT85型式がみられ、これらは5世紀後葉から6世紀後葉頃のものと考えられる。

古墳2(図20) 須恵器・土師器が西側周溝底から一括出土し、いずれもほぼ完形である。

345～347は須恵器である。有蓋高坏蓋(345)は口径12.5cmを測る。焼成はやや甘く、内面の色調はにぶい黄橙色を呈する。坏身(346)は口径9.7cmを測り、外面底部に溶着物が付着する。把手付鉢(347)は口径9.2、器高4.9cmを測る。外面に撫拂波状紋を施し、底部にはヘラ記号を入れている。

土師器坏(348)の色調は橙色を呈し、口径13.2、器高5.2cmを測る。内外面とも摩滅するが外面底部にヘラケズリが残る。須恵器はTK23型式、土師器は辻編年4段階に位置づけられることからこれらの土器は5世紀後葉のものと考えられる。

古墳3(図21) すべて須恵器で器種は坏身、坏蓋、壺、壺、提瓶、器台がある。提瓶(355)が北側周溝底からやや浮いた状態で、壺(361)が周溝肩部に貼りついて破碎された状態で出土し、ほかは細片で周溝埋土中から出土した。

坏身(349・350)はTK43～209型式、坏蓋(351・352)はMT85型式に位置づけられる。壺体部(353・354)は外面に繩巻紋タタキと沈線を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。壺口縁部(356・357)は口縁部下に突帯を持つ。356は焼成が堅緻で色調は灰赤色を呈する。壺(357・359)は、357の頸部と体部に波状紋、359の肩部にカキメを施す。器台(360)は幅広の波状紋を施した後に長方形透かしを穿つものでTK208型式に位置づけられる。360は戸井8出土の器台(316)と接合したことから、混入品と考えられる。提瓶(355)は体部前面および口縁部を欠く。体部背面はほぼ平らでカキメを施さない。把手痕の破損面に自然釉がみられるので把手は焼成前もしくは焼成中に欠損したと思われる。壺(361)はほぼ完形で口径20.8、器高37.2cmを測る。口縁端部を上下に拡張し、頸部と肩部にカキメを施す。肩部のカキメは全周しない箇所もある。胎土に直径2mm以下の長石を含む。355・361はMT15～TK10型式におさまる。以上の土器は6世紀前半から末頃のものと考えられる。

溝28(図22・23) いずれも埋土下層から出土し、384～393を除きすべて須恵器である。

須恵器の坏身・坏蓋は組み合うものではない。坏蓋は口径14～15.5cmを測る大型品で、天井部と口縁部の境の稜線が不明瞭である。364・368・370・374・376は天井部が丸みを帯びヘラケズリの範囲は狭く、口縁端部に浅い凹線が巡る。374はほぼ完形で口径15.0、器高4.9cmを測る。366は凹線状の稜線が巡る。362はTK43型式、366はMT15型式と考えるが、ほかはTK10型式におさまると考える。坏身は口径が2つに分けられ、12cm前後の367・372・373は丸みのある体部からやや内傾気味に延びる口縁端部を持ち、14cm前後の363・365・369・371・375は立ち上がりが短く内傾し、体部のヘラケズリは全体の3分の1程度である。前者はMT15型式、後者はTK10型式に位置づけられる。377・388の坏身は口縁端部を欠くが、形態からTK10、MT15型式のものと考えられ、377は底部にヘラ記号がみられる。379～381はかえりの先端が細く受部が水平に延びることからTK43型式に位置づけられる。382の壺は口縁端部に突帯を1条巡らせる。383の壺の胎土は密で微粒の黒色粒を含む。口縁端部直下に1か所穿孔し、口縁部内面には円弧を描くヘラ記号を施している。

土師器壺(384)は、色調が橙色を呈し胎土は精良で、体部外面下半をヘラケズリする。

以上の土器は6世紀前葉から末頃のものと考えられる。

図23に掲げた385～393は土師器である。当溝からの出土資料ではあるが、ほかの土器の示す時期と

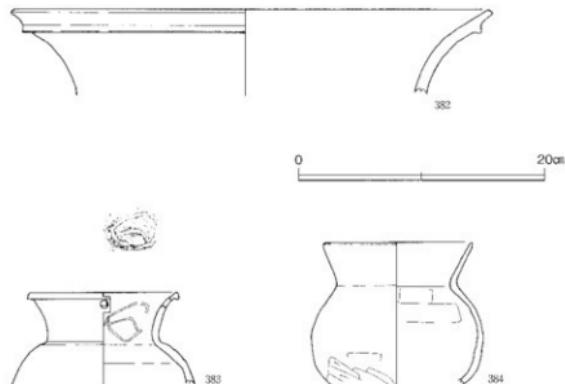
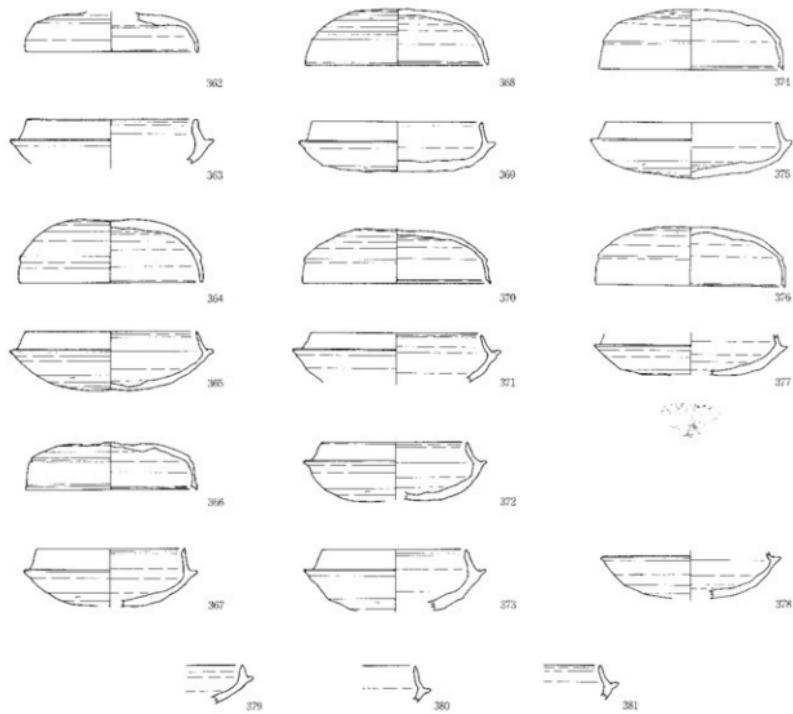


圖22 漢28出土土器

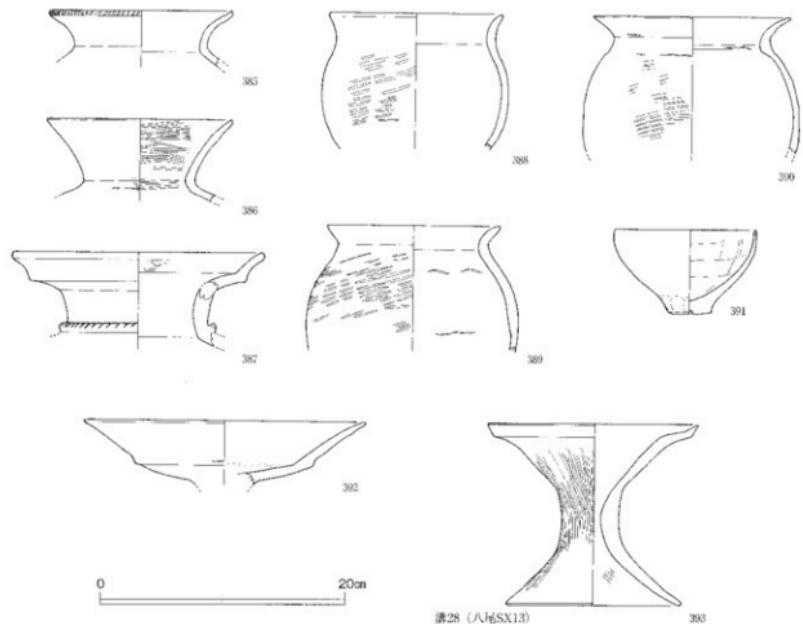


图28 (八尾SX13)

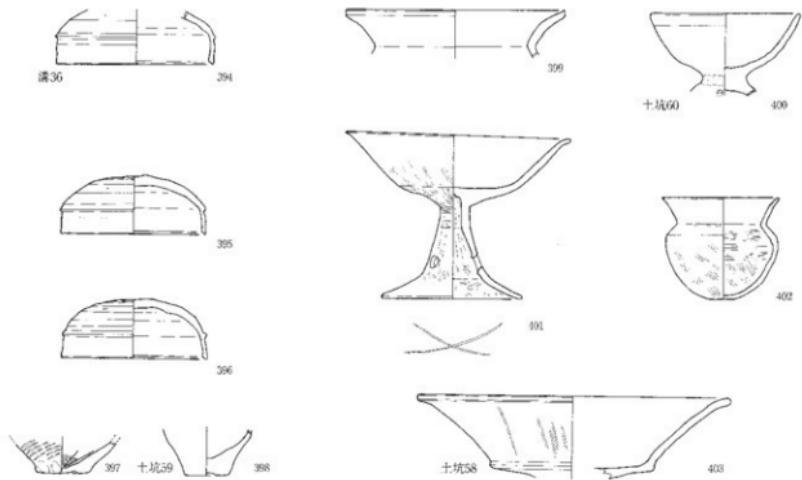


图23 满28 (八尾SX13) · 36 土坑58~60出土土器

整合的ではない。これらの土器は、いずれも03-1工区南端の2B-7A区より出土しており、ある一定の数量が認められたことから、6世紀代の構に重複された遺構が存在していたものと考え、図示するに至った。出土した土師器には、広口壺(385)、直口壺(386)、二重口縁壺(387)、V様式系壺A(388~390)、小型直口鉢(391)、有稜高坏(392)、小型器台(393)がある。

広口壺(385)は、口縁端部に刻目を施している。頸部から口縁部へは強く外反している。直口壺(386)は、内面に横方向のヘラミガキを施す。口縁部は、やや外反気味ではあるものの、直線的に伸びている。二重口縁壺(387)は、頸部に突帯を貼り付け、刻目を施す。頸部から口縁部にかけて接合しない箇所があり、図上で復元を行ったが、口径には若干の疑問が残る。

V様式系壺Aは、それぞれ器形が異なっており、頸部の外反が弱い388・389のほかに、鋭く屈曲して伸びる口縁部を持つ390がある。いずれもタキキは粗い。

391は小型の直口鉢で、突出するドーナツ底から、内湾して立ち上がる体部を経て口縁部へと至る。

392の有稜高坏は、坏部の約3分の2が残存しており、全体的に摩滅が著しい。口縁部と坏部を画する稜は強い横ナデにより小さな段を成す。口縁部は直線的に外上方に伸びる。坏部内面には、縦方向のヘラミガキが施されていた。

器台(393)は、外面には縦方向のヘラミガキを施し、内面には部分的にハケ調整が残る。口縁端部は短くつまみ上げられている。器形は丹後・丹波地域に認められるものと類似するが、口縁端部の処理や、器壁の厚さ等の点では、やや様相を異なる。同様の器台は、山城地域にも認められ、本例についても、こうした地域の影響を受けたものである可能性が想定される。胎土はやや粗く、焼成は甘い。また、胎土中には、直径1mm大の長石・石英・雲母が認められる。

以上の土器は、概ね近畿造編年様相4(古)段階に位置づけられる。

溝36(図23) 394の須恵器坏蓋は天井部が丸みを持つとみられ、TK23~47型式に位置づけられる。5世紀後葉のものと考えられる。

土坑58(図23) 401の高坏は、ほぼ完形で口径18.4、器高3.6cmを測り、裾部内面に×字状の線刻を施す。坏部外面、裾部をハケ調整する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土に長石・チャート・雲母を含む。403は大型の有段高坏で、平らな坏底部を持ち、体部は外上方にやや外反気味に伸びる。

402は小型丸底壺である。外反する口縁部を持ち、頸部にヨコナデによる段差がみられる。底部は、やや平底に近い様子を示す。

以上の土器は、布留式新段階でも新しい様相を示し、辻編年2~3段階に位置づけられることから、5世紀初頭頃の所産と考えられる。

土坑59(図23) 須恵器坏蓋(395・396)はいずれも完形で、口径11.8~11.9cmを測り、丸い天井部を有する。TK23~47型式におさまることから5世紀後葉から末頃のものと考えられる。

壺Aの底部(397・398)は溝40の混入品とみられる。

土坑60(図23) 399はV様式系壺Aの口縁部である。大半を欠損するために、詳細は不明であるが、胎土には角閃石を含んでおり、生駒山西麓産である。400は坏部が楕形で短い脚部を持つ楕型高坏で、裾部を欠く。円形透かしが3方に残る。これらは近畿造編年様相3ないしは4のものと考えられる。

土坑74(図24) 405・406は土師器壺で奈良時代のものと考えられ、いずれも橙色を呈し、内外面にハケを施す。406は球形の体部を持つ。404は須恵器壺の口縁部で突帯と櫛撓波状紋を施す。古墳時代中期のものとみられ混入資料と考えられる。

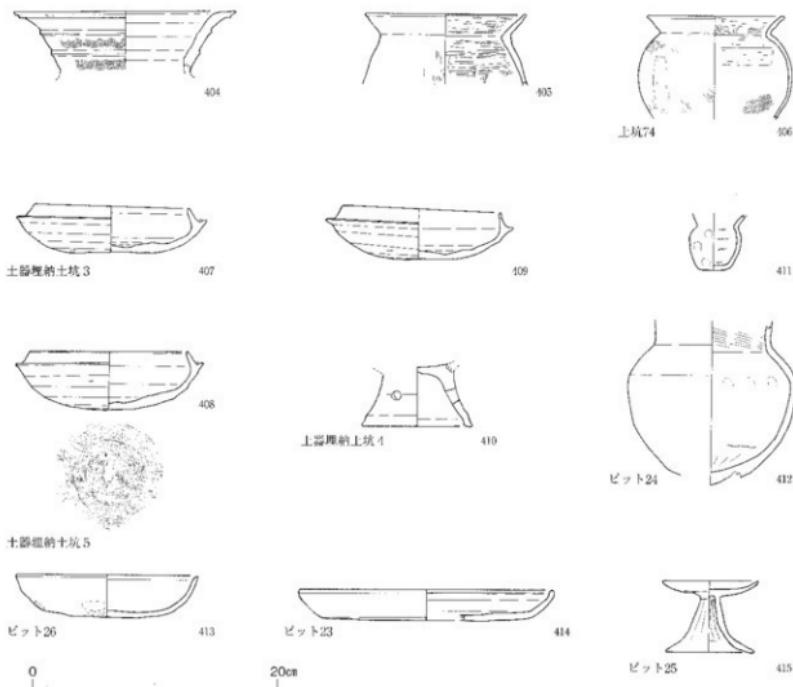


図24 土器埋納土坑3～5 ピット23～26出土土器

**土器埋納土坑3（図24）** 407の須恵器坏身はほぼ完形で口径12.6、器高4.0cmを測り、底部内面のナデの下に同心円タキの一部が残る。TK43型式に位置づけられ6世紀後葉のものとみられる。

**土器埋納土坑4（図24）** 409の須恵器坏身はほぼ完形で口径13.2、器高4.0cmを測る。焼成があまく、内面の色調はにぶい黄橙色を呈する。410の高坏脚部は低脚のもので3方に円形透かしを施す。

これらはいずれもTK43型式に位置づけられることから6世紀後葉のものとみられる。

**土器埋納土坑5（図24）** 408の須恵器坏身はほぼ完形で口径12.8、器高4.8cmを測り、底部にヘラ記号がある。TK10型式に位置づけられることから6世紀前葉のものとみられる。

**ピット23（図24）** 414の土器盤は口縁端部がわずかに肥厚するもので、色調は橙色を呈する。ヘラミガキは施されておらず、奈良時代後期頃のものと考えられる。

**ピット24（図24）** 411はミニチュア土器盤で、口縁端部以外は完形である。412の土器盤は摩滅が激しく調整は不明で、口縁部と底部を欠く。

**ピット25（図24）** 415は皿状の坏部を呈する小型の高坏で、約5分の4が残存し、口径7.8、器高5.9cmを測る。脚部外面を面取りし、裾部内面に布日压痕が残る。飛鳥時代のものと考えられる。

**ピット26（図24）** 413の土器盤は色調が橙色を呈するもので、約5分の4残存し、口径14.6cmを測る。口縁端部を丸くおさめ、外面に指頭压痕が残る。飛鳥時代のものと考えられる。 (木村)

[弥生時代末～古墳時代初頭]

井戸5（図25） 墓土上層から420・421、中層肩部から416～418、下層から419・422が出土した。

416は完形の小壺壺で、やや丸みを帯びた平底の底部を持ち、口縁端部は短くつまみ上げる。体部外面は丁寧にナデが施される。胎土は密で、1～3mmの石英・長石を少量含む。色調は灰黄色を呈する。

417は小型のV様式系壺Aである。口縁端部を欠き、全容は窓い知らない。体部全体に粗いタタキが施される。胎土はやや粗く、5mm以下の石英・長石を多く含む。色調は黄褐色を呈する。

418は把手付鉢の把手である。胎土はやや粗く、褐灰色を呈する。焼成は良好である。

419・420は、壺ないしは壺の底部である。外面調整には419がヘラミガキ、420はタタキが施されている。420の胎土は粗く、焼成も甘い。421は有孔鉢である。422は高杯の脚部片。円形の透しを3方に穿つ。以上の土器は、近畿道編年様相3に位置づけられる。

周溝墓1（図26） 出土土器は少ない。なお、北側周溝からは423、西側周溝からは424が出土した。424のV様式系壺Aはほぼ完形で、口径17.8・器高23.2cmを測る。体部は球形傾向にあり、中位やや上寄りに最大径を持つ。体部下半には明瞭な接合痕が認められ、接合部にも連続ラセンタタキが施される。以上の土器は、近畿道編年様相3（古）に位置づけられる。

周溝墓4（図26） 出土土器は少なく、図示可能なものとしては、わずかに3点を数えるにすぎない。いずれも埋土最下層より出土した。425・426は壺ないし鉢の口縁部片である。いずれも密な胎土を用い、長石・石英を含む。焼成は良好であり、灰黄褐色を呈する。427は高杯の脚部片である。胎土はやや粗く、焼成も甘い。色調は橙色を呈する。いずれも細片であるため、詳細は不明であるが、壺口縁部を外上方に強くつまみ出すものがある点から、近畿道編年様相3に位置づけられる。

周溝墓6（図26） 出土土器は少なく、図示可能なものも東側周溝の埋土から出土したV様式系壺A（428）のみであった。頸部内面の稜はやや鈍い。摩滅が著しく、外面にタタキがわずかに認められるのみである。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。近畿道編年様相3に位置づけられる。

八尾南4号墳（図26） 周溝埋土中から出土し、433以外は細片で摩滅している。429は広口壺の口縁部である。口縁端部を下方に拡張し、やや弧をなす端面に竹管円形浮紋と粗雑な波状紋を巡らせる。なお、摩滅により明瞭ではなかったため図化し得なかったが、内面には横方向のヘラミガキの痕跡がわずかに認められた。頸部から口縁部にかけての屈曲はやや強く、直線的である。430～432は、壺の口

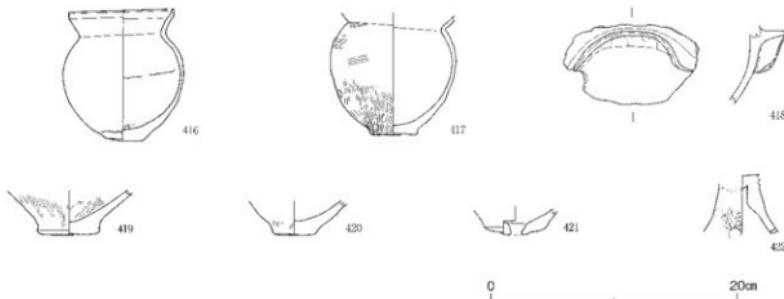


図25 井戸5出土土器

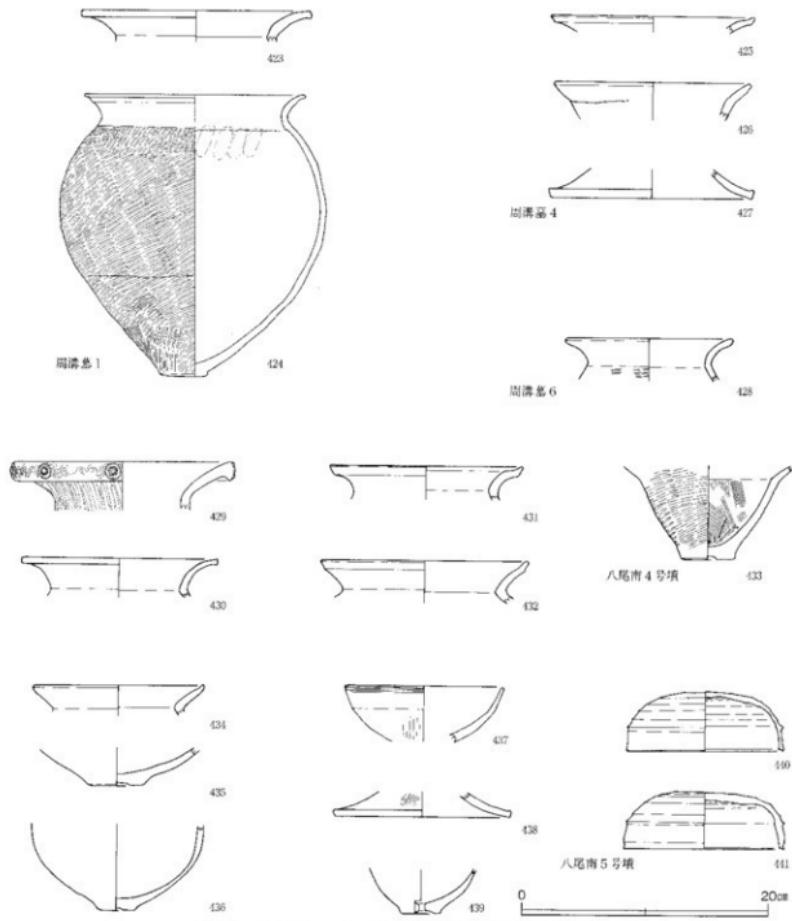


図26 周溝墓 1・4・6 八尾南 4・5 号墳出土土器

縁部片である。433は小型の外反口縁鉢である。体部外面には太筋の粗いタタキ、体部内面にはハケが施される。直線的に伸びる体部と短く外反する口縁部との角度がゆるやかで、新出の要素を多分に含んでいるとも思われる。

以上の土器は、近畿遺編年様相3（古）に位置づけられる。

八尾南5号墳（図26） 434～439は弥生土器、440・441は須恵器である。弥生土器は周溝埋土中から、須恵器は北側周溝の上層及び肩際から出土した。434は壺の口縁部片、435・436は壺の底から体部片である。437は椀形高杯の坏部で、口縁部外面に擬凹線状の並行する沈線がわずかに残る。438は高杯脚部。439是有孔鉢である。これらはいずれも細片であり、混入資料の可能性が高い。

須恵器はともにはば完形。坏蓋(440・441)は天井部が丸みを帯びる。440は黒色砂粒、441は長石を胎土に含む。これらはTK23型式に位置づけられることから、5世紀後葉のものと考えられる。

周溝墓8(図27) コンテナ1箱分の土器が出土し、9点を図示し得た。444が北側周溝、442・443・447が東側周溝、そのほかは南側周溝から出土した。いずれも細片で埋土最下層より出土した。

442は広口壺の口縁部片である。細片のため、口径の復元には若干の疑問が残る。やや面取り気味に求められた口縁端部には、浅く疎らな刻目が施される。胎土はやや粗く、5mm大の石英・長石を含む。443は有稜高杯の坏部片。3分の2程度残存している。内外面ともに密な縱方向のヘラミガキを施す。坏底部と口縁部の接合状況が粗雑で、調整は甘く、稜部の屈曲も鈍い。胎土は粗く、2mm前後の石英・長石を多く含む。444は小型壺の口縁部片と考えられる。細片のため、口径の復元には若干の疑問が残る。内外面ともに摩滅が著しいが、体部外面にヘラミガキの痕跡を留めている。胎土は粗い。445・446は壺の底部片である。445は、平底の底部から体部にかけての屈曲が鋭角的で、底部内面が平底状を呈する点が特徴的である。わずかではあるが、体部外面にヘラミガキの痕跡を留める。体部内面は黒色を呈する。447・450はV様式系壺Aの底部片である。450は、内外面ともに灰白色を呈し、底部から体部にかけて黒斑が認められる。また、図示していないが、底部外面には纖維状の圧痕が認められる。448は小型鉢の底部片、449は有孔鉢の底部片である。448の鉢を除いていずれも胎土は粗い。

以上の土器は、近畿道編年様相3(古)に位置づけられる。

周溝墓9(図27) コンテナ半箱程度の土器が出土したが、細片が多く、かろうじて3点を掲げたに過ぎない。すべて南側周溝から出土した。451・452はV様式系壺である。451は緩やかに外反する口縁部に、やや面取り気味の端部を有する。胎土はやや粗く、1~3mm大の石英・長石・チャートをやや多く含む。焼成はやや甘く、外面が赤褐色、内面は黒色を呈する。452は8分の1程度しか残存しておらず、口径の復元に若干の疑問を残す。体部以下を欠き全容は不明であるが、外上方に直線的に伸びる口縁部や頸部内面の鋭い屈曲など、後出の要素を多分に含む。胎土は粗く、2~3mm大の石英・長石・チャート片を含む。453は小型の鉢である。胎土は密、焼成も良好で、灰白色を呈する。

以上の土器はいずれも細片であるため、積極的には帰属時期を比定し難いが、452の壺を根拠に、近畿道編年様相4(古)に位置づけられると考えられる。

周溝墓10(図27・28) コンテナ6箱分に及ぶ土器が出土した。埋土は、上・中・下の3層にわけられ、それぞれの出土位置は、456・462・466・470・471・492が西側周溝、460・461・467~469・476・483・485・490・493が南側周溝、そのほかが東側周溝からの出土である。大半は細片であったものの、東側周溝の下層を中心に、完形に近いものが特徴的に認められた。出土土器は壺・甕・鉢・高杯・手捨形土器の各器種が揃う。

454~474は埋土上層より出土した。454は二重口縁壺の口縁部片である。二次口縁の接合面で剥離している。外面には7条の大振りな横描波状紋を1帶施し、竹管円形浮紋を付す。胎土に角閃石を多く含み、暗茶褐色を呈する生駒山西麓産である。455は小型壺の口縁部片。細片のため詳細は不明。段を有する口縁部外面には、凹線をはさんで上下に刻目が施される。胎土は精緻で、色調は灰白色を呈する。456~459はV様式系壺Aの口縁部片である。456・457は細片のため、口径の復元に疑問が残る。口縁端部の形状から、端部外面を強くナデて段を作り出し、外上方につまみ出すもの(456・459)と、端部を短くつまみ上げて、跳ね上げ口縁状とするもの(457・458)の2者に分けられる。胎土は粗く、色調は灰白色を呈するもの(456・457)と赤褐色を呈するもの(458・459)がある。460~472は底部片である。

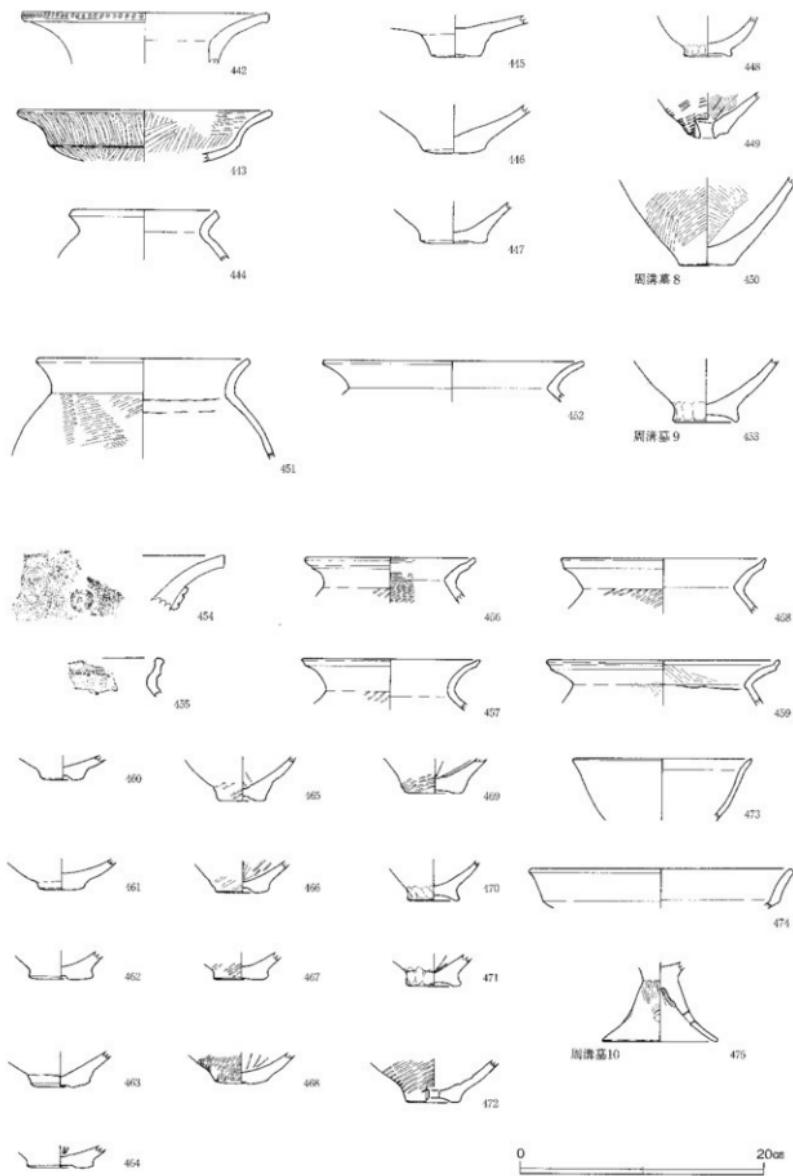


图27 周溝墓8~10出土土器

460～464は壺、465～469は甕、470・471は鉢、472は有孔鉢である。壺ないし甕の底部には、ドーナツ底と平底の2者がある。鉢は上げ底。470・471の鉢を除き、胎土はいずれも粗い。473は小型の外反口縁鉢の口縁部片と考えられる。細片のため、復元径には疑問が残る。口縁部と体部を画する屈曲はやや鈍く、口縁端部の仕上げも雑である。摩滅のため調整は不明であるが、外面にはヘラミガキの痕跡がわずかに残る。胎土は粗く、5mm大の石英・長石を微量に含む。また、口縁部から体部にかけて黒斑が認められる。474は有稜高坏の坏部片、475は脚部片である。474は摩滅が著しく、調整は不明。胎土はやや粗く、1mm大の石英・長石を多く含む。475は4方に円形透かしを施す。

476～485は中層から出土した。476は直口壺である。胎土は精緻であるが、2mm大の石英・長石を少量含む。焼成も良好である。色調は灰白色を呈する。477～481は甕の底部片である。479は底部を充填した際の造作によるためか、底部内面に窪みが認められる。胎土はいずれも粗い。482は有孔鉢である。483は片口鉢である。体部外面には4mm単位ほどの籠目が圧痕として姿を留める。圧痕が途切れることで口縁部を以って体部と口縁部の境となしており、その境には籠の口縁端部状の沈線が1条認められる。口縁部は外面に面取りを施し、直立気味に立ち上げた後、一部を片口としている。圧痕から、幅2mmほどの繊維を縱位に、幅1mmの繊維を横方向に編込むものが想定される。胎土はやや粗く、3mm前後の石英・長石を含む。焼成は甘く、色調は内面が赤褐色、外面が灰色を呈する。484の有稜高坏は、坏底部が緩く内湾して立ち上がり、緩やかに外反する口縁部を有する。胎土は精緻で、焼成は良好である。485は手焙形土器の受部片である。火半を欠き詳細は不明であるが、耳が貼り付けられ、受部も立ち上がりが強い。胎土は密で角閃石を多く含む生駒山西麓産である。

486～493は下層から出土した。486は加飾広口壺である。口縁端部は斜め下方に垂下させ端面を拡張し、2個1対の竹管紋を施すほか、頸部には刻目を施す。体部外面は極めて精緻にヘラミガキが施される。やや粗く3mm程度の石英・長石・チャート片を少量含む。焼成は良好である。487は細頸壺の可能性がある壺の体部である。無花果形の体部に縮小した底部を持つ。体部外面には縱方向のヘラミガキを施すが、最大径付近には横方向のヘラミガキを施す。体部外面下半に直径5cm程度の黒斑が認められる。488は広口壺である。口縁部は強く外反する。胎土はやや粗く3mm程度の石英・長石・チャート片を少量含む。焼成は良好である。489は広口直口壺である。ごくわずかに頭部を有し、直線的に外上方へ開く口縁部を有する。胎土は粗く、4mm大の石英・長石・チャートを多く含む。490～493はV様式系甕である。490・493はいずれも体部最大径が上半に位置し、外面に太筋のタタキを施す。また、逆円錐台部との接合部については段を有するほどに強くナデを施し、その後水平方向のタタキを施している。口縁端部はやや面取り気味に仕上げている。色調は赤褐色を呈する。

以上の土器、中でも下層から出土したものは、近畿道編年様相3（古）に位置づけられる可能性が高く、本遺構の帰属時期を示しているものと考えられる。

周溝墓11（図29） 出土土器は少なく、図化可能なものもわずかに5点を数えるに過ぎない。埋土は上下2層に分けられ、495・496が上層、494・497・498が下層から出土している。495・497・498が東側、496が南側、494が北側の周溝からそれぞれ出土した。

495・497はV様式系甕の底部片である。いずれもドーナツ底である。胎土は粗く、3mmまでの礫を含む。焼成はやや甘く、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈する。また、497は右上がりの太筋のタタキを施す。496は椀形高坏である。口縁端部及び脚部を欠くため、全容は窺い知れない。柱状の脚部に坏部を充填して貼り付けている。脚部には、4方の円形透かしが穿たれる。摩滅のため、詳細は

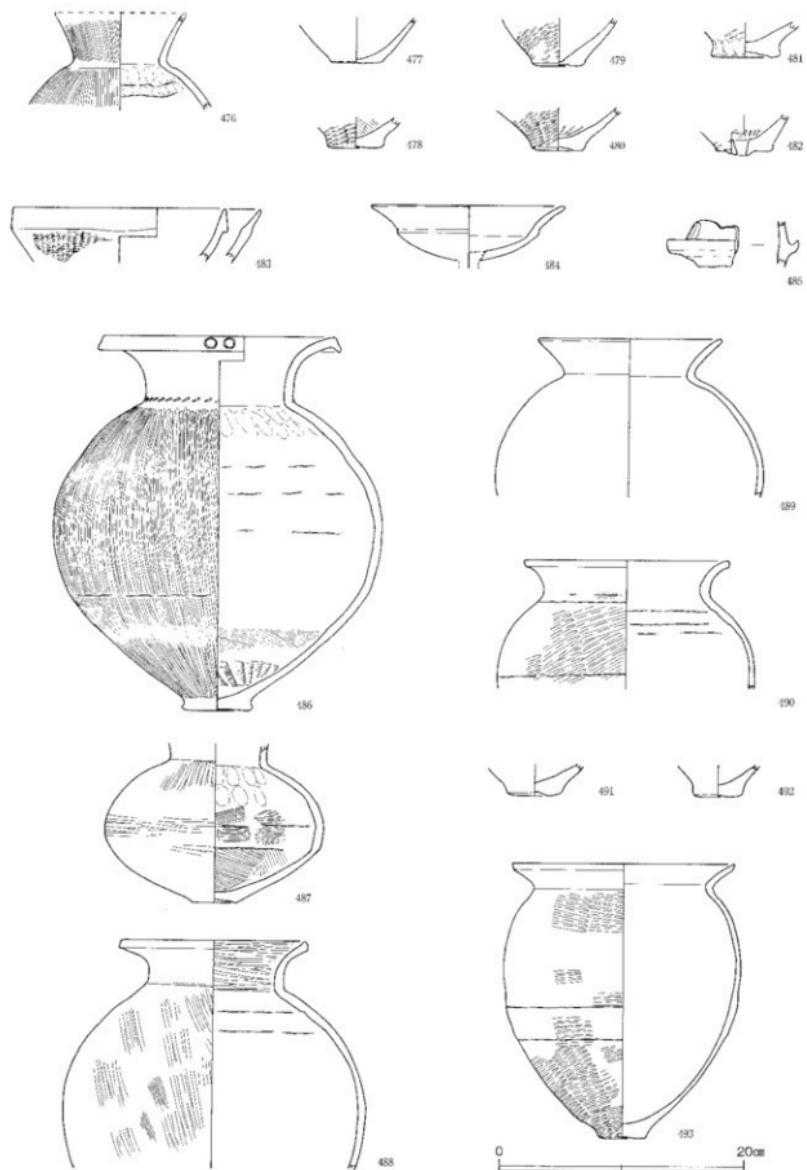


圖28 周清墓10出土土器

不明であるものの、脚部には縦方向のヘラミガキの痕跡が認められる。胎土はやや粗く、焼成は不良であり、色調は内外面ともに赤褐色を呈する。498は高坏脚部片である。脚柱部と脚部の開きはやや鋭角である。脚柱部内面には、細い棒状工具による刺突痕跡が残る。494は二重口縁壺。体部上半と口縁部の一部を欠くほかは、ほぼ完形である。摩滅が著しく、内外面ともに調整は不明である。底部から体部下半にかけて直径12cm程度の黒斑が認められる。胎土は密であるが、2mm程度の石英・長石をやや多く含む。色調はやや淡い赤褐色を呈する。頭部が直線的でない点は古相を示すものと理解できる。

出土点数が少なく詳細は明らかではないものの、494・496の存在から概ね近畿道編年様相3（新）に位置づけられる。

周溝墓12（図29） 出土土器は少なく、図示した2点のほかには、40片ほどの細片が認められるのみである。499・500ともに東側周溝の溝底付近より出土した。ほぼ同一地点からの出土である。

499・500はV様式系壺Aである。499は口縁部から体部最大径にかけて約2分の1の残存率を示す。体部最大径はやや上寄りに位置し、口縁部は緩く外反して外上方に伸びる。口縁端部は丸く収めるが、最終調整時に横方向に引き出しながらナデを施しているため、上・下面ともにやや面取り気味になっている箇所も見受けられる。内面調整は摩滅しており詳細は不明であるが、部分的にハケが認められる。また、頸部内面の稜は部分的に鋭角に屈曲する箇所が存在する。500は底部片。突出する平底である。いずれも胎土は粗く、焼成はやや甘い。2mm程度の石英・長石を多量に含むが、これに加えて500には雲母も認められる。色調は外面が赤褐色から暗褐色、内面が灰白色を呈する。

出土点数が少なく、積極的に時期比定するには至らないが、概ね近畿道編年様相3（新）に位置するものと考えられ、本遺構の帰属時期を示すものと考えられる。

周溝墓14（図29） 墓土は3層に分かれ、501・504が上層、502・503・505が中層、506が下層から出土している。501と504の一部は北周溝から出土したが、そのほかは東側周溝からの出土である。

501・506は加飾広口壺である。501は口縁部の4分の1、506は体部の一部を欠くほかは、ほぼ全周する。いずれも面取りを施す平坦な口縁端部に粘土を貼り付けて上下に拡張しており、拡張部には3～4条1帯の波状紋を施した後、2個1対の竹管円形浮款を貼り付ける。同時に口縁部内面にも同様の工具で2帯の波状紋を巡らしているが、501については摩滅が著しく、拡張部付近にその痕跡を留めるのみであり詳細は不明である。506は急激にすぼまる頸部外面に竹管文を施し、さらに体部上半には6条1帯の櫛描波状紋と直線紋を交互に施した後、再度竹管文を押捺している。頸部から口縁部にかけての屈曲は比較的シャープで口縁部は直線的に伸びる。胎土は501がやや粗く、506は精緻なもの用いている。いずれも石英・長石を多く含み、稀に雲母を含む。焼成は良好で、色調は黄褐色から赤褐色を呈する。502は器台の口縁部片。端部は強い面取りが施された結果、上下ともにやや拡張気味に面を形成し、そこに鋭角的な鋸歯状の波状紋を2条施している。稀に2mm大の長石を含むが、胎土は密で焼成も堅緻である。505は加飾有段器台である。口縁部と坏底部の境界に明瞭な屈曲を有し、口縁部は強く外反して外上方に伸びる。屈曲部から口縁部下半にかけては鋭角な波状紋を1帯施した後、6条1帯の直線紋を施す。脚部は2段に屈曲し、脚柱部と脚部の境界直下に4孔、下段の屈曲部直下に推定4孔の透かし孔を交互に配している。調整は、外面には縦方向のヘラミガキが施され、内面は摩滅のため詳細は明らかでないが、上部には外面同様、ヘラミガキが施されていた可能性が高い。胎土は密で焼成も堅緻である。紋様構成や調整、胎土、焼成等の様相から、502と同一個体である可能性が極めて高いと考えられるが、断定するには至らない。504は大型の二重口縁壺である。胎土中に角閃石を多く含み、生

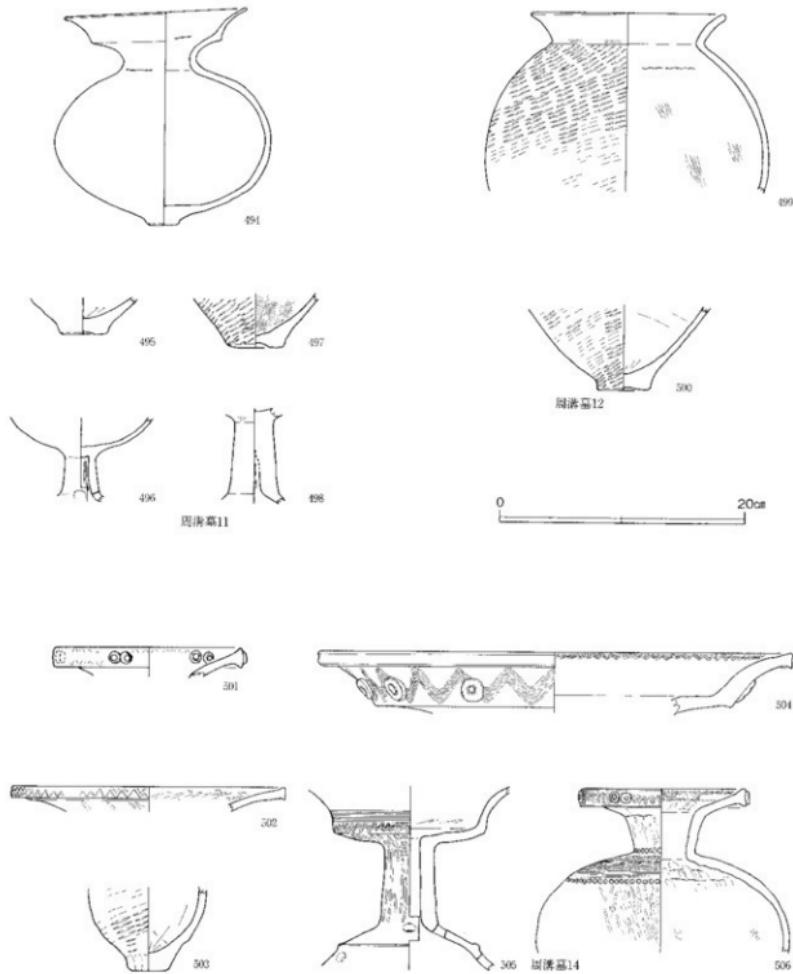


図29 周溝墓11・12・14出土土器

駒山西麓産である。約3分の1程度残存しており、東側と北側周溝の両方から同一個体が出土した。稜部には刻目を施し、2次口縁外側には緩やかで大振りの7条の波状紋を施している。さらに、その上には大振りの竹管円形浮紋が波状紋を基準として均等に配されている。また、口縁部内面には4条1帯の小刻みな波状紋を施す。口縁端部の一部には黒斑が認められる。

503は小型のV様式系壺Aである。内面には、器面に直交する規則的な工具痕のほか、不規則な工具痕が密集している。

下層資料である 506 以外はすべて中層以上の層準より出土しており、積極的な時期比定は困難であるが、本遺構の土器は、概ね近畿造輪年様相 4 に収まるものと考えられる。

周溝墓13（図30・31） その他の周溝墓と比較すると遺物総数は多く、器種も壺を基調としながらも壺・鉢・高杯・手培形土器と豊富である。第V章でも詳述したように、破碎後に廃棄された様子を示している。ここには52点を図示したが、530 の西側周溝を除くすべてが東側周溝底から出土している。

507～513 は壺である。二重口縁壺（509・510）と広口壺（507・508・511～513）の 2 者があり、さらに広口壺は、法量によって小型（507・508）、中型（511）、大型（512・513）に分けられる。507・508 は、ともに外反して伸びる口縁部から、端部を強くナデて外上方に引き出す形状をとっている。511 は底部と体部の約 3 分の 1 を欠く。外面には縦方向のヘラミガキが施され、体部上半には焼成後の穿孔が認められる。胎土は密で、稀に 2 mm 大の石英・長石・チャートが含まれる。焼成は良好で、外面の色調は灰白色、内面は赤褐色を呈している。512 は 513 と頭部から口縁部にかけてのつくりが大きく異なる。胎土は粗く、3 mm 以内の石英・長石・チャートを多く含む。体部外面上半には黒斑が認められる。513 の頭部外面には刻印が施される。胎土は粗く、角閃石が多く含まれる。いずれも焼成は甘く、色調は内外面ともに赤褐色を呈する。二重口縁壺は頭部から 1 次口縁にかけて強く外反して開くもの（509）と、直立気味に立ち上がる頭部から口縁にかけて横方向に引き出すもの（510）の 2 者が認められる。510 は、口縁部外面に粗雑な施描き波状紋を施し、やや大振りの竹管円形浮紋を貼り付ける。頭部付近に 1 条の沈線状の窪みが認められる箇所もあり、貼付突帯の痕跡と考えられるが、欠損のため詳細は不明である。胎土には角閃石・雲母を含み、色調は暗茶褐色を呈する。焼成は良好である。生駒山西麓産の胎土。

514～529 は V 様式系壺 A の口縁部片、530～547 は壺ないしは鉢の底部片である。概して残存率は低く、519 がかろうじて口縁部の約 2 分の 1 を残している程度である。525 を除き、体部外面上には右上がりの太筋のタタキが施される。口縁部形態から、口縁端部を外上方につまみ上げることで段を有して外反するもの（514～521）、やや直線的に延びる口縁から端部外面にナデを施し、端部が外傾気味に収まるもの（522～524・529）、端部を丸く收めるもの（525～528）の 3 者に大きく分けることができる。体部最大径の位置は、いずれも細片が多く、決め手には欠くが残存率が高い 519 や 521 等の大型の一群は、ほぼ中位に収まっているものが多く見られるようである。一方で小型のものについては、比較的上位に位置するものが多く、体部最大径と口径がほぼ近似する傾向にある。頭部内面の棱線は鈍いものが大半を占めるが、516 や 526 のように鋭角的ななつくりを示すものもある。胎土はいずれもやや粗く、内外面ともに赤褐色から暗褐色を呈するものが大半を占めるが、527・528 は色調がその他のものとは大きく異なり、明黄褐色を呈している。この 2 点は口縁部形態や体部内面に明瞭なハケを留めている点等からも、その他の土器とは異なる点が多い。底部は平底のもののほか、ドーナツ底を呈するものの 2 者が認められる。タタキを留めるもののうち、536 は左上がりの太筋のものを施している。

548～550 は直口鉢である。緩く内湾する体部からやや直立気味に立ち上って口縁部へと至り、口縁端部は丸く收めている。底部形態の違いから、底部の縁をつまみ上げて上部底状を呈するもの（548・550）と平底のもの（549）の 2 者に分けられる。胎土は密で焼成も良好であり、器表面は灰白色を呈する。551～553 は有孔鉢である。いずれも胎土はやや粗く、焼成は良好である。ドーナツ底に穿孔するもの（551・552）と平底に穿孔したもの（553）の 2 者がある。551 は外面底部から体部下半および内面のほぼ全域に、553 にも底部外面から体部下半にかけて黒斑が認められる。

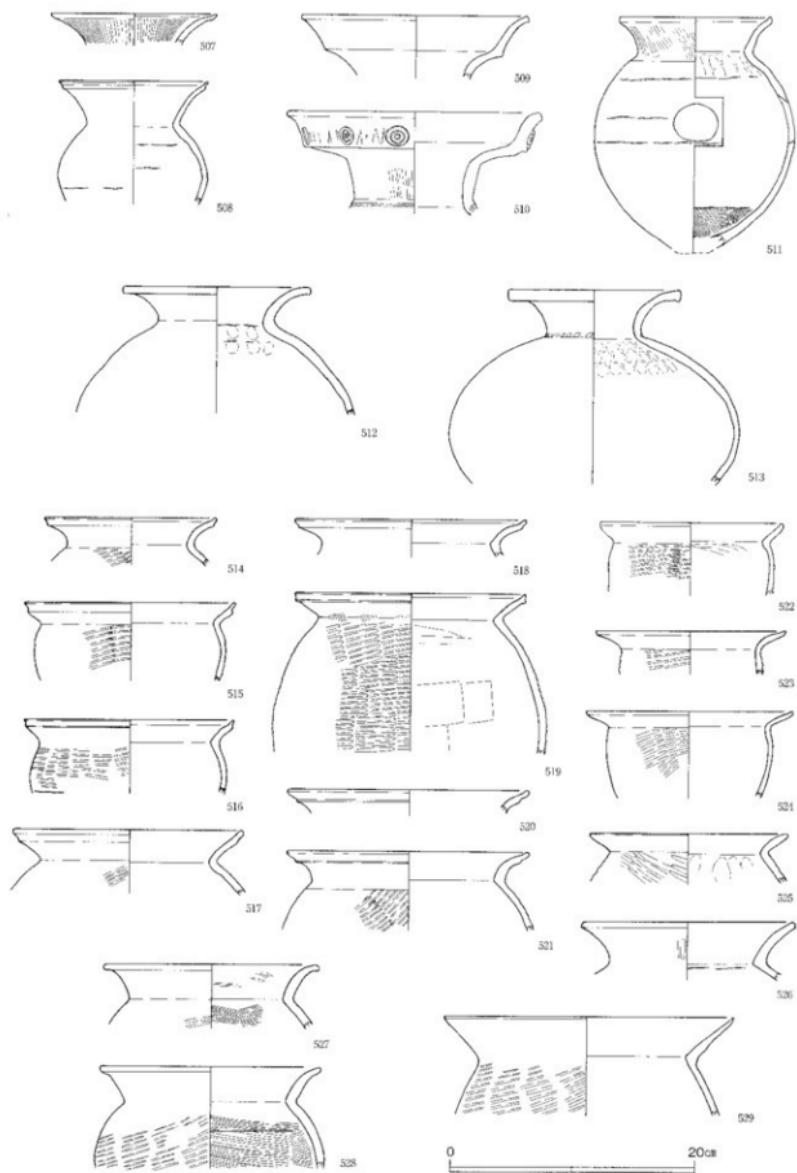


図30 周溝墓13出土土器（1）

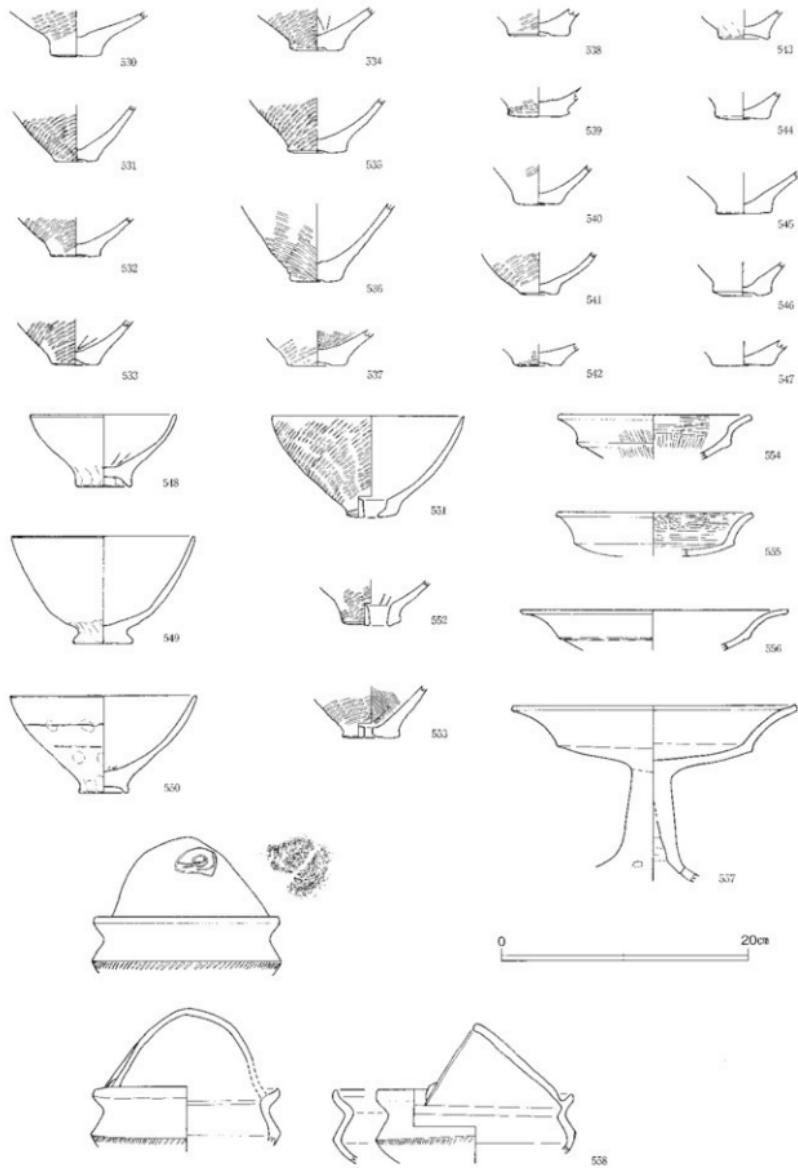


図31 周溝墓13出土土器（2）

高坏(554～557)は、すべて有稜高坏である。小型で口縁部がやや鋭く立ち上るもの(554・555)と大型で口縁部が緩やかに外反して立ち上るもの(556・557)の2者がある。557が脚裾部を欠く以外、大半が残存しているのに対し、ほか3点はすべて細片であるため、口徑の復元等には若干の疑問が残る。殊に556は全体的につくりが粗雑であり、頗る等についても全体的な傾向を正確に掴み得ているかは若干心許ない。坏底部と口縁部を分ける稜部は極めて明瞭であり、大型品については口縁部が良く発達している。概して胎土は粗雑であり、2mmまでの石英・長石を多く含む。焼成は良好で、灰白色を呈している。557は脚柱部と裾部の境界直下に3方向に円形透かしを穿孔する。脚柱部内面には、棒状工具で奥まで突いた痕跡が残るほか、時計回りのケズリが施されている。

558は手焙形土器である。覆部から鉢部上半を残す。やや浅めの鉢部は、体部中半で鋭く屈曲し、外面に櫛齒状工具による列点文が施される。受部は部分的に浅い箇所も見受けられるが、全体的に直立気味に鋭く立ち上げている。覆部の外面上半には、二重円と下弦の円弧が時計回りに幅1mm前後のヘラ状工具によって線刻されている。覆部は大きく2段階に分けて作られている。胎土は密で、角閃石・雲母・右石英・長石を含む。生駒山西麓産の胎土。焼成は良好である。

以上の土器は、近畿道編年様相3(古)に収まるものが大半を占めるが、有稜高坏(556)等の存在を考慮すると同編年様相3(新)にまで下る可能性がある。ただし、上述したように556は細片であるため、年代観の根拠とするにはいさか心許なく、詳細は不明である。

周溝墓16(図32) 出土土器はすべて下層より出土した。出土位置はそれぞれ559～561・566～571が南側周溝、562・563が西側周溝、564・565が東側周溝である。

559～561は広口壺である。559・560は器形・胎土・調整等多くの部分で類似するが、別個体である。最大径を体部中位に持ち、やや直線的に内湾しながら立ち上って頭部へと至る。頭部は直立気味に立ち上がり、緩く内湾する口縁部を経て上面に面を持つ端部へと至る。胎土は粗く、焼成は良好である。561はほぼ完形で、大きく内湾する体部に短く伸びる口縁部を持つ。外面ともに摩滅が著しく、調整等は不明であるが、内面にはかろうじてハケの痕跡が認められる。胎土はやや粗く、2mmまでの石英・長石・チャートを多く含む。焼成はやや甘く、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈する。563は、ほぼ完形の片口付壺である。体部下半から底部を除き摩滅が著しく、調整は不明であるが外面には体部下半同様、縱方向のヘラミガキが施されていたものと考えられる。胎土はやや粗く、焼成は良好である。562は小型の直口鉢である。内外面ともに摩滅が著しく、調整等は不明である。胎土は粗く、2mm以上の石英・長石を多く含む。焼成は甘く、内外面ともに赤褐色を呈する。なお、内面底部から体部上半の一部にかけて黒斑が認められる。

564～568はV様式系甕Aである。566～568は、ほぼ完形である。法量から小型のもの(564～566)と中型のもの(567・568)に分けられるほか、口縁部形態から、端部を面取りして内傾させるものの(565・566)と丸く收めるもの(564・567・568)に分けられる。頭部内面の稜は概して鈍い。体部には、いずれも太筋で右上がりのタタキを施し、最大径はやや中位寄りに位置して球形化を達成しつつある。その一方で、底部については明瞭な平底を呈している。胎土は全体的に粗く、焼成は比較的良好である。色調は、内外面ともに小型のものが赤褐色、中型のものが黄橙から赤褐色を呈する。なお、全個体とともに、体部外面下半には焼が付着している。564は底部及び口縁部の約2分の1を欠く。また、体部最大径付近には、内面から外面に向けて焼成後穿孔を施している。566は分割成形が顕著に認められ、逆円錐台との接合箇所には連続的に同方向のタタキが施されている。

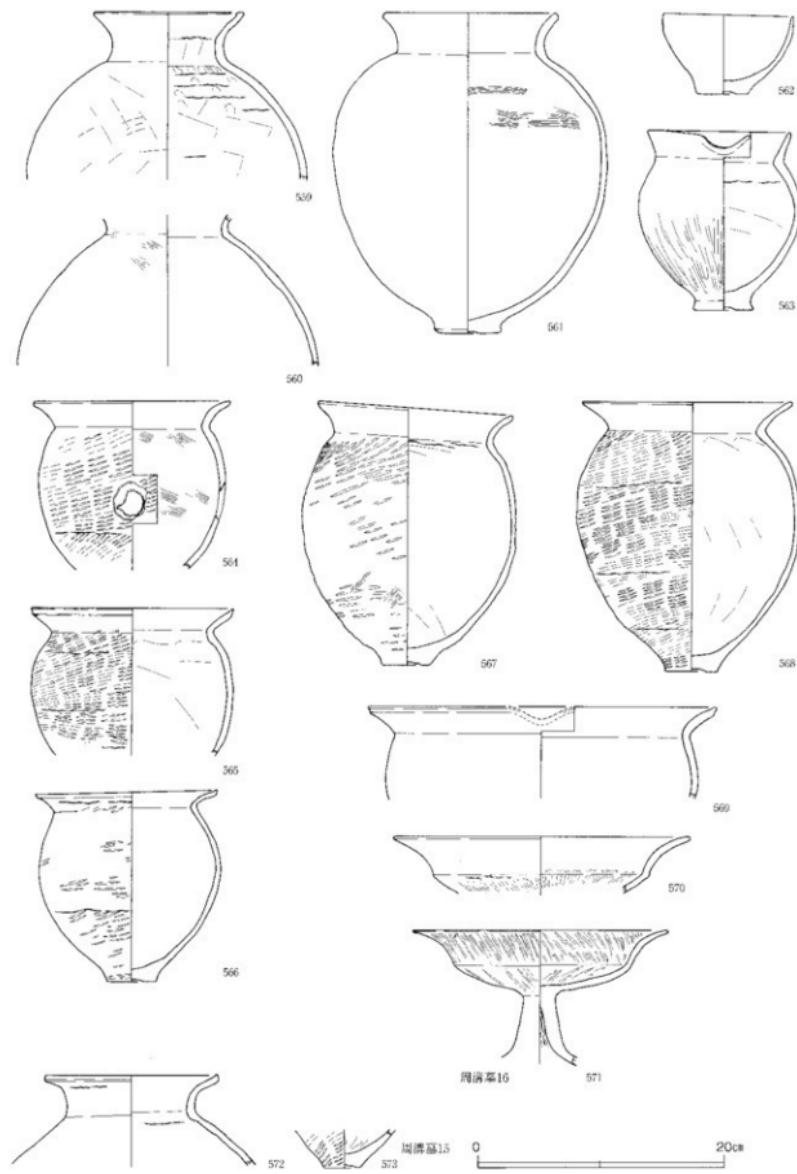


図32 周溝墓15・16出土土器

569は大型の外反口縁片口鉢である。残存率8分の1程度の細片であり、片口部も部分的にしか残存しない。図示しうる程ではないものの、外面には縱方向のヘラミガキの痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。断面の色調は赤褐色を呈するが、器表面は黄灰色を呈する。

570・571は有稜高坏である。570は8分の1以下の細片で口径の復元には若干の疑問が残る。口縁部は外上方に大きく外反して伸び、発達が著しい。稜部のつくりはやや粗雑で、接合痕が明瞭に姿を留める。571は脚部を欠くほか、坏部上半から口縁部にかけて約3分の1を欠く。脚柱頂部に坏部下半を足し、円盤充填によって坏底部を形成している。稜部の屈曲はやや鈍く、口縁部は強く外反する。また、脚部の屈曲はやや鈍く、緩やかに開く。欠損部位に相当するため詳細は不明であるが、屈曲部直下には円形透かしが3孔穿たれていた可能性が高い。調整は内外面ともに反復する縱方向のヘラミガキを施す。いずれも胎土は密で、焼成は良好である。色調は、断面が赤褐色、器表面が黄灰色を呈する。

以上の土器は概ね近畿道編年様相3（古）に位置付けられると考えられる。

周溝墓15（図32） 出土総量も少なく、大半が細片であったため同化可能な土器は極めて少なかった。かろうじて2点を掲げるのみである。いずれも南側周溝より出土した。

572は広口壺である。短く直立気味に立ち上る頸部から短く外反して口縁部へと至る。口縁端部はつまみ上げてナデが施されており、小さな外傾する面を持つ。胎土はやや粗く、2mm前後の石英・長石を多く含む。焼成は甘く、色調は内外面ともに赤褐色を呈する。573はV様式系壺Aの底部片。平底で中央部は不定形な上げ底を呈している。胎土は粗く、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。

点数に乏しく器種も限定されることから、時期比定の決め手を欠くが、前述した559と類似することから近畿道編年様相3（古）に位置づけられる可能性が高い。

周溝墓17（図33） 出土土器は少なく、わずかに6点を同化し得たに過ぎない。574は東側周溝の南よりコーナーから、575は東側周溝、576～579は西側周溝より出土している。

574は広口壺である。やや直線的に外上方に伸びる頸部から直線的に口縁部を引き出している。口縁端部には若干内傾気味の面が形成され、上・下端に微量ながら拡張される。また、端部にはヘラ状工具によって斜行する刻目が施される。さらに端部から口縁部内面の一部にかけて黒斑が認められる。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明である。胎土は粗く、焼成も甘い。色調は外面が赤褐色、内面が灰黄から暗褐色を呈する。575は直口壺の口縁部片である。残存率8分の1以下の細片であり、口径の復元に若干の疑問が残る。胎土はやや粗く、焼成は比較的良好である。内外面ともに赤褐色を呈する。

576は二重口縁壺である。残存率は悪く、8分の1程度である。2次口縁の下半には大振りの櫛状工具を用いて連弧紋を施し、口縁端部内面には波状紋を配するほか、端面には竹管円形浮紋を貼り付ける。胎土にはやや粗く、角閃石を含む。生駒山西麓産の胎土。図示したもの以外に、同一個体と考えられる体部上半から頸部にかけての破片も確認したが、頸部の大半を欠き、接合しなかつたため図示していない。なお、その破片は外傾気味に立ち上がる頸部と体部の境界に上・下端に刻みを施す突帯を貼り付けている。577・578は壺の底部片である。577は上げ底、578は平底である。579は有孔鉢である。底部外周から体部外周にかけて黒斑が認められる。底部の穿孔は内面から外面に向けて施されており、重心を大きく外している。また、底部外周には×字状の縦刻が認められる。

以上の土器は細片が多く時期を比定し難いが、近畿道編年様相3の範疇に収まると考えられる。

周溝墓18（図33） 出土土器は少ないが、581や585等全体の器形を窺うことができる資料を得ることができた。出土位置は580・582～584が西側周溝、581が東周溝から出土している。

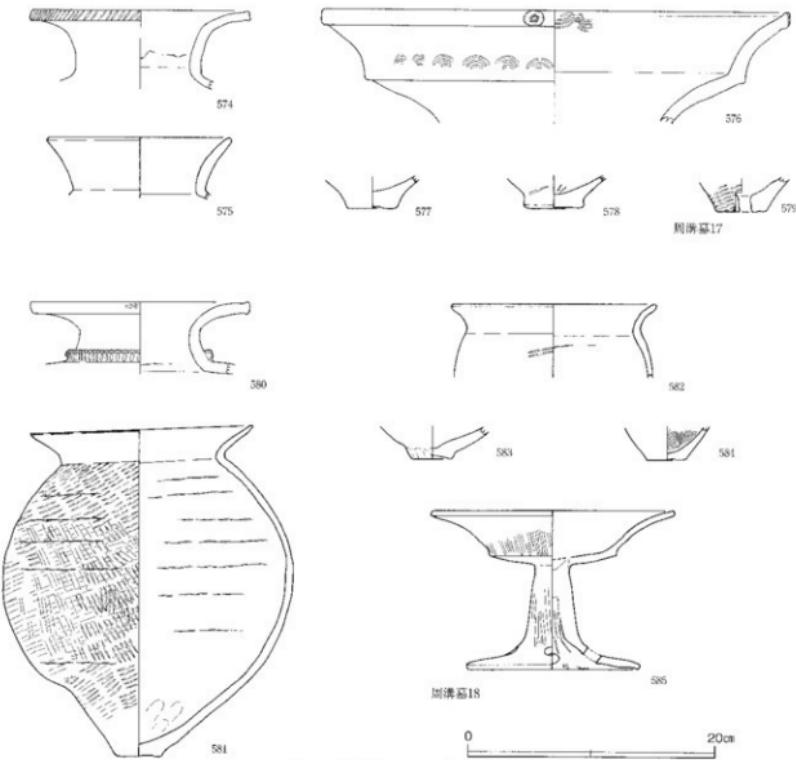


図33 周溝墓17・18出土土器

580は加飾広口壺である。頸部には2段に刻目を施す突帯を貼り付け、やや丸みを帯びて肩を形成する端部には波状紋が施される。全体的に摩滅が著しく、調整等は不明である。胎土は粗く、角閃石を含む。生駒山西麓産の胎土と思われる。焼成は甘く、外表面がやや淡い赤褐色、内面が暗褐色を呈する。

581・582はV様式系壺Aである。581は体部と口縁部の一部を欠く。体部最大径を中位に有し、底径の縮小が顕著である。分割成型で、逆円錐台の一部が焼け落む。体部上半には、粘土接合痕が顕著に認められる。体部内面の調整は摩滅が著しいが、上半部を主として板状工具によるナデが施されていた可能性が高い。体部下半及び上半にそれぞれ黒斑が認められる。頭部内面の稜は鈍い。583は壺、584は鉢の底部片である。585は有棱高壺である。口縁部及び脚部を2分の1程度欠くが、残存率は高い。壺底部は直線的に横方向に伸びる。緩く外反する口縁部は発達が著しく、壺部径の約2倍となる。稜部は明瞭で、外面には段を作り出す。壺底部は、充填すべき円盤が剥離し、脚柱頂部の窪みが露出している。脚部と脚部の屈曲は外面ではそれほど顕著ではないが、内面の屈曲は鋭角的である。

以上の土器は、585の有棱高壺や581の壺を根拠に近畿造編年様相4（古）に相当する一群と位置づけることができる。

周溝墓19（図34） 出上土器は少なく、図示可能な土器も5点のみであった。出土地点は西・南側周溝に限定され、586・587が南側周溝、590が西側周溝から出土している。

586・587はV様式系甕Aである。587は、体部下半を欠くほかはほぼ全周する。口縁端部をつまみ上げており、外面には内傾する面を形成する。いずれも胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は灰白色ないし黄灰色を呈する。588は有孔鉢である。明瞭な平底を呈し、外面には右肩上がりのタタキが施される。底部の穿孔は二重の円弧が重複するように施されている。摩滅が著しいが、焼成は良好である。589・590は高环の脚部片である。环部及び脚裾部を欠くため、詳細は不明であるが、589は脚部の長さと屈曲から椀形高环、590は环底部の様相から、有稜高环と考えられる。脚部の屈曲はいずれも鈍い。両者ともに胎土はやや粗く、2~3mmの石英・長石を含む。焼成は良好である。

以上の土器は概ね近畿道編年様相3の範疇に収まると考えることができる。

周溝墓20（図34） 周溝埋土は上・中・下の3層に大別され、各層より比較的多くの土器が出土した。ただし、いずれも細片が主体を占める。出土層準別に述べると591~598が上層、599~602は中層、603・604は下層からの出土土器である。出土地点は、593~595・603・604が北側周溝、591・592・596~602が南側周溝から出土している。なお、599は中層と上層の破片および南周溝と西周溝の破片が接合している。

591は須恵器坏身である。残存率8分の1程度の細片であり、口径の復元には若干の疑問が残る。焼成は甘く、摩滅が著しい。TK43型式に位置づけられ、6世紀後葉の所産と考えられる。

592~595・603・604は広口壺で、口縁端部及び肩部に加飾するもの（592~594・603）と無飾のもの（595）がある。592は外反気味に立ち上がる頭部から横に口縁部を引き出し、口縁端部を上下に拡張して幅広の面を作り出す。拡張部には上段に6条1帯の鋸角的な波状紋を、下段には緩やかな波状紋を施した後、2個1対の竹管円形浮紋を等間隔に貼り付ける。593は、胎土中に角閃石を含む生駒山西麓産の胎土。口縁端部に竹管円形浮紋を貼り付ける。595は内面に横方向のヘラミガキ、頸部付近に縱方向のヘラミガキの痕跡が認められる。胎土はやや粗く、2mm程度の石英・長石・チャートを少量含む。603は、やや内傾する口縁端部に5条1帯の波状紋を施し、体部上半には同様の工具で近接する2帯の波状紋を施す。胎土は粗く、頸部と体部で異なる胎土を用いている。604は体部の約3分の2を欠く。大きく取り出した体部に、小振りな平底が付く。

596・597は有孔鉢である。胎土は粗雑で焼成も甘い。色調は596が灰白色、597が赤褐色を呈する。

598・601・602は高环脚部片、600は椀形高环である。脚部はいずれも短く、椀形高环の脚部片とを考えられる。胎土は、600が密であるほかはいずれも粗く、焼成も甘い。

599は二重口縁壺である。口縁端部及び体部下半を欠き、全容は窺い知れない。口縁部は直線的に斜外方に伸びる。胎土は密で、焼成も良好。摩滅が著しく、調整等は不明である。色調は赤褐色を呈する。

以上の土器は、599のような二重口縁壺の存在もあることから、近畿道編年様相3（新）から様相4（新）までの時間幅を有するようである。第V章でも詳述したように、周溝内埋土の堆積速度が緩やかであったことを反映したものと考えられる。

一方、下層から出土した土器は少なく、周溝墓築造当初の時期を比定するには若干心許無いが、603のような加飾広口壺の存在から、近畿道編年様相3（新）から様相4（古）までには埋没が始まっていたものとみることができ、以後591の須恵器坏身に代表される6世紀後葉にかけて埋没していたものと考えることができる。

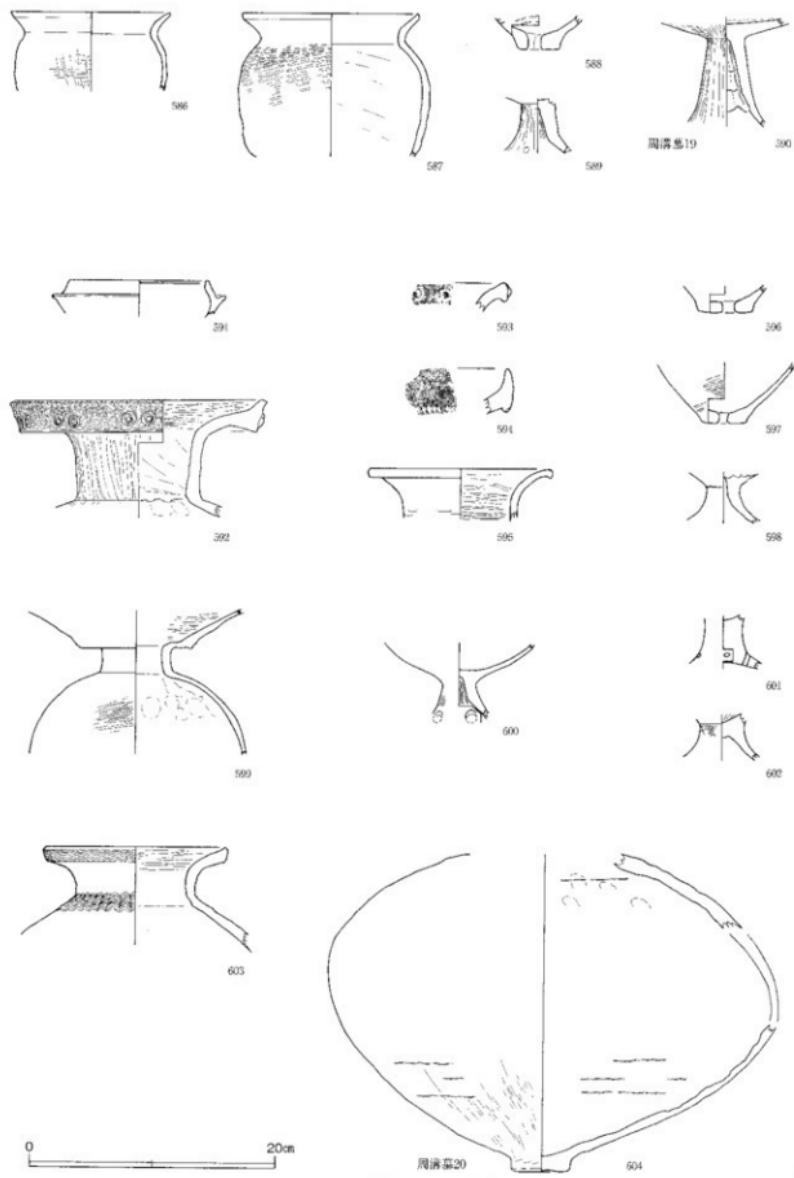


图34 周溝墓19·20出土土器

周溝墓21（図35） 土器は豐富に認められた。埋土は、上・中・下の大別3層に明瞭に区分され、605～608が上層、609～612が中層、613～619が下層からそれぞれ出土している。東西南北すべての周溝に土器が認められ、614・617～619が東側周溝、608・609・612・615が西側周溝、610・611・613が南側周溝、605～607・616が北側周溝から出土している。

609は布留型壺である。口縁部は直線的に外上方に伸び、口縁端部は肥厚する。端部の面は鈍く、内傾する。外面調整は、体部下半から中半にかけて縦ハケ及び斜めハケを施し、肩部には横ハケが顕著に認められる。底部から体部下半の内面は指オサエが顕著で、体部内面には横方向のヘラケズリが顕著に認められる。近畿道編年様相7の所産と考えられる。

608・610は二重口縁壺である。608は、細片のため詳細は不明であるが、おそらく610と同一の個体と考えられる。610は、口縁部外面に4条1帯とする鋭角な波状紋を2帯施し、1次口縁と2次口縁の境界の稜部には刻目を施している。612は口縁部を欠くため、全容は明らかでないが、頸部から口縁部にかけての屈曲は二重口縁のそれに類似している。底部から体部下半の一部と体部上半から頸部にかけて残存するが、それぞれ約2分の1程度欠損する。体部は下半寄りに最大径を持つ重つな形状を示し、外面には右上がりの太筋タタキが施されるなど、その他の二重口縁壺と比較して特徴的である。

614は広口壺である。頸部でやや強く屈曲して、強く外反して口縁部へと至る。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は外面が赤褐色、内面が灰黄褐色を呈する。

606・615・616はV様式系壺Aである。606は明瞭な平底の底部に木葉痕が認められ、体部外面に黒斑が認められる。616は小振りの底部から体部下半にかけて直線的に伸びる。体部下半には煤が付着する。615は口縁部から体部上半の一部を欠くほかは、ほぼ完形である。体部下半には、丁寧なナデ及び同一方向のタタキが施されるが、分割成形の痕跡が認められる。口縁部は短く外反して伸び、頸部内面の屈曲は鈍い。体部の最大径は上半に位置するが、全体的に球形化が進んでいる。体部外面下半は黒化している。また、体部内面には板ナデ状の痕跡がわずかに認められるが、詳細は不明である。

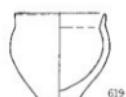
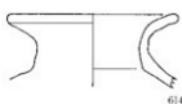
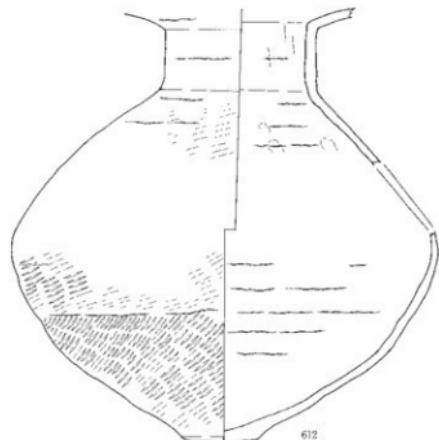
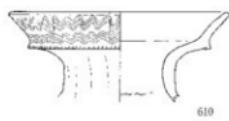
607是有孔鉢の底部片である。607・617ともに、平底を指向するものの、著しく縮小した結果として、やや尖底気味の形状を示す。607は底部から体部にかけて黒斑が認められる。

619は小型壺である。体部から口縁部にかけて、約2分の1を欠く。底部から体部下半にかけては、黒斑が認められる。胎土は粗く、焼成は良好である。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明。

611は中実の高杯脚部片である。杯部を欠き、全体の形状は窺えないが、脚部の屈曲は鋭角的である。屈曲部直下には3方向の円形透かしを穿っている。

605・613は混入資料である。本来は下位造構面に帰属するものと考えられる。605は壺の体部片である。器表面の状態等からおそらく体部上半付近の破片と考えられるが、詳細は不明である。外面には、図示したように5本の斜行する線刻が並行して施されており、記号文土器の一部であることがわかる。線刻の原体は、幅1.5mmと比較的大振りであり、後述する第3面出土土器の線刻絵画土器と類似している。613は大型器台の口縁部片である。胎土は密で、焼成は良好である。上下に拡張した端部に4条1帯の密な波状紋を施している。内外面ともに精緻な縦方向のヘラミガキが施される。いずれも細片であり、詳細は不明であるが、近畿道編年様相1（新）の所産と考えられる。

以上の土器は混入資料を除けば、近畿道編年様相3（新）から様相7までの時期幅を有している。二重口縁壺については様相4（古）前後に収まるほか、有孔鉢の底部が著しい縮小を示す点等を根拠に様相4（古）に周溝墓の造営時期を求めて良いかもしれない。



0 20cm

図35 周清墓21出土土器

周溝墓22（図36・37） ほかの周溝墓と比較して、土器の出土量が多い。器種も壺・甕・鉢・高杯・器台・手培形土器と豊富である。埋土は大きく上・中・下の3層に分けられ、620・624・629・630が上層、621～623・625～628・631・632が中層、633～641が下層より出土している。出土位置については、周溝の形状がやや丸みを帯びているため、明確に弁別し難いが、620・624・630・632・634が東側周溝、621・623・626・627～629・632が南東隅、633が南側周溝、625・636が西側周溝から出土している。

620は布留型甕である。口縁部はやや内湾気味に外方に伸びる。口縁端部は肥厚し、内傾する面を形成する。外面調整は継ハケ及び斜めハケを施し、肩部には中部瀬戸内の影響とされる刻目が3箇所に施される。体部内面には上半に指頭圧痕が明瞭に残り、中半以下には右下がりの斜め方向のヘラケズリが顕著に認められる。体部上半と下半にそれぞれ黒斑が認められる。近畿道編年様相6（新）の所産と考えられ、上層の堆積時期を示す可能性が高い。

甕は直口壺（624）、二重口縁壺（629・630）、広口壺（633・636・640）、細頸壺（637・638）がある。体部に焼成後穿孔を施す例が多いのが特徴的である。

624は口縁部に擬凹線を施す。629は、端部が短くつまみ上げられ外傾する。2次口縁は強く屈曲して平坦面を形成し、波状紋を施した後に小振りの竹管円形浮紋を貼り付けている。平坦面の摩滅・剥離が著しいため、波状紋は屈曲部にかろうじてその痕跡を留めているに過ぎない。630の体部は体部上半に5ないし6条1帶の波状紋と直線紋を交互に施している。体部中位には、焼成後に5mm前後の正円に近い小孔を穿孔している。633はほぼ完形である。二重口縁壺の可能性もあるが、頸部の屈曲が鈍く、口縁部の拡張が下方にも強く及んでいることから、広口壺の垂下口縁を持つものと考えた。口縁端部外面には6条1帶の鋸歯状を呈する波状紋を施し、頸部には器面に直交する刻目を等間隔に施している。底部はやや小振りの上げ底状を呈する。底部から体部下半の一部にかけて直径8cm前後の黒斑が認められる。636は広口壺である。頸部から口縁部にかけて強く外反し、端部はやや面取り気味に認められている。640は、口縁部を欠くほかは完存する。小振りの底部から無花果形の体部を経て、細く締まった頸部へと至る。頸部はやや直立気味に立ち上がる。また、体部最大径付近に2cm前後の焼成後穿孔を外から内へ向けて施している。胎土はやや粗く、色調は赤褐色を呈し、ほかの土器とは異なる印象を受ける。なお、この胎土は後述する632の器台と類似している。637・638は、小型壺である。作りは粗く、焼成も甘い。637は、肩部に長径1cm前後の焼成後穿孔が施され、638は体部中半から下半にかけて大振りの焼成後穿孔を施す。以上の壺は640を除き、いずれも胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈するものが多い。

甕（621・622・625・631・634・635・639）はすべてV様式系甕Aである。器高17cm前後の小型品（621・634・635・639）と、22cm前後の中型品（622・625・631）の2者がある。いずれも体部外面に太筋のタタキを施す。口縁部形態は、短くつまみ上げて口縁端部外面に内傾する平坦面を持つもの（621・625・634・639）、丸く取めるもの（622・632）の2者に分けられる。頸部の屈曲はいずれも鈍い。体部最大径の位置は、上半よりのもの（621・625）、ほぼ中位にくるもの（622・631・634・635・639）の2者に分けられ、体部最大径に対して頸部はやや聞き気味の様相を示す。また、全体的に球形化が顕著である。底部は、いずれも平底、上げ底、ドーナツ底の各種があるが、底径の縮小が著しく、中でも635・639にその傾向が強い。631の底部には、木葉痕のほか、数条の条線が認められる。全容が窺える資料に関しては、体部下半の接合痕跡が明瞭に認められ、分割成形に拘っていることが分

かる。逆円錐台との接合部については、全個体ともに外面タタキ調整の向きを違えて施す。626は上げ底の甕ないしは鉢である。いずれも胎土は粗く、3mm前後の石英・長石・チャートを多く含む。焼成は比較的良好で、色調は赤褐色を呈するもの、褐色を呈するもの、灰白色を呈するものがある。

鉢は直口鉢(623)と有孔鉢(627)がある。623は外面にわずかにタタキの痕跡を留めるが、形状は整っている。内面にはクモの巣状ハケ目の痕跡が認められる。色調は灰白色を呈し、底部から体部にかけて黒斑が認められる。627は明瞭な平底に焼成前の穿孔を穿つ。胎土は粗く、焼成もやや甘い。色調は赤褐色を呈し、底盤から体部にかけて黒斑が認められる。

高坏(628)は、口縁部の大半を欠くほか、脚部が欠損する。坏底部は緩く内湾し、大きく外反する口縁部を有する。坏部と脚部の欠損箇所は接合面で剥離しており、剥離面は坏部に向かって突状を呈している。胎土はやや粗く、2mm前後の石英・長石を多く含む。焼成は良好で、黄褐～灰白色を呈する。

632は器台である。口縁部と脚部の一部を欠く。器高の約7割を占める直線的で大振りの脚部から、鋭く屈曲して二重に外反して口縁部へと至る特異な形状を示す。口縁部外面には擬円線が施され、脚部

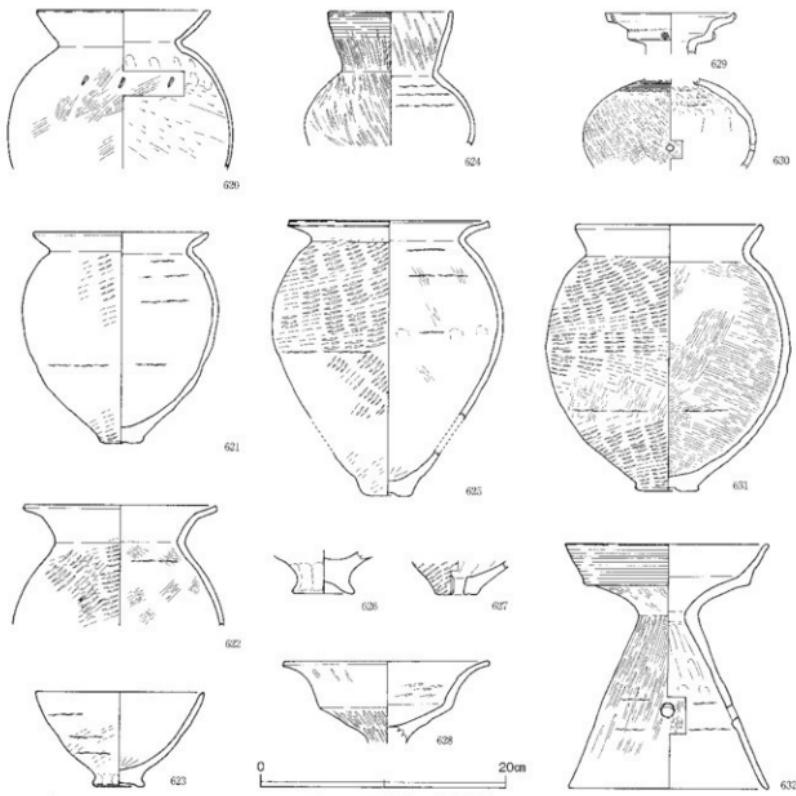


図36 周清墓22出土土器

中位には4方向に円形の透かし孔を穿つ。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は断面が赤褐色、器表面が灰白色を呈する。所謂「淡路型器台」と呼称されるものであり、胎土の様相もその他のものとは異なることから、搬入品と見られる。

641は手焙形土器である。体部及び覆部の一部をわずかに欠くほかは、ほぼ完形である。やや深めの鉢部は、体部最大径をやや上寄りの位置に有し、下位にわずかな突帯を巡らす。受部はやや縮小気味であり、短く立ち上がる。体部外面には、縦方向のヘラミガキが施される。覆部は外面を縦方向のハケで

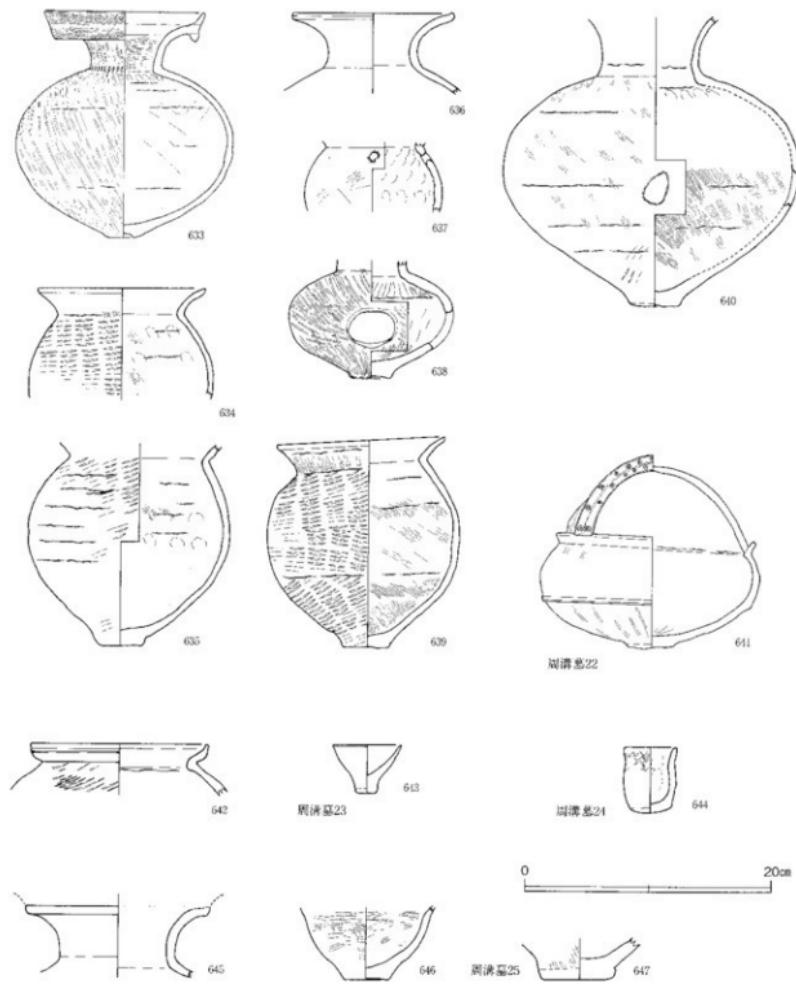


図37 周溝墓22～25出土土器

調整し、内面にはナデを施す。端部には粘土を付加し、下方に垂下させて平坦面を作り出す。また、端面を2分割して波状紋を施した後、竹管紋を上下段で位置を逆えて施している。なお、波状紋は部分的にその痕跡が認められる程度である。覆部外面の背面には、直径8cm前後の黒斑が認められる。胎土はやや密で、焼成は良好。色調は断面赤褐色、外面灰白色を呈する。

以上の土器は、手焙形土器(641)がやや古相を示すが、その他の下層出土土器の傾向から、近畿道編年様相4段階に帰属するものと考えることができ、上層出土の620の布留型壺に示される様相6(新)段階にかけて、埋没が進行した状況を想定することができる。

周溝墓23(図37) 出土土器は細片を中心に約150片出土しているが、図示可能なものは極めて少なく、かろうじて2点を数えるに過ぎない。642は、北側周溝埋土下層から出土したV様式系壺Aで、残存率8分の1以下の細片である。肩部まで太筋のタタキが施され、短く屈曲して端部は上方につまみ上げる。端部の立ち上がり下縁に1条の沈線状の隈みが認められるが、残存部位が少なく、詳細は不明である。胎土はやや粗く、焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。口縁部が短く、受口状を呈する点は大きく異なる点であり、近江ないし山城地域などの他地域系のものである可能性が高い。643はミニチュア鉢である。口縁部の一部を欠くほかは、ほぼ完形である。胎土は精緻で焼成も良好である。

以上の土器は細片であることから帰属時期を明確にはし難いが、642を根拠にすれば近畿道編年様相4に位置づけられると考えられる。

周溝墓24(図37) 出土土器は細片を中心に約40片出土しているが、図示可能なものはほとんど認められない。644は、北側周溝の下層より出土したミニチュア鉢である。口縁部を2分の1程度欠く。手捏ね成形されており、器壁も厚く、作りは粗雑である。緩く外反する口縁部には、鋸齒状を呈する4条1帯の波状紋を2帯施している。波状紋の下に部分的に直線紋が認められる箇所もあるが、摩滅しており、詳細は不明である。胎土は密で、焼成はやや甘い。色調は灰白色を呈する。

点数が少なく、図示し得たものもミニチュア土器であるため、詳細な時期比定は困難である。

周溝墓25(図37) 出土土器は細片が多く、図示可能なものは極めて少ない。図化し得た3点は、いずれも陸橋部西側の南側周溝より出土しており、645・647が埋土上層、646が埋土下層から出土している。645は二重口縁壺である。8分の1程度の細片であり、口径の復元に若干の疑問が残る。摩滅が著しいため、調整は不明。646は外反口縁鉢である。口縁部を欠き、全容は窺い知れないが、緩く外方へ開く口縁部を持つものと考えられる。底部は上げ底を呈する。調整は、体部内外面にはストロークの短い横方向のヘラミガキが密に施される。作りは全体的に丁寧で、胎土は密なものを用い、焼成も良好である。647は壺底部である。

以上の土器は、器種も限定されるため詳細は不明である。しかし、646の鉢が上げ底を呈し、体部に横方向のヘラミガキを施すことから、近畿道編年様相4(古)に位置づけることができよう。

周溝墓26(図38・39) 第V章で詳述したように、遺構規模を反映するように多くの土器が認められ、かつ、個々の土器が示す帰属時期も長期にわたっている。

埋土は上層・下層・最下層の3層に大別され、648～653・655～659が埋土上層、660～667が埋土下層、668～676が埋土最下層よりそれぞれ出土した。なお、653・654・659については、周溝の内側に当たる墳丘部より出土している。また出土位置については、649・650・668・675が東側周溝、676・670が西側周溝、651・652・660・663～667・671～673が南側周溝、648・655～658・661・669・674が北側周溝より出土している。西側を除く周溝で概ね同量程度の土器が認めら

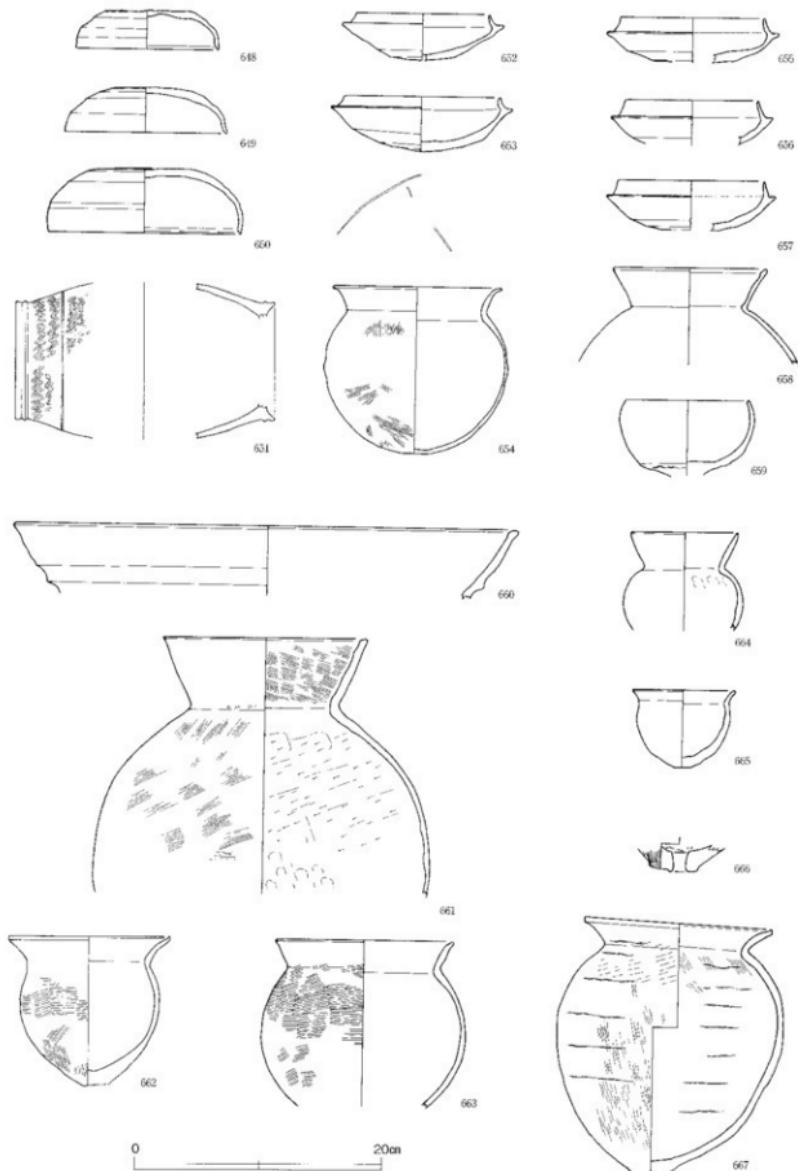


图38 周满墓26出土土器（1）

れるが、上層土器が東側ないし北側に集中することは注目できる。

上層資料としては12点を掲げた。須恵器及び土師器が出土している。

648～653・655～657は須恵器で、壺蓋・壺身・樽形甌がある。壺蓋(648～650)は口径11.6～15.4cmを測る。648はほぼ完形で、天井部は難なヘラ切りで火拂のような変色がみられる。650は天井部と口縁部の境が凹線で分けられる。648がTK209型式、649がTK43型式、650がTK10型式に位置づけられる。壺身(652・653・655～657)は、口径10.8～12.6cmを測る。652は底部が尖り立ち上がりが短い。653は完形で底部にヘラ記号がみられる。657は焼成が悪く色調はにぶい黄橙色を呈する。652がTK209型式、ほかはTK43型式に位置づけられる。651は樽形甌である。残存率は悪く、図化

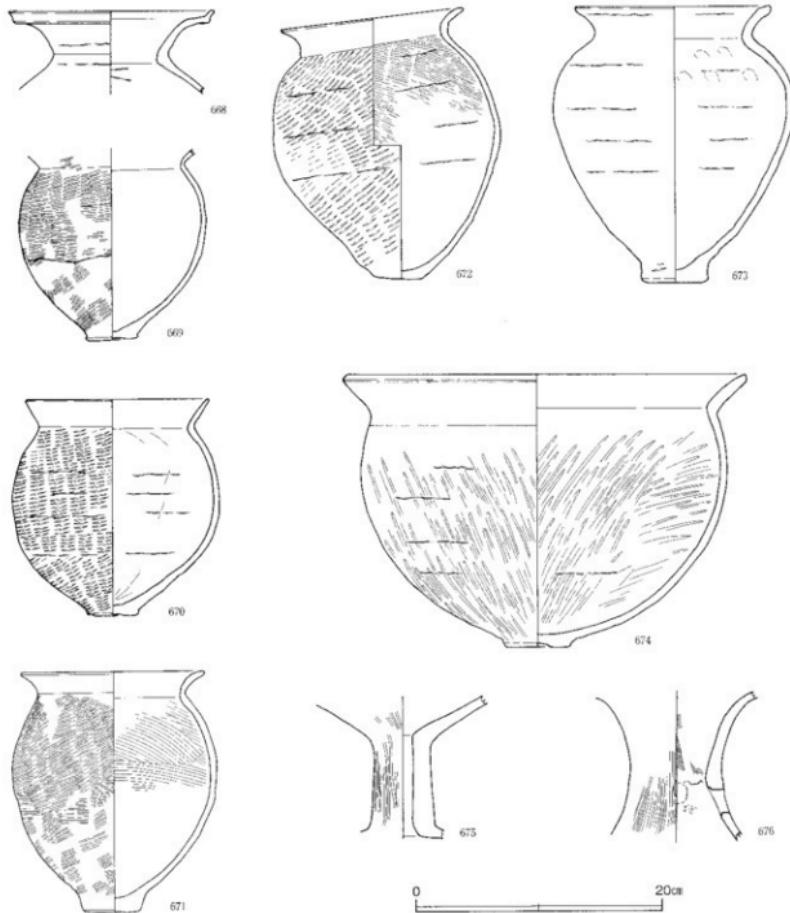


図39 周溝墓26出土土器（2）

できた範囲で約4分の1を留めるに過ぎない。外面には波状紋と1条の沈線を巡らす。波状紋は沈線を境に外側を2段に分けて施すほか、内側は間隙を空けずに連続して複数回施す。焼成は良好で、断面の色調が赤褐色を呈する。TK 208型式に位置づけられる。

654・658・659は土師器である。壺(654)は約3分の1が残存する。球形の体部には、外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。659は楕円高坏で、脚部を欠く。脚部と坏部は分割して作られており、接合面で剥離している。いずれも胎土は精良で、色調は橙色を呈する。辻編年5～6段階に該当し、6世紀後葉の所産と考えられる。658は布留型壺である。直線的に外上方へ立ち上がる口縁部を有し、口縁端部は肥厚して内面に内傾する面を持つ。摩滅が著しく、調整は不明瞭であるが、肩部にわずかな斜方向のハケが認められる。近畿道編年様相7の所産と考えられる。

下層資料としては8点を掲げた。660は大型の鉢ないしは壺の口縁部片である。形態から山陰系の可能性もあるが、詳細は不明。胎土は粗く、焼成は甘い。灰白色を呈する。661は直口壺である。口縁部は肥厚し、緩やかではば半坦な面を形成する。胎土は粗く、焼成はやや甘い。664は小型壺である。内外面ともに摩滅が著しい。

662・663・667はV様式系壺Aである。法量から小型のもの(662)と中型のもの(663・667)に2分される。体部の最大径は中位に位置し、球形化しているほか、底径の縮小も進行している。外面には太筋のタタキを施すが、667は例外的に体部下半にタタキを施した後にハケを施している。

665は外反口縁鉢、666は有孔鉢である。665の底部は、かろうじて平底を保ってはいるものの、縮小が著しく、0.8cm程度のわずかな平坦面となっているに過ぎない。内外面ともに丁寧にナデ調整が施される。胎土は密で、焼成は良好である。色調は、外面が暗褐色、内面が黄灰色を呈する。

660・661・664は近畿道編年様相8に、662・663・665・666・667は、近畿道編年様相4前後に該当すると考えられる。

最下層資料としては9点を掲げた。668は広口壺である。頸部から鋭く屈曲して口縁部へと至り、短くつまみ上げて口縁端部を上方に拡張している。胎土はやや粗く、3mm程度の石英・長石・チャートを多く含む。焼成は良好で、色調は黄灰色を呈する。

669～673はV様式系壺Aである。器高の差異は漸移的で、明瞭に区分できないため、ここでは中型のものとして一括する。いずれも明瞭な平底を呈する。669・670は、分割成形が明瞭に認められるほか、頸部が開き気味で、体部最大径も中位に位置しており、球形化が進行している。一方、671～673は、体部最大径が上位に位置するほか、頸部も縮まっている。このほか、胎土がやや粗く、焼成もやや甘いもの(669～672)、胎土が密で焼成もやや甘いもの(673)の2者に分けられる。

674は大型の外反口縁鉢である。底部は突出するドーナツ底である。体部の内外面には、幅の広いヘラミガキを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

675・676は器台である。675は筒形の器台で、口縁部及び裾部を欠く。676は推定5方向の円形透かしを施す。外面には帽の広いヘラミガキを密に施す。

これらの下層出土土器は、近畿道編年様相3(新)に位置づけられるものと考えられる。

以上のように、本遺構の土器は、埋土上層には大きく近畿道編年様相7・5世紀中葉・6世紀前葉・6世紀末葉の4時期、埋土下層には近畿道編年様相4・様相8の2時期、埋土最下層は近畿道編年様相3(新)と、複数時期にまたがるもののが含まれている。上層と下層の間に時期の重複が認められるのは、上層とした埋土の堆積速度が遅いことを反映しているものと考えられ、それぞれの層準と土器の関係は

概ね整合的であると言える。

周溝墓27（図40） 出土総量は多く、北側周溝の東側を中心に多くの土器が破碎されたような状態で出土した。器種は壺・鉢に限定されている。

677～678・682・684はV様式系壺A、683はV様式系壺Bである。法量から器高15cm前後の小型のもの(677・678)と25cm前後の中型のもの(682)、35cm以上の大型のもの(683・684)の3者に分けられる。また、口縁部形態からも端部を短くつまみ上げて、外面に内傾する面を作り出すもの(677・678)、端部外面に強い横ナデを施し段を作り出すもの(682)、受口状を呈するもの(683・684)の3者に分けられる。胎土はやや粗く、焼成が良好で、色調が赤褐色を呈するもの(677・678・682)と、胎土が密で焼成がやや甘く、灰白色を呈するもの(683・684)の2者がある。677・678・682は、体部の球形化が著しい。いずれも頸部内部の稜は鈍い。683は、体部外面にハケを施している点等からも北近畿系ない

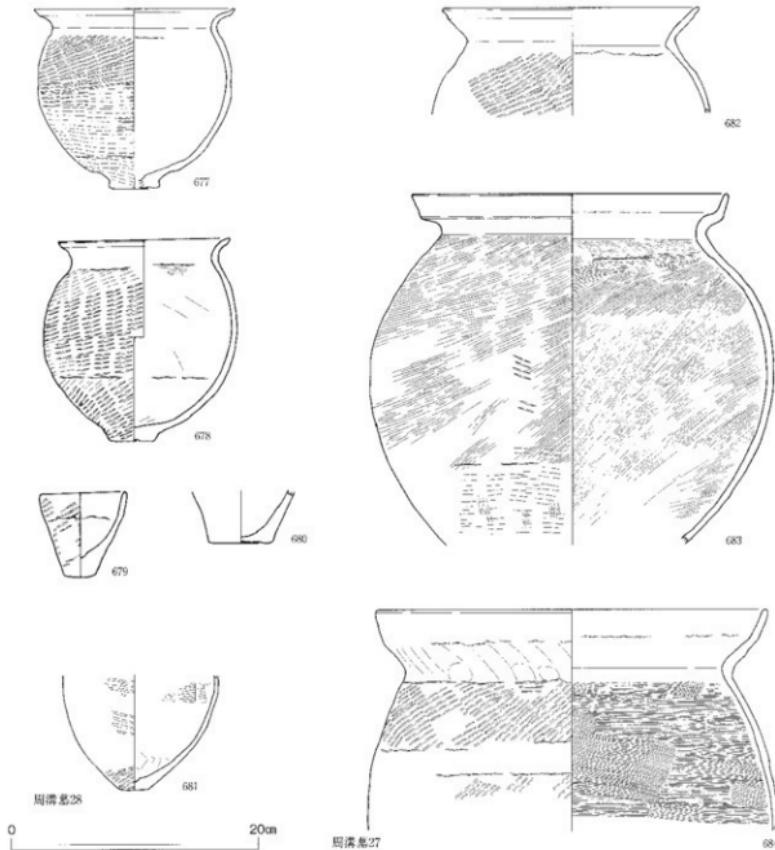


図40 周溝墓27・28出土土器

しは山城系のものと考えられる。また、684についても、受口状の口縁部がやや鈍いが、同様のものと考へて良いであろう。

679はミニチュアの鉢、680は鉢ないし壺の底部片である。679はほぼ完形である。外面に太筋のタキを施し、接合痕を残す。外面はタキによって、7つの面を形成している。内面は粗いナデを施す。680は摩滅が著しく、調整等は不明である。混入資料の可能性もあるが、詳細は不明。

以上の土器は、器種が限定されるため詳細は明らかでないものの、壺の体部球形化が著しい点を積極的に評価すれば、近畿造編年様相4（古）に位置づけることが可能である。

周溝墓28（図40）出土土器は少なく、細片を中心に約50片が認められたが、図示し得たのは1点のみである。681は、北側周溝埋土より出土したV様式系壺Aである。体部上半以上を欠くため、詳細は明らかでない。底径の縮小は著しく、底部から体部にかけて直線的に仕上げられている。分割成形されており、逆円錐台との接合部には、ナデが施されている。底部内面には、棒状工具の痕跡が放射状に認められる。胎土はやや粗く、焼成もやや甘い。時期比定は困難であり、詳細は不明である。

周溝墓29（図41～44）出土土器はその他の周溝墓と比較して、質・量ともに極めて豊富であり、かつ、残存率の高いものが多いことも特徴である。器種には壺・甕・鉢・高杯がある。出土地点及び出土層準は、第V章で述べたように主に東側周溝及び北側周溝より出土しており、688を除いて大半が20cm前後溝底から浮いた状態で出土している。なお、詳細な出土位置は、第1分冊図76に示している。

685は、小型壺である。体部はタキを施した後、ナデによって仕上げられている。口縁部は短く伸びて端部をつまみ上げる。底部はやや小振りで、不整な上げ底を呈している。体部中半には、黒斑が認められる。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は器表面が灰黄色、断面が赤褐色を呈する。

広口壺（686～689）は、いずれも大型のものである。欠損が多く、器形の全容を窺えるのは、686のみである。体部の形状には、中半が大きく張り、無花果形を呈するもの（686・687）と、球形体部を持つもの（688・689）の2者がある。686は明瞭な平底を呈し、頸部で緩く屈曲した後、強く外反して口縁部へと至る。端部はやや肥厚し、丸く収められている。688は体部下半に大小2つの焼成後穿孔を施している。2孔は対置して配され、それぞれ直径4cmと0.3cmを測る。穿孔の向きは、前者が内から外へ向けて、後者が外から内に向けて施されている。これらの広口壺は、いずれも密な胎土を用いており、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

690～721・724・725・728は、すべてV様式系壺Aである。今回の調査で検出した周溝墓の中でも、一際目立つ出土量を示しており、かつ全体の形状を窺うことのできる良好な資料が多いことも特徴的である。全容が窺えるものは、器高を基準とした法量によって、器高16cm未満の小型のもの（690～695）、器高16cm以上18cm未満の中型のもの（696～699・702）、器高18cm以上の大型のもの（700・701・703・704・716・717）の3者に大きく分けられる。成形は分割成形によるものが大半を占める。口縁部の形状はバリエーションに富んでおり、緩く外反して伸び、端部を単に丸くないしは尖り気味に収めるもの（694・696・697・703・704・707・710・711・712・716）、強く横ナデし、端部をつまみ上げて段を作り出すもの（691・699・702・706・708・709・713・714）、端部を上外方に短くつまみ上げ、いわゆる跳ね上げ口縁状を呈するもの（690・693・698・701・705・708・715・717）、受口状を呈するもの（700）、端部を横方向に短くつまみ出し、平坦面を作り出すもの（692・715）の5者が認められる。いずれも、頸部内面の稜は鈍い。体部の形状は、最大径が体部中間に位置し、球形化を達成するものが大半を占めるほか、頸部の縮まりが悪いものが多い。さらに、底部の形状は明瞭な平底を呈するもの

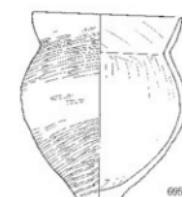
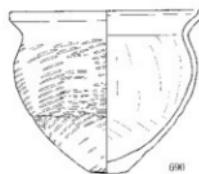
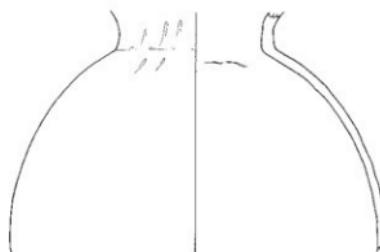
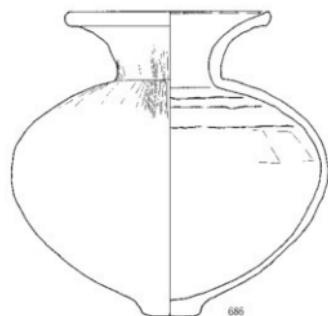
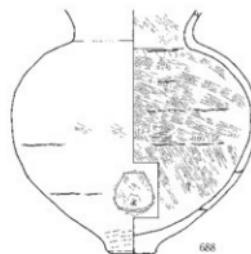


図41 周溝基29出土土器(1)

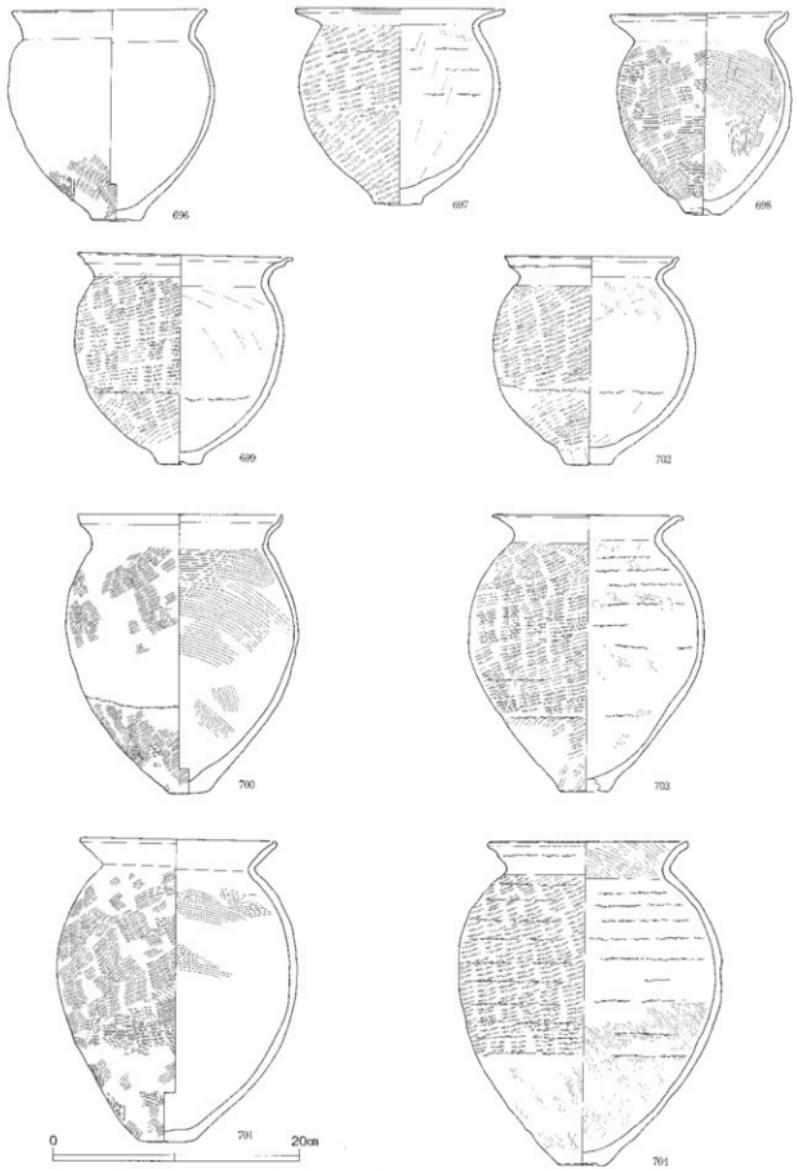


図42 周溝墓29出土土器（2）

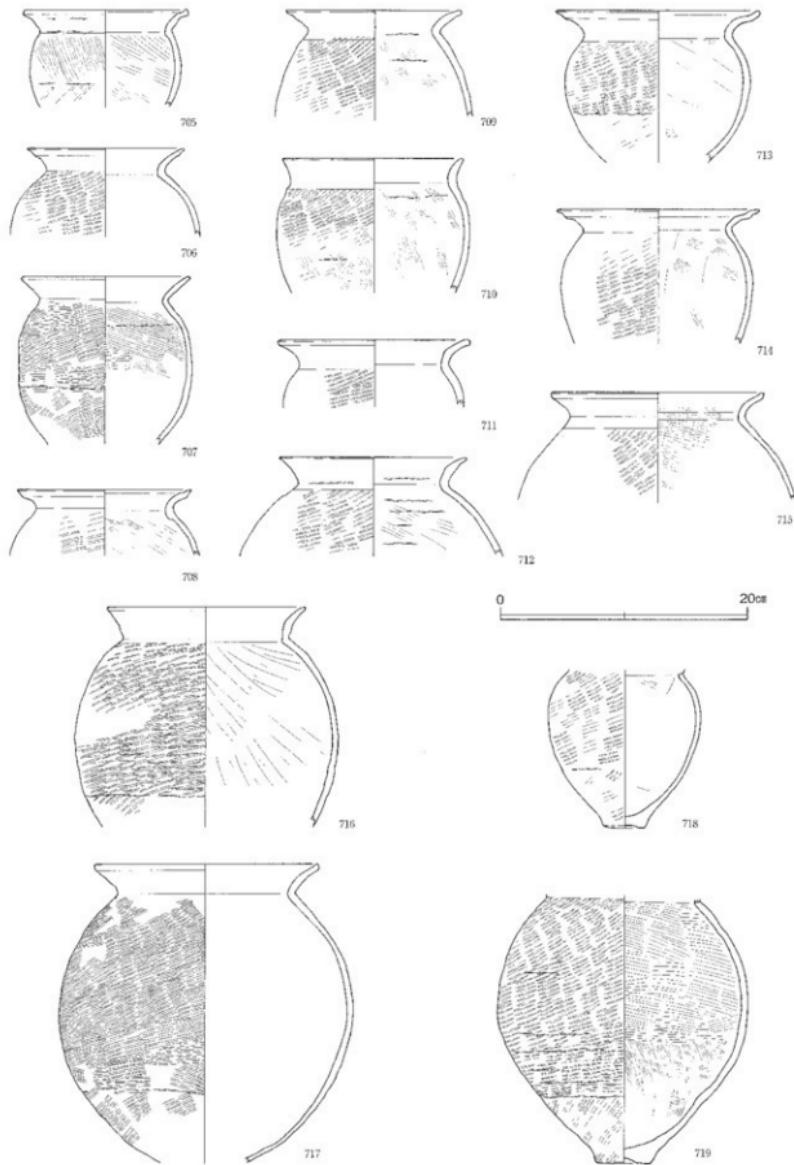


図43 周溝墓29出土土器（3）

ほか、緩やかな窪み底を呈するもの、ドーナツ底のものがある。また、突出せずに縮小が著しいものと突出して明瞭な平底を成すものがあるが、概して大型のものは縮小が著しい傾向にある。外面調整は、右上がりの太筋のタタキを施すものが大半であるが、分割成形時に体部中半にはほぼ平行のタタキを施すものも少數認められる。胎土はやや粗く、焼成も甘いものと、精良なものを用い、焼成が良好なものに分けられる。また、色調は赤褐色を呈するもののほか、灰白色を呈するものがある。上記の属性に該当しないものとして695があり、その他の甕とは様相がやや異なる。外面のタタキは頸部付近まで及ぶ口縁タタキ出しによって成形しており、口縁部は、明瞭な縮ぎ足しを行って内湾気味に立ち上がる。体部内面は板ナデを施しており、頸部内面はやや銳角を示す。胎土は密で、2~3mmの石英・長石・チャートを多く含む。色調は内面が黄褐色、外側が灰白色を呈する。

722・723・727は小型の直口鉢である。722は突出しない上げ底状を示し、縁にはケズリを施している。体部外面はナデで仕上げられており、内面にはハケが施される。723は器高が低く、縦く内湾して立ち上がる。内外面ともに縦方向のヘラミガキを施している。いずれも胎土は密で、焼成は良好である。727は残存率4分の1程度の破片である。口縁端部は平らな面を形成し、わずかに横向外方に引き出される。端面には器表面が残存していることから、鉢として考えて相違ない。胎土は粗く、焼成も甘い。外側には、ほぼ全面を覆う黒斑が認められる。

726は口縁部に屈曲を持つ鉢である。内湾気味に立ち上がる体部から、段を有して短くつまみ上げる口縁部へと至る。胎土は密であるが、焼成は甘く、色調は淡灰色を呈する。他地域系の土器の可能性が高い。口縁端部を受口状に作り出す点は、北近畿系の可能性が高いが、詳細は不明である。

729・730は有孔鉢である。比較的大振りで、明瞭な平底を呈するもの(729)とやや尖底気味のもの(730)の2者がある。いずれも体部外面には右肩上がりの太筋のタタキを施し、内面には粗いハケを施している。全体的に作りはやや粗く、接合痕を明瞭に留める。胎土はやや粗く、焼成は良好である。ともに底部から体部にかけて細長い黒斑が認められる。

731・734は、大型の外反口縁鉢である。731は屈曲部の厚みを減じ、外方に押し広げることで方形に近い片口状の凹みを形成するが、口縁端部の傾きは周縁と変わらない。体部下半には直径13cm前後の黒斑が認められる。胎土は密で、焼成も良好である。3mm程度の石英・チャートを少量含む。734は残存率8分の1以下の細片であり、口径の復元には若干の疑問が残る。摩滅が著しく、調整は外面にヘラミガキの痕跡をわずかに留める程度である。

732~736は有稜高杯である。いずれも残存率は良好であり、732・735はほぼ完形である。それぞれの器高は近似するが、口縁部の外反度及び口縁部の伸びから大きく2分される。具体的には、やや直線的に伸びる壺部から屈曲して外反するもの(732・735・736)、内湾する壺部から鈍い稜部を経て強く外反するもの(733)の2者に分けられる。また、脚部は、中空と中実の2者がある。いずれも脚柱部と脚裙部の屈曲部周辺には、4方向の円孔を穿っている。胎土はいずれも密で、焼成は良好である。色調は733が灰白色を呈するほかは、すべて黄灰色を呈する。736は、脚柱部が中実で、脚据部との境界が明瞭に屈曲するほか、口縁部の発達が著しく、口径は稜径のはば倍の値を示す。また、稜部には弱いナデが施された結果、縦い段が形成されている。733は杯体部及び口縁部の外向調整に、やや乱雑な横方向のヘラミガキを密に施している。

以上の土器は高壺のうち、733の壺部に横方向のヘラミガキが認められることや、736の高壺口縁部の発達が著しく、脚部の屈曲がシャープである点、また、甕も体部の球形化が著しい点や底径の縮小し

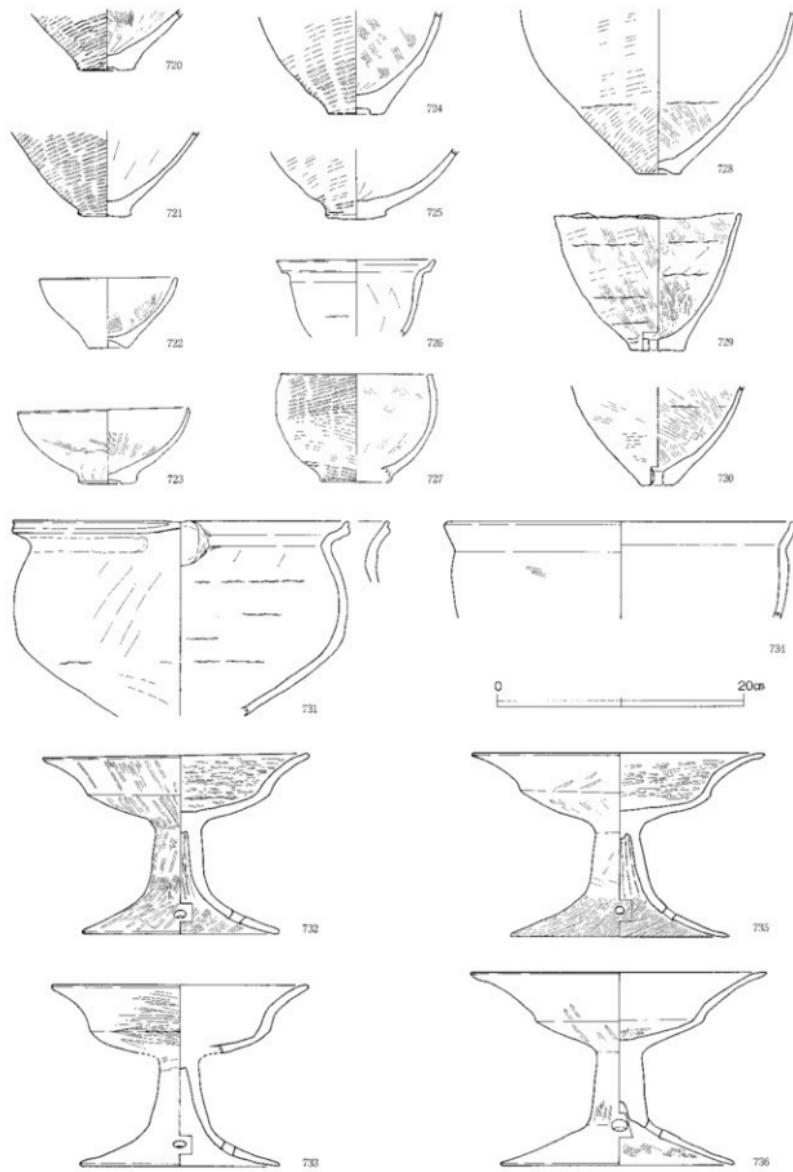


図44 周満墓29出土土器（4）

た突出しない底部が付く点を以って、近畿道編年様相4（古）に位置づけることが可能であろう。

周溝墓30（図45）出土土器は少なく、周溝全体を通して細片を中心にコンテナ2箱半程度確認したに過ぎない。周溝埋土は部分的に2層に分けられ、737～739が埋土上層、740～746が埋土下層から出土している。出土位置は、737・741・746が南側周溝、738～740・743～745が西側周溝、742が東側周溝から出土している。

737・742は加飾広口壺である。737は口縁部に竹管紋を施す。胎土はやや密で角閃石を多く含む。また、色調は暗茶褐色を呈する。生駒山西麓産の胎土。742は、残存率8分の1以下の細片である。従って復元には若干の疑問が残る。頸部直下に3条1帯の簾状紋風の直線紋を2帯施し、さらにその下部には、鋭角的な波状紋を施している。やや粗い胎土を用い、焼成は良好である。

740は残存率4分の1程度の二重口縁壺である。口縁部を上方に拡張し、外面には摩滅しているものの擬四凹線が微妙に残存する。また、頸部内面には接合痕が認められるほか、頸部の器壁も薄くなる傾向にある。胎土中には3～4mm大的結晶片岩を微量含んでおり、東阿波型の二重口縁壺の搬入品と考えられる。741は壺の口縁部片と考えられる。8分の1以下の細片であり、詳細は不明。

739・743・744はV様式系壺Aである。739はやや太めのタタキを施し、内面は丁寧にハケが施されている。胎土は密で雲母を含む。焼成は良好である。743・744は、体部に太筋で粗いタタキが施されるが、部分的にナデが施されており、明瞭ではない。744の内面は作りが粗く、不規則な指頭圧痕が明瞭に認められ、器壁の歪みを顕著にしている。胎土は743がやや粗く、744は密である。焼成はいずれもやや甘い。744の底部には黒斑が認められる。

738是有孔鉢である。直線的な尖底に直径0.6cmと小振りな円孔を穿っている。外面はタタキ成形の後ナデが施され、上半部にはタタキがほとんど認められない。

745・746是有稜高坏である。745は、きつく立ち上がる坏部に鈍い屈曲部を持ち、緩やかな段状を示す稜部を形成している。内外面ともに摩滅が著しいため、調整等は不明。746は脚裾部のほぼ中位に大振りの円形透かしを4方向穿つ。脚部の屈曲は比較的シャープで、脚高は低い。いずれも胎土はやや粗く、焼成も甘い。色調は赤褐色を呈する。

以上の土器は、細片が多く、器種も限定されるため、詳細な時期比定は成しがたい。しかしながら、740の阿波系二重口縁壺や746の高坏脚部は、比較的新しい様相を示すものと考えられる。加えて、本周溝墓は、後述する土器埋設遺構4との密接な関係が想定され、それが示す編年上の位置を加味すると、本周溝墓出土土器は近畿道編年様相4（新）に位置づけることができよう。

周溝墓31（図45）出土土器はコンテナ2箱半と少なく、また、岡化し得た資料も含めて破片が多い。上下2層に大別される埋土の内、上層からは747～750が、下層からは751～758が出土した。また、出土位置は、747～751・754が北側周溝、752・755～758が西側周溝である。

747は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部の一部を欠くが、残存状況は良好である。口径は11.6cmを測る。天井部と口縁部の稜は鈍く、天井部は粗雑なヘラケズリを施した後にヘラ記号を施す。TK217型式に位置づけられることから、7世紀前葉のものとみられる。

748・749・753はV様式系壺Aである。748は短く屈曲して外上方に聞く口縁部を有し、タタキが頸部まで及ぶ箇所については、部分的に直立気味に立ち上がる。753は口縁部をつまみ上げ、外面には段を形成する。いずれも胎土はやや粗い。焼成は748・753がやや甘く、749は良好である。

750・751是有稜高坏である。いずれも8分の1以下の細片であり、口径の復元には若干の疑問が残

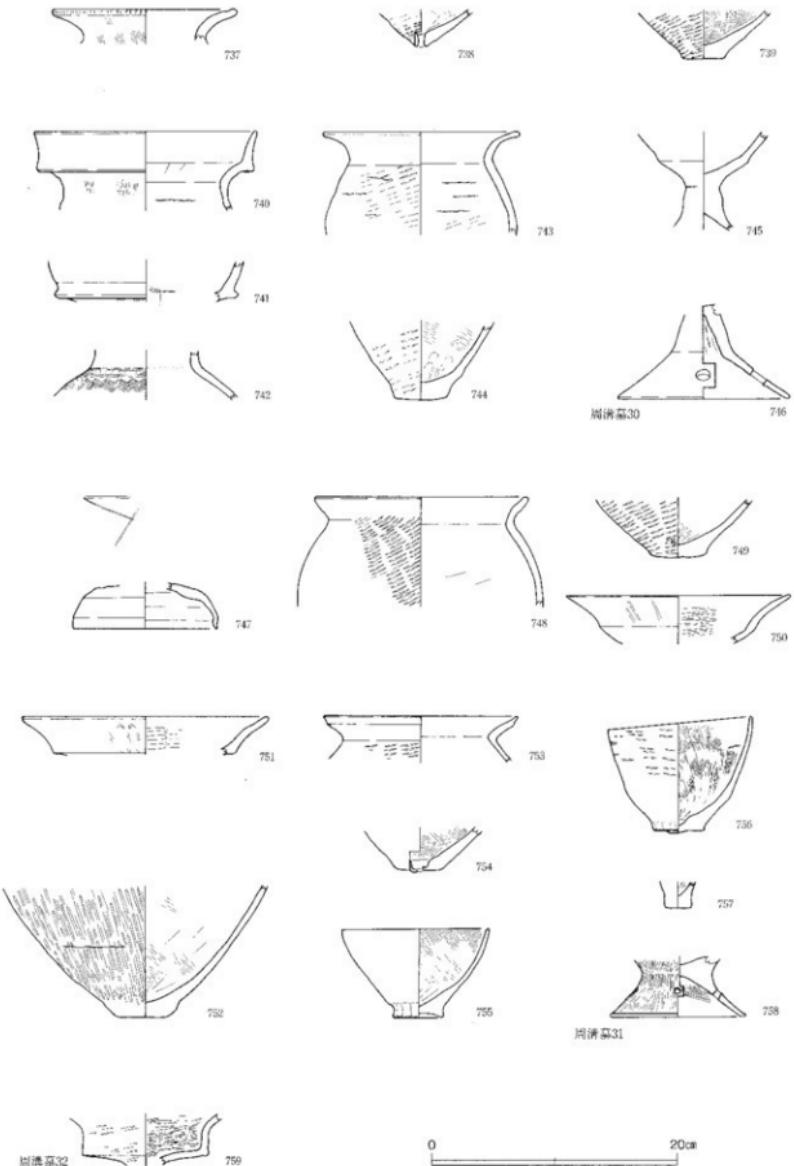


図45 周清墓30~32出土土器

る。750は、やや鈍い稜を経て緩やかに外反して伸びる口縁部を有する。外面には縦方向、内面には横方向のヘラミガキを施す。751は明瞭な稜を経て緩やかに外反する。口縁部の発達は弱く、傾斜もやや急である。外面には鋸歯状を呈するヘラミガキを施し、内面には横方向のヘラミガキを施している。

752は壺の底部である。上半部を欠くため、器形の全容は窺い知れない。胎土は密で、焼成は良好。

鉢には有孔鉢(754)と小型の直口鉢(755・756)がある。有孔鉢は、突出しない平底に長径0.6cmの小振りの孔を穿つ。穿孔の事前に該当箇所を窪ませていたためか、底部内面には明瞭な段が認められる。胎土はやや粗く、焼成は良好で、黄灰色を呈する。755は底部に連続的に指オサエを施し、上げ底状を呈する。外面は摩滅が著しく、調整は不明である。内面はハケを施し、底部付近にはクモの巣状ハケが残る。また、外面及び内面に直径5cm前後の黒斑が認められる。胎土は密で、焼成はやや良好である。色調は淡褐色を呈する。756は全体的に粗雑な作りで、基本的に平行ないしは左上がりのタタキで成形し、その後にナデ、内面にはハケを施している。調整は全体的に不十分で、粘土接合痕を完全に消去しきれていない。また、口縁端部の整形も粗く、不十分である。さらに、底部内面に754と同様の窪みが認められる。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は橙色を呈する。

757はミニチュアの鉢と考えられる。内面にはわずかにハケの痕跡が認められる。下位造構面から混入した蓋である可能性も想定できるが、大半を欠くため、詳細は不明である。

758は台付の鉢ないしは壺である。底部をわずかに残すほかはすべて欠損しているため、器種の限定は成し得ない。脚部には内外面ともにハケを施し、中位に小振りの円形透かしを不整な位置に4孔残存し、本末はこれに加えて1ないし2孔が穿たれたと考えられるが、欠損のため詳細は不明。底部外面にはヘラミガキが施されている。胎土は密、焼成は良好で暗黄褐色を呈する。

以上の土器は、破片が多く全容を窺える資料に乏しい。壺及び高杯の様相からは、近畿道編年様相3(新)から様相4(古)に位置づけられるものと考えられるが、詳細は不明である。

周溝墓32(図45) 土器は細片を中心に50片前後と極少量を確認したに過ぎない。図示し得たものも1点のみであり、かつ細片である。759は有段高杯の破片で、残存率6分の1程度の細片である。精緻な作りで、内外面に横方向の細密なヘラミガキを施している。胎土は密で焼成も良好、色調は橙色を呈する。なお、坏部と口縁部の接合箇所で剥離している。近畿道編年様相4(新)に位置づけられる。

周溝墓33(図46) 出土量は少なく、コンテナ1箱分の土器を確認し得たに過ぎない。第V章でも詳述したように、検出遺構の大部分が研究会調査区に該当していたため、すべて下層からの出土である。出土位置は、763・764・766が東側周溝、760~762・765・767が南側周溝の出土である。

760は加飾二重口縁壺である。残存率8分の1程度の細片で、摩滅も著しい。口縁部には5条1帯の波状紋を1.5cm間隔で施紋するほか、屈曲部に刻目を施す。胎土は密で、色調は乳白色を呈する。

761は体部上半以上を欠くため全容は窺えないが、体部下半の立ち上がりや内外面の調整から小型壺と判断した。底部は部分的に弱く突出するが顕著ではなく、幅は著しく縮小してほぼ丸底に近い様相を示す。外面調整は摩滅、剥離が著しいものの、縦方向のヘラミガキの痕跡が認められ、内面には幅0.1cm前後の細密な横方向のヘラミガキが施される。また、底部内面には指頭圧痕が認められる。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は灰黄色を呈し、外面には黒斑が認められる。

762は中型の外反口縁鉢である。細片であるうえ内外面ともに摩滅が著しく、詳細は不明。

壺にはV様式系壺A(763・764)がある。763は短く直線的に伸びる口縁部を有し、頭部内面の稜は鋭角的である。外面のタタキは太筋で、内面は摩滅のため図示し得なかったが、ごくわずかに板ナデの

痕跡が認められた。764は内面全体に煤が付着している。突出気味の平底である底部外面中央部には、直径0.3cm前後の刺突が認められる。

765・766は台付の鉢ないしは壺である。いずれも体部を欠くため、器形は不明である。ただし、外側調整等から765は鉢、766は壺と考えられる。

767は中実の高環脚部片である。脚柱部中半がやや膨らむ形状を示す。胎土は密で、2mmまでの長石・チャートを極少量含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

以上の土器は、内面を板ナデ調整し、それに伴って頸部内面の稜が鋭角を示す壺(763)、また内面に精緻な螺旋状のヘラミガキを施す小型壺(761)の存在から、近畿道編年様相4(古)でもより古相を示す可能性が高く、本遺構の帰属時期を示していると考えられる。

周溝墓35(図46) 大きく上下2層に分けられる埋土から、細片を中心にコンテナ1箱分の土器が出土した。図示したものの内、768~771が埋土上層、772~775が埋土下層から出土している。また出土位置は、768・771・774が南側周溝、769・770・775が北側周溝、772・773が西側周溝である。

768・772~775はV様式系壺Aである。すべて破片であり、全容を窺うことのできる資料は皆無である。底部には、平底(768)、ドーナツ底(772・774)、浅い上げ底(773)の3者が認められる。775は小型壺の口縁部片で、約4分の1程度残存している。短く外反して伸びる口縁部を有し、口縁端部はつ

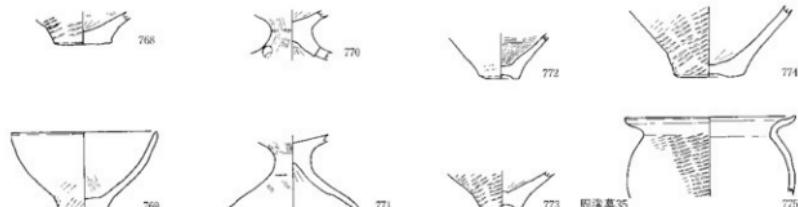
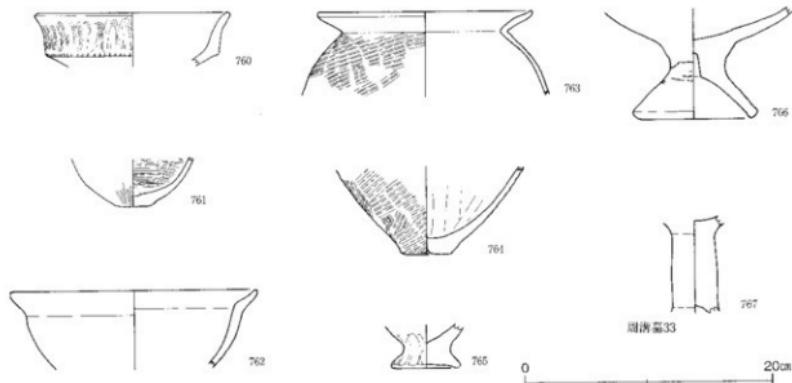


図46 周溝墓33・35出土土器

まみ上げて跳ね上げ口縁状を示す。胎土はやや粗く、3mm程度の石英・長石・チャートを多く含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

769は小型の直口鉢である。全体の約2分の1を欠く。体部外面には右上がりのタタキの痕跡がわずかに認められるが、ナデ消される。内面はわずかにハケの痕跡が残る。焼成は良好で胎土は密である。

770・771は高坏脚部である。坏部を欠くため、詳細は不明であるが、脚部高が極めて低いことから、おそらく椀形高坏と考えられる。770はやや大振りの円形透かしを3方向に穿つ。いずれも胎土はやや密で、焼成は甘い。色調は770の断面が赤褐色を示すほかは、すべて黄灰色である。

以上の土器は器種も限定されるうえに、細片が多く、帰属時期を比定するには若干心許無いが、概ね近畿道編年様相3の範疇に収まるものと考えができる。

**土器埋設遺構1** (図47) 776は周溝墓6と18の周溝間より単体で出土した広口壺である。図示範囲はほぼ全周しており、遺存状況は良好である。底部は円形に欠損しているが、第V章で詳述したように正置の状態で据え置かれていたため、打ち欠きが施されたものと考えられる。胎土はやや粗く、2mm前後の石英・長石を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が暗灰黄色を呈する。内外面の調整は摩滅・剥離が著しいため、詳細は不明であるが、体部内面上半には時計回りのヘラケズリが施される。底部から体部下半の一部にかけて黒斑が認められる。体部のみの出土であるため、詳細な時期比定は困難であるが、周溝墓18出土資料の示す近畿道編年様相4(古)前後の所産と考えられる。

**土器埋設遺構2** (図47) 上層の削平の影響を受けたためか、大半が細片となって出土しており、全容の復元はなし得なかった。図化可能であったのは777・778の2点で、いずれも広口壺と考えられる。777は頸部に鈍い突帶を貼り付け、櫛歯状の工具で列点風の刻目を施している。胎土はやや粗く、焼成は甘い。色調は器表面が灰白色を呈し、断面は黒色を示す。778は突出しない平底に強く内湾して大きく開く体部を有する。胎土・焼成・色調ともに777と近似しており、本来同一個体であったことが想定される。概ね近畿道編年様相4の範疇に収まるものと考えられる。

**土器埋設遺構3** (図47) 土器は少なく、わずかに大型壺の体部片(779)を図示し得たのみである。弱く内湾して大きく開く体部は、約2分の1を欠損している。摩滅・剥離が著しいため、調整等は不明である。胎土は粗く、焼成もやや甘い。時期比定の根拠とするには資料の欠損が多く、詳細は不明。

**土器埋設遺構4** (図47) 第V章で詳述したように周溝墓30の陸橋中央部で検出した。複数個体の土器を重ね合わせて構成されたものであることが調査時より推測され、接合・復元を行ったところ、780～782の3点を組み合わせていてることが判明した。780は、ほぼ完形の超大型壺である。本遺構を構成する土器の主体を成すものである。底部は突出するドーナツ底である。頸部内面の棱は鈍く、縮まりも悪い。体部には、右上がりの太筋で粗いタタキが施され、下半部は比較的丁寧なナデ消しが施されている。また、体部最大径の位置する下半部には、長径2.0cm、短径1.5cmの焼成後穿孔が外側から内側に向けて施されていた。胎土はやや粗く、焼成は良好である。781・782は広口壺である。781は体部の約2分の1を欠損するが、ほぼ全容を窺うことのできる良好な資料である。強く屈曲する頸部から、強く外反して伸びる口縁部を有する。体部はやや下位に最大径を持ち、大きく外側に張り出す形状を示す。底部は中央部を欠くため詳細は明らかでないが、丸底を呈していたと考えができる。器表面の剥離・摩滅が著しいため、詳細は不明であるものの、体部外面には下位にヘラケズリ、上半以上にはハケを施していたことが痕跡から認められる。782は図示範囲の約8分の1を欠く。いずれも胎土は密で、焼成は良好。色調は外面が淡い橙色、内面が暗褐色を呈する。

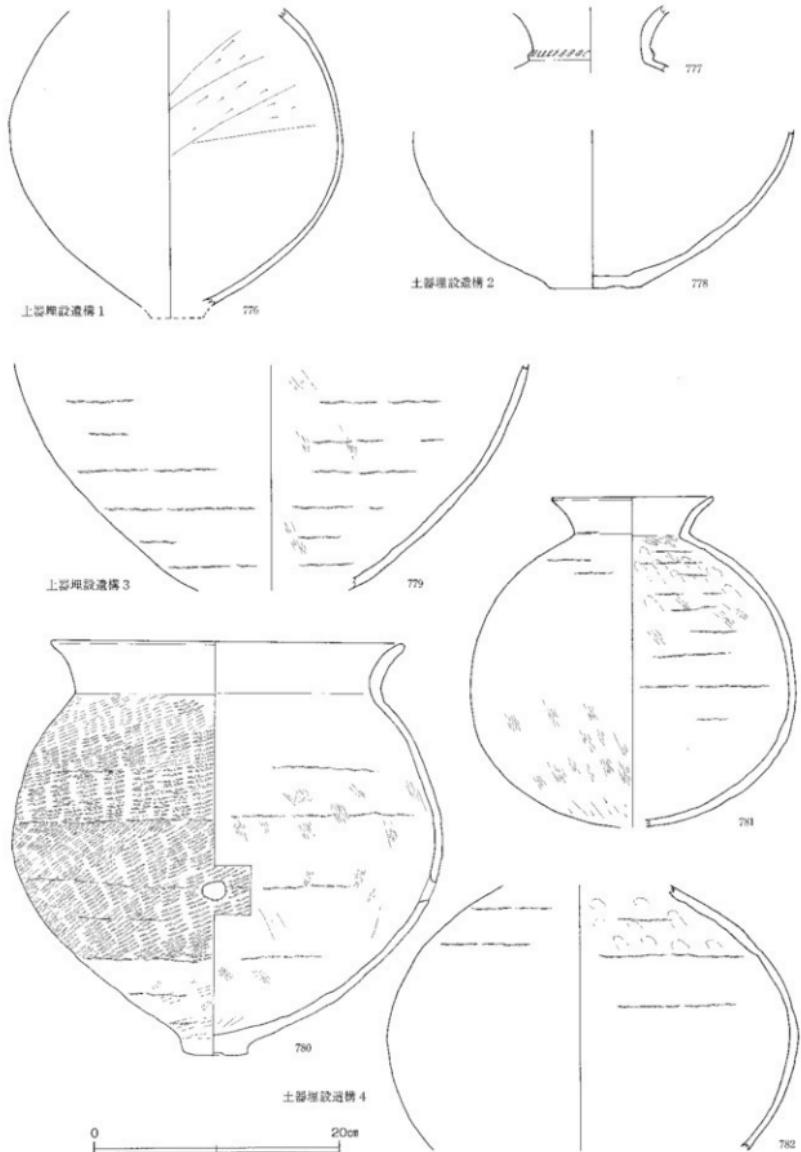


図47 土器埋設遺構 1～4 出土土器

以上の土器は、近畿造編年様相4（新）に位置づけることができる。

溝17（図48・49） 大きく上下2層に分けられる埋土のうち、783～803は埋土上層、804～816は埋土下層から出土した。

783～785・791・792・798・799は須恵器である。器種には壺身・壺蓋・有蓋高环があり、いずれも残存率8分の1、あるいは6分の1程度の細片である。783は壺Bで、底部から体部の一部にかけて被熱による黒化が認められる。底部と体部の境界は明瞭に屈曲し、やや斜外方に張り出す低平な高台が取り付く。半城窯土器IVないしVに位置づけられる。

壺蓋には、明瞭な稜を持たないもの（784・785）と、持つもの（791・792）の2者が認められ、前者はT K43型式、後者はMT15型式に位置づけられる。ただし、791の稜は792と比較して鈍い。また、図示していないが、784の天井部には、1条のヘラ記号が部分的に認められる。792は全体的に器壁が厚く、胎土に5mm以下の長石・石英・黒色粒を含む。

杯身（798）は受部の沈線がわずかに認められ、立ち上がりは縮小している。有蓋高环（799）は、底部にカキメを施している。いずれもMT85型式の所産。

埴輪（786～789、793～795、800～802）は、無黒斑の円筒埴輪片で、786・787・793・795・800は須恵質、788・789・794・801・802は土師質である。細片が多く、2段以上を留めるものは皆無である。径の復元は困難であるが、788・789・794・802が直径20cmまでの小型円筒、それ以外が直径40cm前後の大型円筒と推測できる。小型品（788・789・794・802）の突帯は断面台形を示すものの、概して粗雑で低平な作りである。調整は、外面には1次調整のナナメハケを施し、内面にはナナメハケ後にナデ・オサエを施することで、ハケも比較的丁寧に消されている。一方、大型品は断面台形で厚みのある突帯を丁寧なナデを施して貼り付けているほか、外面2次調整にヨコハケを用いるもの（787・793・795・800・801）、1次調整のナナメハケのみで調整を終了させるもの（786）の2者が認められる。ヨコハケのストロークが長いためか、破片内で静止痕や重複痕が認められるものは僅少であるが、793・801にはC種ヨコハケが施されている。口縁部は、やや直立気味に立ち上がり、いずれも端部を短く折り曲げ、外傾ないしは直立する面を形成する。胎土及び焼成は、須恵質のものはやや粗く、2mm前後の長石を多量に含み、色調は赤灰色を呈している。一方、土師質のものは、密でやや軟質のもの（788・789）、やや粗く硬質のもの（794・801）の2者があり、色調はともに黄褐色を呈する。以上の埴輪は、概ね2時期にわたり、大型品が川西編年IV期、小型品がV期に相当すると考えられる。

790は細頸壺である。口縁部は中位で緩く外側に湾曲し、瓢形を呈する。端部直下には1条の縦凹線が施される。内外面は粗いハケを施す。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調はぶい黄橙色を呈する。

広口壺（796・797）は緩く外反して伸びる口縁部を有する。口縁端部は、肥厚させて面取り気味に仕上げるものと丸く收めるものの2者がある。いずれも胎土はやや粗く、焼成は良好である。

有孔鉢（803）は突出する平底に内から外側に向て穿孔が施される。内外面とも丁寧なナデで仕上げられている。胎土はやや粗く、2mm以下の長石・石英・チャートを含む。焼成は良好である。

埋土下層より出土した土器（804～813）は土師器・弥生土器が主体を占めている。

804は小型の短頸直口壺である。口縁部の約3分の2を欠く。胎土は密で0.5mm以下の石英・長石を少量含む。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。体部上半には内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。

805は有稜高环の脚部片である。脚柱部外面にはヘラナデ状の調整が施され、多面体を示す。また、脚頂部付近にはハケが施される。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。

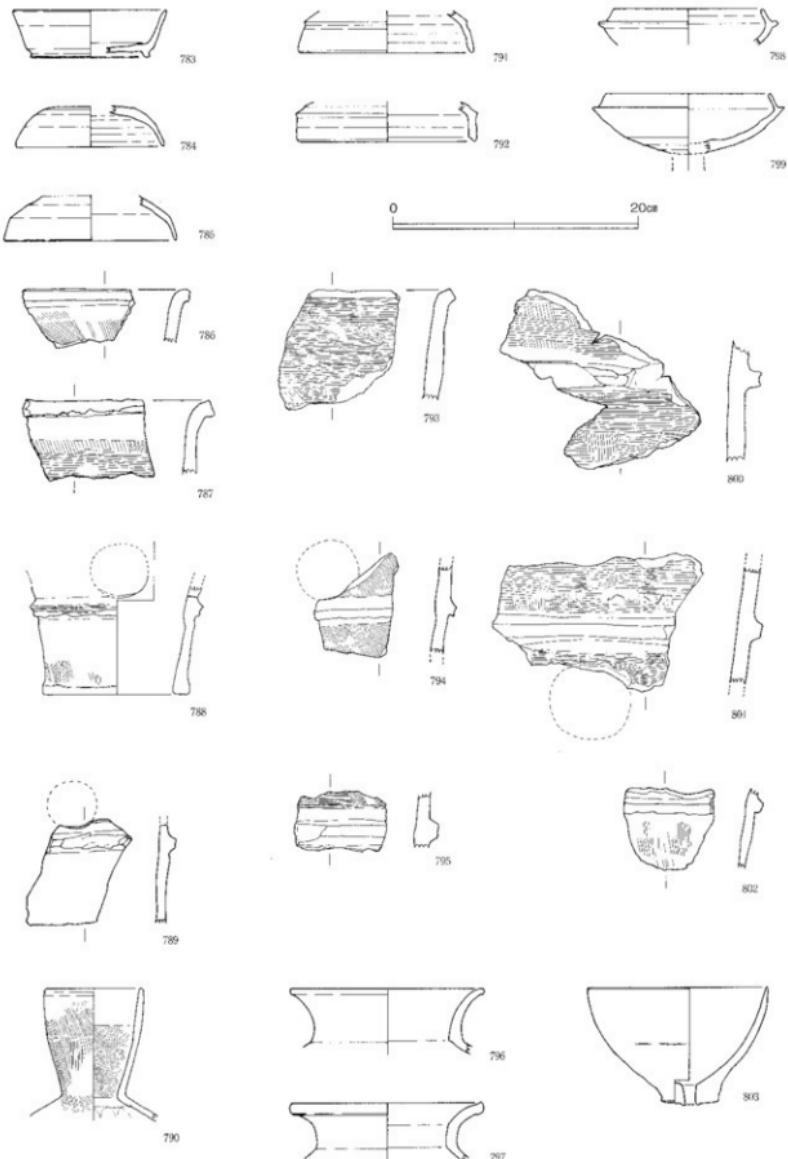


图48 满17出土土器

806～811・813は亮である。807は布留型の亮口縁部片。残存率8分の1以下の細片のため、口縁の復元には若干の疑問が残る。口縁端部は内側に肥厚する。頭部内面の稜は鈍く、口縁部の立ち上がりにも内溝気味である。胎土はやや粗く、焼成は甘い。色調は赤褐色を呈する。

806・808~811・813はV様式系型Aである。ほぼ完形の813、約2分の1が残存する809を除けば、残存率の良いものは少ない。法量から小型(809)、中型(806・810)、大型(813)の3者に分けられるほか、口縁端部の形から、丸くおさめるもの(808・809)、外傾する面を持つもの(813)、跳ね上げ口縁状を示すもの(811)の3者に分けられる。成形はいずれも分割成形。体部は、いずれも最大径をやや肩部

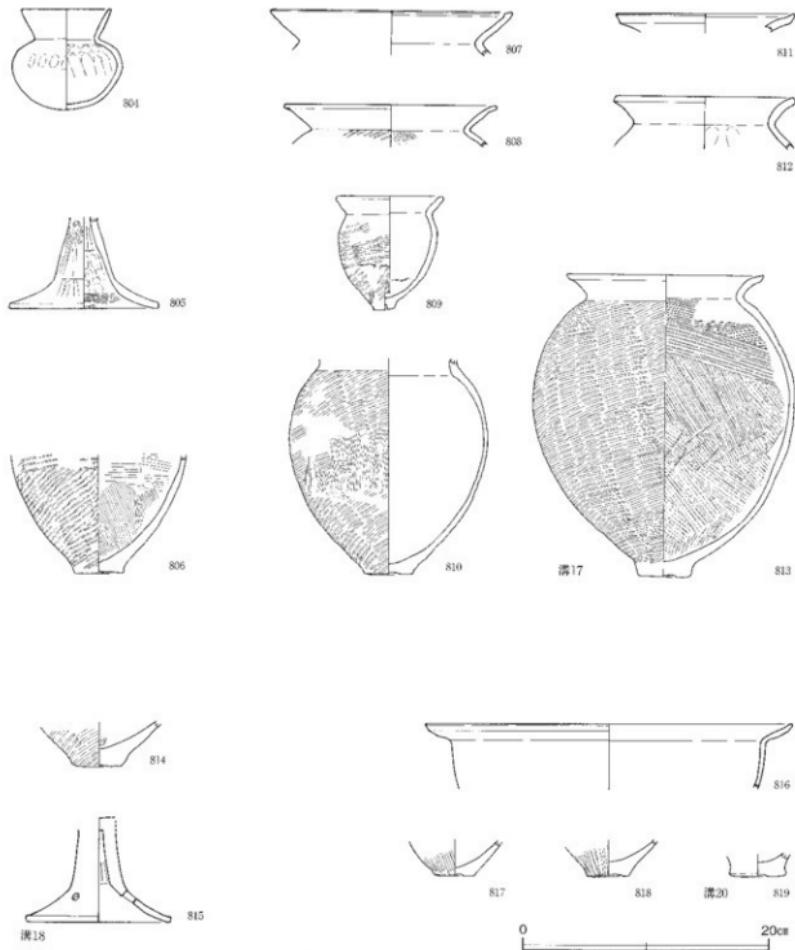


図49 溝17・18・20出土土器

よりに位置させるが、下半の張りが著しく、球形を示している。底部は、いずれもドーナツ底であるが、中型のものは突出が鈍く、大型のものは明瞭に突出している点で異なる。なお、小型の809は縮小傾向が著しく、底部中央の窪みは棒状工具による刺突によって形成される。810・813の底部には木葉痕が認められた。813の体部下半は黒化しており、中半には煤の付着が認められた。

812は広口壺の細片である。残存率は4分の1程度で、摩滅が著しく、調整等は不明である。胎土はやや粗く、2mm前後の石英・長石・チャートを多く含む。

以上の土器は、上層遺物のうち須恵器が6世紀初頭から8世紀末頃を示すほか、円筒埴輪が5世紀中葉から6世紀前葉を示している。さらに、下層に含まれる804・807などの近畿道編年様相8に該当する土器のほか、近畿道編年様相3（新）から様相4（古）にかけての所産と考えられる一群が認められることから、長期にわたって緩やかに埋積が進行していったことを示している。

溝18（図49） 溝17に並行する南北方向の溝より出土した土器を掲げた。わずかに2点を図示し得たに過ぎない。814はV様式系壺Aの底部片、815は高坏の脚部である。脚頂部は円盤充填によって成形されている。脚辺部との接合は緩やかで、推定4方向の透かしを施している。

時期比定には困難を伴うが、有段高坏の様相から近畿道編年様相3の範疇に収まるものと考えてよいであろう。

溝19（図50） 溝18と同様、溝17に並行する南北方向の溝である。本来は溝18と同じ溝であった可能性もあるが、攪乱が著しかったため、詳細は不明。やはり出土土器は少なく、わずかにV様式系壺Aの底部片（820）を図示し得たに過ぎない。820は外面に粗い太筋のタタキが施され、底部は短く突出するドーナツ底である。胎土は粗く、焼成はやや甘い。

壺の細片であることから詳細な時期比定は成し得ないが、近畿道編年様相3～4の所産と考えられる。

溝20（図49） 周溝墓8の北側周溝の北西部に位置する小溝から出土した土器である。出土数量に乏しく、残存率8分の1以下の細片のみである。816は大型の外反口縁鉢である。口径の復元に若干の疑問を残す。外面は黒化している。817～819は鉢ないしは壺の底部である。817・818は外面にミガキを施すことから鉢の可能性が高い。詳細な帰属時期は不明である。

溝22（図50） 出土土器は少なく、大半が細片であった。図示し得たのは1点のみである。821は壺の底部片である。短く突出するドーナツ底である。内面はハケ、外側は縦位のヘラミガキを施す。本遺構出土土器については、第V章でも述べたが、図示し得なかった土器の中にヘラケズリによって丸底状に仕上げられた壺などが認められ、近畿道編年様相4（古）に位置づけられる。

溝26（図50） 周溝墓26の北東側に位置する溝で、溝27と並行する。出土総量は少なく、図示し得た土器も1点のみである。822はミニチュアの壺である。完形で手づくね整形されている。近畿道編年様相3～4の所産と考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

溝29（図50） 周溝墓29の南側に位置する溝で、溝30・31と接合している。須恵器・土師器の細片が少量出土した。

須恵器は蓋杯の蓋と身が出土している。坏蓋（823）は口径14.6cmを測る大型品で、MT15型式に位置づけられる。坏身（824～828）は口径11.4～13.4cmを測り、口縁端部は短く、やや内傾する。824がTK43型式、826がTK10型式、825・827・828がMT15型式のものと位置づけられる。

土師器は壺（829）、羽釜（830）、竈（831・832）を掲げた。830は河内型の長胴羽釜の鉢部に相当する。大きく下方に湾曲する形状で、胎土は生駒山西麓産である。類例に5世紀末頃の東大阪市猪ノ木古

墳出土例があるが、本例はそれより若干新しい様相を示している。

832は移動式壺の上部で、色調は黄橙色を呈し胎土に長石・黒色粒を含む。831は、832の把手の可能性があるので、中空の把手を体部に貼り付けている。

以上の土器は、須恵器蓋杯の帰属時期を根拠に6世紀初頭から末頃にかけての所産と考えられる。

溝31(図51) 周溝墓29の南東コーナーに接続する溝であり、少量の土器が出土した。

833は脚付の小型壺である。体部には横方向のヘラミガキが施され、直線的に斜外方に伸びる口縁部には、外面に縱方向のヘラミガキ、内面に粗いハケが施される。脚部の屈曲点には、小振りの円形透かしが推定3方向に穿たれるようであるが、大半を欠損するため、詳細は不明である。

834は広口壺である。口縁部は強く外反し、端部は丸く収められる。体部内面には板ナデの痕跡が認められる。胎土はやや密で、3mmまでの石英・長石を少量含む。焼成は良好、色調は黄灰色を呈する。

835・836はV様式系壺Aである。ともに口縁部と体部の一部を欠くほかはほぼ完形に近い。両者は、法量上近似するが、835は体部最大径を中位に持ち、底部も突出した明瞭な平底を示す一方で、836は体部上半に最大径を持ち、突出の弱いドーナツ底である。また、外面調整には835が太筋で粗いタタキ、836が比較的細筋の連続ラセンタキを施すほか、逆円錐台との接合痕跡については、835が異なる軸のタタキを施す一方で、836はナデによって消去する。加えて、口縁部形態は835が跳ね上げ状を示し、836は丸く収めて外面に鈍い稜を成している。ともに胎土はやや粗く、焼成は良好である。

以上の土器は、V様式系壺Aを根拠に近畿道編年様相3(新)に位置づけることができる。

溝32(図51) 周溝墓29の北東側に位置する溝であり、少量の土器が出土した。

837・838は広口壺である。頸部の立ち上がりは短く、強く外反する口縁部を有する。口縁端部は、丸く収めるもの(837)と、面取り気味に仕上げるもの(838)の2者が認められる。837は調整がやや粗く、接合痕を残す。外面調整には縱方向のハケが施されている。胎土はやや粗く、焼成もやや甘い。広口壺の頸部の立ち上がりがやや短く、外方に大きく聞く点等を根拠に比較的新しい様相を示すものと考えることができる。

839はV様式系壺Aである。残存率は悪く、図化範囲のうち4分の1程度に過ぎない。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反し、丸く収められる口縁端部へと至る。外面には太筋で粗いタタキを施し、下半の接合痕付近で微妙に軸を変えている。胎土はやや粗く、2~3mmの石英・長石を多く含む。

以上の土器は、点数が少なく、機種も限定されることから詳細な時期比定には困難が伴うが、広口壺が新しい様相を示すことなどを根拠に、近畿道編年様相3(新)に位置づけることができる。

溝35(図51) 周溝墓35の北西側に位置する幅広の短い溝である。図化し得たのは2点で、いずれもV様式系壺Aである。840は約3分の2を欠く。頸部内面の稜は鈍く、外反して短く伸びる口縁部を有する。端部は強く斜外方につまみ上げる。外向のタタキは太筋でやや粗いものを施し、内面にはナデを施す。841は約2分の1を欠く。分割成形で、やや突出気味の底部は、縮小した平底でドーナツ底である。最大径は体部中半にあり、球形を示す。体部下半には、太筋で粗い傾斜の急な右上がりのタタキを施し、逆円錐台との接合部でタタキの主軸を水平方向に変えている。いずれも胎土は粗く、2mm程度の石英・長石を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が黄灰色、断面が赤褐色を呈している。

壺2点のみと資料数が限定されるため、詳細な帰属時期は不明であるが、球形化を達成した体部に縮小した底部が付くなどの点から、近畿道編年様相3(新)前後の所産と考えることが可能であろう。



829



821



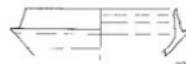
822



823



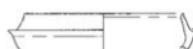
825



827



824



826



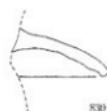
828



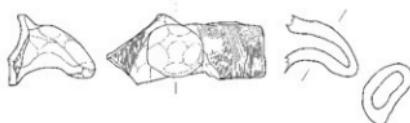
829



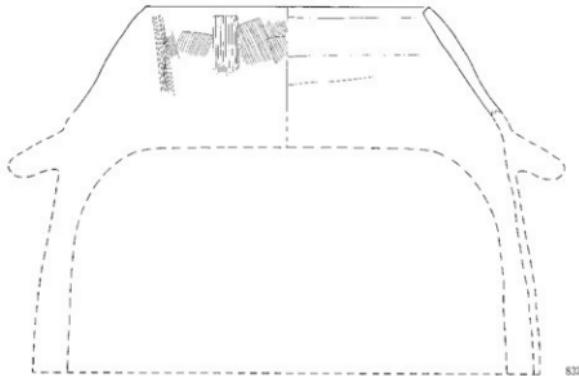
830



831



831



829



图50 满19·22·26·29出土土器

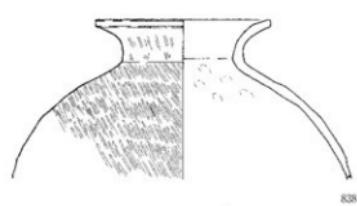
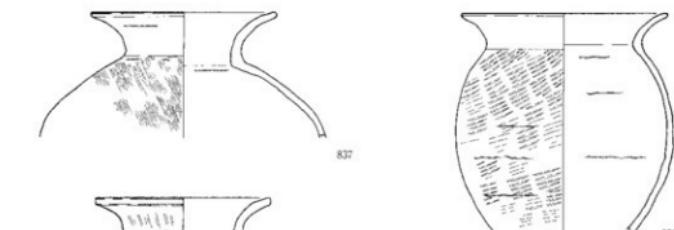
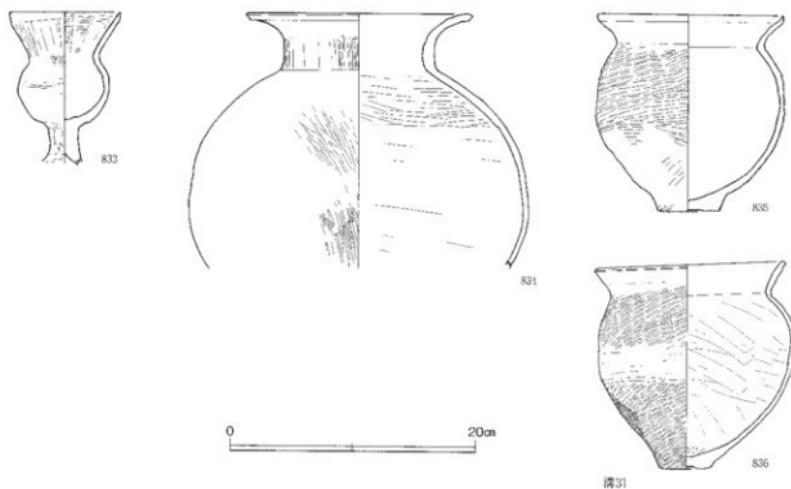


図51 溝31・32・35出土土器

溝33（図52） 浅い落ち込み状の溝であり、層準は單一層である。溝の底からやや浮いた状態で、甕を中心多く出土した。

842は加飾広口壺である。口縁端部は上下に短く拡張し、端面には5ないし6条1帯の直線紋を施した後に、小振りな棒状浮紋を貼り付けている。棒状浮紋は、剥離が多く詳細は不明であるが、5個を1組として推定4方向に配されていた可能性が高い。また、頭部下端には低い突帯を貼り付けた後に、刻み目を施しているほか、直下には櫛痕直線紋の痕跡がわずかに認められる。頭部は直線的に斜外方に立ち上がり、口縁部はゆるく外反して伸びる。頭部と口縁部の境界は明瞭に屈曲する。内面は摩滅が著しく、調整は不明であるが、外面の調整は頸部に縱方向のヘラミガキを密に施す。胎土は粗く、3mm程度の右英・長石・チャートを多く含む。

843・844はV様式系甕B、845～850はV様式系甕Aである。全体的に残存率は悪く、845が約3分の2、846・847が約2分の1を残すほかは、8分の1程度の細片が多い。法量上、小型のもの（845・848）、中型のもの（843・844・846・847・849・850）の2者に分けられる。このほか、口縁端部の差異により単純に丸く収めるもの（844・847・848・849）、短くつまみ上げて跳ね上げ口縁状を呈するもの（846）。強く斜外方につまみ上げて、外面に段を有するもの（843）の3者に分けることができる。

843はハケ及び丁寧なナデを施し、タタキはほとんど認められない。844は、やや長胴気味の体部を有し、全体的に作りも粗雑である。外面にはタタキを施した後に粗いハケを施している。845は口縁部を欠くため、詳細は明らかではないが、肩部から頸部にかけての屈曲がなだらかで、頸部の締まりが悪い。タタキのナデ消しも丁寧に施されており、精緻な作りであるという印象を受ける。外面に煤も付着していないことから、鉢と考えた方が適切であるかもしれない。

846は外面のタタキが左上がりであることやほとんど面を成さない尖底気味の底部を有する点で、他とは大きく異なる。頸部内面の棱は、部分的に若干シャープな箇所も存在するが、大部分では緩やかに外反している。848は口縁叩き出し技法に擬る成形。胎土は、844・845が若干密であるのを除き、総体的にやや粗く、焼成も不良である。

851は有孔鉢である。突出しないドーナツ底に、やや不定形な円孔を穿っている。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

外反口縁鉢（852・853）はいずれも大型のものである。852は残存率4分の1程度の破片であるが、853は3分の2以上残存しており、全容を窺うことができる。852は内外面ともにハケを施した後に縱方向の粗いヘラミガキを施している。内面のヘラミガキは体部上半の屈曲点を境にミガキの方向を替えている。853は突出する平底の底部から、大きく内湾する体部を経て強く外反する口縁部へと至る形状を示し、口縁端部は緩くつまみ上げて、受口状を示している。外面調整は、やや太筋で粗い右上がりのタタキであるが、体部下半の接合痕を境に、下部はタタキのナデ消しが比較的強く、上部はタタキが明瞭に残存する。852の胎土は密で、853はやや粗い。焼成はともに良好で、色調は灰黄色を呈する。

以上の土器は、甕が主体を占める構成であり、器種が限定されるため、帰属時期を限定することは難しい。V様式系甕Aのうち、846の底部が突出しない尖底気味のものである点は、後出の要素と考えられ、近畿道編年様相4（古）前後に船属する可能性が高い。

一方で、その他の資料については、大型の外反口縁鉢を含む点などから古相を示すと考えられ、近畿道編年様相3（新）の所産であることが窺われる。このことから近畿道編年様相3（新）から様相4（古）に位置づけられる一群と捉えることができよう。

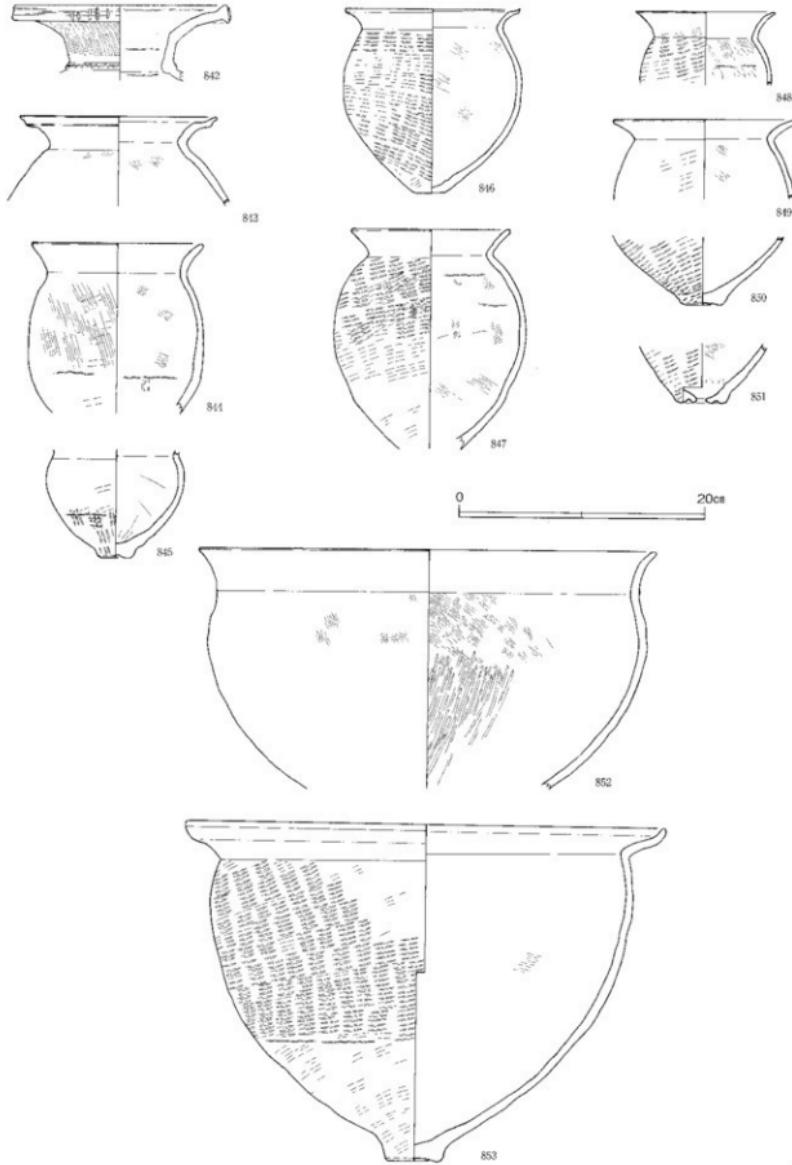


図52 溝33出土土器

溝40（図53～68） 出土土器の総量は、コンテナに換算して約50箱を数え、器台を除くすべての器種が質・量とともに極めて豊富に出土した。ここに掲げた土器の内訳は壺40点、壺111点、鉢34点、有孔鉢9点、高杯26点、手焙形土器1点である。細片を含めた個体の数量計測は行っていないが、図化可能なものは極力掲げる方針をとったため、一定の出土傾向は示し得ているものと考えておきたい。

ところで、第V章でも述べた通り本遺構の堆土は單一層である。ただし、検出し得た箇所だけでも延べ80m以上にも及ぶ溝であるため、すべてが同時期に投棄ないし埋置されたものであるかという点については検討を要する。この検証に当たっては出土位置についての情報が、極めて重要な示唆を与えることが予測されるため、1点毎に出土地区を付記するとともに、それぞれの詳細な取り上げ位置は、第1分冊の図95～100に明示した。加えて埋土中の土器の垂直位置には若干の幅も認められ、一定の時間幅を有する可能性もある。これらを総合した結果は第Ⅳ章の総括において記述を行いたい。

壺は、二重口縁壺（854～857）、広口壺（858～884・893）、小型壺（872）、細頸壺（886～891）がある。

二重口縁壺（854～857）は、残存率は不良で、それぞれ頸部から口縁部にかけて2分の1程度残存しているに過ぎない。法量上、小型で加飾性の高いもの（854・855）と、無飾のもの（856・857）の2者に分けられる。

小壺の2者は、斜外方に直線的に立ち上がる頸部から、緩く外反して伸びる1次口縁を経て2次口縁へと至る。854と855は口縁部の屈曲度合いがやや異なり、855は口縁部がやや低く、大きく外に開くことから、型式的に後出の要素を示している。調整は外面に縱方向のヘラミガキを施す。端部には、ともに竹管紋を施すが、1次口縁と2次口縁の接合部の施紋様は異なり、855は1次口縁部の下端に小振りの竹管円形浮紋を2個1対で貼り付けている。854は、竹管紋を施し、頸部には刻日を施す。

一方、大型のものは、緩く外反する頸部から大きく屈曲して伸びる口縁部を持つ。外面調整は口縁部にハケ、2次口縁の外側は横ナデで仕上げられている。内面は密なヘラミガキを施す。ともに2分の1以上残存していることから、別個体であることは明らかであるが、法量・胎土・調整・焼成のあらゆる点で近似しており、出土位置もほぼ同一地点である。

いずれも胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は灰黃色を呈する。

858・859・862は加飾壺の体部片である。いずれも残存率8分の1程度の細片であり、器形の全容は窺い知れないが、頸部が直立気味に立ち上がる点などから、上述した二重口縁壺の類である可能性が高い。858・859は肩部に簾状紋風の櫛歯列点紋と鋭角的な波状紋を交互に施しており、紋様構成上近似する。なお、862は肩部に簾状紋風の櫛歯列点紋が認められることから、前2者とはほぼ同様のものであろう。

860・863は広口壺、861は直口壺である。体部以下を欠くため、全体の器形を窺い知ることができず、詳細は不明であるが、いずれも復元口径から小型のものであることが分かる。860は胎土に角閃石を多く含む生駒山西麓産の胎土である。

広口壺は、法量から器高20cm未満の小型（874）、20～24cm未満の中型（873・875）、24cm以上の大形（865・868～870・876・883）の3者に分けることができる。

また、全体の器形から、突出する平底の底部に長胴気味の体部を持ち、体部最大径を中位ないしやや下部よりに位置させるもの（869・873～876）と、突出の低い底部に球形体部を持ち、体部のやや上寄りに最大径を位置させるもの（870・883）の2者に大別することができる。

加えて、大型のもののうち、頸部から口縁部にかけての形状には差異が認められ、頸部の立ち上がり

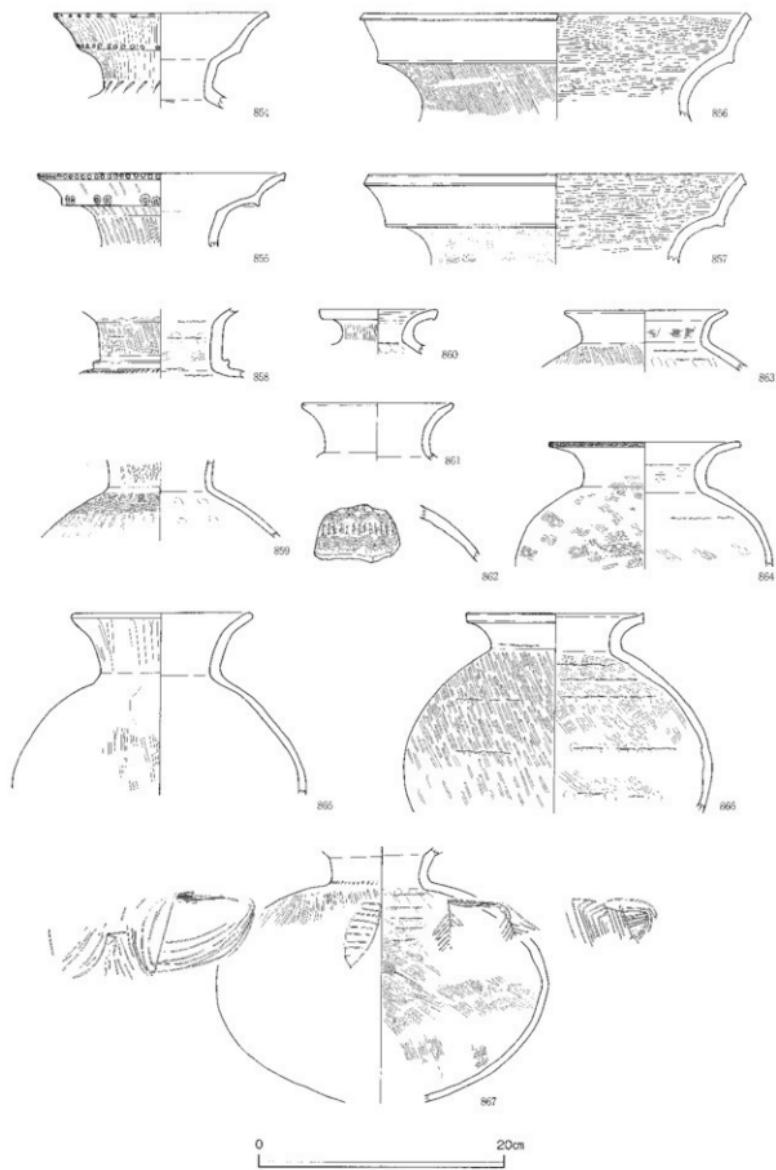


图53 满40出土土器 (1)

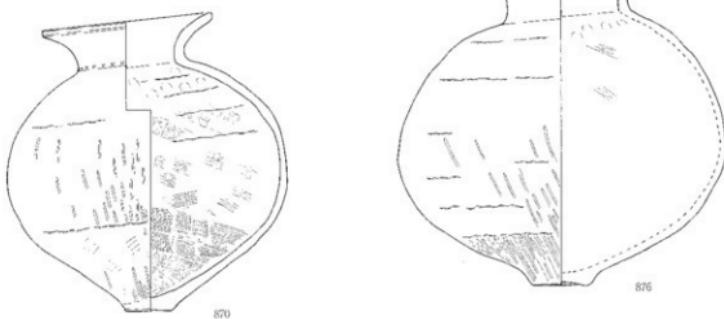
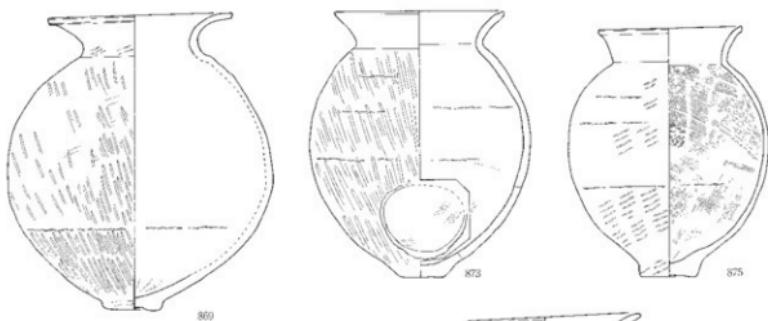
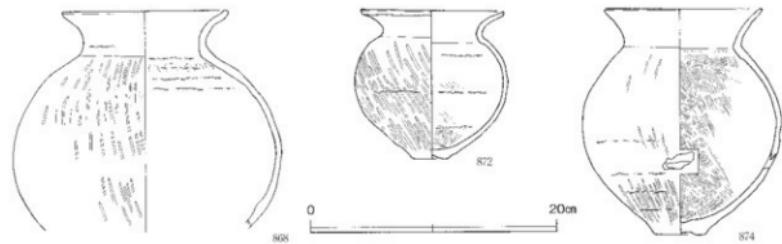


図54 满40出土土器（2）

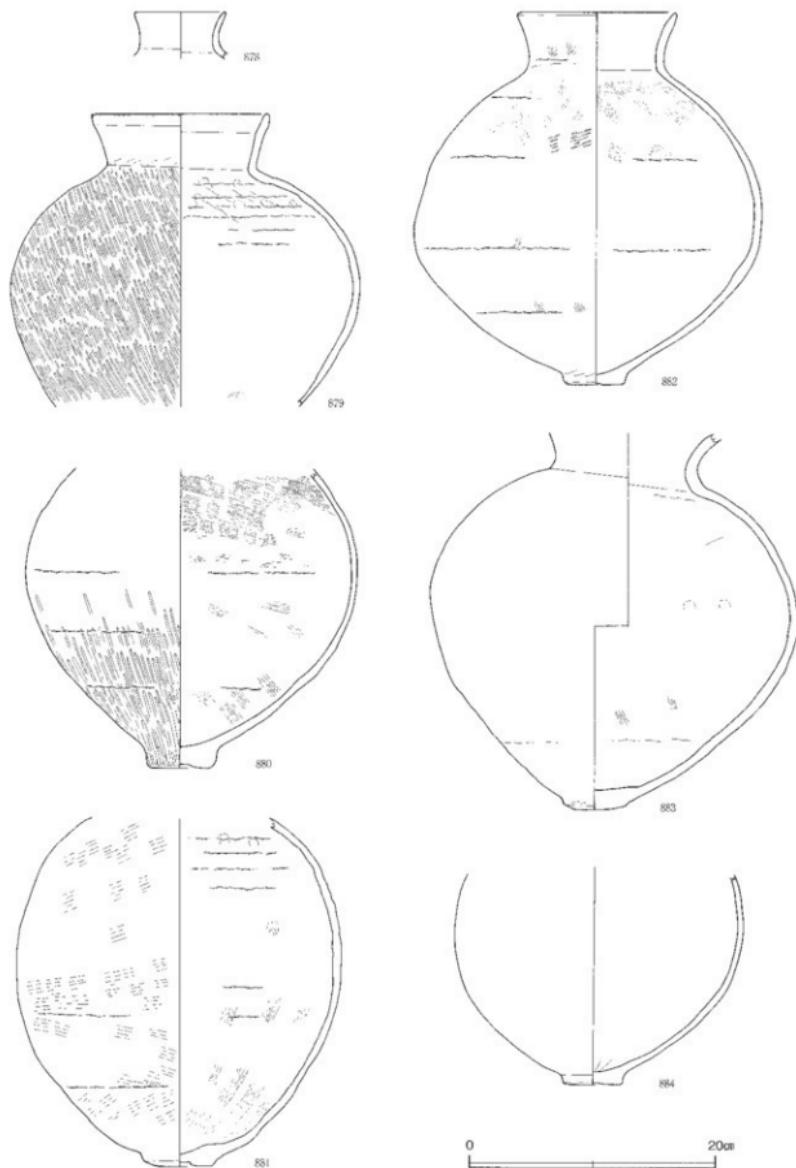


图55 满40出土土器 (3)

がやや直線的で、口縁部との境を明瞭に持つものと、頸部と口縁部の境界が不明瞭で、外反して伸びるものとの2者が認められる。調整は全体的にやや粗く、接合痕を消去しきれていない個体が多い。外面には、やや疊らな幅広のヘラミガキを施し、個体によってはタタキが残存するものも認められる。

紋様施紋は低調で、870の頸部に棒状工具による刺突が認められるのみである。873・874は体部下半に焼成後の穿孔を施している。

胎土は、角閃石を多く含み、茶褐色を呈する生陶山西龍巣に近似するもの(873)、やや粗く、色調が赤褐色を呈するもの、密で灰黄から灰白色を呈するものの3者が認められる。いずれも焼成は良好である。

867は広口壺の可能性がある壺の体部で、底部及び口縁部を欠くほかは完存する。欠損部位については、打ち欠きが施された可能性もあるが、詳細は不明である。特筆すべき点として、扁球状の体部上半に、幅1mm以下の極細の線刻による絵画紋が存在することが挙げられる。絵画は体部を全周しており、それぞれの表現の間に存在する空間から4面のモチーフ単位が想定できる。各モチーフは、弧線と直線の組み合わせによって構成される抽象的な表現手法が採られているため、詳細な意匠は不明であるが、下方に凸面を持つ弧線が多い点や綾杉状の表現があることを考え合わせると、船等を表現したものとの解釈も可能であろうか。なお、頸部の境界にはヘラ状工具の刺突による刻目が施されている。胎土はやや粗く、雲母を多く含み、3mm大の石英・長石・チャートを多く含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

879・882は大型の直口壺である。882はほぼ完形、879は体部下半を欠くほかは完存している。短く突出するドーナツ底から、最大径を中位に持つ球形の体部を経て、頸部で屈曲して斜外方に短く伸びる口縁部を有する。調整は879がヘラミガキ、882がタタキ後、ハケを施している。882の調整は不十分であるため、接合痕跡を消去しきれていない。

871・877・880・881・884・887・888は壺の体部である。

口縁部を欠くため詳細は明らかでないが、上述した広口壺ないしは直口壺のいずれかと考えられる。871を除けば底部形状はほぼ一定で、短く突出するドーナツ底である。877は平底の底部に意図不明の直径0.7cmの棒状工具による刺突痕が認められる。

872は小型の広口壺である。口縁部の2分の1を欠くほかはすべて残存している。縮小した上げ底の底部から、内湾する体部を経て頸部で強く屈曲して口縁部へと至る形状を示す。外面にはヘラミガキ、内面にはハケが施される。底部から体部下半にかけて直径6cm前後の円形の黒斑が認められる。胎土は密で焼成は良好、色調は灰黄色を呈する。

885・889・891は細頸壺である。いずれも突出の低い縮小した平底を持ち、球形ないしは扁球状の体部から強くすぼまる頸部を経て、外側に直線的に開く口縁部を有する。調整は外面に縱方向のヘラミガキ、内面にハケを施している。胎土はいずれも密で、焼成は良好である。色調は外面が黄灰色、内面及び断面が赤褐色を呈する。

886・890・892・893は壺体部である。いずれも口縁部を欠くため詳細は明らかでないが、形状が近似することから、上述した細頸壺である可能性が高い。890は底部が縮小の一途を辿り、体部も扁球状の度合いを増し、頸部もいっそう縮まるなど、型式的にみて後出の要素を多分に含んでいる。

それぞれの壺の出土地区を総括しておくと北側から順に、856・857・869・870・872・873・876・880・887・891が1A-10f、861・879・881・882・886が2A-1g、862・867・885・889・893が2A-

2 g、860・863・864・866・867・875が2 A - 3 h、862・872・878・883が2 A - 3 i、855・874が2 A - 3 j、890が2 B - 4 a、854・860・865・878が2 B - 5 b、877・884が2 B - 6 bから出土している。

形・型式、法量毎の雑駁な傾向を整理しておくと、広口壺のうち中型のものは溝の中尖部、大型のものは北側に多く分布し、細頸壺は北側に集中するという傾向が認められよう。

894～1004は壺である。図示し得た111点の内、V様式系壺Aが圧倒的多数を占め、V様式系壺Bは903・906・924・948・951・952・978・989の8点のみである。これらは点数も少なく、調整の上でもタクキを施した後に部分的に施されるハケであるため、ここでは両者を一括して扱って記述していく。

残存率は良好なものが多く、ほぼ完形のものが大半を占め、また、いずれかの部位を欠損するものについても図示範囲で全周、あるいは2分の1以上の残存率を示す。造構の性格を考える上で示唆に富む内容を示している。

以上の土器は、器高を日安とした法量から、超小型（器高11cm未満）・小型（器高11～15cm未満）・中型（器高15～20cm未満）・大型（器高20～27cm未満）・超大型（器高27cm以上）の5者に分けること

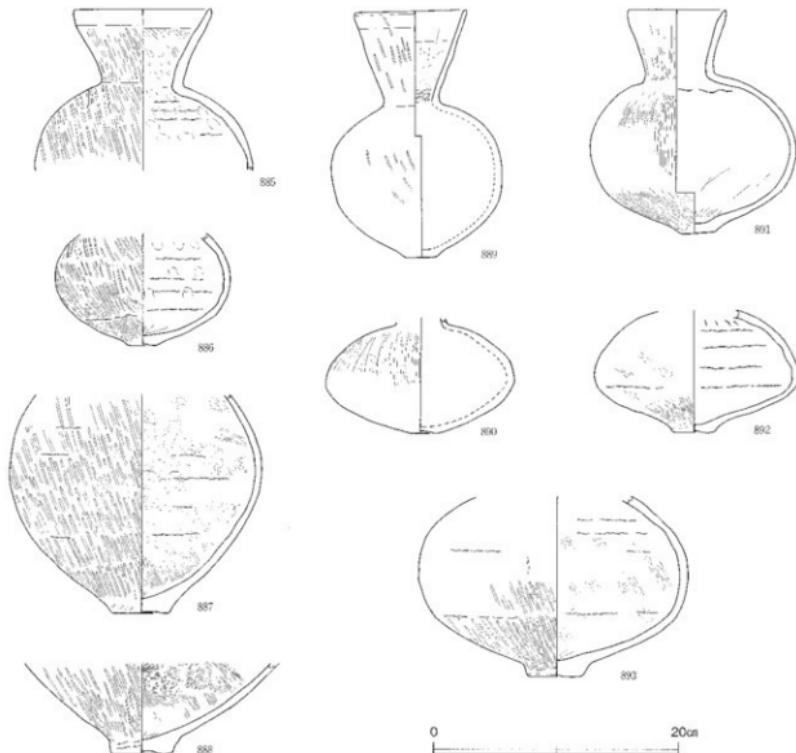


図56 满40出土土器 (4)

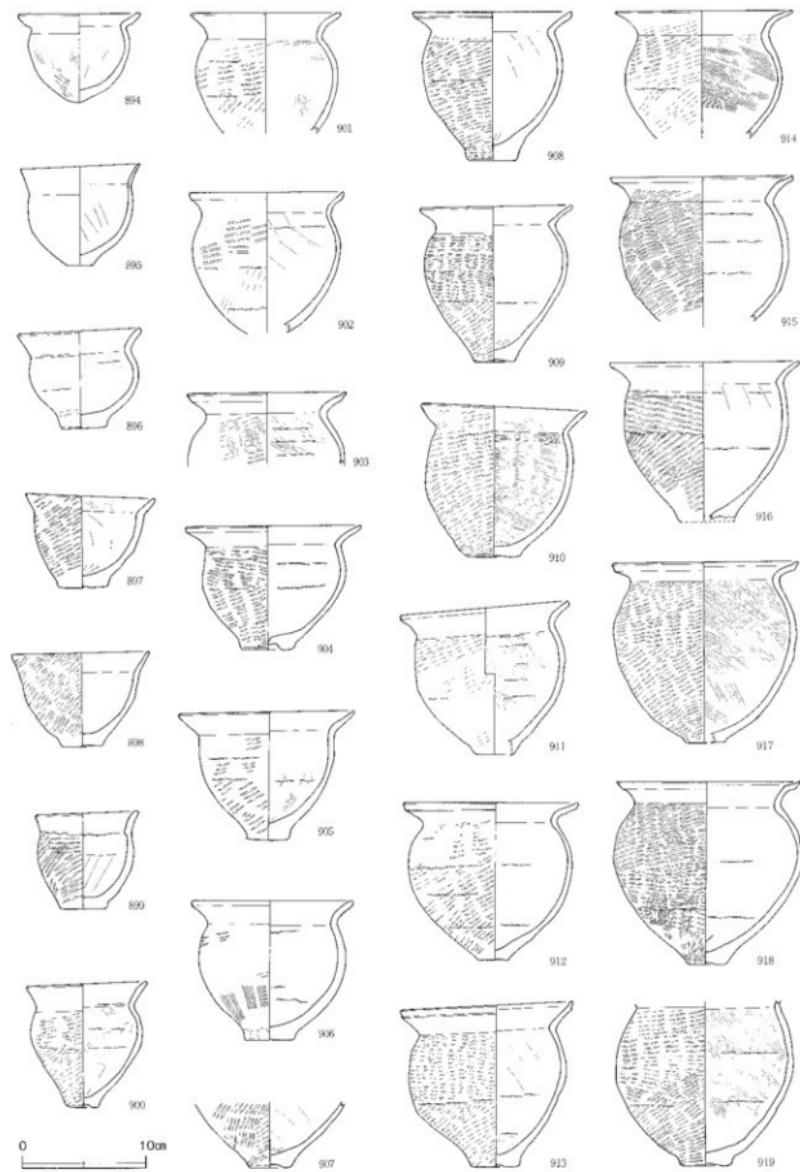


图57 满40出土土器 (5)

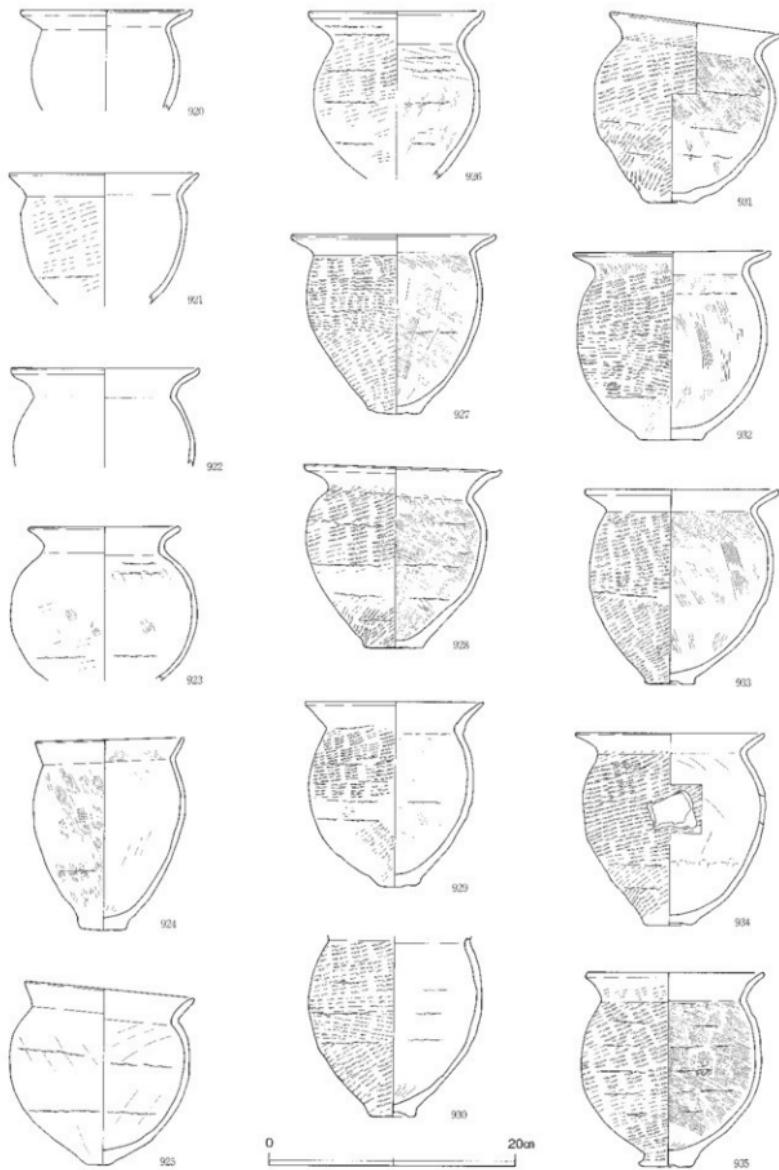


图58 满40出土土器 (6)

ができる。主に図57の上半には極小型、図57下半から図58上半に小型、図58下半から図61に中型、図62・63に大型・超大型のものをそれぞれ掲げている。なお、大型のものは、24cm前後を目安としてさらに2分される可能性もあるが、ここでは便宜的に大型として括しておくこととする。

次に形態的な特徴を整理しておきたい。底部形状は、尖底気味のもの(894)・平底・上げ底・ドーナツ底の4者が認められる。概ねドーナツ底が多数を占める状況にあるが、底径は各法量の中でも一定せず、底部の突出度は、高いもの、低いもの、突出しないものの3者が、ほぼ同比率で存在している。次に体部の形状は、長胴形で肩部付近に最大径を持つもの、長胴形で肩から中央部付近に最大径を持つもの、球形で中央部に最大径を持つものの順に多く認められる。

頸部内面の屈曲は、全体的にやや鋭角なものが多く、緩く外反する鈍い作りのものは、他遺構の出土例と比較して少ない。

また、体部最大径に対する頸部径は他遺構と比較して全体的に縮まる傾向にある。

口縁部の形状は、単に丸く收めるもの、端部に外傾する面を形成し、鈍い稜を持つもの、跳ね上げ状を呈するもの、外面をつまみ上げて強く外上方に引き出すもの、受口状を呈するもの(951・952・953・976)の5者に分けられる。

調整は、V様式系壺Aについては大半が右上がりのタタキであるが、左上がりのものもごく少量ながら認められる。また、主体を占めるほどではないが、口頭部にタタキが残る口縁タタキ出し技法によるものも散見される。

なお、器高の高低を問わず、逆円錐台との接合部分における調整ではタタキの向きを若干違えるものが多い。ただし、小型から中型のものに関しては、2~3段に分けて、異なる向きのタタキ主軸を有する分割成形に施すものが大半を占めており、大型から超大型に関しては連續ラセンタタキが施されるものが多いという傾向が認められる。

次に特徴的なものについて記述しておく。

977は内面調整にケズリを施しており、頸部内面の屈曲も鋭角である。口縁端部にはナデを施しており、外面に直立する面が形成されている。

上述した受口状を呈するものは、中型以上に類するものにのみ認められる。

これらの壺が肩部から頸部にかけてタタキ後ハケを施すV様式系壺Bである例(951・952・974)が大半を占める点は特徴的で、出土地区にもまとまりが認められる。胎土も黒褐色を呈し、その他の壺とは若干異なる様相を呈する。951・952・953は器形から北近畿から山城にかけて分布する壺にも類似しており、上方に拡張した口縁部外面に擬円線を施さない点は山城地域に散見される土器と極めて類似している。

987は、口縁部の一部が下方に向かって小さく折り曲げられており、結果として片口状を呈している。ただし、形状としては不整であり、意図的なものかどうかは不明である。またこのほか、936・934・986の体部上半には、焼成後穿孔が施されている。

なお、923については、その形状から壺と考えるべきかも知れないが、作りが粗く、外面にタタキの痕跡が残ることから壺として扱った。

同様に894は、尖底気味の底部に内湾する体部、鈍く屈曲して外上方に開く口縁部を有する点から、小型丸底土器の根形とも捉えられるが、同様に作りが粗く、タタキを施している点から壺として捉えている。

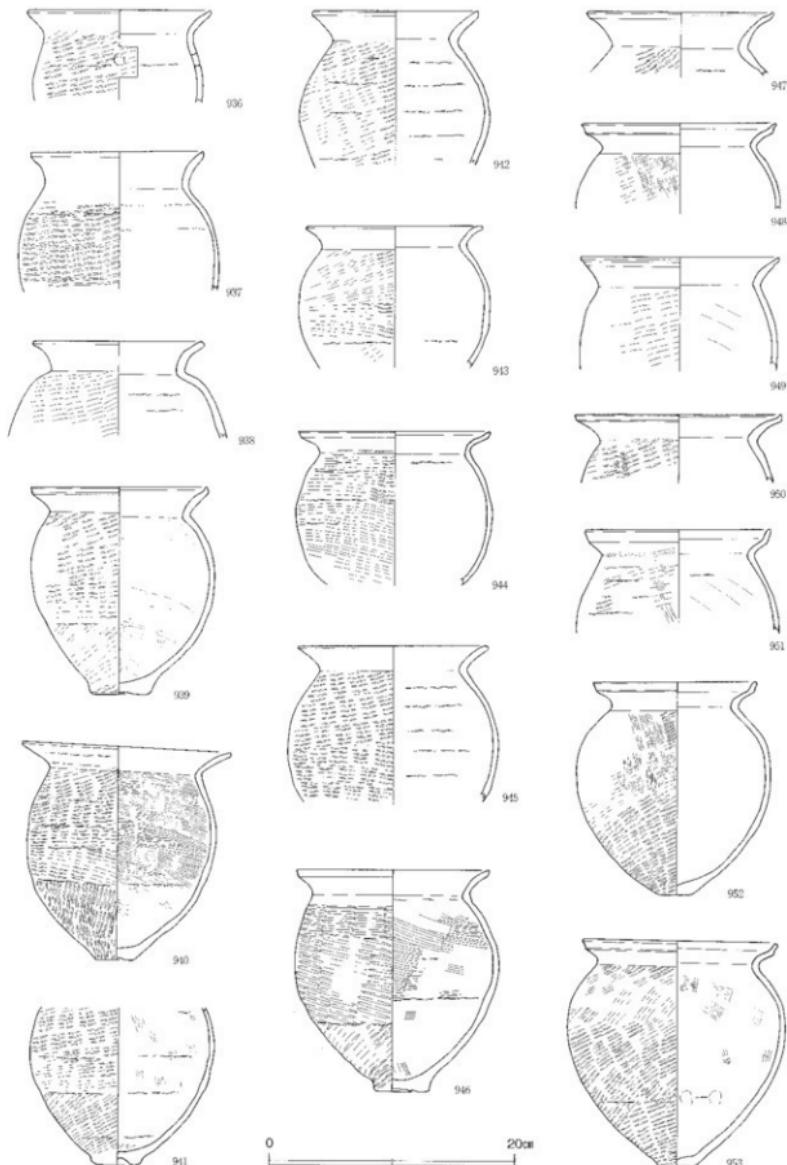


图59 满40出土土器 (7)

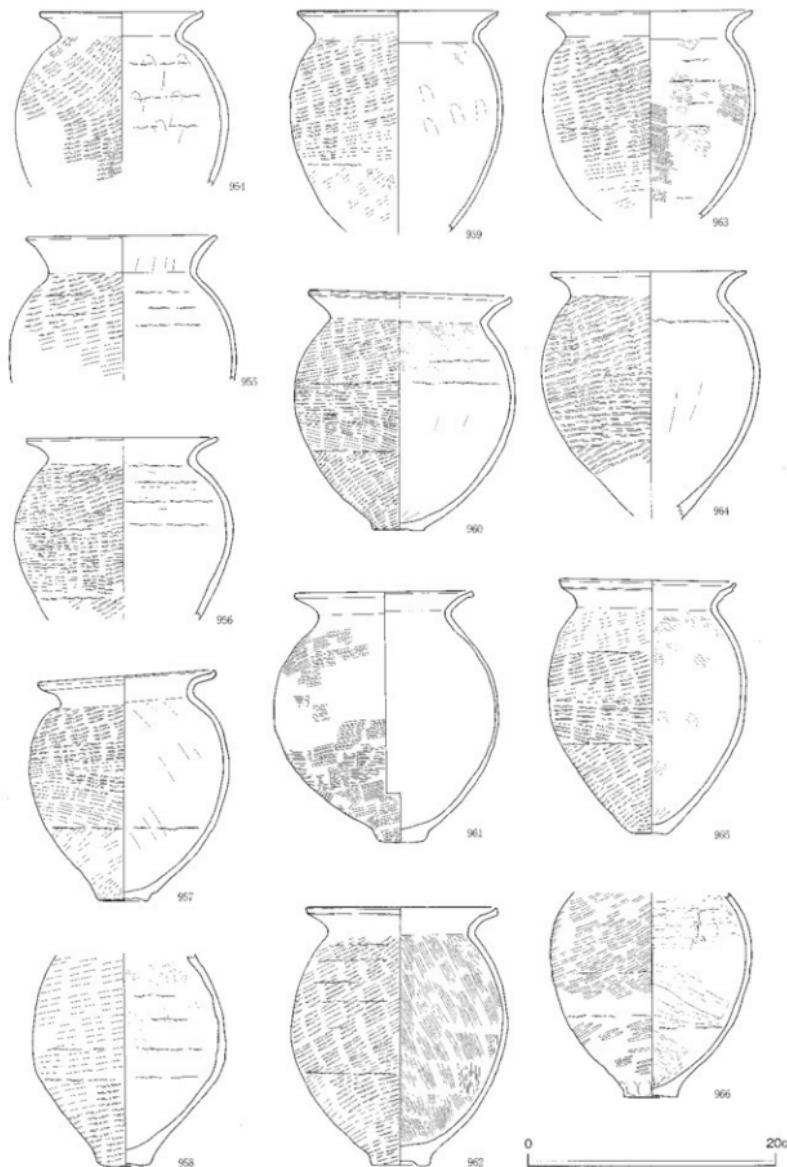
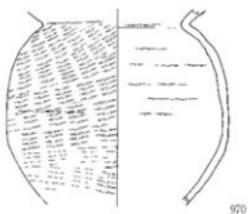
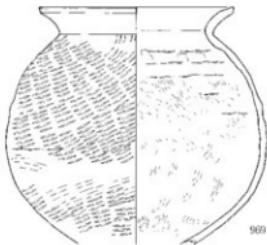
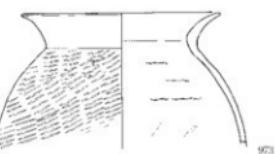
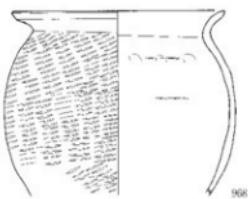
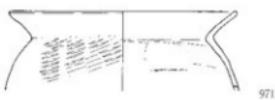
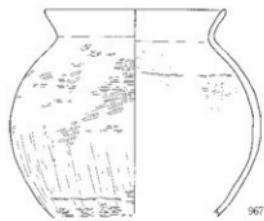


図60 满40出土土器(8)



0 20cm

图61 满40出土土器 (9)

それぞれの甕の出土地区を総括しておくと、北側から順に、902・903・909・913・916・917・919・925・927・928・931・934・948・956・960・972・974・975・980・1000～1002が1 A - 10 f、901・911・912・926・932・945・950・952・953～955・959・963・970・976・985～988・991・992・996・997・1004が2 A - 1 g、898・921・922・929・930・935・941・947・962・969・973・984・993・995が2 A - 2 g、897・900・910・914・936・938・939・951・957・965・971・977・981～983・989・994・1003が2 A - 3 h、904・905・907・908・923・924・933・940・942～944・964・968・979が2 A - 3 i、894・896・937・949・958・998が2 A - 3 j、899が2 B - 4 a、895・906・918・946・966・967・978・999が2 B - 5 b、915・920・961・990が2 B - 6 bから出土している。

以上の甕について形、型式、法量の諸点に認められる雑駁な傾向を整理しておくと、極小型のものは溝の中央部以南に集中的に認められ、型式的に後出する要素を多分に含むものは、調査地内南半部に位置する傾向が認められる。

1012～1016・1020～1023は有孔鉢である。1014・1020が完形であるほかは、図示範囲の2分の1程度が残存する。やや浅めの楕状を呈する1012を除けば、法量的には概ね近似しており、上述した中型ないし大型の甕とはほぼ同規格の逆円錐台を用いるものが多い。

底部形状は大きく2者に分けられ、突出しない尖底気味の底部を持つもの(1013・1014・1021・1022)、短く突出する底径の縮小した平底をもつもの(1012・1015・1016・1020・1023)がある。

口縁端部はいずれも丸く收めるが、調整が不十分なため、形状が一定でない箇所も存在する。

調整は、外面に右上がりのタタキを施す。1023は例外的にヘラミガキを施している。内面はハケないしナデで仕上げる。いずれも胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は灰白色(1014・1016)、灰黄色(1012・1013)、橙色(1015・1020～1023)をそれぞれ呈する。なお、1014は外面に幅2 mm前後のヘラ状工具で、上方に凸状の平行する弧線を5条線刻している。

鉢には器形から3者が認められる。1006・1007～1011・1017～1019・1026～1029は直口鉢、1005・1007・1008・1024・1025・1030・1031・1046は台付の鉢、1032～1045・1047は外反口縁鉢である。

直口鉢は1026と1027がほぼ完形であるのを除き、図示範囲の2分の1程度が残存する。

器高及び口径を目安とした法量から、小型のもの(1006・1009～1011・1018・1019・1026・1027)、中型のもの(1017・1028・1029)の2者に分けられる。

底部形状は、平底(1006・1009・1029)、上げ底(1007・1008・1010・1019・1026・1027・1028)、ドーナツ底(1011)、尖底(1017)の4者が認められ、上げ底が大半を占めている。

なお、上げ底には発達が著しいため、次に述べる台付鉢との区分が不明瞭なものも見受けられるが、外形が明瞭なハの字を呈さないものについては、便宜的に直口鉢として扱っている。

体部形状は緩く内湾して立ち上がるものが大半を占めるが、このほかに強く内湾した後、直立気味に立ち上がり半球状を呈するもの(1007・1008・1011)、直線的に外上方に伸びるもの(1006・1010・1017)が認められる。

口縁端部はいずれも丸く收める。なお1006は口縁端部がわずかに外方に屈曲しており、次に述べる外反口縁鉢に属する可能性もある。

調整は全体的に粗く、小型のものは、1011が粗い太筋のタタキ、1018がハケを施すほかはナデが施され、内面はハケが施される。1008は例外的に内面に縦位のヘラミガキが施される。一方中型のものは、外面にタタキ、内面はナデが施される。胎土はいずれもやや密で、焼成は良好である。色調は1010・

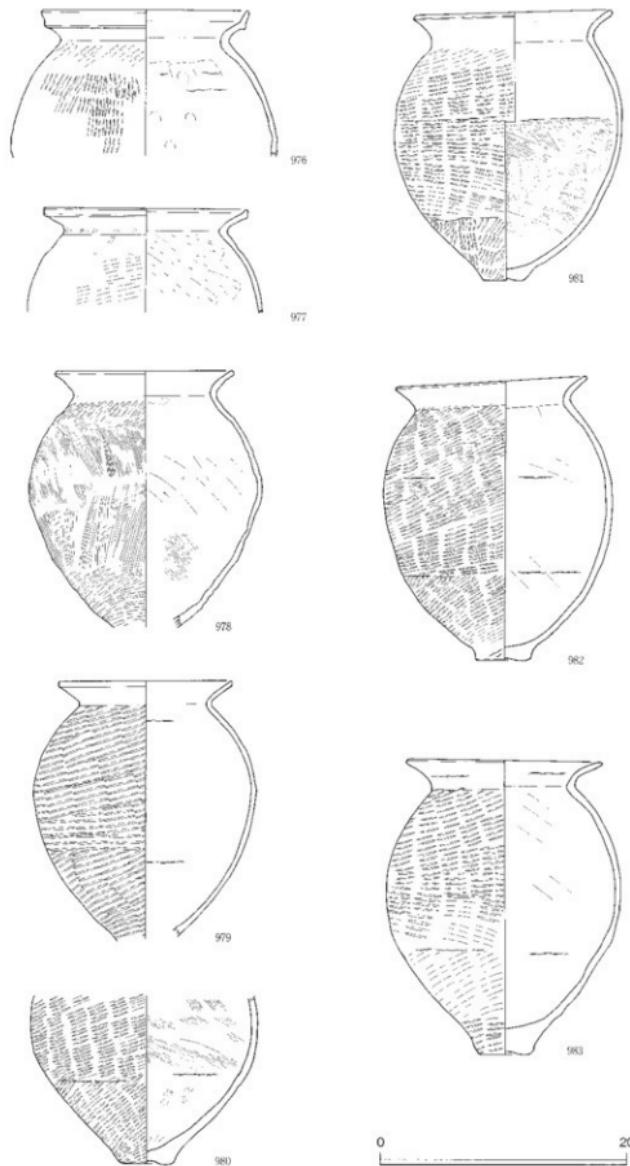


图62 满40出土土器 (10)

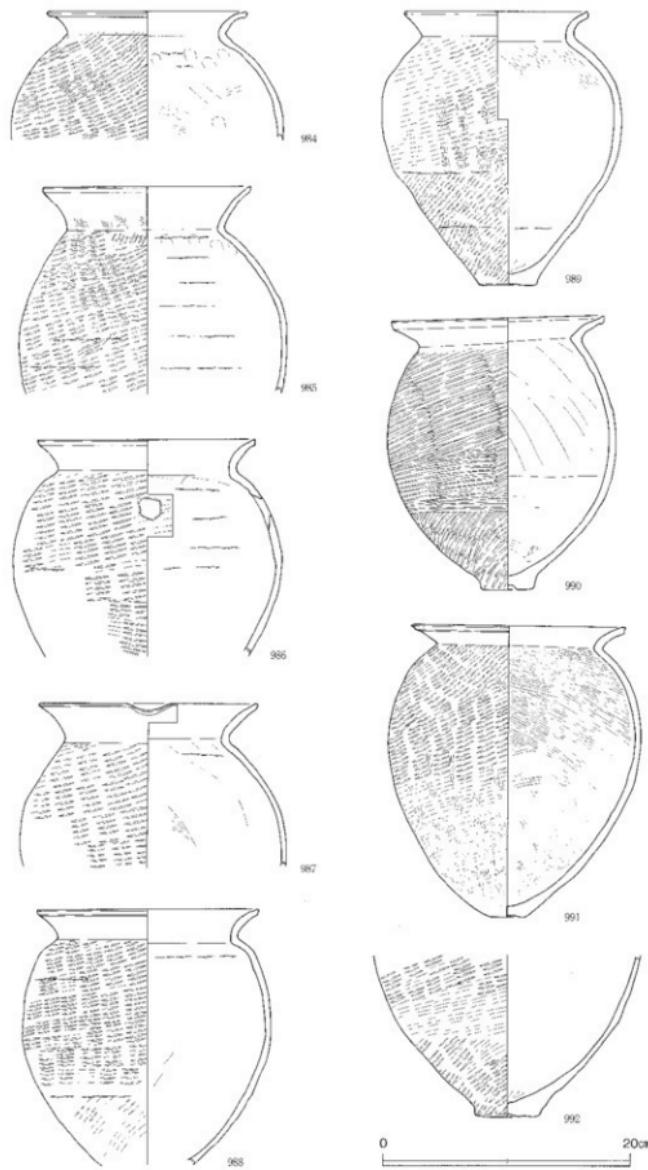
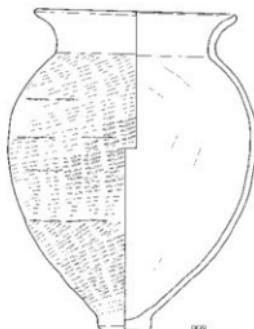
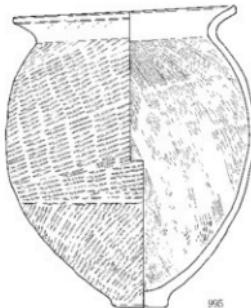
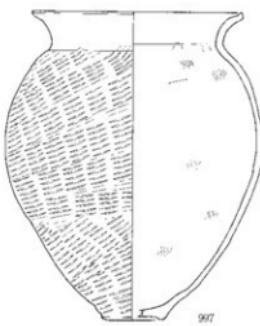
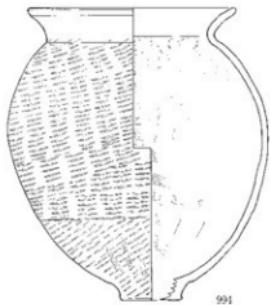


圖63 滿40出土土器 (11)



0 20mm  
図64 满40出土土器 (12)

1028・1029が灰白色を呈するほかは、すべて灰黄色を呈する。

1005は完形のミニチュア土器で、直口鉢を模したものと考えられる。

手捏ね成形されており、外面には指頭圧痕が認められ、内面にはハケが認められる。胎土は密で、色調は灰白色を呈する。

台付鉢は1031が完形であるのを除き、図示範囲の3分の2が残存する。法量上は近似しており、中型

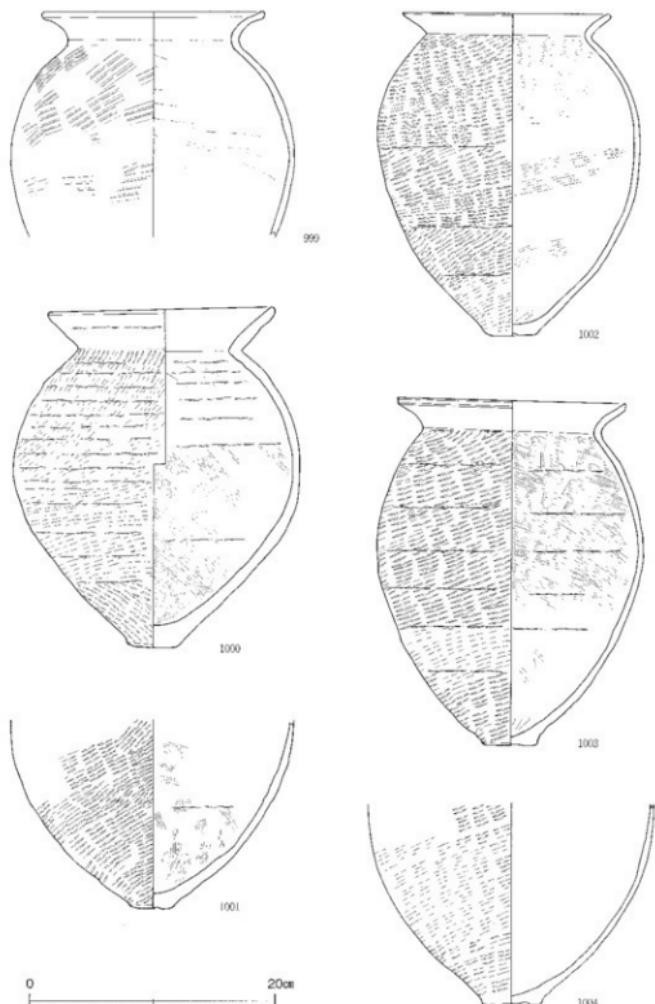


図65 满40出土土器 (13)

の鉢に短く屈曲して開く脚台を付したものが大半である。

鉢部の形状から、台付鉢のうち、緩く内湾して立ち上がるるもの(1031)、強く内湾した後直立気味に立ち上がり半球状を呈するもの(1030)の2者が認められるほか、外反口縁鉢(1046)も認められる。調整は内外面ともに密なヘラミガキを施すものが多く、上述の台付鉢と比較すると丁寧な作りとなっている。

胎土はいずれも密で、焼成は良好、色調は灰黄色を呈する。

外反口縁鉢は1032・1033・1035・1036・1044・1045がほぼ完形、そのほかは図示範囲の2分の1程度が残存する。

法量によって、それぞれ小型(1032・1047)、中型(1033~1037・1043~1045)、大型(1038~1042)に分けられる。

底部形状は平底(1038・1045・1047)、ドーナツ底(1036・1037・1039・1040・1044)、上げ底(1032~1035)の3者がある。

体部から口縁部にかけての形状は、緩やかに内湾して伸び、頸部で弱く屈曲して外上方に伸びる口縁部を持つもの(1032~1037・1040・1042)、きつく内湾して立ち上がる扁球気味の体部に強く屈曲する頸部を経て横方向に伸びる口縁部を持つもの(1040・1041・1043~1045)の2者に大別できる。

口縁端部の形状は、丸く取めるもの(1032~1036・1039・1041・1042・1043)、直取り気味に仕上げ外傾する面を成すもの(1037・1040)、外上方に強く摘まみ上げ外面に段を成すもの(1038・1044・1045)の3者が認められる。なお、1040は口縁部の一部を下方に折り曲げ、片口としている。

調整は内外面ともにヘラミガキを密に施すものが大半を占め、稀にタタキを施すものが認められる程度である。台付鉢同様、直口鉢と比較すると作りは丁寧な印象を受ける。

胎土はいずれも密で、焼成は良好である。色調は1043が灰白色、1033・1035が灰黄色を呈するほかは、すべて橙色を呈する。

出土位置からみた傾向としては、溝を南北に大きく2分した際、台付鉢及び外反口縁鉢の小・中型、扁球気味の体部を持つ大型のものが北半に集中し、直口鉢及び、大型の外反口縁鉢の緩く内湾して立ち上がるものが南半に集中する傾向が認められる。

手焙形土器(1048)は1点を確認した。鉢部はやや浅く、覆部の高さはこれを凌駕する。調整は全面ハケで仕上げられているが、調整が不十分な箇所も多く、接合痕の消去が完全に及んでいない箇所も多い。鉢の受部立ち上がりは鈍く、体部に突帶も認められないことから、周溝墓出土資料よりも後出の要素を多分に含んでいるものと考えられる。

高坏(1049~1074)は26点を掲げた。楕形高坏・有稜高坏・有段高坏の3者がある。

楕形高坏(1049~1052)は1051を除き、完形のものは認められず、いずれかの部位を欠く。

1051は全体的に粗雑な作りで、やや深めの坏部外面にはタタキが残存し、脚部の作りも凹凸が多く、不整である。脚柱部と脚裾部の屈曲はやや鋭く、裾部上部には不整な三角形を呈する透かしを推定3方向に向けて穿っている。1049・1050は、浅めの坏部に、緩く聞く脚部を有している。坏部は摩滅が著しいが、脚部を中心に縱方向のヘラミガキが認められる。

脚部高に比して脚柱部が明晰に立ち上がっている点は、やや古相を示すといえるが、総体として見れば、脚部高の低脚化が進行しており、近畿道編年様相4(古)に相当する一群と言えるであろう。

有稜高坏(1053・1058~1063・1066~1070・1073・1074)は、1061~1063・1068・1074がほぼ完形であるのを除き、いずれかの部位を欠く。

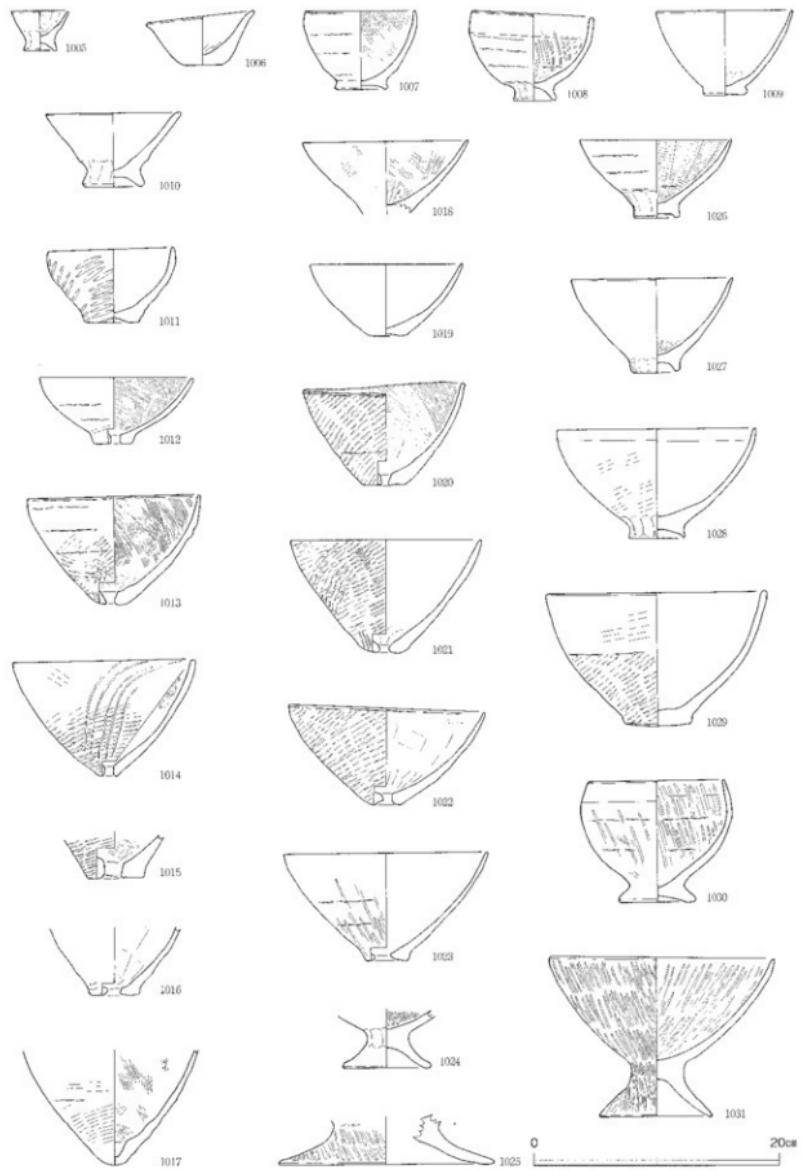


圖66 滿40出土土器 (14)

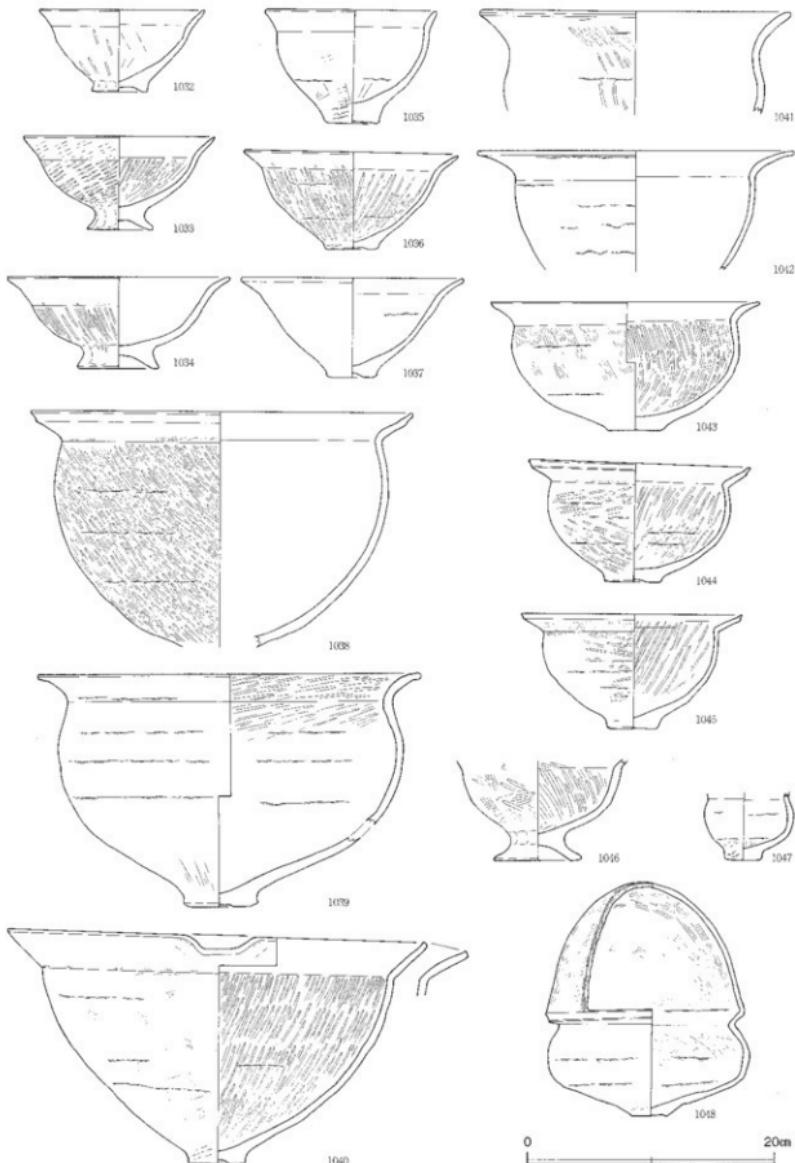


图67 满40出土土器 (15)

器高を目安とした法量から、小型のもの(1053・1058~1060)と大型のもの(1061~1063・1073・1074)の2者に分けられる。1063は高坏口縁部の外反度が強く、端部は強く横方向につまみ出しており、加えて短く上方につまみ上げている。1073の後部はやや銳角で、しっかりとしており、やや段状をなす。1074は脚部の屈曲はシャープで、脚裾部上部には円形透かしを4方向に穿っている。外面は密な縦方向のヘラミガキを施し、坏部内面には斜め横方向のヘラミガキを施している。脚柱部は中実で、脚頂部内面には指頭状の刺突が施される。1053・1058~1060はいずれも残存率は悪く、1060を除いて全体の形状を窺い知ることはできない。

1071・1072は有段口縁高坏である。1071は強く内湾して立ち上がる坏体部に、強く屈曲して内湾する口縁部を有する。

以上の土器は、他遺構出土土器と比較して有稜高坏の口縁部の発達が良く、口径比・口縁比の示す指數も新相を示している点や脚裾部の屈曲が明瞭であることを根拠に、近畿道編年様相3(新)~様相4(古)に帰属すると考えることができる。

加えて、既に述べた壺も連続ラセンタタキを施すものが多数を占め、体部も球形化を達成し、頸部内面の後がやや銳角である点もこのことを傍証すると言えよう。

のことから、本遺構出土土器には、一定の時間幅を想定できる。但し、既に述べてきたように検出状況の整理から認められる出土位置の相違は、傾向としては法量別ないしは形・型式別な差異に拘っている場合が多く、地区別のまとまりが時期差を示すという当該期の土器の器種組成の欠落を想定しない限りは困難である。

しかしながら、今回の報告においては、研究会第1次調査に該当する03-1工区分で資料が得られなかったという不確定要素がある点、加えて、各器種のうち、新相を示す資料が南半部分より得られていることが注目できる。

本遺構及び、周溝墓間の先後関係を含むこの問題については、墓域の成立・展開と葬送祭祀の在り方という微妙な問題をはらむため、第Ⅵ章において、土器の検討を含めて検討を加えたい。

また、研究会第29次調査の久宝寺遺跡SW6003から出土した土器と、近似した傾向を示す高坏が出土していることは、当地域における弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての土器が示す高坏の型式変化の速度が速くなることを示している可能性があり、今後の河内平野南部地域における当該時期の編年の指標となる資料を得ることができたということができる。

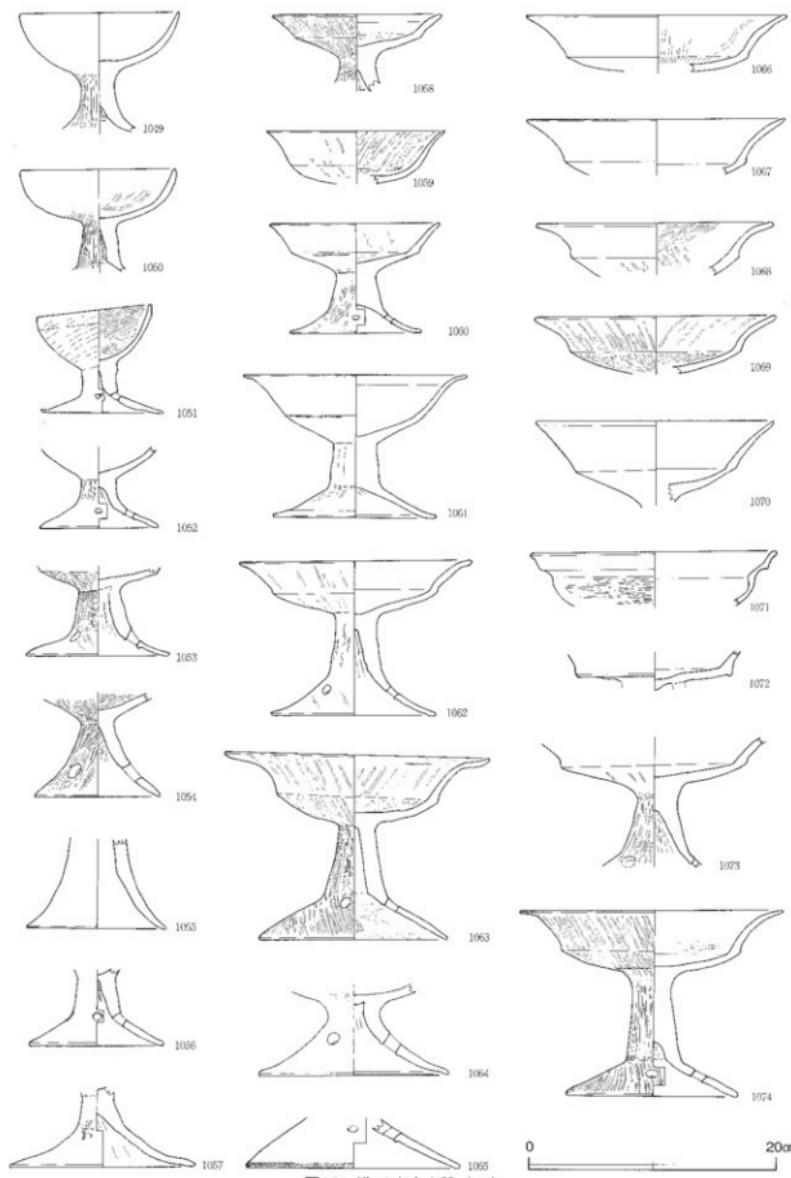


圖68 满40出土土器 (16)

溝38（図69） コンテナ約半箱分の土器が出土した。出土量としてみれば少ないが、遺構の規模に対する密度は高い。しかしながら、大半が細片であったため、図示できたのはわずか2点であった。

1075はV様式系壺Bである。底部全体と口縁部の約2分の1を欠くほかは完存している。緩く内湾して立ち上がる体部から、屈曲して外上方に伸びる口縁部を持つ。口縁端部は面取り気味に仕上げられ、やや外傾気味の面を形成して鈍い稜を成す。体部外面はタタキ後ハケで仕上げられ、内面はナデが施されている。胎土はやや粗く、2mm前後の石英・長石・チャートを多く含む。焼成は良好、色調は赤褐色を呈している。なお、体部下半は全面に煤が付着する。

1076は小型の外反口縁鉢である。約2分の1が残存する。底部は上げ底で、内湾して立ち上がる体部から、わずかに屈曲して内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。体部と口縁部の境界は、外面は不明瞭だが内面の稜は明瞭である。調整は外面に右上がりのタタキを施すが、上半はナデ消されている。内面は摩滅が著しく、底部付近にクモの巣状ハケの痕跡がわずかに認められるのみである。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は外面が黄灰色、内面及び断面が赤褐色を呈する。

以上の土器は、出土量が僅少な上、器種も壺・鉢に限定されるため詳細な帰属時期を比定するには至らないが、1076の底部が上げ底を示し、口縁部の屈曲が鈍くなる点は比較的新しい要素と見ることができ、近畿道編年様相3の範疇に収まるものと考えることができる。

溝39（図69） コンテナ約1箱半の土器が出土した。埋土は上下2層に分けられるが、深度が浅いため、遺物の出土標準を明瞭に弁別し得ていない。鉢・壺が出土している。

1077・1078は直口鉢である。いずれも2分の1程度残存している。法量から大小2者に分けられる。1078はドーナツ底、1077は罐部を欠損しているが、残存部位の様相から上げ底と想定できる。ともに緩く内湾して立ち上がって口縁部へと至る形状を示すが、1078の口縁端部は調整が不十分なため不整である。1077は外面ともにナデ、1078はハケで仕上げられる。胎土は1077が粗く、1078が密である。焼成はいずれも良好で、色調は1077が赤褐色、1078が灰黄色を呈する。

1079は壺、1080はV様式系壺Aである。ともに残存率は悪く1079が口縁部の8分の1、1080が4分の1程度である。1080はやや突出気味のドーナツ底から、体部最大径を中央部に位置させる球形の体部を経て緩く屈曲して口縁部へと至る。体部下半には逆円錐台との接合痕が明瞭に認められ、タタキの軸も若干異なる。いずれも胎土はやや密で、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

以上の土器は、詳細な帰属時期を比定し難いが、1080の体部が中央部に最大径を持つ球形であることや頭部の綺まりが良いことから近畿道編年様相3（新）から4（古）に位置づけられると考えられる。

溝43（図69） コンテナ2箱分の土器が出土した。細片が中心を占めているが、残存率の高い土器も小数ながら認めることができた。ここには、壺・鉢・高杯が掲げている。

1081～1083はV様式系壺Aである。残存率は1081が約4分の1の細片であるのを除き、3分の2以上と良好である。器高を目安とした法量から大小2者に分けられ、前者は、やや突出するドーナツ底から体部最大径を中位に持つ球形体部を経て、外反して口縁部へと至る。一方後者は、突出する平底から最大径を上位に持つ体部を有する。1082は、体部下半に左上がりタタキを施した後、右上がりのタタキを施すほか、内面に板ナデを施す。胎土はいずれも粗く、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

1084は小型の直口鉢である。約3分の2が残存する。突出する平底の底部から内湾気味に立ち上がる。口縁端部の形状は、調整が不十分なため不整である。体部外面下半には、わずかにタタキを残すがナデで仕上げられている。胎土はやや密で、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

1085・1086は有縫高坏である。1086は4分の1程度を欠くほかはほぼ完存している。1085は縫部がやや鈍く、緩く外反する口縁部を持つ。1086は脚部の屈曲がやや明瞭で、脚柱部は中実である。坏部はやや鈍いが、部分的に緩やかな段を成す箇所も認められる。口径は縫径のほぼ倍の値を示し、口縁部の発達が著しい。外面にはヘラミガキを施す。胎土は密で、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

以上の土器は、1082が最大径を中位に持つ球形体部であること、口縁部の発達が著しく中実の脚部を有する高坏(1086)の存在から、近畿道編年様相3(新)から4(古)に位置づけることができる。

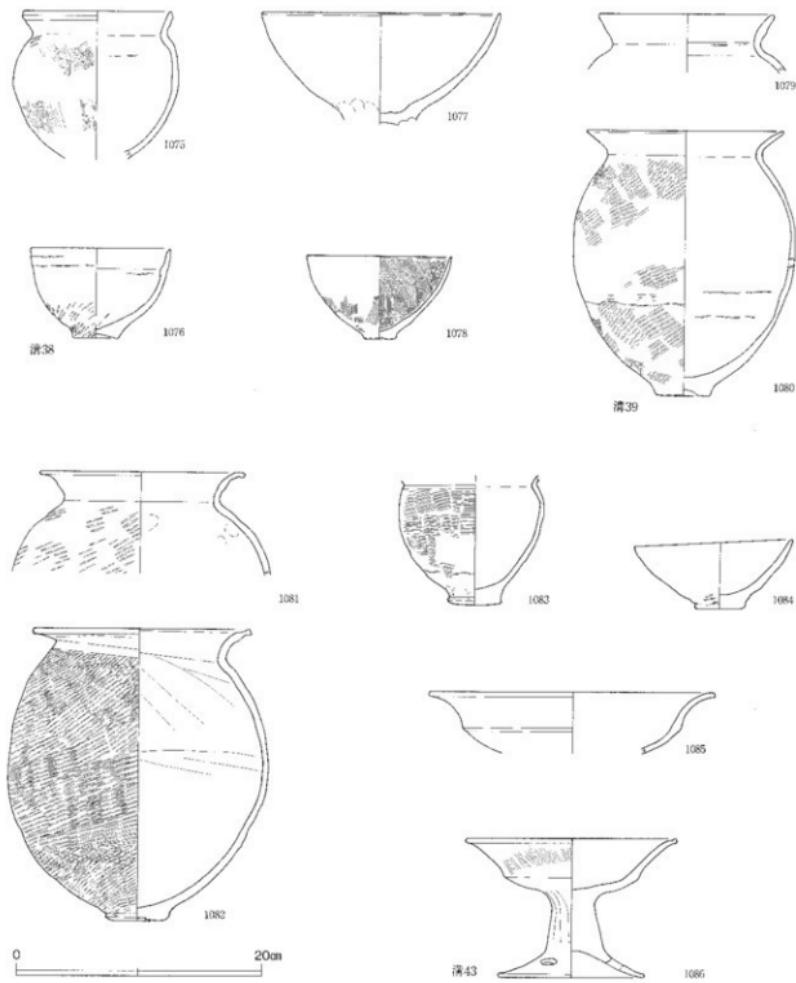


図69 溝38・39・43出土土器

**土坑37（図70）** 細片を中心に約120片の土器が出土しているが、図示し得たのはV様式系壺A（1087・1088）2点のみである。残存率はともに悪く、1087は口縁部から体部上半までの4分の1程度、1088は底部のみである。1087は緩く外反して端部を丸く収める口縁部を持つが、頸部内面の稜は部分的にやや鋭角である。口縁端部は弱くつまみ上げられており、外面に外傾する面を形成する。外面は右上がりの粗いタタキ、内面には板ナデの痕跡が認められる。1088はドーナツ底。いずれも胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は1087が黄灰色、1088が赤褐色を呈する。

詳細な帰属時期は不明だが、近畿道編年様相3～4に収まるものと考えられる。

**土坑38（図70）** 細片を中心に約50片近くの土器が出土したが、図示し得たのはV様式系壺A（1089）1点のみである。残存率は悪く、口縁部から体部上半にかけての4分の1程度である。頸部で屈曲し、外反気味に伸びる口縁部を持つ。頸部内面の稜はやや鋭い。口縁端部は外上方に強くつまみ上げられており、外面に緩やかな段を成す。外面は右上がりのタタキ、内面はナデが施されている。胎土は粗く、焼成は良好、色調は内外面が灰黄色、断面が赤褐色を呈する。帰属時期は、口縁端部の形状と頸部内面の屈曲がやや鋭角であることを勘案すると、近畿道編年様相3（新）～4（古）に求めることができよう。

**土坑43（図70）** 20片ほどの細片が出土したが、図示可能なものはV様式系壺A（1090）1点のみであった。やや突出するドーナツ底で、外面には左上がり気味のタタキ、内面にはクモの巣状ハケ目の痕跡が認められる。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。帰属時期は不明。

**土坑44（図70）** 40片ほどの細片が出土し、加飾広口壺（1091）1点を図示した。残存率約4分の1の細片である。直線的に外方へ伸びる口縁部は、端部を上下に小さく拡張し、やや外傾する面を形成する。端面には7条の櫛撚波状紋を1帯めぐらし、2個1対の竹管円形浮紋を付している。胎土は密で、稀に3mm大の長石・チャートを含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。詳細な帰属時期は不明だが、口縁端部の形状と、加飾の様相から、近畿道編年様相3に収ると考えられる。

**土坑47（図70）** 細片を中心に、コンテナ約半箱分の土器が出土した。

1092はV様式系壺B、1093は壺ないしは鉢の底部、1094・1095はV様式系壺Aである。残存率は1095が図示範囲の大半が残存するのを除けば概して悪く、8分の1以下の細片である。したがって径の復元には若干の疑問が残る。1092は緩く外反して外方に伸びる口縁部を持ち、頸部内面の稜はやや鋭い。1094は、頸部で弱く屈曲して外反する口縁部を有する。1095は突出するドーナツ底に球形体部を持ち、体部最大径はほぼ中位にある。内面調整は、底部にやや乱雑な放射状の工具痕が認められるほか、ナデが施されている。底部付近には直径1.5cm前後の孔が穿たれているが、外面のタタキがこの穿孔周辺のみ意識的にナデ消されている状況が看取できた。穿孔部の器壁が若干荒れているものの、明らかな焼成後穿孔とは様相を異にしており、焼成前の半乾燥状態で施された孔である可能性が高い。

1096は有稜高杯である。脚部及び口縁部の約2分の1を欠くが、そのほかは完存する。脚部はやや扁平な裾部から中空の脚柱部にかけて緩やかに屈曲しており、脚柱部には推定4方向の円形透かしを穿つ。杯部はやや浅いが、口縁部の発達が著しく、稜部から上方に短く立ち上がった後大きく外反して伸びる。口縁端部は丸く収めるが、わずかに上方に凸状を成している。全体的に摩滅が著しいが、脚柱部外面にはヘラミガキ、脚柱部内面にはハケの痕跡が認められる。胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は赤褐色を呈する。口縫比は64.3、口縁比は23.9を示す。

1097は器台である。口縁部を欠くため全容は窺い知れない。胴部はかろうじて残存するが、形骸化の一途にある。脚部は良く発達し、脚柱の端部には面を形成する。外面にはハケを施し、内面上半部はナ

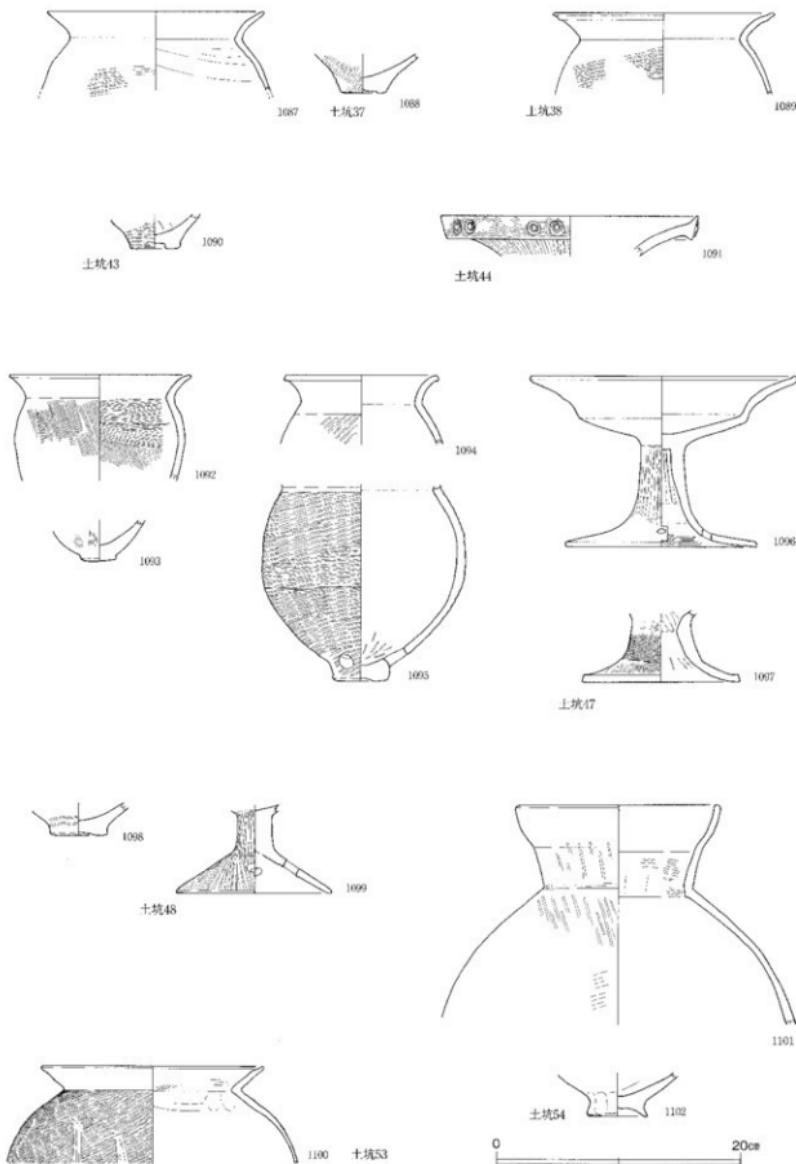


图70 土坑37·38·43·44·47·48·53·54出土土器

テ、下半部にはハケを施している。胎土はやや粗く、焼成はやや甘い。色調は灰黄色を呈する。

以上の土器は、体部の球形化が進行した壺、口縁部の発達した高壺や胴部の縮小した器台の存在から、近畿造編年様相3（新）に位置づけることができる。

**土坑48**（図70） 2A-9-iに位置する土坑で、周溝墓9の北側周溝端に接続する。土器はコンテナ半箱分出土している。細片が大半であり、図示に耐え得るものも少量であった。

1098はV様式系壺Aの底部片である。やや突出気味のドーナツ底である。体部外面にはタタキを施している。胎土はやや粗く、焼成はやや甘い。色調は灰黄色を呈する。1099は高壺の脚部片である。脚部の器高が低く、脚部の屈曲も鋭いため、低脚の椀形高壺と考えられる。脚部の上部には、大振りの円形透かしを4方向に穿つ。胎土は密で、焼成も良好、色調は褐色を呈している。

以上の土器は、高壺の様相から近畿造編年様相4（古）に位置づけることができる。

**土坑53**（図70） 2A-7-iに位置し、周溝墓31の南西側に隣接する浅い土坑状の落ち込みである。土器は細片を中心にコンテナ半箱分出土したが、図示し得たのは壺1点(1100)のみである。

1100は庄内型壺である。図示範囲はほぼ完存するが、体部以下を欠く。大きく内湾する体部に頭部で鋭く屈曲し、短く直線的に伸びる口縁部を有する。頭部内面の稜は鋭い。口縁端部は丸く收めるが、部分的に上面が窪む。外面には細筋のタタキを施し、部分的に工具によるナデが及んでいる。内面は板ナデと頭部直下に指オサエが残存するほか、口縁部には横向方向のハケが施される。胎土は密で、焼成は良好、色調は灰白色を呈する。今回の調査を通じて典型的な庄内型壺は本例に限定される。帰属時期は近畿造編年様相4（古）に求めることができる。

**土坑54**（図70） 2A-6-hに位置し、周溝墓30と31の間に位置する土坑より出土した土器である。出土総量は少なく、コンテナ半箱分である。

1101は壺である。図示範囲のうち、体部の一部を欠くほかは完存する。大きく内湾する体部から頭部で鋭く斜外方に立ち上がり、口縁部の半ばで緩く湾曲する形状を示す。体部外面には、わずかにタタキの痕跡が認められるが、全面に継位のヘラミガキを施している。内面は摩滅が多いものの、口縁部にハケが認められる。胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は灰白色を呈する。

1102は鉢の底部片。底部は上げ底である。胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は暗褐色を呈する。

1101は近畿造編年様相7に帰属すると見られ、1102の帰属時期は不明である。

**土坑49**（図71） コンテナ4箱分の土器が出土した。図示可能な土器が多く、18点を図示することができた。内訳は、壺5点、壺5点、鉢3点、有孔鉢1点、高壺3点、ミニチュア土器1点である。

壺は、加飾二重口縁壺(1103)と広口壺(1104・1105・1113・1114)、小型壺(1111)がある。

1103は体部を欠き詳細は不明であるが、頭部と体部の境界は不明瞭で、体部上半も緩く外湾するなど、特徴的な形状を示す。1次口縁部には刻みが施され、2個1対の竹管円形浮紋を付している。また、肩部には、上から5条の沈線・列点線・鋭角に屈曲する波状紋を施している。胎土はやや粗く、1mm大的長石・石英・角閃石を多く包含する。焼成はやや不良で、外面の色調は暗褐色、内面及び断面は赤褐色を呈する。

1104・1105・1113は広口壺である。1114は口縁部を欠くが、体部及び頭部の形状が1113と近似することから、広口壺と考えることができる。残存率はいずれも悪く、図示範囲の4分の1程度である。口縁部及び頭部の形状から、鋭角に屈曲して斜外方に伸びる口縁部を有するもの(1104・1105)と、上方に立ち上がる頭部から、水平方向に強く外反する口縁部を持つもの(1113・1114)の2者が認められる。調整

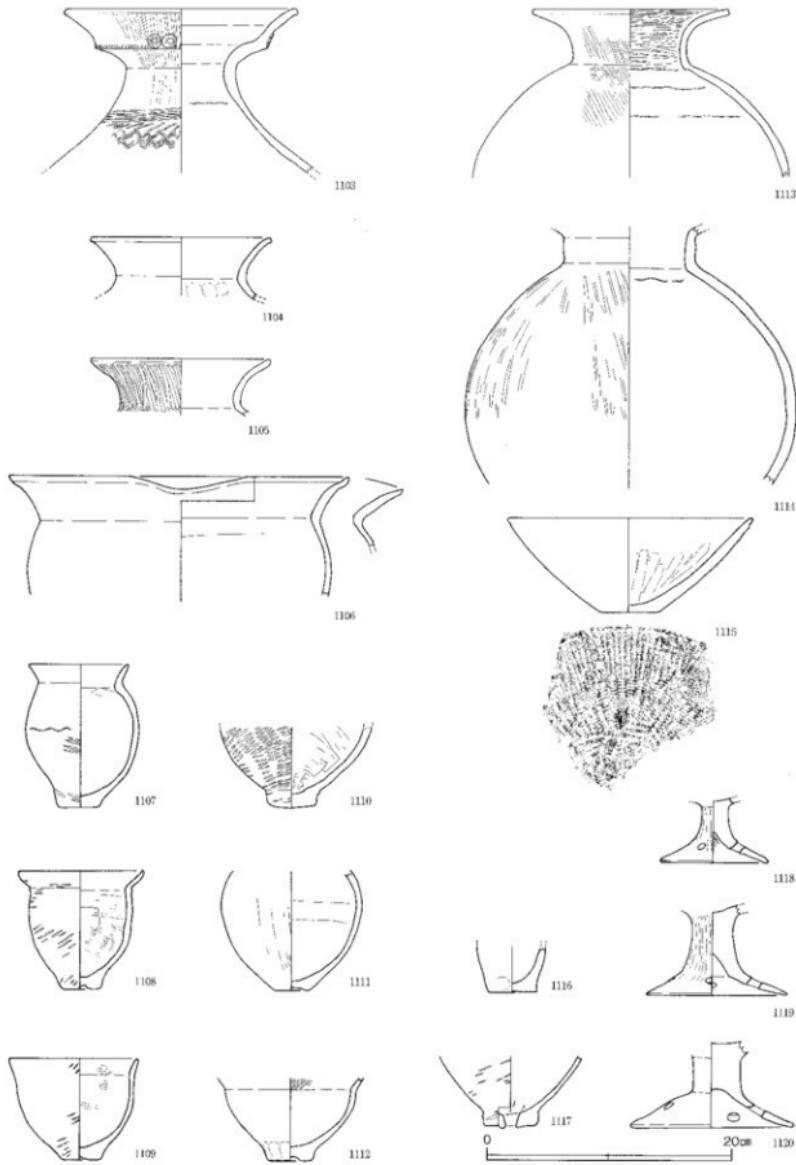


図71 土坑49出土土器

は、内外面ともにヘラミガキを施す。いずれも胎土は密で、焼成は良好、色調は黄灰色を呈する。

1111は頸部以上を欠くが、残存部位の様相から小型の壺ないしは壺と推測される。縮小の著しい上げ底から球形の体部へと至る。調整は内外面とともに丁寧なナデが施される。胎土はやや密で、焼成はやや甘い。色調は外面が灰白色、内面が赤褐色を呈する。

1107～1110はV様式系壺Aである。全容を窺えるものはすべて小型であるが、1110は残存部位の最大径から中型のものと想定できる。形状は大きく2省に分けられ、突出する平底に、球形体部を持つもの(1107・1110)と、突出の弱いドーナツ底に半球状の体部を持つもの(1108・1109)の2者がある。口縁端部は1108が短く上方につまみ上げられるほかは、丸く収められている。内面の調整にはハケないしは板ナデを施す。いずれも胎土はやや粗く、焼成はやや甘い。色調は1107・1108が黄褐色、1109が灰白色、1110が赤褐色を呈する。

鉢には外反口縁鉢(1106・1112)・直口鉢(1115)がある。

外反口縁鉢は、法量から大小2者に分けられる。大型の1106は、緩やかに内湾する体部から鋭く屈曲してやや長めの口縁部に至る。口縁端部は短く上方につまみ上げられており、受口状を呈する。また、口縁部の一部を下方に折り曲げ、片口としている。1112は突出するドーナツ底から緩く内湾して立ち上がり体部を持つ。ともに胎土はやや粗く、焼成も甘い。色調は黄褐色を呈する。

1115は籠目を留める直口鉢。全体の約4分の1が残存している。底部形状は直角を成す直線的な辺を2辺持つことから、一辺4.5cm前後の正方形に復元できる。底部の角は体部に至ると鈍くなり、体部上半では器形はほぼ正円を成している。体部は内湾気味に立ち上がっており、口縁端部は丸く収められている。底部は摩滅のため、籠目は不明瞭であるが、体部外面には籠目が明瞭に残存する。体部中半で編目が異なっており、下半が1本超1本潜1本送、上半が左上がりのヨコ添えもじり編みとなっている〔鳥取県埋文セ2005〕。器壁の厚さにはムラがあり、底部の角に対応する箇所では厚さを増している。この箇所には、縱方向に陂行する1条の接合痕が認められることから、成形時の所作に起因するものと考えられる。内面は縱方向の強いナデが施され、平滑に仕上げられている。胎土はやや粗く、4mm以下の石英・長石を少量含む。焼成はやや甘く、色調は灰白色を呈する。

1116はミニチュア土器。口縁部を欠くが、形状から鉢を模したものと考えられる。手捏ねによって成形され、外面には指頭圧痕が残存する。胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は灰白色を呈する。

1117是有孔鉢である。突出する平底に円孔を穿つ。外面には粗い右上がりのタタキ、内面にはクモの巣状ハケ目の痕跡が認められる。胎土はやや粗く、焼成は甘い。色調は赤褐色を呈する。

1118～1120は高坏脚部片。いずれも脚高が低いため、楕円高坏のものである可能性が高い。脚据部の形状は緩やかに外湾するものの(1118・1119)と鋭く屈曲して一端内湾して開くものの(1120)の2者がある。また、屈曲部の直下には3方向(1118)、4方向(1119)、5方向(1120)に、それぞれ円形透かしが施されている。外面調整は縦方向のヘラミガキが施される。いずれも胎土はやや粗く、焼成もやや甘い。色調は赤褐色を呈する。

以上の土器は、1103の加飾性の強い二重口縁壺、1113など口縁部の発達した広口壺、脚部の屈曲が鋭い高坏の存在をもって近畿造編年様相3(新)に位置づけることができる。

土坑62(図72～74) 第V章で詳述したとおり、コンテナ約7箱分を数える多くの土器が出土した。細片が主体を占めていたものの、形状を復元できる個体が多く、30点の土器を掲げることができた。図示した土器の内訳は壺8点、壺11点、鉢5点、有孔鉢2点、高坏4点である。

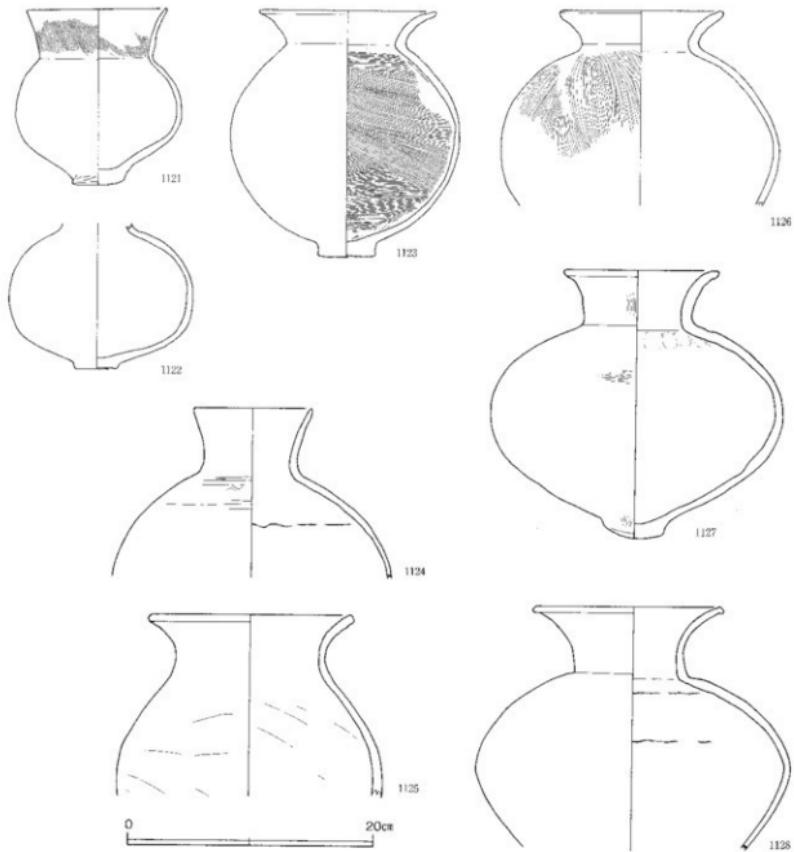


図72 土坑62出土土器（1）

直口壺(1121・1124)は、大小2者がある。1121は体部の一部を欠くほかはほぼ完形である。突出する平底に球形の体部を有し、口縁部もやや長めであることから、長頸壺の退化したものと捉えたほうが良いかもしれない。摩滅のため体部の調整は不明であるが、底部付近にタタキが認められるほか口縁部の内外面にはハケが施されている。大型の1124は、球形の体部に緩やかに屈曲して斜外方に直線的に立ち上がる口縁部を有する。摩滅のため詳細は不明ながら、肩部に櫛描直線紋と鋭角に屈曲する波状紋を施している。ともに胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

口縁部を欠く1122は、突出する底部に扁球気味の体部を有し、頸部も良くしまっていることから、細頸壺の可能性がある。胎土は粗く、焼成はやや甘い。

広口壺は、中型(1123)と大型(1125・1126～1128)の2者に分けられ、さらに口縁部及び頸部の形状から、頸部で緩く屈曲して斜外方に伸びる口縁部を有するもの(1123・1125)と、上方に立ち上がる頸部か

ら、斜外方に外反する口縁部を持つもの(1126～1128)の2者に大別できる。このうち、後者は口縁部の発達が弱く、体部最大径を上寄りに位置させる無花果形のものであり、やや古相を示す。1127は胎土に角閃石を多く含み、色調は暗褐色を呈する生駒山西麓産の胎土である。そのほかはいずれも胎土が密で、焼成は良好、色調は褐色ないし赤褐色を呈する。

1129～1139はV様式系壺Aである。残存率は良好なものが多いが、いずれかの部位を欠くものが多く、全容を窺うことができる資料はごく少数である。このため、法量による分類は明示し難いが、口径及び体部最大径を手がかりに小型のもの(1129)と中型以上のものの2者に分けることができる。底部の形状は、突出気味の平底が多く、1138がドーナツ底である。体部の形状は、球形体部のものが大半を占めるが、1130や1131のようにやや長胴気味で、最大径を上寄りに位置させるものも少数ながら認められる。頭部内面の稜は鈍いものが大半を占めるが、1135や1136では鋭さを増している。また、口縁部は頭部で屈曲して直線的に短く外上方に伸びるもの、緩やかに外反して外上方に伸びるもの2者がある。端部形状には、丸く収めるもの、内傾する面を形成するもの、外傾する凹面を形成するもの、短くつまみ上げて跳ね上げ状をなすものの4者が認められる。外面調整は、右上がりのタタキを基調とするが、分割成形時の逆円錐台との接合部直上で軸を変えるものも少数ながら認められる。タタキは概して粗く、太筋のものを施している点が特徴的である。1134は口縁タタキ出し技法に擬っている。なお、1139は摩滅が著しく、詳細は不明ながら、タタキをナデ消している状況がわずかに認められた。内面の調整はハケを施すものと、板ナデを施すものの2者がある。胎土はいずれもやや密である。一方、焼成と色調に関しては、焼成がやや甘く、色調が内外面ともに赤褐色を呈するもの(1129・1130・1131・1133・1134・1135・1137・1139)のほか、焼成が良好で、灰黄色を呈するもの(1132・1136・1138)の2者が認められる。なお、1137の肩部付近には、幅1.2cm前後で白色を呈する密な胎土の帯が全周している。一見、部分的に胎土を違えたように見えるが、内面には同様の帯が認められないことから、成形後の半乾燥時に上面に付したものと考えることができる。意図は不明。以上の壺は、体部の球形化が進行している個体がみられる点や分割成形時の接合面でタタキの軸を変化させるものが認められる点は、後出の要素を多分に含んでいるが、総体としては古相を示している。

1140・1143～1145は外反口縁鉢である。1140・1143は残存率が高く、口縁部の一部を欠く。1141・1145は、それぞれ図示範囲の4分の1程度である。法量から小型のもの(1140)と、大型のもの(1143～1145)に分けることができる。1140は突出するドーナツ底から、緩く内弯して立ち上がる体部を有した後、頭部で鈍く屈曲しやや内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部へと至る。口縁端部は弱くつまみあげられており、直立気味の面を形成する。体部外面にはタタキを施している。内面調整は摩滅のため不明。胎土はやや密で、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。大型の1143～1145は、それぞれ形状が異なる。底部は平底のものとドーナツ底のものがあり、体部の内湾の強弱によっても2者に分けられる。また、口縁部形態は丸く収めるもの、上方に強くつまみ上げて受口状を成すもの、内傾する鈍い面を形成するものの3者がある。いずれも摩滅が著しく詳細は不明だが、1143は外面タタキ後ナデ、内面ナデ、1145は内外面ともにヘラミガキを施している。1145は胎土中に角閃石を多く含み、暗褐色を呈する生駒山西麓産の胎土。ほか2点は、やや密な胎土を用い、色調は灰黄色を呈する。なお、1143は体部下半に直径10cmの黒斑があり、内面には対応箇所を囲むように黒斑が認められる。

1141はほぼ完形の台付直口鉢である。上げ底が拡張し、脚台化している。外面は左上がりのタタキを施した後にナデ消しており、内面にはハケが施される。胎土は粗く、色調は灰黄色を呈する。

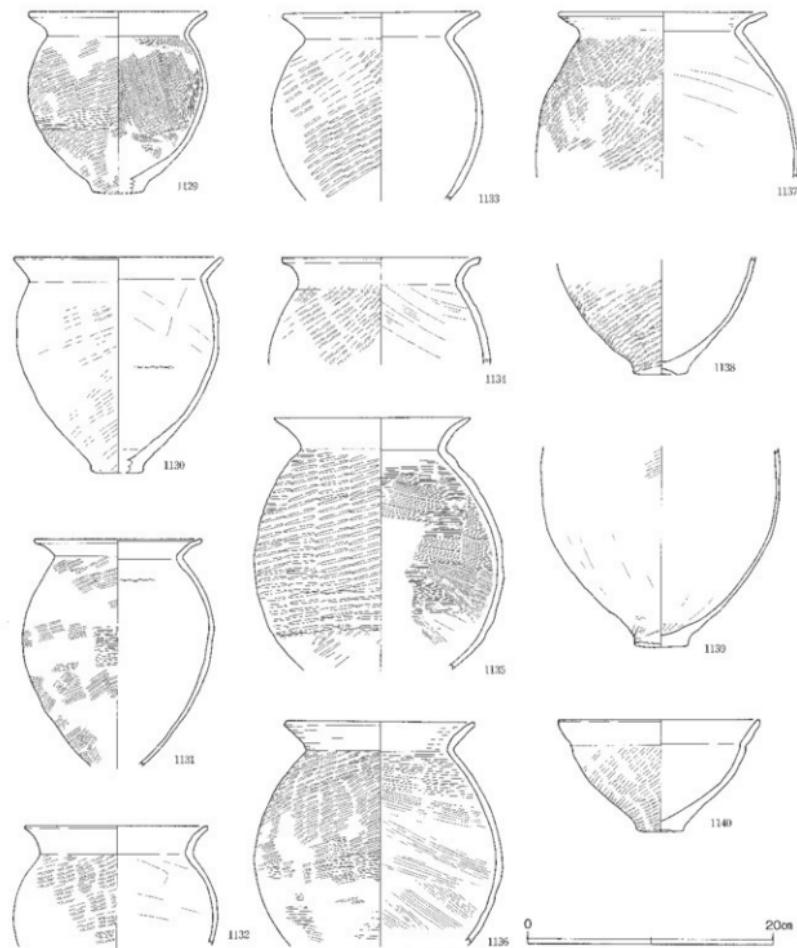


図73 土坑62出土土器（2）

1142・1146は有孔鉢である。残存率はともに良く、口縁部をわずかに欠くほかはほぼ完形である。いずれも底部はやや突出する平底で、中央部に円孔を1孔穿っている。体部は緩く内湾して立ち上がる。外面の調整は摩滅のため不明。内面はハケ及びナデで仕上げられる。1142の胎土はやや粗く、焼成もやや甘い。色調は赤褐色を呈する。1146は胎土が密で、焼成は良好、色調は外面が橙色、内面が灰白色を呈する。

1147～1150は高坏である。1147は有稜高坏で、坏部の約4分の1が残存する。脚部は緩く外湾して伸び、裾部との屈曲も緩やかで不明瞭である。脚部上位には推定4方向の円形透かしを施している。坏

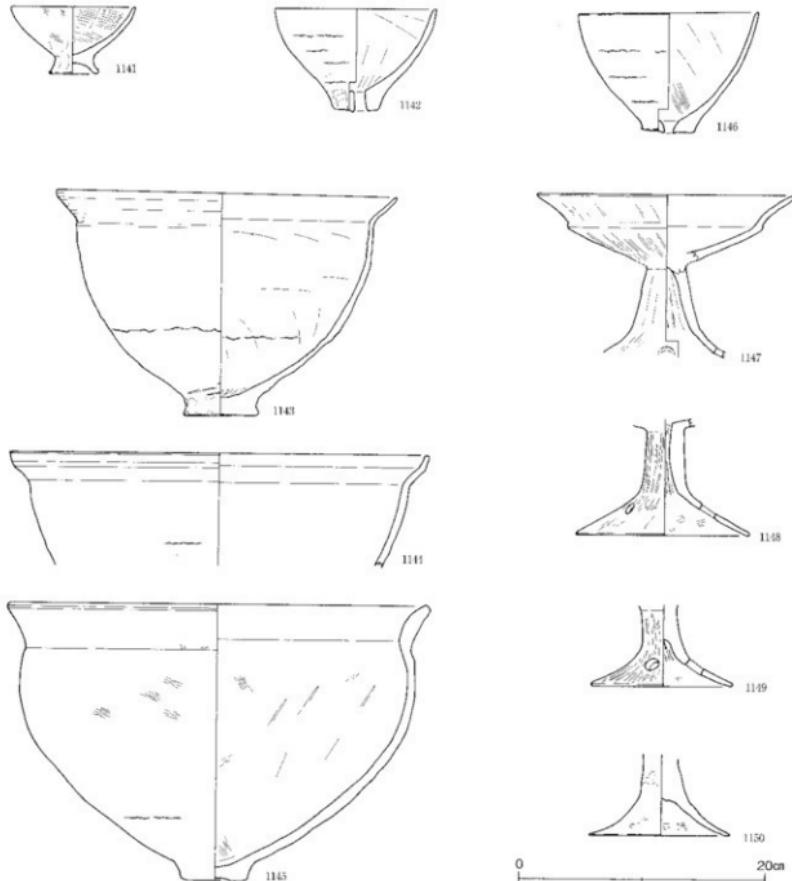


図74 土坑62出土土器（3）

部は外上方に伸びた後、やや直線的で未発達な口縁部を有する。後部は鋭く屈曲して段状を呈している。外面には縦方向のヘラミガキが施され、内面は摩滅のため調整不明。口縁比は75.8、口後比は17.4を示す。1148～1150は脚部で、器高及び脚柱部の様相から1148が有稜高坏、1149・1150が楕形高坏のものと推定できる。1148の脚裾部は直線的で、脚柱部との屈曲もほかの3者に比べ明瞭である。脚裾部上位には直径1.5 cmの大振りな円形透かしを推定3方向に穿つ。1149・1150は屈曲が緩やかである。1149は3方向の大振りな円形透かしを穿つが、1150には認められない。胎土はいずれも粗く、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

以上の土器は、数点の甕が若干新しい要素を持つものの、有稜高坏や広口壺が古相を示すことから、近畿道編年様相3（古）から（新）に位置づけることができる。

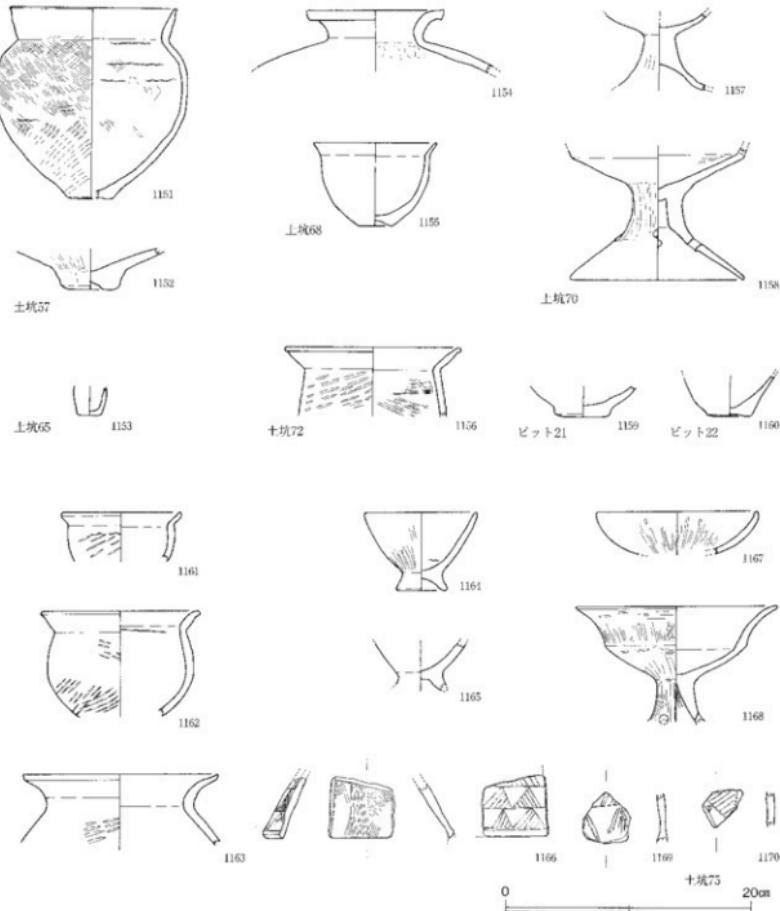


図75 土坑57・65・68・70・72・75 ピット21・22出土土器

土坑57(図75) 細片を中心に120点前後の土器が出土したが、図示可能なものは少なく、わずかに2点を掲げたに過ぎない。

1151はV様式系甕Bである。約2分の1が残存する。底部は突出気味の平底で、内湾して立ち上がる体部から頸部で緩く屈曲して直立気味の口縁部へと至る。口縁部の作りは甘く、中位で付け足して拡張されている。外面には右上がりのタタキが施され、その後に体部上半を中心として斜位のハケが施されている。胎土は密で、焼成は甘い。色調は灰白色を呈する。1152は甕の底部片。胎土は粗く、焼成も甘い。器種も限られるため詳細な帰属時期は不明だが、甕の示す様相から近畿道編年様相3~4に収まるものと考えられる。

**土坑65（図75）** 2 A - 5 i 区に位置する土坑で、土器は細片を中心にコンテナ半箱程の土器が出土した。図示可能なものは少なく、わずかに 1 点を掲げたに過ぎない。1153はミニチュア土器である。鉢を模したものと考えられる。胎土は密で焼成は甘い。帰属時期は不明。

**土坑68（図75）** 2 A - 4 b 区に位置する長楕円形の土坑である。土器は細片を中心にコンテナ半箱程の土器が出土したが、図示可能なものは少なく、わずかに 2 点を掲げたに過ぎない。1154は広口壺。8 分の 1 以下の細片のため、口径の復元には若干の疑問が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや良好、色調は赤褐色を呈する。1155は小型の外反口縁鉢。約 3 分の 2 が残存する。底径の縮小した上げ底から緩やかに内湾して立ち上がり、緩やかに屈曲して短く伸びる口縁部を持つ。胎土は密で、焼成は甘い。色調は赤褐色を呈する。小型丸底壺の形となるものであろうか。器種も限られることから詳細な帰属時期は特定し難いが、1155を根拠に近畿道編年様相 3 (新)～4 (古)に位置づけられる可能性がある。

**土坑70（図75）** 細片を中心に 120 点程の土器が出土したが、図化可能なものが少なく、2 点の高坏を図示したに過ぎない。1157は楕形高坏。口縁部及び脚部を欠損する。1158は有稜高坏である。脚部は上位で緩やかに屈曲し、直線的に開く形状を示す。屈曲部直下には粗雑な円形透かしを 4 方向に穿っている。脚柱部内面は丁寧に調整され、正円をなしている。坏部は直線的に斜外方に伸びる。いずれも胎土はやや粗く、焼成も甘い。色調は赤褐色を呈する。欠損部位が多く、時期比定の決め手を欠くが、1158の脚部の様相から近畿道編年様相 3 (新) から様相 4 (古) に位置づけられよう。

**土坑72（図75）** 細片を中心に 60 点程の土器が出土したが、図化可能なものが少なく、1 点の壺を図示したに過ぎない。1156は V 様式系壺 A である。図示範囲の 6 分の 1 程度が残存する。体部は直線的で、長胴気味の体部であることを窺わせる。口縁部は直線的に斜外方に伸び、端部は内傾して外面に鈍い稜を形成する。外面には太筋で粗いタタキ、内面にはハケが施される。帰属時期は不明。

**土坑75（図75）** 細片を中心にコンテナ 1 箱分の土器が出土した。10 点の土器を図化し得た。

1161～1163は V 様式系壺 A。いずれも図示範囲の 8 分の 1 程度の細片である。口縁部形態は短く上方につまみ上げて跳ね上げ状を呈するもの(1161・1163)と、横方向に短くつまみ出し外面に鈍い稜を形成するもの(1162)の 2 者がある。いずれも胎土はやや密で、焼成は甘い。色調は暗褐色を呈する。

1164・1165は台付の鉢である。1165は口縁部を欠くが、1164とは同様の器形を示すと考えられる。ともに上げ底が拡張し、脚台化している。1164は外面にヘラミガキ、内面はナデが施され、1165は内外面ともにナデが施される。胎土は密で、色調は灰白色を呈する。

1167は楕形高坏の坏部片である。浅い皿状を呈しており、内外面ともに縱方向のヘラミガキが施されている。胎土は密で、焼成は良好、色調は内外面が暗褐色、断面が赤褐色を呈する。

1168は有稜高坏である。図示範囲の約 2 分の 1 が残存する。緩やかに外湾する脚柱部には、推定 3 方向の小振りな円形透かしを穿つ。坏部は深く、内湾気味に立ち上がる坏底部に、発達した外反口縁部を有する。外面に縦位のヘラミガキ、口縁部の上下端には横位のヘラミガキを施している。口縁比 71.1、口稜比 23.9 を示す。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は、内外面が暗褐色、断面が赤褐色を呈する。

1166～1170は手焙形土器の覆部片。同一個体の可能性が高い。1166は端部が残存し、鉢部との接合面で剥離している。外面には沈線で区画した鋸歯紋を施す。胎土は密、焼成は良好である。

以上の土器は、有稜高坏の坏部が深く、口縁部も発達している点、皿状の楕形高坏の存在などから近畿道編年様相 3 (新)～様相 4 (古) に位置づけることができる。

**ピット21・22（図75）** 壺(1159)鉢(1160)の底部片が出土した。細片のため、時期は不明。

落ち込み1 (図76) コンテナ1箱分の土器が出土した。細片が主体で、図示し得た土器も残存率の低いものばかりである。1171・1172はV様式系壺A。外向のタキは太筋で粗い。1173は二重口縁壺の口縁部片。外面には大振りの竹管円形浮紋を付す。生駒山西麓産の胎土。1174～1180は壺ないし鉢の底部片、1181は壺の底部片である。底部形状は平底とドーナツ底の2者がある。胎土は生駒山西麓産のもの(1176)と、やや粗く赤褐色を呈するもの(1174・1175・1179)と、やや密で灰黄色を呈するもの(1176～1178・1180・1181)の3者がある。詳細な時期は不明だが、1173の存在から近畿道縦年様相3の範疇に収まるものと想定できる。

落ち込み2 (図76) 細片を主体としてコンテナ半箱分の土器が出土した。図示し得た土器も少ない。1182は外来系の被籠状突底壺〔角南2000〕。細片のため、図上での復元を行った。口縁部は大半を欠くが、ほぼ直線的に伸びるものと想定でき、端部は内傾する面を成す。体部外面には刻目を施す横位の突帯を2帯配し、縦位の突帯を連結させている。縦位の突帯は横帯を挟んで部分的に互い違いに配される箇所も見受けられた。肩部には櫛描直線紋が施され、頸部には鈍い突帯が巡る。内面にはハケ、肩部付近には指頭圧痕が明瞭に残る。胎土は密で焼成は良好。色調は外面が灰黄色、内面が暗褐色、断面が赤褐色を呈する。1183は壺の底部片、1184は壺の底部片である。1182は庄内式期に散発的に認められる器種で、近畿道縦年様相3(新)から4(古)に相当するものと考えられる。  
(正岡)

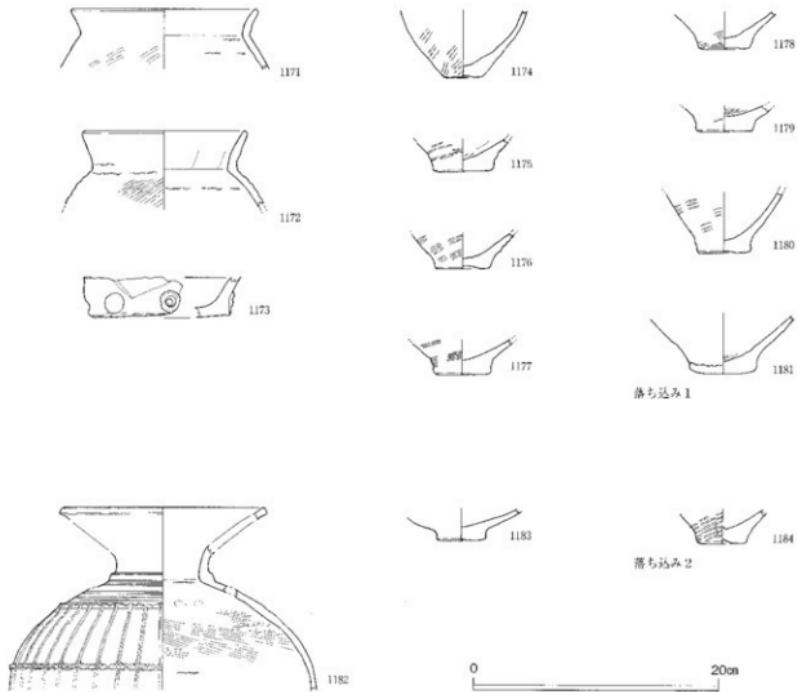


図76 落ち込み1・2出土土器

### 3. 3層中遺構面 [弥生時代後期末～古墳時代初頭]

#### (1) 出土土器の概要

第V章でも詳述したように、弥生時代後期中葉以後に堆積した水成堆植物を除去している最中に幾つかの遺構を検出した。これらの遺構には、本来、第2面で検出し得た可能性のあるもののか、3層堆積中のごく短い間に形成されたものがある。

遺構から出土した土器量はわずかで、図示できたものが少量ある。大半のものが流路からの出土であり、それ以外には包含層からの出土のものがある。

特に、流路1からは、掲載したものに限っても480点以上にも及ぶ多量の土器が出土した。これらの土器は、後述するように概ね近歳造編年の様相3に帰属するが、地層観察の結果、前述した第2面との間には明らかな間隙が認められることから弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての興味深い資料を得ることができたと言える。

#### (2) 遺構出土土器

##### 掘立柱建物34-柱穴4 (図77-1185)

口頭部から体部を残す、中型の壺が1点のみある。短く外傾する口頭部が屈曲し、頭部が「く」の字状に屈曲し内面に稜をもつ。体部の調整は、外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施し、内面に粘土紐の継目を顕著に残す。外面の体部の一部に煤が付着する。

##### ピット27 (図77-1187・1188)

高坏および底部の各1点がある。いずれも破片で、(1187)は、坏底部から脚柱部を残す。浅い皿状の坏部の内外周に口縁部の接合痕を残す事から、有稜高坏と思われる。坏部内外面および脚柱部外面にヘラミガキを施す。1188は、わずかに突出する平底の中央部が窪む。外面にヘラミガキが施されることから、壺底と思われる。

##### ピット28 (図77-1186)

図示できたのは、鉢が1点のみである。1186は、外反する口縁部をもつもので、内外面伴に表面摩滅のため調整が不明である。

##### ピット29 (図77-1189)

壺底が1点のみ出土した。1189は、小型の壺で、突出しわずかな上げ底である。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

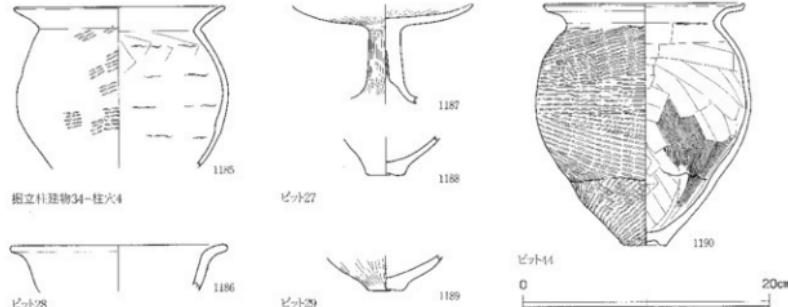


図77 掘立柱建物34-柱穴4・ピット27~29・44出土土器

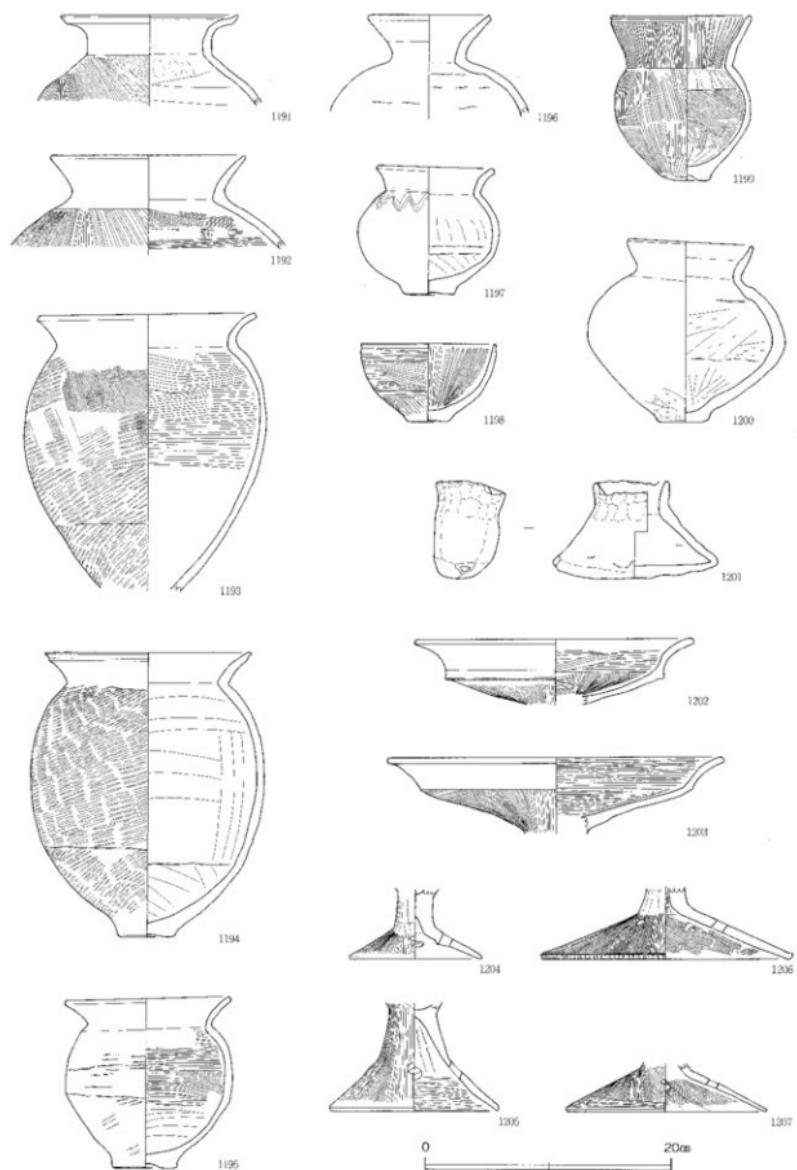


図78 流路1上層出土土器

#### ピット44（図77-1190）

壺の完形が1点のみある。1190は、口径16.4cm・器高20.0cmを測る中型のものである。短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもち、屈曲し倒卵形の体部に中央部が窪む底である。体部の調整は、外面にタタキ、内面にハケおよび板ナデを施す。外面の口縁部・体部と内面の体部下半部に煤が付着する。

#### 流路1（図78～図114）

出土総量はコンテナに換算して120コンテナ以上、掲載し得たものは489点を数え、今回の調査でも圧倒的な出土量を誇る。

流路の埋土は、大きく上下2層に分けられ、そのうちの下層をさらに「砂礫層」と、「シルト層」の2層に細分した。ただし、下層シルト層と上層シルト層は、流路の肩際でほぼ収斂されており、明瞭に分けられない箇所も見受けられた。

出土した土器は、壺・甕・鉢・有孔鉢・高坏・手結形土器・皮袋形土器と、器台を除く各器種が揃っているが、そのうちの約3分の1を壺が占めている。したがって壺については、完形のものを優先し、特徴のある破片を除いて図化を行っていない。

#### 上層出土土器（図78）

上層出土土器で図化できたものは、壺6点・甕3点・鉢1点・高坏6点・皮袋形土器1点の計17点である。

壺には、広口壺(1191)、直口壺(1192・1196)、小型壺(1197・1199・1200)がある。

1191は大型で、口頭部から体部上半を残存し、外反する口縁部の端部が上外方へわずかに立ち上がり外縁面を持つ。短い筒状の頭部に屈曲し広がる体部をもつ。調整は、口頭部の外表面がヨコナデ、体部外面上に斜め方向のヘラミガキ、内面に指押さえ後ナデを施す。1192は大型で、口頭部から体部上半を残存し、短く外傾する口頭部端部が丸く終わり、屈曲し下方へ開く体部である。口頭部外面上ヨコナデ、内面に横方向のミガキ、体部外面上に縦方向のミガキ、内面に横方向のハケを施す。1196は、外傾する口頭部の外端部が面を持ち、屈曲し半球状の体部を残す。調整は、口頭部内外面にヨコナデ、体部外面上にヘラミガキ、内面にナデを施す。いずれも、無紋である。1197は、口径9.2cm・器高10.6cmを測り、わずかに外反する口縁部の端部が面を持ち、短い筒状の頭部に、屈曲してやや横長な球形の体部に突出してわずかに上げ底の底部を持つ。調整は、内外面にナデを施す。肩部に、櫛描波状紋を施す。1199は口径11.2cm・器高13.4cmを測り、口径が体部径をわずかにしのぐ。わずかに開く口頭部の端部が丸く終わり、球形の体部にわずかに突出する上げ底の底部を持つ。調整は、外底底部のナデを除いて、縦方向のハケ、口頭部内面に縦方向の粗いヘラミガキ、体部上端部に指押さえ、体部中央に斜め方向のハケ、底部にナデを施す。口縁端部に凝固線紋1条を施す。1200は、口径10.0cm・器高15.0cmを測り、内湾気味に開く口縁部の端部が丸く終わり、短い筒状の頭部に球形の体部、わずかに突出する平底を持つ。調整は、口縁部内外面にヨコナデ、頭部から底部内外面にナデ、底側部外面上にヘラケズリを施す。小型壺はいずれも完形で、後2点は無紋である。

甕には、大型(1193・1194)2点、中型(1195)1点がある。1193は、底部を欠く。外反する口縁端部が面をもつ。調整は、体部外面上にタタキ後上半部にハケを施す。体部内面は横方向のハケで、下半は炭化物付着のため調整は不明である。外面の体部下端を除き煤が付着する。1194は完形で口径16.4cm・器高23.2cmを測り、外反する口縁部端部が門面をなす。頭部は「く」の字状に屈曲し卵形の体部に突出する平

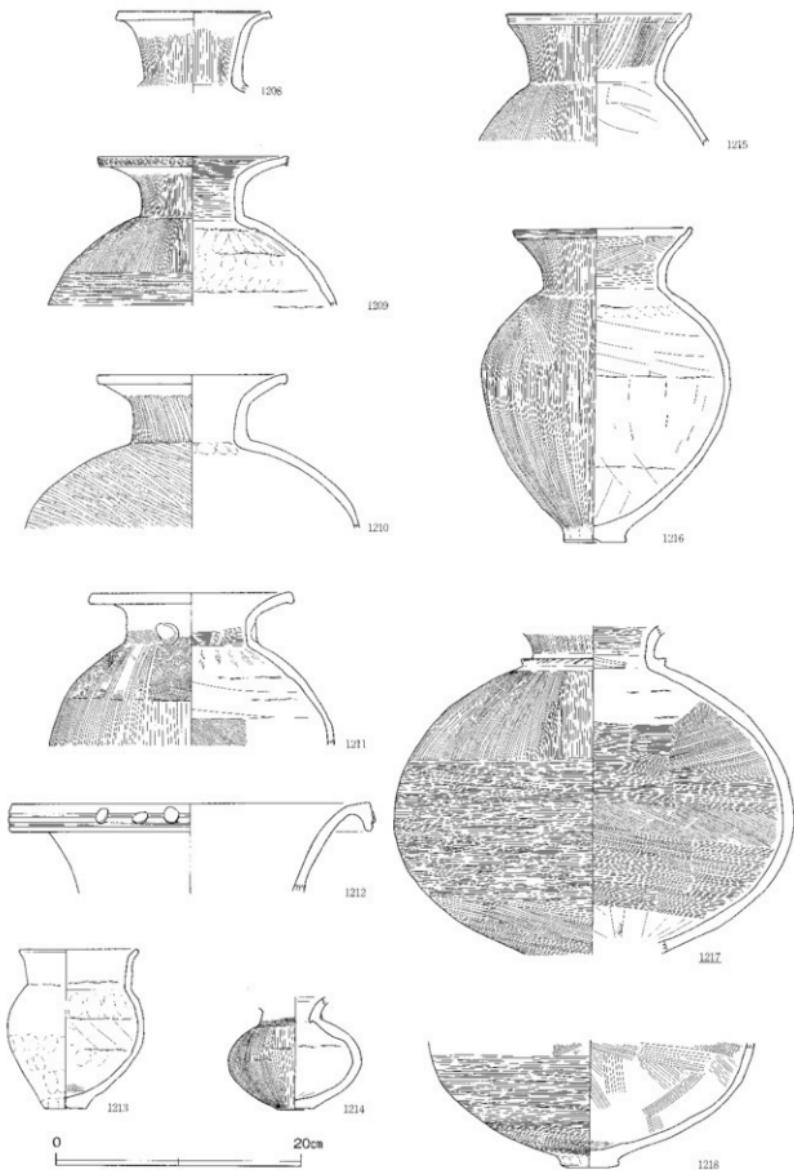


図79 流路1下層—シルト層出土土器(1)

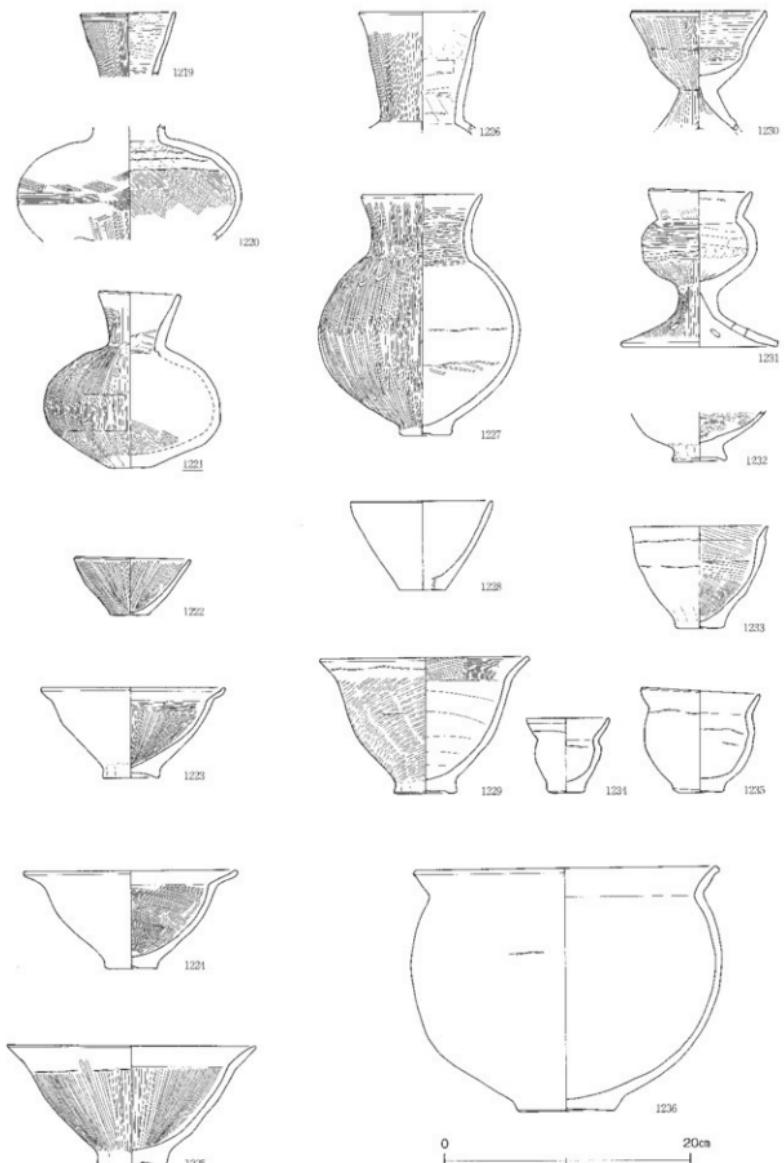


図80 滝路1下層－シエルト層出土土器(2)

底をもつ。体部の調整は、外面がタタキ、内面が板状ナデを施す。体部外面に煤が、内面下半に炭化物が付着する。1195は完形で、口径13.0cm・器高14.0cmを測り、外反する口縁部の端部が丸みをもち、球形の体部に突出しわずかに上げ底の底部をもつ。体部の調整は、外面にタタキ後ナデ、内面にハケを施す。

鉢は、1点のみ出土し、楕円形の小型のものである。口縁端部は尖り気味に終わり、半球状の体部に、わずかに突出する上げ底をもつ。調整は、内外面にヘラミガキを施す(1198)。

皮袋形土器(1201)は、小型の完形で口径6.0cm・器高8.0cmを測り、底脚部に焼成前穿孔を1箇所に穿つ。調整は、全体に指ナデおよび指押さえを施す。

高坏には、坏部のみ残存しているものが2点、脚部のみ残存しているものが4点ある。1202・1203は有稜高坏で、皿状の坏底部から屈曲し外反する口縁部をもつ。調整は、前者が、外面の口縁部にヨコナデ、坏底部に縦方向のハケ、内面の口縁部に横方向のヘラミガキ、坏底部にヘラミガキを施し、後者が外面の口縁部にヨコナデ後横方向の粗いヘラミガキ、内面全体に横方向のヘラミガキを施す。1204は小型で、円柱状の脚柱部から裾広がりに伸びる脚台部の端部が丸く終わる。脚台部の4方に、円形の透かしを穿つ。調整は、外面に縦方向のヘラミガキ、内面にナデを施す。脚台端部の内面に煤が付着する。1205は、脚柱から脚台部に緩やかに広がり、端部が丸く終わる。脚柱と脚台部の境目に4方に円形の透かしを穿つ。調整は、外面に縦方向のハケ後ヘラミガキ、内面に脚柱部に絞り目を残し、脚台部に横方向のヘラミガキを施す。1212・1213は、低脚高坏で、やや裾広がりの短い脚柱部から、屈曲し大きく開く脚台部をもつ。調整は、いずれも、外面にハケ後ヘラミガキ、内面脚台部に斜め方向のハケを施す。1206の脚台端部に刻み目を施す。前者は、脚台部の3方に、後者は4方に円形の透かしを穿つ。

#### 下層シルト層出土土器(図79~83)

下層シルト層から出土した土器には、壺18点・甕21点・甕蓋1点・鉢11点・高坏17点・手焙形土器1点の計69点が図化できた。

壺には、広口壺(1208~1212・1215~1218)、直口壺(1219~1221・1223)、長頸壺(1222)があり、その他に、小型壺(1213・1214)、台付き壺(1224・1225)などがある。広口壺には、球形の体部をもつと思われるものと卵形の体部をもつものがあり、前者には、口縁端部をわずかに上下に拡張させ外端面をもつもの(1208・1209)と、わずかに下方へ垂下し外端面をもつもの(1210・1211)、大きく垂下させ外端面をもつもの(1212)があり、概して大型のものである。後者には、口縁端部が丸みをもつもの(1215・1216)がある。頸体部の調整は、1211が外面にハケ後肩部以下にヘラミガキを施し、それ以外がヘラミガキのみを施す。紋様は、1209が口縁端部に竹管紋・頸体部の境目に部分的に刻み目、1212が口縁端部に3個1組の円形浮紋・疑凹線紋2条、1211が口縁端部に疑凹線紋1条、1212が口縁端部に疑凹線紋2条・頸体部の境目に刻み目を施す。1215は、頸部に指頭压痕を1箇所残す。他は、無紋である。1212が角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。特異な例として、1209の体部中央部外面に、幅1.5cm程の白色粘土を帯状に薄く貼り付けている。1217は、口縁部と底部を欠く生駒西麓産の胎土上で、やや偏平な球形の体部をもつ。調整は、体部外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。頸体部の境目に貼付刻み目突窓を施す。広口壺か二重口縁壺と思われる。1218は、半球状の体部下間に突出する平底をもつ。調整は、1217と同様で、破碎後比較を受けたためか内外面に煤が付着する。

直口壺には、口径が体部径の1/2以下のもの(1219~1221)と、以上のもの(1223)がある。前者は、体部がやや偏平で、後者は球形である。1219は、口頸部破片で、口縁端部に疑凹線紋を2条施す。1220

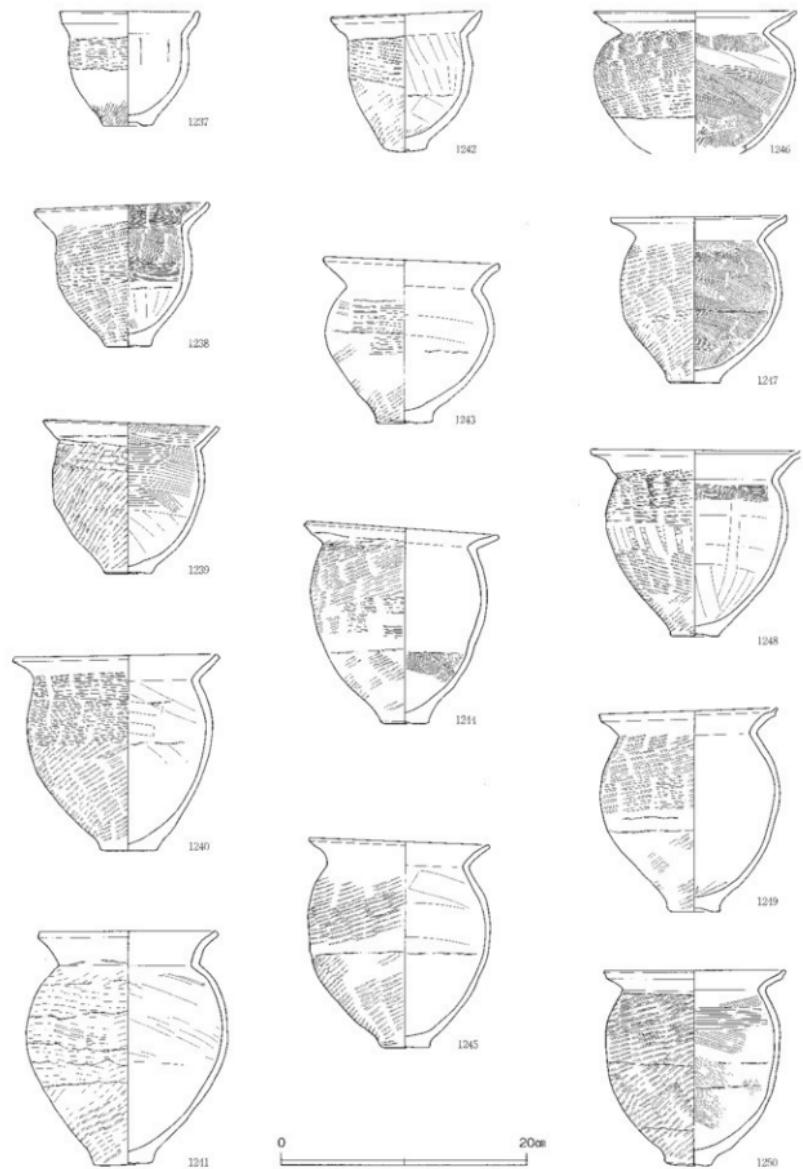


図81 流路1下層シルト層出土土器(3)

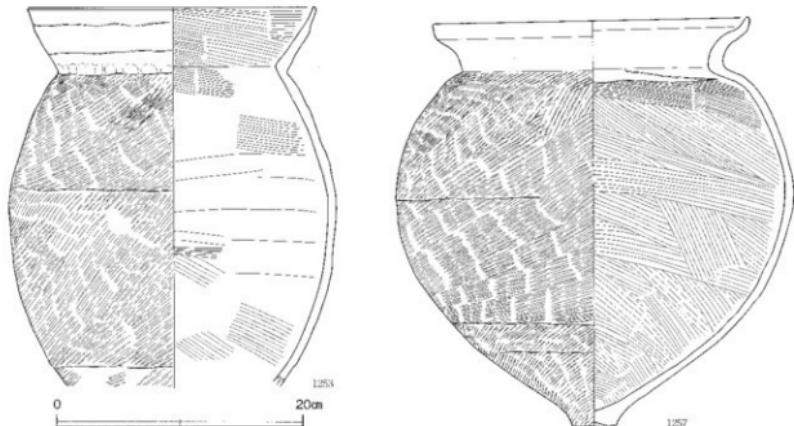
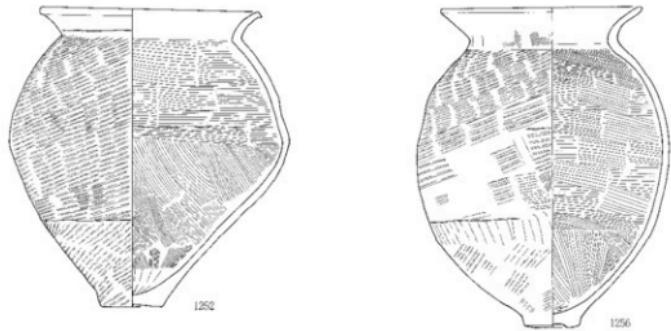
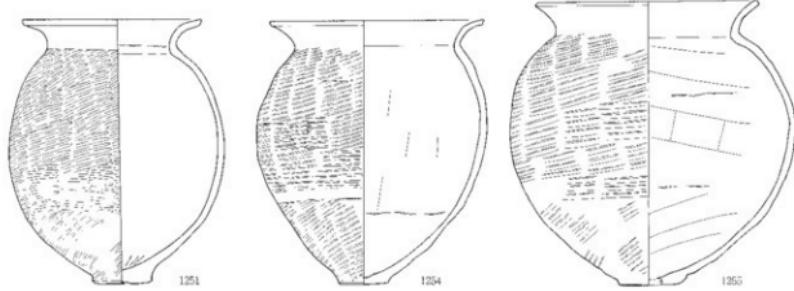


図82 流路1下層—シルト層出土土器(4)

は、体部破片で、外面ハケ後下半にヘラミガキ、内面の上半に粘土紐の継目および指押さえを残し、下半にハケを施す。1221は完形の角閃石を含む牛胸西麓産で、平底である。調整は、頸体部外側にヘラミガキ、内面にハケを施す。無紋である。

長頸壺(1222)は、口頸部破片で、わずかに外方に開く。外面ヘラミガキ、内面ハケ・ナデを施す。

小型壺の(1213)は、短く外反する口縁部に筒状の頸部、卵形の体部にわずかに突出する底部をもつ。調整は、内外面にナデを施す。無紋である。1214は、口縁部を欠き、やや偏平な大部にわずかな上げ底をもつ。調整は、体部外側ヘラミガキ、内面ナデを施す。頸体部の境目に梯描波状紋・直線紋を各1帯施す。

台付壺は、いずれも小型で、1224が外方へ開く口縁部の端部が面をもち、半球状の体部に幅広がりの脚台部をもつ。脚台端部を欠く。内外面に、ヘラミガキを施す。脚部の四方に円形の透かしを穿つ。1225は、わずかに開く口縁部の端部が尖り気味に終わり、やや偏平な体部に幅広がりの脚台部をもつ。脚台端部は面をもつ。調整は、口縁部内外面にヨコナデ、体部以下外側にヘラミガキ、内面にナデを施す。脚部の3方に円形の透かしを穿つ。

壺には、小型が2点(1232・1236)、中型が13点(1238~1250)、大型が2点(1251~1255)、超大型が2点(1256・1257)ある。

小型の(1232)は、ミニチュアで口径が最大径を測る。内外面にナデを施す。乳白色の土器であるが、体部上半のみ淡桃褐色の異種粘土を用いている。1237は、口縁部が屈曲し外上方へわずかに伸び、外端面をもつ。体部がわずかに膨らみ、やや突出する上げ底の底部をもつ。調整は、体部外側にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。

中型の壺には、口径が最大径のもの(1238~1240・1242~1244・1247・1248)、体部径が最大径のもの(1241)、口径と体部径がほぼ同等のもの(1245・1246・1249・1250)があり、1246のみ体部が偏平で口径が器高を上回る。いずれも、体部外側にタタキを施す。1250は、口縁部を1箇所打ち欠く。1241は、砂粒に角閃石を含むが粘土には含まれず、当地では、往々に観られる胎土である。

大型の壺には、底部の突出がわずかなものと明確なものがある。前者には、縦長な卵形の体部をもつ(1251・1252)と、体径と器高がほぼ同一で球形の体部をもつ(1253)とがあり、いずれも、体部外側にタタキを、内面にナデを施す。後者の(1254・1255)は、いずれもわずかな上げ底を有し、(1254)の体部がやや張り、(1255)が卵形である。体部の調整は、いずれも外側にタタキ、内面にハケを施す。

超大型の壺には、口縁部が外方へ伸び、卵形の体部をもつ(1256)と、口縁部が屈曲しさらに短く立ち上がり外端面をもち、球形の体部に突出する上げ底の底部をもつ(1257)がある。前者は、口縁部外側に2本の粘土紐の継目を残す。いずれも体部外側タタキ、内面にハケを施す。

壺蓋(1258)は、つまみ部がわずかに窪み、幅広がりの口縁端部が丸みをもつ。内面に煤が付着する。

鉢には、直口のもの(1227~1229)と、外反する口縁部をもつものの(1230・1231・1233~1236)がある。前者はいずれも小型で、(1227)は、内外面にヘラミガキを施し、(1228)が表面摩滅のため調整は不明である。なお、(1227)は、片口である。

後者には、さらに、小型と中型がある。小型のものには、口径が器高を凌駕する(1230・1234・1235)と、ほぼ同一の(1231・1233)があり、前者の体部外側にヘラミガキ、後者の体部外側にタタキ(1231)、ナデ(1233)を施す。中型のものには、やや偏平な体部をもつ(1236)がある。1226は、鉢の体部下半から底部の破片と思われる。

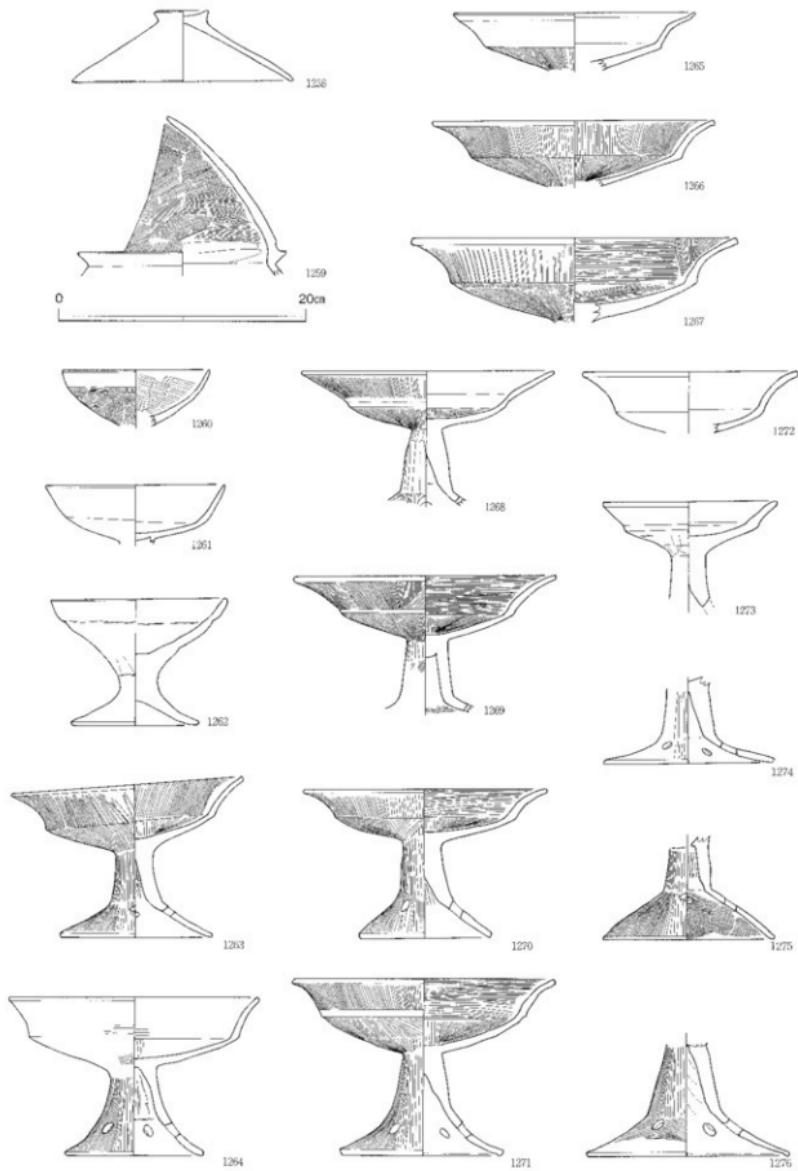


図83 流路1下層—シルト層出土土器(5)

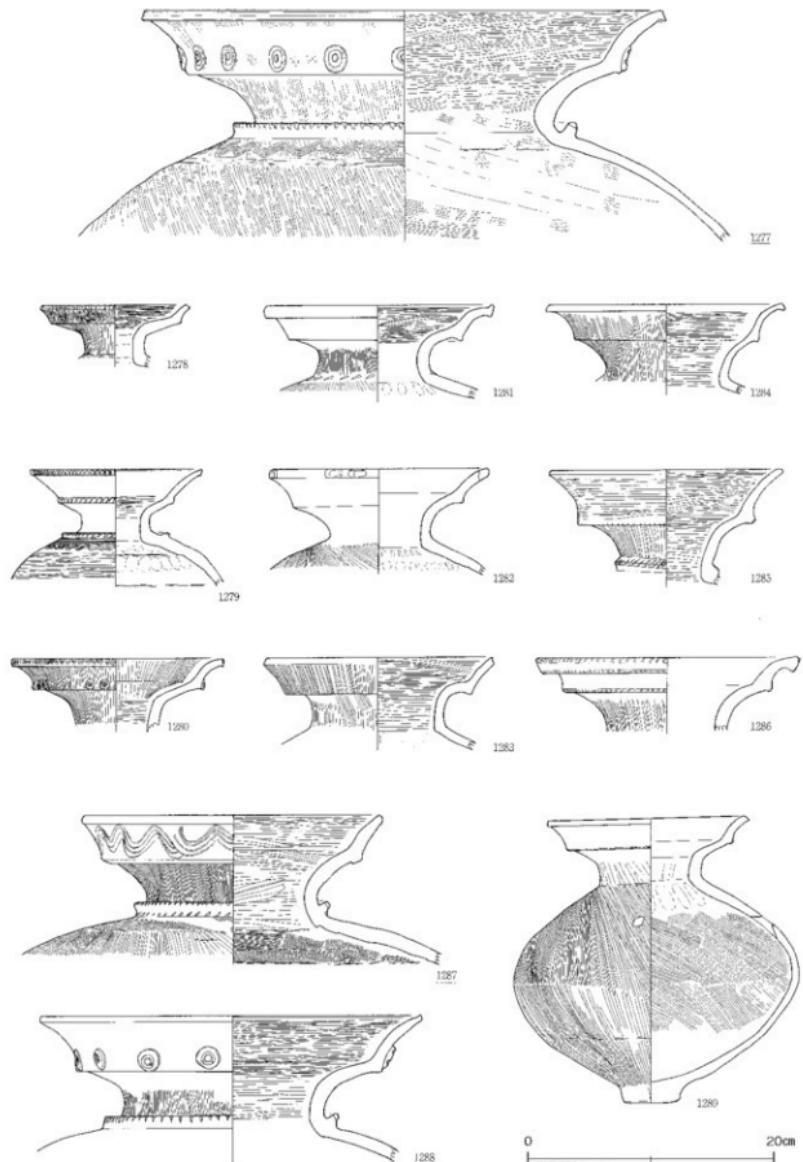


图84 流路1下层—砂砾层出土土器(1)

高坏には、楕形のもの(1260～1262)と、有稜のもの(1263～1273)がある。

楕形のものは口径12～14cmの小型で、坏部のみを残し内外面にハケを施す(1260)と、浅い皿状の坏部からわずかに屈曲し口縁部が斜め上方に立ち上がる(1261)がある。1261は完形で、円錐状の坏部に短い脚柱部に据広がりの小振りの脚台部をもつ。外面の口縁部と坏部および坏部と脚柱部の境日に粘土紐の継目を顕著に残す。調整は、脚柱部外間に面取り状のナデを施す以外はナデである。

有稜のものには、口径が14cm～26.4cmのものがあり、外反する口縁の端部が丸みをもつもの(1264・1268・1273)と、面をもつものの(1263・1266・1267・1269～1272)、外反しさらに斜め外方へ短く立ち上がるものの(1263)がある。脚柱には、やや粗広がりで、半柱実のもの(1268・1270・1273)と、柱空のもの(1263・1264・1269・1271・1274～1276)がある。脚台部には、脚柱部から屈曲し広がるもの(1263・1268・1269・1274～1276)と、なだらかに広がる(1264・1271)がある。坏部の調整は、ほとんどのものがヘラミガキを施し、(1263)が坏部外面以外がナデ、(1272・1273)は全面ナデである。

1259の手焼り形土器は、体部下半を欠損し、口縁部および覆部を残す。口縁部は短く外反し、面をもつ。調整は、覆部内面にハケを施す以外がナデである。内面に煤が付着する。

#### 砂礫層出土土器(図84～114)

砂礫層出土の土器が流路の中では、最も多量に出土している。図示できたものには、壺120点・甕161点・甕蓋2点・鉢38点・高坏78点・手焼り形土器4点の計403点である。

壺には、二重口縁壺・広口壺・直口壺・小型壺・白付壺などがある。

二重口縁壺(図84)は、外反する口縁部が屈曲しさらに外反するもので、完形のものは(1283)のみである。

口径が約12cm～20cmを測り、中型ないしは大型のもの(1278～1286・1289)は、口頭部のみを残すものが多く、全体形がわかるものは前述の1点のみである。口縁部端部が、丸みをもつもの(1282・1285)、面をもつもの(1278～1280・1283)、わずかに立ち上がり面をもつもの(1281)、わずかに垂下し面をもつもの(1284・1286)がある。いずれも、口頭部の内外面にヘラミガキするものが多い。装飾性に富むもの(1278～1282・1285・1286)と、無紋のもの(1283・1284・1289)がある。1279は、口縁部端部と屈曲部に竹管紋、肩部に貼付刻み日突帯・横描直線紋・波状紋を施す。1282は、口縁端部に2個1組の指頭压痕紋を2箇所に施している。1289の体部上半に焼成後の穿孔がある。いずれも、淡黄褐色の砂粒を多量に含む土器である。

1277・1287・1288は、口径が24cm～42cmといずれも超大型で、口縁部から体部上端を残すもので、角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産のものである。口縁部の端部は、(1277)がわずかに垂下し、(1288)がわずかに摘み上げられ、面をもつ。調整は、(1287・1288)が頭部外面にハケを施し、体部外面にヘラミガキで、内面の口頭部にいすれもヘラミガキ、体部にハケを施す。3者共に、装飾性に富む。

広口壺には、大別して加飾されたもの(図85)と、無紋のもの(図86～91)があり、器形が様々である。

前者は、口頭部を残すものがほとんどで、全容が解るものがない。1290は口縁部を残し、端部がわずかに上下に拡張する。口縁端部に横描波状紋後2個1組の円形浮紋上縦管紋・下端に刻み目を施す。角閃石を含む生駒西麓産である。1291～1297は、口径15cm前後のもので中型ないしは大型の大きさと思われる。1291～1293は口頭部を残し、口縁端部を上下にわずかに拡張し、端部に凝凹線紋2条を施す。内外面の調整は、ヘラミガキを施す。1294～1296は口頭部を残し、口縁端部下端をわずかに垂下させる。いすれも、口縁部内外面にヨコナデを施し、頭部内外面に1294がヘラミガキ、1295がハケ、1296がナデ

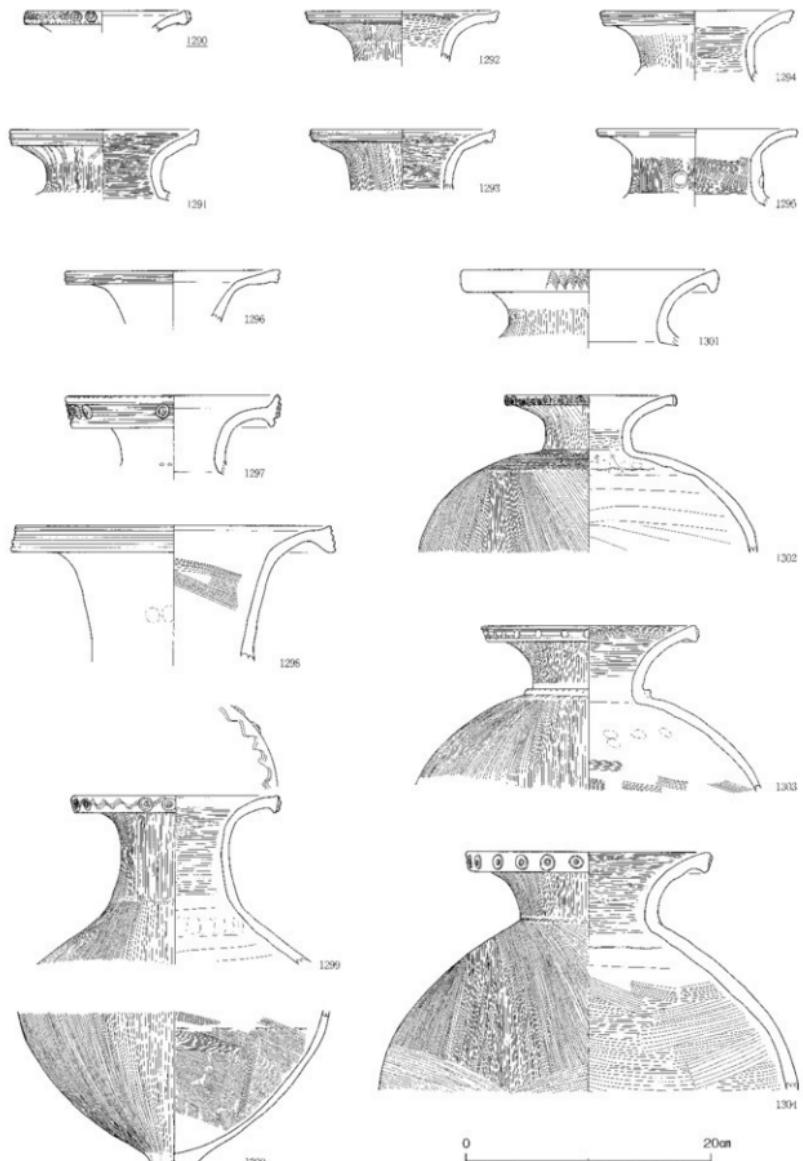


圖85 流路1下層—沙砾層出土土器(2)

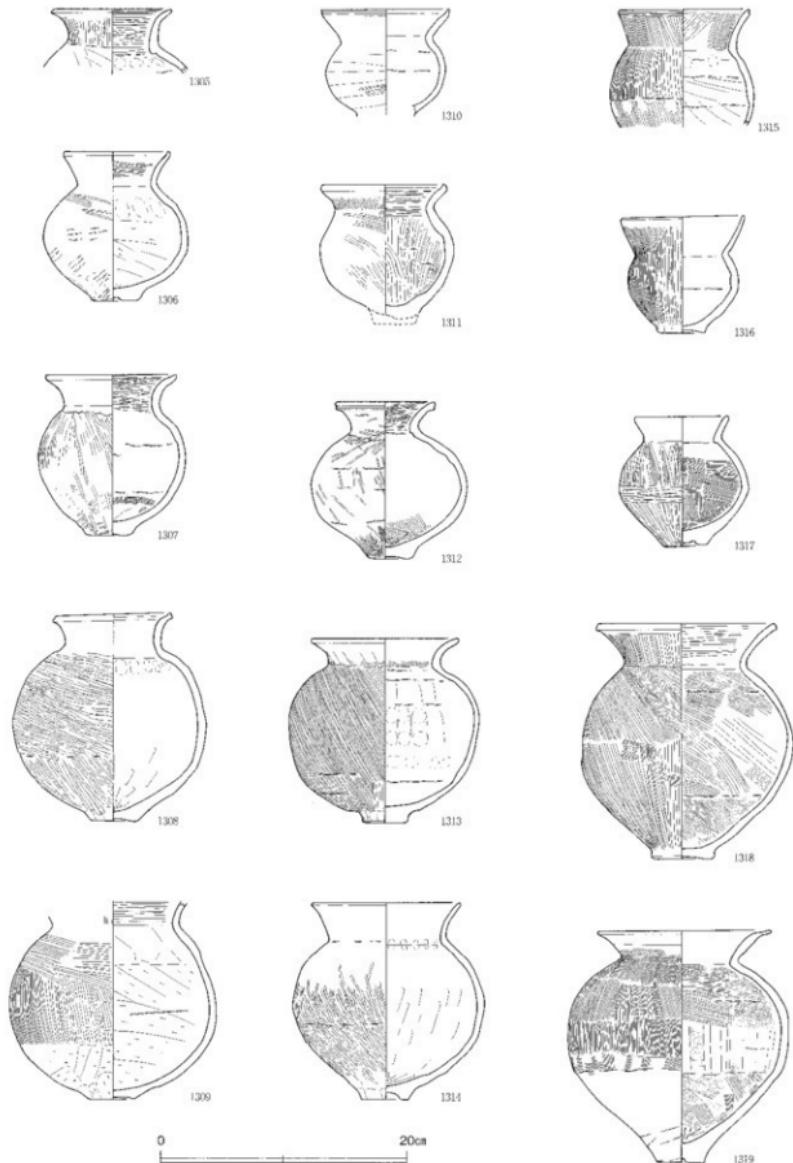


図86 流路1下層一砂礫層出土土器(3)

を施す。口縁端部にいざれも疑凹線紋を施す。1295の頸部には、指頭圧痕が1箇所押されている。この紋様は、当遺跡で壺に稀に見られる。1297は口頭部を残し、口縁端部が上下に拡張し面をもつ。頸部外面にヘラミガキ、口縁部内面にヨコナデを施す。頸部内面は、剥離のため不明である。外端面には刻み目・疑凹線紋3条後3個1組の円形浮紋上竹管紋を施す。1298は口径約25cmの大型の壺で、口頭部を残し、口縁端部をわずかに摘み上げ、垂下し面をもつ。口縁部外端面にヨコナデ、頸部の外面にナデ、内面にハケを施す。端面に疑凹線紋4条を施す。1301は口径約20cmの大型で口頭部を残し、口縁端部を垂下させ面をもち、短い頸部である。頭部外面にヘラミガキを施し、他はナデである。端面に柳描波状紋を施す。角閃石を含む生駒西麓産である。

1302～1304は、口径が体部最大径のおよそ1/2である。1302は口頭部から体部上半を残す。外反する口縁部の端部は面をもち、短い筒状の頸部に球形の体部をもつ。外面全体がヘラミガキ、内面の口縁部がヨコナデ・頸部がヘラミガキ・体部がナデである。紋様は、口縁部端面に柳描波状紋後3個1組の円形浮紋上竹管紋を、肩部に柳描直線紋1帶・波状紋2帶・直線紋1帶・波状紋2帶を施す。1303は口頭部から体部上端を残す。口頭部が外反し、口縁端部が垂下し面をもつ。調整は、外面の口縁部にヨコナデ・頸部体部にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ・頸部上端にナデ・以下にハケを施す。紋様は、口縁端面に疑凹線紋2条後円形浮紋・頸部の境目に貼付刻み目突帯を施す。1304は口頭部から体部上半を残し、外反する口縁部の端部が垂下し面をもつ。調整は、外面にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ・体部にハケを施す。口縁端面に円形浮紋上竹管紋・頸部の境目に刺突紋を施す。

1299は、口頭部から体部上端を残し、外反する口縁部の端部が上下にわずかに拡張し、筒状の頸部からなだらかに体部へ広がる。調整は、外面にヘラミガキ、口縁上端にヨコナデ・口頭部にヘラミガキ・体部にナデを施す。口縁部内面に波状紋・端面に波状紋後円形浮紋上竹管紋2個1組を施す。形態的特徴から瀬戸内の影響を受けたものか。

広口壺の小型のものは、口径10cm前後、器高が10cm～13cmを測り、短く外反する口縁部に短い筒状の頸部、球形の体部に突出する低部をもつもの(1305～1307・1310)と、外傾する口縁部の口径が体部径より大の(1308・1312)、わずかに聞く口縁部に太い頸部を持つ(1311)、短く外傾する口縁部に、やや偏平な体部にわずかに突出する底部をもつ(1313)などがある。1306・1308・1309の口縁端部をわずかにつまみ上げる。体部の調整は、ヘラミガキを施すものが多く、(1306・1307)がタタキ後部分的にヘラミガキを、(1305・1308)がナデを施している。1308・1310・1311の口縁端部には、疑凹線紋が施される。

中型の壺には、形態に様々なものがある。1314は完形で、口径約9cm・器高約17cmを測る。短く外反する口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ面をもつ。短い筒状の太い頸部に球形の体部に突出する底部がわずかに上げ底である。体部外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。1317・1318も完形で、口径約12・14cm・器高約16・19cmを測る。外反する口縁部の端部が(1317)が丸みをもち、(1318)がわずかに垂下し面をもち、短い筒状の頸部に球形の体部に突出する上げ底をもつ。体部外側の調整は、いざれも、ヘラミガキを施す。両者共に、外面に煤が付着し、(1318)の内面下半に炭化物が付着する。

1315・1316・1319は、形態的に壺の特徴を備え持つがここではあえて壺に分類した。1316は、口径約12cm・器高約15cmを測り、短く外反する口縁部にやや偏平な体部に突出する半底をもつ。体部の外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。1315は、口縁部を欠くが筒状の頸部に屈曲し、球形の体部にわずかに突出する上げ底をもつ。調整は、体部外面に上半から中央部にかけてヘラミガキ・下半にヘラケズリ、内面の頸部にヘラミガキ・体部の上端にナデ・以下ヘラケズリを施す。1319は、口径14cm・器高約19cm

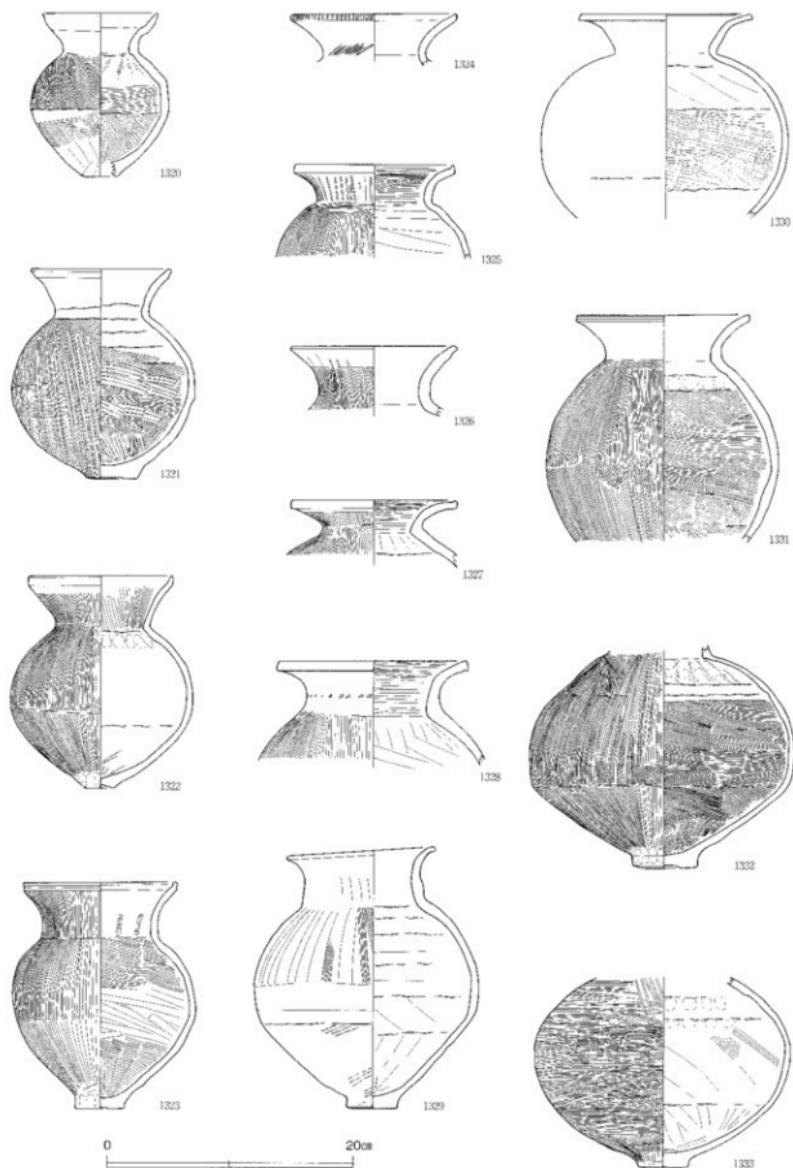


図87 流路1下層-砂礫層出土土器(4)

を測る。外反する口縁部の端部が尖り気味に終わり、球形の体部に突出する上げ底をもつ。体部の外面にタキ後ハケ、内面にハケを施す。

1320～1323はいずれも完形で、口径約9cm～14cm・器高約14cm～19cmを測る。短く外反する口縁部の端部が摘み上げられ外端面をもつ。体部は球形で、(1320・1322)が上げ底、(1321・1323)が突出する底部をもつ。体部の調整は、外面に(1320)がハケ後ナデ、(1321)がハケ後ヘラミガキ、他はヘラミガキを施し、内面にハケないしはナデを施す。1324は口頭部破片で外反する口縁部の端部に刻み日を、頭部に斜線紋を施す。1325は口頭部から体部上半を残し、外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。外面の口頭部に粗いヘラミガキ・体部にヘラミガキ、内面の口頭部にヘラミガキ・体部にナデを施す。外面に黒色物質塗布する。1326～1331は、大型の壺の可能性がある。1326は口頭部を残し、外反する口縁部の端部が面をもち、短い筒状の頭部である。口頭部の外面にヘラミガキ、内面にヨコナデを施す。1327は口頭部から体部上端を残す。外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもち、短い筒状の頭部の内面が「く」の字状に屈曲する。外面の頸体部にヘラミガキ、口縁部の内面にヘラミガキ・体部にナデを施す。1328は、口頭部から体部上端を残す。外反する口縁部の端部が面をもち筒状の短い頭部をもつ。外面の口頭部にヨコナデ・体部にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ・体部にナデを施す。頸部に刺突紋を施す。1329は完形で口径12cm・器高約22cmを測る。短く外反する口縁部の端部が丸く終わり、やや長めの筒状の頭部、球形の体部に突出する平底をもつ。調整は、外面の口縁部がヨコナデ・頭部がナデ・体部の上半がハケ後ナデ・体部下半がタキ後ナデ、内面の口頭部にヨコナデ・体部にナデを施す。体部内面に粘土紐の継目を多数残す。1330は底部を欠損し、外反する口頭部の端部が面をもち、やや偏平な体部である。外面の調整は表面摩滅のため不明で、内面の口頭部にヨコナデ・体部上下端にナデ・中央部にハケを施す。1331は体部下端および底部を欠損する。外反する口縁の端部が面をもち、短い筒状の頭部に球形の体部をもつ。調整は、口頭部内外面にヨコナデ・体部外面にハケ後ヘラミガキ・内面にハケを施す。外面全体に黒色物質を塗布する。

1332・1333は、口頭部を欠損するが、球形の体部に突出する底部をもち、体部外面に丁寧なヘラミガキを施す事から、広口壺と思われる。

1343は完形で、口径14cm・器高24cmを測る。外傾する口縁の端部が斜め上方へ立ち上がり、外端面をもち、短い筒状の頭部に球形の体部、突出する上げ底をもつ。調整は、外面の口頭部にハケ後ヨコナデ・体部中央部より上がハケ後粗いヘラミガキ・以下がタキ後ナデを施す。内面の口部上半にヨコナデ・口頭部にハケ、体部上半にハケ・下半に板状ナデを施す。

1334～1338・1340～1342・1344・図89～91は、大型の広口壺である。

1334は口頭部から体部上端を残し、外反する口縁部の端部が面をもち、筒状の頭部になだらかに体部へと続く。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。1335は、口頭部から体部上端を残し、外反する口縁部の端部が面をもち、短い筒状の頭部に屈曲し体部が広がる。外面の頸体部にヘラミガキ、内面の口頭部にヘラミガキ・体部にナデを施す。1336は口頭部から体部上端を残し、外反する口縁の端部は丸みをもち、端部内面に凹面をもつ。短い筒状の頭部に、屈曲して広がる体部をもつ。外面の口頭部にヨコナデ・体部にヘラミガキ、内面の口頭部にヘラミガキ・体部にナデを施す。1337は口頭部から体部上端を残す。外反する口縁部の端部が面をもちわずかに垂下する。短い筒状の頭部に屈曲して広がる体部をもつ。外面の口縁部上半にナデ・口頭部から体部にヘラミガキ、内面の口頭部にヘラミガキ・体部にナデを施す。口縁部内面に弧状のヘラ記号あり。1338は、体部下端および底部を欠く。短く水平方向に聞く

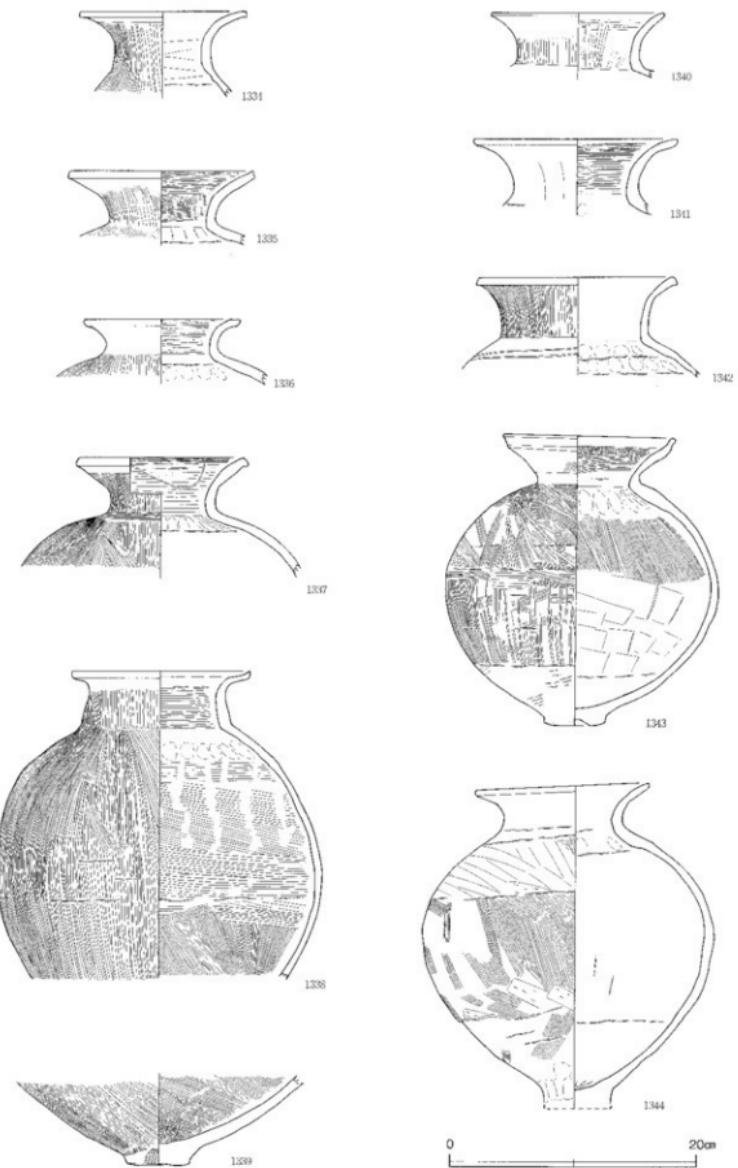


圖88 流路1下層—砂礫層出土土器(5)

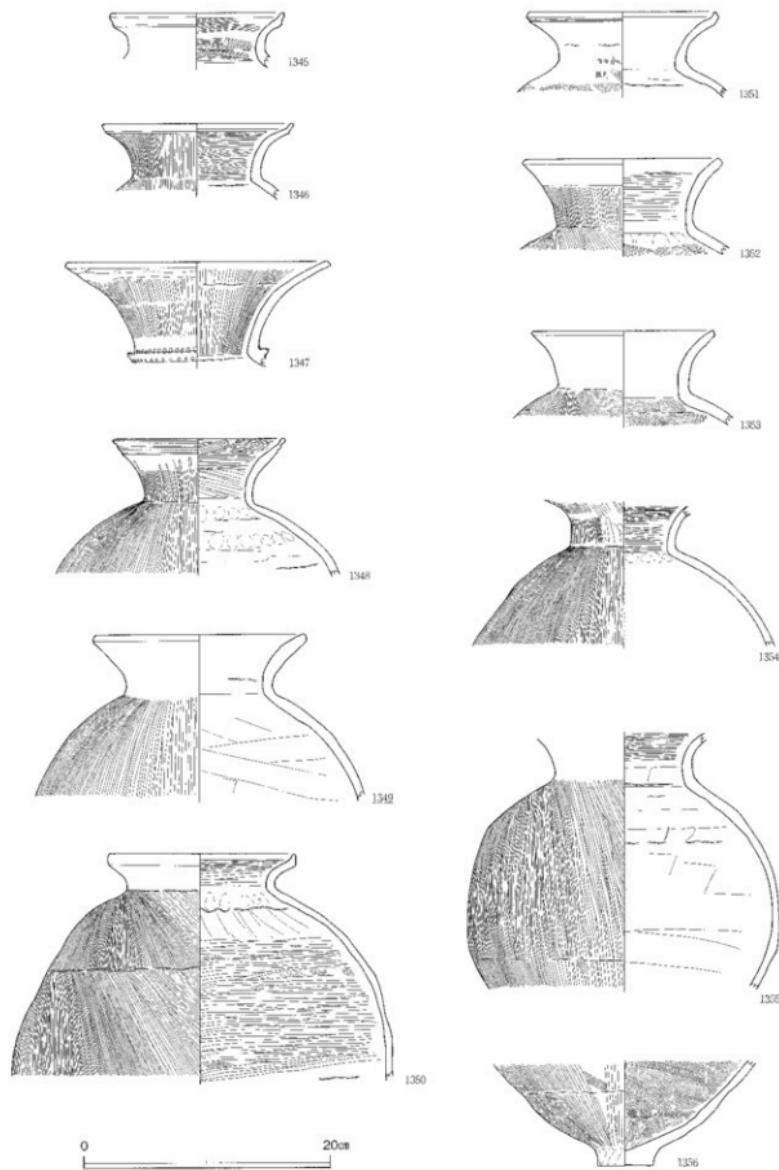


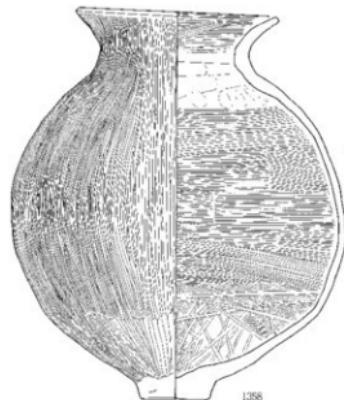
图89 流路1下层—砂砾层出土土器(6)



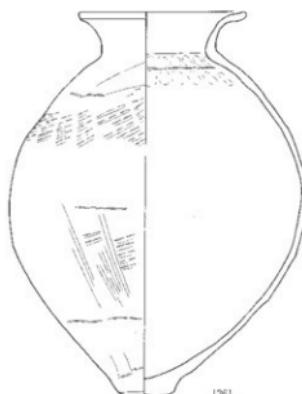
1357



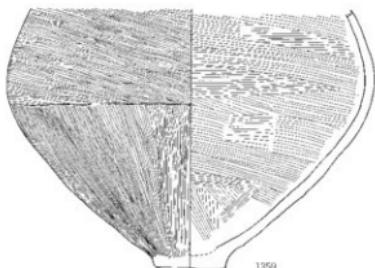
1360



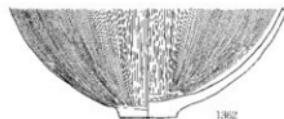
1358



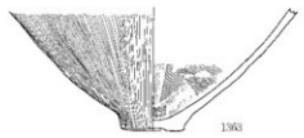
1361



1359



1362



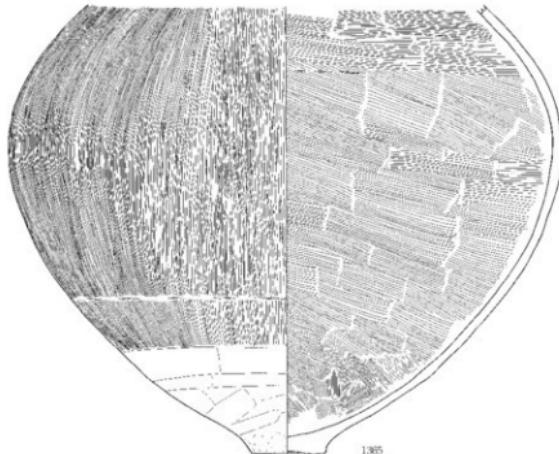
1363

0 20cm

図90 流路1下層—砂礫層出土土器(7)



1364



1365



1366

図91 流路1下層一砂礫層出土土器(8)

口縁部の端部はわずかに立ち上がり面をもつ。やや裾広がりの太い頸部に屈曲して球形の体部をもつ。調整は、外面の口縁部にヨコナデ・頸部にヘラミガキ・体部にハケ後ヘラミガキ、内面の口縁部にヨコナデ・頸部にヘラミガキ・体部にハケを施す。1340・1341は口頸部を残し、いずれも外反する口縁部の端部は丸く終わる。短い筒状の頸部をもつ。調整は、前者が外面の頸部にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ・頸部にハケ後部分的にヘラミガキを施し、後者が頸部外面にナデ、口頸部内面にヘラミガキを施す。1342は口頸部から体部上端を残す。外反する口縁部の端部が面をもち、筒状の頸部に屈曲し広がる体部をもつ。外面の口頸部にヘラミガキ・体部にナデ後粗いヘラミガキ、内面の口頸部にヨコナデ・体部に粘土紐の縦目と指押さえを残す。1344は底部の一部を欠損する。外反する口縁部の端部が丸く終わり、短い筒状の頸部に球形の体部に突出する底部をもつ。調整は、外面の口頸部にナデ・体部に

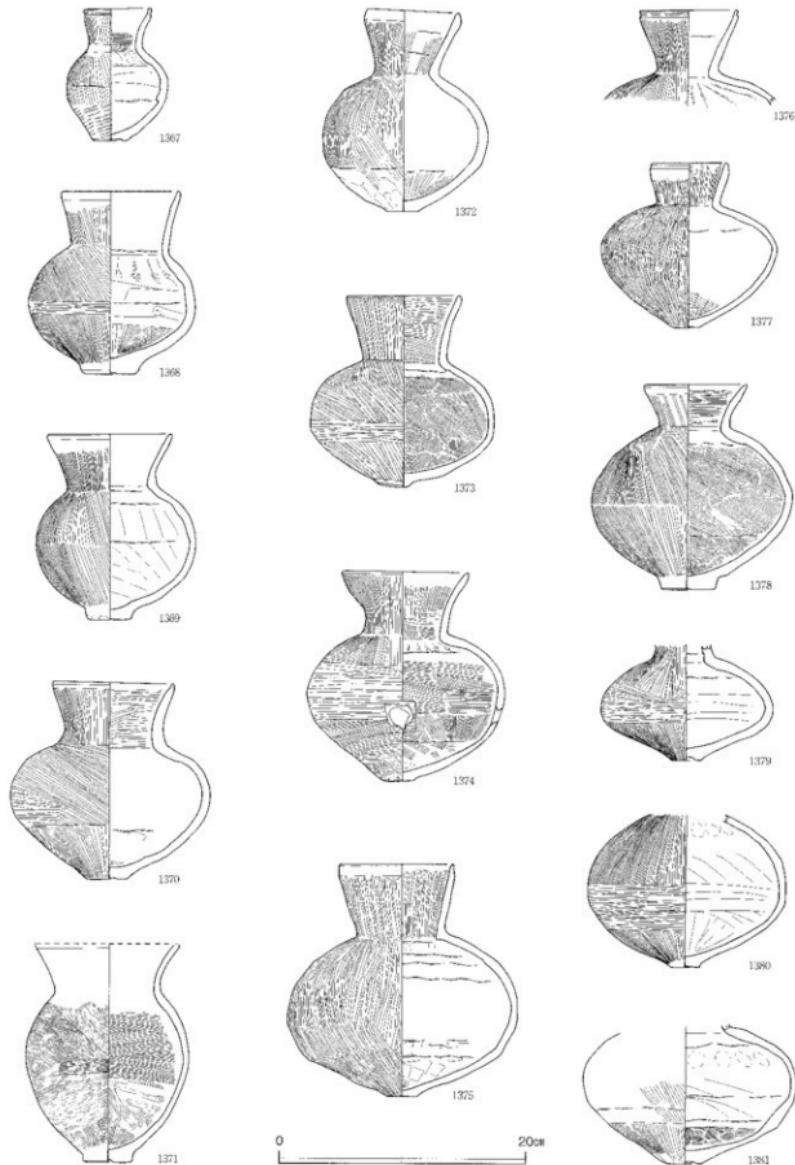


図92 流路1下層－砂礫層出土土器(9)

ハケおよびナデ、内面全体にナデを施す。

1345・1346は、いずれも、口頸部から体部上端を残す。外反する口縁部の端部が立ち上がり外端面をもち、筒状の頸部に屈曲し聞く体部をもつ。調整は、1345の外面にナデ・内面にハケ、1346の外面にヘラミガキ、内面の口頸部にヘラミガキ・体部にナデを施す。1351は、口頸部から体部上端を残す。外反する口縁部の端部は、わずかに立ち上がり面をもち、短い筒状の頸部に屈曲して広がる体部をもつ。外面の口縁端部下に強いヨコナデ、口頸部にナデ・体部にハケ、内面にナデを施す。

1349・1352・1353は、口頸部から体部上端を残す。外反する口縁部の端部が面をもち、筒状の頸部に屈曲して広がる体部である。調整は、口頸部になどおとびヘラミガキ・体部にヘラミガキを施し、内面の口頸部にヘラミガキないしは体部にナデ・体部にナデを施す。1354・1355も、口縁端部を欠くが同様の器形と思われる。1348は口頸部から体部上半を残し、外傾する口縁部の端部が丸みをもち、筒状の頸部に屈曲し広がる体部である。外面の頸体部にヘラミガキ、内面の口頸部にヘラミガキ・体部にナデを施す。口縁部に凝凹線紋2条を施す。1349は、角閃石を含む生駒西麓産である。

1347は、口頸部を残す。外反する口頸部の端部は面をもつが、部分的に欠けている。口縁部外面を観察すると、ヨコナデが部分的に途切れ、再度口縁部を調整し直した様子が窺える。このことは、焼成前の乾燥中に口縁部が破損したものを補修したと考えられる。それは、口縁端部の所々に、櫛描波状紋がかすかに残存している事からも検証できる。口頸部の調整は、内外両面にヘラミガキを施す。頸体部の境目の刺突紋間に貼付刻み目突窓を施す。

1350は、口頸部から体部上半を残し、短く外反する口縁部の端部が立ち上がり外端面をもち、短い筒状の頸部に屈曲し球形の体部をもつと思われる。体部径が口徑の約2倍を有す。調整は、外面の口頸部にヨコナデ・体部にヘラミガキ、内面の口頸部にヘラミガキ・体部にハケ後ヘラミガキを施す。内面の体部上端に指押さえ・指ナデを残す。外面の頸体部の境目および体部上端、内面の体部上端および中央部に粘土紐の縦目を残す。

1357は完形で口径15.6cm・器高29.6cmを測る。外反する口縁部の端部が面をもち、短い筒状の頸部から屈曲し球形の体部に突出する平底をもつ。調整は、外面の体部上半にハケ後ナデ・下半にハケ後ヘラミガキ、内面にハケを施す。体部内外面に、粘土紐の縦目を顕著に残す。1358は完形で、口径16cm・器高32cmを測る。外反する口頸部の端部が面をもち、屈曲して球形の体部に突出する平底をもつ。外面に丁寧なヘラミガキ、内面の口頸部にヘラミガキ、体部にハケ後体部下端および底部に粗いヘラミガキを施す。乳白色の細かな砂粒を含む胎土である。1360は完形で、口径14cm・器高26.4cmを測る。外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。筒状の頸部から屈曲し、球形の体部に突出する平底である。調整は、外面の体部上半にタタキおよびハケ後ヘラミガキ・下半にヘラミガキ、体部内面にハケを施す。1362は完形で、口径13.6cm・器高27.2cmを測る。外反する口縁部の端部は丸みをもち、短い筒状の頸部から屈曲し卵形の体部に、やや突出する底部をもつ。外面の体部上端にタタキ後ナデ・以下にタタキ後ヘラミガキ・底側部にヘラケズリ状ナデを、内面にナデを施す。1357・1360・1361は、3~5mmの砂粒を多量に含む淡黄褐色の土器である。

1364は、口頸部から体部上端を残す。外反する口頸部に、端部がわずかに摘み上げられ面をもち、屈曲し広がる体部をもつ。外面の口縁部にヨコナデ・頸部にヘラミガキ・体部にタタキ後ヘラミガキ、内面の口頸部にヘラミガキ・体部にハケおよびナデを施す。砂粒の少ない乳白色の土器である。

1365は超大型のもので、肩部がやや張る球形の体部に突出するわずかな上げ底である。外面の体部に

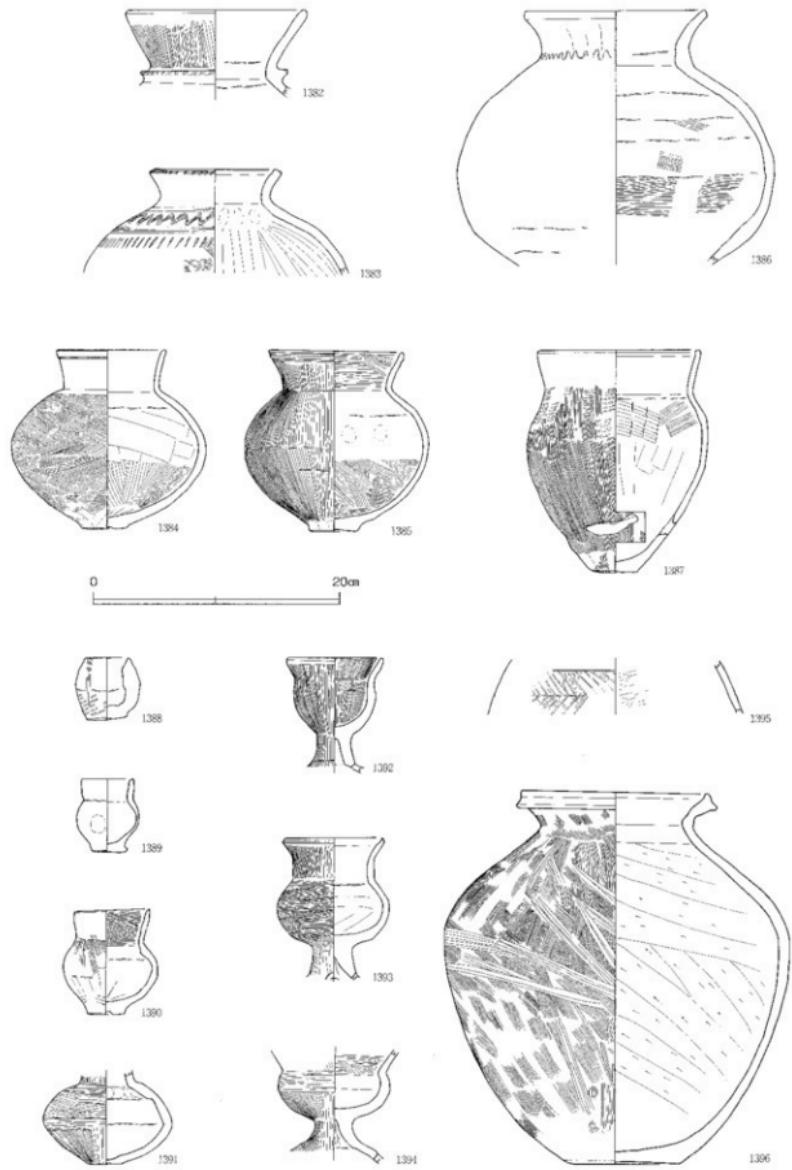


図93 流路1下層一秒燥層出土器(10)

ヘラミガキ・体部下端および底部にナデ、内面の体部にハケ・底部にナデを施す。角閃石・斑レイ岩を含む生駒西麓産のものである。

直口壺には、大別して、頸部が太いもの（頸部径が体部径の1/2前後）と、細いもの（頸部径が体部径の1/3前後）があり、器高が15cm前後のものが多い（図91・92-1382-1387）。

頸部が太いものには、(1367-1371・1373-1375)のやや長さがあるものと、(1381-1387)のように短いものがある。概して、中型で体部がやや偏平なつくりで外面にヘラミガキを施すものが多く、(1371)は唯一、卵形の体部をもち、体部外面にハケを施す。底部が突出するもの(1368・1369・1371)と、底部径が2.5cm程度と小さくわずかに突出するもの(1373-1375)がある。1374は、体部中央に焼成後の穿孔がある。頸部が細いものには、(1374・1376-1384)があり、斜め外方に開く口頸部に屈曲しやや偏平な体部をもつ。1376・1377は、口縁部の端部に疑問線紋を施す。底部は、小さな平底(1382)および、上げ底(1377・1384)をもつものと、突出する平底をもつ(1383)がある。体部外面にヘラミガキを施す。

1380・1383は、口頸部を欠損するが、形態および調整などから直口壺と思われる。

後者には、中型と大型がある。中型のものには、口径9cm-11cm・器高約15cmでやや偏平な体部をもち、口縁部に疑問線紋を施すもの(1384・1385)と、口径13.2cm・器高18.8cmを測りやや肩部が張る縦長な体部に平底のもの(1387)がある。1387は、体部外面にタタキ後ハケ、底部にタタキを施し、体部下半に焼成後の穿孔がある。大型のものは装飾性に富み、(1386)の頸部の境目に篦描き波状紋を施す。金雲母を多量に含む茶褐色の土器である。

小型壺には、手づくねの無頸壺(1388)、直口壺(1389・1390)、口頸部を欠くもの(1391)がある。

台付壺は、いずれも小型で脚台部を欠損し、(1392・1394)が口径が最大径をもつもので、(1393)がわずかに外反する口縁部に太い頸部を持つ広口壺に脚部が付くものである。外面に、ヘラミガキを施す。

1395は、体部破片で、篦描の綾杉紋を施す。

1396は完形で、口径15.2cm・器高30.6cmを測る。短く外反する口縁の端部が上下にわずかに拡張し、四面をもつ。短い筒状の頸部に屈曲し肩部の張る体部に、わずかな上げ底である。体部外面にハケ後粗いヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。白色砂粒を多量に含む黄褐色をした土器で、他地域産と思われる。

壺は、最も多量に出土しており、体部外面にタタキを施すものがほとんどで、小型(1397-1415)、中型(1416-1537)、大型(1539-1549)、超大型(1550-1552)がある。

体部外面にハケを施すもの(1553-1557)は、少量である。前述のように、図示したものは、ほとんどが完形で出土している。

小型の壺は、口径が最大径をもつ。口径10cm前後・器高8cm-10cm前後で、器高より口径が大のもので、やや偏平な体部をもつ(1398-1400・1405)と、口径13cm-16cm前後・器高8cm-10cm前後で、半球状の体部をもつ(1401・1402・1406・1414・1415)がある。後者は、ここでは壺に分類したが鉢に類する形態をもつものである。1403・1404・1407-1410は、口径より器高が大のもので、口径9cm-11cm・器高10cm-11cmを測る。

1397は口径3.3cm・器高4cmを測り、ミニチュアである。1397・1401-1403・1409・1410・1414以外は、内外面に煤が付着する。

中型の壺には、器高が11cm-25cmまでの様々な大きさのものがあり、大きくは、20cm以下のやや小型のものと20cm以上のものに区分される。

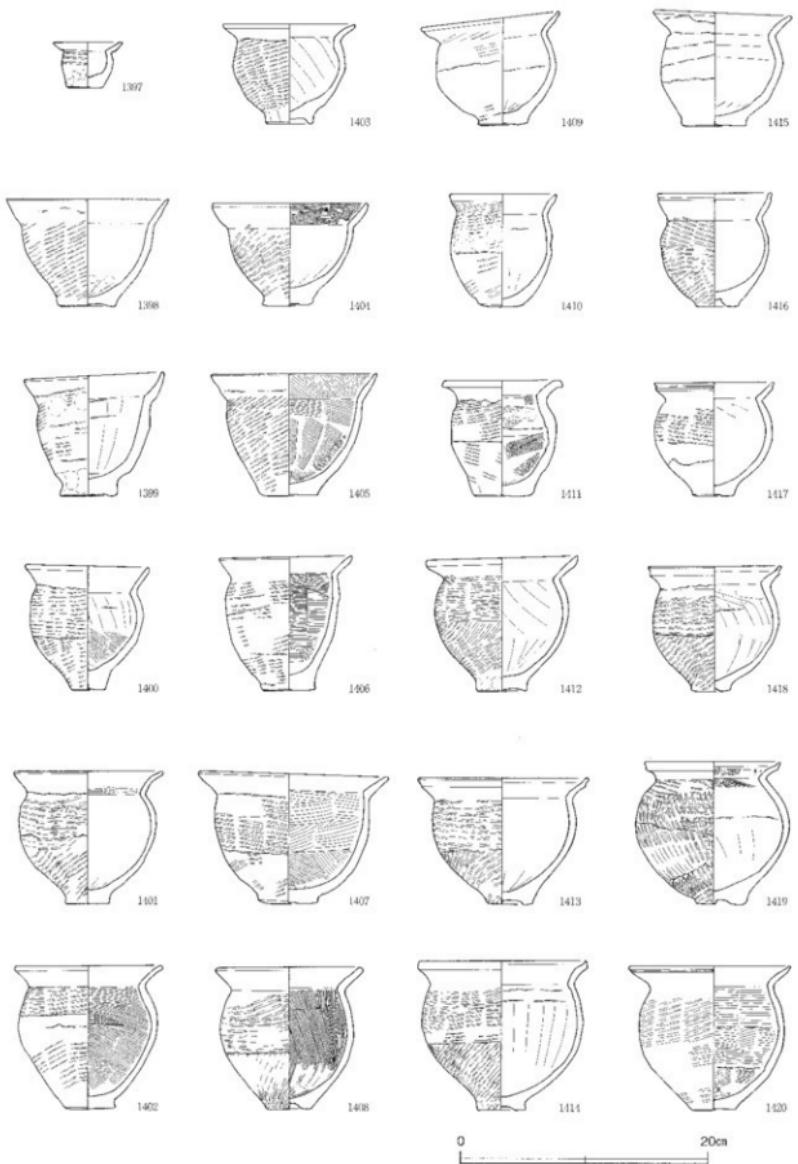


図94 流路1下層一砂礫層出土土器(11)

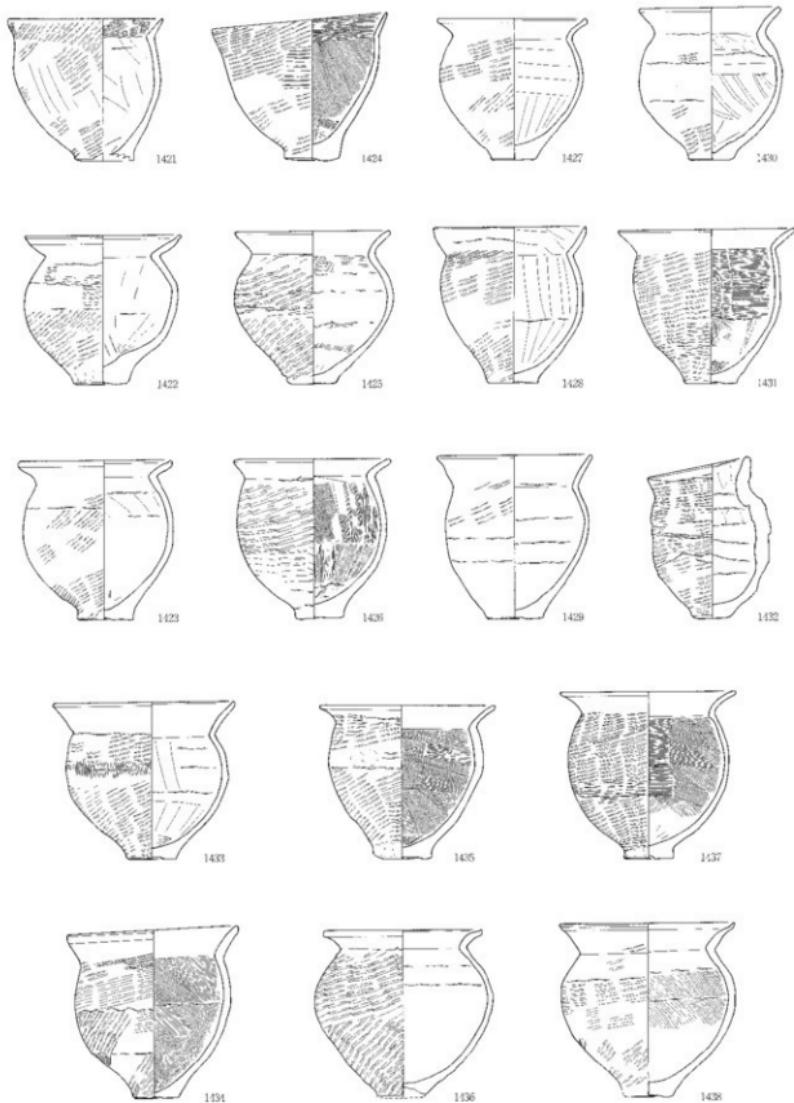


图95 流路1下层—砂砾层出土土器(12)

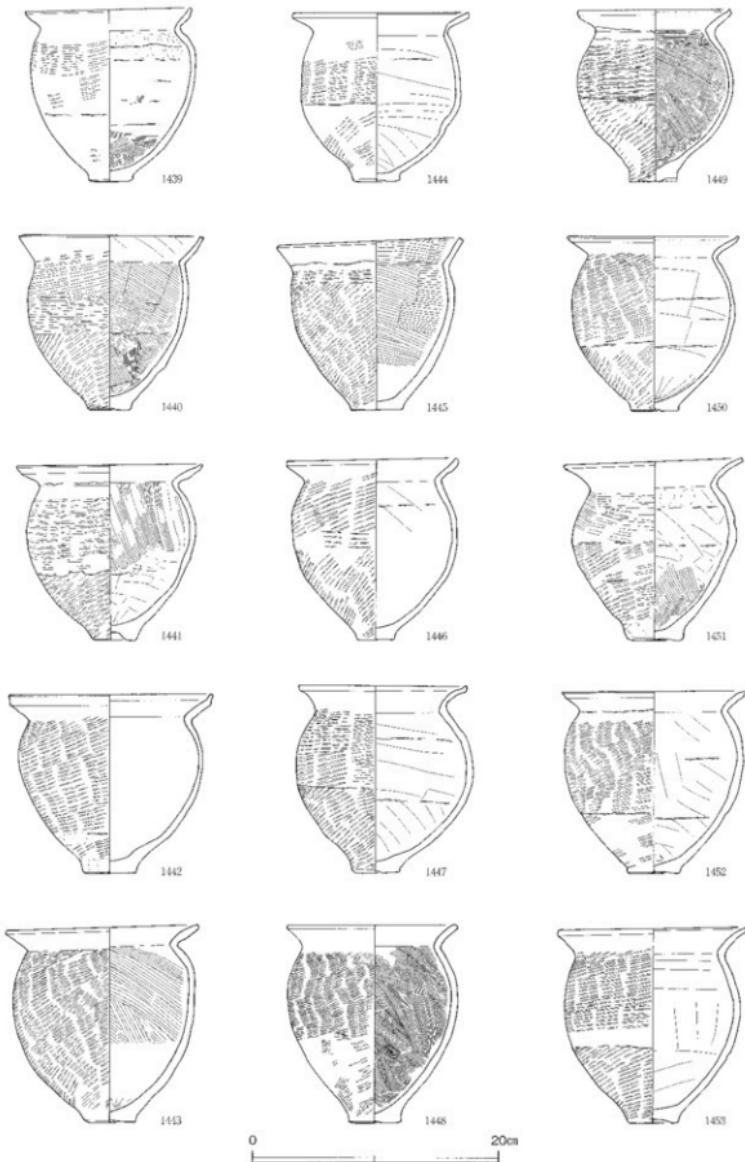


図96 流路1下層—砂礫層出土土器(13)

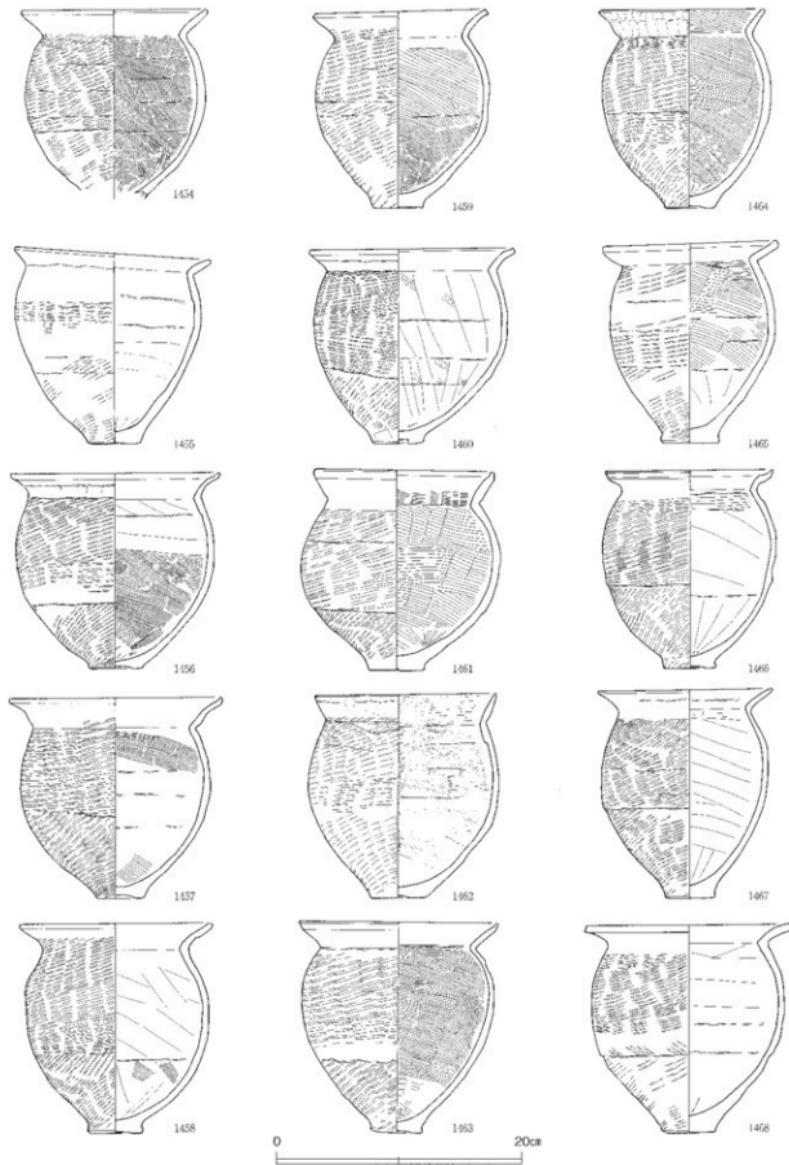


図97 流路1下層—砂礫層出土土器(14)



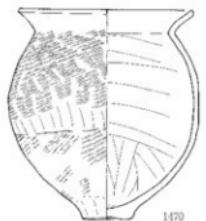
1469



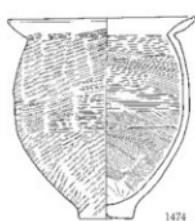
1473



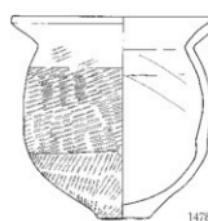
1477



1470



1474



1478



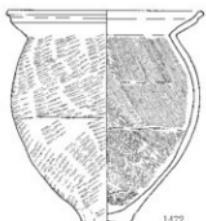
1471



1475



1479



1472



1476



1480

0 20cm

図98 流路1下層—砂礫層出土土器(15)

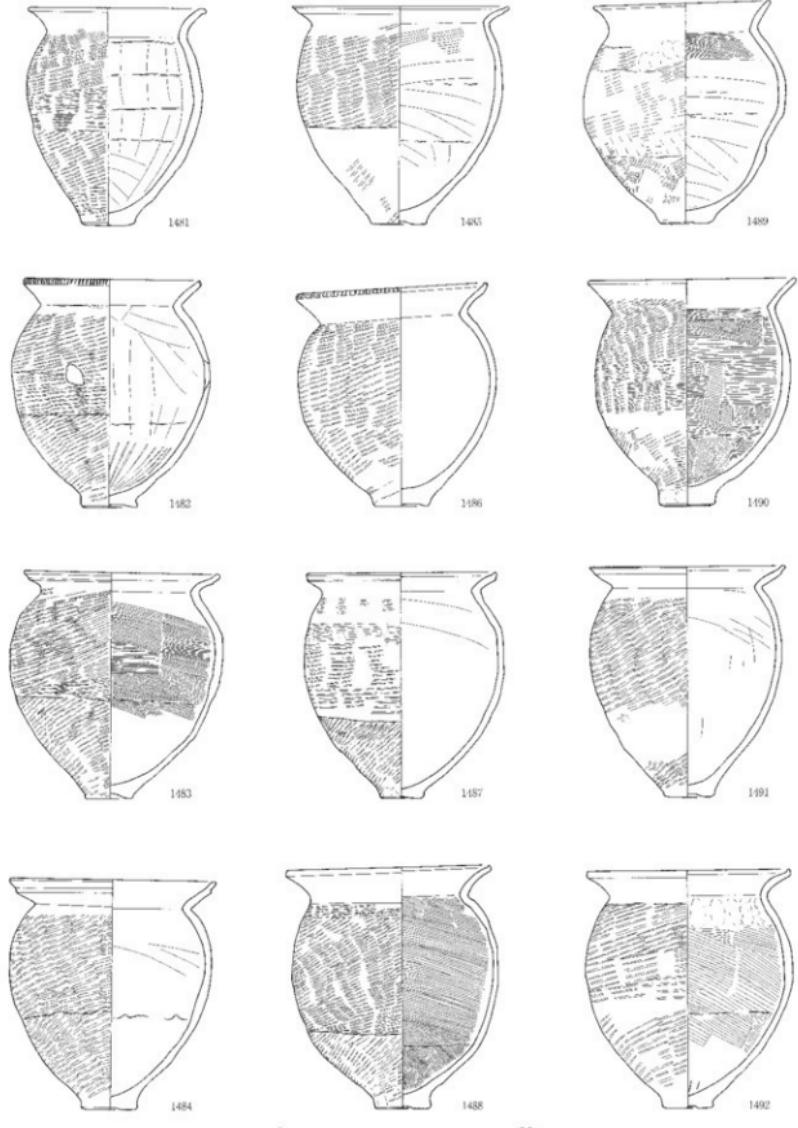


图99 流路1下层—砂砾层出土土器(16)

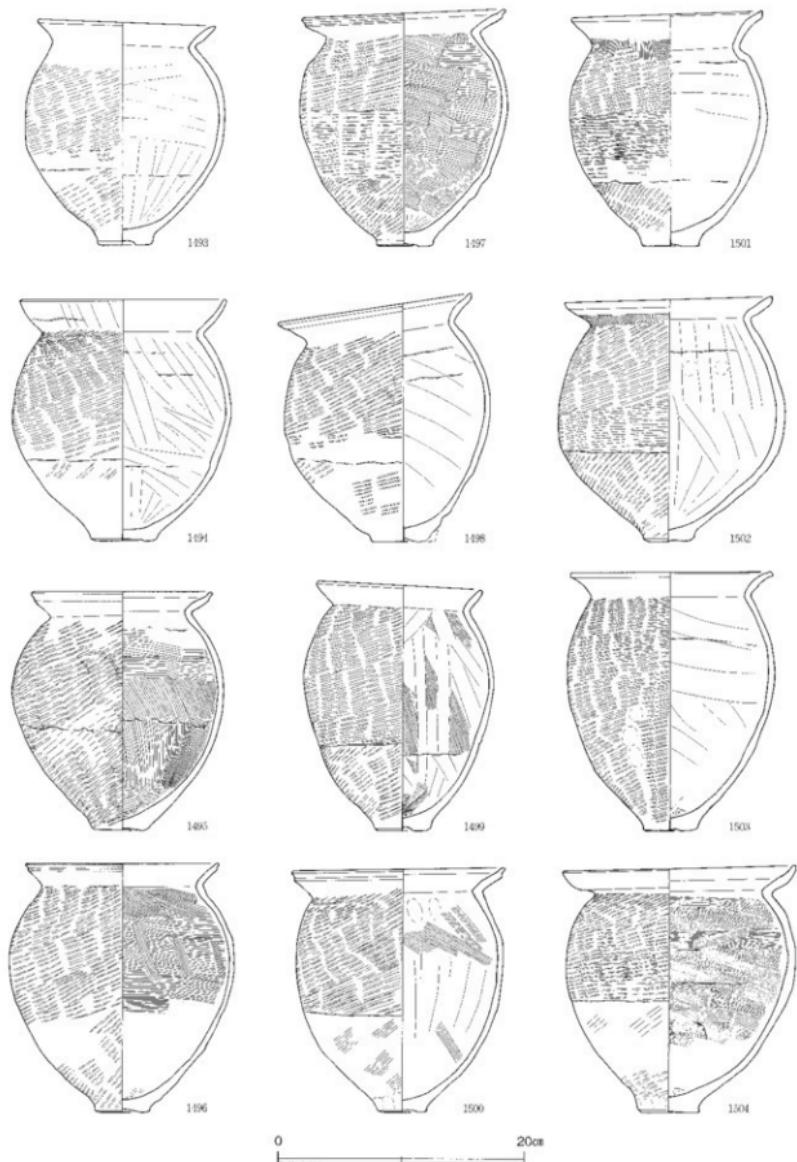


圖100 流路1下層—砂礫層出土器(17)

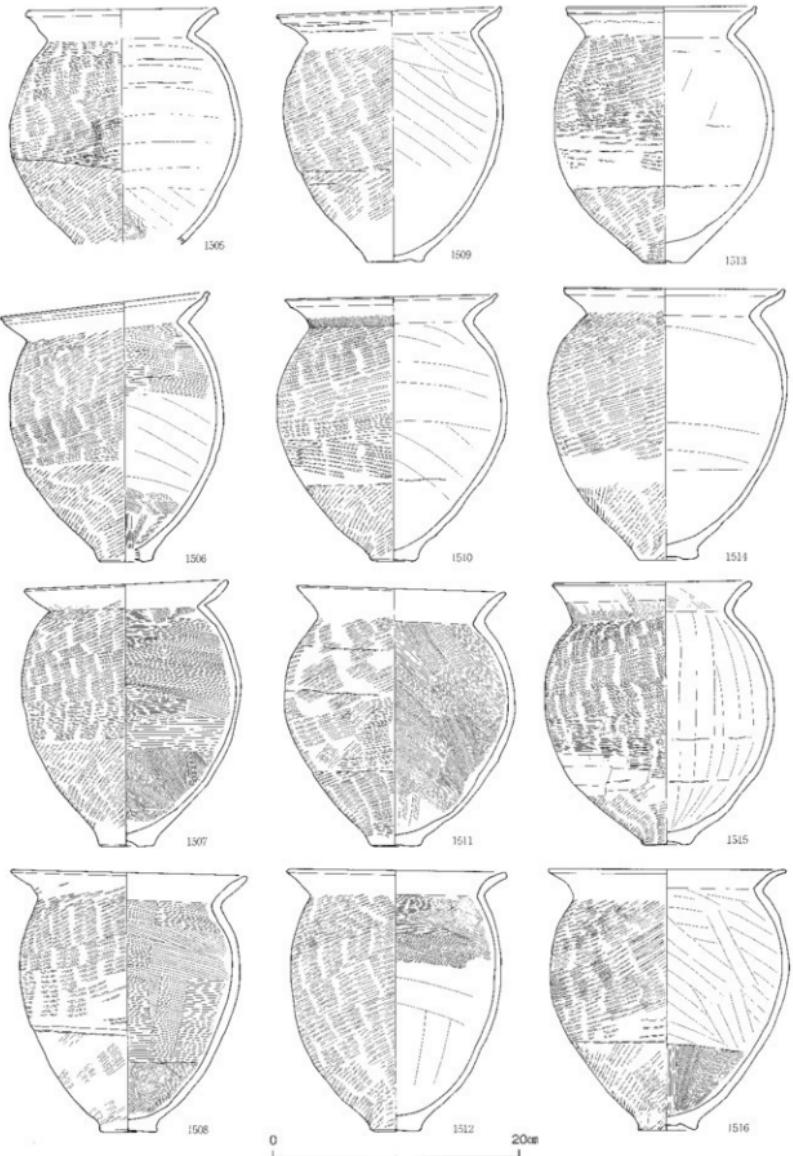


図101 流路1下層一砂礫層出土土器(18)

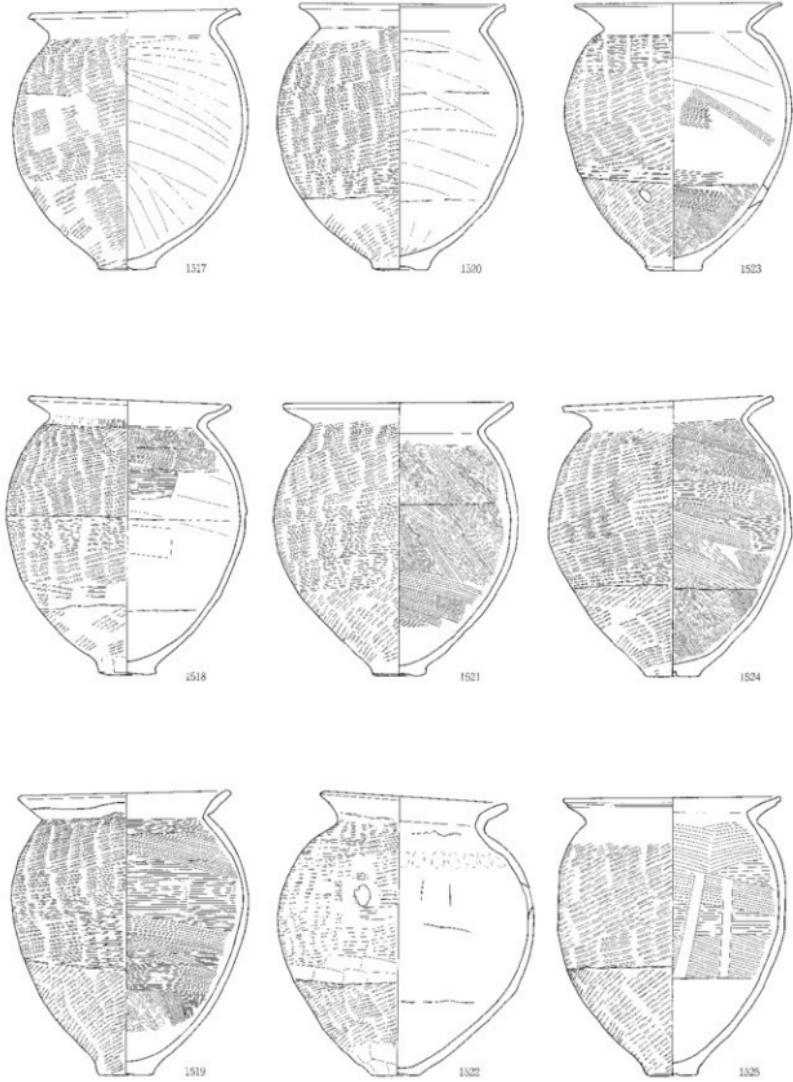
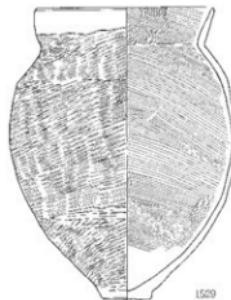


圖102 流路1下層—砂礫層出土土器(19)



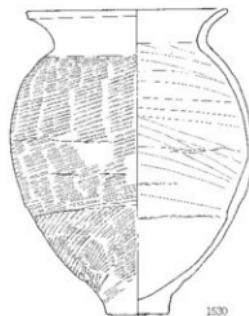
1528



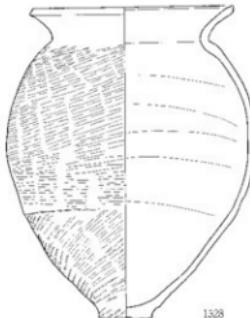
1529



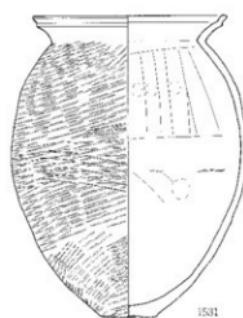
1527



1530



1528



1531

0 20cm

図103 流路1下層—砂礫層出土土器(20)

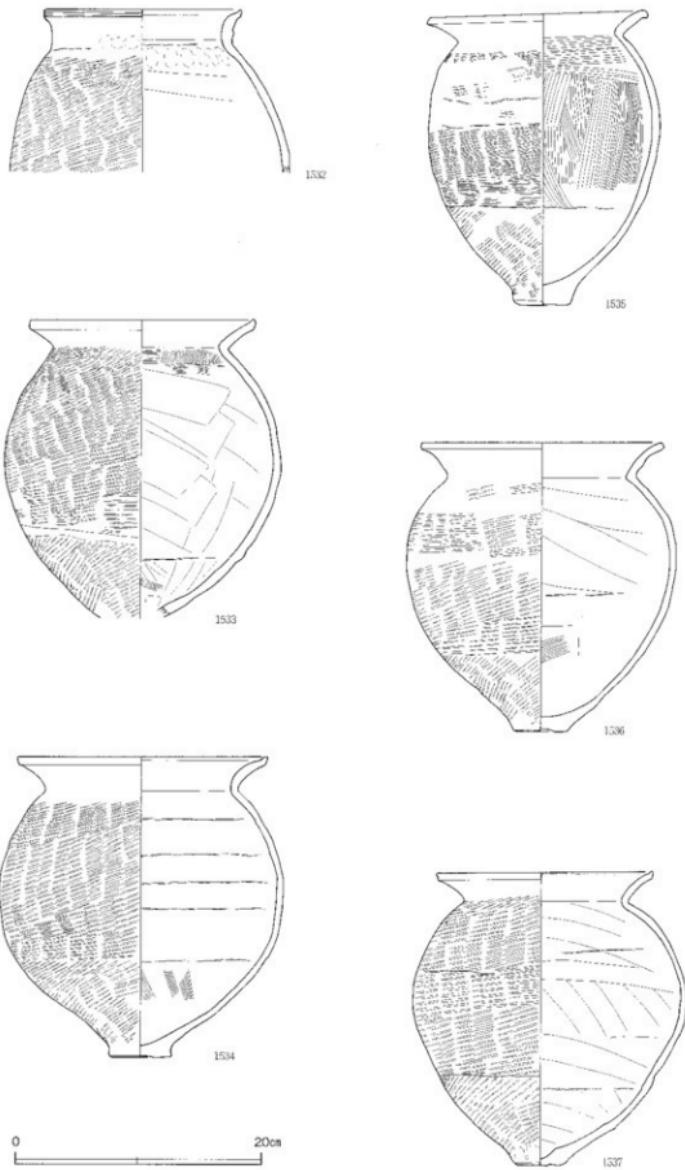
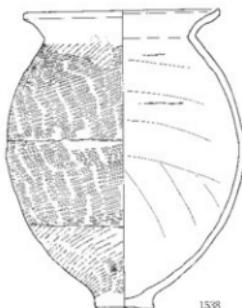
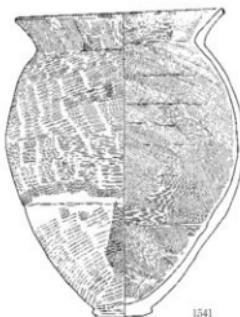


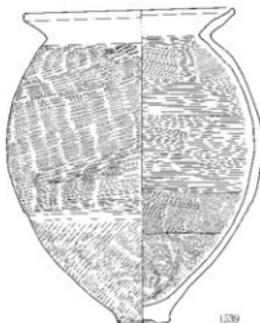
図104 流路1下層一砂疊層出土土器(21)



1538



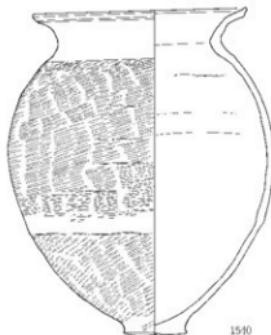
1541



1539



1542



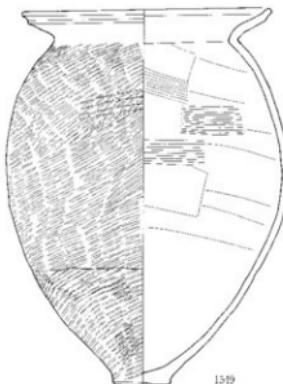
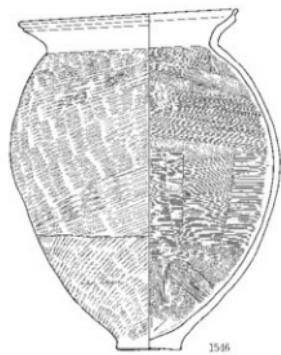
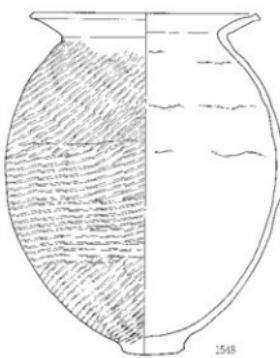
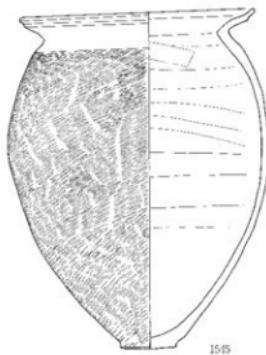
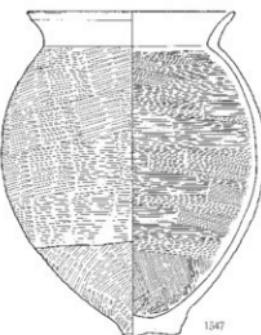
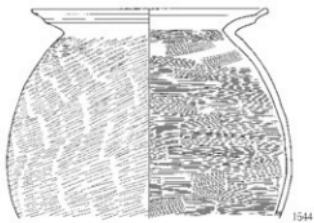
1540



1543

0 20mm

图105 流路1下层—砂砾层出土土器(22)



0 20cm

圖106 流路1下層—砂砾層出土土器(23)

前者のものには、小型と同様に口径が最大径をもち、器高を上回るもの（1421～1423・1433・1434・1443・1448・1458）があるが、それらのものを除くと口径と器高がほぼ近似値を示すかや器高が上回るものがある。また、（1437・1461）のように体部が最大径をもつものもある。口縁部の形態は様々で、外反する口縁部の端部が、尖り気味に終わるもの（1421・1423等）、丸みをもつもの（1418・1428・1434等）、面をもつもの（1421・1440・1448等）、わずかに立ち上がり面をもつもの（1429・1441・1462等）がある。また、（1427・1442）のように内湾気味に伸びる口縁部をもつものがある。

1421・1422は、口縁部端部にまでタタキが施され、頸部の屈曲がわずかなことから鉢にも共通する器形である。

体部外面のタタキの調整は、概ね、体部上半と下半に2分割され、下半部にナデを追加するものが多い。1416には、右下がりのタタキ後縦方向のタタキを、（1476）の上半にも縦方向のタタキ施す。1462の口縁端部には疑凹線紋を施し、1484・1485は、刻み目を施す。1484は、体部に焼成後の穿孔がある。

1432は口径8cm・器高13cmを測り、器壁が8mm～12mmと厚く、体部の内外面に粘土紅の継目を顕著に残している。1432・1437・1444を除いて、ほとんどのものに煤および炭化物が付着する。

後者のものには、口径より器高が大的もので、（1506・1508等）のように口径が最大径をもつものと、（1505・1540等）のように体部径が口径を上回るものがある。口縁部は、短く外反し、その端部が丸みをもつもの（1513・1516等）、面をもつもの（1505・1515等）、わずかに立ち上がり面をもつ（1518・1520等）ないしは凹面をもつもの（1506・1509・1531等）がある。1496は、口頸部が内湾気味に外方へのびる。

1527は口縁部が外傾し、1532はわずかに頸部の屈曲が緩やかである。頸部の屈曲は、内面に明瞭な稜線をもつもの（1503・1508・1531・1545等）が大半を占める。底部には、突出するもの（1509・1540等）、わずかな上げ底をもつもの（1524・1531）がある。1519・1524の体部には、焼成後の穿孔がある。いずれも、煤が付着する。

大型の甕は縦長で、口径約16cm～18cm・器高約24cm～30cmを測る。体部に最大径をもつもので、体部が球形のもの（1533・1534・1536・1537・1544）と、その他の飼卵形のものがあり、底部が突出する。口頸部の形態は短く外反し、端部が面をもつもの（1535・1536・1541・1548）、わずかに立ち上がり面をもつもの（1533・1534・1537～1540・1544・1548）、斜め外方に立ち上がり凹面をもつもの（1544～1546・1549）がある。1541・1543の口縁端部に刻み目を施す。

1541は、焼成時に鉢部との接合に亀裂が入り、焼け歪んでいる。これと1543のみ、煤が付着していない。

超大型の甕は、3点あり、口径が22cm～28cm、器高が30cm以上ある。1550は、口頸部から体部上半を残し、口頸部が内湾上に外方へ伸び、端部上端が面をもつ。頸部内面が「く」の字状に屈曲する。体部外面にタタキ、内面にナデを施す。1551は完形で、外反する口頸部の端部がわずかに垂下し面をもつ。頸部内面が「く」の字状に屈曲し、体部の最大径が器高の2/3位にあり、突出する底部をもつ。頸部外面上にタタキ後部分的に横方向にナデ、内面にナデを施す。1552は完形で、短く外反する口頸部が屈曲して斜め外方へ立ち上がり、屈曲して球形の体部に突出する底部をもつ。体部外面にタタキ後部分的にナデ、内面にハケを施す。1551・1552は、煤が付着する。

体部にハケを施す甕は、小型1点・中型4点の計5点である。1554は小型で口径9.6cm・器高7.6cmを測る。口頸部が最大径をもち、器高より大である。斜め外方へ短く伸びる口頸部の端部が丸みをもち、屈曲する頸部の内面が短い筒状で、偏平な体部に突出する底部である。内外面間にハケを施し、外面は

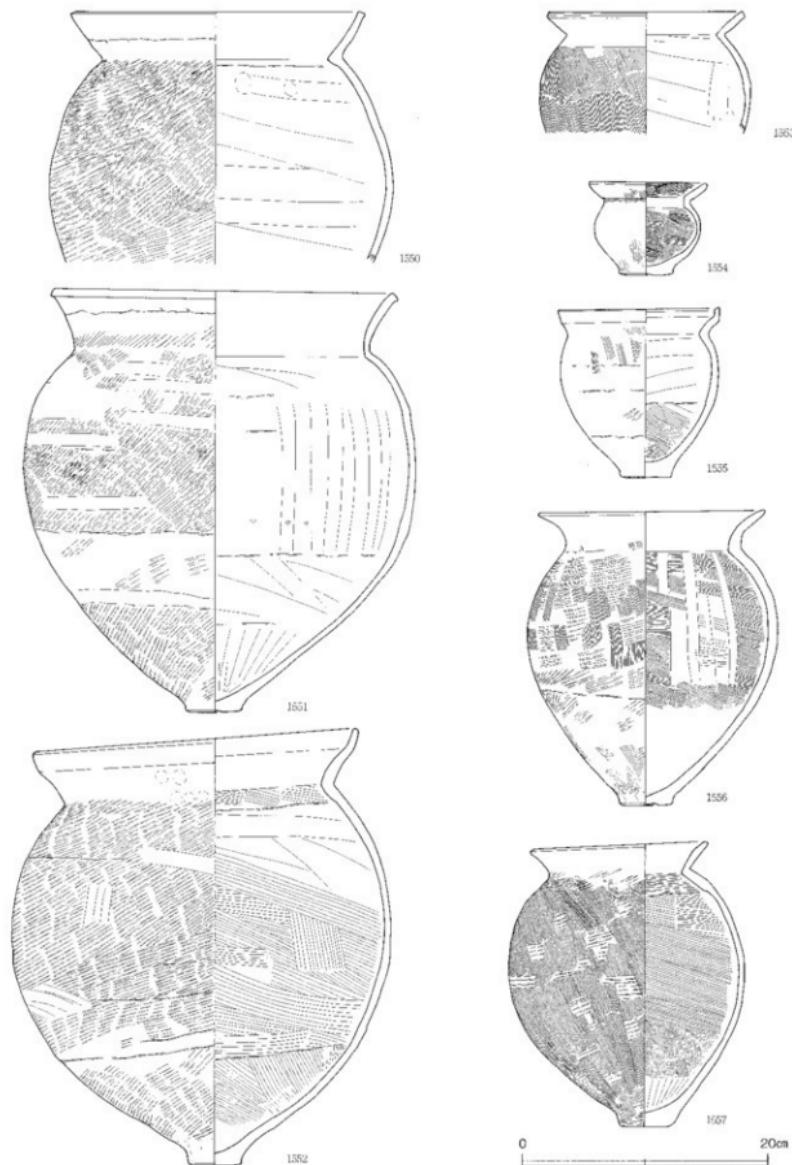


圖107 流路1下層—砂礫層出土土器(24)

さらにナデを施す。外面全体に煤が付着する。1455は完形で口径12.2cm・器高13.6cmを測る。短い口縁部が屈曲し、立ち上がり上端に面をもち、頸部が屈曲し内面に稜をもち、倒卵形の体部に底部が突出する。体部の外面にタタキ後ハケおよびナデ、内面の上半にナデ・下半にハケを施す。1553は口縁部から体部上半を残す。外傾する口頭部の端部が面をもち、頸部が「く」の字状に屈曲し内面に稜をもつ。体部が最大径になる。体部外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。1556・1557は完形で、いずれも、外反する口頭部の端部が丸みをもち、屈曲する頸部の内面に鋭い稜をもつ。体部が倒卵形で、上位に最大径をもち、突出する底部である。いずれも、体部の外面にタタキ後ハケ、内面にハケおよびナデを施す。

以上の上器は、総て外面に煤が付着し、1556・1557の内面下部に炭化物が付着している。

鉢には、外反する口縁部をもつものと、直口のものがある。

外反するものには、口径が15cm前後の小型と、20cm～30cm前後の中型、30cm以上の大型がある。

小型のものは、口縁部の端部が丸みをもち、外面にナデ・内面にハケを施すもの(1558～1563)と、外外面にヘラミガキを施すもの(1567・1568・1573・1574)がある。1569は、口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をもつ。底部が残存しているもので観ると、突出するわずかな上げ底である。

中型のものには、体部が浅いもの(1563・1564・1571)と、半球状の体部をもつものがある。1562の内面および1563の体部外面がナデを施す以外は、ヘラミガキを内外面に施している。

大型のものには、小型・中型などと共に共通する半球状の体部で、内外面を丁寧にヘラミガキするもの(1577・1579)と、短く外反する口縁部の端部が上方へ立ち上がり、短い頸部に、外方へ開く体部をもつ(1576)がある。1576は、口縁部の屈曲部に凝凹線紋を施し、体部外面にタタキ、内面にハケおよびナデを施す。器形から甕の可能性もある。口縁部と体部の外面に煤が付着する。1577の内外面には黒色物質を塗布し、(1579)の体部内面には煤および炭化物が多量に付着する。

直口のものには、口径15cm以下の小型のものがあり、口径が器高を上回るものである。ほとんどのものが、斜め外方にのびる口縁部の端部が丸く終わり(1580～1588・1593)、(1593)のみ上端面をもつ。底部は、平底のもの(1581)、突出し平底のもの(1583・1586)、突出し上げ底のもの(1584・1585)がある。体部の調整は外面にナデを施すものが多く、(1583・1584・1593)にタタキを施し、内面にナデかハケを施す。

1594・1595は、口縁部の端部がわずかに内侈し、端部の外面に凹面ないしは凝凹線紋を施す。底部は前者が上げ底で、後者が平底である。内外面にヘラミガキを施す。1594は、片口である。

底部に焼成前の穿孔のある有孔鉢には、器高のやや低いもの(1587・1596・1600)と、やや丈高のもの(1588・1597・1601)がある。いずれのものも、体部の調整は、外面にナデないしはタタキ、内面にハケないしはナデを施す。1597は、口縁部にのみ、黄白色の粘土紐を用い、他は黄褐色の粘土を使用している。内面の体部下半から底部にかけて炭化物が付着する。

壺蓋は、2点出土しており(1589・1590)、いずれも、口径17cm前後・器高5～6cmである。つまみ部の中央部を窪ませ、裾広がりの口縁部の端部は尖り気味に終わる。両者併に、内面に煤が付着する。

手培り形土器は、4点出土し、その内の2点は、覆い部のみのものであり(1591・1592)、他は鉢部を残存するものである(1598・1599)。前者は、当初、鉢部と何らかにより、剥離したものと思われたが、詳細に観察すると、剥離した痕跡が無く、単独で覆い部のみ作られたものと判断した。既存の鉢と組合せ使用したものと考えられる。いずれのものも、内面に煤が付着する。後者は、(1598)が、口縁部破片で、短く外反する口縁部の端部が尖り気味に立ち上がり、屈曲しわずかに膨らむ体部をもつ。体部は内

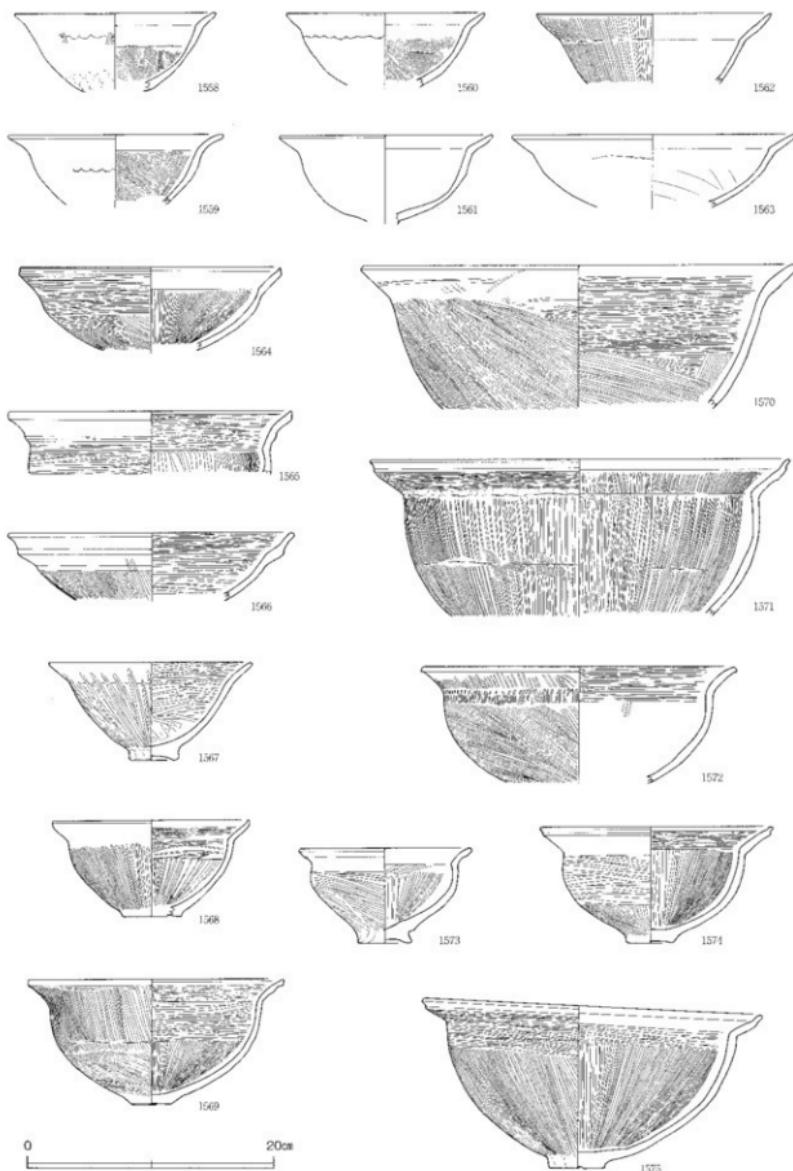
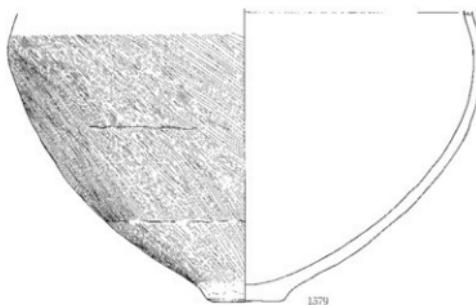
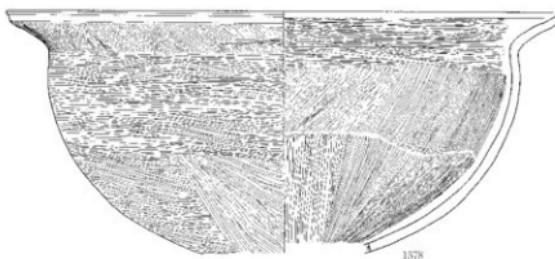
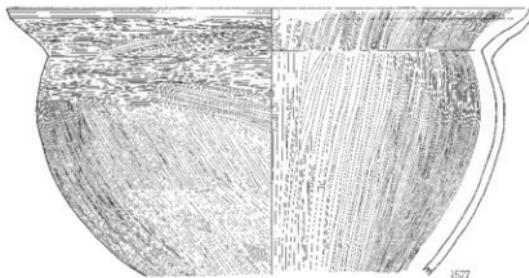


图108 流路1下层—砂砾层出土土器(25)



0 20cm

圖109 流路1下層—砂砾層出土土器(26)

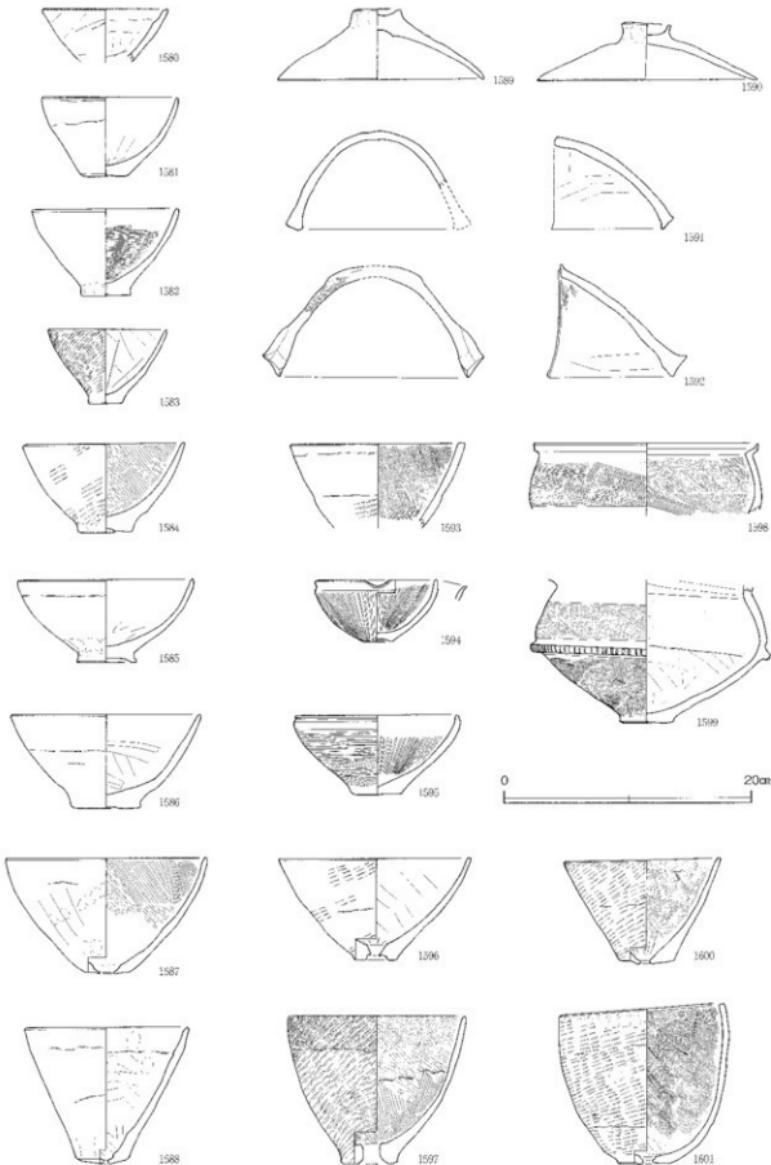


图110 流路1下层—砂砾层出土土器(27)

外面伴にハケを施す。1599は、口縁端部および覆い部を欠損する。体部の屈曲部に貼付刻み目突帯を施す。体部の外面にハケ、内面にナデを施す。いずれも、内面に煤が付着する。

高坏には、大別して、椀形の坏部を持つもの(1602~1616)と、外反する口縁部を持つものがある。外反する口縁部を持つもので、口縁部と坏部の境目に稜をもつもの(1609~1658・1661~1663)と、段をもつもの(1660)がある。

椀形高坏には、完形のものが出土しておらず、全容の分かるものは無い。口径が約10cm~17cmで、浅い椀形のもの(1602~1612・1616)と、深い椀形のもの(1613~1615)がある。1616は、口縁の端部がわずかに外傾し、柱穴の脚柱から裾広がりの脚台に続く。1603・1604の脚部は、前者が短い脚柱部から裾広がりになり、後者がやや裾広がりの脚柱から脚台部に裾広がりになる。1615の脚部は浅い三角錐状に開く。1602・1606・1613・1623・1624には、口縁部に縦凹線紋を施す。坏部内外面にヘラミガキを施すものが多く、(1605)は内外面にハケ、(1623)は、外面にナデ、内面にハケを施す。1607・1608・1610は、外面が表面摩滅のため調整不明である。1615は、坏部内面に赤色顔料が塗布される。

1602は、口縁部のみ淡黄褐色の粘土で、他は黄褐色の粘土を使用している。

有後の高坏には、口径が15cm以下の小型のもの(1617~1619)、16cm~25cmの中型のもの(1620~1655・1661~1664)、27cm以上の大型(1656~1658)がある。

小型のものには、口縁端部が面をもつ(1617・1618)と、わずかに立ち上がり面をもつ(1619)があり、(1617)の坏部はやや深い。1619の脚中部は半中実であり、3方に円形の透かしを穿つ。坏部の調整は、(1617)が外面にヘラミガキ、内面にナデを施し、(1618)の外面の口縁部にヨコナデ・坏底部にヘラミガキ、内面にヘラミガキを施し、(1619)の内外面にヘラミガキを施す。

中型のものには、口縁部の端部が丸く終わるもの(1620・1657等)、面をもつもの(1631・1633等)、わずかに立ち上がり面をもつもの(1624・1627・1695等)、わずかに垂下面をもつもの(1653)がある。

1643は、坏部の屈曲部がわずかに垂下する。坏部の調整は、内外面伴にヘラミガキを施すものがほとんどであり、(1636・1639・1644・1655)のように、波状の暗紋風に施すものもある。(1622)のみ内外面にナデを施している。

脚部は、やや裾広がりの脚柱部から大きく聞く脚台部をもつ。脚柱部は、(1659)が中実で、(1619・1627・1661)が半中実で、(1620・1654・1662~1665)が中空である。脚台部の3方ないしは4方に円形の透かしを穿つ。1637の坏部内外面、(1661)の外面に煤が付着し、(1629・1634・1664)に黒色物質を塗布している。

1644は、角閃石を含む生駒西麓産である。

大型のものは坏部のみ残存し、口縁部の端部が面をもつ(1656・1658)と、わずかに立ち上がり面をもつもの(1657)がある。内外面伴にヘラミガキを施す。

以上の高坏の他に脚部のみ残存している(1665~1679)がある。1668は、中空の脚柱から屈曲し内湾気味に聞く脚台部をもつ。1672は、筒状の中空の脚柱から、屈曲して裾広がりにのびる脚台端部に面をもつ。端部に刻み目を施す。1669は、脚台部に円形の透かしを4方に2段を交互に穿つ。1673・1674は、脚台径が9cm~10cmと小型である。1679は、脚台端部に縦凹線紋を施す。1670は、有稜高坏の脚部と思われるが、他は、不明である。1671は、角閃石を含む生駒西麓産である。1671・1676は、破損後内外面に、(1678・1680)の内面に煤が付着する。

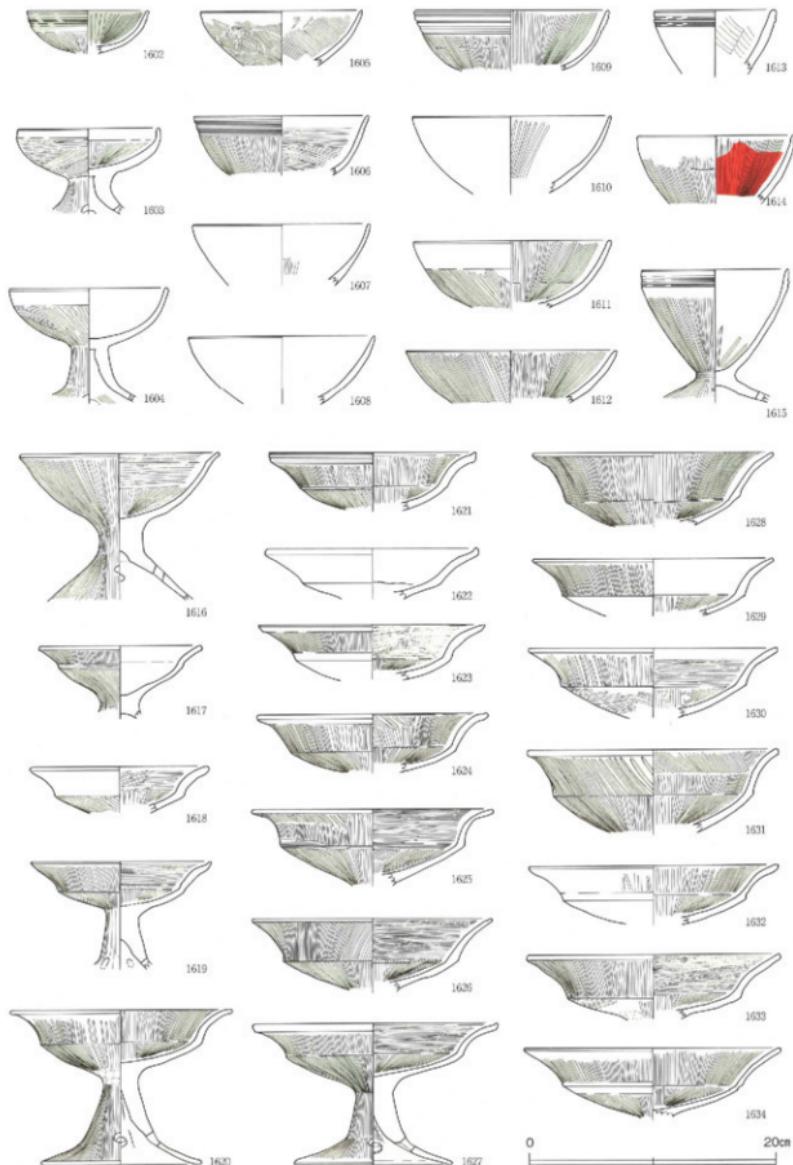


図 111 流路 1 下層—砂礫層出土土器 (28)

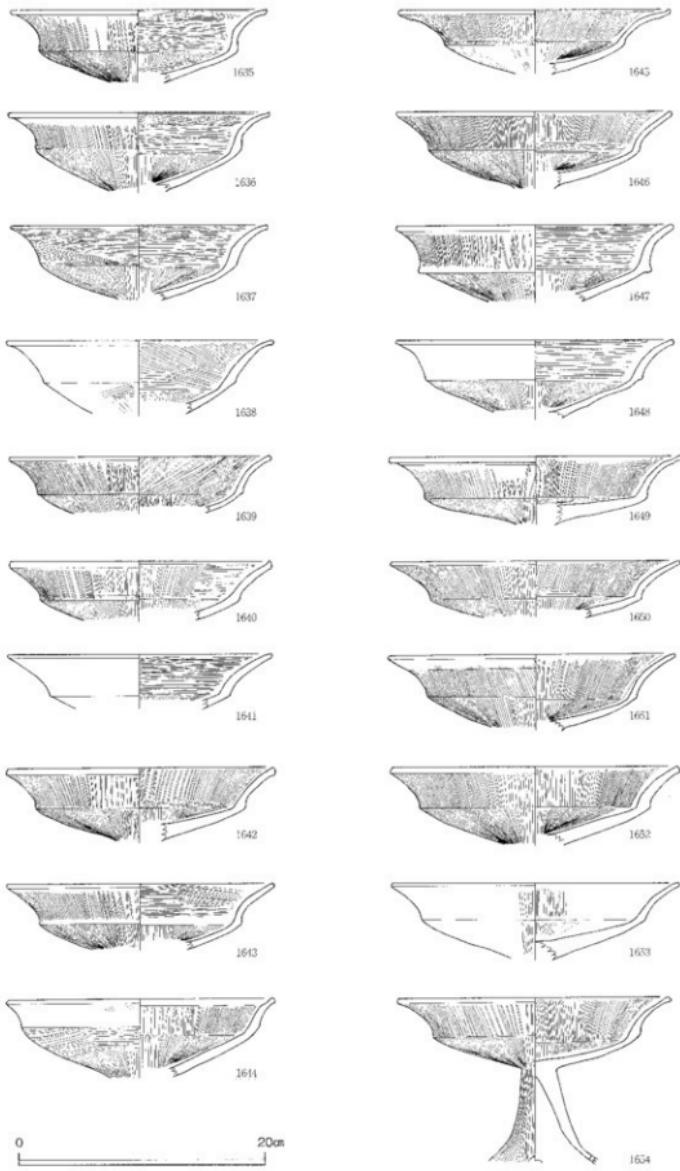


図112 流路1下層—砂礫層出土土器(29)

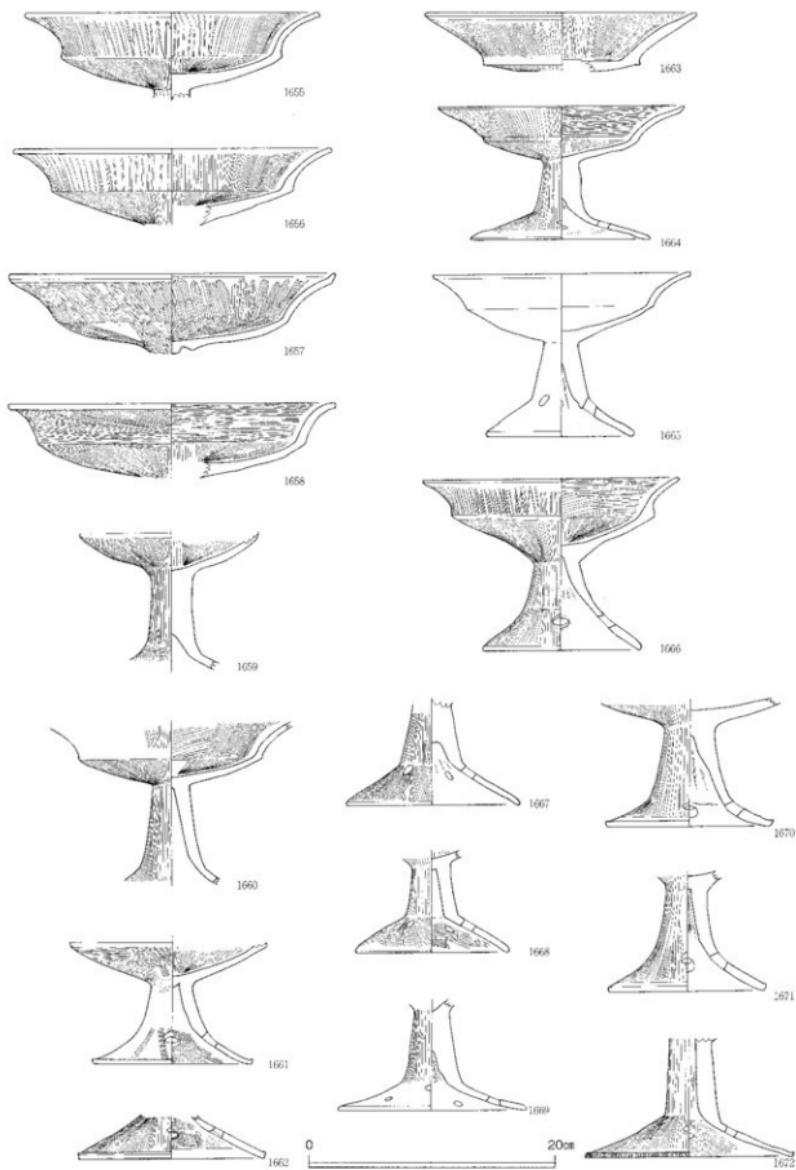


图113 流路1下层—砂砾层出土土器(30)

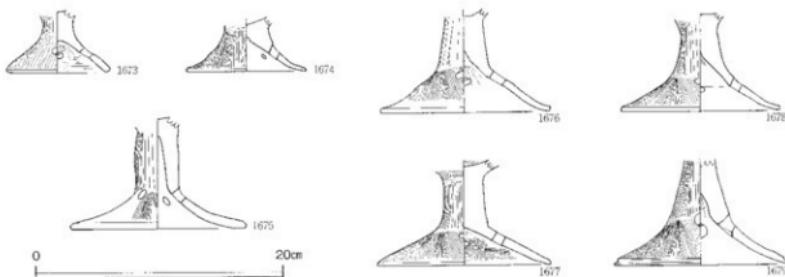


図114 流路1下層—砂礫層出土土器(31)

#### 流路2 (図115)

流路2から出土した遺物はわずかで、図示できたものは、直口壺・高壺・壺底・壺底の各1点の計4点である。

いずれも、破片である。1680は口頭部から体部上端を残す。口縁部はやや外方へ開き、端部が尖り氣味に終わる。筒状の頭部に屈曲して体部に続く。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。1681は、高壺の中空の脚柱部を残し、表面摩滅のため、調整が不明である。1682は壺底で、突出する平底である。外面にヘラケズリ、内面に蜘蛛の巣状ハケを施す。1683は、壺の体部下半から底部を残し、突出するわずかな上げ底である。外面の体部にナデ・底部にヘラケズリ、内面にハケを施す。

#### (3) 3層出土土器 (図116~120)

3層から出土した土器は、壺・甕・鉢・高壺・器台・壺蓋などがある。

壺には、二重口縁壺・広口壺・短頸壺・細頸壺・長頸壺がある。

二重口縁には、口縁部のみ残存する(1684)が1点のみあり、内外面に梯捲波状紋を施す。角閃石を含む生駒西麓産である。

広口壺には、口径15cm~20cmを測る大型のものがある。1685~1688は口頭部を残し、外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもつ。残存状況が不良で、(1686)の外面にヘラミガキ、(1687)の外面にハケ状ナデ・内面にハケを施すのが確認された。1685は口縁部に梯捲波状紋を施し、他は無紋である。1689は口頭部から体部上半を残し、口縁部が肥厚しわずかに立ち上がり面をもつ。短い筒状の頭部に屈曲し肩部の張る体部である。外面は表面摩滅のため調整不明で、内面の口頭部にヘラミガキ・体部上端にハケ・以下にナデを施す。頸体部の境目に刺突紋を巡らす。角閃石・班レイ岩を含む生駒西麓産の土器である。1690は口頭部から体部上端を残し、外反する口縁部の端部が垂下し面をもち、筒状の頭部に屈曲し広がる体部である。表面摩滅のため調整が不明であるが、体部の外面にヘラミガキがわずかに残る。体部内面に粘土紐の継目と指頭圧痕を残す。頸体部の境目に貼付突帯を施す。この土器は、頸部と体部上端に乳白色の粘土帶を使用し、他は、淡橙褐色の胎土である。1691は底部を欠損し、外反する口縁部

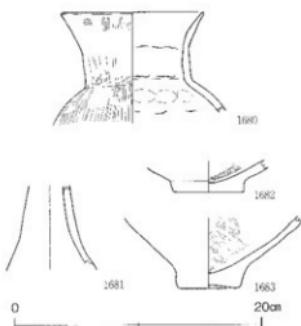


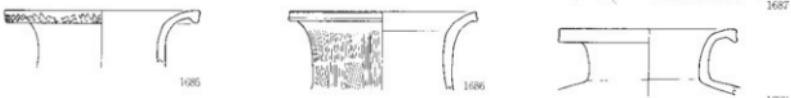
図115 流路2出土土器



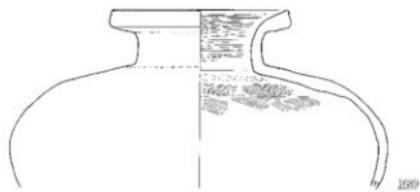
1684

1686

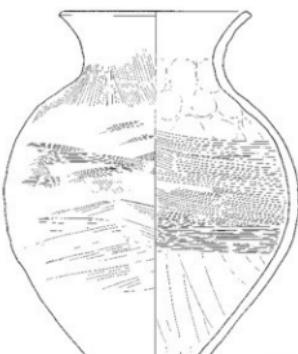
1687



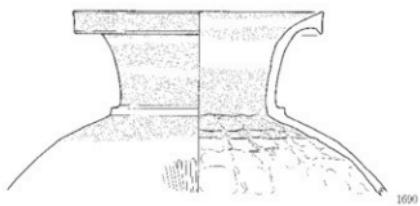
1688



1689



1690



1691

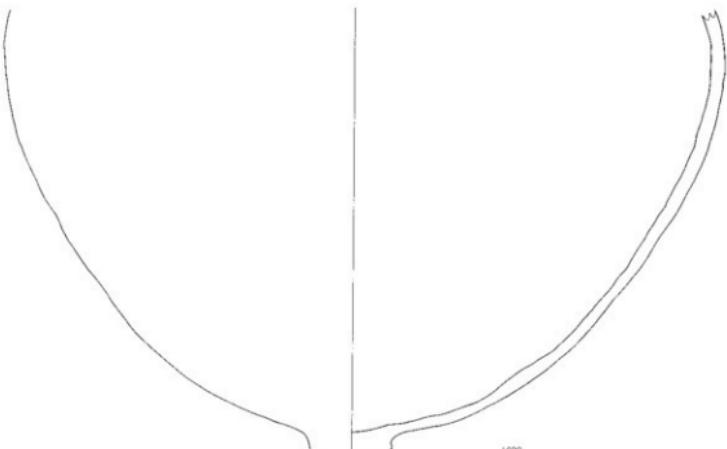


图116 3层出土土器(1)

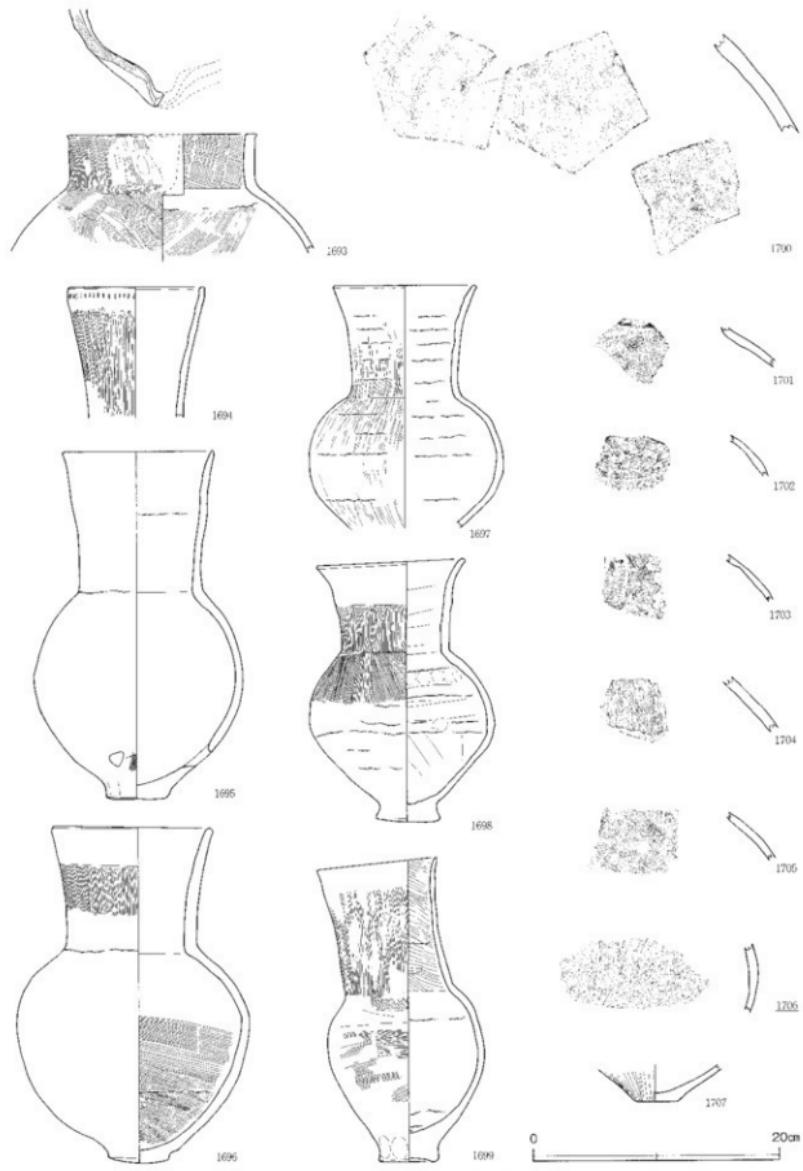


图117 3層出土土器(2)

の端部が面をもち、筒状の頸部に緩やかに屈曲し倒卵形の体部である。体部の外面にハケ、内面にハケ・板状ナデを施す。頸部上半に指押さえを残す。無紋の上器である。1692は超大型のもので、体部最大径が58.4cmを測る。体部中央から底部を残す。

1693は口頭部から体部上端を残す片口の短頸壺で、口径15cmを測る。直立する口頭部の端部上端に面をもち、屈曲し広がる体部である。内外面にハケを施す。

細頸壺(1694)は口頭部を残し、わずかに上方に開く上端部が面をもつ。外面にヘラミガキを施す。内面は表面摩滅のため不明である。口縁部に刺突紋を巡らせる。

長頸壺には、やや小振りで口頭部がやや太く短いもの(1697・1698)と、口頭部と体部の長さが同等のもの(1699)、器高が27・28cmのもの(1695・1696)がある。1695は完形で、口径12.0cm・器高28.8cmを測る。わずかに上方に開く筒状の口頭部に、球形の体部に突出する平底をもつ。調整は、内外面に表面摩滅のため不明である。体部下端に焼成後の穿孔がある。1696は完形で、口径13.2cm・器高27.2cmを測る。やや短めの口頭部がわずかに上方に開き、やや肩部が張る球形の体部にやや突出する底部をもつ。外側の口縁部にヨコナデ・頸部にハケ・体部にヘラミガキ、内面の体部下半から底部にハケを施す。

1697は底部を欠損し、(1698)は完形である。両者の口頭部はやや開き気味にのび、はやや偏平の体部をもち、突出する平底である。前者は外面にヘラミガキを施し、後者がハケを施す。両者共に、内外面に粘土紐の継目を顯著に残す。1698の外面体部下半から底部にかけて煤が付着する。1699は完形で、口径9.6cm・器高24.6cmを測る。全体に傾斜している。筒状の口頭部に倒卵形の体部に突出する底部をもつ。外面にハケ、内面の口頭部にハケ・体部にナデを施す。頸部に範記号を施す。1707は、小型の壺底部と思われ、平底で外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

1700～1706は、紋様のある壺の体部破片である。1700は、大型壺の肩部で、範描きの渦巻き紋と弧紋の組合せで、全体の構成は不明である。1701は、壺の肩部に範記号が施される。1702は、二重円を施で繋いでいる。1703・1705は、三重円・二重円で、(1707)も同様の模様と考えられる。1704は、範描きの鋸歯紋を施す。1706は、角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産である。

壺には、タタキを施すもの(1708～1715)と、ハケないしはナデを施すもの(1716～1721)がある。

タタキの壺には、小型2点・中型5点・大型1点の計8点がある。

小型の壺の(1708)は、口径11.6cm・器高10.6cmで、口径が器高を上回る。外傾する口頭部に球形の体部に、わずかに突出する平底の底部をもつ。体部の外面に2分割でタタキを施し、内面にナデを施す。1713は口頭部を欠損するが、球形の体部に突出し上げ底の底部をもつ。

中型の壺は、いずれも完形である。1709は口径12.8cm・器高16.0cmを測り、体部に最大径をもつ縦長なものである。1711・1714は、口径が器高を上回るもので、口径16cm・器高14cm前後を測る。前者は、口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもち、底径約3cmと小さく、わずかな上げ底である。後者は、口縁部の端部が面をもち、突出する底部の中央部がわずかに窪む。1710は、口径15.4cm・器高18.0cmを測り、口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をもち、倒卵形の体部にやや突出する上げ底である。口径と体部径がほぼ同じである。1712は、口径14.8cm・器高23.2cmを測り、口縁部の端部が面をもち、体部がやや張る倒卵形で突出する平底である。総て、体部の内面にナデを施し、外面に煤が付着する。

大型の(1715)は、口径17.6cm・器高30.0cmを測り、外反する口縁部の端部が面をもち、縦長な倒卵形の体部に突出する平底である。体部内面にハケを施す。内外面に粘土紐の継目を顯著に残す。内面の体部下端に煤が付着する。

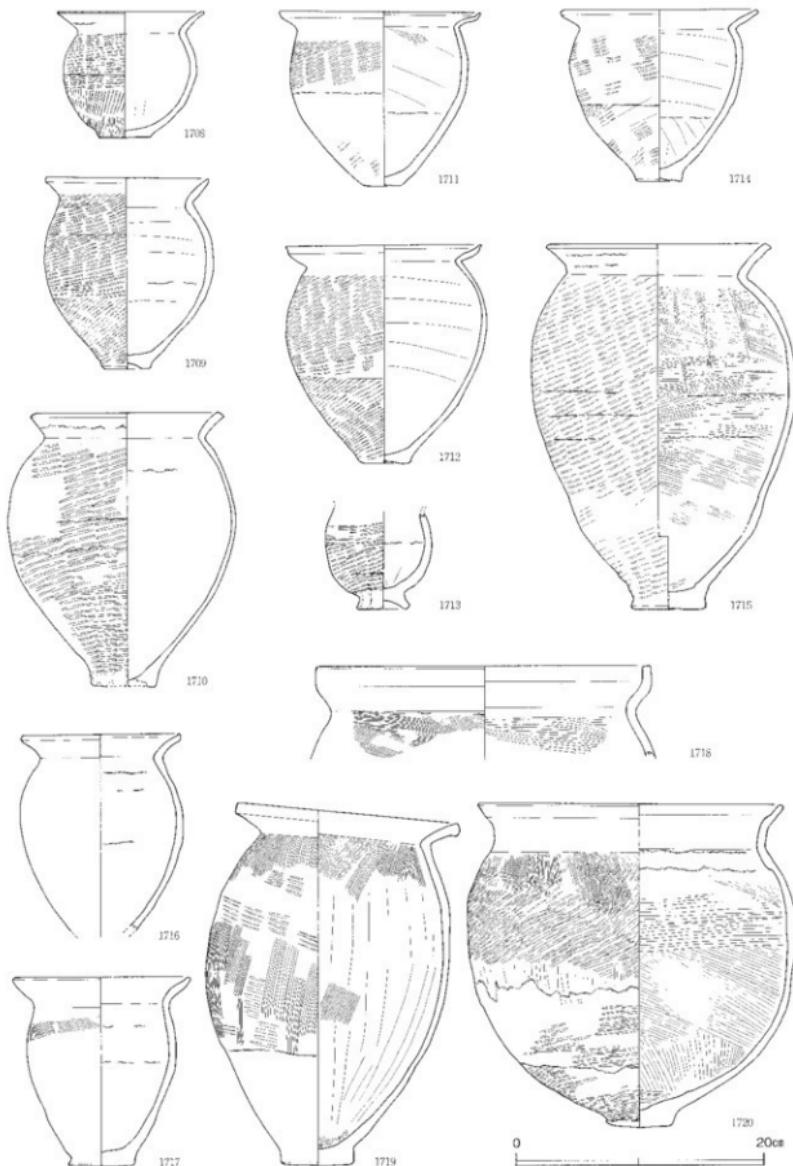


図118 3層出土土器(3)

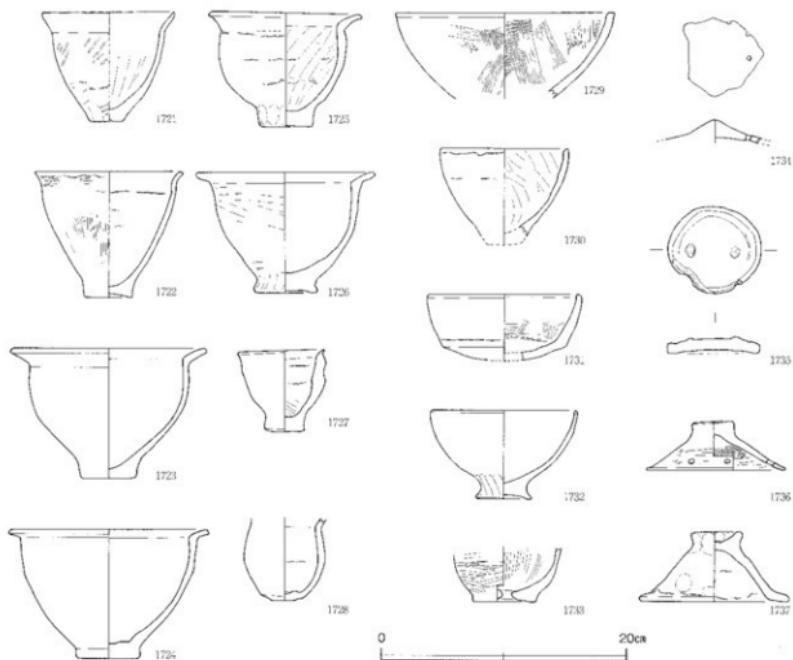


図119 3層出土土器(4)

体部にハケないしはナデを施す壺には、小型2点・中型1点・大型2点の計5点がある。

小型のものは継長で、(1717)は底部を欠損し、外反する口縁の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。倒卵形の体部は口径よりわずかに大である。内外面にナデを施す。1718は完形で、口径14.0cm・器高15.6cmを測り、口径が最大径をもつ。外反する口縁部の端部は丸みをもち、倒卵形の体部に突出する平底である。体部の外面にハケを施し、内面が剥離のため調整不明である。

中型の1716は完形で、口径18.0cm・器高30.0cmを測る。外反する口縁部の端部が面をもち、倒卵形の体部に突出する平底である。体部の外面にタタキ後ハケ、内面にハケおよびナデを施す。

大型のものは、口頭部から体部上端を残す(1719)と、完形の(1720)がある。1719は、短く外反する口縁部がさらに屈曲し上方へ立ち上がり、その上端が面をもつ。頭部が緩やかに屈曲し、体部へと続く。体部の内外面にハケを施す。1720は口径24.6cm・器高26.6cmを測り、短く外傾する口縁部に端部が面をもち、筒状の短い頭部に緩やかに屈曲し、球形の体部に突出する平底である。体部の外面にタタキ後ハケ、内面にハケを施す。いずれのものも、外面に煤が付着する。

鉢には、外反する口縁部をもつものと8点、直口のものが4点ある。他に焼成前穿孔の有孔鉢が1点の計13点がある。

1727・1728は小型である。1727は口径7.0cm・器高6.8cmを測り、口縁部がわずかに外方へつまみ出され、突出する平底である。1730は口縁部を欠損し、卵形の体部にわずかな平底である。いずれも手づく

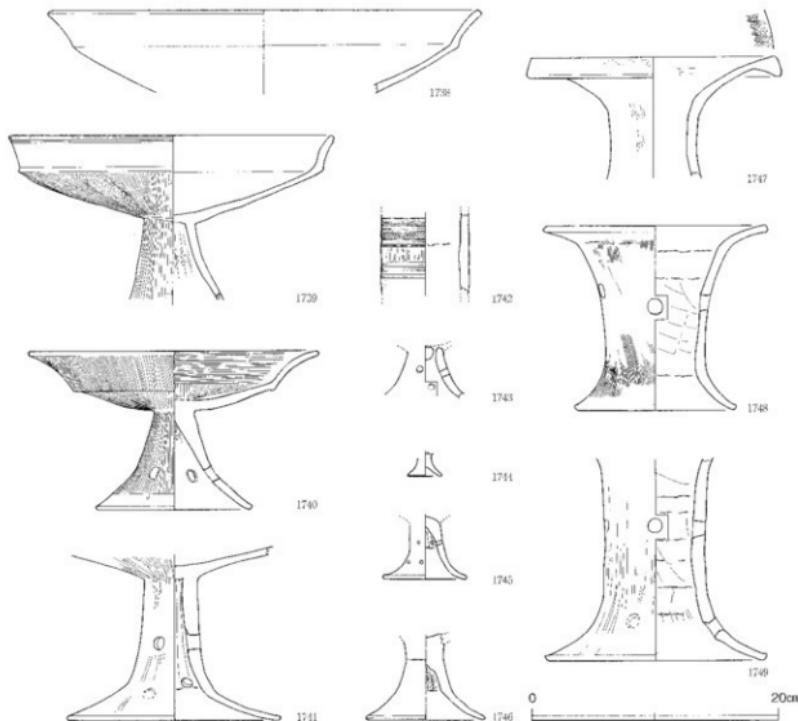


図120 3種出土土器(5)

ねの土器である。1271～1276は口径が最大径をもち、(1271・1272)が頸部の屈曲がわずかで、他が頸部内面に稜をもつ。体部ハケ外面の調整は、(1721・1726)がタタキ後ナデ、(1722)がタタキ後ハケ以外、ナデを施す。1723・1724の体部外面に煤が付着する。

1723は、角閃石を含む生駒西麓産である。

直口のものには、楕形で小型のもの(1730～1732)と、中型のもの(1729)がある。1729は、口縁部破片で、上端に面をもつ。内外面にハケを施す。1730は、底部を欠損する。1731は、底部との境目が屈曲し皿状の底部をもつ。1732は突出する底部がわずかに外傾し、上げ底である。1733は口縁部を欠損し、わずかに突出する底部をもつ。

蓋は、小型のものが4点あり、(1734～1736)が壺蓋で、(1737)が壺蓋である。1734は、天井部のみ残存し、三角錐状のつまみ部に、2個1組の紐孔の他に1個の穿孔がある。1735は、口径7.6 cmを測り、わずかに上部が膨らむ円盤状で、端部が面をもち、上面の2箇所にわずかな突起を設ける。1736は口径11.2 cm・器高4.2 cmを測り、つまみ部が突出しわずかに窪む。裾広がりの体部に口縁の端部が丸く終わる。2個1対の紐孔を穿つ。1737は口径12.0 cm・器高5.8 cmを測り、突出するつまみ部がくぼみ、裾広がりの体部に屈曲し外反する口縁部をもつ。

高坏には、有稜のもの(1738～1742)と、脚部のみ残すもの(1742～1746)がある。

1740は完形で、口径23.6cm・器高13.0cmを測り、外反する口縁部の端部が丸く終わり、皿状の坏部をもつ。脚部は、脚柱から脚台部に緩やかに広がり、脚台端部が面をもつ。坏部の内外面および脚部の外面にヘラミガキ、脚部内面にナデを施す。脚柱部内面に絞り目を残す。脚台部の3方に円形の透かしを穿つ。1739は、口径26.0cmとやや大型で、脚台部を欠損する。口縁部はわずかに外反し、やや深い皿状の坏部をもつ。脚部は、やや裾広がりにのびる。外面の口縁部にヨコナデ・坏部および脚部にヘラミガキ、坏部内面にナデを施す。脚柱部内面に絞り目を残す。口縁部上端に菱凹線紋を1条施す。1738は口径34.4cmを測る大型の坏部破片である。口縁端部が面をもつ。内外面伴に表面摩滅のため、調整不明である。1742は、坏底部から脚部を残存するもので、皿状の坏底部に筒状の脚柱部に裾広がりの脚台部をもつ。脚台部径が17.6cm測ることから大型であろう。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。脚柱部と脚台部の3方交互に円形の透かしを穿つ。1742は、脚柱部のみを残存し、径7.2cmを測ることから、器台の可能性もある。外面にヘラミガキを施す。沈線紋2条以上・刺突紋・沈線紋3条・縹杉紋・沈線紋4条と沈線紋6条を施す。1743・1746・1746は小型のもので、(1744)はミニチュアである。1743は、3方2段交互に透かしを穿ち、(1745)は、上段に3方・下段に3個以上の透かしを穿ち、他は、透かしを穿たない。

器台は、3点ある。1744は、上半部を残し、外反する口縁部の端部が垂下し面をもつ。内外面にヘラミガキをわずかに残す。口縁部内面および端部に櫛描波状紋を施す。

1748は完形で、口径18.0cm・器高15.2cm・脚台径12.8cmを測る。外反する口縁部の端部が面をもち、やや裾窄まりの体部に、裾広がりの脚部の端部が面をもつ。外面にハケ、内面にナデを施す。中央部の4方に円形の透かしを穿つ。

1749は、口縁部を欠損し、筒状の体部に、裾広がりの脚部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。内面に粘土粧の継目を顯著に残す。体部と脚部の4方に交互に円形の透かしを穿つ。

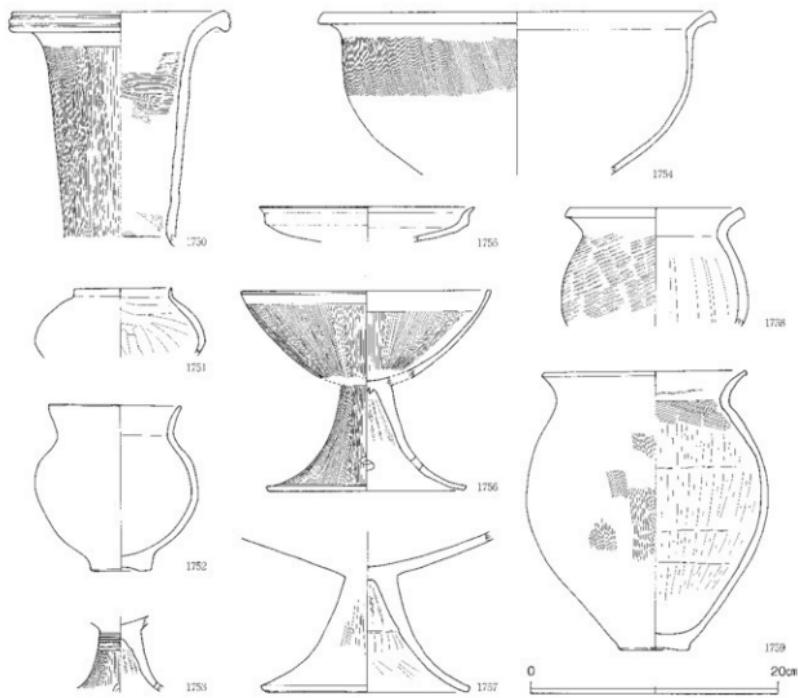


図121 壁穴建物1出土土器

#### 4. 第3面【弥生時代後期】

##### (1) 出土土器の概要

第3面から出土した土器には、集落域からのものが大半を占める。

遺構から出土した土器は、壁穴建物およびその周辺の外周土坑や井戸からのもので、相対的に少ない量である。それに比して、遺構面および流路3から出土した土器が大量にある。

それらの中でも当遺跡を特徴付ける当時の遺構面や流路3の肩部に張り付くように出土した土器群などは、完形の土器が多く、当時の人々がどのように土器を廃棄したかをうかがい知ることができる良好な資料である。

##### (2) 遺構出土土器

ここでは、遺構出土の土器を中心に、その周辺の遺構面および流路出土の土器も合わせて記述していくこととする。

###### 壁穴建物1（図121）

壁穴建物1は、西側居住域の西側中央部に位置し、周堤をもつ5本柱ないしは4本柱の円形の大型建物で、谷1に向け北西方向に排水溝が穿たれている。外周土坑をもたない。

1757・1759の2点は床面、他は堀内土からの出土である。1757は、高环の口縁部を欠損し、脚台径が

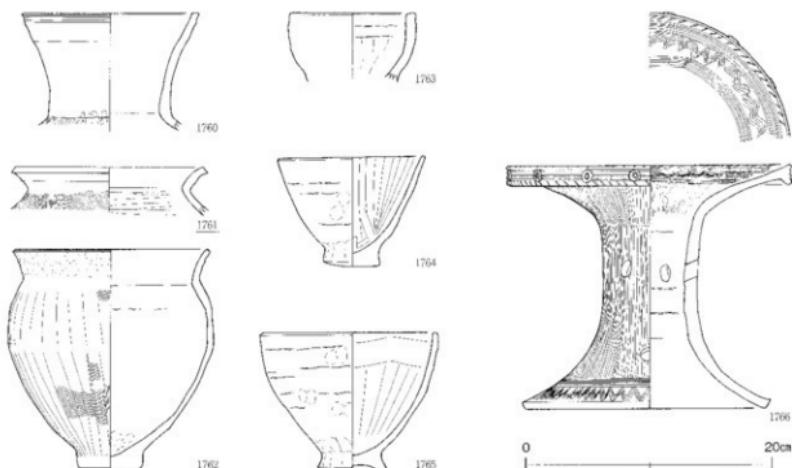


図122 積穴建物1－排水溝出土土器

16.6cmを測る。壺底部が皿状に広がることから、有稜高壺と思われる。1759は、口径16.6cm・器高23.0cm・底径5.6cmを測る完形の壺である。短く外反する口頭部の端部が面をもち、屈曲し球形の体部にわずかに突出し中央部がわずかに窪む底部である。体部の外面にハケ、内面の上端にハケ・以下にヘラケズリを施す。外面の口頭部と体部中央部、内面の体部下半に煤が付着する。埋土からは、壺3点・高壺3点・鉢1点・甕1点の計8点がある。

壺には、長頸壺(1750)・無頸壺(1751)・短頸壺(1752)がある。1750は口頭部を残し、口縁部が短く外反し、端部が垂下し面をもつ。頭部は裾すほよりのやや長めの筒状である。口縁部に疑凹線紋を2条施す。1751は口縁部を1/4残す破片で、短く立ち上がる口頭部に偏平な体部をもつ。体部の外面は摩滅のため調整不明である。1752は、口頭部をわずかに欠き、内外面に表面が剥離する。

鉢は大型で、底部を欠損し、口縁部の約1/3を残す。外面の体部上半にハケを施す。角閃石を含む暗褐色をした生駒西麓産の土器である。

高壺には、楕形のもの(1756)と、有稜のもの(1755)、脚柱部のみを残すもの(1753)がある。1755は壺部のみを残し、皿状の壺部に屈曲し、短く外反し尖り気味に終わる口縁部をもつ。1756は約1/4を残し、口縁部に沈線紋を1条施す。1753は、脚部の上端に沈線紋を6条施す。

1758は小型壺の口縁部の破片である。口径14cmで体部外面にタタキを施し、外面に煤が付着する。

#### 積穴建物1－排水溝（図122）

積穴建物1の排水溝から出土した土器には、壺1点・甕2点・鉢3点・器台1点の計7点が図示できた。1760の壺は直口壺の口頭部破片で、口縁端部に強いヨコナデを施す。破損後煤が付着する。

壺は、いずれもハケを施す中型のもので、(1766)が口頭部破片で、(1762)が縦位1/6を残す。後者が、ヘラケズリ状のハケを施す。1761は、角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

鉢は小型の直口のもので、(1763)が器壁の分厚い口縁部破片で、(1765)が約1/2を残し、(1765)がほぼ完形である。いずれも、ナデを施す。

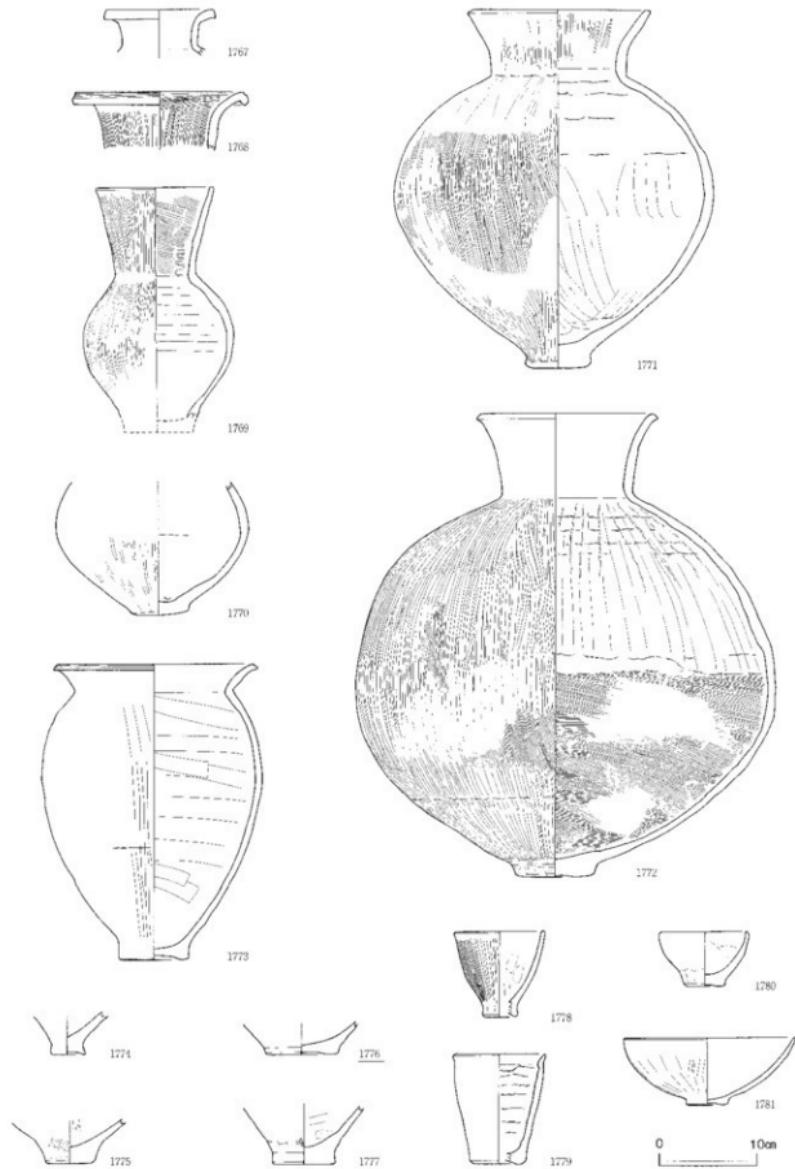
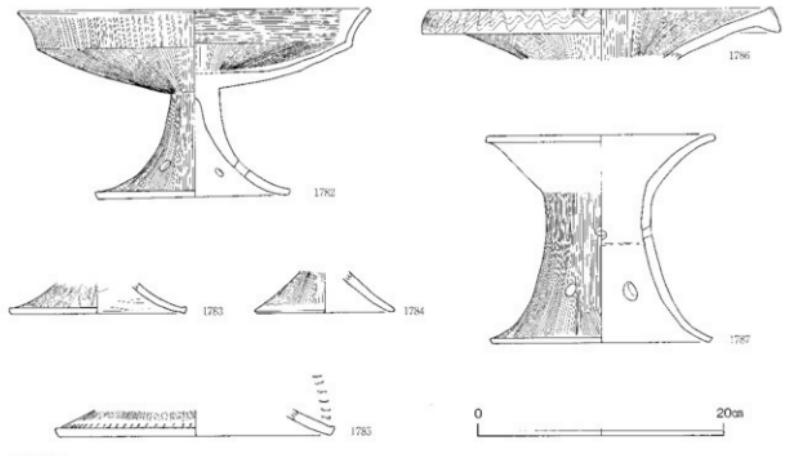
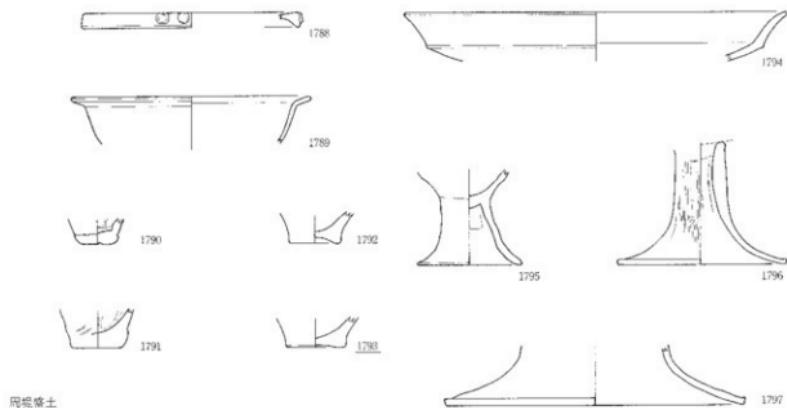


図123 積穴建物2出土土器(1)



竪穴建物2



周堤築土

図124 竪穴建物2出土土器(2)

1765の器台はほぼ完形で、外面および口縁部内面にヘラミガキを施す。口縁部の内面に櫛描直線紋間波状紋・刻み目、口縁端部に沈線紋3条・円形浮紋上竹管紋・刻み目、脚台部に直線紋・波状紋を施す淡黄褐色の丁寧な作りの土器である。

#### 竪穴建物2（図123・124-1782~1787）

竪穴建物2は、西側居住域の北西側に位置し、北東角の一部は、調査地外にのびる。周堤をもつ2本柱の方形の建物で、排水溝を穿たない。外周土坑を1基検出するが、遺物は出土していない。

竪穴建物2の床面から出土した土器は、壺4点・壺2点・高杯1点・鉢1点・器台1点の計9点があ

り、北側壁溝から壺蓋が1点、南側壁溝から小型鉢・高坏が各1点である。なお、土坑1からは、小型鉢・高坏が各1点、土坑2からは、壺2点・高坏1点、土坑5から小型鉢1点がある。

他に、埋上からは、壺・壺蓋・器台が出土する。土坑3・4・6からは、土器片がわずかに出土している。

周堤盛土からは、壺・鉢・高坏・器台などが出土している。

1769は土坑1・2と、1782は流路3と、1785は第3面直上の土器と接合した。

床面出土の土器は、いずれも小破片のものが多く、1767・1768は広口壺の口頭部を残し、(1769)は底部を欠損する小型化傾向の長頭壺である。1775は壺の底部と思われる。1777は壺の底部破片で、内外面に煤が付着する。1781の楕形鉢は、口径13.6cm・器高3.6cmを測り、ほぼ完形である。1784は高坏の脚台部のみの破片である。1787の器台はほぼ完形で、口径18.4cm・器高17.2cm脚台径17.6cmを測る。体部の中央と脚台部に2段交互・4方に円形の透かしを穿つ。北側壁溝からは小型壺の底部が壺蓋のつまみ部と思われる(1774)、南側壁溝からは約1/3を残す直口小型鉢(1778)・高坏の脚台部(1785)がある。1778は外面に煤が付着する。

土坑1から出土した楕形小型鉢(1780)はおよそ半分が残存し、有稜高坏(1782)は約4/5を残存し、口径28.4cm・器高15.8cm・脚台径15.4cmを測る。

土坑2から出土した直口壺(1771・1772)は、いずれもほぼ完形で口径13.8cm・14.4cm・器高29.6cm・38.4cmを測る大型・中型のものである。1783は、高坏脚台部のみを残存する。

土坑5から出土した小型鉢(1779)は約1/2を残存し、わずかに口縁部が外反し、口径7.6cm・器高9.4cmを測る。内面に粘土紐の継目を顯著に残す。

埋上からは、小型壺の体部から底部を残す(1770)、ほぼ完形の体部外面にナデを施す壺(1773)・底部片(1776)、器台の口縁部片(1786)がある。1776は、角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産である。

盛土周堤から出土した土器は、完形のものは無く、小片である。

1788は広口壺の口縁部破片で、口縁部の端部が垂下し面をもつ。口縁端部に円形浮紋上竹管紋を2個1組施す。

1790~1793は底部片で、(1790)は手づくねの鉢か壺と思われ、それ以外は壺である。1793は、角閃石を含む生駒西麓産である。1795は脚台部を残存し、脚付きの鉢か壺になると思われる。1794は有稜高坏の坏部片で、(1796)は脚部のみを残す。1797は器台の脚台部片である。

いずれのものも、残存状況が不良で、調整等不明なものが多い。

#### 竪穴建物3(図125~1798・1799)

竪穴建物3は、西側居住域の西端、竪穴建物2の南西側に隣接する。周堤をもつ方形のやや小型で2本柱の建物である。谷1に向かい排水溝が穿たれる。外周土坑は検出されていない。

竪穴建物3の床面から出土した土器は無く、埋上から高坏が2点、排水溝から壺1点・高坏1点の計4点がある。

1798は有稜高坏の坏部を約1/3残存し、口径28.4cmとやや大型のもので、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。内面に煤が付着する。1799は口径20.0cmを測り、脚台部を欠損する。坏部内面は、表面摩滅のため調整が不明である。

#### 竪穴建物3-排水溝(図125~1800・1801)

1801は、長頭壺の口頭部を欠損し、体部1/2を残存する。球形の体部に、わずかに突出する平底で

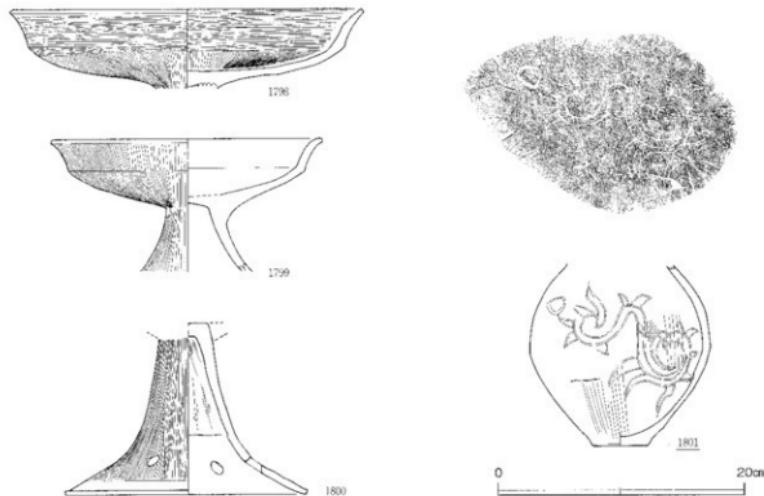


図125 竪穴建物3・排水溝出土土器

ある。体部の外面にハケ後ヘラミガキ、内面にナデを施す。全面に、竈括きの竈を、左上端に粘土を貼付け玉を模したものを表現する。角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産である。

1800は、高坏の脚部のみ残存し、脚部の3方に円形の透かしを穿つ。脚台径が19.4cmであることから、やや大型の有稜高坏の脚部と思われる。

#### 竪穴建物4(図126)

竪穴建物4は、西側居住域の中央部に位置し、竪穴建物1の東側に隣接する。周堤をもち方形で2本柱の建物で、3基の外周土坑をもつ。排水溝は穿たれない。

竪穴建物4の床面から出土した土器には、壺3点・高坏1点の計4点があり、柱穴1から高坏1点、中央土坑から壺1点、土坑1から壺1点、壁構から壺1点、埋土から1点の合わせて9点がある。

床面から出土した土器は、いずれも破片で、(1803・1804)が口縁部が外反し、端部が垂下し面をもつ長頸壺で、いずれも口縁端部に疑凹線紋2条を施す。(1802)が口縁部が外反し頸部がやや短くなる長頸壺である。前者はやや大型化し、口縁端部に疑凹線紋を施す。1805は小型の楕円高坏で、口径14.8cm・器高9.8cm・脚台径9.8cmを測る。坏部の1/4を欠損する。

柱穴1から出土した(1807)は、楕円高坏で約1/3を残存する。

中央土坑から出土した(1813)は、壺の底部片である。

土坑1から出土した壺(1814)は、口頸部を欠損し、卵形の体部に中央部がわずかにくぼむ突出した底部を持つ。体部外面上に煤が付着する。

南東角の壁溝から出土した小型の短頸壺(1806)はほぼ完形で、口径9.2cm・器高13.2cmを測る。体部下半に焼成後の穿孔がある。

埋土から出土した(1812)は、小型の鉢か壺の底部と思われる。

外周土坑1からは、壺1点・壺2点・高坏1点の計4点、外周土坑2からは、壺4点・壺1点・鉢5

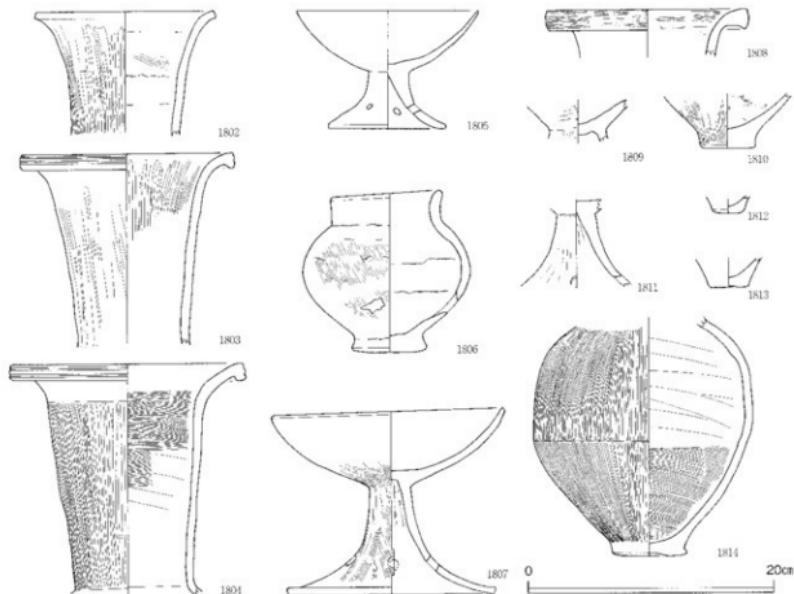


図126 竪穴建物4・外周土坑1出土土器

点・高坏10点の計23点が出土した。外周土坑3からは、土器が出土していない。

#### 竪穴建物4-外周土坑1 (図126-1808~1811)

外周土坑1から出土した広口壺(1808)は、口頭部破片で無紋のものである。頸部が長くなれば、長頸壺の可能性もある。1809・1810は、いずれも壺と思われ、後者は台付壺であろう。1811は、高坏の脚柱部のみ残存する。

#### 竪穴建物4-外周土坑2 (図127)

外周土坑2から出土した壺には、広口壺(1815)、細頸壺(1816・1817)、底部(1818)がある。

1815は口縁部の破片で、端部に凝凹線紋を2条施す。1816は口頭部破片で、口縁部がやや外反する。内外面に表面摩滅のため、調整が不明である。1817はほぼ完形で、口径10.4cm・器高22.2cmを測る。

壺には、体部下半から底部を残しハケを施すもの(1826)があり、体部に焼成後の穿孔がある。

鉢には、小型で外反する口縁部をもつもの(1821)、直口のもの(1822~1824)、有孔のもの(1825)がある。直口のものは、いずれも完形で口径約12~14cm・器高9~10cmを測る。いずれも、体部にハケないしはナデを施す。

高坏には、楕形のもの(1819・1831)と、有稜のもの(1828・1829)、坏底部のみを残すもの(1830)、脚部のみ残存するもの(1820・1826・1827・1832・1833)がある。1819・1831は復原完形で、口径14.8cm・20.4cm、器高9.2cm・15.2cmを測る。前者は皿状の坏部にわずかに口縁部が立ち上がり、後者は浅い楕形の坏部に外方へのびる口縁部をもつ。両者共に、摩滅が著しいがヘラミガキを施す。

1830と1833は同一個体と思われる。

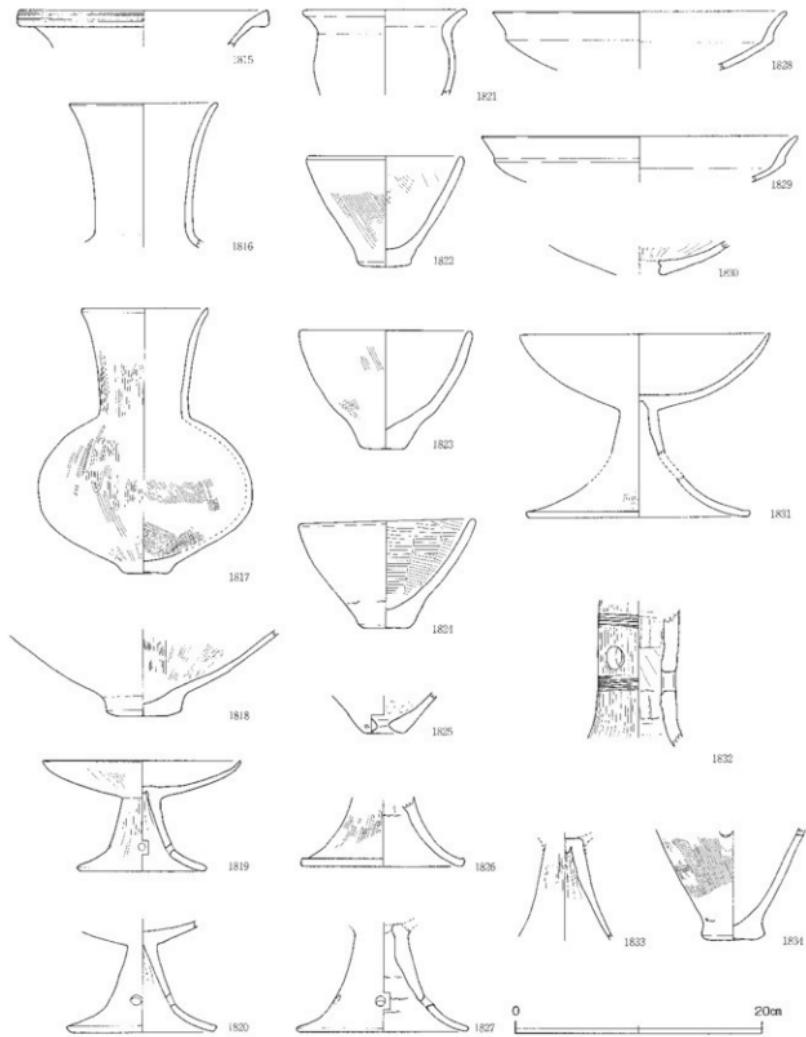


図127 整穴建物4－外周土坑2出土土器

1832は、筒状の脚柱部のみを残し、鉢描き沈線紋を4条・6条の帯状に2帯施す。3方にやや大きめの円形透かしを穿つ。径約4cmを測ることから、大型の高壺になると思われる。

#### 整穴建物5

整穴建物5は東側居住域の北東に位置し、北東角の一部が調査地外にのびる。周堤をもち、方形で2

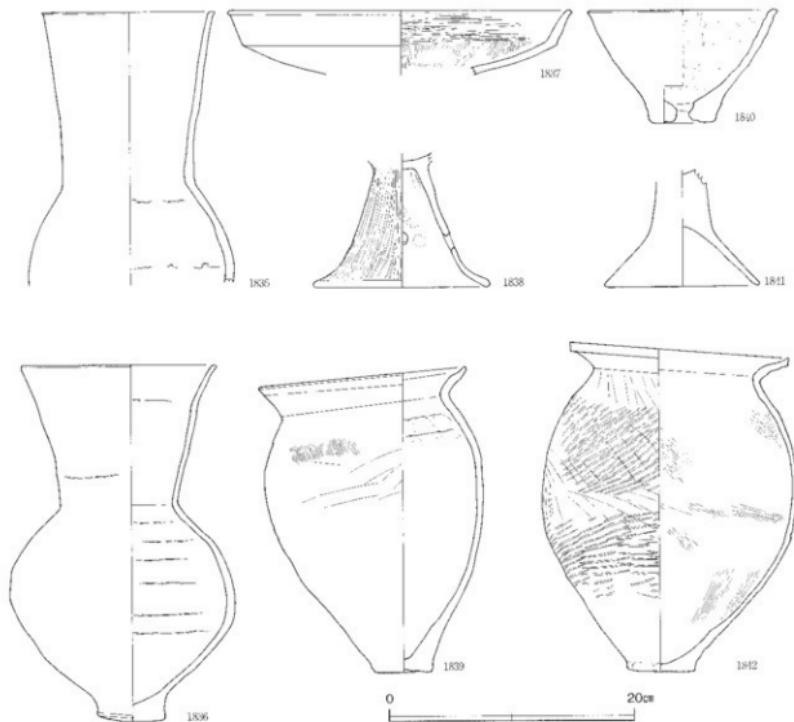


図128 竪穴建物5周辺-a域出土土器

本柱の建物である。外周土坑および排水溝は検出されていない。竪穴建物5から出土した土器は、柱穴からわずかに破片が検出されたのみで、図示できるものは皆無である。

#### 竪穴建物5 周辺a域（図128）

竪穴建物5の南西側の造構面で検出された土器群で、壺2点・甕2点・鉢1点・高坏3点の計8点がある。

壺は、いずれも長頸壺で、(1835)は口頸部から体部上半を残し、(1836)は約4／5残存する。両者共に口径と体部径にあまり差が無く、前者の体部が卵形と思われ、後者の口頸部が開き気味で球形の体部をもつ。1836は、口径15.8cm・器高29.6cmを測る。いずれも、表面が摩滅のため調整は不明である。体部内面に粘土紐の跡目を顯著に残す。

甕は2点共にはば完形で、口径16.8cm・17.6cm・器高24.4cm・26.4cmを測る。1839は、外反する口縁部が屈曲しわずかに外方に伸びる。体部外面の調整は、ハケ後ナデを施す。1842は、外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をもつ。体部外面にタタキ後ナデ、内面にハケを施す。いずれも、体部外面に煤が付着する。

1840の鉢は、ほぼ完形で、小型で直口の有孔鉢である。口径15.2cm・器高9.4cmを測り、外面にナデ

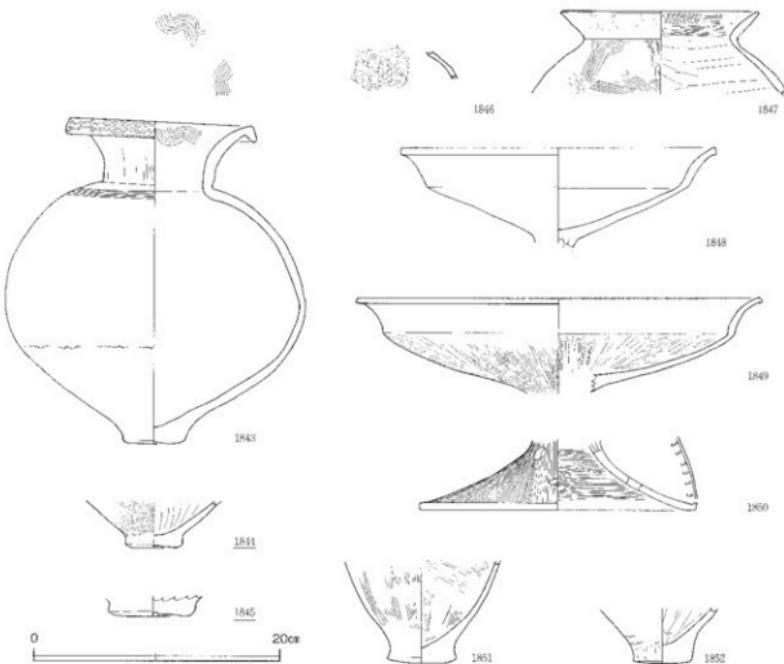


図129 竪穴建物6出土土器

を施し、内面に指押さえを残す。

高坏は、(1837)が有稜のもので、(1838・1841)が脚部のみを残す。

#### 竪穴建物6（図129）

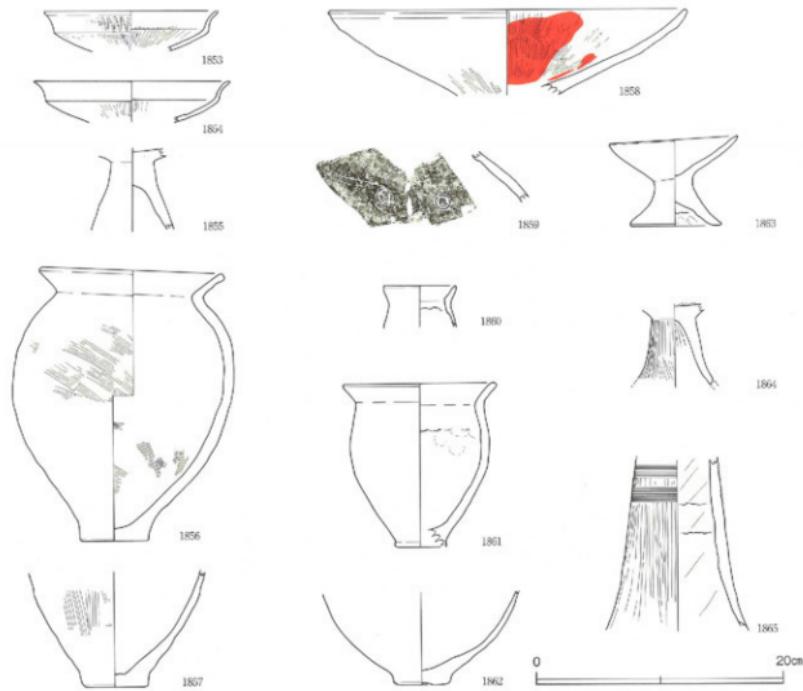
竪穴建物6は、東側居住域の西端中央部の谷2の東側に位置し、周堤をもつ方形で2本柱の建物である。谷2に向かい排水溝が穿たれ、外周土坑が6基検出されている。

竪穴建物6から出土した土器には、床面から壺・高坏各1点、土坑1から壺・甕各1点、壁溝から甕1点、壁溝際から壺1点の計6点がある。

床面の(1844)と土坑1の(1845)は、両者併に角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産で、底部のみを残す。1847の甕は、口頸部から体部上端を残す破片で、短く斜め外方へ伸びる口頸部に、「く」の字状に屈曲する頸部の内面に稜をもつ。体部外面の調整は縱方向のハケ後、肩部に横方向のハケを施す。内外面に、煤が付着する。1850のは脚部のみを残し、端部がわずかに立ち上がり面を持つ。

壁溝からの(1851)は、甕の体部下半から底部を残すもので内外面にハケを施す。壁溝際からの広口壺(1843)は体部下半の一部のみを欠損し、口径14.8cm・器高26.8cmを測る中型のものである。口縁部内面の6箇所に櫛描波状紋を断続的に施し、口縁端部に櫛描波状紋を施す。この土器は、口頸部が壁溝際から、口縁部の一部が外周土坑5から、体部以下が3面直上の周辺のa域から出土している。

埋土からは、わずかに上器片が出土しているが図化できなかった。



外周土坑3

外周土坑4



図130 積穴建物6—外周土坑3・4、周辺d域出土土器

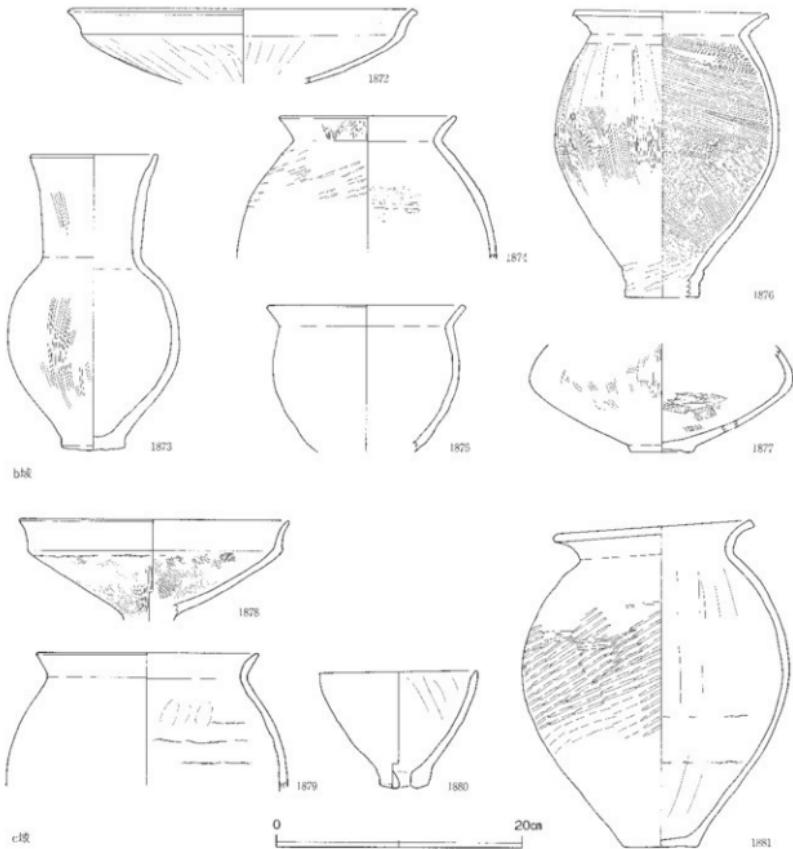


図131 壁穴建物6－周辺b・c域出土土器

#### 壁穴建物6－排水溝

壁穴建物6の建物内の排水溝からは、壺・甕が各1点・高坏が2点出土した。1846は、壺の肩部破片で、竪書きの「メ」字様の記号紋を施す。1852は、甕の底部で、外面にタキを残す。1849は、有稜の坏部のみを残すもので、口径32.8cmを測る大型のものである。

外周土坑1・2・5・6からは、わずかな土器片が出土したのみである。

#### 壁穴建物6－外周土坑3（図130-1853～1857）

外周土坑3から出土した土器は、北西部に集中し、甕が2点・高坏が3点の計5点がある。

1856・1857の甕は、いずれも体部外面にハケを施すものである。前者はほぼ完形で、口径14.8cm・器高22.8cmを測る中型のもので、体部外面にハケ後ナデを施す。器壁が8mmと厚い作りである。後者は、体部下半から底部を残す破片である。両者共に、外面の口頭部および体部に煤が付着し、内面の体部下

端に炭化物が付着する。

1853・1854の高坏は坏部を残し、口径15~16cmのやや小型の有稜のものである。1853の口縁部外面には、波状紋風にヘラミガキが施され、内外面に煤が付着する。1855は、脚柱部のみを残す。

#### 竪穴建物6—外周土坑4（図130-1858~1865）

外周土坑から出土した土器には、壺2点・甕2点・鉢1点・高坏3点の計8点がある。

1859は、壺の肩部破片で三重の竹管紋を施した後、その間を窓で二重弧紋を施す。1862は、中型の壺の体部下半から底部片である。

1860は、ミニチュアの壺の口頭部から体部上半の破片で、手づくねのものである。1861は、底部を欠損する小型の壺で、体部の調整は内外面にナデを施す。体部外面に煤が付着する。

1858の直口鉢は、口径約29cmと大型で浅いもので、内面に赤彩が施され、外面に黒色物質が塗布される。

1863は小型の椀形高坏で、坏部の1/3を欠損する。口径10.4cm・器高9.2cmを測る。調整は、内外面に摩滅のため、不明である。1864・1865は、脚柱部のみを残し、後者には籠描きの沈線紋が4条・6条と帶状に施される。

#### 竪穴建物6 周辺b域（図131-1872~1877）

b域は、外周土坑の南側に広がり、壺2点・甕3点・高坏1点の計6点である。

1873は長頸壺で約1/2を残す。口径10.4cm・器高24.6cmを測り、わずかに外反する口縁部に卵形の体部をもつ。1877は、体部から底部を残すもので、偏平な体部にわずかに突出する上げ底である。いずれのものも、外面にヘラミガキを施す。

甕には、タタキを施す(1874)と、ハケを施す(1876)があり、(1875)は表面摩滅のため不明である。

1874は、出土時点では1/3程度を残していたが、腐植が激しく、固化できたものは、口頭部から体部上半である。外面の口頭部にハケ、体部にタタキ後ナデを施す。1876は、わずかに底部の一部を欠損する。口径15.6cm・器高24.0cmを測る。外面の底側部にタタキを残す。外面底部を除き、煤が付着する。1875は小型の甕で、底部を欠損し、口径が最大径をもつ。

1872の高坏は、坏部破片で、有稜のもので、外反する口縁部の端部がわずかに外方へ肥厚し、面をもつ。口縁部の調整は、内外面にヨコナデを施し、坏部内外面にヘラケズリ状のナデを施す。

#### 竪穴建物6 周辺c域（図131-1878~1881）

c域は、外周土坑3の東側で土器が散在していた。甕2点・鉢1点・高坏1点の計4点がある。

1879・1881の甕は、前者が口頭部から体部上半破片で、体部の調整が表面摩滅のため不明である。後者はほぼ完形で、口径16.0cm・器高26.4cmを測り、体部にタタキ後ナデを施し、口縁部および体部の外面に煤が付着し、体部内面の下端に炭化物が付着する。

1880の鉢は、直口の有孔鉢で約1/2を残す。口径13.0cm・器高13.6cmを測る小型のものである。外面は、表面摩滅のため調整不明である。

1878の高坏は、有稜のもので、坏部のみを残す。口縁部の外反がわずかで、屈出しあや深めの坏部をもつ。

#### 竪穴建物6 周辺d域（図130-1866~1871）

竪穴建物6の周辺には、3面直上に土器が集中して検出される場所が4箇所あり、d域は外周土坑3の北西肩部で検出された土器群である。土器には、甕3点・鉢1点・高坏2点の計6点がある。

壺には、体部にタタキを施す(1867)と、ハケを施す(1868)、ヘラミガキを施す(1869)がある。1867は4／5を残存し、口径15.6cm・器高18.0cmを測り、口径が最大径をもつ。1868は、口縁部を欠損し、やや器壁が厚いものである。1856と同様の器形のものと思われる。両者共に外面に煤が付着し、後者の内面の体部下端に、炭化物が付着する。

1866は約1／2を残し、小型の外反する鉢で、口径9.0cm・器高7.7cmを測る。

1870・1871は、いずれも、楕形の高坏で、前者は脚台部を欠損し、後者は4／5を残す。1864は、口径13.5cm・器高17.4cm・脚台径16.4cmを測る。小振りの楕形の坏部にわずかに広がる脚柱部に、屈曲して幅広がりの脚台部をもつ。脚柱部に篦描きの沈線紋を4条・4条・5条と3帯施し、脚台部に篦描波状紋・沈線紋3条を施す。

#### 竪穴建物7 (図132-1882-1886)

竪穴建物7は、西側居住域の北東に位置し、流路3の西側に当る。周堤をもち方形の2本柱建物である。排水溝は穿たれない。6基の外周土坑を検出する。

竪穴建物7から出土した土器には、壺溝から壺・壺・鉢が各1点と土坑1から高坏が1点、埋土から鉢が1点の計5点とわずかである。

(1882)は壺の口縁部を、(1883)は壺の口縁部片、(1885)は有稜の坏部のみを残す。1884は直口の鉢で約3／4を残す。口径12.0cm・器高14.0cmを測る。体部外面にタタキを施す。1886は、突出する上げ底を持つ鉢の底部と思われる。1885は、外周土坑5から出土した土器と接合した。

#### 竪穴建物7-外周土坑1 (図132-1887-1901)

外周土坑1から出土した土器には、壺が5点・壺が4点・鉢が2点・高坏が4点の計15点がある。

壺には、広口壺と長頸壺、体部下半から底部を残すもの(1890)がある。1889は4／5を残す中型で口径15.0cm・器高20.6cmを測る無紋の土器である。器壁が約7mmと部厚い作りである。1887は、口頭部を残し、やや外反する口頭部の端部が面をもつ。1901は、壺の底部と思われ、突出する底部の中央がわずかに突む。

壺は、体部にナデを施すもので、(1897)が口頭部から体部上半を残す、角閃石を含む生駒西麓産のものである。1898はほぼ完形で、口径14.2cm・器高25.0cmを測り、体部にタタキ後ナデを施す。いずれも外面に、後者は、体部内面下半にも煤が付着する。1899・1900は、壺の底部と思われ、外面の調整は剥離のため不明である。

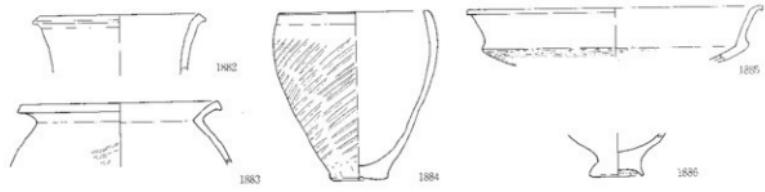
鉢は、いずれも口縁部がやや内湾するもので、(1895)は小型で口径9.0cm・器高8.7cmを測る。底側部にタタキを残す。1896は有孔鉢で、口径12.4cm・器高10.2cmを測る。

高坏には、楕形のものと有稜のものがあり、どちらか不明の脚がある。1891は坏部のみを残し、口径が約30cmと大型のもので、坏部外にハケおよびナデを施し、内面にヘラミガキを施す。1892は、口径15.8cmを測り、脚台部を欠損する。1893は、脚柱部のみを残存し、篦描き沈線紋を5条施す。1894は脚部を残す。

#### 竪穴建物7-外周土坑2 (図133-1902-1910)

外周土坑2から出土した土器には、壺3点・壺4点・鉢1点・高坏1点の計9点がある。

1902は、口頭部を残す長頸壺で、口縁端部が部分的にわずかに垂下し面をもつ。外面にハケ後ナデ、内面にハケ状ナデを施す。1903は頸径が体部径の1／2以下の細頸壺で、口頭部を欠損する。やや偏平な体部に突出する平底をもつ。体部内面に粘土縫の縦目を顯著に残す。1904は、底部のみを残存し、体



竪穴建物7



外周土坑1

図132 竪穴建物7・外周土坑1出土土器



外周土坑2



外周土坑3

图133 竪穴建筑 7—外周土坑 2·3(1)出土土器

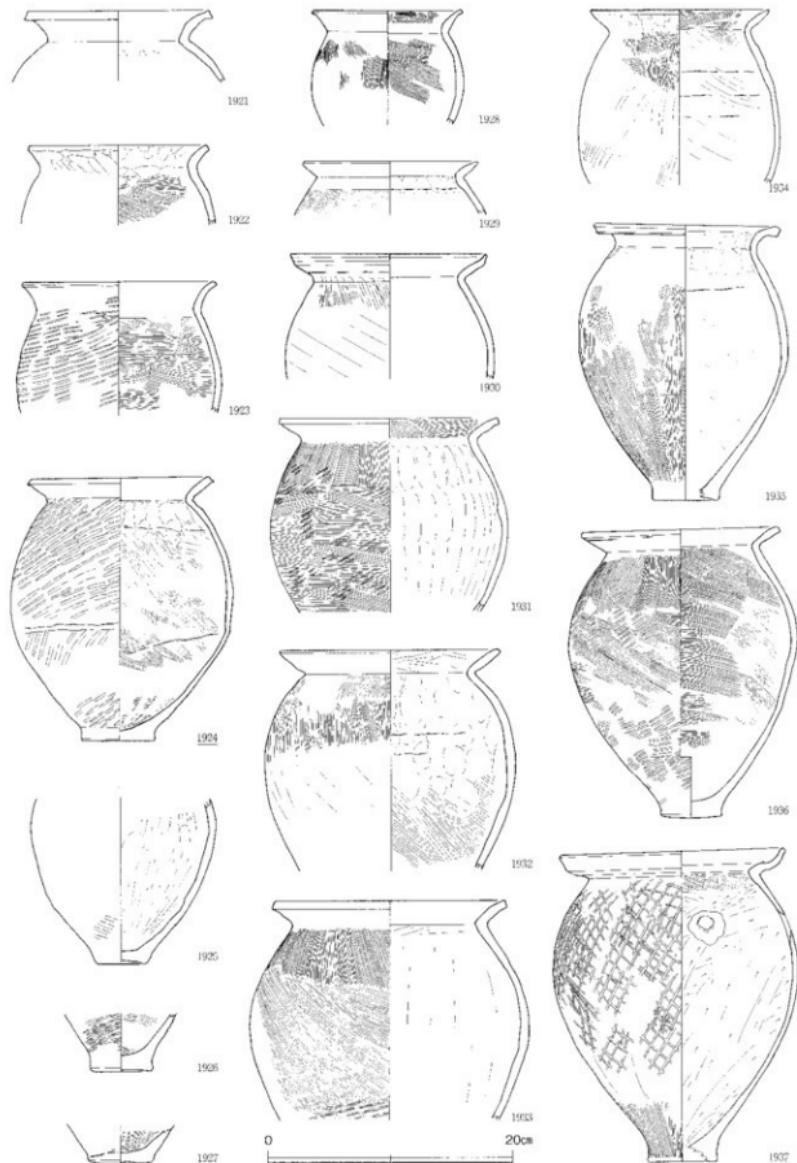


図134 壁穴建物7—外周土坑3出土土器(2)

側部に内外面にハケを施す。

1906の壺はほぼ完形で、口径21.0cm・器高22.2cmを測り、短く外反する口縁部の端部はわずかに上下に拡張し、凹面をもつ。頭部は「く」の字状に屈曲し内面に棱をもつ。肩部がやや張る卵形の体部に突出し、わずかな上げ底をもつ。体部の外面にタタキ後ハケおよびナデ、内面にヘラケズリを施す。角閃石を含む暗褐色をした生駒西麓産である。内外面に煤が多量に付着する。1909は、約1/2を残し、口径16.4cm・器高23.4cmを測る。外面の口縁部にハケ・体部にタタキ後下半にナデ、内面の体部にハケを施す。1908・1910は、壺の底部破片で、(1908)がタタキ後ナデ、(1910)がタタキ後ヘラミガキ、(1909)がハケを施す。1908・1909は、内面に炭化物が付着し、(1909・1910)が外面に煤が付着する。

1905は底部を残す鉢と思われ、小型の突出するわずかな上げ底を持つ。

1907は、脚柱部のみを残す高坏で、外面にハケ後ヘラミガキを施し、4方に円形の透かしを穿つ。

#### 豎穴建物7-外周土坑3 (図133-1911~1920・図134・135)

外周土坑3から出土した土器には、壺11点・壺17点・鉢6点・高坏8点・器台1点の計43点がある。壺には、広口壺(1911)と長頸壺(1915~1920)がある。1911は底部を欠損し、短い口縁部に短く太い頭部に、球形の体部をもつ。口頭部および体部下半が乳白色のキメの細かい胎土で、体部上半が同系色の粗い胎土であり、2種類の胎土を使用する。1915は、やや細い筒状の口頭部を残す。1916はやや大型の長頸壺で、口頭部から体部上端を残し、(1914)は体部から底部を残すもので、形態・調整・胎土などから、接合はしないが同一個体と思われる。両者共に比熱を受け、内外面に煤が付着する。1918・1919は口頭部を残し、いずれも口径に比し頭部が短い傾向にある。1920は、口頭部から体部上半を残し、外面にハケ後ヘラミガキを施す。1917は約4/5を残す小型で、口縁部がわずかに外反し、口径に比し頭部が短く、やや偏平な体部に突出しわずかな上げ底をもつ。口径8.4cm・器高18.8cmを測る。これのみが外面にヘラミガキのみを施し、他はハケを多用する。1916・1920は、外面に煤が付着する。1912・1913は、底部のみを残す。

壺には、体部の調整にナデを施すもの(1921・1922)、タタキを施すもの(1923・1924・1926)と、ハケを施すもの(1928~1937)がある。1921は、口頭部から体部上端を残し、短く外反する口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ面をもつ。頭部は「く」の字状に屈曲し、内面に明瞭な棱をもつ。形態などから壺の可能性を残す。1922は、口頭部から体部上端を残し、頭部の屈曲がゆるく口頭部外面に強い指ナデを残す。1923は、口頭部から体部上半を残し、頭部の屈曲がやや緩やかである。外面にタタキ後口頭部にヨコナデ、内面の体部にハケを施す。1924は約1/3を残し、口径15.2cm・器高21.7cmを測る。外面に2分割のタタキ、内面にハケおよびナデを施す。角閃石を含む暗褐色をした生駒西麓産の土器で、流路3の左岸の下層出土の土器と接合した。

1952は脚付き壺と思われ、体部の下半から脚台部を残し、体部内外面にナデ、脚台部外面にタタキ後ナデを施す。

1928は口頭部から体部を残す小型のもので、体部の内外面にハケを施す。1934は口頭部から体部破片で、口縁端部が尖り気味に終わる。体部の外面にハケ後ナデ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。1929は口頭部から体部上端の破片で、短い口縁部に屈曲する頭部を持つ。1931・1933は体部の外面にタタキ後ハケを施すもので、口縁部の端部が面をもつ。1934は肩部の張る体部をもち、外面にハケ後ナデを、内面の下端にハケを施し、以上には指押さえを残す。器壁の厚さが約1cmと分厚い作りである。1935はほぼ完形で、口径15.2cm・器高23.0cmを測る。口縁部の端部が肥厚し、凹面をもつ。屈曲する頭部は緩

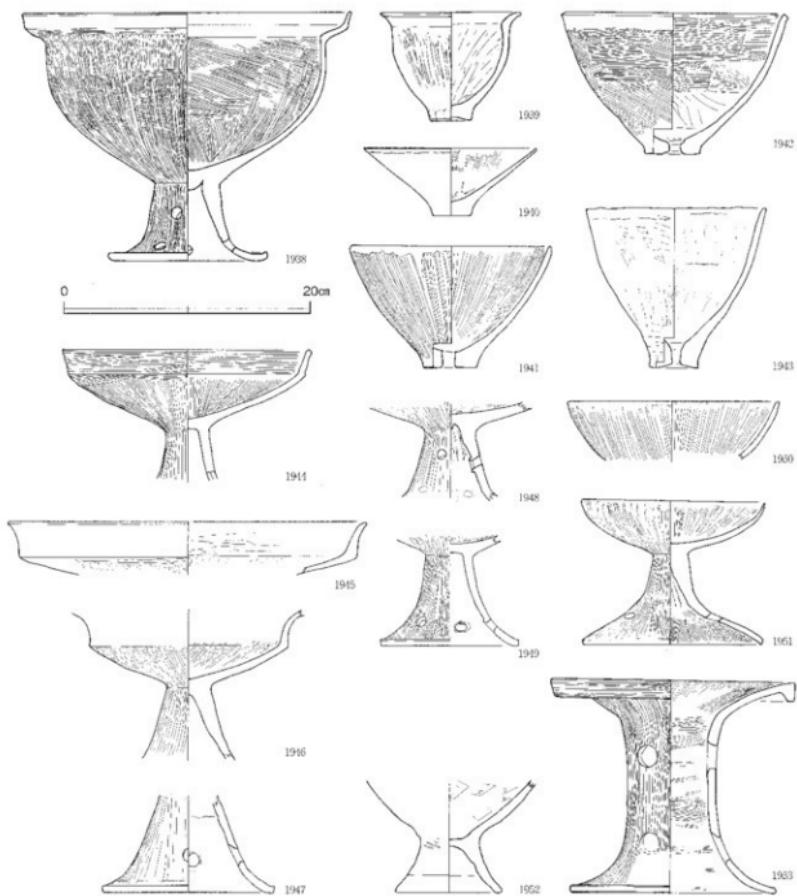


図135 壁穴建物7—外周土坑3出土土器(3)

やかで、卵形の体部に突出するわずかな上げ底をもつ。外面の体部上端にハケ後、ナデを施す。1936はほぼ完形で、口径16.0cm・器高25.8cmを測る。短く外反する口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部、やや肩の張る体部に突出する平底である。体部の外面にタタキ後上半にハケを施す。内面にもハケを施す。1937はほぼ完形で、口径18.2cm・器高25.8cmを測り、短く外反する口縁部が屈曲しさらに斜め外方へ内済気味に伸びる。頸部は「く」の字状に屈曲し、内面に明瞭な棱をもつ。卵形の体部に突出する平底をもつ。体部の外面に斜格子タタキ後部分的にナデ・下位にハケ、内面にヘラケズリを施す。肩部に焼成後の穿孔がある。角閃石を含む暗褐色をした生駒西麓産の土器である。1925・1926は底部を残し、前者が外面にタタキ後ナデ、内面にヘラケズリを施す。1922以外は、外面および口縁部内面

に煤が付着する。1927は、底部を残すもので外面にナデ、内面にハケを施す。

鉢には、外反する口縁部をもつもの、脚台をもつもの、直口で有孔のものの3種がある。

1939は小型で、3/4を残し、口径9.2cm・器高9.4cmを測る。体部の外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。1938は、4/5を残し、口径26.4cm・器高20.6cm・脚台径12.8cmを測る。外反する口縁部がさらに屈曲し上方へ伸びる。体部は半球状で、筒状の脚柱部に裾広がりの脚台部をもつ。体部の外面にハケ後粗いヘラミガキ、内面にハケ、脚部外面にヘラミガキを施す。器壁が4mmと薄い作りである。坏底部に円板充填法を施す。脚柱部と脚台部に3方交互に円形の透かしを穿つ。外面に煤が付着する。この土器は、4層出土のものと接合した。

1940は大きく外傾する口縁部をもつ小型のもので、口径14.0cm・器高5.6cmを測る。有孔鉢は、いずれも、ほぼ完形で(1943)が口径14.6cm・器高14.4cm、(1941)が口径16.0cm・器高10.4cm、(1942)が口径17.6cm・器高13.6cmを測る。体部外面の調整は、タタキ後ハケおよびナデ・ヘラミガキ・ハケである。

高坏には、楕形のもの(1950・1951)と、有稜のもの(1944~1946)があり、他に脚台部のみを残すもの(1947~1949)がある。

1950は坏部のみを残し、やや深いものである。1951は4/5を残し、やや浅い坏部に、わずかに広がる脚柱部に内湾気味にのびる脚台部をもつ。口径14.6cm・器高12.0cm・脚台径14.2cmを測る。外面全体と坏部内面にヘラミガキ、脚台内面にハケを施す。

有稜高坏のうち、(1945)は坏部破片で、(1944)は坏部および脚部の一部を残し、(1946)は口縁端部および脚台部を欠損する。いずれも、ヘラミガキを施す。1944は、流路3左岸シルト層出土の上器と接合する。1948は、坏底部と脚柱部を残し、円形の透かしを3方に、2段交互に穿つ。

1953の器台は、ほぼ完形で、口径20.0cm・器高17.4cm・脚台径16.8cmを測る。外反する口縁部は垂下し面をもち、筒状の体部に裾広がりの脚台部をもつ。外面の全体にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ、体部から脚台部にハケ後ナデを施す。体部に径約1.8cmの円形の透かしを3方に2段穿つ。乳白色をした精緻な作りの土器である。

#### 豊穴建物7-外周土坑4

外周土坑4から出土した土器は、小片がわずかで、図示できるものは無い。

#### 豊穴建物7-外周土坑5(図136・137)

外周土坑5から出土した土器には、壺6点・甕9点・鉢2点・高坏11点・器台3点の他に、甕蓋が1点の計32点がある。

壺には、長頸壺(1955)・細頸壺(1954)・無頸壺(1957)があり、他に、肩部の紋様破片(1956)がある。1955は、口頸部破片で、外反する口縁部の端部が面をもつ。内外面に表面摩滅のため、調整不明である。1954は、口頸部破片で、口縁部に篦描き沈線紋2条(櫛描直線紋か)・竹管紋・櫛描波状紋・直線紋を施す。暗紫灰色を示すことから、二次焼成を受けた可能性がある。1957は、口縁部端部がわずかに立ち上がり、球形の体部をもつ。体部の外面にタタキを施し、内面に指押さえを残す。1958は、口縁部を欠損する細頸壺と思われ、下膨れの体部に、わずかに突出する平底をもつ。体部外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。1957は、櫛描波状紋・竹管紋を施す。

甕には、タタキを施すもの(1962~1964)と、ハケを施すもの(1965・1966・1970・1971)、ナデを施すもの(1968・1969)がある。

1962は口頸部から体部上端の破片で、体部にタタキ後ナデを施す。1963は底部を欠損し、体部外面下

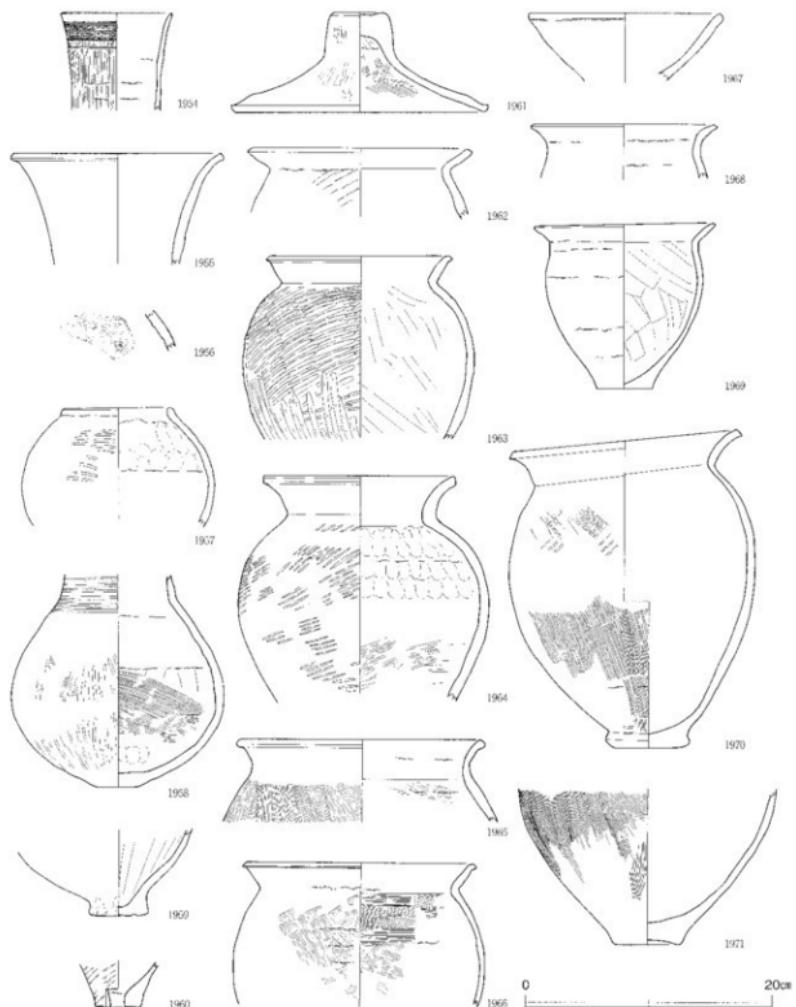


図136 穴窓建物7-外周土坑5出土土器(1)

半にタタキ後強いヘラケズリ状ナデを施す。流路3の左岸b域の下層出土の土器と接合する。1964は底部を欠損し形態的には広口壺に似るが、外面に煤が多量に付着することから、ここでは壺に分類した。器壁が6~8mmと部厚い作りである。

1966は、口頭部から体部上半を残す破片で、口縁部の端部がわずかに肥厚し、面をもつ。内面全体に赤彩が施されるが、残りは悪い。外面に煤が付着する。体部内外面に、粘土紐の継目を顕著に残す。



圖137 壺穴建物7—外周土坑5出土土器(2)

1965は大型で、口縁部から体部上端を残す。口縁部の端部はわずかに下方に肥厚し、面をもつ。頸部の屈曲は緩やかである。体部外面にハケ、内面にハケおよびナデを施す。

1970は3 / 4を残し、口径18.0cm・器高21.4cmを測る。短く外反する口縁部の端部は面をもち、内面に強いヨコナデを巡らす。頸部が「く」の字状に屈曲し卵形の体部に、突出する平底をもつ。体部の外面にタタキ後ヘラミガキ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。外面の底部を除き煤が多量に付着し、内面の体部下半に炭化物が付着する。この土器は、貯木遺構1から出土した土器と接合した。1971は、体部下半から底部を残すもので、外面にハケ、内面にナデを施す。

1968は口縁部から体部上端を残す破片で、頸部の屈曲は緩やかである。1969はほぼ完形で、口径15.6cm・器高13.4cmを測る小型のものである。外面にナデ、内面にいた状ナデを施す。体部外面に粘土絆の緋目を顯著に残す。外面に煤が付着する。

1961の壺蓋は、約1 / 4を残し、口径20.0cm・器高8.4cmを測る。外面にナデ、内面にハケおよびナデを施す。内面全体に多量の煤が付着する。

鉢は、直口のもの(1967)と、口縁部をぐく有孔のもの(1960)がある。

高坏には、楕形のもの(1972)と、有後のもの(1973~1975)、有段のもの(1978)があり、他に、脚部のみを残すもの(1977・1979・1980・1984・1985)がある。

1972は、脚台部を欠損し、浅い楕状の坏部にやや裾の広がる脚柱部をもつ。坏部の外外面にヘラミガキを施す。

有段のものは、(1973~1975)が坏部のみを残し、(1976)が脚台部を欠損する。1973・1976は、坏部内外面にヘラミガキを施し、(1975)は外面にハケ後粗いヘラミガキを施し、内面にヘラミガキを施す。1974は、橙褐色をし、割れ面毎に黒斑があることから、二次焼成を受けたと思われる。1975は、外周土坑1から出土した土器と接合した。1976は、暗褐色をした角閃石を含む、生駒西麓産の土器である。

1978の有段の高坏は、坏底部および脚柱部を残し、坏底部径が11.2cmを測る。

1977は坏底部から脚柱部を残し、破損後煤が付着する。1985は脚台部のみを、(1980)は脚柱部のみを残存し、脚柱部に艶描き沈線紋を9条施す。1984は脚部を残し、脚柱部から脚台部に広がる端部は、わずかに垂下し面をもつ。端部外面に強いヨコナデが巡る。外面および脚柱部内面にヘラミガキ、脚台部内面にヨコナデを施す。外外面に煤が付着する。壺蓋に転用か。

器台には、無紋のもの(1981・1982)と、装飾性に富むもの(1983)がある。1981は、口径20.2cm・器高15.0cm・脚台径16.2cmを測り、4 / 5を残す。外反する口縁部の端部が垂下し面をもち、筒状の体部に裾広がりの脚台部をもつ。1982は、口径20.0cm・器高17.8cm・脚台径16.8cmを測り、2 / 3を残す。外反する口縁部の端部が面をもつ。両者併に、外面にヘラミガキがわずかに残り、内面が表面摩滅のため調整が不明である。いずれも、透かし孔は穿たれない。1983は、口径20.8cm・器高19.2cm・脚台径16.4cmを測り、ほぼ完形である。外反する口縁部の端部が垂下し面をもつ。筒状の体部に裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり凹面をもつ。外面の口縁部から体部にかけてとヘラミガキ、口縁部の内面にハケ後ヘラミガキ、体部内面にハケおよびナデ、脚台部の外外面にヨコナデを施す。紋様は、口縁部内面に櫛描直線紋、端部に櫛描波状紋・円形浮紋上竹管紋2個1組を6箇所に施す。体部に4方向3段の円形透かしをややざらして穿つ。暗褐色をした角閃石を含む、生駒西麓産の土器である。

豊穴建物7-外周土坑6(図138~141)

外周土坑6から出土した土器には、壺が21点・壺が19点・鉢が4点・高坏が8点・器台が3点の計55

点と最も多くある。

壺には多種多様なものがあり、広口壺(1986・1987・2009)・長頸壺(1988・1989・1993~1998)・直口壺(1990・1991・2001)・短頸壺(1992)・細頸壺(2000・2002)・無頸壺(1999)などである。

1986は、口頭部から体部上端を残し、短く外反する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し面をもつ。内外面に表面摩滅のため、調整が不明である。1987はほぼ完形で、口径15.0cm・器高25.0cmを測る中型の無紋壺である。口縁部が短く外反し、その端部がわずかに上下に拡張し凹面をもち、短い筒状の頭部に、球形の体部、中央部がわずかに窪む底部である。口縁部の内外面にヨコナデ、頭部の内外面にハケ、体部外面にタタキ後ヘラミガキ、内面にナデを施す。体部外面に多量の煤が付着する。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2009はほぼ完形で、口径12.0cm・器高15.4cmを測るやや小型の無紋壺である。短く外反する口縁部に短く屈曲する頭部、肩の張る体部に突出する平底をもつ。体部の外面にナデを施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

1996はほぼ完形で、口径10.8cm・器高25.6cmを測り、わずかに開く口縁部に筒状の頭部、球形の体部に突出し中央部がわずかに窪む底部をもつ。外面の口頭部から体部にかけてハケ後ヘラミガキ、底部に一方方向のヘラミガキ、内面の口頭部にハケ、体部にナデを施す。肩部に、竹管紋を3個施す。

1993は9/10を残し、口径14.2cm・器高24.5cmを測る。口頭部がやや短く斜め上方へ開き、肩部が張る体部に突出する平底をもつ。外面の口頭部から体部上半にハケ、体部下半にヘラミガキ、内面の口頭部にハケ、体部にナデを施す。1988はほぼ完形で、口径12.8cm・器高25.2cmを測る。1992同様に口頭部がやや開きその上端が面をもつ。下彫れの体部に突出する平底である。外面の口頭部から体部上半にかけてハケ、体部下半にハケ後ナデ、内面の口頭部にハケ後ナデ、体部の上半に指押さえを残し、体部下半にハケを施す。1997は口頭部を欠損し、やや偏平な体部に突出する平底である。外面にハケ後ナデ、内面の上半に指ナデ・下半にハケを施す。1988は体部の1/4を欠損し、口径14.0cm・器高29.0cmを測り、やや外反する口頭部に肩部がやや張る体部に、突出する平底である。外面の口縁部端部に強いヨコナデを施し、口頭部から体部上半にハケ、下半にナデ、内面の口頭部にハケ、体部上半に指押さえを残し、下半にナデを施す。外面の体部中央に煤が付着する。1995は口頭部から体部上端を残し、やや開き気味の口頭部をもつ。内外面にナデを施す。この土器は、4層出土の土器と接合した。1994は、口頭部から体部上半を残し、やや小型のものである。1997は、口縁部を欠損し、筒状の頭部にやや肩の張る体部に、やや突出する平底である。外面の頭部から体部上半にハケ、下半にナデ、内面の頭部にハケ、体部上半に指押さえを残し、下半にハケを施す。頭部の上位に崩れた竹管紋を2個施す。以上の長頸壺のうち、(1995)の器壁が約5mm前後と薄く、(1988・1989・1993・1996・1998)が8mm前後と部厚い作りである。

1990の直口壺は口頭部から体部上半を残し、内外面にハケを施す。器壁が部厚い作りである。外面に煤が付着する。1991は2/3を残し、口径12.0cm・器高27.0cmを測る。短く外方に開く口縁部に、筒状の頭部、卵形の体部に突出する平底である。体部の調整は、外面にタタキ後ヘラミガキを施し、内面が摩滅のため不明である。体部下半に径3mmの焼成前の穿孔がある。2001は小型の完形で、口径8.4cm・器高14.6cmを測る。やや開く口縁部の端部が外方へわずかに肥厚し面をもつ。筒状の頭部にやや偏平な体部、突出する平底である。外面にヘラミガキ、内面口頭部から体部上半にナデ・下半にハケを施す。

2001の短頸壺は2/3を残し、口径9.2cm・器高15.8cmを測る。短く外反する口頭部に、下彫れの体部、突出する平底をもつ。体部の外面に丁寧なヘラミガキ、内面にナデを施す。

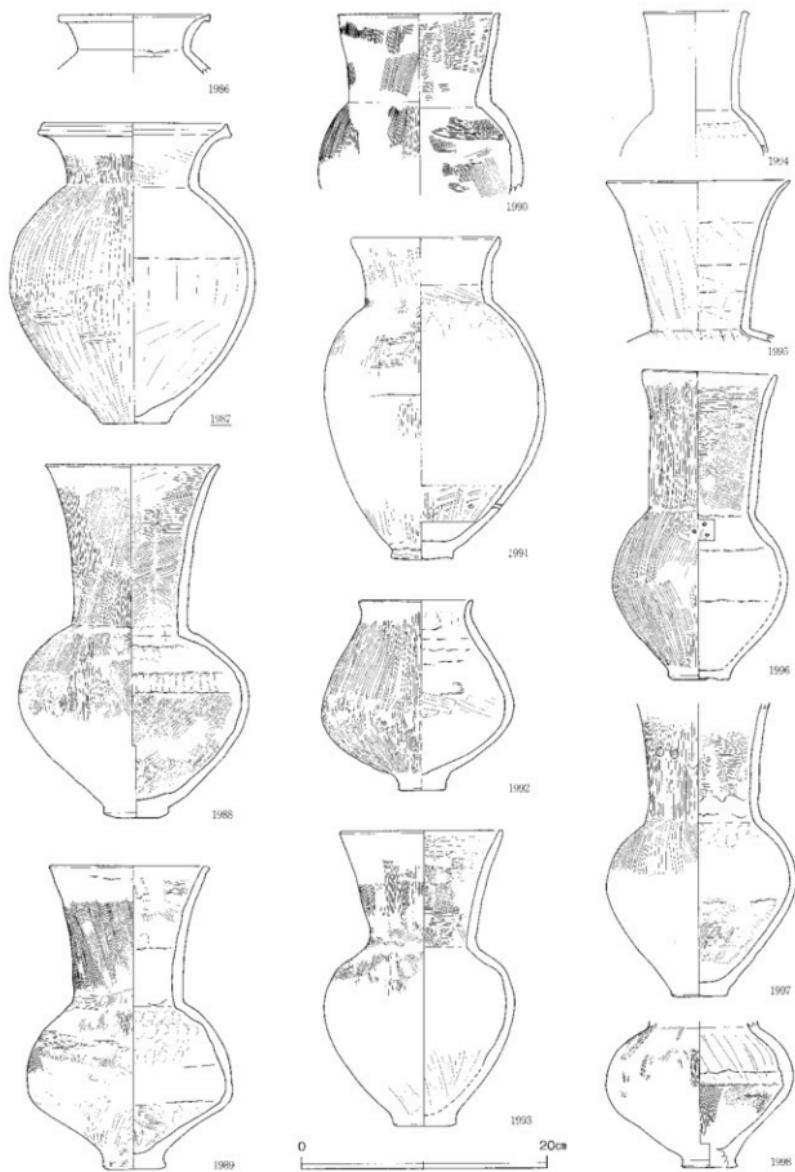


図138 窓穴建物7—外周土坑6出土土器(1)

2000の細頸壺は約2／3を残し、口径6.5cm・器高16.0cmを測る。短く外反する口縁部に、頸体部が緩やかに伸び下彫れの体部、突出する小振りの平底をもつ。外面にヘラミガキ、内面の体部下半にハケを施し、内面の体部上半に指押さえ・粘土紐の継目を残す。頸体部の境目に竪撲き沈線紋2条を施す。

2002は完形で、口径8.4cm・器高19.4cmを測る。やや開く口頭部に、球形の体部、突出する平底をもつ。外面にハケ後ヘラミガキ、内面の口頭部にヨコナデ・体部にナデを施す。

1999の無頸壺は小型で、底部を欠損する。わずかに立ち上がる口縁部に、肩の張る体部をもつ。外面にハケ後ナデ、内面にハケを施す。体部全面に施で線刻画を施す。

2005は体部および底部を残し、肩の張る体部に突出し上げ底である。外面にハケ後ヘラミガキ、内面にナデおよびハケを施す。2003は小型壺の底部で、体部下半から底部を残す。半球状の体部に突出する平底をもつ。内外両面にナデを施す。2004は、体部中央から底部を残し、突出する平底を持つ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。形態から長頸壺と思われる。外面に煤が付着する。

壺には、中型・大型のものがあり、体部にタタキを施すもの(2006)、ヘラミガキを施すもの(2007・2008)、ナデを施すもの(2011・2012)、ヘラケズリを施すもの(2010)と、ハケを施すもの(図140)がある。

2006はほぼ完形で、口径14.6cm・器高18.0cmを測り、短く外反する口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頸部に、卵形の体部に平底である。体部外側にタタキ、内面の肩部にハケ、以下にヘラケズリ状のナデを施す。

2007・2008はいずれもやや小型で、前者がほぼ完形で後者が約2／5を残す。口径14.0cm・15.6cm、器高16.4cm・22.0cmを測り、短く外反する口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頸部に、やや肩の張る体部、突出しわざかな上げ底である。2007は外面に縱方向のヘラミガキ、内面に指ナデを施す。2008は、体部の外面上端にナデ・肩部に横方向のヘラミガキ・下半にヘラケズリ状ヘラミガキ、内面にナデを施す。内外両面に粘土紐の継目を顕著に残す。いずれも、外面に煤が付着する。

2010は口頭部から体部上半を残し、短く外方へ開く口縁部に、「く」の字状に屈曲する頸部をもつ。体部外側に板状のヘラケズリ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。

2011は約1／3を残し、口径15.0cm・器高20.4cmを測る中型の壺である。短く外反する口縁部の端部が立ち上がり面をもつ。頸部が「く」の字状に屈曲し、卵形の体部に、突出する平底である。体部の内外両面に板状のナデを施す。2012は約3／5を残し、口径15.6cm・器高25.0cmを測る。短く外反する口縁部の端部が立ち上がり面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部に、やや細長い卵形の体部、突出しわざかな上げ底である。外面の上半は煤が多量に付着するため、調整が不明である。下半にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。内面体部下半に炭化物が付着する。

ハケを施す壺には、中型と大型のものがあり、その器形も様々である。

2013は、口頭部から体部上半を残し、大きく外反する口頭部に屈曲し、やや膨らむ体部をもつ。口縁端部は凹面をもつ。体部の調整は、外面にハケ後ナデ、内面にヘラケズリを施す。2014は、口頭部から体部上端を残す破片で、斜め外方へ短く開く口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頸部である。体部内面にナデを施す。外面の口頭部に煤が付着する。2015は底部を欠損し、短く外反する口頭部に、肩の張る体部である。体部外側にハケ、内面に内面肩部にハケ、以下にナデを施す。口頭部外側に指押さえを残す。外面の上半に煤が多量に付着する。

2016は約4／5を残し、口径15.2cm・器高21.6cmを測る。短く外方へ開く口縁部の端部が面をもち、

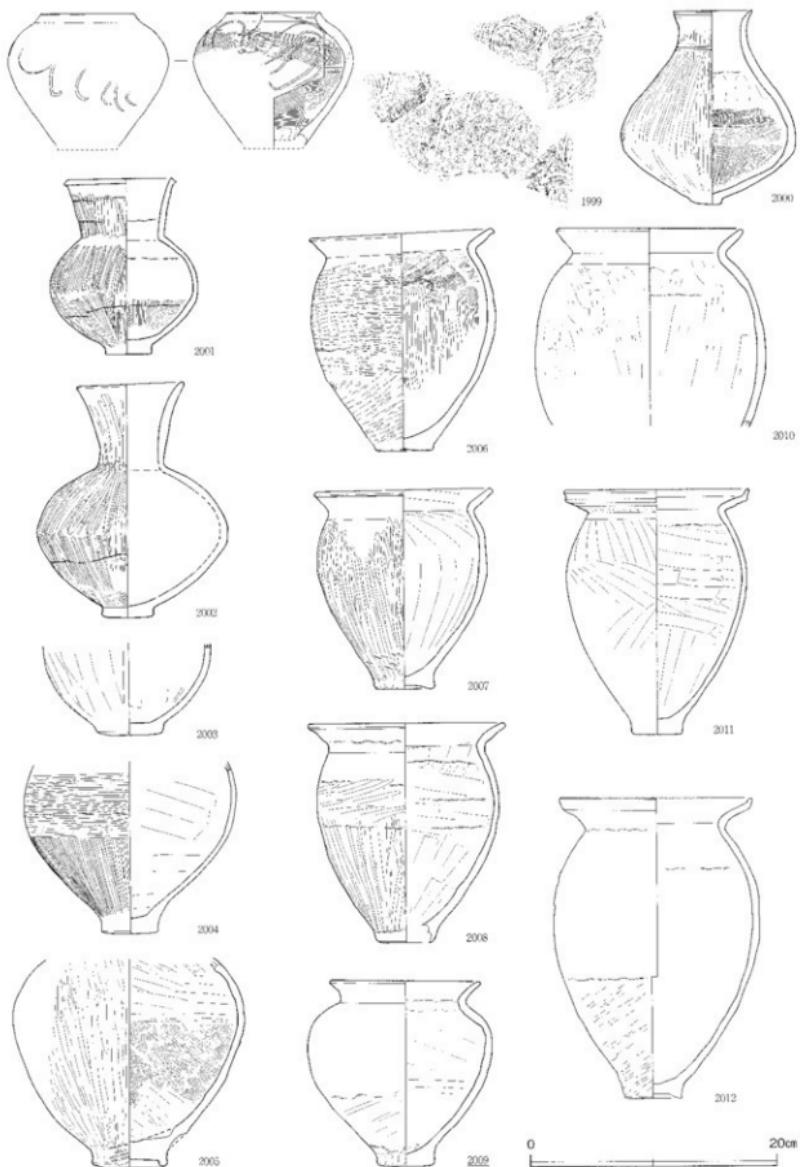


图139 竖穴建筑7—外周土坑6出土土器(2)

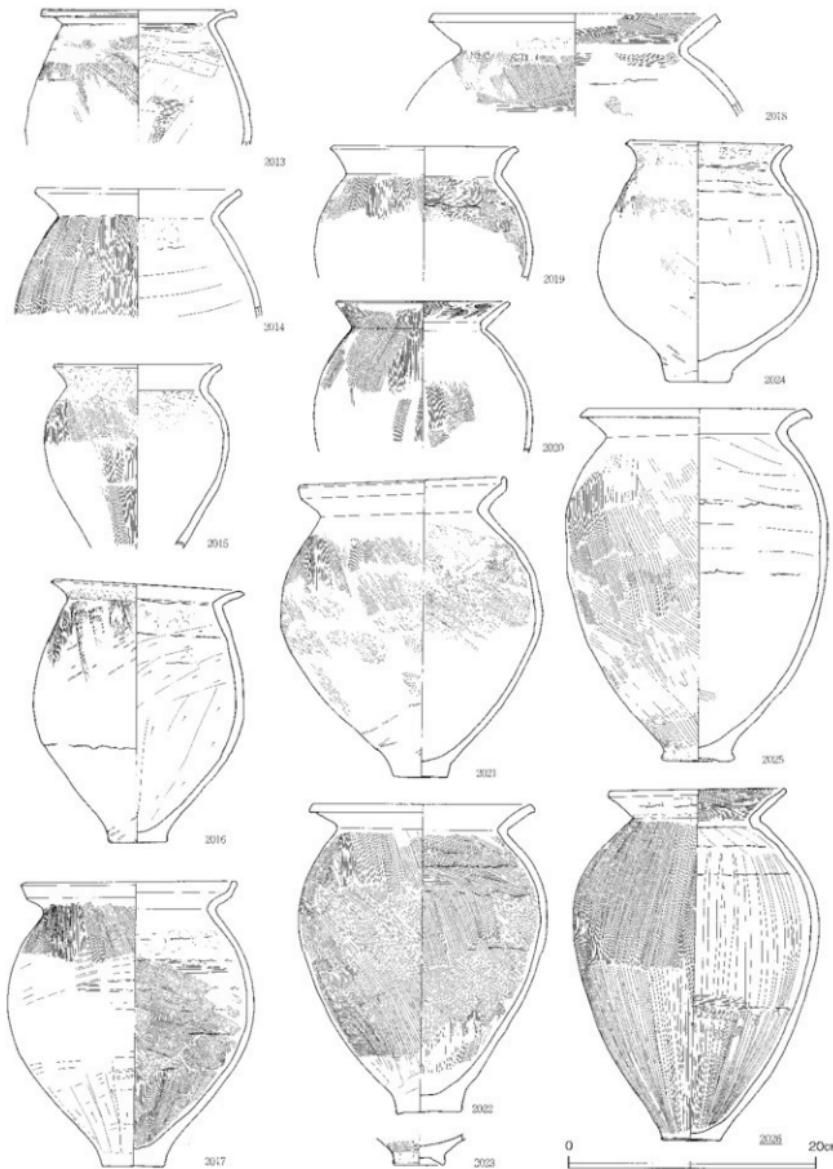


図140 窪穴建物7—外周土坑6出土土器(3)

「く」の字状に屈曲する頭部内面が明瞭な稜をもつ。卵形の体部に、突出する平底である。体部の外面上半にタタキ後ハケ・下半にタタキ後ナデ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。外面の口頭部に指押さえを残す。

2017は完形で、口径17.2cm・器高23.4cmを測る。短く外反する口縁部の端部が立ち上がり面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部に球形の体部、突出する平底である。体部外面の上半にタタキ後ハケ・下半にタタキ後ヘラケズリ状のナデ、内面の肩部にナデ・以下にハケを施す。外面の口頭部から体部上半に多量の煤が付着し、内面下半に炭化物が付着する。

2018は大型の壺で口頭部から体部上端を残す破片である。他に、接合しなかったが外面にタタキ後ナデを施す体部破片がある。短く外方に開く口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部である。体部の外面にタタキ後ハケ、内面にハケを施す。外面に煤が付着する。

2019は口頭部から体部上半を残す。口縁部の端部は面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部に、やや膨らむ体部である。外面の肩部にハケ・以下にナデ、内面にハケを施す。体部の内外面に粘土紐の継目を顯著に残す。2020は口頭部から体部上半を残す。短く外反する口縁部の端部が丸く終わり、「く」の字状に屈曲する頭部の内面が平坦面をもつ。外面の口頭部から体部にかけてハケ、内面の口縁部および体部中央がハケ・頭部から体部上端が指押さえを残す。外面に煤が付着する。

2021はほぼ完形で、口径16.4cm・器高24.8cmを測る。短く外反する口縁部の端部が立ち上がり面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部に球形の体部、突出する平底である。体部外面にタタキ後、上半にハケ・下半にナデ、内面にハケを施す。内面の下半は、炭化物が多量に付着するため、調整が不明である。外面の口頭部から体部中央に欠けて煤が多量に付着する。この土器は、周辺5城出土の土器と接合した。

2022はほぼ完形で、口径17.7cm・器高25.7cmを測る。短く外方へ開く口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部の内面が明瞭な稜をもち、卵形の体部に突出する平底である。体部内外面にハケを施し、底側部外面にナデを追加する。外面底部を除き煤が多量に付着し、内面の底側部に炭化物が付着する。2023は上げ底の底部のみを残す。

2024はほぼ完形で、口径13.0cm・器高20.1cmを測る。短く外反する口縁部の端部が丸く終わり、屈曲する頭部に下彫れの体部、突出する平底をもつ。調整は、外面口頭部から体部上半にタタキ後ハケ・下半にタタキ後ナデを施し、内面の口頭部から体部上端にハケ・以下にナデを施す。口縁端部に刻み目を施す。外面全体に煤が多量に付着する。なお、底部の一部が欠けており、その破損面に煤が付着する。

2025は約2/3を残し、口径17.6cm・器高29.2cmを測るやや大型のものである。短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部の内面に明瞭な稜をもつ。卵形の体部に突出しわずかな上げ底である。体部外面に細かいタタキ後ハケ、口頭部内面にハケ・体部にナデを施す。外面に底部を除き煤が付着する。

2026は完形で、口径14.0cm・器高29.0cmを測る。短く外方へ開く口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部の内面が平坦面をもつ。やや肩の張る丈高的体部、わずかな上げ底である。外面の口頭部に指押さえおよび粘土紐の継目を残し、体部の上半がハケ・下半がヘラケズリ状ナデを施す。内面は、口頭部にハケ・体部の上半に指ナデ・下半にハケ後粗いヘラミガキを施す。暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。外面煤が多量に付着する。

鉢には、直口のもの(2027・2029・2030)と、外反する口縁部をもつもの(2028)があり、いずれも小型

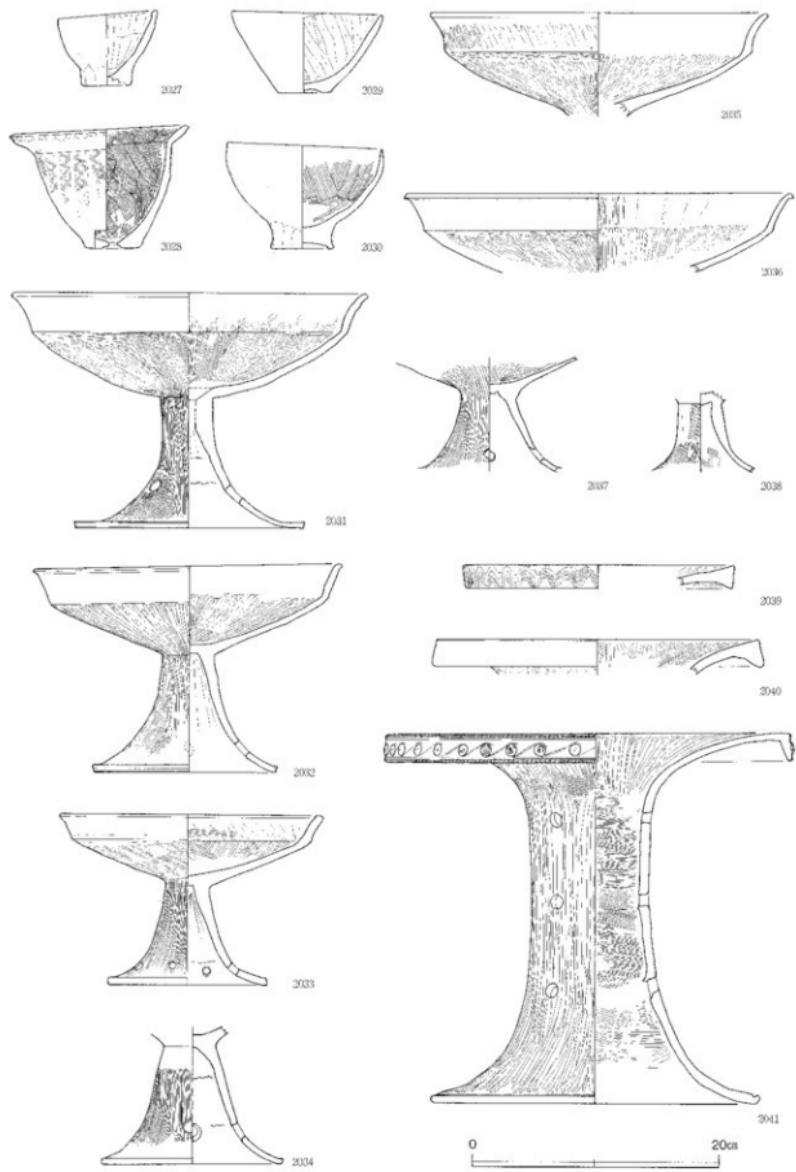


图141 竖穴建物7—外周土坑6出土土器(4)

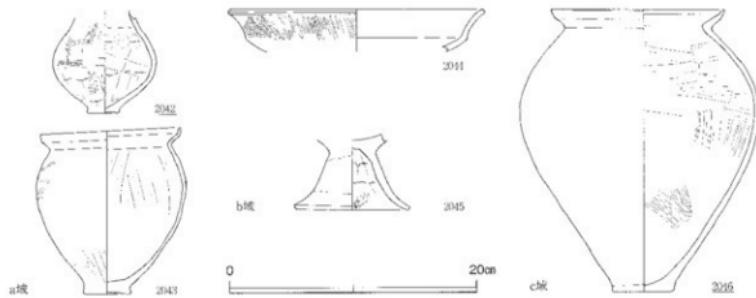


図142 窪穴建物7－周辺a～c域出土土器

のものである。

2027はミニチュアのはば完形で、口径7.9cm・器高6.0cmを測る。外面に指ナデを施し、粘土縫の継目を残す。2028は約4/5を残し、口径12.0cm・器高6.6cmを測る。斜め外方に開く口縁部に、中央部がわずかに窪む底部をもつ。外面にナデ、内面にハケを施す。2030はほぼ完形で、口径12.1cm・器高8.6cmを測る。やや内湾する口縁部の端部が尖り気味に終わり、半球状の体部に突出しわずかな上げ底である。外面に指ナデ、内面にハケを施す。

2028は完形で、口径14.0cm・器高10.0cmを測る。短く外反する口縁部の端部が面をもち、裾すぼまりの体部にやや突出する平底である。口縁部端部下に、指押さえを残す。体部の外面に横位の連続「ハ」の字形のタタキを施し、内面全体にハケを施す。底部中央に、焼成後の外面からの穿孔がある。

高坏には、有稜のもののみがあり、他に、脚部のみ残存するものがある。

2031は約2/3を残し、口径28.4cm・器高19.4cm・脚台径18.6cmを測るやや大型のものである。短く外反する口縁部の端部が面をもち、浅い椀形の坏部、筒状の脚柱部に、裾広がりの脚台部の端部がわずかに上下に拡張し凹面をもつ。調整は、口縁部外面にヨコナデ・坏部および脚部にハケ後ヘラミガキ、内面の口縁部に横方向のヘラミガキ・坏部に縱方向のヘラミガキ・脚部にナデを施す。脚部の3方に円形の透かしを穿つ。

2032は脚台部の約3/4を欠損し、口径24.8cm・器高17.2cm・脚台径15.0cmを測る。やや外方に開く口縁部の端部がわずかに外側に肥厚し、浅い坏部、裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり凹面を持つ。口縁部内外面にヨコナデ・坏部内外面および脚部外面にヘラミガキ、脚部内面にナデを施す。脚部の4方に円形の透かしを穿つ。

2033はほぼ完形で、口径21.2cm・器高14.0cm・脚台径13.0cmを測る。短く斜め外方に伸びる口縁部の上端が面をもち、内方にわずかに肥厚する。浅い坏部に裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり凹面をもつ。外面の調整は、口縁部が横方向のヘラミガキ・坏部がハケ・脚部がハケ後ヘラミガキ、内面の口縁部がヨコナデ・坏部がハケ後ヘラミガキ・脚部がナデを施す。脚台部に円形の透かしを7箇所に穿つ。黄褐色の砂粒の粗い土器である。

2035・2036は坏部のみを残し、後者は、口径31cmと大型である。前者は外反する口縁部の端部が丸く終わり、後者がわずかに垂下し面をもつ。2035は、口縁部外面に波状紋風にヘラミガキを施し、坏部内外面にヘラミガキ、口縁部の内面にヨコナデを施す。2036は口縁部外面にヨコナデ・坏部にハケ後ヘ

ラミガキ、口縁部内面に往復のヘラミガキ・坏部に縱方向のヘラミガキを施す。

2037は坏底部および脚柱部のみを残し、外面および坏部内面にハケを施す。脚部の4方に円形の透かし孔を穿つ。2034は脚部のみを残し、脚台径14.6cmを測る。外面にハケ、内面にナデを施す。脚部の4方に円形の透かし孔を穿つ。2038は脚柱部のみを残し、内外面にハケを施す。

器台には、口縁部のみを残すものと、ほぼ完形のものがある。

2039は口縁部破片で、外反する口縁部の端部が上下に肥厚し、面をもつ。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。口縁端部に、櫛波状紋を施す。2040は口縁部破片で、外反する口縁部の端部が垂下し面をもつ。内外面伴にヘラミガキを施す。

2041はほぼ完形で口径32.8cm・器高30.6cm・脚台径26.0cmを測り、当遺跡出土の器台で最も大きいものである。外反する口縁部の端部が垂下し面をもつ。筒状の体部に裾広がりの脚台部の端部が丸く終わる。外面全体にヘラミガキを施し、内面の口縁部にヘラミガキ・体部にハケ・脚台部にハケ後ナデを施す。口縁端部の上下に刻み目紋を施し、その間に円形浮紋上竹筋紋間に竪撚弧紋を施し、脚台端部に竪凹線紋1条を施す。体部の3方に3段の円形の透かしを穿つ。この土器は、3面直上と4層出土の土器と接合した。

豊穴建物7の周辺の遺構面から若干の土器が出土し、東側の流路3肩部付近に北からa・b域、外周土坑1の北側にc域が位置する。

#### 豊穴建物7 周辺a域（図142-2042・2043）

a域から出土した土器には、壺・甕が各1点ある。

2042は小型壺で、口頭部を欠損する。やや下膨れの体部に突出しわざかな上げ底をもつ。体部の外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2043は口縁部を約1/2を欠損し、口径14.4cm・器高17.4cmを測る。短く外反する口縁部の端部が立ち上がり面をもち、屈曲する頸部に卵形の体部、突出しわざかな上げ底である。体部の外面にタタキ後ハケないしはナデ、内面にヘラケズリを施す。外面の体部下半にわずかに煤が付着する。

#### 豊穴建物7 周辺b域（図142-2044・2045）

b域から出土した土器は、高坏が2点である。

2044は有稜の坏部破片で、外反する口縁部の端部が外方にわずかに肥厚し、面をもつ。口縁部外面に波状紋風のヘラミガキを施す。他は表面摩滅のため、不明である。2045は脚台部のみを残し、内外面ともにナデを施す。形態・調整から壺か鉢の脚台部になる可能性がある。

#### 豊穴建物7 周辺c域（図142-2046）

c域から出土した土器は、甕が1点である。

2046は完形で、口径18.0cm・器高30.2cmを測る、やや大型の甕である。短く外反する口縁部の端部が屈曲し立ち上がり面をもち、「く」の字状に屈曲する頸部の内面に明確な稜をもつ。肩部がやや張る体部に、突出する平底である。外面全体が表面剥離のため、調整が不明である。体部下半に内面にヘラケズリを施す。黄褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

以上、豊穴建物7およびその周辺の土器について観察してきたが、豊穴建物10基の中で、最も土器の出土量が多いのが特徴的である。

豊穴建物7および外周土坑・刷迥の土器群全体をみると、図示できたもので、壺46点・甕56点・鉢17点・高坏34点・器台7点・甕蓋1点の総数161点である。

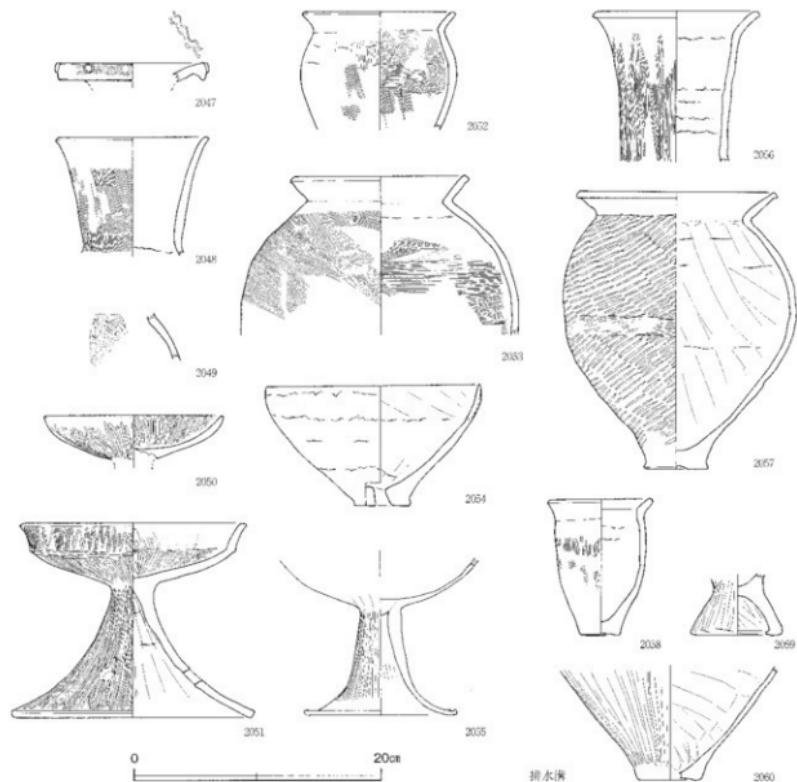


図143 竪穴建物8・排水溝出土土器

壺には、長頸壺が約20点と大半を占め、他に、中型の広口壺や直口壺・細頸壺・短頸壺・無頸壺などがある。壺には、中型のものが圧倒的に多く、小型・大型はわずかである。全体的にハケを施すものが大半を占め、その形態が変化に富む。鉢には小型で楕形のものが多く、高坏には有稜のものが圧倒的に多い。有段のものが1点含まれるが、破片のため詳細が不明である。

土器の接合関係でみると、竪穴建物内の土坑1と外周土坑1、外周土坑1と外周土坑5、流路3左岸と外周土坑3・5、外周土坑5と貯木場遺構1、第3面直上や4層などとも接合関係にあり、半径40~50m離れているものが接合していることから、散逸したことがうかがわれる。

#### 竪穴建物8（図143）

竪穴建物8は、西側居住域の東端中央部に位置し、流路3の東側に当る。やや小型の方形の建物で、柱穴は検出されていない。流路3に向って排水溝が穿たれる。

竪穴建物8から出土した土器は、床面から壺・高坏が各1点と、壁溝から壺1点・埋土から壺1点・壺2点・鉢1点・高坏2点の計9点である。

床面から出土した(2047)は、小型の広頸壺の口縁部破片で、外反する口縁部の端部が垂下し、面をもつ。口縁部内面に櫛描波状紋、端部に波状紋・円形浮紋を施す。

2051の高坏は、脚部が約1/3欠損し、有後のものである。口径18.0cm・器高16.0cm・脚台径19.4cmを測り、口径より脚台径が大のものである。外面全体にヘラミガキ、坏部内面にヘラミガキ・脚部にナデを施す。口縁部外面のヘラミガキは、波状紋風に施す。脚台の3方に円形の透かしを穿つ。この土器は、坏部が床面から、脚部が流路3の左岸から出土し接合した。

壁溝から出土した(2048)は、長頸壺で口頸部を残す。斜め外方に開く口縁部に、矧めの筒状の頭部をもつ。外面にハケ、内面にナデを施す。

埋土から出土した(2049)は、壺の体部破片で、線刻が施される。

壺は、いずれもハケを施すもので、(2052)が小型の底部を欠く破片で、(2053)が大型の口頸部から体部上半を残す。両者共に外面に煤が付着する。2053は、竪穴建物7の外周土坑3から出土の土器と接合した。

2054の鉢は、直口で有孔のもので、約3/4を残し、口径19.2cm・器高9.8cmを測る。内外面にナデを施し、外面に粘土紐の継目を顯著に残す。口縁端部に部分的に刻み目を施す。桃褐色をし、口縁部外面に数箇所ひび割れの補修のために粘土を盛っている。二次焼成を受ける。流路3および4層から出土した土器と接合する。

高坏は、いずれも楕形のもので、(2050)は坏部のみを残し、外面にヘラミガキを施す。2057の高坏は、坏底部から脚台部を残すもので、脚台端部が上下にわずかに拡張する。外面に、ヘラミガキを施す。

#### 竪穴建物8一排水溝(図143-2056~2060)

竪穴建物8の排水溝から出土した土器は、壺1点・壺4点の計5点がある。

2056の壺は長頸壺で、口頸部を残す。外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもつ。口頸部の外面にヘラミガキ、内面にナデを施し粘土紐の継目を顯著に残す。

壺には、体部にタタキを施すものとハケを施すもの、ナデを施すものがあり、他に、台部のみを残すものがある。2057は底部を約4/5欠損し、口径15.6cm・器高23.0cmを測る中型のもので、外反する口縁端部がわずかに垂下し面をもつ。「く」の字状に屈曲する頭部に、卵形の体部、突出する平底である。体部の外面にタタキ、内面にナデを施す。外面の肩部と底部を除き煤が付着する。内面の体部下半から底部にかけて炭化物が多量に付着する。この土器は、口頸部から肩部にかけて排水溝から出土し、体部下半から底部が流路3の左岸、体部の小片が竪穴建物8の埋土上層から出土し、接合した。

2058は小型のもので、口径8.0cm・器高11.3cmを測り完形である。体部外面にハケ後ナデ、内面にナデを施す。口径が最大径をもつ縦長なものである。2059は、台部のみを残し、端部が内側に肥厚し、面をもつ。内外面にナデを施す。底部内面に多量の炭化物が付着する。2060は、体部下半から底部を残す。内外面にナデを施す。外面に煤が付着する。

#### 竪穴建物9(図144)

竪穴建物9は、東側居住域の南西端に位置し、流路3の東側に当る。周壁をもち、やや大型の方形で4本柱の建物である。流路3に向って排水溝が穿たれる。

竪穴建物9から出土した土器は、床面から鉢が2点、柱穴3から壺が1点、埋土から壺が3点・鉢が2点の計8点である。

床面から出土した鉢には、直口のもの(2066)と、外反する口縁部をもつもの(2064)がある。2066は口径16.0cm・器高8.4cmを測り、斜め外方に開く口縁部の端部が尖りぎみに終わり、突出する底部がわずかに上げ底である。内外面併にナデを施し、粘土紐の継目を顕著に残す。2064は完形で短く外傾する口縁部の端部が丸く終わり、屈曲する頸部の内面に、明瞭な稜をもつ。半球状の体部に、突出する平底である。

柱穴3から出土した(2061)は大型の壺で、口頭部から体部上端を残す破片である。体部外面に右下がりのタタキを施し、内面にナデを施す。器壁が厚く、体部内外面に粘土紐の継目を顕著に残す。外面に煤が付着する。

埋土から出土した壺は、いずれも、中型のもので、口頭部から体部上半の破片である。口縁部の端部は、(2062)がわずかに立ち上がり面をもち、(2063)がわずかに垂下面をもつ。前者が体部の外側にハケを施し、後者がナデを施す。両者並に、内面にハケを施す。外面に煤が付着する。2068は、内外面にナデを施す底部片である。

鉢には、直口の楕形のもの(2067)と、耳坏のもの(2065)がある。2067は口縁部破片で外面にナデ、内面に細かなヘラミガキを施す。外面に黒色物質を塗布し、内面に赤色顔料を塗布する。2065は、把手部分の体部破片で、弧状の把手が付く。外面にナデ、内面に細かなヘラミガキを施す。外面に黒色物質を塗布し、内面に赤色顔料を塗布する。

#### 竪穴建物9 周辺a域

(図145)

竪穴建物9の周辺a域は、竪穴建物9の西側の溝54を挟んでさらに西側の遺構面から出土した土器群である。

a域から出土した土器には、鉢2点・高杯1点・器台1点の計4点である。

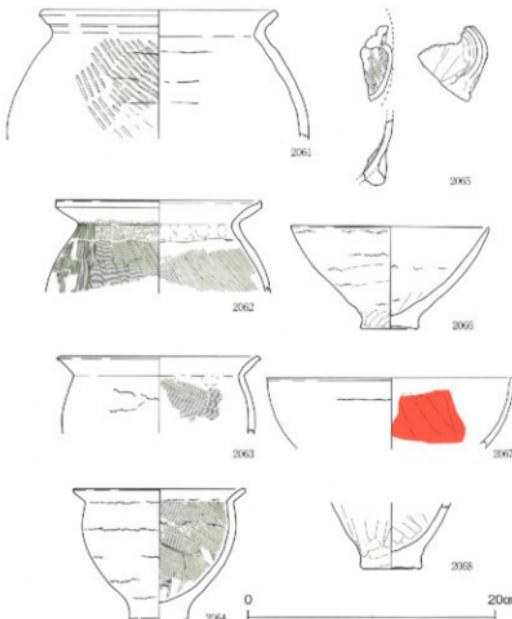


図144 竪穴建物9出土土器

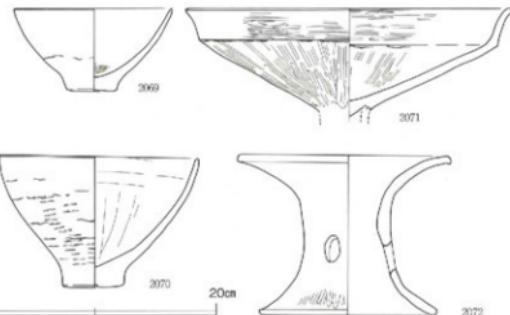


図145 竪穴建物9—周辺a域出土土器

鉢は、いずれも、直口のものである。2069は口径12.7cm・器高7.8cmを測り、内外面にナデを施す。2070は、口径16.4cm・器高10.8cmを測り、体部外間にタタキ、内面にナデを施す。

2071の高坏は、坏部のみを残し、わずかに外反する口縁部に、屈曲し皿状の坏部をもつ有稜のものである。内外面に、ヘラミガキを施す。

2072の器台は、口径16.8cm・器高13.4cm・脚台径13.8cmを測る。外反する口縁部の端部が面をもち、筒状の体部に、裾広がりの脚台の端部が面をもつ。表面摩滅のため、調整が不明である。体部の3方に径約3cmの円形の透かしを穿つ。

#### 竪穴建物10（図146-2073～2076）

竪穴建物10は、東側居住域の南西側の竪穴建物9の南側に隣接する。周堤をもち、2本柱の方形の建物である。外周土坑を北西部と南東部に2基検出した。排水溝は存在しない。

竪穴建物10から出土した土器には、床面から鉢および高坏が各1点、土坑1から鉢が1点、埋土から甕が1点の計4点がある。

2075は、小型の直口鉢で、口径12.0cm・器高6.6cmを測るほぼ完形のものである。外面にタタキ後ナデ、内面にハケを施す。2076の高坏は脚柱部のみを残し、外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。脚注の3方に円形の透かしを穿つ。

2073の鉢は、大型の直口のもので、口径19.8cm・器高25.0cmを測り、約1/3を残す。やや内傾する口縁部の上端部が面をもち、卵形の体部に突出した平底である。内外面にハケ後ナデを施す。体部外間に煤が付着する。この土器は、土坑1の上面および周辺の床面から出土している。

2074の甕は、ほぼ完形の中型の甕で、口径15.2cm・器高23.8cmを測る。短く外反する口縁部がさらに立ち上がり、上端部に面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部に卵形の体部、やや突出する平底である。体部の外面上にハケ後ナデ、内面の体部下半にハケを施す。内面の体部上半に、指押さえおよび粘土紐の継目を顯著に残す。外面の口頸部および体部上半に煤が付着する。

竪穴建物10の外周土坑1からは、土器が出土していない。

#### 竪穴建物10-外周土坑2（図146-2077～2082）

外周土坑2から出土した土器には、壺2点・鉢4点の計6点がある。

壺には、直口壺と長頸壺が各1点がある。2077は口頸部破片で、短く外反する口縁部に筒状の頸部をもつ。内外面に表面摩滅のため、調整が不明である。2078は、口頸部から体部上端の破片で、わずかに開きやや短めの筒状の口頸部をもつ。内外面にナデを施す。

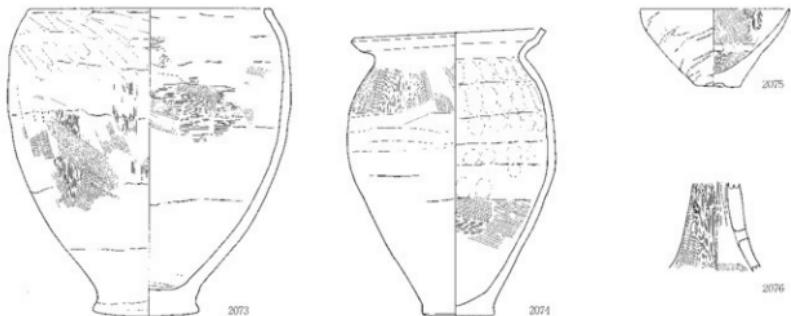
鉢には、直口のものと、外反するものがある。いずれも小型で、2079・2081が3/4を残し、(2080)が2/3を残し、(2082)が4/5を残す。口径約12cm～13cm・器高約7cm～11cmを測る。外面に、2080がハケ後ナデ、(2079・2081)がナデ、(2082)がタタキ後ハケを施す。2079は、外面に粘土紐の継目を顯著に残す。

#### 竪穴建物10 周辺a域（図146-2083～2089）

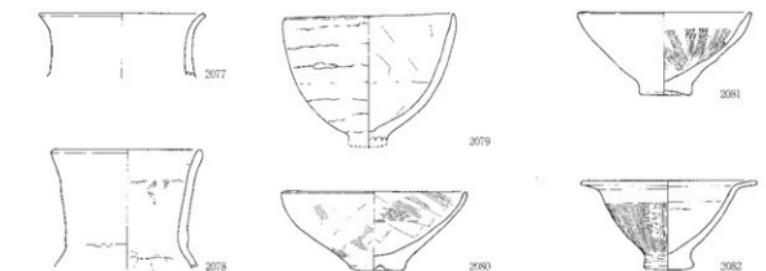
竪穴建物10の周辺a域は、竪穴建物10の南西部の造構面に張り付く土器群である。

ここからは、壺が3点・甕が1点・高坏が1点・器台が2点の計7点である。

壺には、長頸壺(2083)、直口壺(2084)と、体部下半を残すもの(2086)がある。2083は口頸部破片で、やや広がる口頸部をもつ。内外面にヘラミガキを施す。2084は底部を欠損し、やや聞く口縁部に筒状の頸部に、頸部からなだらかに続く球形の体部をもつ。内外面にナデを施し、粘土紐の継目を顯著に残



竖穴建物10



外周土坑2

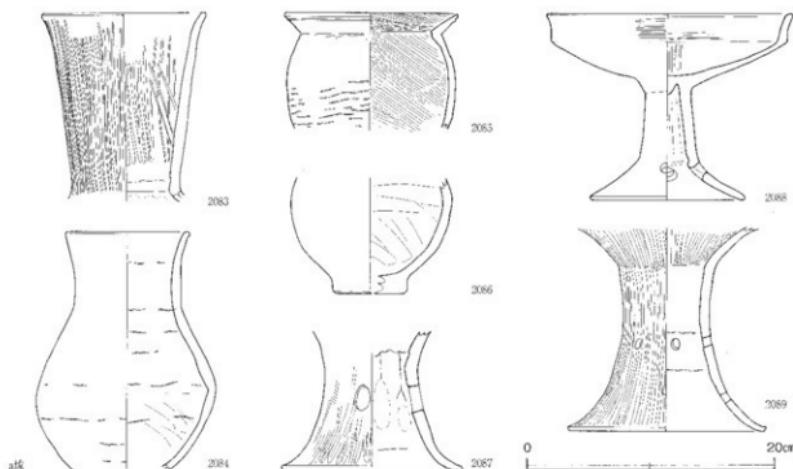


图146 竖穴建物10・外周土坑2、竖穴建物10-周辺a域出土土器

す。2086は、球形の体部に突出する平底をもつ。

2085の壺は、口頸部から体部上半を残す小型のもので、口縁端部に凝凹線紋を1条施す。体部外面にタタキ後ナデ、内面全体にハケを施す。外面に煤が付着する。

2088の高坏は、約2/3を残す有稜のもので、口径19.6cm・器高15.6cmを測り、わずかに外反する口縁部に、屈曲し浅い皿状の坏部、筒状の脚柱部に裾広がりの脚台部をもつ。坏部の内外面にヘラミガキを施す。脚台部の壺3方に円形の透かしを穿つ。

2087・2089の器台は、併に口縁端部を欠損し、筒状の体部に裾広がりの脚台部をもつ。前者が1方に円形の透かしを穿ち、後者が4方交互に2段円形の透かしを穿つ。

#### 井戸10（図147）

井戸10は、西側居住域の中央部やや北寄りに位置し、堅穴建物7と堅穴建物8のほぼ中央に当る。周堤をもつ素掘りの井戸である。

井戸10から出土した土器には、壺が3点・壺が3点・鉢が4点・高坏が6点の他に、壺蓋が1点の計17点である。

壺には、広口壺(2094)と、底部のみの(2105・2106)がある。2094は、口頸部から体部上端の破片で、短く外反する口縁部の端部が、面をもつ。口頸部外面にヨコナデ・体部にヘラミガキ、内面の口頸部にハケ・体部にナデを施す。2105は体部下半から底部の破片で、屈曲し裾窄まりの体部に突出する平底を持つ。体部外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。2106は小型壺の底部で、突出しわずかに中央部が窪む。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

壺には、ハケを施すものがある。2091は、口頸部から体部上半を残し、短く外反する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し、面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部の内面が明確な稜をもつ。口縁端部に凝凹線紋を2条施す。体部の外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。暗褐色をした角閃石を含む生駒内麓産の土器である。2092は、底部の一部を欠損し、口径15.4cm・器高20.0cmを測る中型で、体部外面にタタキ後ハケ、内面上半にヘラケズリ状ナデ・下半にハケを施す。口縁部端部に凝凹線紋を1条施す。体部外面に煤が付着する。2093は、体部下半から底部を残す破片で、外面にタタキ後ハケ、内面にナデを施す。

鉢には、直口のもの(2095)と、外反する口縁部をもつもの(2096・2097)、有孔のもの(2098)がある。

2095は小型の完形で、口径9.0cm・器高6.6cmを測り、体部の内外面にヘラミガキ、底部内面にヘラケズリを施す。2096は小型で約4/5を残し、口径9.2cm・器高7.3cmを測る。内外面にハケ後ナデを施す。2097は小型のほぼ完形で、口径9.2cm・器高13.4cmを測る。わずかに外反する口縁部の端部は尖り気味に終わり、裾窄まりの体部に突出し上げ底である。体部の外面にタタキ後ハケ、内面上半にハケ・下半に指ナデを施す。丈高でやや歪なものである。内外面に粘土粧の縦目を顕著に残す。外面の縦位の相対する2箇所に煤が付着する。2098は約体部2/3を残し、口縁部がわずかに外反し屈曲部内面に稜をもつ。口径17.2cm・器高12.6cmを測る。外面にハケ、内面に内面にナデを施す。この土器は、口縁部と底部に淡桃褐色、体部に淡黄褐色の異種粘土を用いている。

高坏には、形態の把握できるものが無く、ほとんどのものが脚部を残すのみである。2099は、脚台部のみを残し、脚台端部がわずかに立ち上がり面をもつ。2100は、坏底部と脚柱部を残し、外面および坏部内面にヘラミガキを施す。2101~2103は、いずれも、脚柱部を残し、(2103)が、脚柱部に篦描き沈線紋を3条施す。2104は、やや小振りの脚台部を残す。

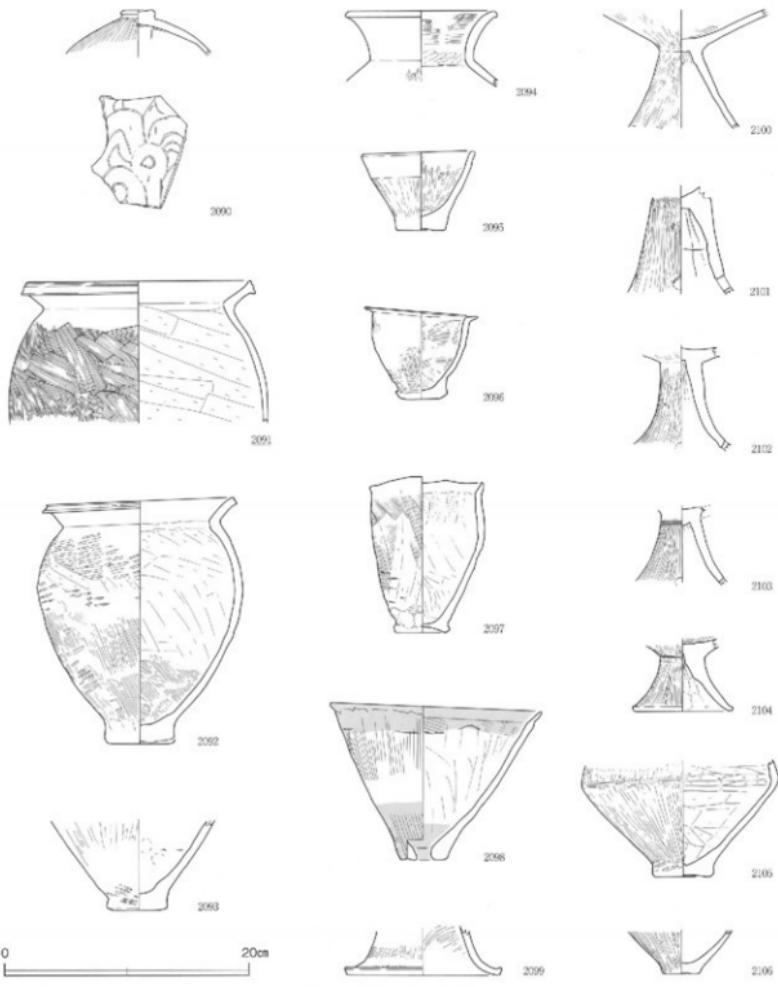


図147 井戸10出土土器

2090は、小型の壺蓋と思われ、口縁部を欠損する。つまみ部が突出し凹面をもち、丸みをもつ体部である。外面にヘラミガキを施す。内面に線刻画を施すが、破片のため、全容は不明である。わずかに赤色顔料が付着することから、本来は、内面全体に塗布されていたと思われる。

#### 井戸10 周堤盛土上 (図148)

井戸10の周堤盛土上から出土した土器には、壺が4点・壺が9点・鉢が1点・高坏が3点・器台が1点と、他に、蓋が1点の計19点である。

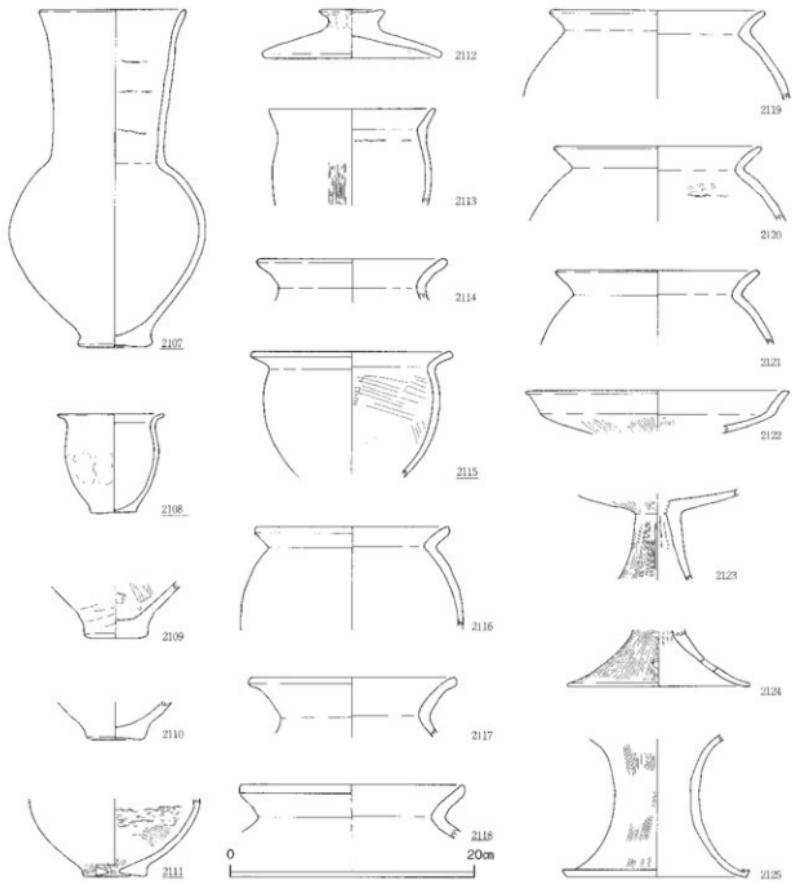


図148 井戸10—周堤盛土上出土土器

壺には長頸壺と、底部のみを残すものがある。2107はほぼ完形で、口径11.6cm・器高28.0cmを測り、やや開く口縁部に筒状の頸部、球形の体部に突出する平底である。内外面に、表面摩滅のため、調整が不明である。暗褐色をした角閃石を含む、生駒西麓産の土器である。2110・2111は、壺の底部と思われ、いずれも突出する平底である。2111は、体部下半から底部を残す小型壺と思われる。外面は表面摩滅のため、調整不明である。内面にハケを施す。暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。底部中央に焼成後の穿孔がある。

甕には全容の分かるものが無く、また、残りが悪いために、調整がわかるものが少ない。いずれも、口頸部破片が多く、小型のもの(2113・2115)、中型のもの(2114・2116)、大型のもの(2118-2121)がある。2115・2118は、暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

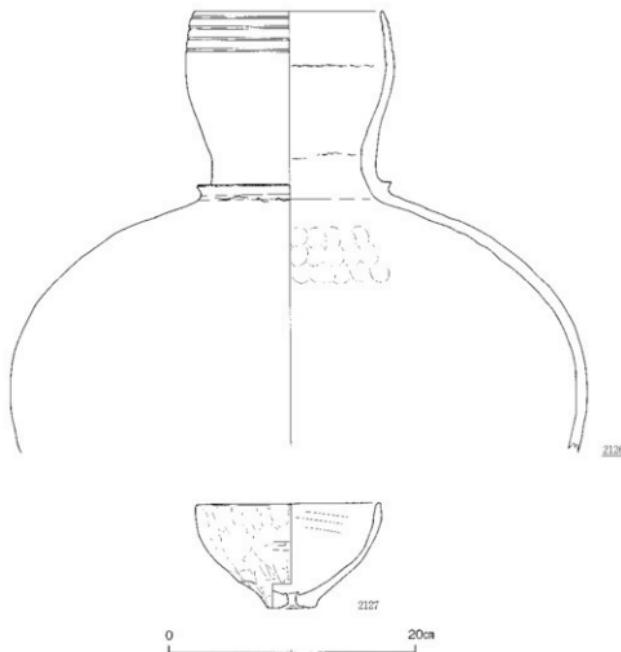


図149 井戸11出土土器

2108の鉢は、外反する口縁部をもつ小型のもので、約4／5を残す口径8.8cm・器高8.4cmを測る。内外面に表面摩滅のため、調整が不明である。暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。高坏には、有段の坏部破片(2122)と、坏底部から脚柱部を残すもの(2123)、脚台部を残すもの(2126)がある。

2125の器台は、口縁端部が欠損し、筒状の体部に、擴広がりの脚台端部がわずかに立ち上がり面をもつ。外面にヘラミガキを施す。

2112の蓋は完形で、口径13.6cm・器高4.1cm・つまみ部径5.2cmを測る。つまみ部は、突出しわざかな凹面をもつ。擴広がりな口縁部の端部が面をもつ。内外面に、表面摩滅のため、調整不明である。

#### 井戸11(図149)

井戸11は、西側住居域の中央部に位置し、井戸11と竪穴建物8との間に当る。搅乱で一部を消失するが井戸10同様に周堤をもつものである。

井戸11から出土した土器には、図示できたものが有孔鉢1点のみで、他に、周堤上から大型の細頭壺が1点である。

2127の有孔鉢は完形で、口径14.8cm・器高8.8cmを測る。内外面にナデを施す。

2126の細頭壺は口頭部から体部上半を残存する。内湾する口縁部の端部が尖り気味に終わり、筒状の頭部に屈曲し球形の体部をもつと思われる。表面摩滅のため、調整は不明である。口縁部に疑凹線紋4

条と頸体部の境目に貼付穴帶を施す。暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

#### 貯木遺構1(図150~152)

貯木遺構1は、西側居住域の東端中央部に位置し、流路3左岸際に当る。

貯木遺構1から出土した遺物は、上・中・下の3層に分けられる。下層からは、木器が出土するのみで、土器は出土していない。上層から出土した土器には、壺6点・甕4点・鉢10点・高杯4点・器台5点の計29点であり、下層から出土した土器には、壺4点・甕1点・高杯1点の計6点である。

#### 上層出土土器(図150・151)

壺には、長頸壺があり、他に、底部(2133)が1点ある。2128は、口頭部のみを残す。わずかに外方へ開く口縁部をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。2129は約2/3を残し、口径11.4cm・器高24.3cmを測る。やや外方へ開く口縁部に、やや細めの筒状の頸部、屈曲してやや偏平の体部、突出する平底である。頸体部の外面にハケ後ヘラミガキ、内面の頸部にハケ・体部にナデを施す。この土器は、流路3出土の土器と接合した。2130は約4/5を残し、口径11.4cm・器高26.2cmを測る。わずかに開く口縁部に筒状の頸部、球形の体部に突出する平底である。外面の頸部にハケ・体部にナデ、内面にナデを施す。肩部から体部下半にかけて継線2条のヘラ記号を施す。底部付近に焼け歪が大きく、体部との境目に亀裂が入る。外面全体に煤が多量に付着する。2131は約3/4を残し、口径15.8cm・器高29.6cmを測る。外反する口縁部にやや太目の筒状の頸部、球形の体部に突出する平底である。外向の頸体部にハケ後ヘラミガキ、内面の頸部にナデ・体部に指ナデを施す。外面に多量に煤が付着する。

2132は完形で、口径9.6cm・器高27.6cmを測る。わずかに外方へ開く筒状の口頭部に、屈曲しやや偏平な体部をもち、突出し中央部がわずかに窪む底部である。外面の口頭部にタタキ後ナデ・内面の体部にハケ、体部にナデを施す。内外面に粘土粙の継目を顕著に残す。外面に煤が付着する。底側部周縁を焼成後、打ち欠く。

2129・2130・2132は、暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

甕には、タタキを施すもの(2134・2135)とハケを施すもの(2136)があり、いずれも、口径が最大径をもつ。他に、台付きのものがある(2137)。2135は、流路3出土の土器と接合した。

2134は中型のもので、口頭部から体部上半を残す。外面に煤が付着する。2135は底部を欠損する小型のもので、外反する口縁部の端部が凹面をもつ。2136は底部を欠損する小型のもので、外反する口縁部の端部が面をもつ。外面に煤が多量に付着する。2137は台部のみを残し、「ハ」の字形にのびる台部の端部下端が面をもつ。

鉢には、外反する口縁部をもつもの、直口のものと、有孔のものがあり、他に、台付のものがある。

外反するものには、中型の(2138)と小型の(2139)がある。前者は口縁部破片で、後者は約2/3を残し、口径14.4cm・器高7.4cmを測る。いずれも、内外面にナデを施す。2138は、流路3出土の土器と接合した。

2148は小型のほぼ完形で、口径12.4cm・器高8.6cmを測る。外方へ開く口縁部に、裾窄まりの体部、突出する平底である。体部の外面にナデ、内面にヘラミガキを施す。口径20.0cm・器高15.6cmを測り、内湾する口縁部の端部が尖り気味に終わる。半球状の体部に、突出しわずかな上げ底である。外面に黒色物質を塗布する。

有孔のものには、口縁部が内湾するものと、外傾するものがある。2142は完形で、口径14.4cm・器高13.7cmを測り、わずかに内傾する口縁部の上端部が面をもつ。半卵形の体部にわずかな平底である。外

面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。内外面に粘土紐の継目を顯著に残す。2143は完形で、口径16.4cm・器高11.8cmを測り、斜め外方へ開く口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し、上縁面をもつ。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。2149は約4／5を残し、口径14.4cm・器高10.6cmを測る。わずかに内湾する口縁部の上端に面をもつ。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。2150は完形の片口で、口径14.8cm・器高10.6cmを測る。わずかに内湾する口縁部の上端に面をもつ。口縁部の一部に抉りを入れ片口にする。この土器は流路3から出土したものと接合した。外面にハケ後ナデ、内面にナデを施す。2151は約4／5を残し、口径12.0cm・器高12.4cmを測る。わずかに内湾する口縁部の上端に面をもつ。内外面伴にナデを施す。2142・2149～2151は、器壁が約8mmと部厚い作りである。

2140は脚台部を欠損する台付鉢で、口径22.4cmを測る。わずかに外方へ伸びる口縁部の端部が丸く終わり、屈曲し皿状の体部に、裾広がりの脚柱部をもつ。外面の口縁部にヨコナデ・体部および脚部にヘラミガキ、鉢部内面にヘラミガキを施し、口縁部にさらに波状紋風のヘラミガキを追加する。

高坏には、椀形のものと、有稜のものがある。

2145は、小型で約2／3を残す。口径6.0cm・器高6.2cmを測る。半球状の壺部に裾広がりの脚部をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。2144は、口縁部の小破片で、外反する口縁部の壺部がわずかに垂下し面をもつ。内外面伴にヘラミガキを施す。2146は脚部のみを残し、脚台端部がわずかに立ち上がり面をもつ。4方に円形の透かしを穿つ。2147は小壺のもので、破損後煤が付着する。

器台には、中型のものがある。2152は口縁部破片で、壺部が垂下し面をもつ。口縁端部に凝凹線紋2条を施す。2153は約4／5を残し、口径18.4cm・器高16.2cm・脚台径14.6cmを測る。外反する口縁部の端部がわずかに垂下する。外面にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ、以下にナデを施す。口縁部および脚台部の壺部に強いナデを施す。体部の4方に2段、円形の透かしを穿つ。2153は約1／2を残し、口径16.4cm・器高15.2cm・脚台径15.0cmを測る。内外面伴に表面摩滅のため、調整が不明である。口縁部と脚台部の壺部に凝凹線紋を各1条施す。2155は約4／5を残し、口径16.2cm・器高14.4cm・脚台径13.2cmを測る。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。口縁部と脚台部の壺部に凝凹線紋を各1条施す。体部の4方に2段、円形の透かしを穿つ。2156は、口縁部を欠損する。口縁部との境目が屈曲し、体部から脚台部にかけて裾広がりにのび、壺部が丸みをもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。3方に2段交互に円形の透かしを穿つ。2153・2155は、暗褐色をした角閃石を含む牛駒西麓産の土器である。

#### 下層出土土器（図152）

壺には、長頸壺と、直口壺、小型広口壺がある。

2158は底部の一部を欠損し、口径13.6cm・器高30.8cmを測る。口縁部がわずかに外反し、壺部が面をもち、筒状の頸部、屈曲し球形の体部に突出する平底である。外面にハケ後ヘラミガキ、口縁部内面にハケ、以下にナデを施す。外面に黒色物質塗布する。2160は完形で、口径10.8cm・器高25.6cmを測る。わずかに外反する口頭部に卵形の体部、突出する底部である。外面にヘラミガキ、内面の口頭部に指押さえ、体部にハケを施す。頸部内面に粘土紐の継目を顯著に残す。

2162は大型のほぼ完形で、口径14.2cm・器高40.0cmを測る。短く外反する口縁部に壺部が面をもち、短い筒状の頸部に、屈曲し球形の体部、底部が突出し平底である。外面にヘラミガキ、内面の口頭部に板状ナデ、体部にハケを施す。内面の体部上半に指押さえを残す。体部外面上には、網籠の痕跡がある。暗褐色をした角閃石を含む牛駒西麓産の土器である。

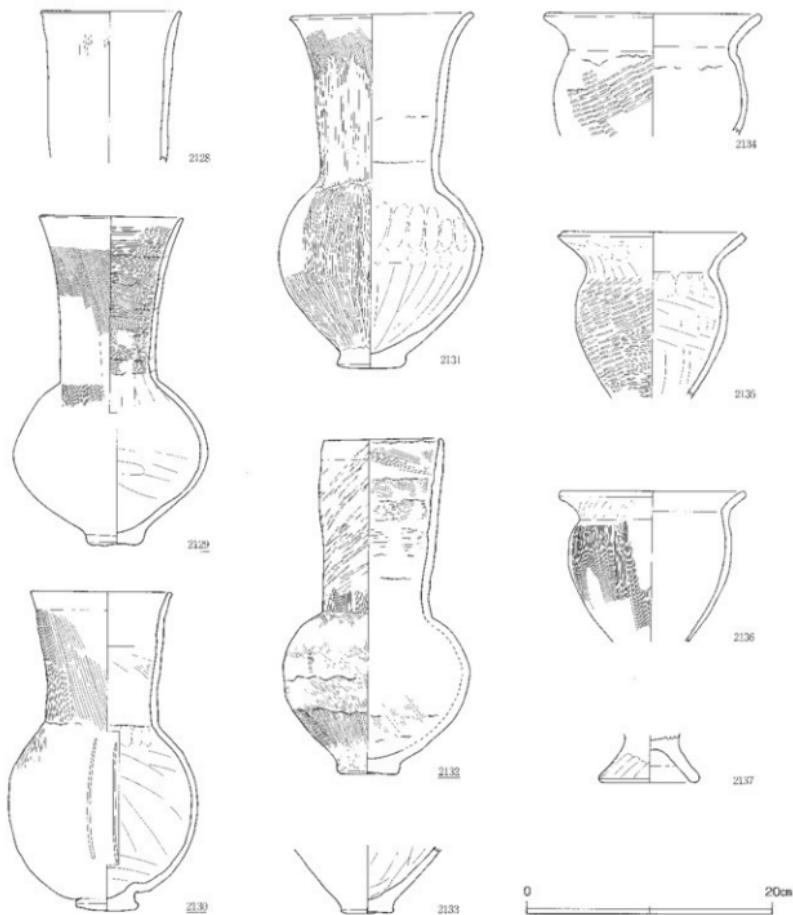


図150 貯木造構1-上層出土土器(1)

2157は完形で、口径8.6cm・器高11.2cmを測る。短く外反する口頭部に屈曲し球形の体部、底部が突出し平底である。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

2159の甕は約1/3を残し、口径11.6cm・器高21.6cmを測る。短く外反する口頭部に屈曲し、卵形の体部に突出しわざかな上げ底である。内外面にナデを施す。外面に煤が付着する。この土器は、溝50出土の土器と接合した。

2161の高杯は有棱の壊部破片で、口径が約31cmと大型である。外反する口縁部の端部が凹面をもつ。内外面にヘラミガキを施す。口縁部のヘラミガキは、波状紋風に施す。この土器は、流路3出土のものと接合した。

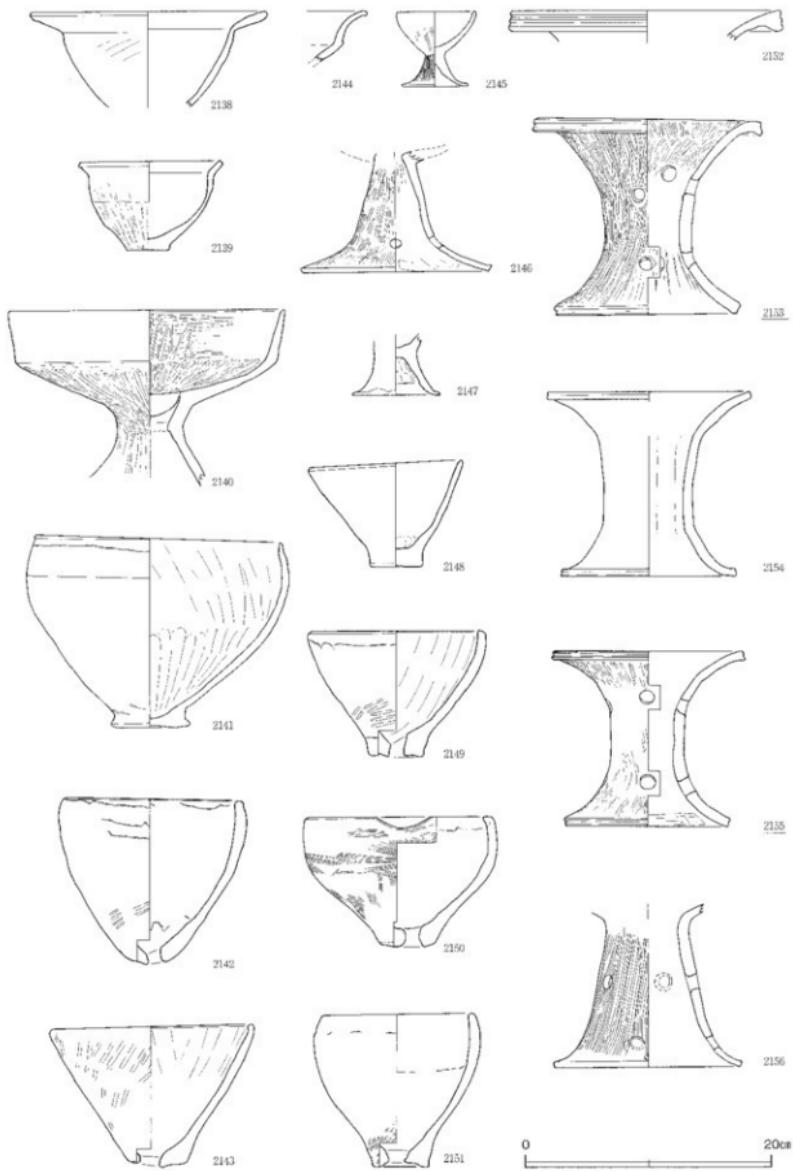


図151 貯木造構1－上層出土土器(2)

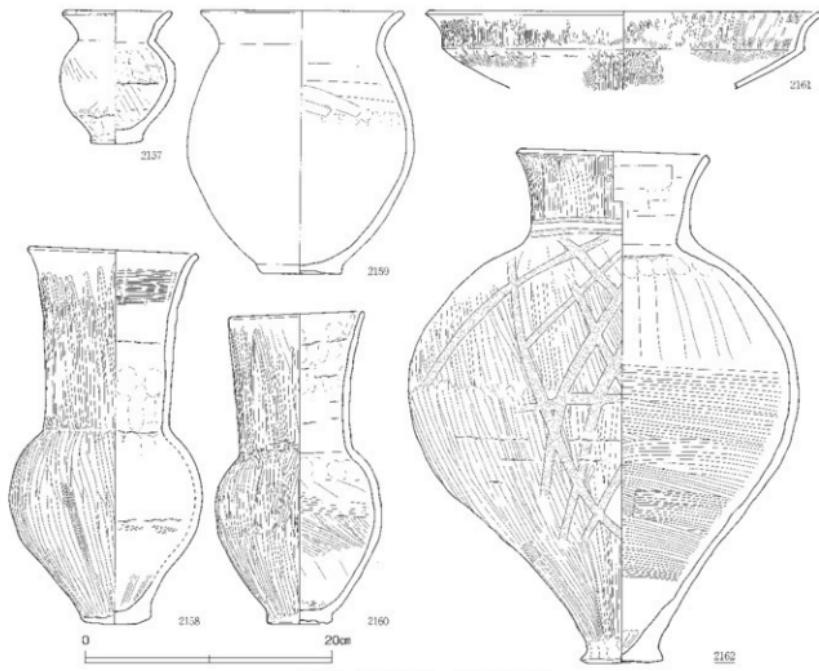


図152 貯木造構1一下層出土土器

以上の上器のうち、(2139・2144・2152)は貯木造構1の北東側の第3面から出土しており、(2134・2136・2138)は肩部から落ち込むように出土している。

#### 溝46 (図153-2163)

溝46は、調査区の東端の水田に伴う溝で、図示できた土器は、壺が1点のみである。

壺は、底部を欠損する中型のもので、口縁部は短く外反しさらに外方へ伸びる。「く」の字状に屈曲する頭部に、卵形の体部である。体部外面にタタキ、内面にナデを施す。体部外面の中央部に煤が付着する。この土器1点で時期を述べるのは困難であるが、弥生時代末～古墳時代初頭のものと考えられる。

#### 溝52 (図153-2164・2165)

溝52は、東側居住域の西側に流れる流路3に沿うように、竪穴建物9付近から谷2に向って南北にのびる溝である。

溝52から出土した土器は、流路3右岸h城付近の溝内から壺が2点接して出土した。

壺は併に完形の細頸壺で、(2164)が口径7.9cm・器高18.4cm、(2165)が口径8.0cm・器高19.6cmを測り、後者はやや口頸部が短い。2164はわずかに外方へ開く口縁部の上端部が面をもち、筒状の頭部から屈曲し偏平な体部、突出し上げ底の底部である。外面の口頸部にハケ後粗いヘラミガキ・体部にヘラミガキ、内面の口頸部にナデ・体部下半から底部にハケを施す。2165はわずかに開く口縁部に、筒状の頭部から屈曲しやや偏平な体部、突出しわざかに中央部を窪ませる底部である。外面にヘラミガキ、内面

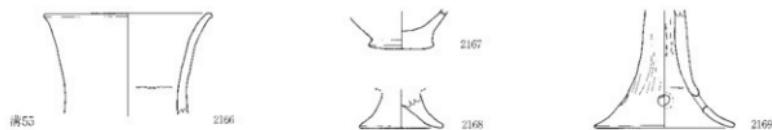
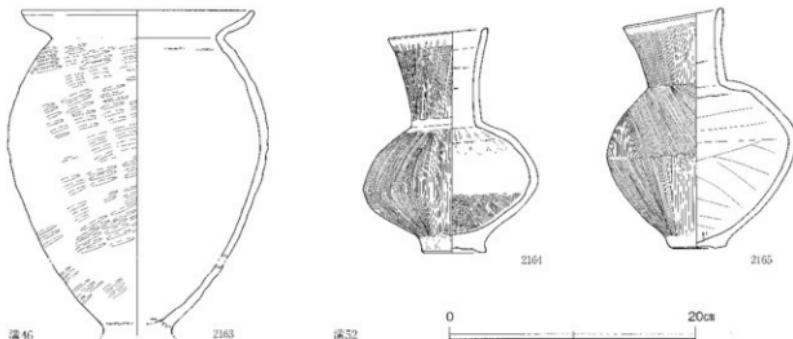


図153 溝46・52・55出土土器

にナデを施す。この土器は、焼け歪が大きい。

**溝55（図153-2166~2169）**

溝55は、東側居住域の北東部の堅穴建物5の約10m南側に位置する東西溝である。

溝54から出土した土器は、長頸壺の口頸部・高环の脚台部が各1点と、底部および脚台部破片が各1点の計4点である。いずれも、小破片である。

**溝54（図154-2170~2186）**

溝54は、東側居住域の南西部の流路3から堅穴建物9の西側を通り、北東にのびる。両側に堤をもつ溝である。

溝54から出土した土器には、壺3点・甕9点・鉢2点・高环2点・甕蓋1点の計17点である。

甕には、広口甕(2172)、長頸甕(2170)と、直口甕(2171)があり、いずれも、口頸部破片である。2172は、短く外反する口縁部の端部が面をもち、短い筒状の頸部をもつ。2170は、わずかに聞く口頸部をもつ。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。2171は大型のもので、短く外反する口縁部が屈曲しさらに上方へ伸びる。内外面に表面摩滅のため、調整が不明である。2170・2171は、暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

甕には、タタキのものと、ハケのものがある。2176は、口頸部から体部上半を残す。短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部の内面に明確な稜をもつ。体部の外面にタタキ、内面に板状ナデを施す。2177は約1/4を残し、口径16.6cm・器高16.6cmを測る。外傾する口縁部に「く」の字状に屈曲する頸部の内面に明確な稜を持ち、卵形の体部、突出する平底である。体部の外面にタタキ、内面にナデを施す。2185は体部下半から底部破片で、外面にタタキ、内面にハケを

施す。

2180・2181は口頭部から体部上端の破片で、短く外反する口縁部の端部が、前者がわずかにつまみ上げられ面をもち、後者がわずかに垂下し面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部の内面に、明確な稜をもつ。2182は口頭部から体部上半を残し、短く外反する口縁部の端部が丸く終わり、「く」の字状に屈曲する頸部内面に明確な稜をもつ。体部外面にタタキ後ハケ、内面にナデを施す。2185・2186は、ミニチュアのもので、いずれも、約4/5を残す。口径5.6cm・7.6cm、器高6.6cm・7.2cmを測る。前者が体部外面に縱方向のタタキ、後者がナデを施す。2179は、底部破片で、内外面にナデを施す。

鉢は、直口のものと、有孔のものがある。2178は小壺で約1/2を残す。口径11.2cm・器高7.2cmを測る。外面にハケ後ナデ、内面にナデを施す。2184は、底部のみを残す。

高杯には、杯底部から脚柱部を残すもの(2175)と、脚部を残すもの(2174)がある。前者は表面摩滅のため、調整が不明である。後者は外面にハケ後ナデを施す。

2175の甕蓋は口縁部を欠損するもので、内外面にハケを施す。内面に煤が付着する。

#### 堤盛土内出土土器 (図154-2187~2198)

堤の盛土内から出土した土器には、壺6点・甕6点の計12点がある。

壺には、広口壺・長頸壺、無頸壺がある。2190は大型のもので、口頭部から体部上端を残す。外反する口頭部に、屈曲し広がる体部をもつ。この土器は、流路2・第3面直上から出土した土器と接合した。2187は口頭部から体部上半を残す。やや外反する口縁部の上端部が面をもつ。筒状の頸部から屈曲し体部にのびる。外面は表面摩滅のため調整不明で、内面の口頭部にハケ後ナデ・体部に指ナデを施す。内面に粘土紐の継目を顯著に残す。2189は口縁部から体部上半を残し、短く立ち上がる口縁部の上端が面をもつ。外面にヘラミガキ、内面に板状ナデを施す。相対する2方に2個1対の紐孔を穿つ。

2188・2191・2192は底部破片で、(2188)のみ調整が明瞭で、他は表面摩滅のため不明である。

甕には少破片が多く、全容の解るものが無い。2193・2194は口頭部破片で、短く外反する口縁部が屈曲しさらに上方にのびる。2195・2197・2198は底部破片で、(2195)のみ内外面にハケを施し、他は不明である。2196は台付甕の台部のみを残し、底部内面に煤が付着する。

#### 凹地1 (図155-2199・2200)

凹地1は、西側居住域の竪穴建物7の西側5mに位置する。

凹地1から出土した土器には、壺・甕が各1点がある。いずれも小片である。2199は大型の直口壺の口頭部で、やや開く口縁部の外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。2200は底部破片で、内外面ともに表面摩滅のため不明である。

#### ピット45 (図155-2201)

ピット45は、西側居住域の南東側に位置する。出土した土器はミニチュアの小型直口鉢が1点のみである。口径8.0cm・器高5.4cmを測る。内外面にナデを施す。

#### 土坑79 (図155-2204~2208)

土坑79は、西側居住域の竪穴建物7の南側約5mに位置する。

出土した土器には、壺3点・甕1点・高杯1点の計5点である。

壺には、直口壺と長頸壺がある。2204はほぼ完形の中型のもので、口径12.2cm・器高25.4cmを測る。わずかに開く口頭部から屈曲して球形の体部に、突出しわざかな上げ底である。体部の外面にハケ後ヘラミガキ、内面にハケを施す。体部内面に粘土紐の継目を顯著に残す。2206は、頸部のみを残し、外面に

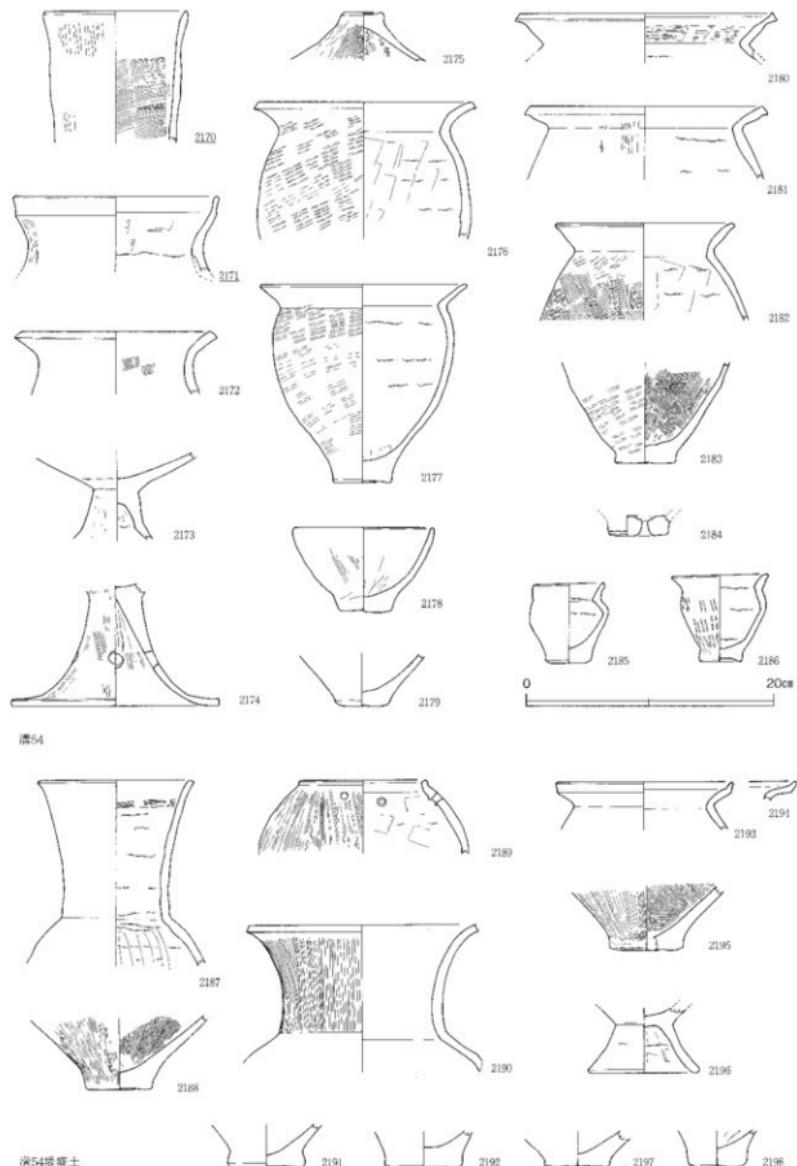


图154 满54·堤盛土出土土器

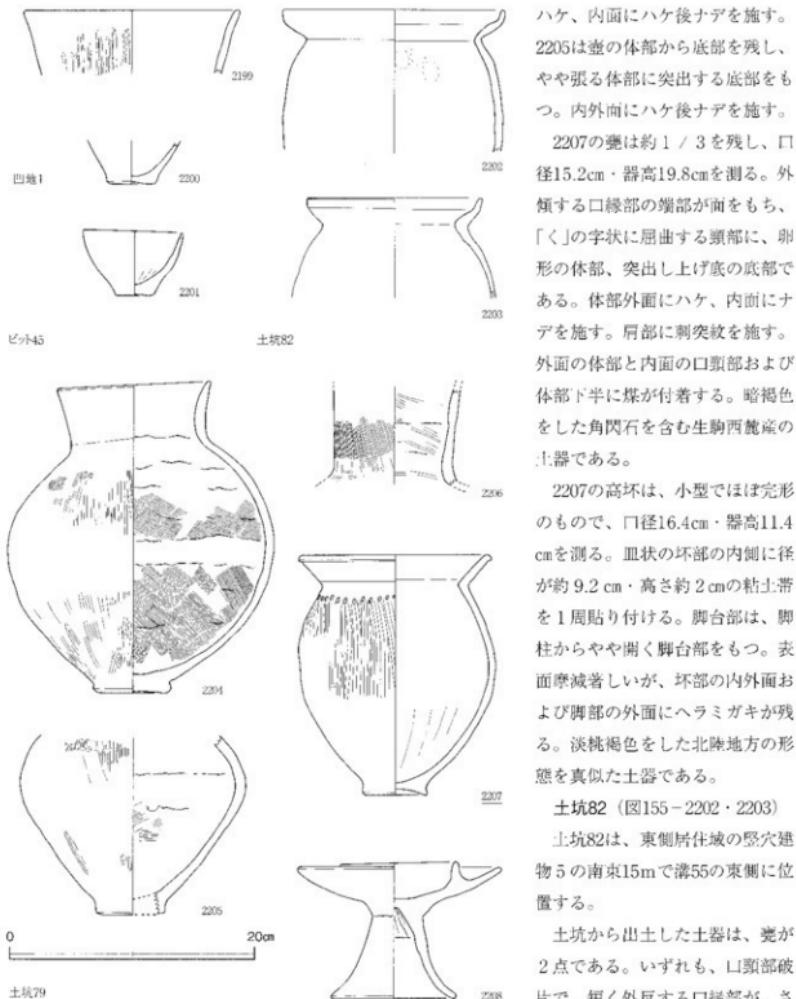


図155 凹地1 土坑79・82 ピット45出土土器

字状に屈曲する頭部をもつ。いずれも、表面摩滅のため、調整不明である。2203は、第3面直上出土の土器と接合した。

谷1は、西側居住域と西端の水田域を区切り、竪穴建物1や竪穴建物3の排水溝が流れ込む。その両岸の肩部付近から土器が出土している。

ハケ、内面にハケ後ナデを施す。  
2205は壺の体部から底部を残し、やや張る体部に突出する底部をもつ。内外面にハケ後ナデを施す。

2207の甕は約1/3を残し、口径15.2cm・器高19.8cmを測る。外傾する口縁部の端部が面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部に、卵形の体部、突出し上げ底の底部である。体部外間にハケ、内面にナデを施す。肩部に刺突紋を施す。外面の体部と内面の口頭部および体部下半に煤が付着する。暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2207の高坏は、小型ではほぼ完形のもので、口径16.4cm・器高11.4cmを測る。皿状の坏部の内側に径が約9.2cm・高さ約2cmの粘土帯を1周貼り付ける。脚台部は、脚柱からやや開く脚台部をもつ。表面摩滅著しいが、坏部の内外面および脚部の外面にヘラミガキが残る。淡桃褐色をした北陸地方の形態を真似た土器である。

土坑82(図155-2202・2203)

土坑82は、東側居住域の竪穴建物5の南東15mで溝55の東側に位置する。

土坑から出土した土器は、甕が2点である。いずれも、口頭部破片で、短く外反する口縁部が、さらに屈曲し、立ち上がる。「く」の

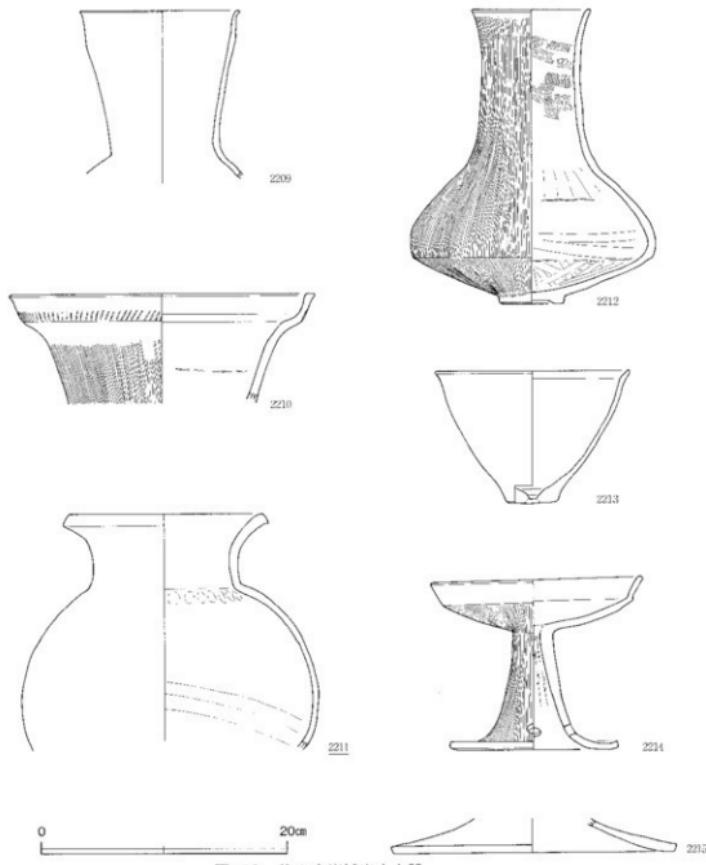


図156 谷1 左岸域出土土器

#### 谷1 左岸域（図156）

谷1の左岸域から出土した土器は、谷を挟んで堅穴建物1の西側付近で検出されており、第3面直上に当る。

図示できたものは、壺4点・鉢1点・高杯が2点の計7点である。

壺には、広口壺と長頸壺、細頸壺がある。

2210は大型の口頸部破片で、外反する口縁部がさらに屈曲し立ちあがる。その端部はわずかに外方へ肥厚し上端面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。口縁部の屈曲部に斜線紋を施す。2211は口頸部から体部上半を残す。短く外反する口縁部の端部が面をもち、短い筒状の頭部に、球形の体部である。内外面に表面摩滅のため調整不明である。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2209の長頸壺は口頸部から体部上端を残す。やや開く口頸部に、端部がわずかに外方へつまみ出され

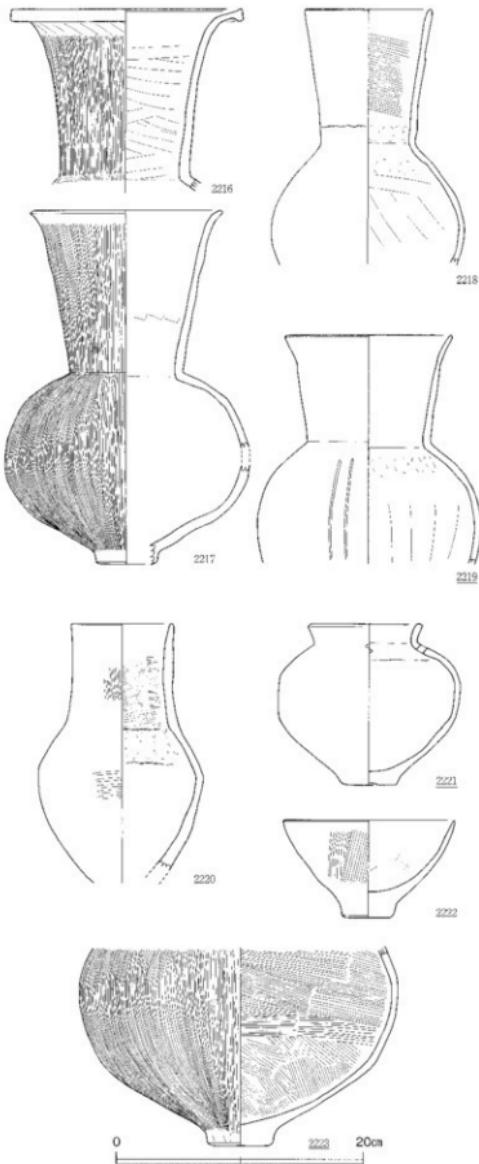


図157 谷1右岸域出土土器

る。内外面に表面摩滅のため、調整不明である。2212の細頸壺は約 $2/5$ を残し、口径9.6cm・器高24.2cmを測る。わずかに開く口縁部に、筒状の頸部からなだらかに広がる体部上半が屈曲し、皿状の体部下半へと続く。底部が突出し上げ底である。外面にヘラミガキ、内面の口縁部上半にハケ・以下に板状のナデを施す。

2213の鉢は約 $1/3$ を残し、口径が15.5cm・器高15.8cmを測る。口縁部がわずかに外反し、口縁部の内面に棱をもつ。裾窄まりの体部に、底部が突出する。内外面に表面摩滅のため、調整不明である。底部中央の内面に円形の突き込みがあり、外面に別の粘土を貼り付ける。

2214の高壺は約 $1/2$ を残す有稜のものである。口径16.8cm・器高14.1cmを測る。短く外反する口縁部の端部が面をもち、皿状の壺部に、やや聞く脚柱部から裾広がりの脚台部で、端部が面をもつ。口縁部内外面にヨコナデ、壺部から脚部の外面にヘラミガキを施す。壺部内面は、表面摩滅のため調整不明である。脚台部の4方に円形の透かしを穿つ。2215は、脚台部のみを残す大型のものである。

#### 谷1 右岸域（図157）

谷1の右岸域から出土した土器群は2箇所あり、その一つは竪穴建物1の排水溝の南側に位置し、もう1箇所は竪穴建物3の周辺である。

竪穴建物1周辺から出土した土器には、長頸壺4点(2216～2219)がある。2216は口縁部を残し、外反する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し、面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にハケ

状ナデを施す。2219は口頸部から体部上半を残す。やや外方へ開く口縁部に短めの頸部、球形の体部をもつ。外面は表面摩滅のため、調整が不明である。内面にナデを施す。体部に竪拂綫2条を施す。

2217は、体部および底部の一部を欠損し、口径15.2cm・器高29.1cmを測る。やや外方へ開く口頸部に、屈曲しやや偏平な体部、突出する底部をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。肩部に綫2条のヘラ記号を施す。2219は口頸部から体部上半を残す。わずかに開く口頸部に球形の体部をもつ。外面は表面摩滅のため調整不明である。内面の口頸部にハケ・体部にナデを施す。暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

堅穴建物3周辺から出土した土器には、長頸壺・短頸壺・壺底部・鉢が各1点の計4点がある。

2221は、短く立ち上がる口頸部にやや偏平な体部、突出し中央部がわずかに窪む底部である。内外面に、表面摩滅のため調整不明である。肩部の2方に円孔を穿つ。2220は底部を欠損し、筒状の口縁部にわずかに裾が開く頸部、卵形の体部をもつ。外面は表面摩滅著しくわずかにヘラミガキが残る。内面の口頸部にハケ・体部にナデを施す。2223は体部下半から底部を残し、球形の体部に突出する平底である。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。2221・2223は、暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2222は約3/4を残し、口径13.6cm・器高8.0cmを測る。直口の小型のもので、突出する平底をもつ。内外面にハケを施す。

#### 溝47~49周辺（岡158~160）

西側居住域の南西部の溝48の南側と、溝48・49の合流部付近で検出された土器群である。これらから出土した土器には、壺9点・甕10点・甕蓋1点・鉢3点・高杯5点・器台1点の計29点である。

壺には、広口壺・長頸壺がある。

2224は中型のもので、外反する口縁部の端部が下方へ肥厚し面をもつ。短い筒状の頸部に球形の体部をもつ。内外面とも表面摩滅のため調整不明である。外面に煤が付着する。2225・2226は中型のもので、口頸部から体部を残す。短く外反する口縁部がさらに上方へ立ち上がる。筒状の頸部に球形の体部である。2225は内外面に表面摩滅のため調整不明である。2226は、外面の頸部にヘラミガキ・体部に斜格子タタキ後ナデ、内面にナデを施す。内外面に煤が付着する。

2228~2232は大型のもので、いずれも口頸部を残す。外反する口縁部の端部が垂下し面をもち、筒状の頸部である。2228・2230は、外面にハケ後ヘラミガキ、(2229)がハケを施す。2228・2229は、口縁部端部に竹管紋・頸体部の境目に貼付突帯上刻み日を施し、(2230)は口縁部端部に竪凹線紋2条を施す。2231は、口頸部から体部上半を残し、外反する口縁部の端部が垂下し、面をもち、短い筒状の頸部から屈曲し広がる体部である。外面にハケ後ヘラミガキ、内面にナデを施す。口縁部端部に竪凹線紋2条を施す。2232は体部中央から底部を残し、球形の体部に突出する平底である。外面にハケ後ヘラミガキ、内面下半にハケを施す。内外面に煤が付着する。2231・2232は直接接合をしなかったが、形態・調整などから同一個体と思われる。

2227は口頸部を残し、外反する口縁部に筒状の頸部である。内外面にハケを施す。

甕には、タタキのものとナデのものがある。2234は、口頸部から体部上半を残す大型のもので、短く外反する口縁部がさらに屈曲し立ち上がり、上端面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部の内面に、明確な稜をもつ。体部の外面にタタキ、内面にハケおよびナデを施す。肩部に刺突紋を1周させる。二次焼成を受ける。2235は口頸部から体部上半を残す。短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し凹向をも

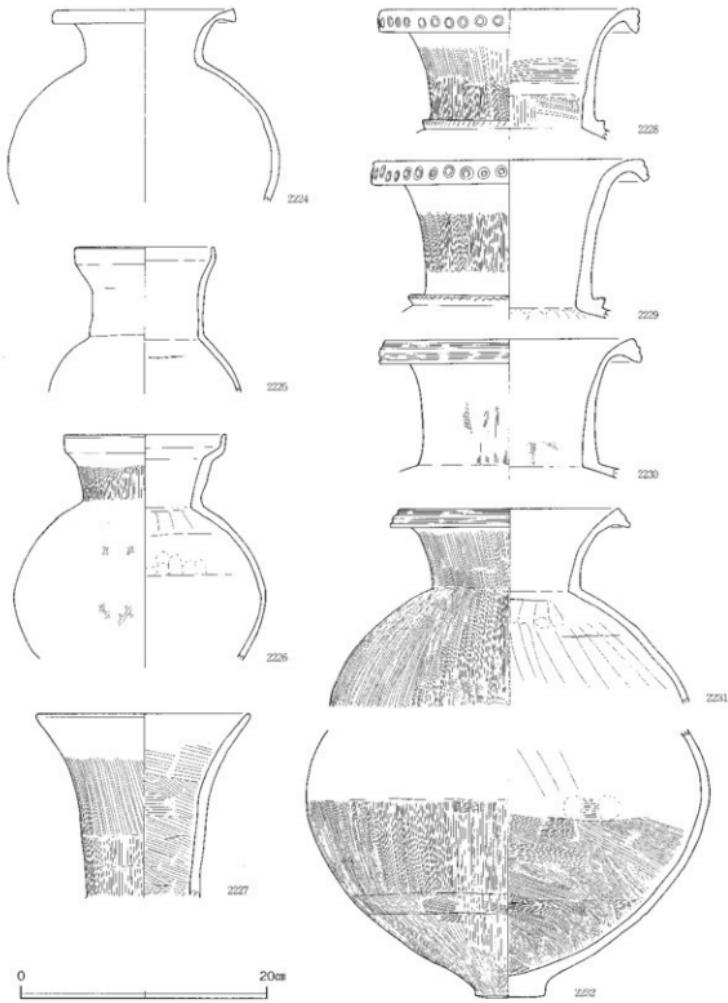


図158 満47~49周辺域出土土器(1)

つ。「く」の字状に屈曲する頸部である。体部の外面にタタキ、内面にナデを施す。2236は口頸部から体部上端を残し、短く外反する口頸部の端部が面をもつ。体部の外面にタタキ、内面にナデを施す。2237は約 $4/5$ を残し、口径13.6cm・器高16.7cmを測る。短く外反する口縁部の端部は丸く終わり、「く」の字状に屈曲する頸部の内面が明瞭な稜をもつ。卵形の体部にやや突出し上げ底である。外面にタタキ、内面にヘラケズリを施す。内面肩部および底部に指壓さえを残す。体部下端に焼成後の穿孔がある。体

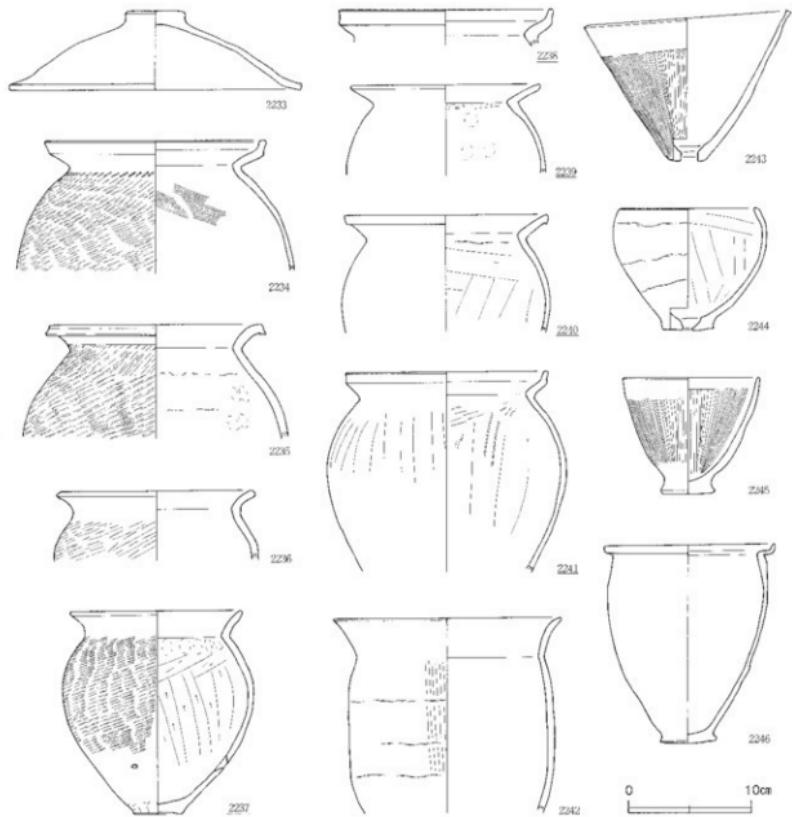


図159 溝47~49周辺域出土土器(2)

部外面に煤が付着する。

2238は口頸部破片で、外反しさらに屈曲して立ち上がる口縁部に、「く」の字状に屈曲する頸部の内面が明瞭な稜をもつ。2239は口頸部から体部上半を残し、外傾する口縁部に、「く」の字状に屈曲する頸部をもつ。体部の外面は表面摩滅のため調整不明である。内面の肩部にハケ・以下にナデを施す。2240は口頸部から体部上半を残す。外傾する口縁部の端部がわずかに垂下し、面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部である。体部の外面にナデ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。外面に煤が付着する。2241は体部下端および底部を欠損し、短く外反しさらに屈曲して立ち上がる口縁部の上端が面をもつ。「く」の字状に屈曲する頸部に、肩の張る体部である。体部の外面にハケ状ナデ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。2242は体部下端および底部を欠損し、外反する口頸部に、寸胴形の体部をもつ。内外面に表面剥離のため調整不明である。外面にヘラミガキか。外面に煤が付着する。口頸部から体部上半にかけて淡茶褐色の粘土に茶褐色の粘土がマーブル状に混じり、体部下半に茶褐色の粘土帯を用い、異種の粘土を使用



図160 満47~49周辺域出土土器(3)

する。2246はほぼ完形で、口径13.8cm・器高16.5cmを測る中型のもので、短くほぼ垂直にのび、さらに屈曲し立ち上がる口頭部から屈曲し卵形の体部、突出し平底である。内外面に表面剥離のため、調整不明である。二次焼成を受ける。2237~2241は、暗褐色をした角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2233の壺蓋は約1/4を残し、口径23.4cm・器高6.5cmを測る。わずかに突出し平坦部をもつまみ部から頗広がりにのびる体部、外反する口縁部の端部が面をもつ。内外面に表面摩滅のため調整不明である。

鉢には、直口のものと、有孔のものがあり、(2245)は約1/3を残し、口径11.0cm・器高9.6cmを測る。わずかに開く口縁部に裾窄まりの体部、突出し平底である。内外面にヘラミガキを施す。2244は約4/5を残し、口径10.4cm・器高10.0cmを測る。内溝する口縁部の上端が面をもち、半球状の体部に突出する底部の中央に穿孔する。外面にナデ、内面にハケ状ナデを施す。外面に粘土紐の総目を顯著に残す。2243はほぼ完形で、口径16.1cm・器高12.4cmを測る。斜め外方へ伸びる口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し、上端面をもつ。裾窄まりの体部に平底の中央部に穿孔する。外面の口縁部にヨコナデ、体部にヘラミガキ、内面にナデを施す。

高坏には、有稜のものがある。2247は大型の坏部破片で、口径が約43cmある。口縁部がわずかに外方へのび、上端が面をもつ。外面にハケ、内面にハケ後ヘラミガキを施す。2248は坏部を約1/4残す。

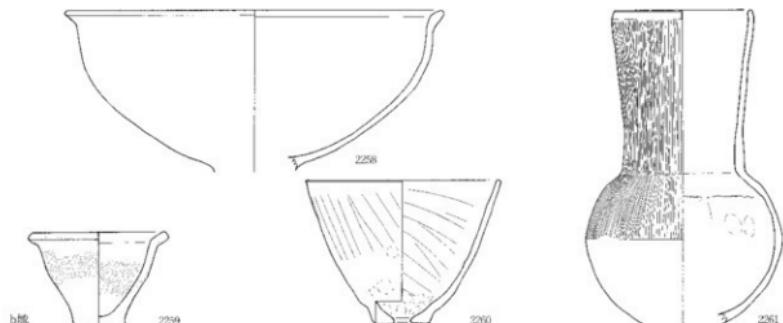
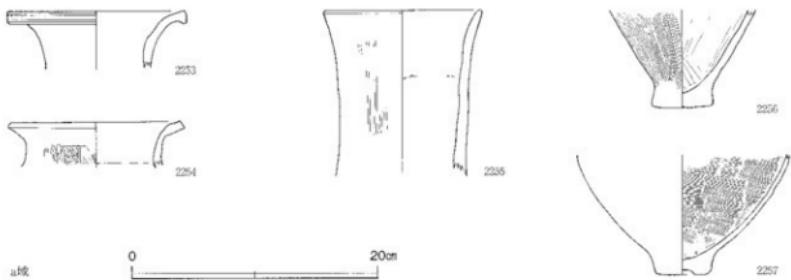


図161 西側居住域－a・b域出土土器

外面は表面摩滅のため調整不明である。内面の坏部にヘラミガキを施す。2249は脚台部を欠損し、わずかに外方へ開く口縁部に、屈曲し浅い椀形の坏部、煤広がりの脚柱部をもつ。坏部外面および脚部の外面にヘラミガキを施す。口縁部に疑凹線紋を1条施す。脚部の4方に凸形の透かしを穿つ。2251は約4/5を残し、口径22.2cm・器高14.2cmを測る。外反する口縁部の瓣部が外方へわずかに肥厚し、面をもつ。皿状の杯底部に、裾広がりのやや低い脚台部の端部が面をもつ。外面の口縁部にヨコナデ・坏部以下にヘラミガキ、坏部内面にヘラミガキを施す。2250は約3/5を残し、口径24.0cm・器高18.1cmを測る。外方へ開く口縁部の端部が尖り気味に終わる。浅い椀状の坏部に、裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。内外面共に表面摩滅のため調整不明である。脚台部端部の内面に強いヨコナデを施す。脚台部に4方交互に2段の凸形の透かしを穿つ。

2252の器台はほぼ完形で、口径19.3cm・器高16.3cm・脚台径13.6cmを測る。外反する口縁部の端部が上下に肥厚し面をもち、筒状の体部に裾広がりの脚台部である。外面および口縁部の内面にヘラミガキを施し、内面の体部および脚台部にナデを施す。口縁部端部に半円状の竹管紋・4個1組の円形浮紋を4箇所、脚台端部に疑凹線紋1条を施す。

以上、遺構出土の土器を主に、概観してきた。

以下に、第3面直上および流路3・谷2の肩部から出土した土器群を記述していく。

第3面直上から出土した土器は、流路3を挟んで、大きさは西側居住域と東側居住域に区分される。遺構周辺から出土した土器群に関しては、各遺構と併せて述べてきたが、ここでは、遺構から距離を置く土器群について述べることとする。

西側居住域には、a・b 2箇所の土器群がある。

西側居住域 a域 (図161-2253~2257)

西側居住域のa域は、堅穴建物1・2・3・4・7のはば中に位置し、井戸10の北西10m付近である。

この域から出土した土器には、壺3点・甕2点の計5点がある。

壺には広口壺・長頸壺があり、いずれも、口頸部破片である。2253は外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもつ。内外面併に表面摩滅のため、調整不明である。口縁部端部に縦凹線紋2条を施す。2254は、短く外反する口縁部の端部が面をもち、短い筒状の頸部である。外面頸部にハケ後ヘラミガキを施す。内面は、表面剥離のため調整不明である。2255の長頸壺はわずかに開く口縁部に、筒状の頸部である。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

甕は、いずれも、底部破片である。2256は突出する平底で、外面にハケ、内面にナデを施す。2257は突出する底部の中央がわずかに窪む。外面にナデ、内面にハケを施す。

西側居住域 b域 (図161-2258~2261)

b域は、堅穴建物4の南側約10mに位置する。出土した土器は、壺1点・鉢3点の計4点である。

2261は長頸壺で、底部を欠損する。わずかに開く口縁部にやや偏平な体部をもつ。外面の口縁部端部に強いヨコナデ・口頸部から体部上半にヘラミガキ・体部下半にナデ、内面の口頸部にナデを施す。体部内面は、表面摩滅のため調整不明である。

鉢には、外反するものと有孔のものがある。

2258は大型のもので、底部を欠損する。短く外反する口縁部に、半球状の体部をもつ。外面にナデ、内面にヘラミガキを施す。2259は小型で約1/3を残し、口径10.6cm・器高7.8cmを測る。短く外反する口縁部の端部が面をもち、裾窄まりの体部に突出する底部の中央がわずかに窪む。内外面併にナデを施す。この土器は、灰白色の粘土に、黄褐色の角閃石を含む生駒西麓産の粘土を帯状に挟む。

2260の有孔鉢は約1/3を残し、斜め外方に開く口縁部の上端部が面をもち、裾窄まりの体部に突出する底部である。外面の上半にハケ状ナデ・下半に指押さえ、内面に指ナデを施す。底部内面に、指押さえを残す。

流路3は、調査区の東より中央部を、南から北へ弧を描き流れる。西側居住域と東側居住域を区分する流路で、その両肩には落ち込むように多量の土器が検出されている。ここでは、大きく、西側居住域に伴う左岸側と東側居住域に伴う右岸側に2分して観ていくこととする。

流路3の左岸から出土した土器を、さらに出土地点によって、北からa域~k域の11区分している。

流路3左岸 a域 (図162)

a域は、堅穴建物7の南側に位置する。土器には、壺2点・甕2点の計4点がある。

壺には、細頸壺と無頸壺がある。2262は約2/5を残し、口径12.5cm・器高27.8cm・底径4.4cmを測る。やや外反する口縁部に筒状の頸部、屈曲し扁平な体部に、突出するわずかな上げ底である。頸部体部の外面にハケ後ヘラミガキ、内面の頸部にハケおよびナデ・体部中央から底部にハケを施す。肩部内面

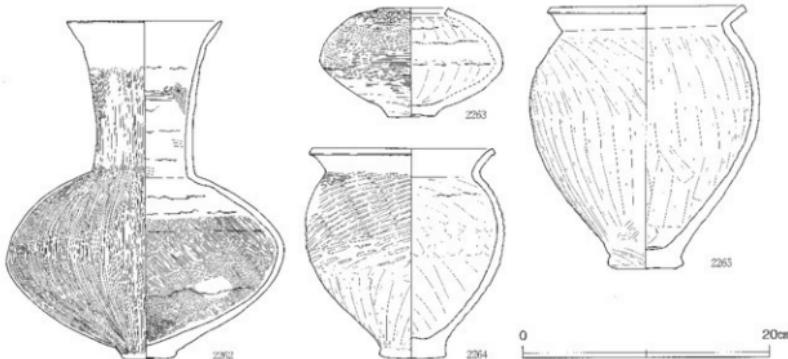


図162 流路3左岸-a域出土土器

に指押さえを、内面に粘土紐の継目を顕著に残す。2263は完形で、口径5.7cm・器高8.9cmを測る。内傾する口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ凹面をもつ。偏平な体部に、突出しわざかな上げ底である。口縁部端部に未成形の部分が残っていることから、再調整を加えたものと考えられる。外面体部に細かいヘラミガキ・底部にヘラケズリ、内面に指ナデを施す。内面に粘土紐の継目を顕著に残す。肩部に籠描き波状紋間刺突紋を施す。外面に煤が付着する。

壺にはタタキのものとヘラケズリのものがあり、いずれも、中型のものである。2264は約1/2を残し、口径14.3cm・器高17.4cmを測る。口縁端部がわずかに垂下し面をもつ。外面体部にタタキ後下半にヘラケズリ、内面ハケ状ナデを施す。2265は約4/5を残し、口径15.5cm・器高21.6cmを測る。口縁部の端部がわずかに垂下し面をもつ。外面体部にタタキ後ヘラケズリ・底部にヘラケズリ、内面にヘラケズリを施す。いずれも、外面に煤が付着する。

#### 流路3左岸 b域 (図163・164)

b域は、竪穴建物8の北東部に位置し、肩部の斜面に張り付くように出土した土器群と下部の当時の底面から出土した土器群がある。

#### b域肩部から出土した土器には、壺2点・甌7点・鉢1点・高坏2点・器台1点の計13点がある。

甌には、長頸甌と紋様破片がある。2271は完形で、口径11.6cm・器高26.3cmを測る。わずかに聞く口縁部に屈曲し、やや肩の張る体部で、わずかに突出する平底である。外面頸体部にハケ後体部下半にナデ、内面の頸部にナデ・体部下半にヘラミガキを施す。体部外面および頸部内面に、粘土紐の継目を残す。焼け亞がある。2266は大型甌の肩部破片で、外面にヘラミガキ、内面に指押さえを残す。竹管紋・列点紋・櫛描直線紋・竹管紋・二重竹管紋をヘラ描き弧紋で連続させる・竹管紋3個1組・直線紋を施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

甌には、タタキのもの、ハケのもの、ヘラケズリのものと、ナデのものがある。2273は小型で口縁部の端部が面をもつ。体部の外面にタタキ、内面にハケ状ナデを施す。外面に煤が付着する。2274は底部を欠損する中型で、口縁端部が凹面をもつ。外面の体部にタタキ、内面にハケを施す。外面に煤が付着し、二次焼成を受ける。

2268は上半を残し、口縁部端部が面をもつ。体部外面にヘラケズリ、内面にハケを施す。外面に煤が

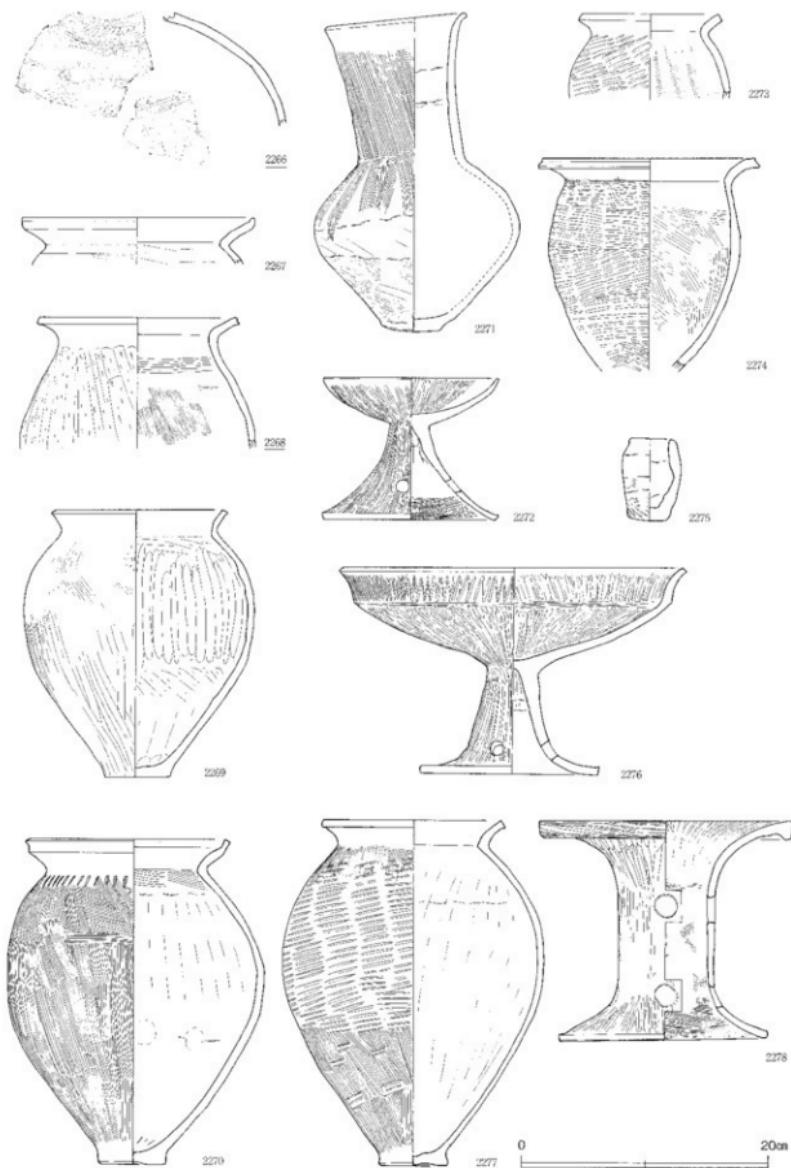


図163 流路3左岸-b域肩部出土土器

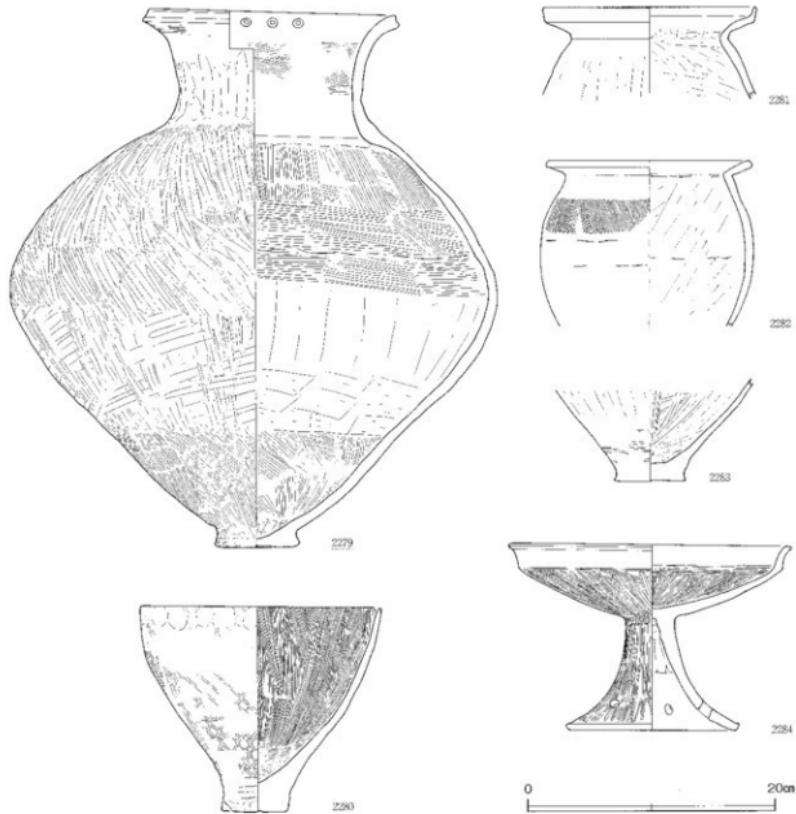


図164 流路3左岸-b域下部出土土器

付着する。暗褐色の角閃石を含む牛駒西麓産の土器である。

2267は口頸部から体部上端を残し、口縁端部が立ち上がり面をもつ。体部外面にハケ、内面に板状ナデを施す。2277は約1/2を残し、口径14.2cm・器高28.3cmを測る。口縁端部が面をもつ。体部外面にタキ後肩部と下半にハケ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。外面底部を除き煤が付着し、内面体部下位に炭化物が付着する。

2270は約2/3を残し、口径16.0cm・器高27.0cmを測る。屈曲する口縁部の端部が面をもち、屈曲する頸部の内面が明確な棱になる。体部外面にハケ、内面の肩部にハケ、以下にナデを施す。肩部に斜線紋を施す。外面の体部中央に指押さえ・粘土紐の縦目を残す。外面に煤が付着し、内面の底部に炭化物が付着する。

2269は約1/2を残し、口径14.8cm・器高22.0cmを測る。口縁端部がわずかに外方へ肥厚し、面をもつ。体部外面上半にハケ後ナデ・下半にハケ状ナデ、内面上半に指ナデ・中位にヘラケズリ・下位にナ

デを施す。外面・内面の肩部以下に、煤が多量に付着する。

鉢はミニチュアの完形のものがあり、口径 3.1 cm・器高 6.8 cm を測る。内傾する口縁部に寸胴形の体部に平底である。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す(2275)。

高坏には、楕形のものと有稜のものが各 1 点ある。2272は約 3 / 5 を残し、口径 14.2 cm・器高 11.7 cm を測る。内外両面にヘラミガキを施す。脚台部の 3 方に円形の透かしを穿つ。2276は約 1 / 2 を残し、口径 28.2 cm・器高 17.1 cm を測る。口縁端部が面をもち、浅い楕形の杯部に、裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。杯部内外面および脚部外面にヘラミガキ、脚部内面にナデを施す。口縁部の外面に波状紋風のヘラミガキを追加する。脚台部の 3 方に円形の透かしを穿つ。

2278の器台は約 4 / 5 を残し、口径 20.5 cm・器高 18.0 cm・脚台径 16.6 cm を測る。外反する口縁端部が垂下し面をもち、筒状の体部に裾広がりの脚台端部が面をもつ。外面にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ、以下にハケを施す。体部の 4 方に 2 段円形の透かしを穿つ。

b 域下部から出土した土器には、壺 1 点・甕 3 点・鉢 1 点・高坏 1 点の計 6 点がある。

2279の壺は、広口壺で約 4 / 5 を残す大型である。口径 20.0 cm・器高 44.3 cm を測る。口縁端部が凹面をもち、筒状の頸部に、算盤玉形の体部、突出しわざかな上げ底である。外面頸部にヘラミガキ、体部上半にハケ後ヘラミガキ、下半上位にタタキ後ヘラミガキ、下位にハケ、内面の頸部の上半にハケ、中位に指ナデおよびヘラケズリ、下位にハケ、底部にヘラケズリを施す。口縁部の内面に崩れた竹管紋 3 個を施す。体部外面に煤が付着する。体部外面に編み籠の痕跡を残す。暗褐色の角閃石を含む生胸西藍産の土器である。

甕には、ナデのものとハケのものがある。2281は口縁部が屈曲しさらに立ち上がる。外面にナデ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。2282は、口頸部から体部上半を残す。口縁端部が面をもち、頸部内面に明確な稜をもつ。体部外面にタタキ後ハケおよびナデ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。2283は体部下半から突出する平底を残し、外面にタタキ後板状ナデ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。

2280の鉢は約 4 / 5 を残し、口径 19.5 cm・器高 17.1 cm を測る。直口のやや大型で、体部外面に斜格子タタキ後ナデ、内面にハケを施す。

2284の有稜高坏はほぼ完形で、口径 22.1 cm・器高 15.5 cm を測る。口縁部の罐部がわずかに外方へ肥厚し上端面をもつ。裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。口縁部内外面にヨコナデ、杯部内外面および脚部外面にハケ後ヘラミガキを施す。脚部の 5 方に円形の透かしを穿つ。黄褐色をしたやや厚みがあるものである。

c 域は、堅穴建物 8 の排水溝周辺の土器群で、さらにその出土状況から 3 群に区分できる。c - 1 域は排水溝直下に位置し、c - 2 域は排水溝南側の肩部、c - 3 域はさらに南側に位置する。

流路 3 左岸 c - 1 域 (図 165・166・2296~2304)

c - 1 域から出土した土器には、壺 2 点・甕 9 点・鉢 7 点・高坏 2 点の計 20 点がある。

壺には、直口壺と長頸壺がある。2285は約 4 / 5 を残し、口径 9.6 cm・器高 16.8 cm の中型である。直口の口縁部の上端が面をもち、外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。内面に粘土紐の継目を顯著に残す。外面に多量の煤および内面の体部下半に炭化物が付着する。2286の長頸壺はほぼ完形で、口径 10.6 cm・器高 27.3 cm を測る。外面の口縁部にヨコナデ・頸体部上半にヘラミガキ・下半にハケ、内面の口縁部にヨコナデ・頸体部にナデを施す。頸体部に指押さえおよび粘土紐の継目を残す。肩部に縦線 2 条の

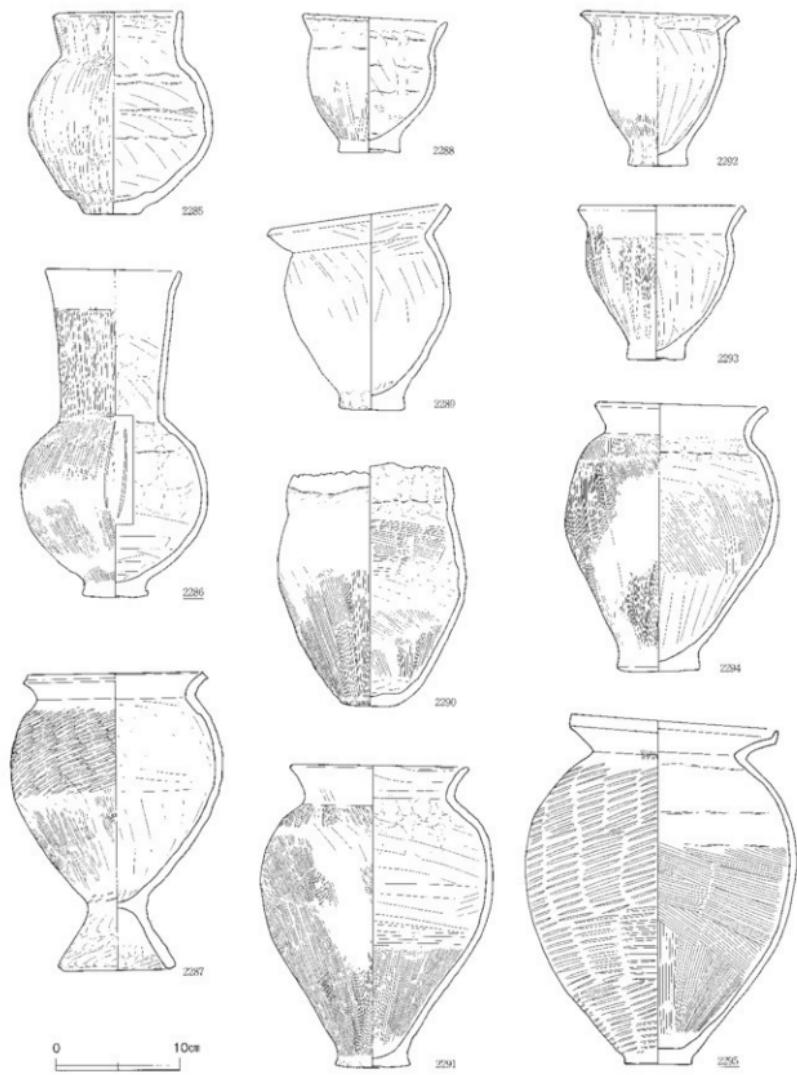


図165 流路3左岸-c-1域出土土器

ヘラ記号を施す。暗緑褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

甕には、タタキのものとハケのもの、ナデのものがある。

2295はやや大型で約4／5を残し、口径16.7cm・器高28.8cmを測る。口縁部が屈曲しさらに立ち上がり面をもつ。体部の外面にタタキ、内面の上端にナデ・中位以下にハケを施す。外面の口頭部から体部中位にかけて煤が多量に付着する。内面全体に煤、体部下位に炭化物が付着する。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2289はやや小型で約2／5を残し、口径14.5cm・器高17.0cmを測る。わずかに内湾気味にのびる口縁端部が面をもつ。体部の外面にハケ後ナデ、内面にハケ状ナデを施す。底部外面を除き煤が付着し、内面体部下半に多量の炭化物が付着する。2293は約4／5を残す小型で、口径13.0cm・器高12.8cmを測る。口縁端部が面をもち。体部外面にハケ、内面にハケ状ナデを施す。煤が付着していないことから鉢の可能性もある。2288はほぼ完形の小型で、口径11.6cm・器高11.5cmを測る。外傾する口縁部は指によりつまみ出され、わずかに屈曲する頸部である。体部の外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。口縁部内外面に指押さえを残す。全体に煤が付着するが、外面の口頭部から体部にかけて多量である。2292は小型のほぼ完形で、口径12.3cm・器高12.9cmを測る。口縁端部が面をもち、頸部の内面に明確な稜をもつ。外面の口頭部にヘラケズリ状ナデ・体部上半にハケ後ナデ・下半にハケ後一部にヘラミガキ、内面の口縁部にハケ・体部にハケ状ナデを施す。外面にわずかに煤が付着する。

2287は、中型の台付甕で約4／5を残し、口径14.0cm・器高24.4cmを測る。外反する口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ凹面をもち、「く」の字状に屈曲する頭部の内面が明確な稜をもつ。卵形の体部に「ハ」の字状の台部の端部下端が面をもつ。外面の体部にタタキ後下半にハケ・台部にナデ、体部内面にハケ状ナデを施す。口頭部外面および台部内面に指押さえを残す。外面の口頭部から体部中位にかけて煤が付着する。2290は約4／5を残し、口径12.3cm・器高20.1cmを測る。やや内湾する口縁端部が尖り気味に終わり、わずかに屈曲する頸部、やや膨らむ体部に平底である。外面の口頭部から体部上半にナデ・下半にハケ、内面体部にハケを施す。口頭部内外面および底側部外面、底部内面に指押さえを残す。口縁部外面に粘土紐の継目を残す。外向の肩部以下に煤が付着する。2294・2291は肩部が張る器形で、約4／5を残し、口径14.1cm・14.5cm・器高22.2cm・25.1cmを測る。いずれも、内外面にハケを多様するが、2291の肩部にタタキが残る。外面に煤が、内面に炭化物が付着する。

鉢には、直口のものと有孔鉢がある。直口のものには、ミニチュアの(2296)、口径13cm前後の小型の(2297・2300・2301)、中型で偏平な(2302)がある。2302はほぼ完形で口径25.9cm・器高9.9cmを測り、外面向に指ナデ後ハケおよびハケ状ナデ、内面にヘラミガキを施す。有孔鉢は、いずれも、約9／10を残し、口径13.8cm・16.6cm・器高11.6cm・12.7cmを測る。2299の内面体部下位に煤が付着する。

高坏には、楕形の(2303)と有稜の(2304)があり、前者はほぼ完形で口径19.8cm・器高15.6cmを測り、ヘラミガキを施し、脚部に3方の透かしを穿つ。後者は約2／3を残し、口径24.9cm・器高17.2cmを測り、外面の坏部上端および脚部、内面の坏底部にハケを施す以外はナデである。坏部外面に粘土紐の継目を顯著に残す。脚部の4方に透かしを穿つ。

#### 流路3左岸 c-2域 (図166-2305-2311)

c-2域から出土した土器には、甕4点・鉢2点・高坏1点の計7点がある。

甕は、タタキ後ヘラケズリのもの(2307・2308)、タタキ後ハケのもの(2306)、タタキ後ナデのもの(2305)がある。いずれも約1／3～1／2を残し、口径15～16cm・器高15～18cmのやや小型のもので、外面に煤が付着する。

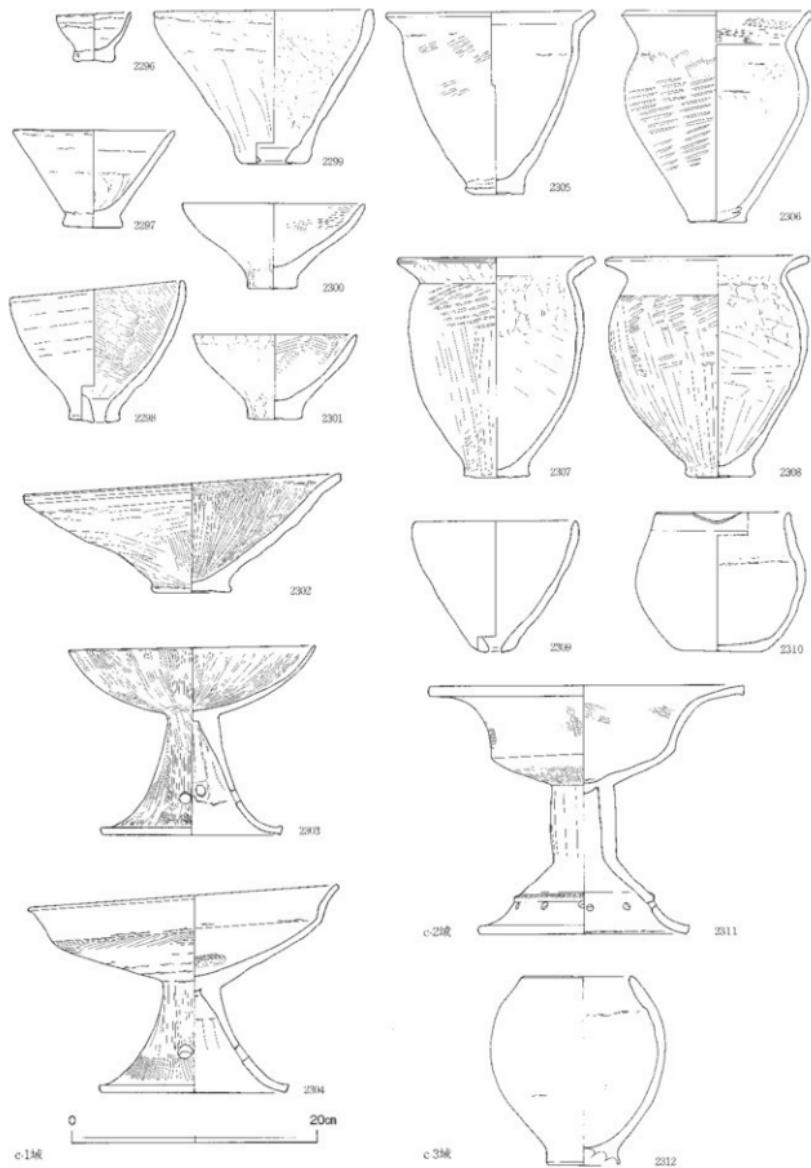


图166 流路3左岸—c-1·c-2·c-3域出土土器

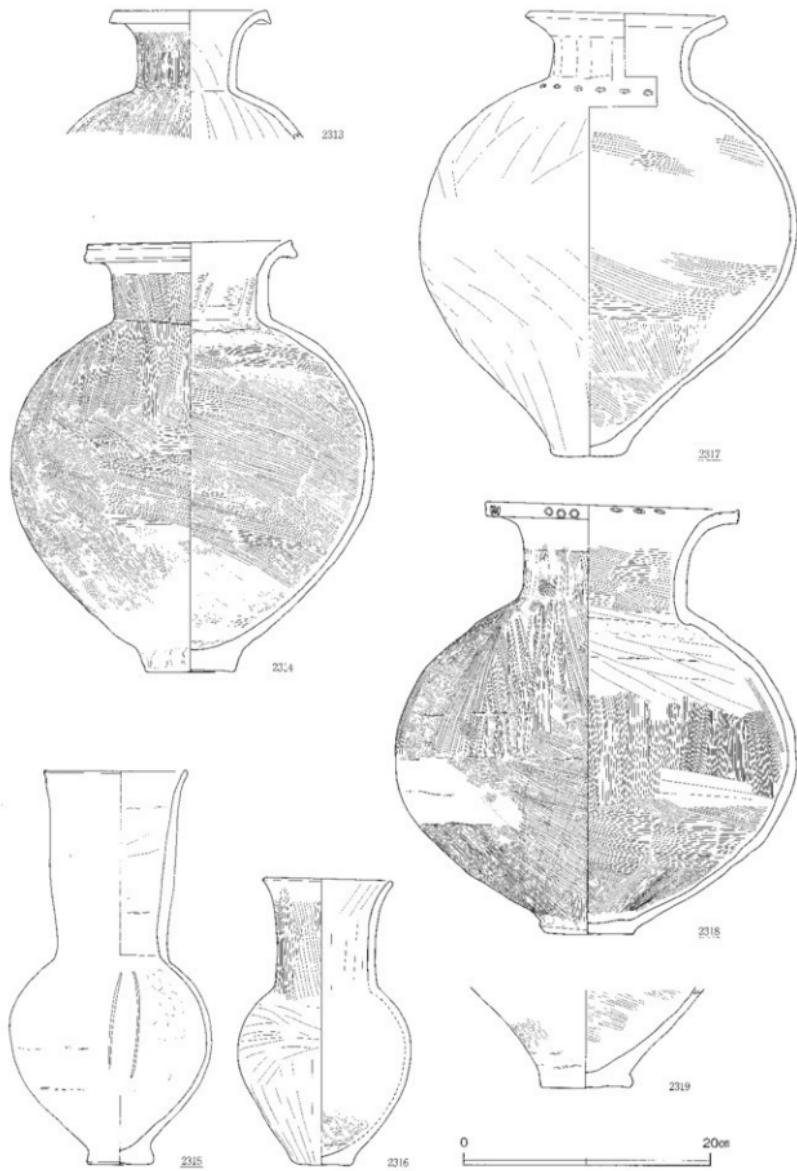


図167 流路3左岸-d域出土土器(1)

2310は直口で約2/3を残し、口径10.6cm・器高11.5cmを測り、内傾する口縁部にやや膨らむ体部に平底である。内外面にナデを施す。口縁端部に焼成後の打ち欠きがある。2309の鉢は、有孔のもので約2/3を残し、内外面にナデを施す。

2311の有稜高坏は約2/3を残し、口径25.5cm・器高20.5cmを測る。口縁部の外反が大きく、端部がわずかに垂下し面をもつ。屈曲し皿状の坏部に筒状の脚柱部、脚台部は屈曲しさらに拡広がりになる。内外面にハケ後ナデを施す。脚台部の屈曲部に刻み目以下に円孔を穿つ。

#### 流路3左岸 c - 3域 (図166-2312)

c - 3域から出土した土器には、無頭壺1点のみがある。

2312の無頭壺は、口径8.6cm・器高15.4cmを測り、内傾する口縁端部が凹面をもち卵形の体部に、突出する底部である。内外面ともナデを施す。

#### 流路3左岸 d域 (図167~170)

d域は、堅穴埴物8の南側の流路3の屈曲部に位置する。d域から出土した土器には、壺11点・甕5点・鉢4点・器台1点の計21点がある。

壺には、広口壺・長頸壺がある。広口壺には、中型が1点のみで、他は大型である。2313は、口縁端部が垂下し面をもち、外面にハケ後粗いヘラミガキを施す。

2314は約4/5を残し、口径16.4cm・器高35.4cmを測る。口縁部端部が垂下し凹面をもつ。内外面にハケを施す。2317は約2/3を残し、口径15.5cm・器高36.8cmを測る。外面体部上半にハケ後ヘラミガキ、下半にハケ後ナデ、内面にハケおよびナデを施す。肩部の一部に竹管紋10個を施す。

2318はほぼ完形で、口径20.3cm・器高35.9cmを測り、口縁端部がわずかに立ち上がり面をもつ。外面にハケ後ヘラミガキ、内面にハケおよびナデを施す。口縁部内面に、竹管紋3個・端部に3個1組を10箇所に施す。2320・2321は口縁部の外反がやや少なく、端部が凹面をもつ。口径16.0cm・15.3cm・器高37.2cm・36.7cmを測る。外面の体部上半にヘラミガキ、下半にハケ状ナデないしはハケ、内面にハケ後ナデを施す。2322はほぼ完形で口径24.3cm・器高47.0cmを測り、口縁端部は丸く終わる。体部が影らみや偏平である。外面にハケ後ヘラミガキを施し、内面に指ナデを残す。口縁部の内面に竹管紋3個を施す。両者共に口縁部内面に径約2cmの竹管紋2個を施す。2327は口縁部短部を欠損する。器高が50cm以上になる。外面の頭体部の上端にハケ・以下にヘラミガキ、内面にハケ後ナデを施す。2320は、大型壺の底部破片である。

2318・2320・2321・2327の体部外面に編み籠の痕跡を残す。2317・2318・2320~2322・2327は暗褐色の生駒西麓産の土器で、2320・2322・2323の外面に煤が付着する。

長頸壺には完形の(2316)と、約4/5を残す(2315)があり、口径10.0cm・11.6cm・器高23.6cm・32.4cmを測り、後者は縦線2条のヘラ記号が施される暗褐色の生駒西麓産の土器である。

壺にはタタキのもの(2330・2331)と、ハケのもの(2328・2329)があり、他に装飾性に富む(2323)がある。2329の口縁端部は窓切りする。2330は暗褐色の生駒西麓産で、(2323)は近江壺に似る。2329以外に外面に煤が、(2323・2330)は、内面下半に炭化物が付着する。

鉢には、直口の小型のもの(2324)、有孔のもの(2325)と、大型で口縁部が外反し半環状の把手を持つもの(2326)、大型で外反する口縁部が屈曲しが立ち上がるもの(2333)がある。2333は約4/5を残し、口径56.5cm・器高26.4cmを測る。体部の内外面にハケ後粗い往復のヘラミガキを施し、内面に黒色物質を塗布する。

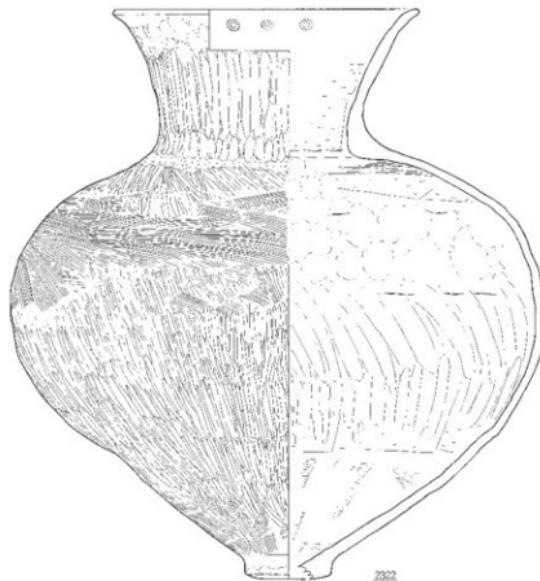
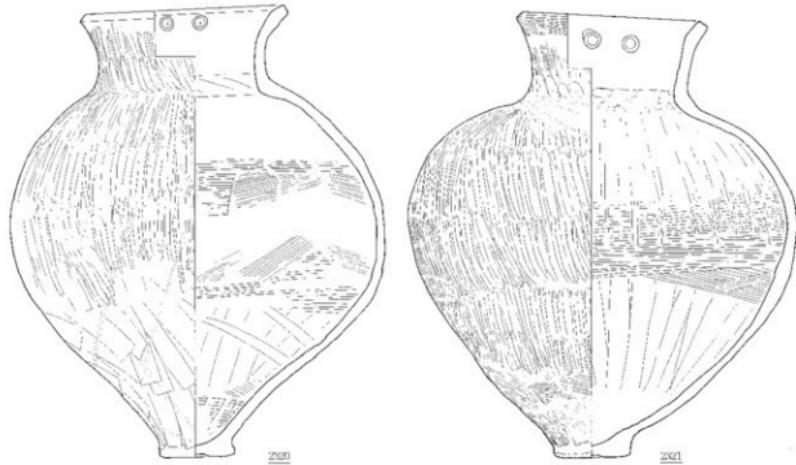


図168 流路3左岸-d域出土土器(2)

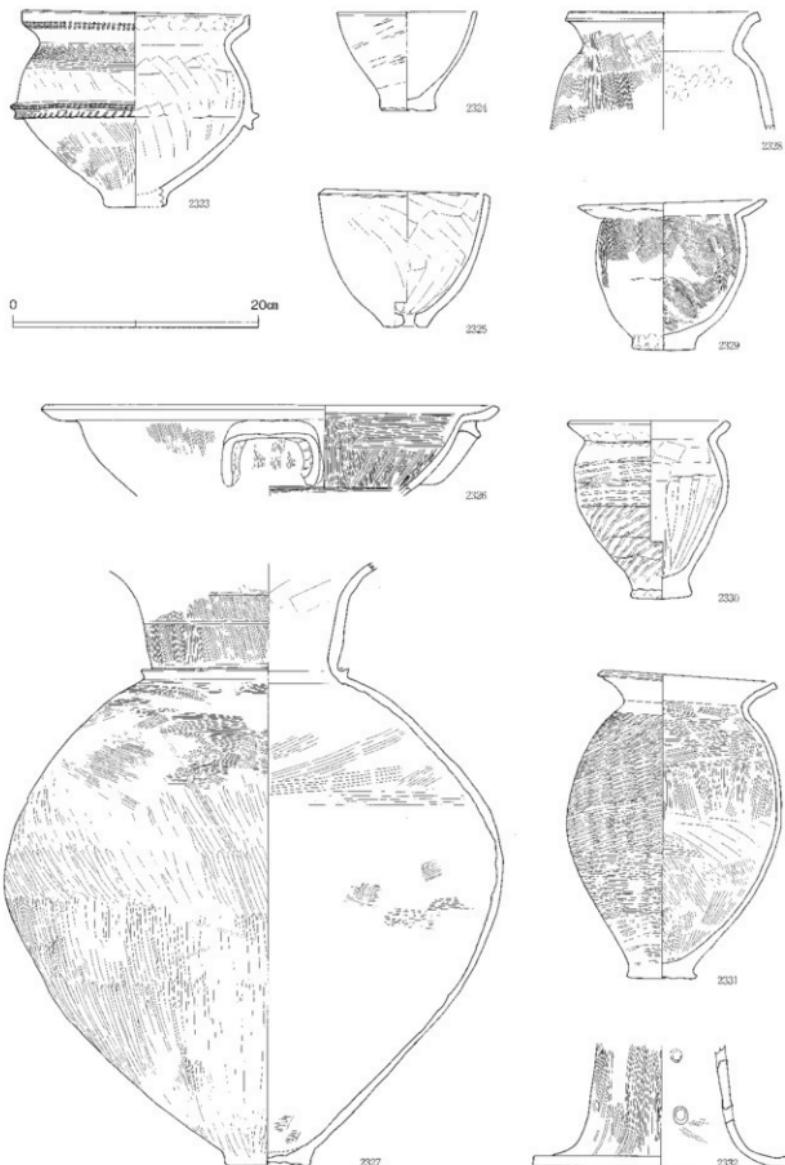


图169 流路3左岸-d域出土土器(3)

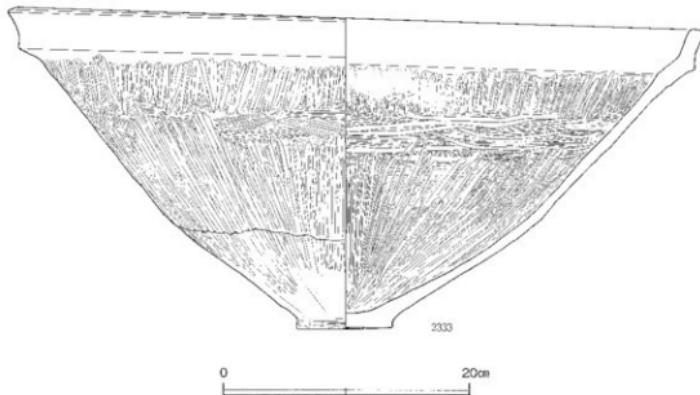


図170 流路3左岸-d域出土土器(4)

2332の器台は下半を残す。裾広がりの脚台部の端部が凹面をなす。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。4方に2段以上の透かしを穿つ。

#### 流路3左岸 e域 (図171-2334~2337)

e域は、貯木場遺構1の北側に張り出した部分の北角に位置する。出土した土器には、壺1点・甕1点・高坏2点の計4点である。

2334の壺は長頸壺で、底部を欠損する。内外面にハケを施す。

2335の甕はやや小型で約1/3を残す。口径14.3cm・器高15.6cmを測る。外面にヘラケズリ状ナデ、内面にハケ状ナデを施す。

有稜高坏は大型のもので、(2336)が脚台部を欠損し、(2337)が約4/5を残す。口径は41.0cm・35.0cm、後者の器高が21.7cmを測る。2336の口縁端部がわずかに垂下し面をもつ。いずれもヘラミガキを多様し、(2337)の脚部にはヘラ描きの紋様が一部残る。2337の脚部の3方2段に円形の透かしを穿つ。

#### 流路3左岸 f域 (図171-2338)

f域は、先述の張り出し部分に当り、出土したのは、壺が1点のみである。2338は大型の直口壺で約4/5を残し、口径18.0cm・器高38.8cmを測る。内外面に表面摩滅のため調整が不明である。淡橙褐色と乳白色の2種の粘土を使用する。体部下半に煤が付着する。

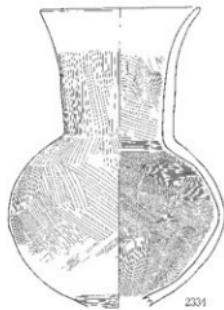
#### 流路3左岸 g域 (図172-2339-2344)

g域は、貯木場遺構1の北側肩部および溝50上面付近に当る。出土した土器は、壺1点・甕2点・鉢1点・高坏2点の計6点である。

2339の大型広口壺は口縁端部が肥厚し面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。端部に凝凹線紋2条を施す。

甕には、体部にナデの(2340)とタタキ後ナデの(2341)がある。2341は約2/3を残し、口径17.8cm・器高12.4cmのやや偏平なもので、いずれも、外面に煤が付着する。

2342は有孔鉢で、ほぼ完形である。口径13.1cm・器高16.5cmを測る。内外面に表面剥離のため調整が不明である。



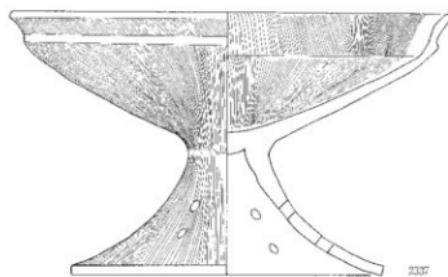
2331



2336

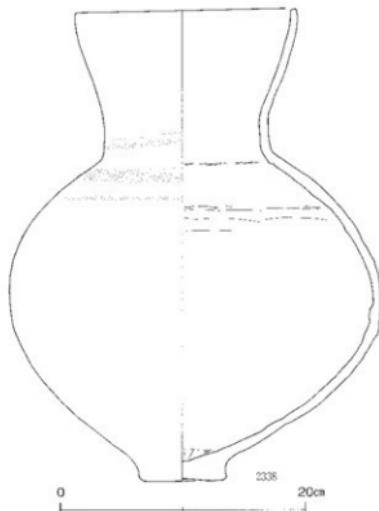


2333



2337

e域



2338

図171 流路3左岸-e・f域出土土器

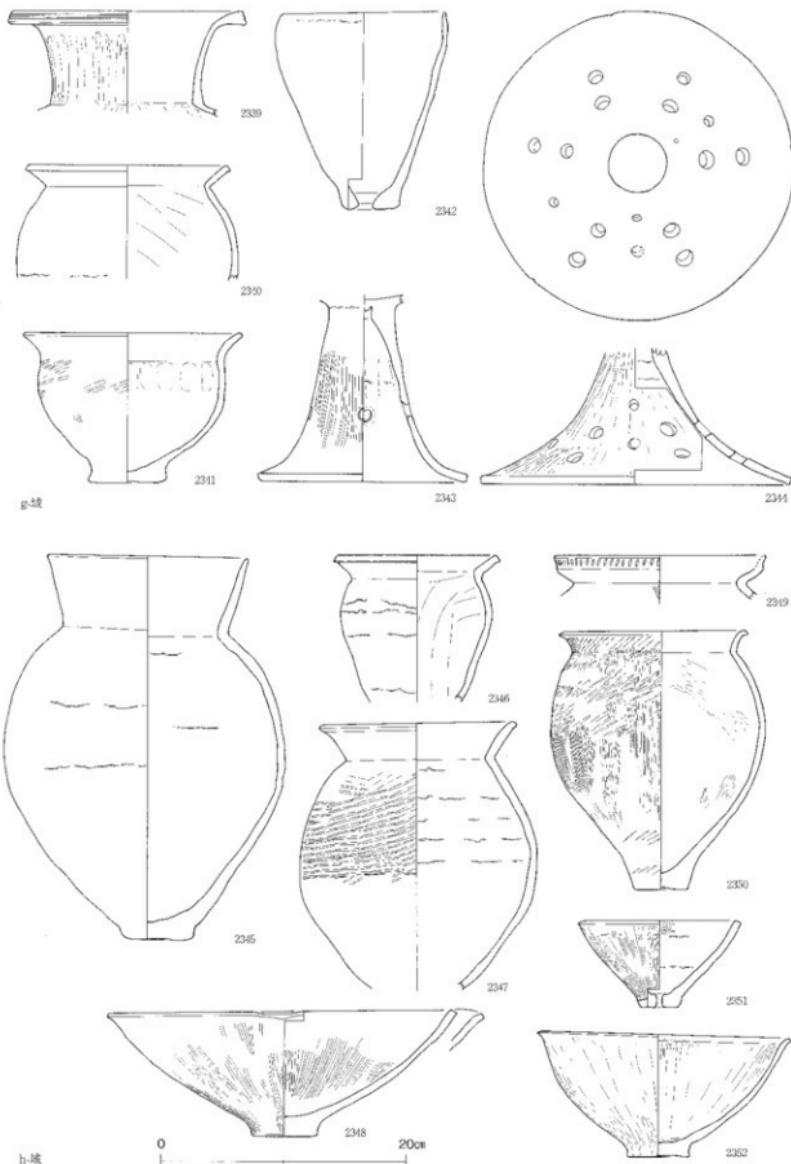


図172 流路3左岸—g・h域出土土器

2343・2344の高坏は脚部のみを残し、後者は大型で透かしを不規則に穿つ。

#### 流路3左岸 h域（図172-2345～2352）

h域は、貯木場遺構1の南側に位置し、溝50付近に当る。出土した土器は、壺1点・甕4点・鉢3点の計8点である。

2345の直口壺は約2/3を残し、口径16.0cm・器高31.5cmを測る。内外面にナデを施し、粘土紐の継目を残す。外面に煤が付着する。

甕には、中型でタタキの(2347)、同ハケの(2349)、タタキ後ハケの(2350)と、小型でナデの(2346)がある。2349は口縁部破片で、屈曲する口縁部の端部に刻み目を施す。2350は約4/5を残し、口径14.6cm・器高21.3cmを測る。内外面に煤が付着する。

鉢には、中型で直口の(2348・2352)と小型で有孔の(2351)がある。2352は約4/5を残し、口径20.5cm・器高10.4cmを測る。口縁端部がわずかにつまみ出され面をもつ。2348はほぼ完形で、口径27.8cm・器高10.4cmを測る。外傾する口縁部の端部が面を持ち、片口である。いずれも、内外面にヘラミガキを施す。2351は約1/5を残し、口径12.3cm・器高7.2cmを測る。外面にハケ、内面にハケおよびナデを施す。

#### 流路3左岸 i域（図173）

i域は、h域の南側で溝50付近の15mの範囲に土器が点在している。出土した土器は、壺4点・甕4点・鉢1点・高坏1点の計10点である。

壺には、広口壺(2353)、長頸壺(2354・2359)と、体部から底部破片(2355)がある。2353は内外面磨滅が著しく、ハケがわずかに残る。体部中央に篦引き紋様の一部が残る。2354は、外反する口縁端部が垂下し面をもつ。外面および口縁部内面にヘラミガキ、頸部にナデを施す。口縁端部に凝固線紋2条を施す。2359は小型で約4/5を残す。口径9.6cm・器高16.5cmを測り、外面および口頸部内面にヘラミガキ、内面の頸体部にナデを施す。2355は、内外面にハケを施し、外面に煤が付着する。

甕には、タタキの(2356・2358・2360)とハケの(2362)がある。2358は小型で、頸部内面に明確な稜をもつ。2356は約4/5を残し、口径19.3cm・器高24.1cmを測る。外面にタタキ後ナデ、内面にヘラケズリを施す。2360は約2/3を残し、口径16.0cm・器高26.4cmを測る。外面の肩部にタタキ後ハケ、内面にハケを施す。いずれも、外面に煤が、内面に炭化物が付着する。2362はほぼ完形で、口径22.1cm・器高36.2cmと大型である。底部が突出し底脚部が拡張する平底で、体部外面にハケ後ナデ内面にハケを施す。外面の肩部以下に煤が付着する。以上の4点は、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2361の鉢は直口の小型で、口径9.2cm・器高6.6cmを測り、内外面にナデを施す。

2357の有稜高坏は脚台部を欠損し、坏部内外面および脚柱部外面にヘラミガキを施し、口縁部外面に波状紋風にヘラミガキを追加する。

#### 流路3左岸 j域（図174）

j域は、流路3の南側の屈曲部の北側の肩部に当る。土器は、壺2点・甕4点・高坏2点の計8点である。

壺には、広口壺(2363)と長頸壺がある。2363は内外面にハケを施す、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2364は口頸部から体部下位までを残す大型のもので、口径19.4cmで器高が40cm以上になる。外反する口縁部の端部が凹面をもち、裾窄まりの長い頸部にやや偏平な体部をもつ。外面および口縁部内面にヘラミガキを施し、頸体部に指押さえと粘土紐の継目を残す。

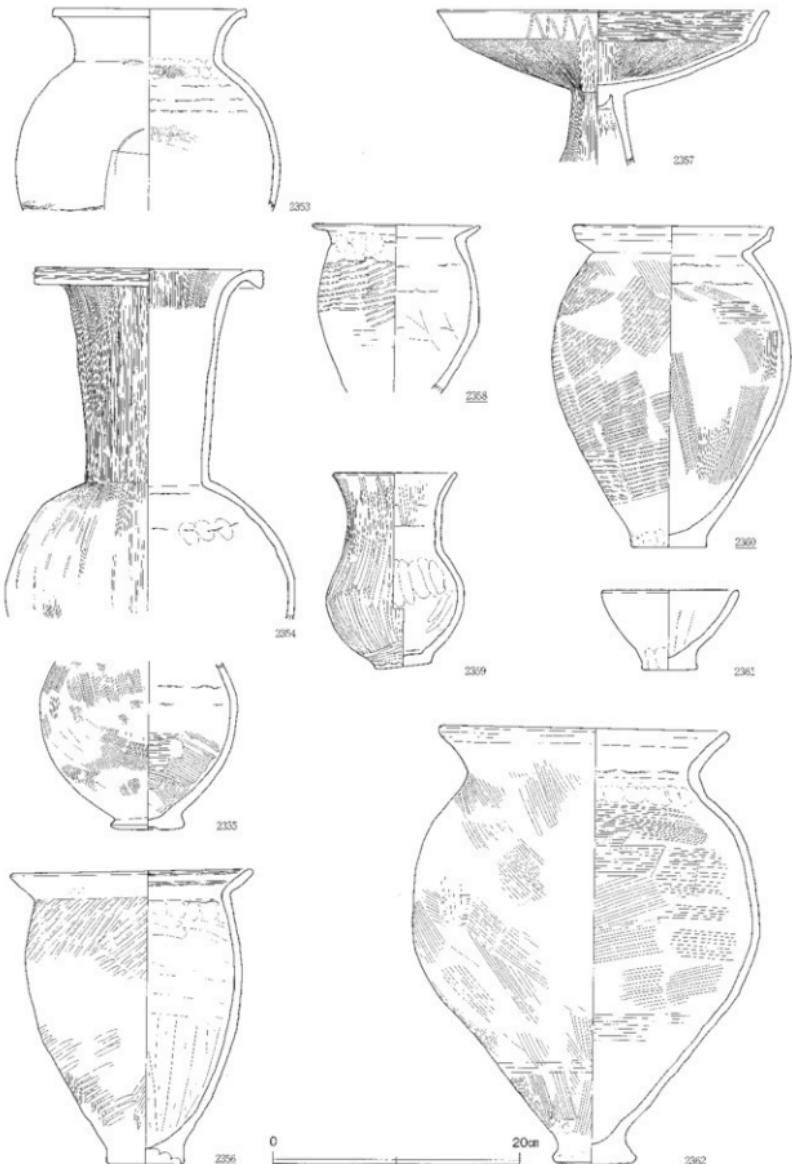


图173 流路3左岸-i域出土土器

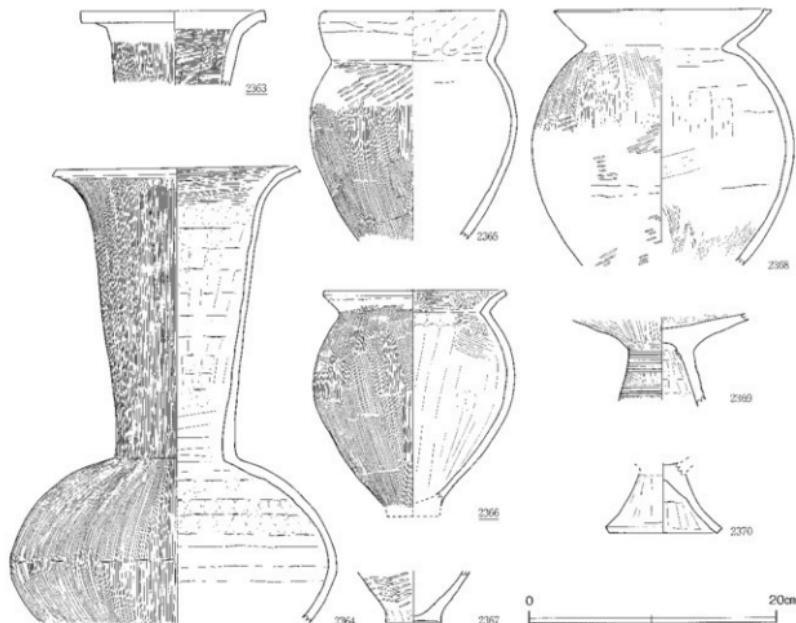


図174 流路3左岸-j域出土土器

壺には、タタキ後ハケの(2365・2368)とハケの(2366)、底部破片の(2367)がある。2365は内湾する口縁部をもち、外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。内外面に粘土紐の継目を残す。2368は、内湾気味に外傾する口縁部の端部が外方へわずかに肥厚し、凹面をもつ。屈曲する頭部の内面が明瞭な稜をもつ。体部外面にタタキ後肩部にハケ・以下にナデ、内面の上半部にヘラケズリ・下位にハケを施す。2366は頭部の内面に明瞭な稜をもち、体部外面にハケ、内面に指ナデおよびハケを施す。いずれも、外面に煤が付着する。2366・2368は、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2369の高壺は壺底部から脚柱部を残すもので、外面および壺部内面にヘラミガキを施す。脚柱部に範描き沈線を5条・4条施す。2370は小壺で脚部のみを残し、端部が凹面をもつ。内外面にナデを施す。

#### 流路3左岸-k域(図175)

k域は、南端の変換点に当り、第3面上直上から落ち込むように出土した土器群である。土器には、壺6点・壺3点・鉢3点・高壺1点の計13点がある。

壺には、広口壺(2371)・長頸壺(2372・2373・2379)・直口壺(2375)がある。2371は器壁が厚く、体部内外面にハケ後ナデを施す。2379は焼け歪が大きく、外面に煤が付着する。2372・2373は大型で、前者の頭部下位には2条の紐状痕跡がある。後者はほぼ完形で、口径13.8cm・器高32.3cmを測る。外面にヘラミガキを施し、内面に指ナデ・指押さえおよび粘土紐の継目を残す。肩部に範描きの記号紋を施す。2375は、中型で体部の一部を欠損し、口径12.1cm・器高約22cmを測る。外面にヘラミガキ、内面にハケ後ナデを施す。肩部に刺尖紋を施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2374は底部外

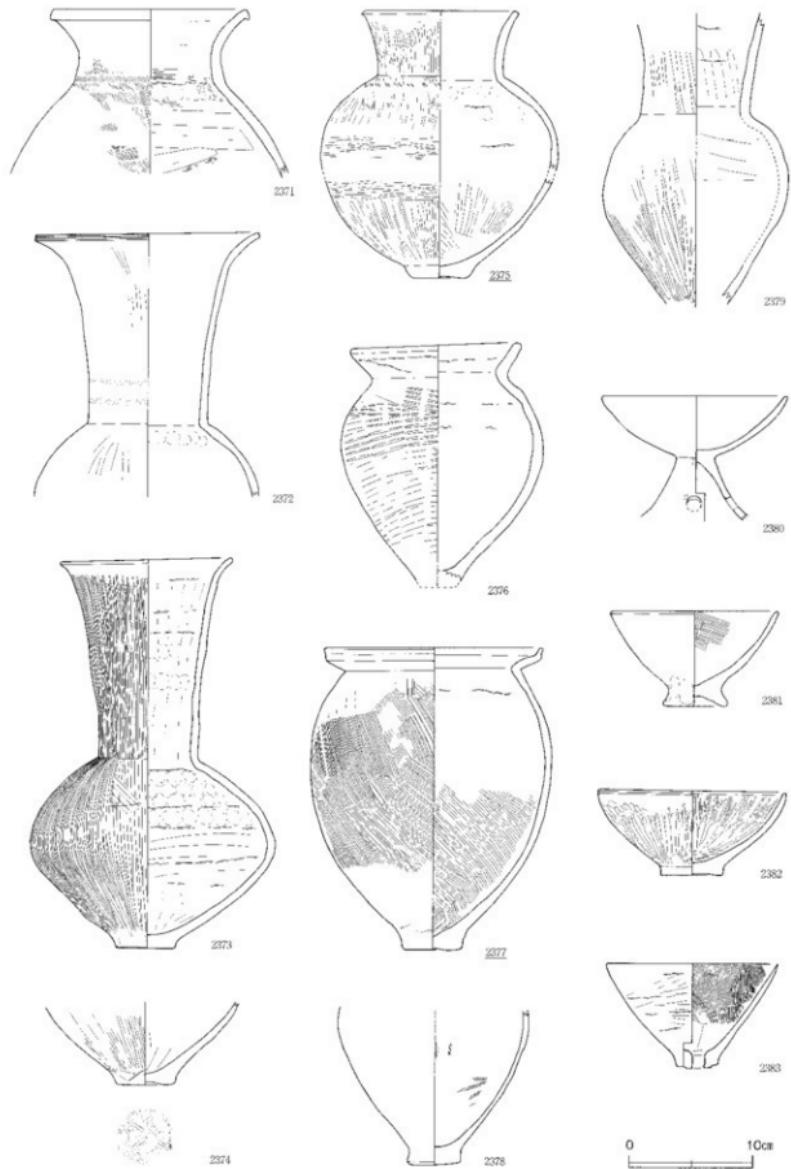


圖175 流路3左岸-k域出土土器

に竈2条ずつの十字が施される。

壺には、タタキの(2375)と、ハケの(2376)、ナデの(2377)がある。2375は、底部を欠損し、器壁が厚く、外面に煤が付着する。2377は約2/3を残し、口径17.6cm・器高24.9cmを測る、内外面にハケ後ナデを施す。外面に煤が、内面の底部下半に炭化物が付着する。暗褐色の角閃石を含む牛駒西麓産の土器である。

鉢には、いずれも小型で、直口のもの(2380・2381)と、有孔鉢(2382)がある。

2380は約1/3を残し、口径13.4cm・器高7.8cmを測る。外面摩滅のため不明で、内面にハケを施す。2381・2382はいずれも完形で、口径13.8cm・15.0cm・器高8.6cm・7.0cmを測る。前者は外面にヘラミガキ、後者は外面にナデ、内面にハケを施す。

2379の高壺は、楕形で脚台端部を欠損する。内外面に表面摩滅のため調整が不明である。脚部の4方に円形の透かしを穿つ。

流路3の右岸域は、東側居住域に繋がり、北からa域～i域の8区分をしている。

#### 流路3右岸 a域 (図176)

a域は、最も北側に位置し、左岸a域の対岸に当る。土器には、壺2点・鉢2点・高壺1点の計5点がある。

壺は、いずれも、約1/2を残し、口径13.6cm・16.2cm・器高17.4cm・25.2cmを測る。2385は、外面にタタキ後ハラケズリ状ナデを施し、内面に指押さえを残す。2386は外面にタタキ後ハケ、内面にナデを施し、両者併に外面に煤が付着する。

鉢には、小型で外反するものと大型で直口のものがある。

2385は約1/2を残し、口径14.0cm・器高11.0cmを測る。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。2390はほぼ完形で、口径30.8cm・器高15.7cmを測る。外面にハケ後ナデ、内面にハケ後ヘラミガキを施す。外面に粘土紐の縦目を顯著に残す。

2384の有稜高壺は大型で、壺部のみを残し、口径32cmを測る。外面口縁部にヨコナデ・壺部にハケ後ヘラミガキ、内面白縁部にヨコナデ後粗い往復ヘラミガキ・壺部にヘラミガキを施す。

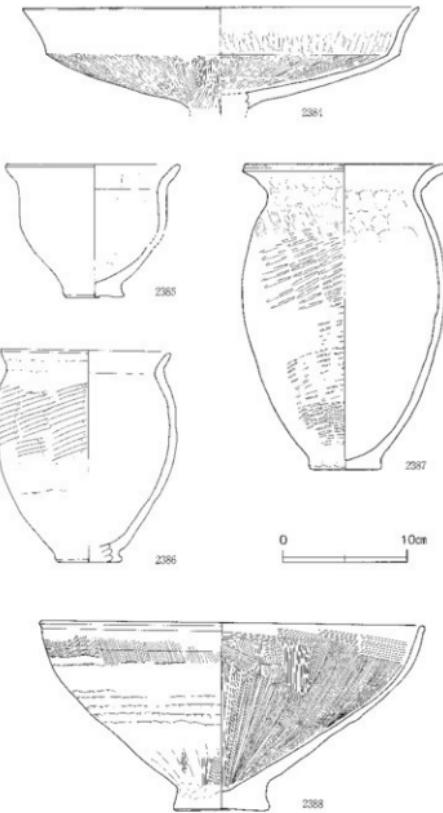


図176 流路3右岸-a域出土土器

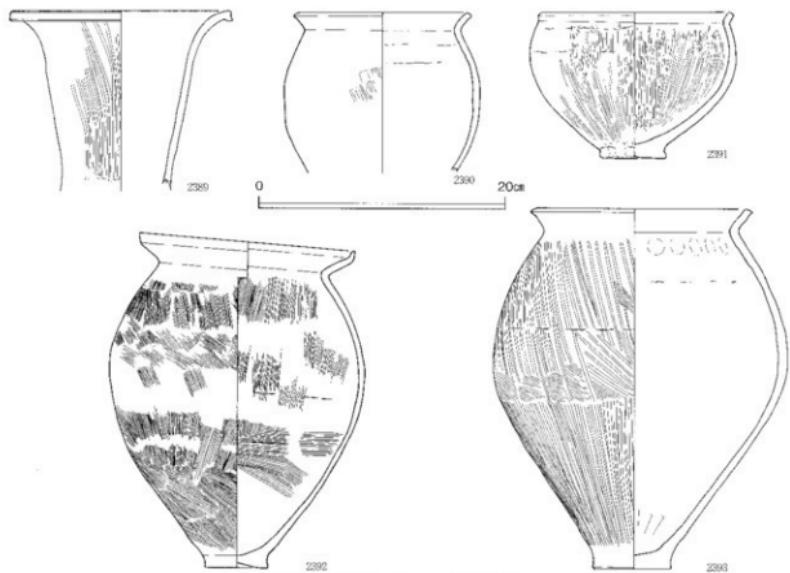


図177 流路3右岸-b域出土土器

#### 流路3右岸 b域 (図177)

b域は、谷2の南西肩部に位置する。出土した土器は、壺1点・甕3点・鉢1点の計5点である。

2391は長頸壺で、外反する口縁端部がわずかに垂下し凹面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

甕には、ハケの(2392)、ヘラミガキの(2390・2393)がある。2392は約3/4を残し、口径17.6cm・器高27.2cmを測る。体部外面にハケ後下端ナデ、内面上半にハケ・下半にナデを施す。外面の肩部および底部を除き煤が多量に付着し、内面の体部下位に炭化物が付着する。2390の体部内面は表面剥離のため不明である。2393は約2/3を残し、口径17.2cm・器高29.6cmを測る大型で、体部内外面にヘラミガキを施す。いずれも、外面に煤が付着する。

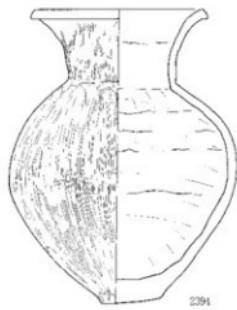
2391の鉢は、口縁部がわずかに外反し面をもつ。内外面にヘラミガキを施す。体部外面に煤が付着する。

#### 流路3右岸 d域 (図178・179-2404~2410)

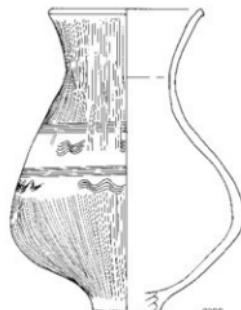
d域は、右岸中央部に位置し、溝52と流路3の間の第3面直上に当る。土器には、壺6点・甕6点・鉢1点・高坏3点・器台1点の計17点である。

壺には広口壺(2394)・長頸壺(2395・2397)・細頸壺(2398)・短頸壺(2396)がある。

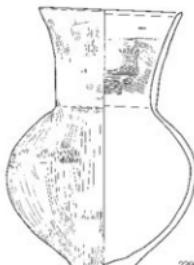
2394は中型で約2/3を残し、口径13.4cm・器高24.3cmを測る。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。肩部に逆「U」字形に範記号を施す。体部外面に煤が付着する。2395はやや小型で約4/5を残し、口径11.7cm・器高21.6cmを測る。外面の頭部にハケ後ナデ・体部にハケ後ヘラミガキ、内面の頭部にハケ・体部にナデを施す。2397は約9/10を残し、口径12.3cm・器高25.9cmを測る。短く外反する口縁部



2395



2396



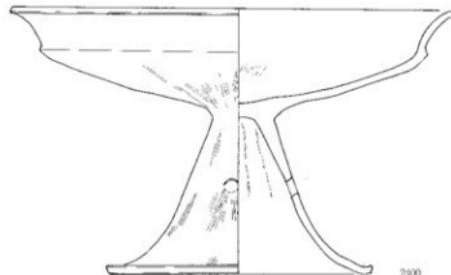
2397



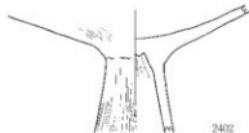
2398



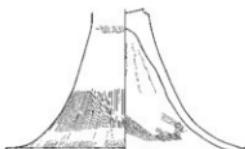
2399



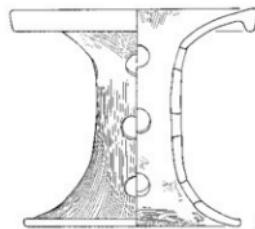
2400



2401



2402



2403

0 20cm

図178流路3右岸-d域出土土器

がさらに屈曲したちあがり、口頸部に比してやや小さめの体部をもつ。外面ハケ後体部下半にナデ、内面にハケ状ナデを施す。外面に煤が付着する。2396は小型で約1/2を残し、口径7.8cm・器高13.0cmを測る。外面にナデ、内面にハケおよびナデを施す。外面に煤が付着する。2398は約1/2を残し、口径12.0cm・器高25.2cmを測る。外反度が高い口縁部から頸体部が緩やかにのびるもので、外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。頸体部の境目に櫛描直線紋と波状紋を交互に2帯ずつ施すが部分的にナデ消される。2399は体部から底部を残すもので、外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。

壺には、タタキのもの(2403)、タタキ後ハケのもの(2404)、ハケのもの(2406・2407・2409)と、ナデのもの(2410)がある。2405は約4/5を残し、口径21.2cm・器高20.8cmを測る。外面の口縁部にハケ・体部に重複のタタキ、内面にナデを施す。2404は約4/5を残し、口径17.4cm・器高19.1cmを測る。体部外面にタタキ後肩部にハケ・以下にナデ、内面にハケ後ナデを施す。2406は、底部を欠損し、外面にハケ、内面にナデを施す。2407はやや小型のもので、体部が球形に近い。外面にわずかにハケが残る。2409は底部を欠損し、口縁部が内湾気味にのび端部が面をもつ。外面にハケ、内面にナデを施す。2410は約3/4を残し、口径14.6cm・器高21.2cmを測る。外面にナデ、内面に指ナデを施す。いずれも、外面に煤が付着する。

2408の鉢は外反する口縁端部が凹面をもつ。約2/3を残し、口径16.8cm・器高10.8cmを測り、外面の口頸部に往復ヘラミガキ・体部にヘラミガキ、内面体部に粗いヘラミガキを施す。

高坏には有稜の(2400)と坏底部から脚柱を残す(2402)、脚部を残す(2401)がある。2400は約1/3を残し、口径32.9cm・器高20.4cmを測る。表面摩滅著しいが外面および坏底部内面にヘラミガキを残す。脚部の3方に透かしを穿つ。

2403の器台は約5/6を残し、口径18.2cm・器高16.6cm・脚台径16.3cmを測る。外面および口縁部内面にヘラミガキ、内面体部にナデ、脚台部にハケを施す。4方3段に凸形の透かしを穿つ。

#### 流路3右岸 e域(図179-2411~2416)

e域は、流路3の右岸中央部と溝52が接する付近であり、第3面直上と、肩部から出土した土器群である。

土器は、壺2点・壺2点・高坏2点の計6点である。

壺は、小型壺の(2414)と長頸壺の体部破片(2413)がある。2414はほぼ完形で、口径8.8cm・器高12.8cmを測る。外方へのびる口縁部がわずかに屈曲する。頸体部の境目に竹管線紋を施す。

壺には、体部にヘラミガキを施すものとタタキ後ハケを施すものがある。2411は、約9/10を残し、口径19.4cm・器高21.1cmを測る。口縁端部がわずかにつまみ上げられ面をもつ。体部外面にナデ後部分的にヘラミガキ、内面にハケ後ヘラナデを施す。体部外面にわずかに煤が付着する。2412は約4/5を残し、口径17.8cm・器高23.8cmを測る。口縁端部が屈曲しさらに斜め外方へのびる。体部外面に斜格子タタキ後ハケ、内面にヘラケズリを施す。外面体部下端を除き煤が多量に、内面の体部下位に炭化物が付着する。

高坏は、いずれも有稜のもので、(2415)は坏部のみを残す。2416は約4/5を残し、口径27.6cm・器高19.5cmを測る。内外面の口縁部にヨコナデ・坏部にハケ後部分的にヘラミガキ、外面脚部にハケ後ヘラミガキを施す。脚部の3方2段に円形の透かしを穿つ。下段は2個1組の透かしである。

#### 流路3右岸 f域(図180-2417~2419)

e域の南側に位置し、肩部の2箇所に点在する。土器には、壺2点と壺1点がある。2417は約9/10

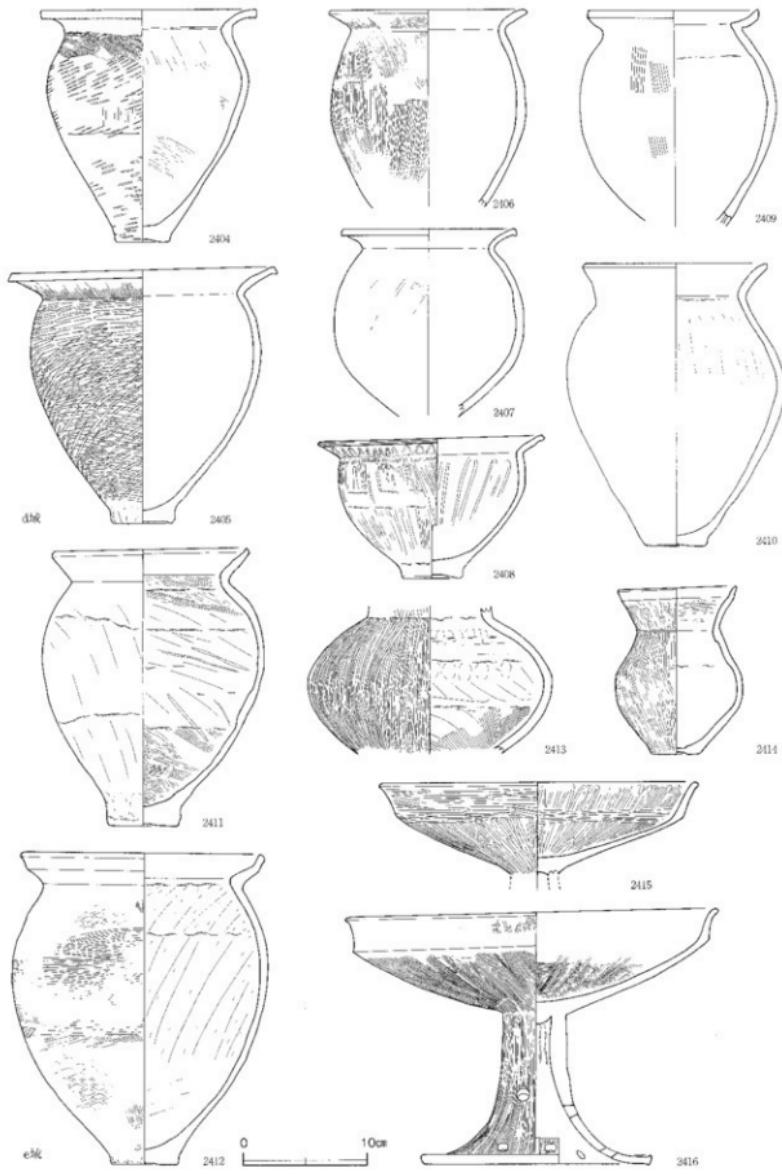


図179 流路3右岸-d・e域出土土器

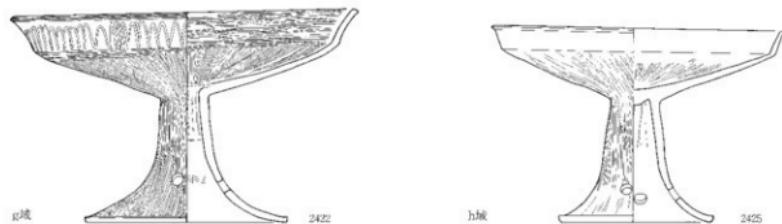
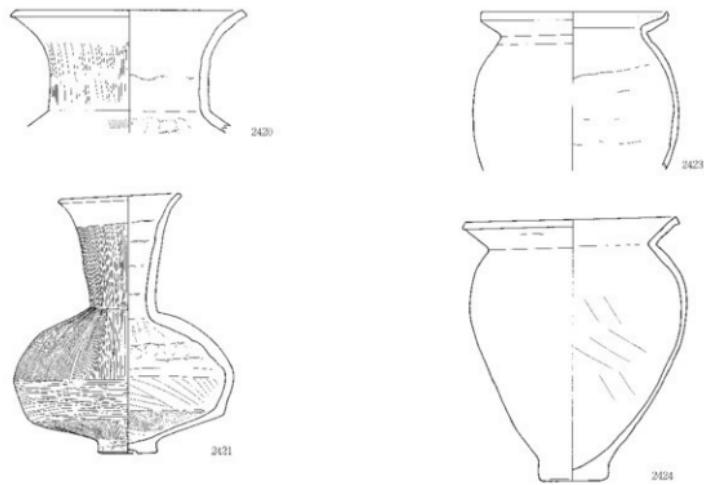
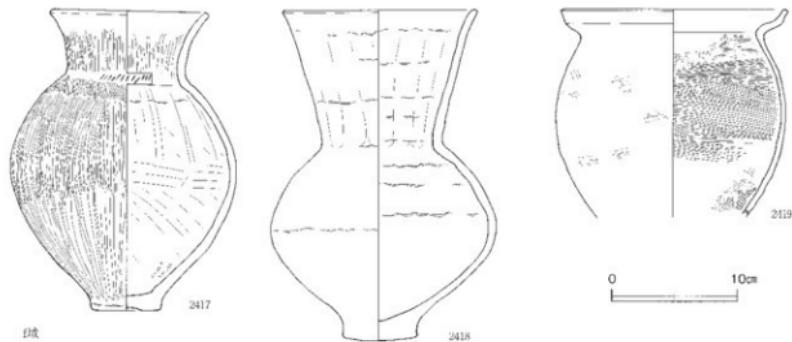


図180 流路3右岸-f・g・h域出土土器

を残す直口壺で、口径12.2cm・器高24.7cmを測る。やや外反する口縁部の上端部が面をもつ。外面および内面の口頸部にハラミガキ、体部にナデ、下端にハケを施す。肩部に12個の刺突紋を施す。体部下半に煤が付着する。2418は頸の太く短い長頸壺で、約2/3を残す。口径15.5cm・器高27.2cmを測る。口頸部内外面に指押さえおよび粘土紐の継目を残し、体部内外面にナデを施す。外面に煤が付着する。

2419の壺は、外反しさらに屈曲して立ち上がる口縁部の上端が面をもつ。体部外面に斜格子タタキ後ナデ、内面にハケを施す。外面に煤が付着する。

#### 流路3右岸 g域(図180-2420~2422)

g域は、溝57・58と流路3の合流地点丹位置する。土器は壺2点と高坏1点である。

壺は、大型広口壺の口頸部破片(2420)と、ほぼ完形の細頸壺(2421)がある。前者は、外面にハラミガキ、内面にナデを施す。後者は口径9.6cm・器高21.3cmを測る。体部が偏平で下位で屈曲する。外面にハケ後ハラミガキを施し、内面にナデおよびハケを施す。内面に粘土紐の継目を残す。

2422の有稜高坏は約4/5を残し、口径27.5cm・器高17.5cmを測る。坏部内外面にハラミガキ、脚部にハラミガキを施す。口縁部外面に波状紋風のハラミガキを追加する。口縁端部に疑凹線紋1条を施す。脚部の3方に透かしを穿つ。

#### 流路3右岸 h域(図180-2423~2425)

h域は、g城南側の溝57と流路3に挟まれた第3面直上に位置する。上器は、壺2点と高坏1点である。

壺はいずれもナデを施し、(2424)は約9/10を残し、口径16.9cm・器高21.6cmを測る。両者とも外面に煤が付着する。

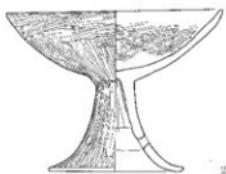
2425の有稜高坏は約2/3を残し、口径23.0cm・器高16.1cmを測る。屈曲しわずかに開く口縁部の端部が外方へわずかにつまみ出され、上端に面をもつ。坏部内外面および脚部外面にハラミガキを施す。脚部の4方に透かしを穿つ。

#### 流路3右岸 i域(図181)

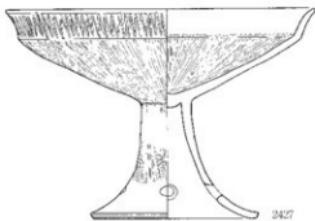
i域は、豎穴建物9の排水溝が流れ込む付近に位置し、出土した上器は、鉢1点・高坏2点である。

2428の鉢は、口縁部が波打ちし、焼け歪が激しい。外面にハケ後ナデ、内面の上半に指押さえおよび粘土紐の継目を残し、下半にハケを施す。先端部は指押さえで成形し、壺が乾燥時に破損したものを整形し直し、鉢として使用されたものであろう。

高坏は、楕形のもの(2426)と有稜のもの(2427)があり、いずれも約4/5を残し、口径17.2cm・27.5cm・器高13.4cm・17.5cmを測る。坏部内外面にハラミガキ、脚部に前者はハラミガキ、後者はハケ後ナデを施す。2427の口縁部外面のハラミガキは波状紋風に施される。3方・4方に透かしを穿つ。



2426



2427



2428

0 20cm

図181 流路3右岸-i域出土土器

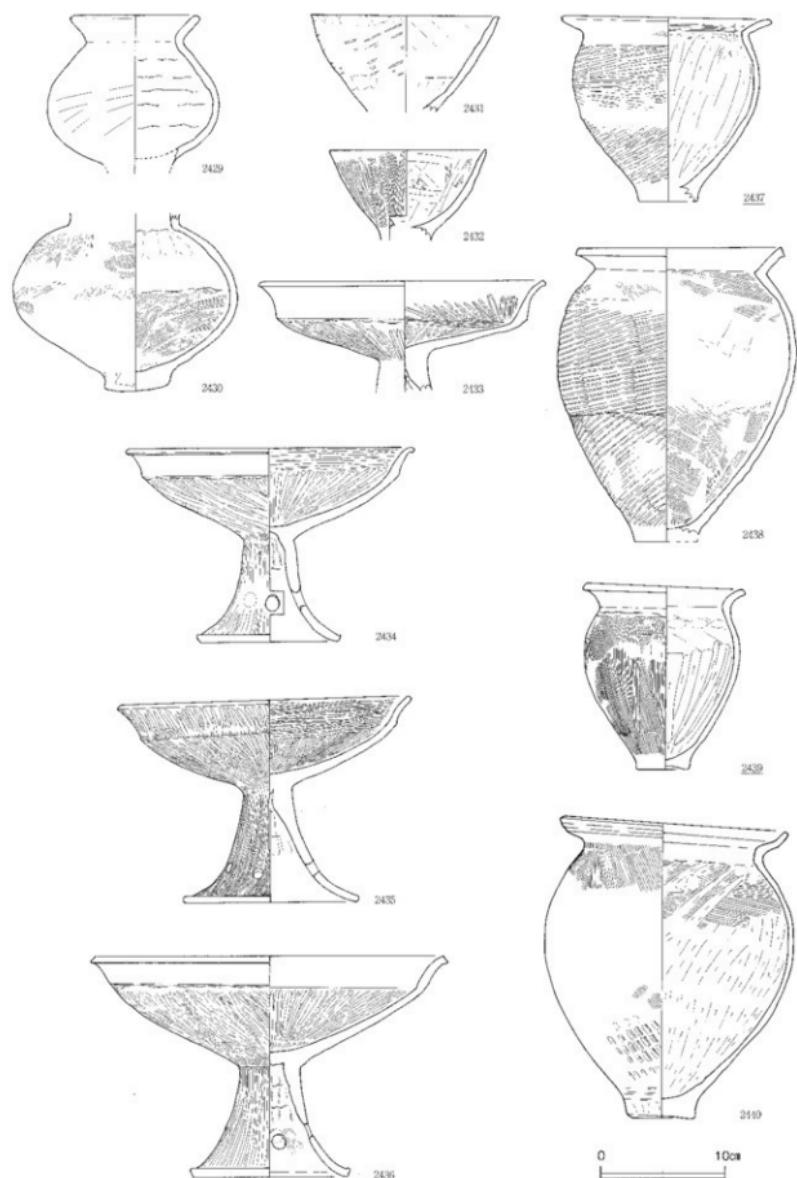


図182 谷2-a域出土土器

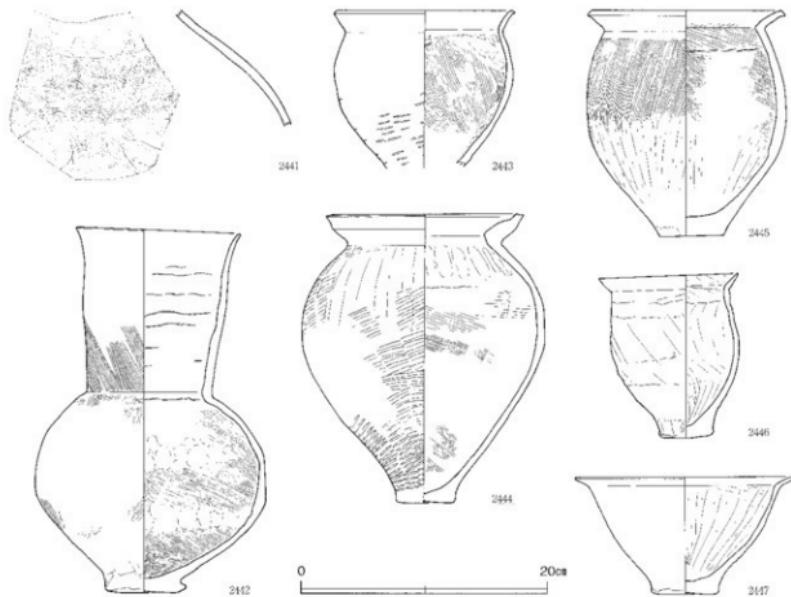


図183 谷2-b域出土土器

谷2は、流路3の東側で、堅穴建物6の西側に当り、溝52および堅穴建物6の排水溝が流れ込み、北端で流路3と接続する。土器の出土状況は、堅穴建物6周辺の南端部に集中する。南から、a域からf域の6群に区分される。

#### 谷2 a域(図182)

a域は、谷2の最南端に当り、溝52が流れ込む。土器には、壺2点・甕4点・鉢2点・高杯4点の計12点がある。

壺には、小型の広口壺(2429)と長頸壺の体部以下を残す(2430)がある。甕には、タタキのものとハケのものがある。2437は約9/10を残し、口径16.3cm・器高15.3cmを測り、体部外面にタタキ、内面にヘラケズリを施す。2438は約2/3を残し、口径15.3cm・器高23.8cmを測り、体部外面にタタキ後肩部にハケ、内面にハケおよびナデを施す。いずれも、頸部内面の屈曲部に明瞭な稜をもつ。2439はほぼ完形で、口径12.6cm・器高15.2cmを測り、体部内面にヘラケズリを施す。2440は約2/3を残し、口径18.0cm・器高24.5cmを測る。外面部に斜格子タタキ後頸部上端にハケ・中央にナデ、体部内面にハケ後ヘラケズリを施す。いずれも、外面に煤、内面に炭化物が付着する。2437・2439は、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2431・2432の鉢は直口のもので、底部を欠損する。前者が外面にタタキ後ナデ、内面の上半にナデ・下位にヘラミガキを施し、後者が外間にハケ、内面にハケ後ナデを施す。

高杯はいずれも有稜のもので、(2433)は脚台部を欠損する。口径約23~28cm・器高約16~18cmのもので、(2434・2436)がハケ後ヘラミガキを施し、口縁部の(2433)が内面に、(2435)が外間に波状紋風ヘラミガキを施す。

## 谷2 b域(図183)

土器には、壺2点・壺4点・鉢1点の計7点がある。壺には肩部紋様片(2441)と長頸壺がある。2441は、櫛指直縞紋間に波状紋を施す。破損後に煤が付着する。2442は約1/3を残し、口径13.6cm・器高27.6cmを測る。頸部外側にハケ後ナデ、体部外側にハケを施し、口頭部内側に指押さえ・粘土紐の継目を残す。体部外側に煤が付着する。

壺には、タタキのものとハケのもの、ナデのものがある。2446は小型のはぼ完形で、口径11.2cm・器高13.5cmを測る。内外面にナデを施し、粘土紐の継目を残す。2445はやや小型の底部を欠損する。外側にタタキ後ナデ、内側にハケを施す。2444は約4/5を残し、口径15.5cm・器高23.6cmを測る。屈曲する口縁部の上端が凹面をもつ。体部の外側にタタキ後肩部にハケ状ナデ、内側にハケを施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2445は約2/3を残し、口径14.2cm・器高18.8cmを測る。体部外面上半にハケ・下半にヘラケズリ、内面上半にハケ・下半にナデを施す。いずれも、外側に煤が付着し、(2446)を除き内側に炭化物が付着する。

2447の外反する鉢は約1/2を残し、口径17.6cm・器高9.7cmを測る。外側にナデ、内側にハケ状ナデを施す。

谷2 c・d域から出土した土器は、いずれも図化できるものがなかった。

## 谷2 e域(図184・185)

e域から出土した土器は、壺7点・壺2点・鉢1点・高坏2点の計12点である。

壺には広口壺・長頸壺・細頸壺がある。2453は中型の無紋の広口壺で、底部を欠損する。口縁端部が垂下し面をもつ。頸部および体部下半にハケを施し、頸部外側にヘラミガキ、内側体部上半に指押さえ・粘土紐の継目を残す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2449はやや太日で短めの頸部で、やや扁平な体部をもつ。外側にヘラミガキ、内側にナデを施す。外側に煤が付着する。2453は口縁部を欠損し、体部内外面にハケを施す。2448・2452は大型で口頸部を残す。2452はやや外反する口縁部の上端が面をもち、内外面にハケ後ヘラミガキを施す。口縁部に三重円を施し、その間の一部を除き半裁竹管で波状紋を施す。2448は外傾する口縁部が屈曲し内傾する。外側にハケを施す。

2450の細頸壺は、口縁部をほぼ水平に丁寧に打ち欠き窓口縁とする。外側にヘラミガキ、内側の頸部にナデ・体部にハケを施す。2454は口縁端部を欠損し、外側にヘラミガキを施し、内側に指押さえ・粘土紐の継目を残す。肩部の3箇所に窓で絵画文様を施す。

壺は、小型でナデのものと、やや大型でタタキのものがある。2457はほぼ完形で、口径9.2cm・器高7.8cmを測り、全体に薄く煤が付着する。2455はほぼ完形で、口径16.7cm・器高26.0cmを測る。口縁部が屈曲する。体部の外側にタタキ後部分的にハケ、下位にヘラケズリ状ヘラミガキ、内側にハケを施す。外側に煤が多量に付着する。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2456の鉢は直口の深鉢で、約1/2を残す。口径16.4×20.5cm・器高23.9cmを測る。内傾する口縁部は楕円形に歪、端部が波打つ。体部外側にハケ後ナデ、内側の下半にハケ・ハケ状ナデを施す。口縁部および体部上半の内外面に指押さえ・粘土紐の継目を残す。外側に煤が多量に付着する。壺を作ろうとした途中で破損したものを再整形したものと思われる。

高坏には、楕形の(2458)と有稜の(2459)があり、いずれも、約4/5を残し、口径18.2cm・29.2cm、器高17.2cm・20.3cmを測る。両者共に坏部内外面および脚部外側にヘラミガキを施す。脚部に3方・8方に透かしを穿つ。

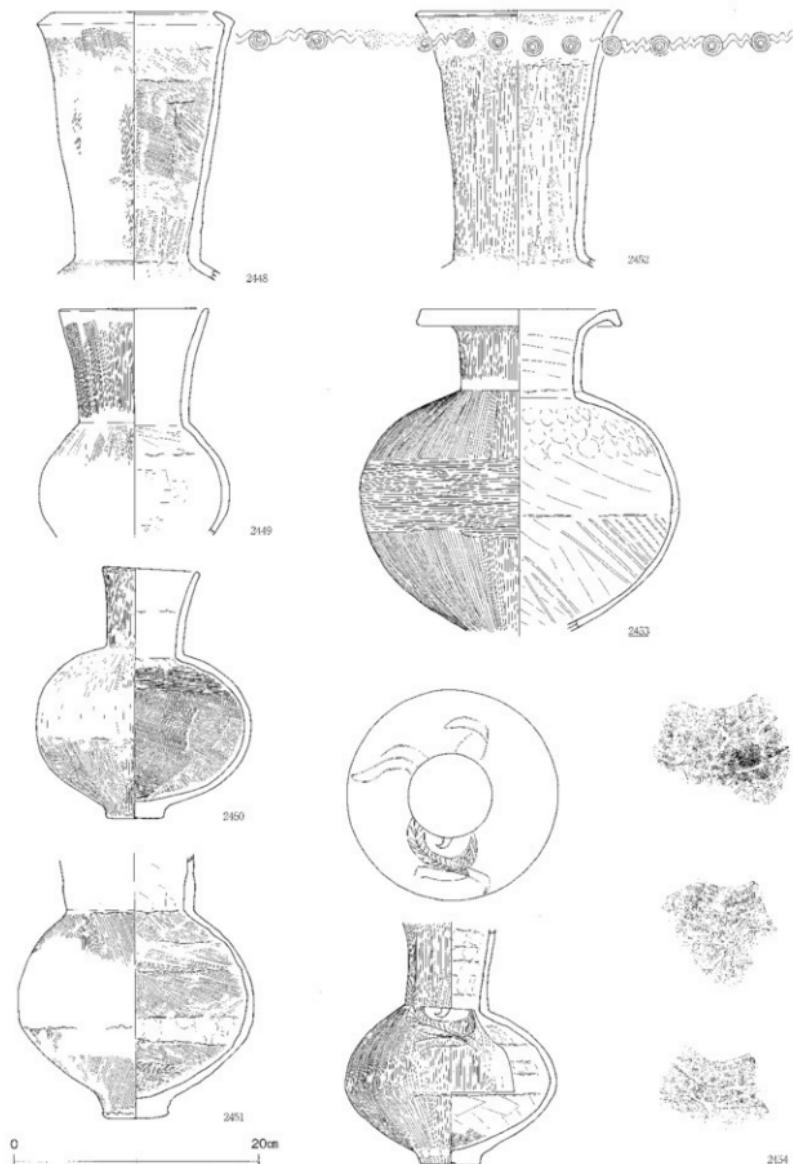


图184 谷2—e域出土土器(1)

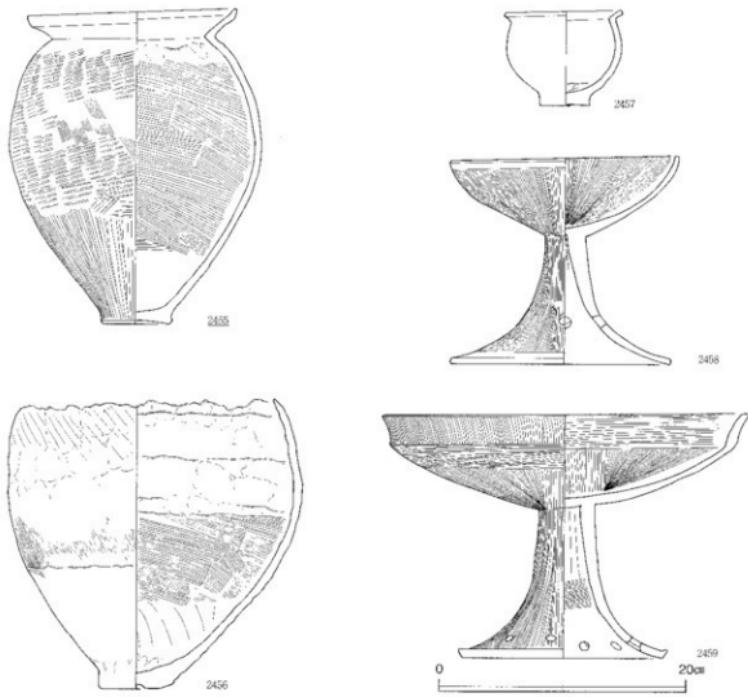


図185 谷2-e域出土土器(2)

#### 谷2 f域(図186-2460)

f域から出土したのは細頸壺1点のみである。口頭部から体部上端を残し、筒状の口頭部に広がる体部をもつ。外面にハラミガキを施し、内面に指押さえ・粘土紐の継目を残す。

以上の谷2から出土した土器に加え、埋土から出土したものがある。

壺3点・甕1点・鉢1点・高环1点の計6点である。2462は壺の肩部破片で二重竹管紋・ヘラ描き沈線紋を施す。2461は底部を欠損する直口壺で、体部の外面にハケ後ハラミガキ、内面にハケ・部分的にナデを施す。2467は大型壺の底部を残す。外面にハラミガキ、内面にハケを施す。2465の甕は底部を欠損し、体部がやや張る。体部外面に斜格子タキ後ナデ、内面にハケを施す。外面に煤が付着する。

2463は有稜の壺部破片で、内外面摩滅のため不明である。2464の外反する鉢は約1/2を残し、口径12.1cm・器高9.3cmを測る。内外面にハケ後ナデを施す。

東側居住域の第3面直上から出土した土器は、大きさは2箇所であり、その一是堅穴建物5と堅穴建物6の間に点在する、a域からe域がある。その二是、堅穴建物6と堅穴建物9の間にf域からj域がある。

a域は、堅穴建物6の北側約5mに位置し、b域はa域の東約3m東に位置する。いずれも、破片のみで図示しえなかった。

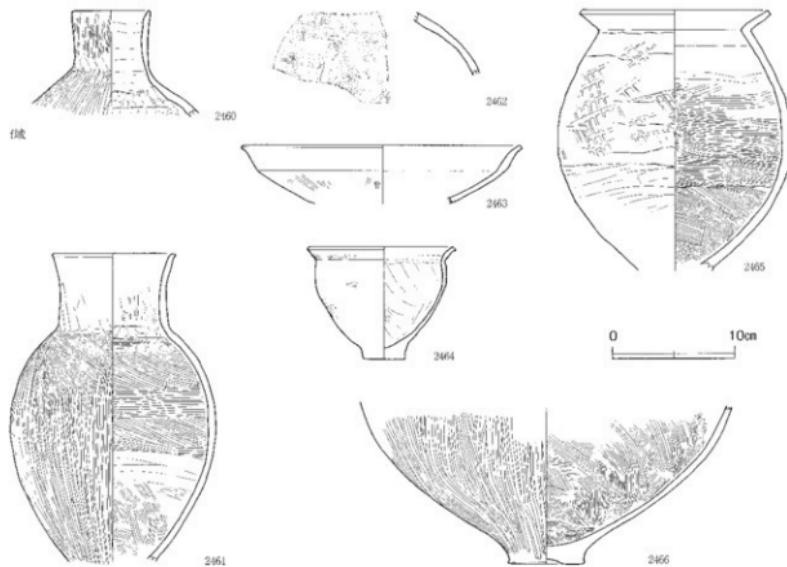


図186 谷2-f域他出土土器

東側居住域 c域 (図187・188)

c域は、堅穴建物6の北西約10mに位置し、壺2点・甕9点・鉢2点・高坏1点・器台2点の計16点が出土した。2467の広口壺は中型で底部を欠損し、外面にハケ、内面の体部下半にハケを施し、体部上半に指押さえを残す。2468は長頸甕で、約2/3を残し、口径11.6cm・器高22.4cmを測る。口縁部がやや外反し、上端部が面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。肩部に縦線4条のヘラ記号を施す。

2469の甕は約4/5を残し、口径15.6cm・器高17.0cmを測る。体部外面にタタキ後ナデを施す。内面は表面剥離のため不明である。2470の甕は、口縁部が屈曲するもので、体部内外面にハケを施す。暗褐色の角閃石を含む牛駒西麓産の土器である。2471・2475は口頭部の破片で、内外面に表面剥離のため不明である。2476は体部がやや下膨れで、体部外面にハケ後ナデ、内面にハケを施す。器壁の厚いものである。2472・2477は大型の長胴形で、前者は底部を欠損する。2477は約4/5を残し、口径18.3cm・器高32.5cmを測る。いずれも、体部外面にハケ状ナデ、内面にナデを施す。外面体部下半に煤が付着する。2873・2474は、甕の底部と思われるが、内外面に表面摩滅のため不明である。

2478の小型鉢は直口で約1/4を残す。口径12.7cm・器高7.0cmを測る。内外面ともに表面摩滅のため、不明である。2479は大型の直口で約2/3を残し、口径27.4cm・器高11.2cmを測る。内外面にヘラミガキを施す。

2480の高坏は有稜で約2/3を残し、口径24.1cm・器高15.6cmを測る。口縁部内外面にヨコナデ、坏部内外面および脚部外面にヘラミガキを施す。脚部の4方に透かしを穿つ。

器台は、無紋の(2481)と、装飾された(2482)がある。2482は約4/5を残し、口径20.5cm・器高20.0

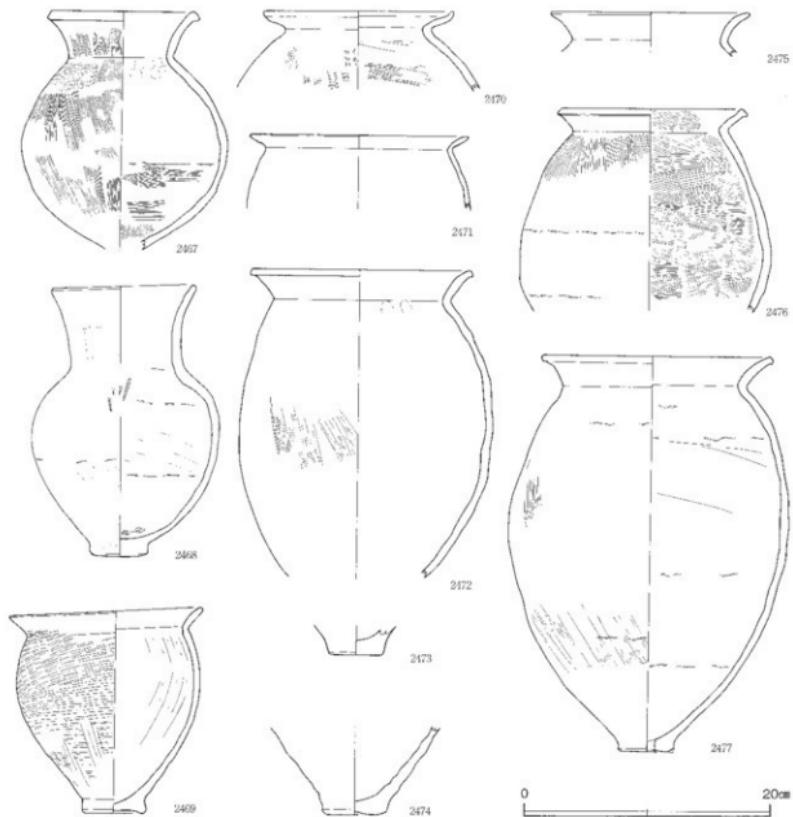


図187 東側居住域-c域出土土器(1)

cm・脚台径14.3cmを測る。表面摩滅著しいが体部外面にヘラミガキを残す。口縁部内面に不連続の櫛描波状紋、端部に波状紋・円形浮紋3個1組を施す。体部に3方2段交互に円形透かしを、脚部の3方に2個1組の透かしを3方に穿つ。

#### 東側居住域 d域 (図189~191-2511~2515))

d域は、竪穴建物5・6の中間にあり、西側にわずかに落ち込む辯地に集積していた。土器には、壺8点・壺15点・壺蓋1点・鉢4点・高杯4点・器台1点の計33点がある。

壺には長頸壺があり、口縁部が外反し壺部が垂下し凹面をもつ(2483)と、やや頭部が細長く肩部が張る(2486)、頭部が太くやや短い(2488・2489)、やや小型で口縁部が開く(2484)がある。いずれも、残りが悪く調整が不明なものが多い。2484は、頭部の境目に刺突紋を部分的に施す。2486は、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2487・2490は体部から底部を残すもので、長頸壺と思われる。

壺には、タタキのものとハケのもの、ナデのものがある。2491は約4/5を残し、口径13.0cm・器高

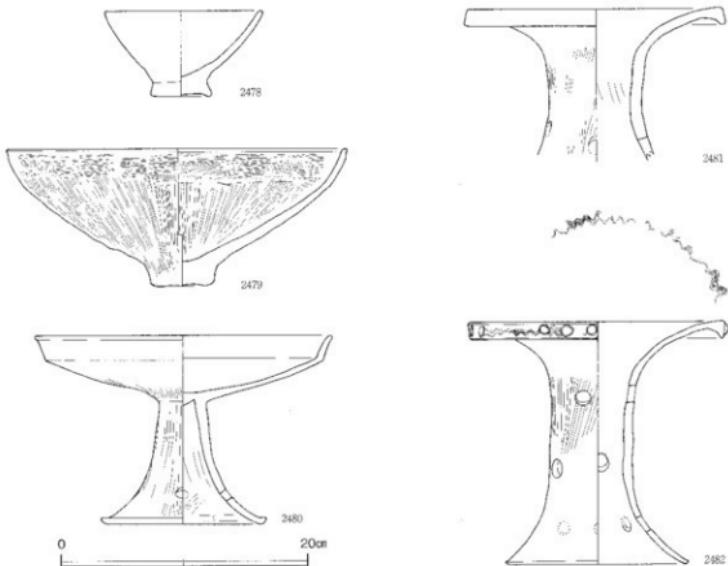


図188 東側居住域-c域出土土器(2)

13.6cmを測る小型である。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2500は小型で約2/3を残し、口径14.0cm・器高13.5cmを測る。口縁部が屈曲し、内外面に煤が付着する。2495・2502は外面にタタキ後ハケ、(2503・2504)はハケ、(2498～2501・2505)は外面にナデを施す。2491は約1/2を残し、口径16.4cm・器高24.3cmを測る。口縁端部がわずかに立ち上がる。外面にナデを施す。外面の体部中央に煤が、内面の下位に炭化物が付着する。2492は約2/3を残し、口径17.8cm・器高25.4cmを測る中型のもので、やや肩の張る体部をもつ。体部外面にナデを施し、中央部に煤が付着する。2510は約1/2を残し、口径13.8cm・器高26.0cmを測る。体部外面にハケ状ナデを施し、中央に煤が付着する。2494は約2/3を残し、口径16.8cm・器高29.0cmを測るやや大型のものである。体部外面にナデを施し、中央部に煤が付着する。2495は約9/10を残し、口径16.5cm・器高28.0cmを測る大型のもので、体部がやや張る。体部外面にタタキ後中位にハケ・下位にナデ、内面にナデを施す。外面の体部下位を除き煤が多量に付着する。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2496の壺蓋は、つまみ部端部を欠損する。口径17.2cmを測り、内外面にナデを施す。内面に煤が付着する。

鉢には、直口のものと外反するもの、有孔のものがある。2508は直口の楕形で約4/5を残し、口径17.2cm・器高8.1cmを測る。外面は表面剥離のため不明で、内面にナデを施す。外反する(2506)は底部を欠損し、外面にハケ後ナデ、内面にハケを施す。2507は約1/5を残し、口径17.2cm・器高8.1cmを測る。内面にヘラミガキがわずかに残る。2509の有孔鉢は約2/3を残し、口径15.8cm・器高11.6cmを測る。内外面にナデを施す。

高坏には有稜のものと、脚部のみを残すもの(2512・2513)と、口縁部を欠損する(2515)がある。2511

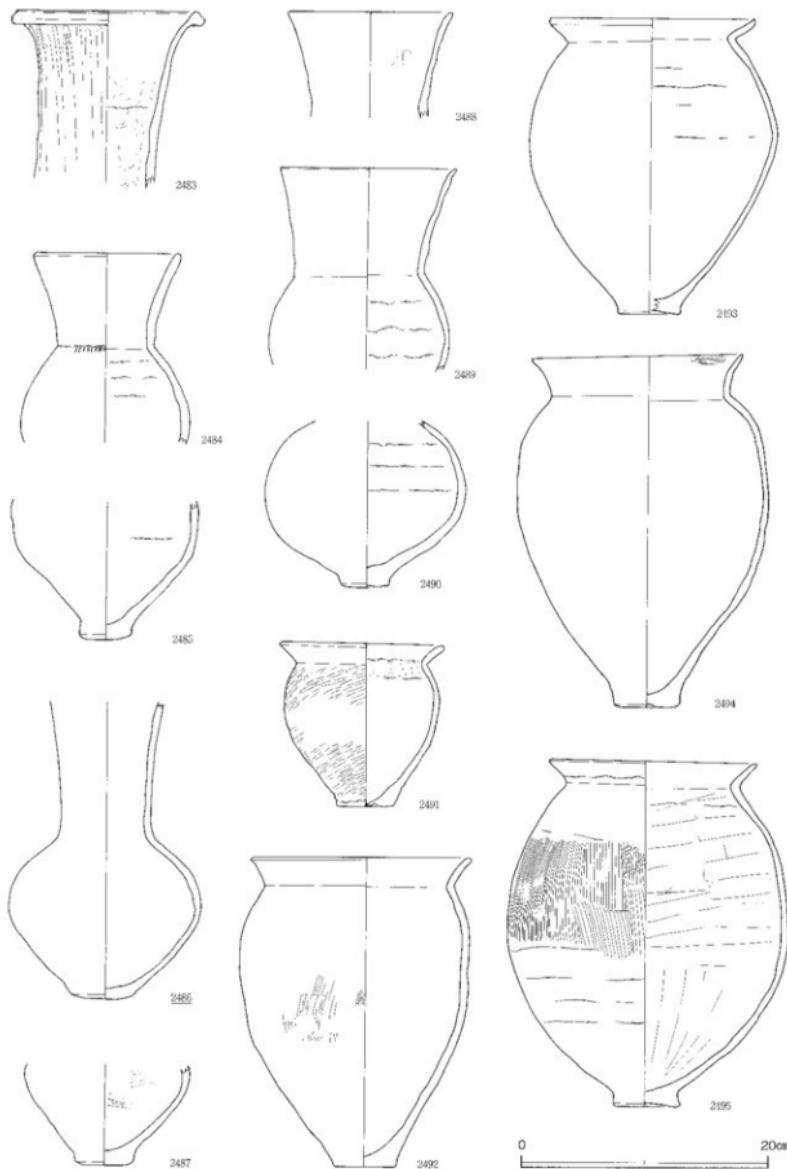


図189 東側居住域-d域出土土器(1)

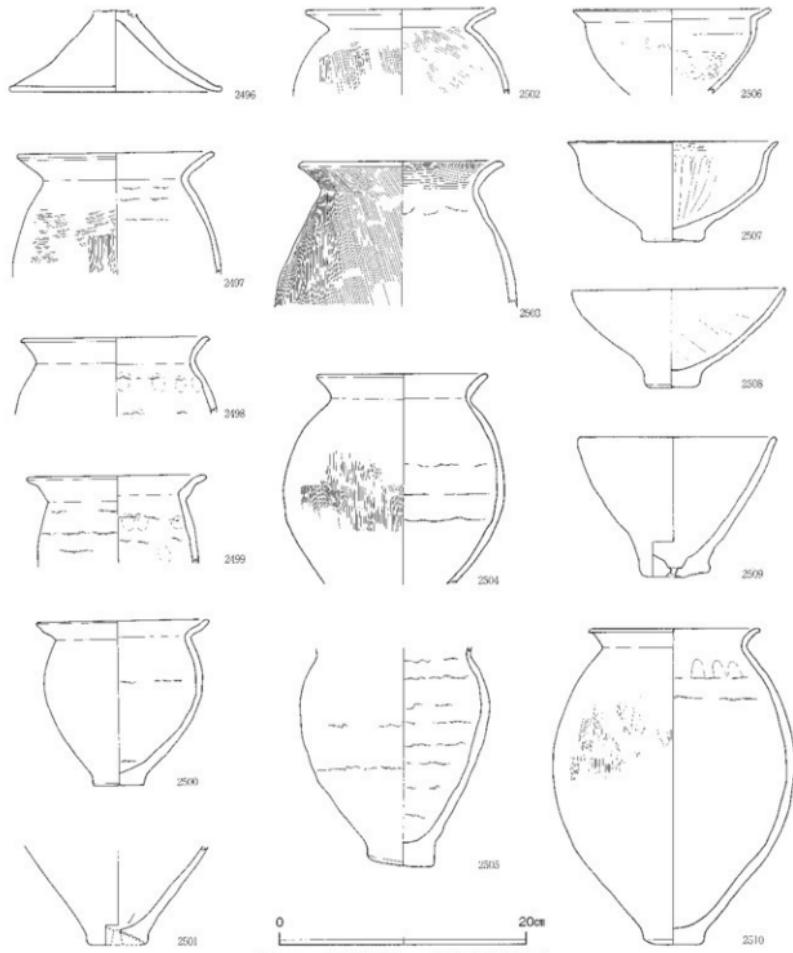


図190 東側住居域-d域出土土器(2)

は約2/3を残し、口径25.0cm・器高16.2cmを測る。脚部外面にわずかにヘラケズリを残す。脚部の4方に透かしを穿つ。2512は透かしが無く、(2513)は4方に透かしを穿つ。2515は小型のもので、楕形の坏部をもつと思われる。

2514の器台は約1/2を残し、口径18.2cm・器高14.9cm・脚台径14.7cmを測る。口縁部の端部はわずかに垂下し面をもち、脚台端部が面をもつ。外面の体部にハケを施す。透かしは穿たれない。

#### 東側居住域-e域(図191-2516~2520)

e域は、d域の南側に位置し、出土した土器は、壺1点・甕2点・高坏1点・器台1点の計5点であ

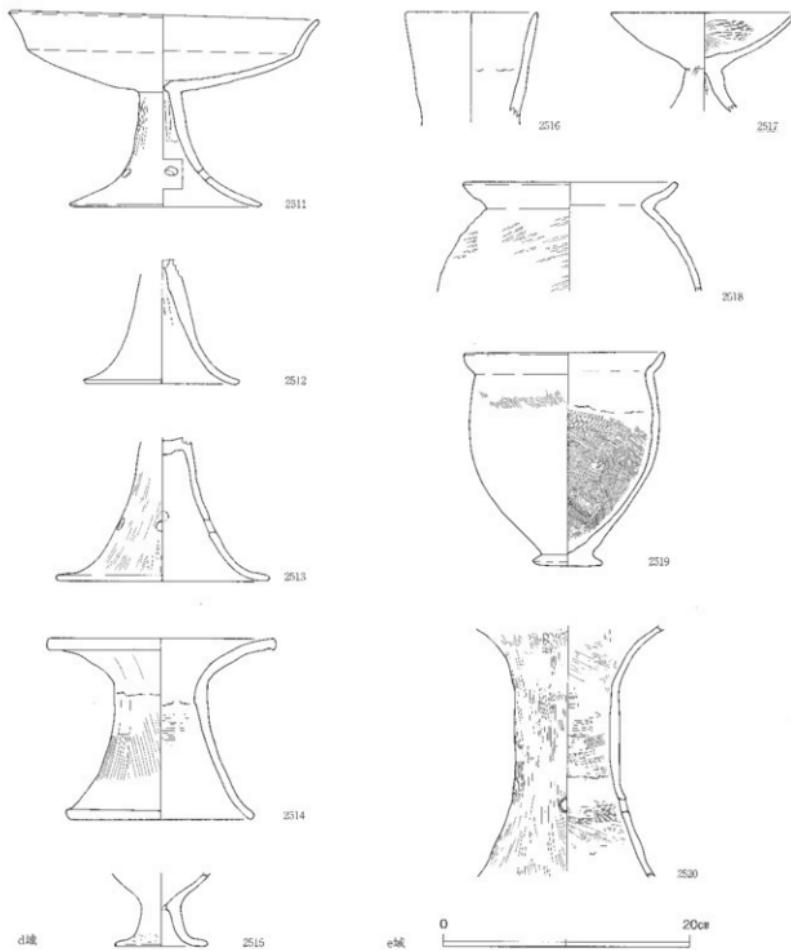


図191 東側居住域-d · e域出土土器

る。

2516の壺は、長頸壺の口頸部破片で、内外面全体に表面摩滅のため不明である。

壺にはタキの(2518)と、ハケの(2519)がある。2519は約4／5を残し、口径15.9cm・器高17.5cmを測る。やや小型のもので、U縁部が内湾気味に外方へのび、頸部が屈曲し、内面に明確な棱を持つ。わずかに膨らむ体部に、底底部が外側に拡張する平底である。外面にハケ後ナデ、内面にハケを施す。外面の体部中位に煤がわずかに付着する。

2517の高壺は、脚台部を欠損する楕形のもので、壺部内面にハケを施す。暗褐色の角閃石を含む生駒

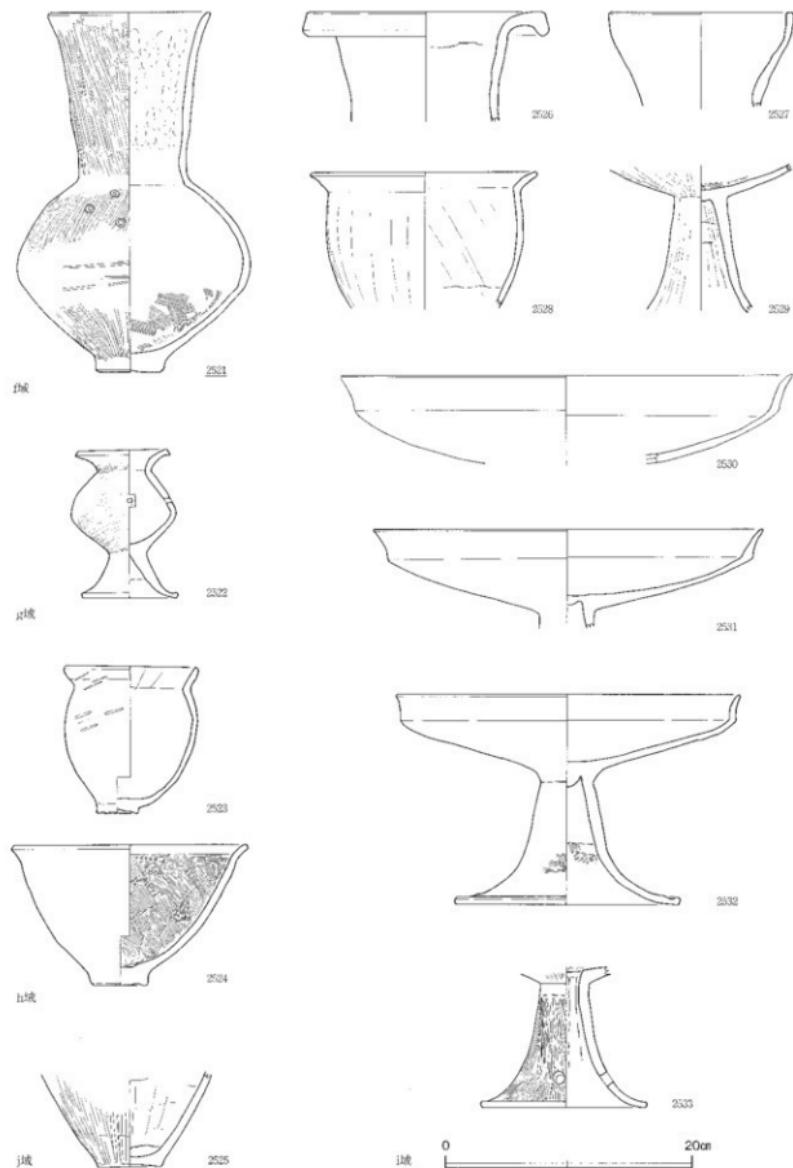


図192 東側居住域-f～j域出土土器

西麓岸の土器である。

2520の器台はやや大型のもので、口縁部端部および脚台端部を欠損する。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。体部下位の4方に透かしを穿つ。

#### 東側居住域 f 域 (図192-2521)

f 域は、竪穴建物 6 の南東の谷 2 と溝51・52に挟まれた部分に位置し、出土した土器は、長頸壺 1 点のみである。

2521は約 2 / 3 を残し、口径13.4cm・器高29.7cmを測るやや大型である。外面にヘラミガキ、内面の体部下半にハケを施し、内面の頸部上半にナデを施す。肩部に竹管紋を 3 個施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

#### 東側居住域 g 域 (図192-2522)

g 域は、溝52を挟んで西側に流路 3 右岸 d 域がある。出土した土器は、小型の台付広口壺が 1 点のみである。

2522は完形で、口径 7.2 cm・器高12.2cmを測る。外反する口縁端部が凹面をもち、やや偏平な体部に「ハ」の字状に広がる台部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。外面の頸部にハケ・体部にヘラミガキ・台部にナデを施す。体部中位に径 3 mm の焼成前の穿孔がある。

#### 東側居住域 h 域 (図192-2523・2524)

h 域は、竪穴建物 6 の南側約10mに位置し、出土した土器は壺と鉢が各 1 点である。

2523の壺は小型で約 4 / 5 を残し、口径10.7cm・器高12.2cmを測る。体部外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。2524の外反する口縁部をもつ鉢は、約 2 / 5 を残し、口径18.8cm・器高11.5cmを測る。外面は表面剥離のため不明で、内面にハケを施す。外面に体部の一部に煤が付着する。

#### 東側居住域 i 域 (図192-2526-2533)

i 域は、やや南よりの溝54の西側付近に位置し、出土した土器には、壺 2 点・壺 1 点・高坏 4 点の計 7 点がある。

壺には広口壺と直口壺があり、いずれも、口頸部破片である。2526は、外反する口縁端部が垂下し面をもつ。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2527は、内湾気味に外方へのびる口縁部の上端部が面をもつ。いずれも、表面摩滅のため、調整は不明である。

2528の壺は口頸部から体部破片で、頸部内面の屈曲部が明確な稜をもつ。内外面にナデを施し、外面に煤が付着する。

高坏は有稜のもので、(2530・2531)は坏部破片で、前者は口径37.0cmを測る大型のものである。2534は約 2 / 5 を残し、口径27.8cm・器高17.2cmを測る。口縁部は屈曲しわずかに外反する。脚台端部はわずかに立ち上がり面をもつ。以上の高坏は、表面摩滅著しく、調整が不明である。2533は脚部のみを残し、外面にヘラミガキを施す。脚部の 3 方に透かしを穿つ。

#### 東側居住域 j 域 (図192-2525)

j 域は、溝54を挟んで i 域の東側に位置する。

出土した土器は、壺が 1 点のみである。2536は底部のみを残し、外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。内面に炭化物を多量に付着する。

流路 3 の肩部から出土した土器は、第 3 面と密接な関係を示すことから、肩部から出土した現位置を保っていると思われる土器に関しては、遺構の項で記載してきたが、ここでは、出土位置が特定できな

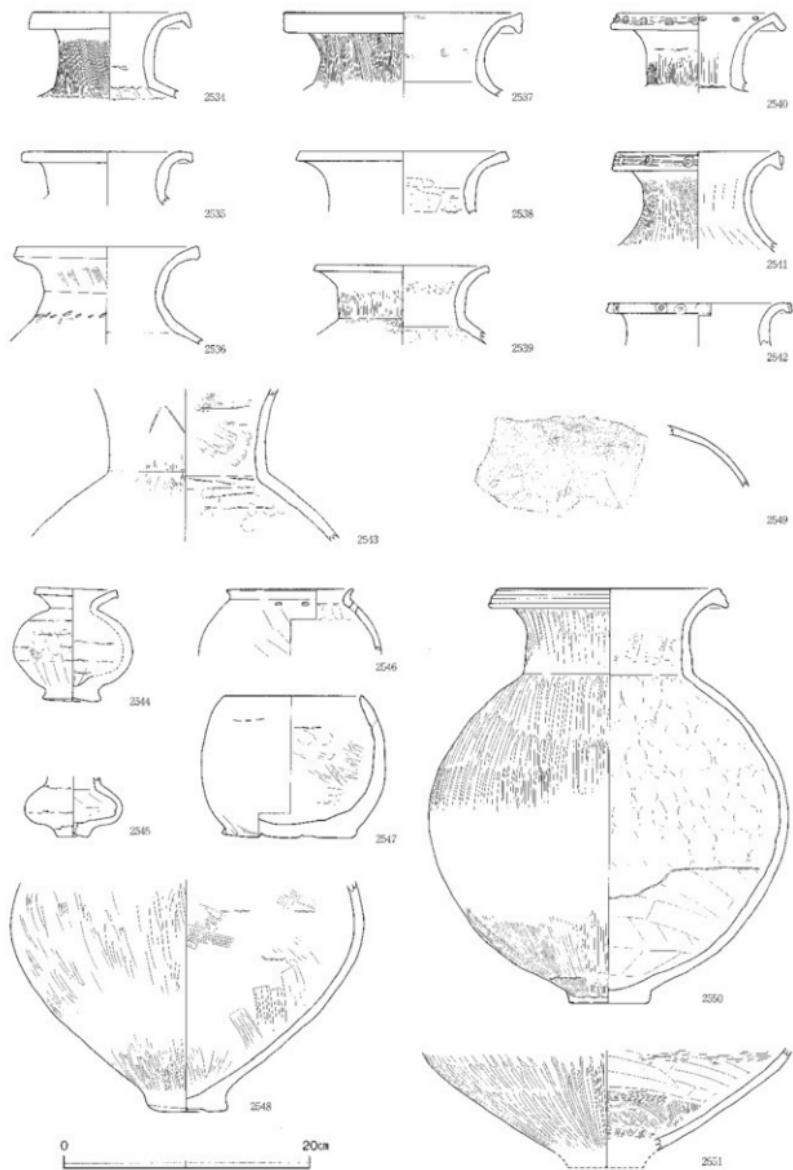


図193 流路3上層出土土器(1)

い埋土内から出土した土器を観ていくこととする。

流路3の埋土から出土した土器は、上層の砂礫層と下層のシルト層の2層に分けられ、下層は、さらに、左岸側と右岸側に区分される。

### 流路3 砂礫層 (図193~200)

流路3の砂礫層から出土した土器には、壺42点・甕37点・鉢11点・水差し1点・高杯11点・器台6点の計109点を数え、他に、弥生時代前期の上器1点と縄文時代後・晩期の土器が各1点出土している。

壺には、広口壺・長頸壺・直口壺・無頸壺がある。広口壺には、ミニチュア・小型・中型・大型があるが、形態の判るものはわずかで、ほとんどのものが口頸部破片である。2547のミニチュア壺は、口縁部を欠損する。偏平な体部に突出する上げ底をもつ。2546は完形の小型で、口径6.4cm・器高9.2cmを測る。体部外面にハケ後ナデ、内面にナデを施す。体部の外外面に粘土紐の継目を残す。中型・大型のものには、外反する口縁部が面をもつ(2535・2538)と、わずかに垂下表面をもつ(2536・2539・2542・2550)、垂下面をもつ(2534・2540)、わずかに立ち上がり垂下する(2537・2541)がある。2536・2541の頸体部の境目が緩やかにのびる。2534・2536・2539が頸部外面にハケを施し、(2540・2541)がハケ後ヘラケズリを施し、(2537)がヘラミガキを施し、他は、ナデを施す。2540は、口縁部内面に竹管紋・端部に櫛撻直線紋を3/4周後竹管紋を施す。2541は口縁端部に縦凹線紋3条・円形浮紋上竹管紋を、(2542)が円形浮紋上竹管紋を施す。2536は、頸体部の境目に刺突紋を1周させる。2550は約2/3を残し、口径17.6cm・器高34.1cmを測る。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。内面の体部上半に、指押さえを残す。口縁端部に縦凹線紋2条を施す。2543は頸体部上端を残し、頸部にヘラ記号を施す。2549は肩部破片で、櫛撻波状紋間直線紋を施す。2535・2543・2548は、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

直口壺は、やや小型で外反する口縁部をもつものと、中型のものがある。2565は約1/2を残し、口径10.0cm・器高16.1cmを測る。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。内面の体部上半に指押さえを残す。2566は約2/3を残し、やや外方へ開く口縁部の罐部が、外方へわずかにつまみ出され、上端面をもつ。外向の頸部にナデ・体部にハケ後下位にヘラミガキ、内面の体部下半にハケを施し、内面の口縁部から体部上半にかけて指押さえ・粘土紐の継目を顕著に残す。口頸部に縦線6条の窓記号を施す。器壁の部厚いものである。

長頸壺には、外反し口縁端部が垂下表面をもつものと、外方へのびるものがある。2552は大型の口頸部を残すもので、外向および内面の口縁部にヘラミガキ、内面の頸部にハケを施す。口縁端部には縦凹線紋3条を施す。2553は口頸部から体部上半を残し、口縁の端部が外方へわずかにつまみ出され面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。内面に粘土紐の継目を顕著に残す。2557は、前者同様の口縁端部をもち、外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。2561は、端部が丸みをもち、外面にヘラミガキを施し、内面に指押さえを残す。2558は上端面をもち、外面にハケ後ヘラミガキ、内面にナデを施す。

2560はほぼ完形で、口径11.8cm・器高26.8cmを測る。わずかに開く口縁部の端部が丸みをもち、球形の体部をもつ。外面にハケ、内面の頸部にナデ・体部下半にハケを施し、内面の体部上半に指押さえ・粘土紐の継目を残す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2564はやや大型で約4/5を残す。口径13.8cm・器高32.3cmを測る。外方へ開く口縁部の上端部が面をもち、肩の張る体部をである。外面にハケ後肩部以下にナデ、内面の口頸部および体部下半にハケを施し、内面の体部上半に指押さえを残す。頸部下位から体部上半にかけて、器壁が部厚い作りである。

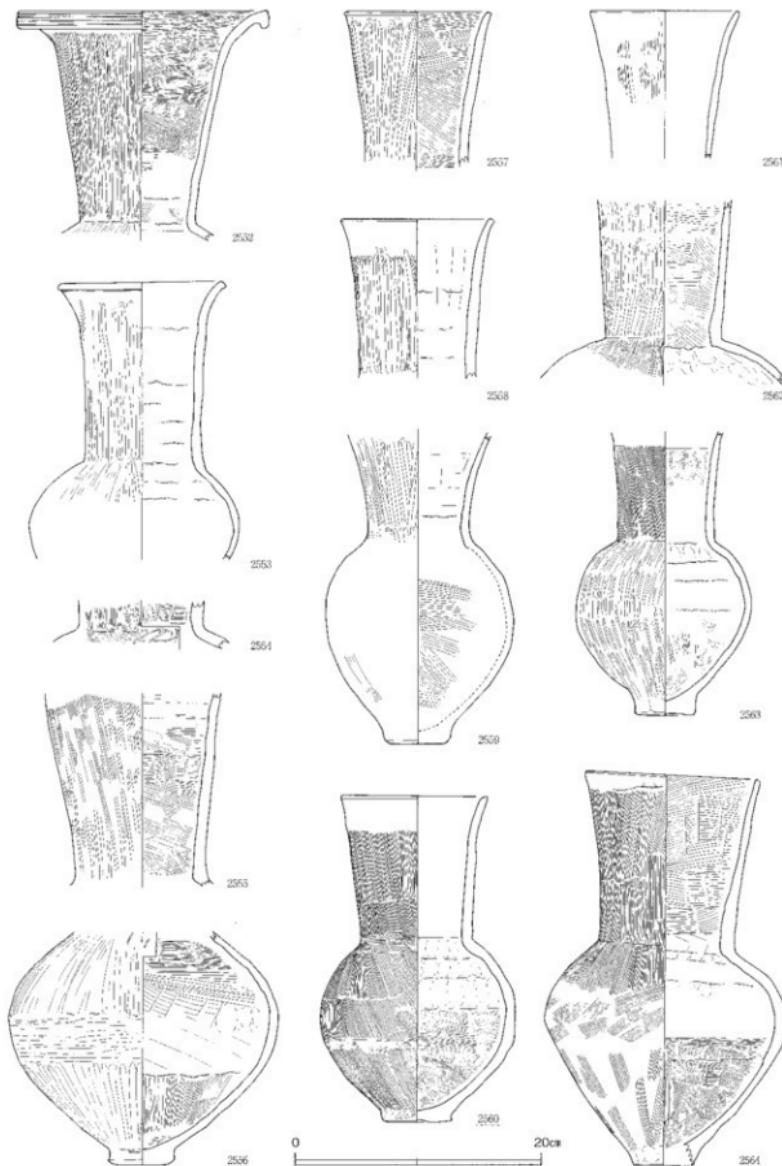


圖194 流路3上層出土土器(2)

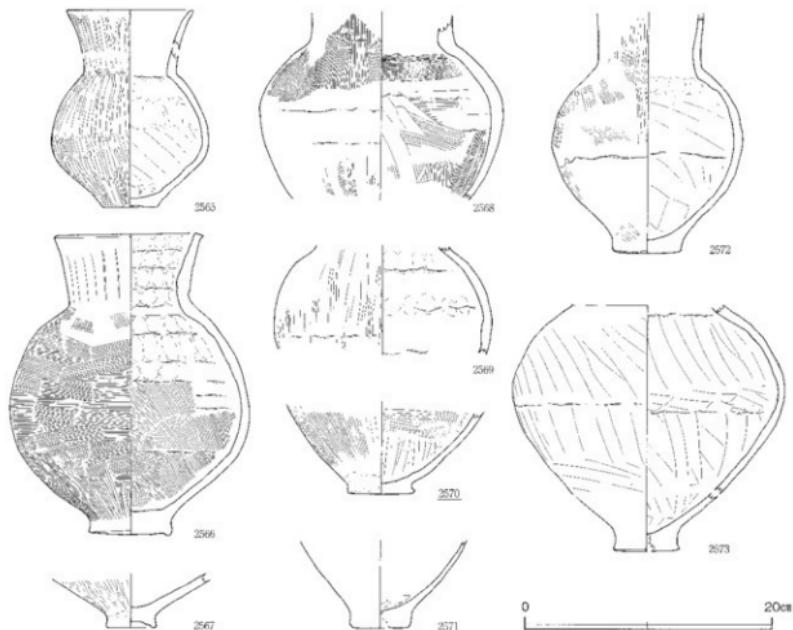


図195 流路3上層出土土器(3)

2555は大型で、口縁部端部を欠損する。接合はしなかったが、形態・調整・胎土などが類似することから2556が同一個体と思われる。外面の頸部にハケ後ヘラミガキ、体部にヘラミガキ、内面にハケ後部分的にナデを施す。肩部に縦線3条の範記号を施す。2554は小破片で、肩部にヘラで絵画文を施す。2562は頸体部を残し、体部が広がることから、大型になると思われる。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。他に、2568・2573が大型のものである。両者共に肩部が張り、前者はハケ後ナデ、後者はナデを施す。2568は器壁が厚く、外面の肩部以下に煤が多く付着する。2559・2563・2572は、いずれも、口縁端部を欠損する。外面の頸部にハケ、体部にはそれぞれヘラミガキ、ヘラミガキ後下半にナデ、ヘラミガキを施す。内面にハケないしはナデを施す。2567・2570・2571は、いずれも底部破片で、ハケ・ヘラミガキ・ナデをそれぞれに施す。2570は暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

無頸壺は、口縁部が短く外反するものと、内傾するものがある。2546は口頸部破片で、球形の体部をもつと思われる。内外面にナデを施す。口縁部下に2個1対の縫孔を穿つ。2547は約2/3を残し、口径11.0cm・器高11.6cmを測る小型のもので、内傾する口縁部にやや膨らむ体部、ドーナツ状の粘土を貼り付けた様な平底である。外面にナデ、内面にハケおよびナデを施す。外面の体部および底部に粘土紐の織目を残す。器壁の厚いものである。

2612は体部破片で、体部外面にハケ後ヘラミガキ、内面にハケを施し、体部上半に指押さえを残す。貼付突帯完備横波状紋を施す。形態から細型壺の体部と思われる。

壺には、タタキのものと、ハケのもの、ナデのもの、ヘラケズリのものがある。

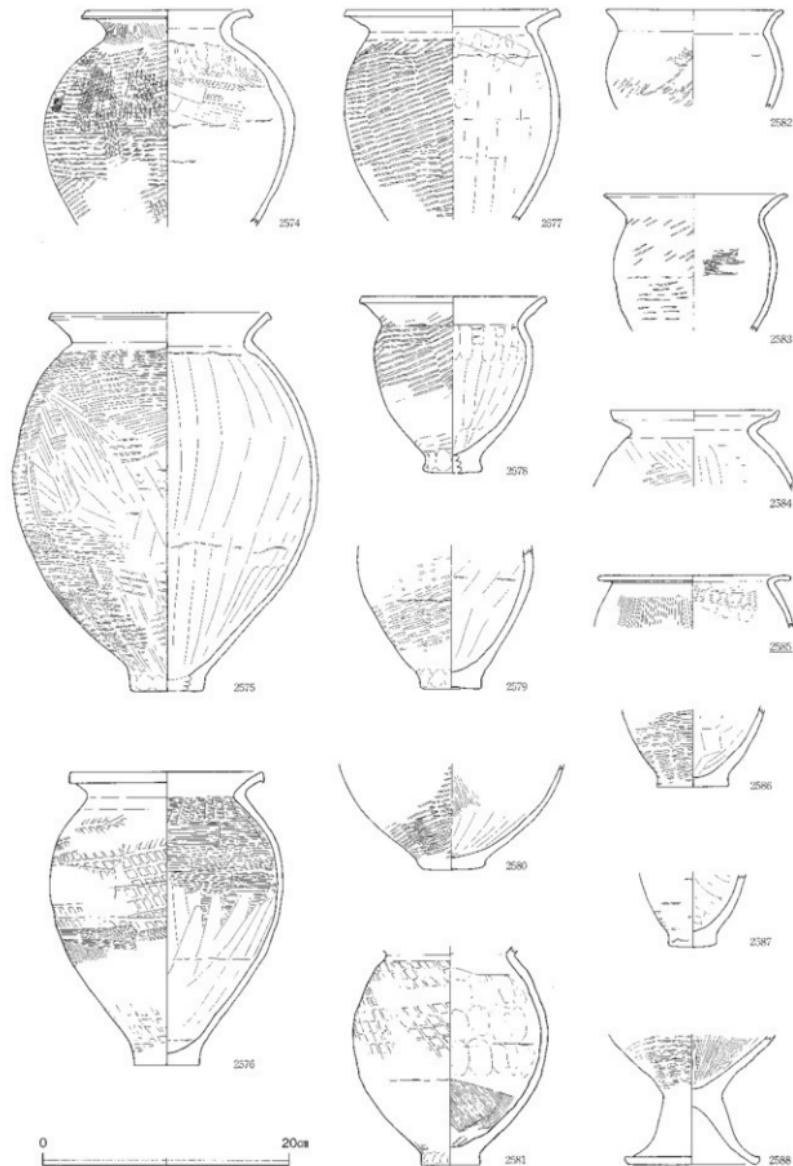


図196 流路3上層出土土器(4)

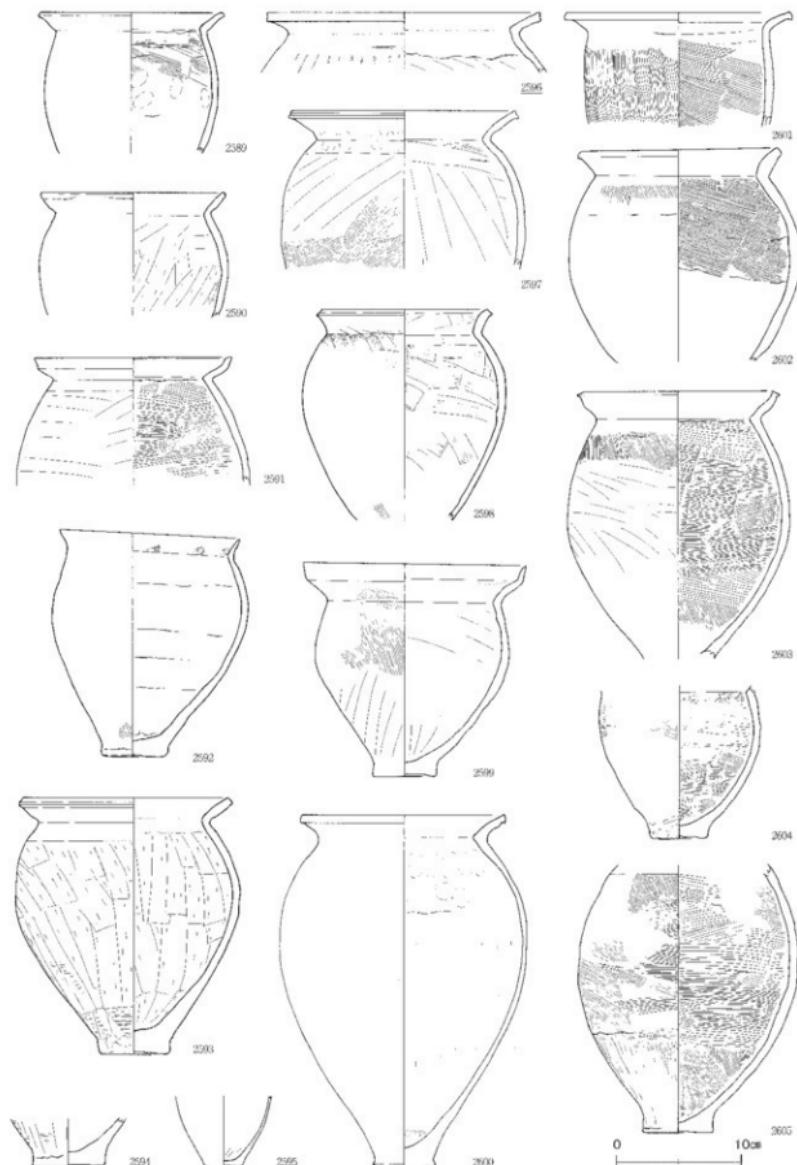


図197 流路3上層出土土器(5)

2578は小型で約2／5を残す。口径14.7cm・器高14.5cmを測る。外面体部にタタキ後下半にナデ、内面に指ナデを施す。

2574は、形態的には広口壺であるが、外面に煤が多量に付着することから、甕に分類した。底部を欠損する。短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し凹面をもち、肩部が張る。外面の頸部にハケ・体部にタタキを重ねる。内面の体部上半にハケ・下半にナデを施す。器壁の厚い作りである。2577は底部を欠損する。頸部内面の屈山部が稜をもつ。体部外面にタタキ、内面にヘラケズリを施す。

2579～2581・2586・2587がタタキのものである。2576は約4／5を残し、口径15.5cm・器高24.0cmを測る。外反する口縁部の端部がわずかに垂下し、面をもつ。体部外面に斜格子タタキ後中位にハケ・下位にナデ、内面の肩部にハケ・以下にヘラケズリを施す。外面中位に煤が、内面の下位に炭化物が多量に付着する。2581は口頭部を欠損する。体部の外面に斜格子タタキ後ナデ、内面下位にハケを施す。体部内面の上半に指押さえを残す。外面の体部上半に煤が付着する。2582・2584は、体部外面にタタキ後ハケおよびハケ状ナデを施す。2588は台付甕の体部下位から台部を残す。体部外面にタタキ・台部にナデ、内面にヘラミガキを施す。

2585は口頭部破片で、水平に近く口縁部のがび端部が丸く終わる。体部外面にヘラミガキ、内面の上端にヘラミガキ・以下にナデを施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2575は大型で約2／3を残し、口径18.0cm・器高31.1cmを測る。体部外面にタタキ後粗いヘラミガキ、内面にハケ状ナデを施す。外面底部を除き煤が、内面体部下位および底部に多量の炭化物が付着する。

2599は口縁部が屈曲し立ち上がるもので、約2／3を残し、口径17.8cm・器高17.6cmを測る。外面にハケ後下半にナデ、内面にナデを施す。外面に煤が付着する。2603は底部を欠損し、内湾気味にのびる口縁端部が凹面をもつ。外面の肩部にハケ・以下にナデ、内面にハケを施す。2604は、器壁が部厚いものである。2598は中型で約4／5を残し、口径18.2cm・器高23.4cmを測る。体部外面にハケ後下半にナデ、内面にハケ後ナデを施す。2607は大型で約1／3を残し、口径17.4cm・器高28.9cmを測る。外面にハケ後下半にナデ、内面の肩部にヘラケズリ・以下にハケを施す。以上の甕は、いずれも、外面に煤が付着する。2608は大型で中期の形態を残す。約2／5を残し、口径23.9cm・器高29.7cmを測る。口縁端部がわずかに立ち上がり面をもち、屈曲する頸部の内面に明確な稜をもつ。卵形の体部に突出し平底である。体部の内外面にハケを施す。

2618・2619は台付のものである。いずれも、器壁が部厚い。2589～2592・2596・2598・2599は体部にナデを施す。2592は中型で約1／2を残し、口径14.6cm・器高18.7cmを測る。内外面にナデを施し、内面に粘土紐の継目を残す。2596は大型の口縁部破片で、口縁端部がわずかにつまみ上げられ面をもつ。体部外面にナデ、内面にヘラケズリを施す。肩部にヘラ描きの部分的に沈線を施し、以下に斜線紋(?)を施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2593は完形で、口径16.5cm・器高21.0cmを測る中型のものである。体部外面にタタキ後ヘラケズリ、内面にヘラケズリを施す。外面の体部中位以上に煤が多量に付着し、内面の体部下半に炭化物が付着する。

鉢には、直口のものと、外反するもの、有孔鉢がある。2616は小型の片口のもので約2／3を残し、口径10.3cm・器高8.8cmを測る。内外面にナデを施す。2610は口縁部破片で、内湾気味にのびる口縁部である。内外面にヘラミガキを施す。2611は楕形のもので、外面体部下半にハケを施す。2614は小型で約2／5を残す。口径14.3cm・器高9.0cmを測る。内外面とも表面摩滅のため不明である。2613は大型

で約1/3を残し、口径31.0cm・器高10.4cmを測る。外面にハケ後ナデ、内面にハケを施す。

2617の有孔鉢は約4/5を残し、口径13.5cm・器高12.3cmを測る。わずかに内湾する口縁部の端部が面をもつ。外面にタタキ後ナデ、内面にハケを施す。

2615は口縁部破片で、屈曲する口縁部がさらに立ち上がるもので、体部内外面にナデを施す。外面に煤が付着する。2620は小型で約4/5を残し、口径8.1cm・器高6.8cmを測る。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。肩部に刺突紋・底側部にヘラ描沈線紋4条を施す。2621は約1/3を残し、口径17.9cm・器高13.2cmを測る。内湾気味に外方へのびる口縁部は、内面端部に強いヨコナデを施し、内外面にヘラミガキを施す。肩部に刺突紋を施す。体部下半内外面に煤が付着する。2622・2623は約1/3を残し、口径15.3cm・16.6cm、器高8.5cm・8.2cmを測る。前者は外面にタタキ後ナデを施し、内面は表面摩滅のため不明であり、後者は内外面にナデを施す。

2609の水差しは把手部を含む破片で、把手は口頭部に張り付き、口縁端部と一体化する。体部外面にタタキを施す。全容は不明である。

高坏には、楕形のものと、有稜のものがあり、他に、脚部のみを残すものがある。2627は脚台部を欠損し、楕形の坏部に中空の脚柱部をもつ。坏部内外面および脚柱部外面にヘラミガキを施す。脚部の3方に透かしを穿つ。2626は坏部のみを残し、やや深めの坏部をもつ。外面にヘラミガキを施す。口縁端部に凝凹線紋1条を施す。口縁部内外面の一部に煤が付着する。2624は約1/2を残し、口径29.3cm・器高17.6cmを測る。わずかに外反する口縁部の端部が四面をもつ。口縁部内外面にヨコナデ、坏部内外面および脚部外面に、ヘラミガキを施す。脚部の3方に透かしを穿つ。2625は約2/3を残し、口径33.7cm・器高21.3cmと大型である。外反する口縁端部が面をもち、皿状の坏部に裾広がりの脚部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。口縁部外面にヨコナデ後波状紋風のヘラミガキ・坏部外面にハケ後ヘラミガキ、脚部外面および内面にヘラミガキを施す。脚柱部に2方・脚台部の4方に透かしを穿つ。2632は脚部のみを残し、脚台端部が面をもつ。外面にハケを施す。脚柱部に範描沈線紋3条を施し、3方に透かしを穿つ。

2635の器台は口縁部のみを残し、外反する口縁部が垂下し面をもつ。内外面にヘラミガキを施す。口縁端部に櫛描波状紋を施す。2636は約2/3を残し、口径23.5cm・器高24.4cm・脚台径17.8cmを測る。外反する口縁部の端部が垂下し面をもつ。やや長い筒状の体部に裾広がりの脚台部の端部が面をもつ。外面および口縁部内面にヘラミガキを施し、内面の体部以下に指押さえおよび粘土継の継目を残す。口縁端部に棒状浮紋2帯を1箇所円形浮紋を2個ないし3個1組で施し、体部に凝凹線紋3条・半裁竹管紋を1周させ、半裁竹管紋3個・凝凹線紋5条・半裁竹管紋を1周させる。3方に3段透かしを穿つ。2637は、脚台部のみを残す。2638は脚台部を欠損し、外反する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し面をもつ。外面および口縁部内面にヘラミガキ、体部内面にナデを施す。体部の4方に径約2cmの透かしを穿つ。2639は、口縁部端部および脚台部端部を欠損する。2640は約4/5を残し、口径17.0cm・器高12.0cm・脚台径13.3cmを測る。外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもち、筒状の体部に、裾広がりの脚台端部が面をもつ。外面にヘラミガキを施し、内面が表面摩滅のため不明である。口縁端部に刻み目を施し、体部の4方に2段交互に透かしを穿つ。

2641は弥生時代前期の外反する口縁をもつ把手付き鉢で、口径が約50cmと大型のものである。内外面ともにナデを施す。2642は口縁部破片で、口縁部が短く外反し、肩部が屈曲する浅鉢である。内外面ともに表面摩滅のため不明である。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。繩文晩期のものであ

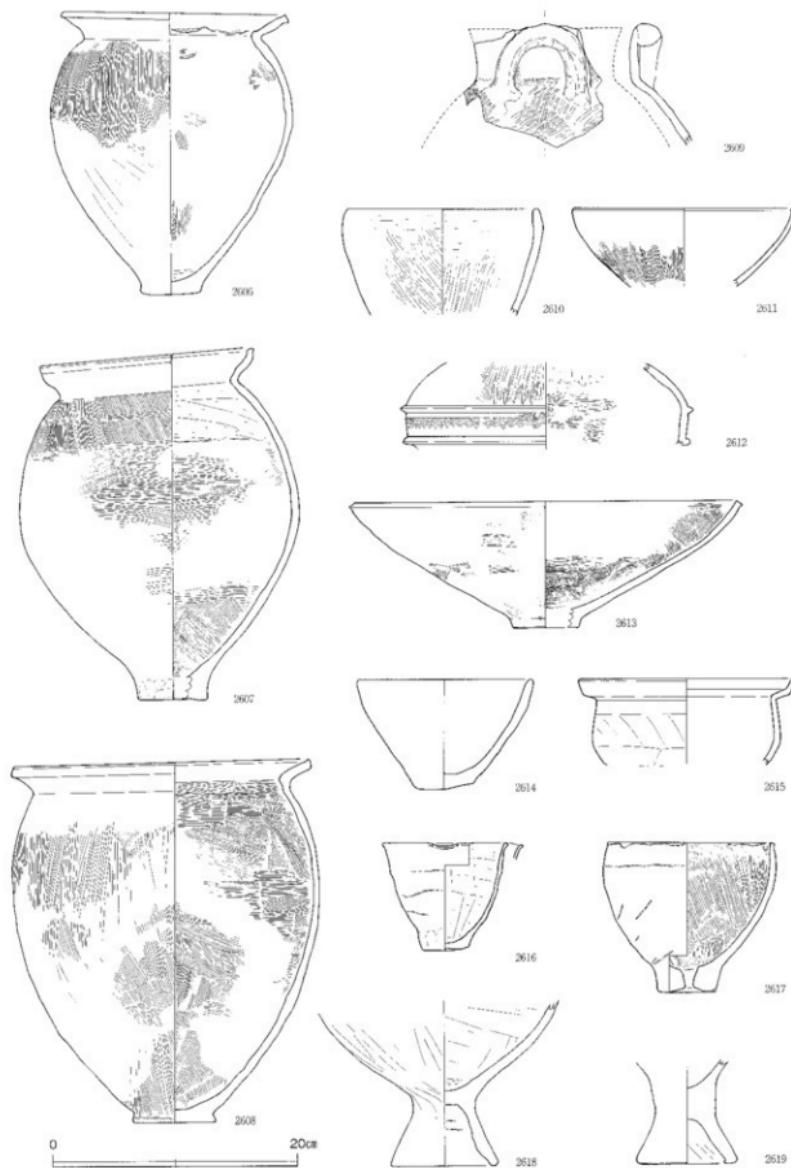


圖198 流路3上層出土土器(6)

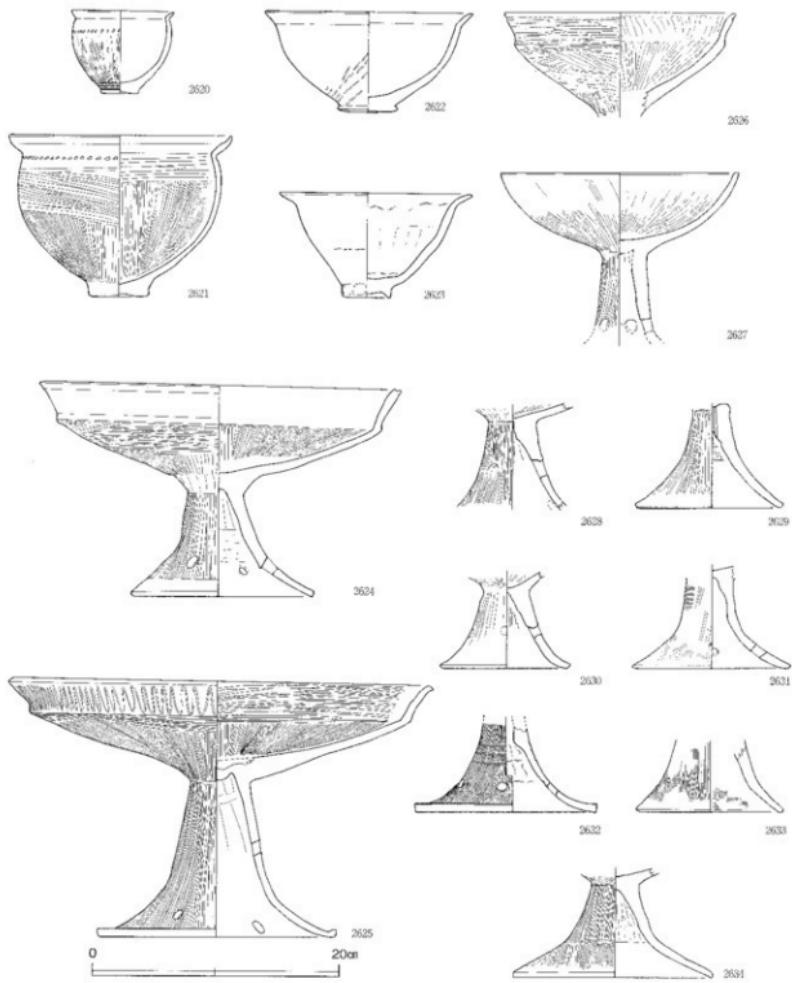


図199 流路3上層出土土器(7)

る。2643は体部破片で、北白川上層の縄文時代後期と思われる。

#### 流路3右岸 下層(図201・202)

流路3右岸下層から出土した土器には、壺9点、甕13点、鉢4点、高坏5点の計31点がある。

壺には、広口壺・直口壺・長頸壺・細頸壺がある。2644の広口壺は、口頸部から体部上半を残し、外反する口縁部の端部がわずかに垂下し凹面をもつ。外面の頸部から後体部中位にハラミガキ、内面の中位にハラケズリを施し、体部内面の上半に指押さえを残す。器壁の部厚いものである。2645は口縁

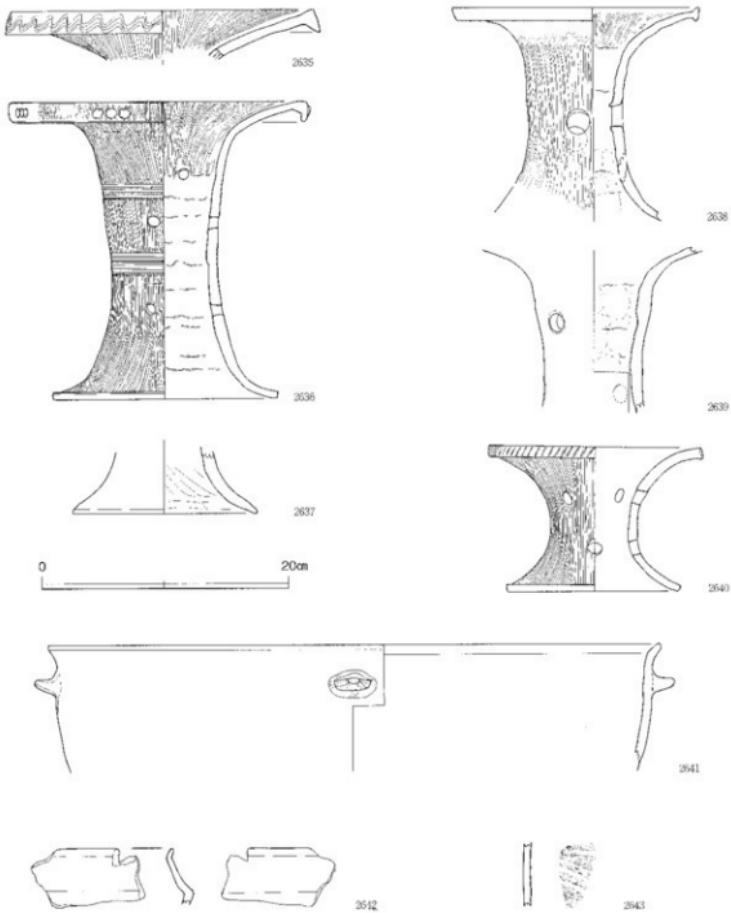


図200 流路3上層出土土器(8)

端部を欠損する。外面にヘラミガキ、内面の頭部にヘラミガキ・体部中位にハケ・上位および下位にナデを施す。頸体部の境目に刺突紋を施す。

2650の直口壺は口頭部破片で、やや外方へ開く口頭部の端部が面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。

2647の長頸壺は口頭部破片で、外面にタタキ後ナデを施し、内面に指押さえと粘土紐の継目を残す。2648は口頭部から体部上端を残し、外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。肩部に3条のヘラ記号を施す。外面に煤が付着する。2649は約1/2を残し、口径11.2cm・器高19.1cmを測る。やや小型の頸部が太く短い作りで口縁端部が面をもつ。外面にハケ後体部下半にナデ、内面にナデを施す。外面に煤が付

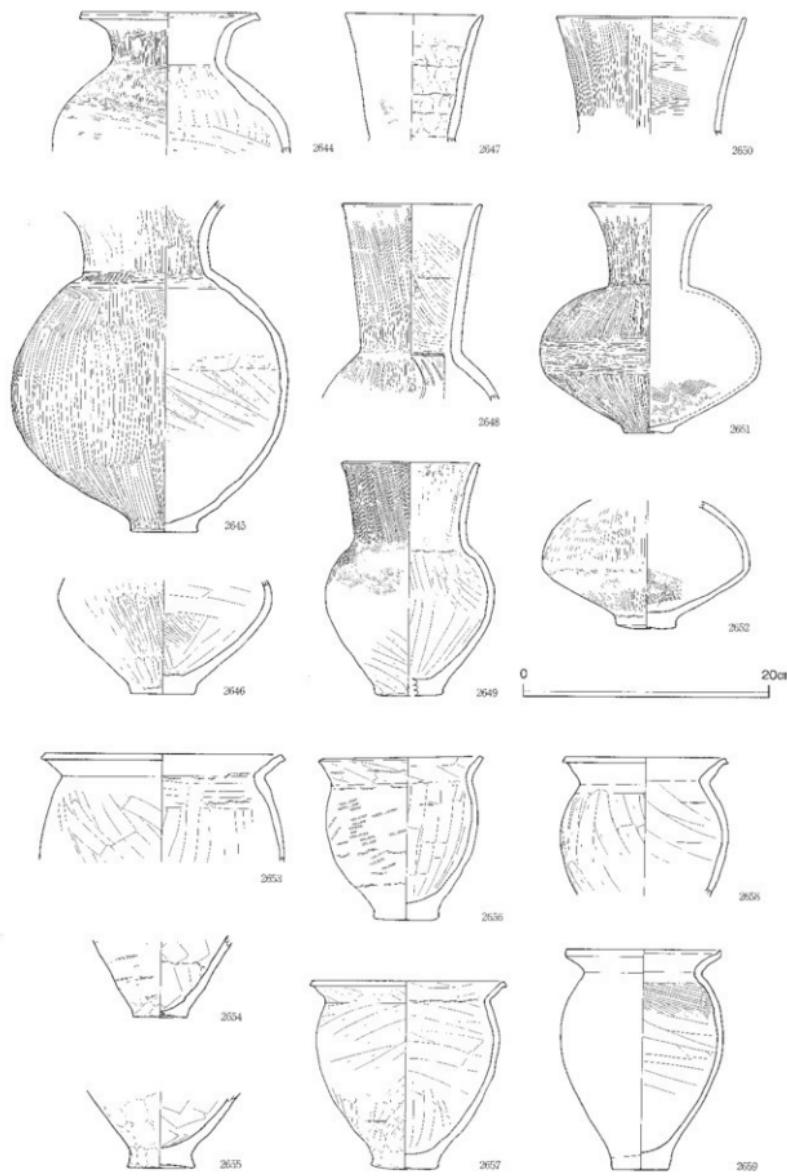


图201 流路3下层右岸出土土器(1)

着する。

2651の細頸壺は完形で、口径10.0cm・器高18.9cmを測る。外面にハケ後ヘラミガキ、内面の体部上半にナデ・下半にハケを施す。2652は体部から底部を残すもので、偏平な体部が下位で加曲する。形態から細頸壺と思われる。

甕には、ナデのものとハケのものがある。

2653～2659がナデである。2656は小型で約9／10を残し、口径12.9cm・器高13.5cmを測る。口縁端部は、範切りしわざかに波打つ。体部外面にタタキ後ナデ、内面にハケ状ナデを施す。外面に煤が付着する。2657は約2／3を残し、口径16.6cm・器高15.6cmを測る。体部外面にヘラケズリ状ナデ、内面にナデを施す。外面に煤が付着する。2659は約1／2を残し、口径16.0cm・器高15.5cmの中型である。体部内外面にハケ状ナデを施す。外面の上半に煤が付着する。

ハケのものは、(2660～2665)があり、2660はやや小型で、底部を欠損する。体部外面にハケ後ナデ、内面にハケを施す。2661は体部下半を欠損し、下彫れの体部をもつ。体部外面の上半にハケ、内面にナデを施す。外面の体部下半に指押さえを残す。2662は口縁部破片で、体部外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。暗褐色の角凹石を含む生駒西麓産の土器である。2663は約1／3を残し、口径16.8cm・器高26.2cmを測る。口縁端部がわざかに立ち上がり凹面をもつ。体部外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着し、内面下位に炭化物が多量に付着する。

鉢には、直口のものと外反するもの、有孔のものがある。2667は約2／5を残し、口径12.4cm・器高11.3cmを測る。わずかに内傾する口縁部に平底である。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。2669は約1／3を残し、口径15.4cm・器高9.0cmを測る。外面にタタキ、内面にナデを施す。2666は底部を欠損する。大型のもので、口径41.2cmを測る。体部内外面にハケ後粗いヘラミガキを施す。2668は底部のみを残す。

高坏には、有稜のものと脚部のみを残すものがある。2670は坏部のみを残し、口縁端部が面をもつ。口縁部内外面は表面摩滅のため調整不明で、坏部内外面にヘラミガキを施す。2672は約3／5を残し、口径24.0cm・器高17.4cmを測る。脚台端部はわざかに立ち上がり凹面をもつ。坏部内外面および脚部外面にヘラミガキを施す。脚部の4方に透かしを穿つ。2674は約2／5を残し、口径28.0cm・器高16.8cmを測る。外反する口縁部の端部が面をもち、脚台端部がわざかに立ち上がり面をもつ。外面の坏部にハケ後ヘラミガキ、脚部にヘラミガキ、内面の口縁端部に強いヨコナデ・坏部にヘラミガキを施す。脚部の4方に透かしを穿つ。2673は坏底部から脚部を残し、筒状の脚柱部から屈曲し、裾広がりの脚台部をもつ。外面にハケ後ナデを施す。2671は脚部のみを残し、裾広がりの脚部の端部が凹面をもつ。外面にヘラミガキを施す。いずれも、脚部の4方に透かしを穿つ。

#### 流路3左岸 下層 (図203～207)

流路3の左岸下層から出土した土器には、壺23点・甕20点・甕蓋2点・鉢12点・高坏9点・器台3点の計69点がある。

壺には、広口壺・長頸壺・細頸壺があり、他に、装飾壺片や底部片がある。2677は底部を欠損する小型壺で、外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。2676は口頸部から体部上半を残し、口縁端部がわざかに上下に拡張し、面をもち、体部が張る。外面にハケ、内面にナデを施す。2675は口頸部を残し、口縁端部がわざかに上下に拡張し、面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。端部に円形浮紋を施す。2680の広口壺は、口頸部から体部上端を残す大型のもので、外反する口縁部の端部が垂下し、面を

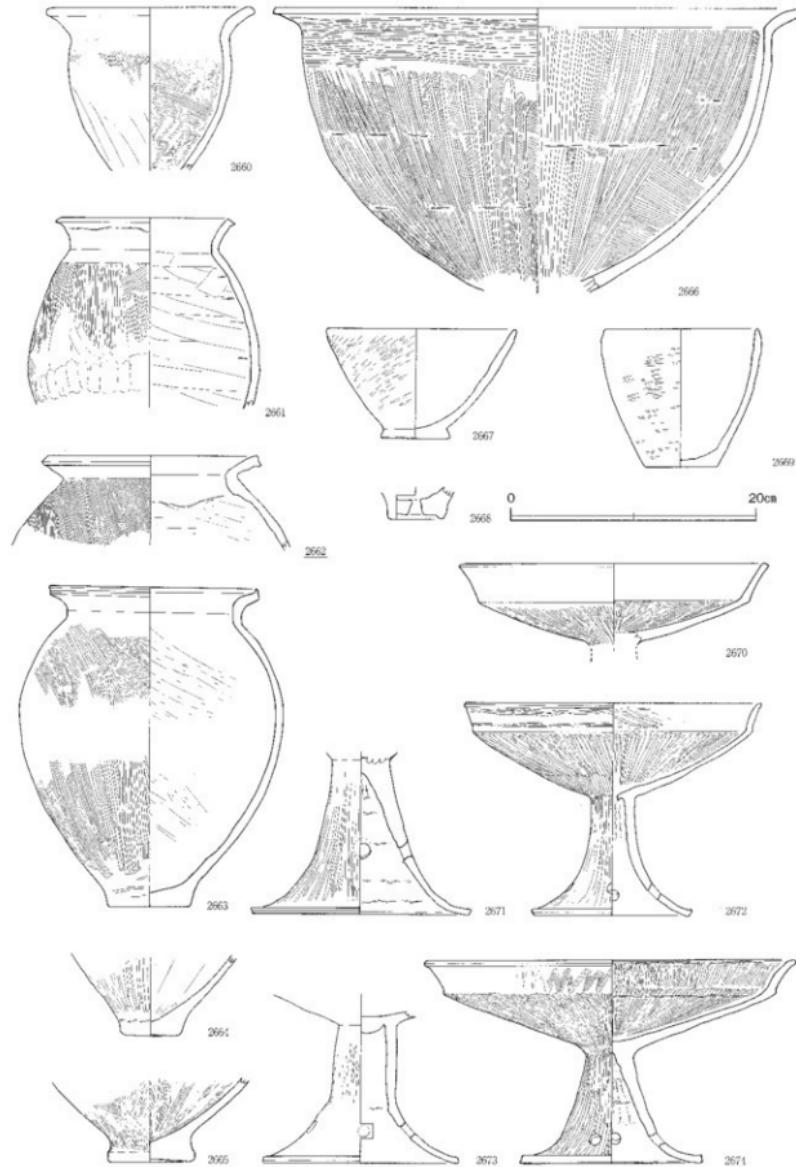


図202 流路3下層右岸出土土器(2)

もつ。外面の頸部にハケ後粗いヘラミガキ・体部にヘラミガキ、内面にハケを施す。2678は口頸部から体部上半を残し、口縁端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部外面にハケ後ヘラミガキを施し、内面に指押さえ・粘土紐の継目を残す。2679は約2/3を残し、口径21.5cm・器高31.8cmを測る。短く外反する口縁部に、筒状の頸部から屈曲し球形の体部、突出する平底である。外面にハケ後ヘラミガキ、内面の頸部にハケ・体部下半にナデを施し、内面の体部上半に指押さえ・粘土紐の継目を残す。肩部に範記号を施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2681・2686の長頸壺はやや大型で、口縁端部が面をもち、外面にハケ後ヘラミガキ、内面にハケを施す。2682は底部を欠損し、やや太く短めの頸部をもつ。外面の口頸部から体部上半にヘラミガキ・下半にナデ、内面の頸部にハケ・体部にナデを施す。内面に粘土紐の継目を残す。外面に煤が付着する。

2683は約2/3を残し、口径11.2cm・器高29.6cmを測る。口縁端部に面をもつ。外面の頸部にハケ・体部にタタキ後ハケ、内面の体部下半にハケ状ナデを施し、頸部上半に指押さえを残す。外面に煤が付着し、内面体部の下位に炭化物が付着する。暗褐色の角閃石を含む、生駒西麓産の土器である。2685は口頸部を残し、口縁端部がわずかに上下に拡張し面をもつ。外面にハケ後ヘラミガキ、内面にハケを施す。2687は大型で、口頸部が外方へ開く。外面にハケ、内面にハケ状ナデを施し、内面の頸部に指押さえ・粘土紐の継目を残す。外面に煤が付着する。この土器は、2688と接合はしなかったが同一個体と思われる。

2693は長頸壺の体部破片で、外面にハケおよびナデ、内面にナデを施す。2692は、体部中央から底部を残すもので、外面にタタキ後ハケおよびナデ、内面にハケおよびナデを施す。

2684の細頸壺は口頸部を残し、体部に緩やかに続く。内外面にヘラミガキを施す。

2789は体部破片で、肩部に範描き絵画紋を施す。2691は大型壺の肩部破片で、範描沈線紋3条・鋸齒紋を施す。2690は弥生時代前期の大型壺の体部破片で、削り出し突帯上範描き沈線紋2条を施す。

他に、(2693・2694・2696・2697)の壺の体部下半から底部を残すものがある。

壺にはタタキのものと、ハケのもの、ナデのものがある。2699は口縁部破片で、体部外面にタタキ後ナデ、内面にヘラケズリを施す。2700は底部を欠損し、口縁端部がわずかに垂下し面をもつ。外面の頸部にハケ・体部にタタキ、内面の口頸部にハケ・体部にナデを施し、口縁部外面の上端に指押さえを残す。2701は約4/5を残す小型のもので、口径10.8cm・器高15.0cmを測る。体部外面にタタキ後肩部にハケ、内面の上半にナデ・下半にハケを施す。外面に煤が、内面下位に炭化物が付着する。

2702は約2/3を残し、口径15.2cm・器高25.4cmを測る。口縁端部がわずかに立ち上がり面をもち、屈曲する頸部の内面が明確な稜をもつ。やや肩の張る体部に突出する平底である。外面にタタキ、内面にナデを施す。外面に煤が付着する。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2704は口頸部から体部上半を残し、口縁部が水平に近く開き、その端部が面をもつ。頸部の屈曲は内面に明瞭な稜をもつ。体部の外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。体部の内外面に粘土紐の継目を残す。内外面に煤が付着する。2705は底部を欠損し、口縁端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部外面にタタキ後肩部にハケ・中位にハケ状ナデ、内面の肩部にハケ・以下にハケ状ナデを施す。外面に煤が付着する。2706は約2/3を残し、口径15.5cm・器高23.8cmを測る。屈曲する口縁部の端部が凹面をもつ。体部外面にタタキ後ハケ、内面にハケを施す。外面に煤が付着し、内面下位に炭化物が多量に付着する。2707は小型で約4/5を残し、口径12.7cm・器高14.7cmを測る。口縁端部がわずかに外方へ肥厚し面をもつ。体部外面にタタキ後ナデ、内面にハケ状ナデを施す。2712~2717はナデを施すもので、

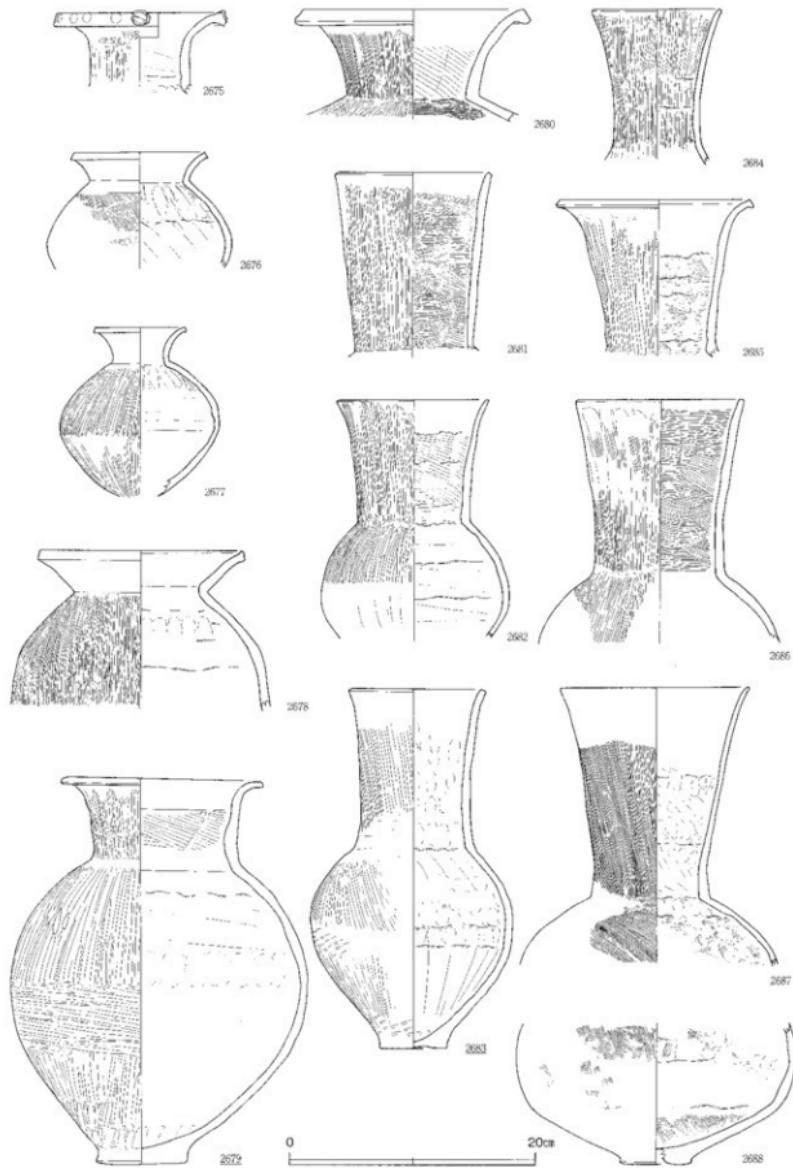


図203 流路3下層左岸出土土器(1)

(2712・2713・2714)は小型である。2714は約4／5を残し、口径11.1cm・器高13.4cmを測る。外面の底部を除き煤が付着する。2715は約2／3を残し、口径14.6cm・器高19.5cmを測る。内外面にハケ状ナデを施す。外面および内面中位に煤が付着する。

ハケのものには、(2708～2711・2718・2719)がある。

2709は約4／5を残し、口径16.0cm・器高20.4cmを測る。口縁端部が凹面をもつ。体部外面にタタキ後ハケ、内面にナデを施す。外面の上半に煤が付着する。

2710は約1／4を残し、口径17.5cm・器高28.3cmを測る大型である。屈曲する口縁部に端部が面をもつ。体部外面にタタキ後肩部にハケ・以下にナデ、内面にハケを施す。外面に煤が、内面の下位に炭化物が付着する。2711は、口頸部を欠損するもので、外面にハケ、内面にナデ・ハケを施す。外面には煤が、内面下位に炭化物が付着する。

2718は小型で約1／2を残し、口径12.7cm・器高15.4cmを測る。頸部内面に明確な稜をもち、わずかに肩が張る体部に、平底である。外面にハケ、内面にハケ後ナデを施す。外面に煤が、内面底部に炭化物が付着する。2719は約1／3を残し、口径15.3cm・器高22.9cmを測る。口縁端部はわずかに垂下し面をもつ。体部の外面にタタキ後肩部にハケ・以下にナデ、内面にハケを施す。外面に煤が付着する。

2698の甕叢は約1／3を残し、口径19.0cm・器高9.2cmを測る。一見すると高坏の脚部に似る。内外面にハケ後ナデを施す。内外面に煤が薄く付着する。2703は約1／2を残し、口径14.0cm・器高5.4cmを測る。柱状のつまみ部に、裾広がりの口縁部の端部が尖り気味に終わる。内外面にナデを施す。内面に煤が付着する。

鉢には、直口のものと、外反するもの、有孔鉢がある。2720は、ミニチュアで、約1／2を残し、口径8.3cm・器高5.4cmを測る。外面にナデ、内面にハケを施す。2721は約1／3を残し、口径10.0cm・器高6.4cmを測る。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。内面に指押さえ・粘土紐の継目を残す。2722は約4／5を残し、口径約10cm・器高10.7cmを測る。口縁部の張が大きい。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。2723はほぼ完形で、口径13.3cm・器高8.6cmを測る。外面にナデ、内面にハケを施す。外面に粘土紐の継目を残す。2729は口縁部破片で椀形の片口である。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。2730は中型で約3／4を残し、口径27.5cm・器高9.1cmを測る。外方へ開く口縁部の上端部が面をもつ。浅い椀形の体部に、突出する平底である。内外面にナデを施す。口縁部の端部に凝凹線紋を1条施す。この土器は、町木場遺構1上層・3層出土の土器と接合した。2731は約1／2を残し、口径22.9cm・器高9.5cmを測る。浅い椀形で、内外面に往復ヘラミガキを施す。

外反するものには、小型のものと中型のものがある。2725は底部を欠損し、口縁端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部外面にヘラミガキ、内面の上端部にヘラミガキ・以下にナデを施す。口縁端部に刻み目・肩部に刺突紋を施す。内外面に破損後、煤が付着し、内面の頸部以下に炭化物が多量に付着する。2726は約1／2を残し、口径9.8cm・器高8.0cmを測る。外反する口縁端部が面をもち、やや裾広みの体部に平底である。内外面にナデを施す。2724は、底部を欠損し、口縁部がわずかに外反し、端部が面をもつ。半球状の体部をもつ。外面にヘラミガキ、内面にハケ後ヘラミガキを施す。2728は口縁部破片で、口縁端部が上下にわずかに拡張し、面をもつ。頸部が屈曲し、内面に明確な稜をもつ。内外面にナデを施す。口縁端部に凝凹線紋3条を施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2727は小型の有孔鉢で、約4／5を残す。口径11.3cm・器高8.5cmを測る。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。

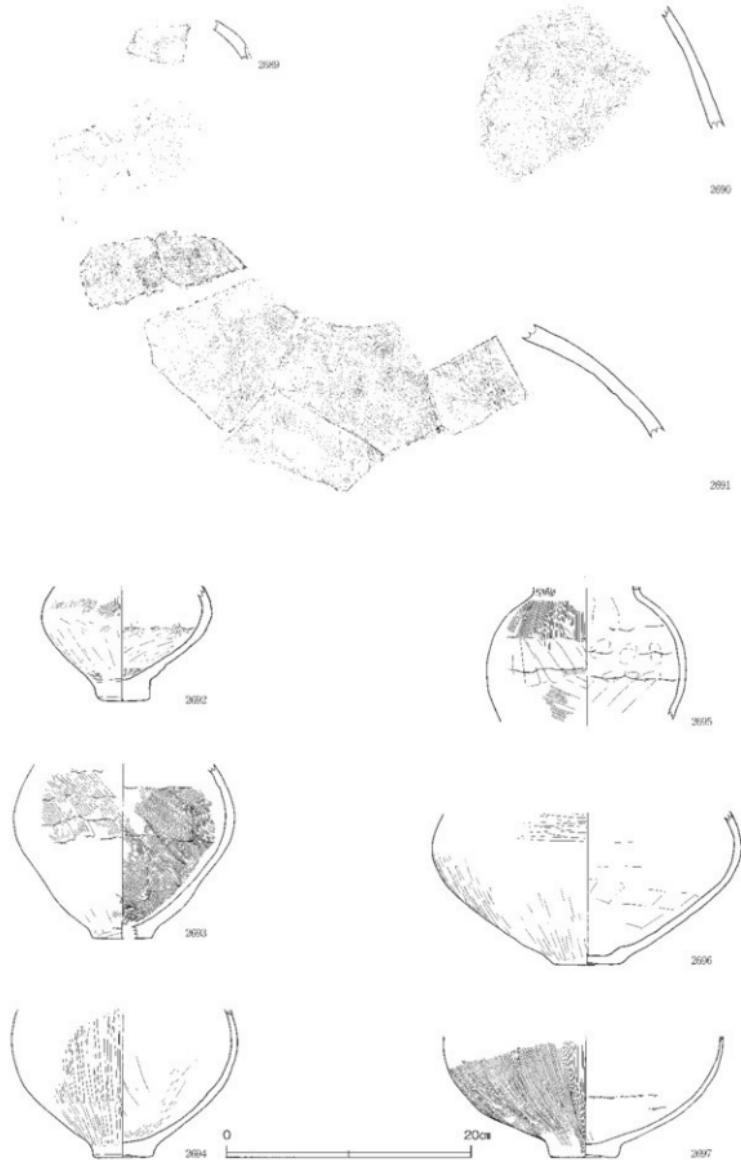


图204 流路3下层左岸出土土器(2)

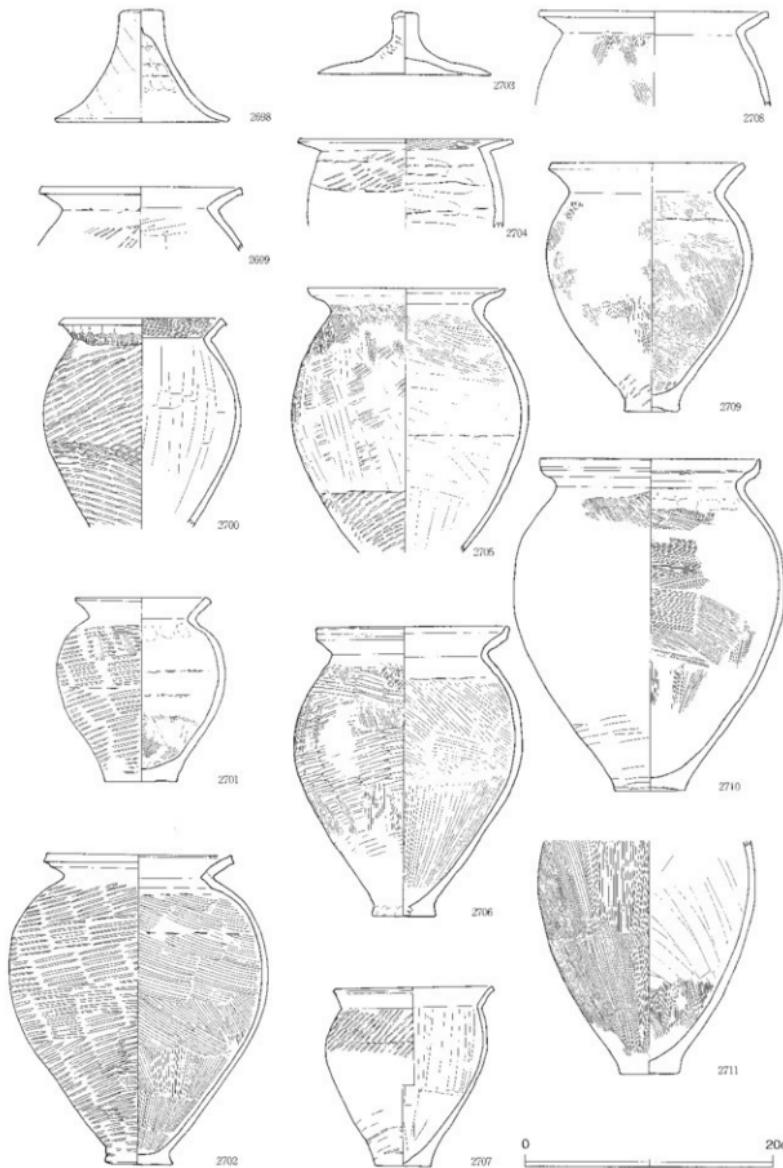


図205 流路3下層左岸出土土器(3)

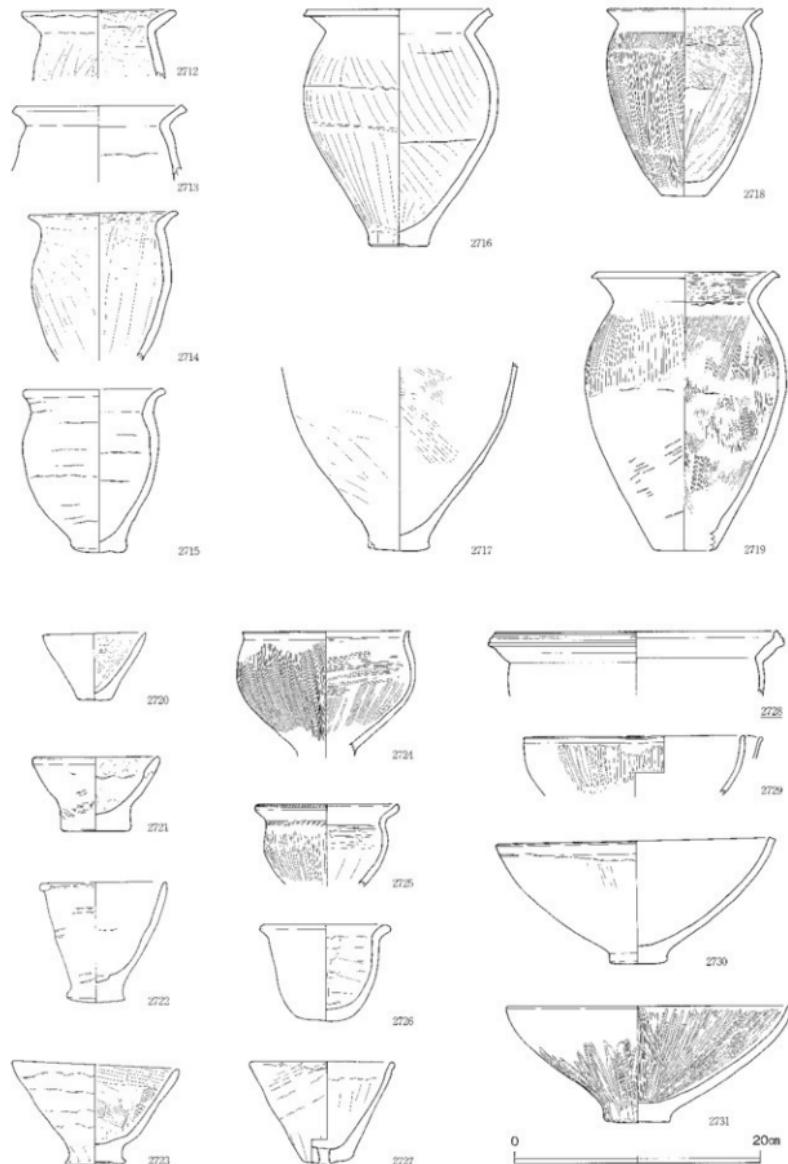


図206 流路3下層左岸出土土器(4)



图207 淮路3下层左岸出土土器(5)

高坏には、楕形のものと有稜のものと、脚部のみ残すものがある。2737は楕形の小型のもので、約4/5を残す。口径13.9cm・器高13.6cmを測る。浅い楕形の坏部の口縁部端部が面をもち、裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。外面坏部にハケ後ヘラミガキ・脚部にヘラミガキ、内面の坏部にヘラミガキを施す。脚部の3方に透かしを穿つ。

2732は坏部のみを残し、口縁部が外方へわずかに肥厚し、上端面をもつ。内外面ともにヘラミガキを施す。2733は脚台部を欠損し、口縁部外面に波状紋風のヘラミガキを施す。2734は約2/5を残し、口径24.7cm・器高15.9cmを測る。外反する口縁部の端部が外方へ肥厚し、上端面をもつ。脚台端部は、わずかに立ち上がり向をもつ。外面の口縁部にヨコナデ後粗いヘラミガキ・坏部にハケ後粗いヘラミガキ・脚部にヘラミガキ、内面坏部にヘラミガキを施す。脚部の4方に透かしを穿つ。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2734は脚部の約3/4を欠損する。口径25.2cm・器高16.2cmを測る。外傾する口縁部の端部が面をもつ。裾広がりの脚台部の端部がわずかに立ち上がり、凹面をもつ。外面にヘラケズリ・内面坏部にヘラミガキ・脚部にハケ・ナデを施す。脚台部の4方に円形の透かしを穿つ。2736は、大型の脚部のみを残し、端部がわずかに上下に肥厚し面を持つ。6方2段に円形の透かしを穿つ。2738~2740は脚部のみを残す。

2741の器台は口縁部破片で、外反する口縁部の端部が垂下し面をもつ。外面にハケ状ナデ、内面にハケ後粗いヘラミガキを施す。端部に疑凹線紋3条・円形浮紋上竹管紋を施す。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2742は約9/10を残し、口径21.3cm・器高17.8cm・脚台径17.6cmを測る。外反する口縁端部が面をもち、脚台端部がわずかに立ち上がり面をもつ。外面にヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ・以下にハケを施す。体部に5・6方2段の透かしを穿つ。2743は、約2/3を残し、口径18.0cm・器高21.2cm・脚台径12.8cmを測る。わずかに開く脚台端部が内方へ肥厚し、下端面をもつ。外面にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。

以上、第3面から出土した土器を遺構毎に概観してきた。これらの土器を、西側居住域と東側居住域とに区分して見てみると以下のようになる。

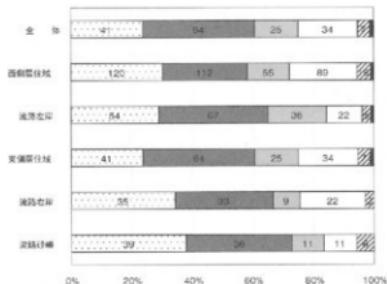
西側居住域から出土した土器は、固化できたもので、遺構および第3面出土のものを含めると壺120点・甕112点・鉢55点・高坏89点・器台18点・その他4点の計398点であり、流路3の左岸域から出土したものが壺54点・甕67点・鉢36点・高坏22点・器台5点・その他2点の計186点である。

これに対して、東側居住域から出土した土器は、壺44点・甕64点・鉢25点・高坏34点・器台7点・その他2点の計176点であり、流路3右岸域および谷2から出土した土器は、壺35点・甕33点・鉢9点・高坏22点・器台3点の計110点である。これらに加えて、流路3上層から出土した土器が、壺39点・甕36点・鉢11点・高坏11点・器台6点がある。総数974点を数え、全体の6割近くが西側居住域から出土していることが判る。加えて、流路3出土の土器が約4割弱を占める。

西側居住域(流路3左岸を含む)から、まず、見ていくと、甕の割合が30.65%と高く、次に壺が29.8%あり、2者で約6割を占める。さらに、高坏が19.0%、鉢が15.6%占め、器台は数パーセントである。

壺は、広口壺・長頸壺・直口壺・細頸壺・短頸壺・無頸壺などに区分できるが、西側居住域では、壺174点のうち、長頸壺が約4割弱を占め、次いで広口壺が2割強、直口壺が1割を占め、細頸壺・無頸壺・短頸壺の順となる。

最も多量に出土している長頸壺で観ると、遺構では堅穴建物7から18点も出土しており、次いで貯木



□ 直  
■ 口縫  
□ 目縫  
□ 口付  
△ 切妻縫  
■ 他

西側居住域

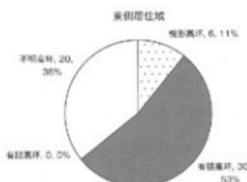
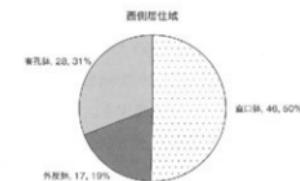
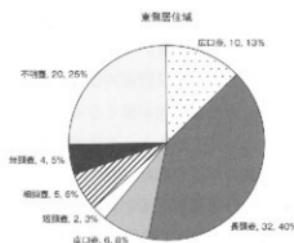
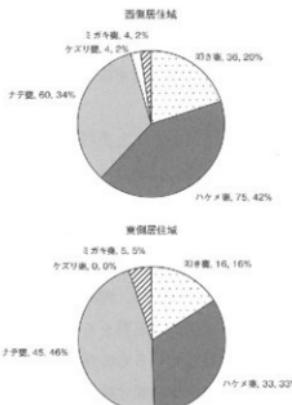
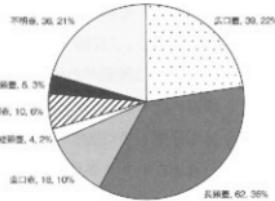


図208 第3面出土土器の器種構成

場遺構 1 から 7 点、谷 1 から 6 点が出土している。流路 3 の左岸域からは 11 点が出土しており、左岸下層のものを合わせると、18 点が出土している。これらの土器を概観すると、20cm 前後の小型のもの、30cm 以下の中型のもの、それ以上の大型のものに分かれる。

小型のものは少なく、(1769・1917・2220・2359) があり、それぞれ形態に差異がある。

中型のものには、口縁部がわずかに開くものと外反するものがある。前者には体部に範記号を施すものがあり、体部外側の調整にヘラミガキを施すものが多い(1996・1997・2160 等)。後者には、口頭部の長さが短く肩が張るもの(1899・1993)と頭部の境目が明確に屈曲するもの(2217・2334)があり、いずれのものも、外面にハケを多用する。なお、肩部が張るものは器壁が分厚いものが多い。外反する口縁部を持つものには、端部が面をもつもの(1802・1888・2685)もある。

大型のものには、外反する口縁部をもつ(2373・2687)と、口縁部が外反し、端部がさらに垂下し面をもつものがある(1760・1803・1804・2354)。後者は口縁部の端部破片であると、広口壺と区別ができない。前者はハケを施すものが多く、後者はヘラミガキを施す。

2364 は、当遺跡から出土した長頸壺の中で口頭部が最も長いもので、底部を欠損するが器高が 40cm 以上の大型のものである。

いずれにしても、長頸壺の器形が崩れ、ヘラミガキを多用されていたものがハケを多用するようになると共に、大型化傾向が強くなる特徴を有する。

次に、広口壺で観ると、全体的に小型のものが少なく、大型のものが目立つ。大型のもので観ると、西側居住域の西端の溝 47~49 付近で出土した壺は、乳白色のもので、垂下する口縁部を持ち、端部に竹管紋ないしは門線紋を施すものである(2228~2331)。対して、西側居住域の東端の流路 3 左岸側で出土した土器は、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産のもので、口縁部の端部が面をもち、肩部が張るもので(2317・2318)、同地区から出土した直口壺(2162・2320・2321・2322)と共に体部形をもち、口縁部内面や肩部に竹管紋を施すものである。これらの土器には、網籠の痕跡を残しているものが多い。

次に出土の多かった壺を観ると、最も多量に遺構から出土するのは、壺同様に堅穴建物 7 から 56 点を数え、西側居住域の出土点数のおよそ半数におよぶ。さらに、流路 3 左岸域からは 67 点が出土している。合わせて観て行くと、最も多用される体部外側の調整はハケで、全体の 4 割強を占め、次いでナデが 3 割、タタキが 2 割強であり、ヘラケツリおよびヘラミガキを施すものは少ない(※調整は、最終調整をカウントしている。)。口径 15cm ~ 20cm・器高 25cm 前後のものが多く、器高が 30cm を超える大型のもの(2362)もある。この土器は、先述した(2162)などの直口壺と底部の作りが共通する。

鉢は、半数近くが直口のもので、次いで有孔のものが 3 割弱で、外反するものが 2 割を占める。直口のものや外反するものには、口径が 15cm 前後の小型のものが多く、20cm 前後の中型や 30cm 以上の大型のものがあるが、中でも、(2333) のように口径が 50cm を超える大型のものがある。有孔鉢は、口径が 15cm ~ 20cm のもので、楕形のものとが大半を占め、(2028) が唯一外反する口縁部をもつ。

高杯は、絶対数で多量に出土しているが、脚部のみのものが約半数を占め、全体形が判別できるものは出土量の半数である。有段のものが楕形の約 3 倍出土している。有段のものは、破片で確とはしがたいのが堅穴建物 7 から 1 点のみ出土している。楕形のものは、口径 20cm 以内のものが多く、対して、有段のものには、口径 25cm 以上のものが多く、中には、口径が 40cm 前後の大型のもの(2336・2337) もある。

いずれのものも、ヘラミガキを多用するものであるが、有段の口縁部に、波状紋風にヘラミガキを施すものが多く観られる。

器台は、全体の4%程度を占め、大半のものが無紋で、口径16cm・器高16cm前後のものである。2041は、器高が30cm程の大型である。

東側居住域で、流路3右岸域と谷2を含めた出土土器の器種構成を観ると、壺が33.9%と約1/3を占め、次いで壺が27.6%、鉢が11.9%、高坏が19.6%、器台が3.5%を数える。

最も多く出土した壺で観ると、ナデが4割、ハケが4割弱、タタキが2割で、ヘラミガキはわずかであり、ヘラケズリのものは出土していない。

壺は、やはり、長頸壺が4割強と多く、次いで、広口壺が1割強で、直口壺・細頸壺・無頸壺・短頸壺がわずかにある。

長頸壺には、西側居住域と同様に、(2395・2649)のように小型化するものと、口頸部がやや短くかつ太くなるもの(1836・2418・2449・2489)がある。また、(2397)のように、口縁部が屈曲し、立ち上がるものがある。以上のものは、ハケを施すものが多い。大型のものは、口頭部のみの出土であるが、器高が30cm以上になると思われ、(2448・2452)は、口縁部の端部の形態は違うが、乳白色の胎土で、丁寧に作られていることや、紋様・形態などから、搬入品と考えられる。

広口壺には、中型で無紋のものと、大型のものがあるが、全容の判るものがわずかである。

細頸壺には、筒状の口頸部にやや扁平な体部をもつものと(2450・2454・2164)、口縁部が外反し、体部下位で屈曲する(2421)ものがある。

高坏には、約4割弱が脚部のみの出土であり、全容がわからないものである。楕形のものと有稜のものの出土比率は、約1:5である。楕形のものは、口径が20cm以下のもので、(1871)は坏部の割りに脚部が大きく装飾性に富むことから、新しい傾向を示す。有稜のものは、口径が20cm以上のものが多く、(2422・2436)のように、口径が30cm近い大型のものもある。口縁部に波状紋風のヘラミガキを施すものがある。

鉢は、直口のものが過半数を占め、次いで、外反するものがある。有孔のものは、ここでは少数である。直口のものの中で、特徴的なものとして、壺の体部を再整形した(2428)や、壺を再整形した(2456)と思われる大型のものがある。

器台は、やや小型のもの(2073・2514)と、20cm前後の中型のものがある。

以上、西側居住域と東側居住域に区分して、出土土器を観て来たが、それぞれの、相違点を若干浮かび上がらせることができた。

西側居住域と東側居住域では、壺と壺、鉢の割合に差異があり、東側居住域の方が壺の占める割合が若干多い。また、西側居住域では、鉢の占める割合が若干多く、有孔鉢が西側居住域から多く出土している。

なお、東側居住域は、全体を検出できていないので、土器量も、西側と比較すると少ないものであつたが、おおよその傾向がつかめたと思われる。



図209 4層出土土器

### (3) 4層出土土器

4層から出土した土器は、基本的には土壤化層と捉えられる事から、第3面の上器が混入している疑いがある。そのことは、第3面の遺構や3層出土の上器と接合するものがあることからも言える。

4層から出土した土器には、壺4点・甕2点・鉢1点・高杯2点・器台1点の計10点がある。

壺には広口壺・直口壺・長頸壺がある。2744の広口壺は大型で口部から体部上端を残す。短く外反し、屈曲しさらに立ち上がる口縁部をもつ。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。2745は大型のもの

で、口頸部から体部上端を残す。外反する口縁端部が垂下し、面をもつ。外面にハラミガキ、内面にナデを施す。口縁端部に疑凹線紋2条を施す。

2746は直口壺の口縁部破片で、筒状の口頸部をもつ。外面にハケ、内面にナデを施す。

2747の長頸壺は口縁端部がわずかに外反し、細長い頸部をもつ。内外面に表面摩滅のため調整が不明である。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。内外面にナデを施す。

2752はミニチュア壺で、約3/4を残す。口径4.2cm・器高3.0cmを測る。

壺にはタタキの(2748)とナデの(2749)があり、いずれも、内面にナデを施し、外面に煤が付着する。

2749は、暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

2753は底部のみを残す有孔鉢で、内外面にナデを施す。

高坏には有稜の(2754)と脚部のみを残す(2755・2756)がある。2755は坏部のみを残し、屈曲部上に疑凹線紋を1条施す。2755は、脚台部のみを残し、径2cm以上の円形の透かしを穿つ。2756は、脚台部のみを残し、筒状の脚柱部から屈曲して裾広がりにのびる端部はわずかに立ち上がり面をもつ。3方に円形の透かしを穿つ。

2757の器台は約1/3を残し、口径18.2cm・器高18.2cm・脚台径11.4cmを測る。外反する口縁端部が面をもつ。内外面にナデを施す。体部の上端に円形の凹みを1箇所残し3方・6方・3方3段に透かしを穿つ。

## 5. 第3b面[弥生時代後期]

### (1) 出土土器の概要

第3b面は第3面を形成する4層の土壤化層を除去した遺構面である。第3b面から検出された遺構は、平地建物や掘立柱建物群・井戸・土坑・溝などがあるが、いずれも、出土遺物はわずかなものである。

### (2) 遺構出土土器

先述したように、遺構から出土した土器はわずかで、全容の解るものが少しである。

掘立柱建物7—柱穴2(図210-2758)

掘立柱建物7は調査区中央の北側に位置し、1間×2間の建物である。柱穴2から甕が1点のみ出土した。2758の甕は底部を欠損する。外傾する口縁部の端部がわずかに垂下し凹面をもつ。内外面に表面摩滅のため調整が不明である。

掘立柱建物14—柱穴2(図210-2759)

掘立柱14は調査区中央部付近に位置し、1間×3間の建物である。柱穴2から甕が1点出土する。

2759の小型の甕は約4/5を残し、口径11.0cm・器高15.1cmを測る。口縁部はわずかに外反し、つまみ出され、肩部がやや張る。内外面にナデを施し、外面に粘土紐の縦目を残す。外面にわずかに煤が付着する。

掘立柱建物26—柱穴1・5(図210-2760・2761)

掘立柱建物26は、調査区中央のやや西よりに位置し、2間×2間の建物である。柱穴1・5から甕と壺が各1点出土する。2760は壺の口頸部破片で、外反する口縁部の端部が下部へ肥厚し凹面をもつ。外面の口頸部にハケ後ヨコナデ、内面にナデを施す。

2761の甕は口頸部破片で、端部に面をもつ。外面にタタキ、内面にナデを施す。

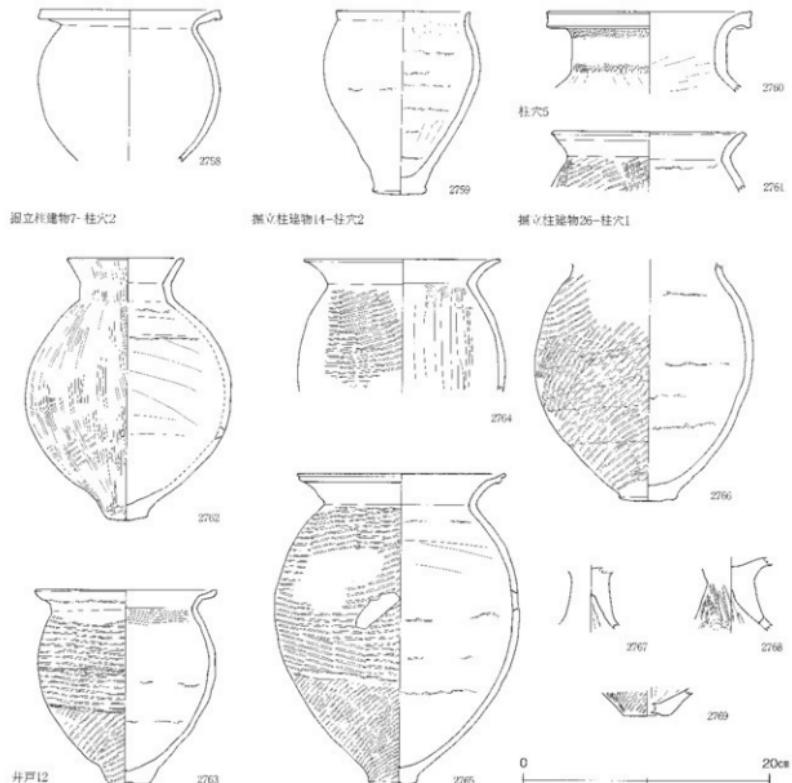


図210 摂立柱建物7・14・26 井戸12出土土器

井戸12 (図210-2762~2769)

井戸12は調査区中央のやや北よりに位置する。出土した土器には、壺1点・甕5点・高坏2点の計8点がある。2762の直口壺は約9/10を残し、口径9.3cm・器高21.6cmを測る。短い口縁部が外傾し、端部が面をもち、短い頸部に屈曲し卵形の体部、わずかな突出する平底である。体部の外面にタクキ後ヘラミガキ、内面にナデを施す。体部下半に焼成後の穿孔がある。

甕はいずれも体部にタクキを施すもので、2763がやや小型で約9/10を残し、口径14.5cm・器高16.0cmを測る。外面に煤が付着する。2765はやや大型のほぼ完形で、口径16.8cm・器高25.5cmを測る。口縁端部がわずかに立ち上がり、端部に凝凹線紋を1条施す。体部中央部に焼成後の穿孔がある。外面に煤が、内面の体部下位に炭化物が付着する。

2767・2768の高坏は、脚部のみを残すものである。

以上の土器は、弥生時代後期末から古墳時代初頭のものと思われ、本来、この井戸は、3層中の造構面から掘られたものと考えられる。

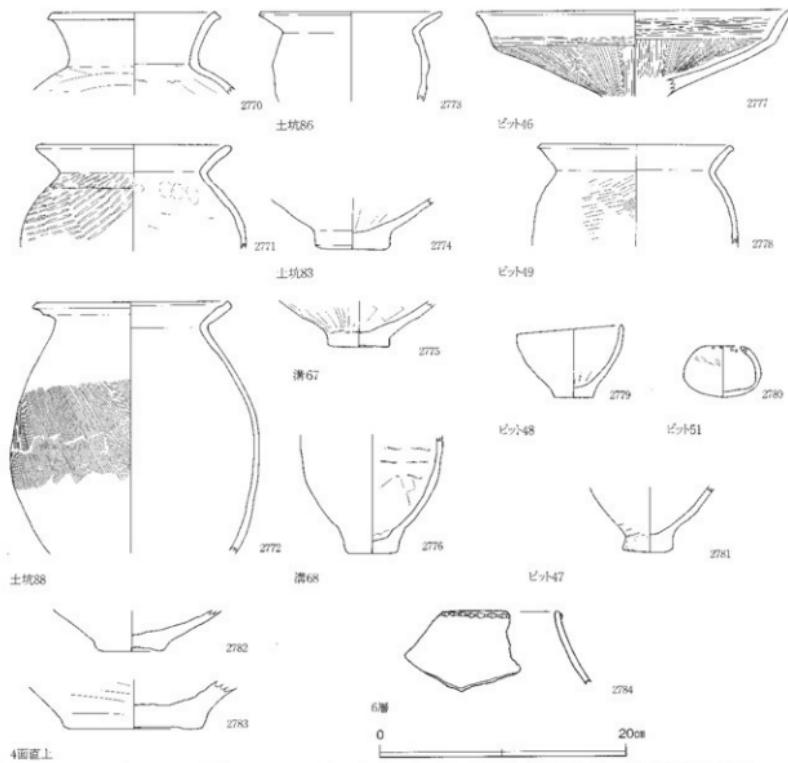


図211 溝67・68 土坑83・86・88 ピット46・47・48・49・51 第4面査上 5層以下出土土器

**ピット46~49・51 (図211-2777~2781)**

ピットは居住域の随所に見られるが、土器が出土するピットはわずかであった。

ピット46は西側の溝56・57が交差する部分に位置し、高杯が1点のみ出土した。2777は有稜高杯で、壠部のみを残す。外面の口縁部にヨコナデ・下位および壠部にヘラミガキ、内面にヘラミガキを施す。

ピット47は中央部に位置し、甕が1点のみ出土する。2781は底部破片で、外面上にタタキ後ナデ、内面にナデを施す。

ピット48は、ピット47の約10m東に位置し、小型の直口鉢が1点のみ出土する。2779の鉢はほぼ完形で、口径8.5 cm・器高6.0 cmを測る。外面は表面摩滅のため調整が不明、内面がナデを施す。

ピット49は、掘立柱建物14の東約1.5 mに位置し、甕が1点のみ出土する。2778の甕は口縁部破片で体部外面上にタタキ後ハケ、内面にナデを施す。

ピット51は、南東部に位置し、小型の無頸甕が1点のみ出土した。2780は完形で、口径3.0 cm・器高4.2 cmを測る。外面にハケを残す。口縁部に2個1対の紐孔を穿つ。

#### 溝67・68（図211-2775・2776）

溝67・68は東端に位置し、溝67は掘立柱建物18の南側に、溝68は掘立柱建物17の西側に当る。溝67からは壺底が、溝68からは壺底が各1点ずつ出土する。2775は突出する平底で、外面にタタキ後ヘラミガキ、内面にハケ状ナデを施す。2776は、体部外面にナデ、内面にハケ状ナデを施す。内面に粘土紐の縦目を残す。

#### 土坑83・86・88（図211-2770～2774）

土坑83はの掘立柱建物3の西側に位置し、壺が1点のみ出土する。2774は底部破片で、突出する平底である。内外面に表面摩滅のため、調整が不明である。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

土坑86は居住域の西側中央付近、掘立柱建物1の東約15mに位置し、壺が1点出土する。2773は口縁部破片で、摩滅が著しいため、調整が不明である。暗褐色の角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

土坑88は、居住域の中央南寄りの掘立柱建物31の南側に当る。土坑88からは壺1点・壺2点が出土した。2770は広口壺の口縁部から体部上端を残し、外反する口縁部の端部がわずかに外方へ肥厚し面をもつ。体部の内外面にナデを施す。体部外面に煤が付着する。

2771は口縁部破片で、体部外面にタタキ、内面にヘラケズリを施す。2772は底部を欠損し、外傾する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。縱長な体部である。体部外面にハケを施し、内面が表面摩滅のため不明である。外面に煤が付着する。

### 6. 第4面以下 [弥生時代前期～中期・縄紋時代]

#### (1) 出土土器の概要

第4面は、主に水田城が東南部に広がり、溝・土坑などがわずかにある。従って、出土遺物も極少量で、第4面直上から出土した壺2点と6層から出土した深鉢が1点のみである。

#### (2) 遺構出土土器

##### 第4面直上（図211-2782・2783）

2782・2783は02-2調査区の微高地上で出土した。いずれも壺の底部とみられ、砂粒を多量に含む。2782はわずかな上げ底のもので、内外面に摩滅のため調整が不明である。形態から弥生時代中期中頃に属すと考えられる。2783は大型の平底のもので、外面にナデを施し、内面が表面剥離のため不明である。形態から弥生時代前期から中期初頭のものと思われる。

#### (3) 6層出土土器（図211-2784）

2784は03-1調査区南側側溝から出土した突帯紋土器の深鉢で、角閃石を多量に含む生駒西麓産で、口縁端部近くに刻目を施した突帯を貼りつけることから、縄文時代晩期の長原式土器と考えられる。

## 第2節 石器

### (1) 出土石器の概要

今回の調査では、1面から4面の各造形面が属する遺物と1~11層までの包含層の中世から旧石器時代までの広範な時期にわたる石器が出土した。本節では、これらの石器について記述を行う。

### (2) 出土石器

図212には第1面で検出された土坑14、土坑墓1、第2面に帰属する周溝墓35、井戸5・8、および2層から出土した石器を掲げた。

**土坑14(図212)** 2785・2786は土坑14出土の石器である。どちらも剥離面や折断面で覆われている部分が多いため、現在の形状・大きさが本来のものであるのか、あるいは現状とは異なる形状であったのか、はつきりしない。2785は敲石。現在の形は直方体状を呈し、長さ12.4cm・幅8.5cm・厚さ3.7cm・重さ420.0g。小口面と側面の各1面に疊面があり、両者が交わる稜部に敲打痕が集中して残されている。裏面には鉄分が付着していて剥離面の状態を詳細に観察できないが、おそらく上面と同一方向から打撃されたものと思われる。安山岩。2786は板状の石片。長さ13.2cm・幅12.5cm・厚さ1.8cm・重さ485.0g。破損部分が多く、上面と左側面に残る疊面において敲打や研磨等を加えた痕跡はないが、いわゆる石盤として利用された可能性もある。安山岩。

**土坑墓2(図212)** 2787は砥石である。詳細な出土地点は不明であるが、埋土中位より出土した。長さ8.1cm・幅4.7cm・厚さ1.1cm・重さ59.7g。平面形は長方形、縦断面形は凸レンズ状で、全体として楔形を呈している。上下面とも斜め、縱方向に細かな擦痕が残り、石質から判断して「仕上げ」の工程で使用された砥石と思われる。珪岩。

**2層(図212)** 2788は凸基有茎石錐である。茎部と先端部を欠損し、長さ5.8cm・幅2.7cm・厚さ0.9cm・重さ10.8g。調整剥離は裏面→表面の順で施され、表面には鏽状に縱方向の稜線が通っている。サスカイト製で、色調は灰黒色を呈している。2789も円基有茎石錐。先端部を欠損し、長さ3.5cm・幅1.9cm・厚さ0.8cm・重さ3.8g。全体として「ざんぐり」した印象を受ける。サスカイト製。2790は縱長剥片である。打面部および末端部を欠損し、長さ3.3cm・幅1.9cm・厚さ0.2cm・重さ1.8g。極めて薄く、背面は複数の剥離面で構成されているが、いずれも腹面とは異なる方向から剥離されている。サスカイト製で、色調は灰色を呈している。

**周溝墓35(図212)** 2791は周溝墓35出土の疊。直方体状を呈し、長さ18.0cm・幅7.7cm・厚さ5.5cm・重さ1,030.0g。加工痕・使用痕は明瞭ではないが、形状から判断して、敲石や砥石として使用するために用意された可能性はある。安山岩。

**井戸5(図212)** 2792は軽石である。破片のため本来の形状・大きさは不明であるが、現在の大きさは長さ7.7cm・幅5.6cm・厚さ3.1cm・重さ20.1g。上面および右側面は平滑に仕上げられており、この平滑面がほぼ直交していることから、本来の形状は直方体状であったかもしれない。

**井戸8(図212)** 2793は敲石である。長さ20.0cm・幅8.4cm・厚さ6.3cm・重さ1,035.0g。円柱状を呈し、上面・側面に敲打痕が残る。また上面を打面とする大きな剥離面があり、この剥離面は敲打中に偶発的に生じた割れ面と思われる。砂岩。

**流路1(図213)** 2794~2798は流路1から出土した石器である。2794・2795・2797は剥片である。2794は横長剥片。打面部を欠損し、長さ2.1cm・幅5.3cm・厚さ0.9cm・重さ10.7g。背面には自然面

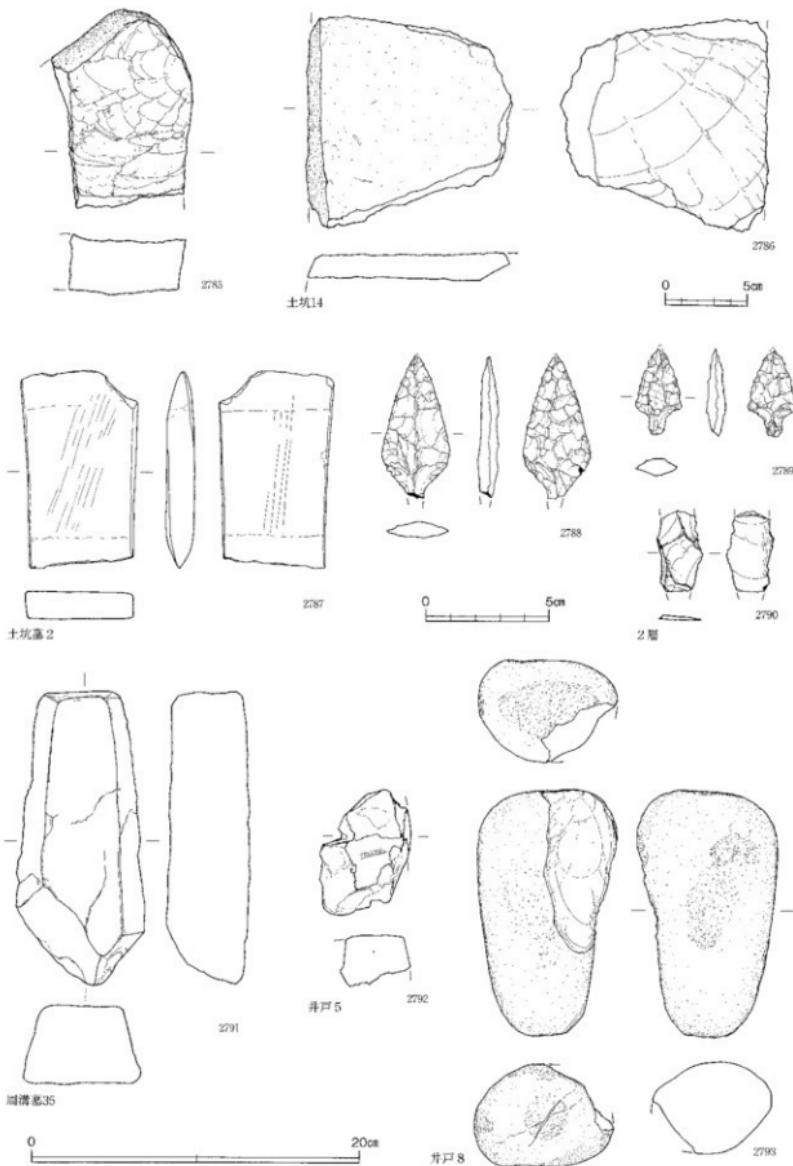


図212 土坑14 土坑2 2層 周溝墓35 井戸5・8出土石器

が残る。サヌカイト製で、色調は灰色を呈し、摩滅が著しい。2795も横長剥片と思われる。打面部および左半部を欠損し、長さ6.1cm・幅4.9cm・厚さ1.0cm・重さ29.4g。背面には腹面と同じ方向から打撃された大きな剥離面があり、一部に疊面を留めている。サヌカイト製で、色調は灰色を呈している。2797は縦長剥片。先端部をわずかに欠損し、長さ7.0cm・幅3.1cm・厚さ0.7cm・重さ14.7g。縦断面形はわずかに湾曲し、横断面形は扁平な台形を呈している。単剥離打面で、打角は98°を測る。背面を構成する剥離面の切り合い関係を観察すると、末端部側に残る横方向からの剥離→左右側辺に沿った腹面と同じ方向からの縦長の剥離→同じく中央の縦長の剥離→頭部調整→本縦長剥片の剥出という剥離の順序を読み取ることが可能である。こうした作業過程から、平坦な剥離打面を用意し、剥離作業面を調整剥離によって若干突出させ、打点を左右に移動・後退させながら、縦長剥片を連続的に剥離するという剥片剥離工程の存在を窺うことができる。サヌカイト製で、色調は灰色を呈している。

2796は砥石。長さ12.3cm・幅3.7cm・厚さ2.3cm・重さ160.6g。形状は扁平な五角柱状を呈している。各面に縦方向の細かい擦痕、右側面に長軸に直交する幅広の線状痕が残る。緑泥岩。

2798は敲石。長さ6.5cm・幅5.5cm・厚さ5.3cm・重さ261.2g。上下面に敲打痕および偶発的な割れの痕跡が見える。調整剥離用の敲石として、いかにも手ごろな大きさである。砂岩。

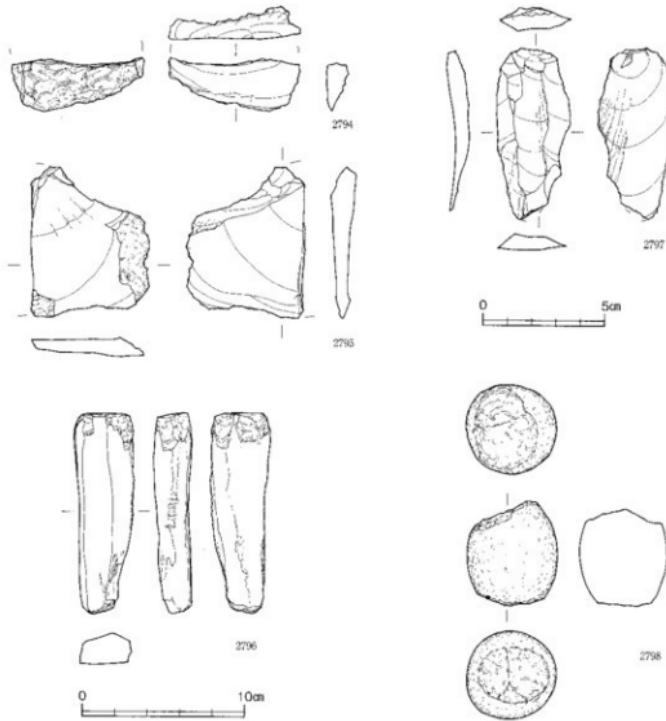


図213 流路1下層-砂層出土石器

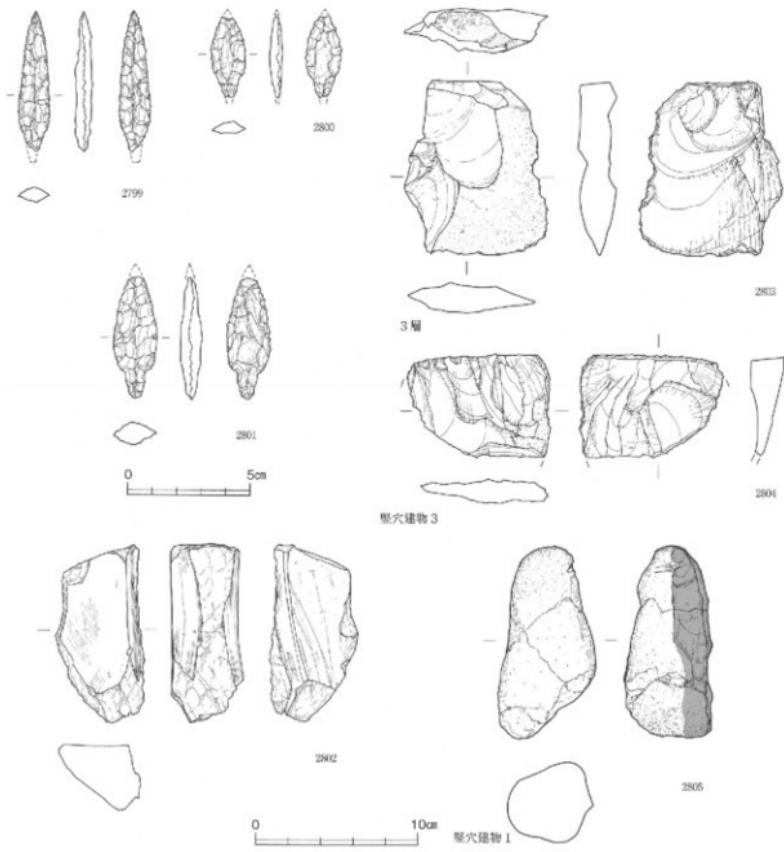


図214には3層および第3面の堅穴建物1・3から出土した石器を掲げた。

3層(図214) 2799~2803は3層から出土した石器である。2799は尖基石器。基端部を欠損し、長さ5.8cm・幅1.3cm・厚さ0.7cm・重さ4.2g。極めて細身のいわゆる柳葉状で、横断面形は菱形を呈し、表裏面とも鋸状に縦方向に稜線が通っている。側刃部の調整剥離は細かく鋸歯状を呈している。サヌカイト製。2800も尖基石器。基端部を欠損し、先端部は調査時に欠失している。長さ3.4cm・幅1.4cm・厚さ0.5cm・重さ2.3g。表裏面とも調整剥離は全面に及ばず、素材剥片の腹背面にあたる大きな剥離面を留めている。サヌカイト製。2801は平基有茎石器。先端部を欠損し、長さ5.0cm・幅1.8cm・厚さ0.9cm・重さ7.1g。横断面形は菱形で部厚く、全体として「すんぐり」した印象を受ける。裏面の歯身基部にやや大きな剥離面が残るが、これは素材剥片の腹面である。サヌカイト製。2803は縦長剥片。長さ7.2cm・幅5.8cm・厚さ1.8cm・重さ69.2g。右側刃および末端部の腹面側に微細な剥離痕が見え

る。打面は礫面で、平坦部を打撃しており、打角は92°を測る。打点が2か所に残り、いわゆる双錐体（Wコーン）剥片である。打面上には数多くの打撃クラックがあり、背面には打面から続く礫面が大きく残っている。また背面上半部の大きな2つの剥離面は、原材の入手以前、例えば転石等に印された痕跡とも見做せる古い剥離面である。サヌカイト製。2802は砥石。長さ10.9cm・幅5.5cm・厚さ4.5cm・重さは238.7g。形状は三角柱状を呈している。研磨痕は上面と右側面2か所の計3か所にあり、それぞれが砥ぎの作業面とも考えられるが、異なる解釈也可能である。つまり、砥石の右側面は上面側と下面側の2方向から利用され、横断面形をみるとその末端がU字状を呈しているが、例えば、厚みを減じたこの部分で欠損した、あるいは磨製石斧の製作に利用される擦り切り技法のようにして砥石の原材を分割した、などの可能性も否定できない。凝灰岩。

竪穴建物1（図214） 2815は竪穴建物1から出土した礫である。長さ11.5cm・幅6.0cm・厚さ5.4cm・重さ415.0g。右側面の上端近くに幅広の擦痕が残り、砥石（荒砥？）として利用されたことも考えられる。また右側面から裏面にかけて、受熱による変色（赤化）や剥落が観察される。砂岩。

竪穴建物3（図214） 2804は竪穴建物3から出土した剥片である。左側辺から末端部にかけて欠損し、長さ4.3cm・幅5.8cm・厚さ1.4cm・重さ38.0g。打面は礫面で、平坦部を打撃しており、打角はおよそ93°を測る。背面の一部および右側辺に打面から続く礫面を留めており、剥片の背面を構成する剥離面は、腹面と同一打面および直交する方向から打撃されたものである。亜角礫の小口面に沿って剥離した剥片であろうか。

竪穴建物2（図215） 2806～2808は竪穴建物2から出土した石器である。2806は礫。扁平な長梢円形を呈し、長さ16.3cm・幅6.1cm・厚さ2.8cm・重さ405.0g。敲打痕や研磨痕等は残っていないが、形状・大きさなど、敲石として利用するには適当な石材である。砂岩。2807は石錐。長さ5.4cm・幅2.2cm・厚さ1.2cm・重さ11.6g。調整剥離は全面に施され、刃部の側辺はやや内湾し、刃部の横断面形は菱形を呈している。サヌカイト製で、色調はわずかに白味を帯び、白色石粒を含んでいる。2808は微細剥離痕のある剥片。長さ7.2cm・幅6.9cm・厚さ1.2cm・重さ31.5g。打面は幅広の平坦な礫面で、打角は112°を測り、腹面の打瘤は発達していない。背面は複数の剥離面で構成されているが、その多くは腹面と同一方向からの打撃によって剥離されている。サヌカイト製。

竪穴建物6（図215） 2809・2810は竪穴建物6から出土した。2809は削器。右側辺の一部を欠損し、長さ5.9cm・幅5.6cm・厚さ1.0cm・重さ31.3g。素材となった剥片は單剥離打面で、打角は121°を測り、腹面の打瘤は発達していない。左側辺の背面側に連続的に調整剥離を施して刃部を形成している。なお礫面を留める右側辺には微細剥離痕が見える。サヌカイト製。2810は磨石+敲石。周辺部の一部を欠損しており、長さ30.4cm・幅20.1cm・厚さ10.5cm・重さ8,600.0g。上面の中央部は研磨されてわずかにくぼみ、また上面と側面の一部に敲打痕が残っている。大きさから判断して、台石のように床面等に据え置いて使用した石器かもしれない。砂岩。側面には縞状に重なる節理が見える。

竪穴建物7（図216） 2811は竪穴建物7内から出土した白色のチャート礫である。長さ8.4cm・幅6.4cm・厚さ4.9cm・重さ380.0g。敲打痕や研磨痕は観察できないが、敲石として使用するには手頃な大きさ・形状の石材である。

2812は竪穴建物7の外周土坑3から出土した石庖丁である。縱方向に大きく欠損しており、紐穴が穿たれていたと思われる部位は失われている。長さ5.8cm・幅5.0cm・厚さ0.8cm・重さ29.8g。刃部は両刃で、緩やかに外湾する。器面には粗い研磨痕が残る。緑泥片岩製。

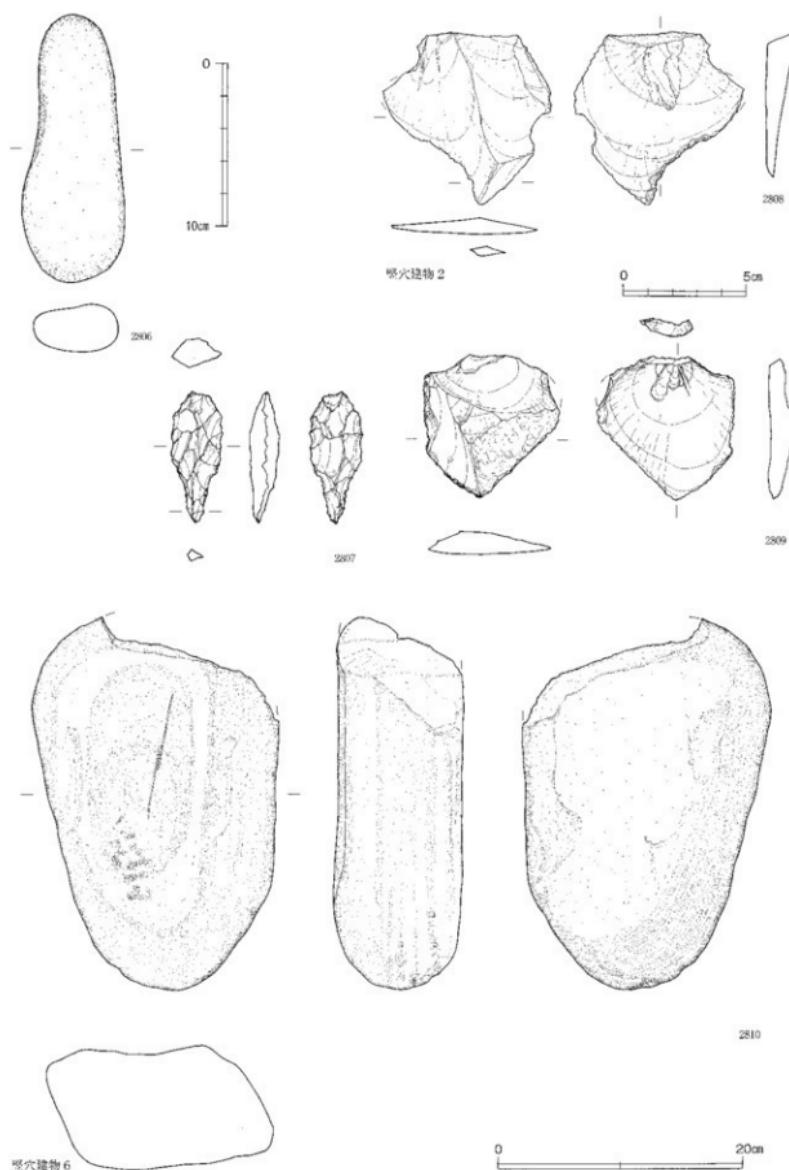
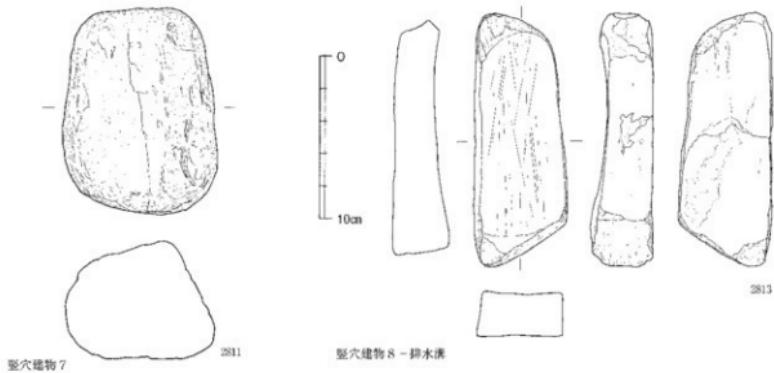


图215 竖穴建物2·6出土石器

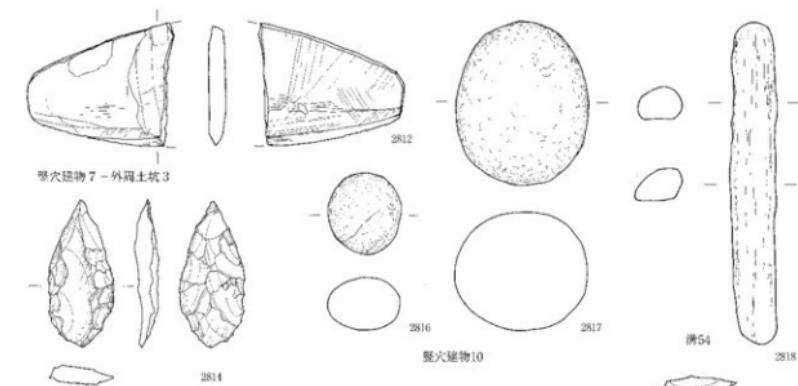
竪穴建物 8 (図 216) 2813は排水溝から出土した砥石である。長さ15.5cm・幅5.7cm・厚さ3.7cm・重さ465.0g。直方体状で、上下面・左右側面の4面が砥面として利用され、上面のみ粗い擦痕を留めている。横断面形を見ると、右側面は平坦、他の3面は中央部がわずかにくぼんでいる。凝灰岩。

竪穴建物10 (図 216) 2816・2817は円砾である。2816は長さ3.2cm・幅3.0cm・厚さ2.1cm・重さ27.5g。2817は長さ6.8cm・幅5.5cm・厚さ4.9cm・重さ260.0g。いずれも敲打痕や研磨痕は残っていないが、石器の細部調整に用いる敲石として利用するには適当な形状・大きさである。砂岩。



竪穴建物 7

竪穴建物 8 - 排水溝



竪穴建物 7 - 外周土坑 3

竪穴建物 10

2814

2818

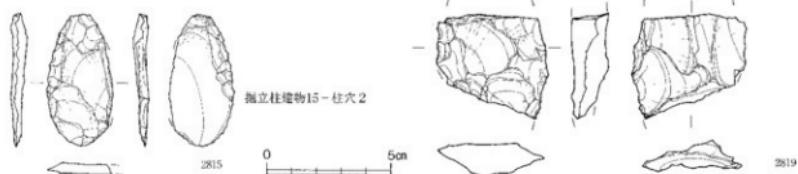


図216 竪穴建物 7 竪 7 - 外周土坑 3 竪 8 - 排水溝 竪穴建物10 振立柱建物15 溝54出土石器

**掘立柱建物15（図216）** 2814・2815は掘立柱建物15の柱穴2から出土した石器である。2814は石鎚の未成品。円基石鎚か。長さ6.0cm・幅2.7cm・厚さ1.0cm・重さ11.8g。調整剥離はあまり進行しておらず、表裏面とも左右側辺の中央部付近のみに施されているが、これらの剥離は平面形と厚さを調整する（打瘤の高まりを取り除いて薄くする）目的で行われた2次加工と思われる。また裏面の先端部と基部には、素材剥片の腹面にあたるポジティブな剥離面、表面の中央部には大きいネガティブな剥離面、同じく先端部には縦面と素材剥片剥出以前の剥離面を留めている。こうした剥離面の遺存状況から、この石鎚の製作に際しては、素材として横長剥片を用いており、その打面部と末端部が鋭利に交叉する部位を石鎚の先端部に利用していることが判る。サヌカイト製。2815も石鎚の未成品。円基石鎚か。長さ5.3cm・幅2.6cm・厚さ0.6cm・重さ8.4g。調整剥離は特に表面の左側辺と基部で進行しているが、先端部には縦面、右側辺には欠損面が残されている。この欠損面については、整形のため素材剥片の打面部を取り除くように折断加工した折断面と思われる。なお、裏面には素材剥片の腹面を大きく残しており、横長剥片を利用したことが判る。この石器は、石鎚としての適当な幅を維持しながら部厚く急斜な角度で残る縦面・折断面を取り除くことが困難だったため、製作途上で放棄されたものかもしれない。サヌカイト製で、色調はわずかに灰色を呈している。

**溝54（図216）** 2818・2819は溝54から出土した石器である。2818は石棒と考えられる。長さ19.7cm・幅2.7cm・厚さ2.0cm・重さ174.2g。全体を磨いており、特に裏面は平坦な面を持つ。

2819は尖頭器。調整剥離は粗雑であり、製作途上における偶発的な事故により放棄された未成品と思われる。器軸に対して横方向に2か所で欠損しており、長さ4.4cm・幅4.6cm・厚さ1.5cm・重さ28.0g。尖頭器としての調整剥離は裏面→表面の順で進行しているが、問題は、下辺の欠損面からも表面側に調整剥離が施されている点である。欠損後の再加工なのか、あるいは整形のための意図的な折断加工と器面調整なのか、どちらとも決め難い。ただし、いずれにしてもこの部位が尖頭器の基部として意識されていたことは間違いないであろう。サヌカイト製。

**竪穴建物9（図217～219）** 竪穴建物9からは多数の石器が出土した。第V章でも詳述したが、本竪穴建物の床面の一部には、円形を呈する盛土状の高まりがあり、その土を除去した際に、多数のチップが出土している。このほか、建物内では、中央土坑や壁溝内埋土の機能面直上を中心として、製品・未製品が出土した。さらに周囲盛土内からも剥片を中心とした石器が出土している。

2820は中央土坑から出土した石鎚未成品である。長さ4.1cm・幅2.7cm・厚さ0.8cm・重さ7.5g。調整剥離によって先端部は形成されているが、裏面には素材剥片の腹面にあたるポジティブな剥離面、表面には同じく背面にあたるネガティブな剥離面、右側辺から基部にかけては縦面（素材剥片の打面）を留めている。なお、鎌身の左側辺を形成する調整剥離は、素材剥片末端部の折断加工面に施されている。サヌカイト製。

2821・2830・2832・2833は壁溝から出土した石器である。2821は石鎚の未成品。身部は欠損し、基部のみが遺存する。長さ3.2cm・幅2.4cm・厚さ0.7cm・重さ5.7g。基部、右側辺の表面側、左側辺の裏面側で調整剥離が進行しているが、基部には縦面および整形を目的とした折断面を留めている。表面に残る素材剥片背面の剥離面からは、縦長剥片を連続して剥離した過程も伺えるが、この石器の素材となった剥片自体は横長剥片であろう。サヌカイト製。

2830は剥片。2か所で欠損し、平面形は三角形を呈している。意図的な折断加工の可能性もあるが、はっきりしない。長さ3.1cm・幅2.7cm・厚さ0.9cm・重さ5.8g。打面は平坦な縦面で、本来は横長

剥片と思われる。サヌカイト製。

2832・2833は軽石。いずれも破片である。2835は直方体状で、長さ9.5cm・幅7.0cm・厚さ5.9cm・重さ81.0g。2833は三角柱状で、長さ12.4cm・幅7.8cm・厚さ6.6cm・重さ128.9g。

2822～2829・2831は建物内から出土した石器である。2822・2823は石鎚の未成品だろうか。2823は長さ6.4cm・幅2.5cm・厚さ0.7cm・重さ9.0g。2点が接合するが、製作途上で器軸に対して横方向に欠損して放棄されたものであろう。調整剥離は裏面（素材剥片の腹面）のみに施されており、右側辺の調整剥離は素材剥片の末端に残る蝶面から行われ、左側辺と基部の調整剥離は折断面に対して行われている。これらの整形加工によって先端部は比較的明瞭に形成されているが、石鎚としての全体的な形状は不明である。なお素材は横長剥片である。サヌカイト製。2823は長さ3.5cm・幅1.7cm・厚さ0.6cm・重さ4.7g。有茎石鎚の左側辺の基部から返し部分に相当すると思われ、器軸に対して縦・横方向に欠損している。調整剥離は、素材となった横長剥片の打面部を取り除くように、素材剥片の背面側に施されている。サヌカイト製。

2834は搔器。右半部を欠損し、長さ2.4cm・幅4.3cm・厚さ1.3cm・重さ13.8g。蝶面を打面とする部厚い横長剥片の末端部に、刃角59°の急斜な刃部を作出している。器体の表面に残る剥離面は、いずれも素材剥片と同じ蝶面打面を打撃したものである。サヌカイト製。2835は両面加工石器の未成品。器体中央部において、下辺の刃部に加えられた打撃によって縦方向に欠損しており、製作途上で放棄されたものだろう。長さ7.5cm・幅4.2cm・厚さ1.5cm・重さ47.1g。平面形は扁平な五角形を呈し、右側辺に蝶面、左側辺にも素材剥片の打面と思われる蝶面、上辺右半部に整形のための折断面を留めている。調整剥離は階段状になり、刃部および折断面も含めた背部は「ツブレ」を呈している。また表面の一部には節理面、裏面には素材剥片の腹面が見える。サヌカイト製。

2826～2829は打面の状態や背面の剥離面構成、あるいは縦断面形などから、尖頭器などの調整剥片（いわゆるポイントフレイク）と思われる。2826は長さ1.8cm・幅4.0cm・厚さ0.8cm・重さ4.6g。打面は複剥離打面で、打点は稜線上にあり、打角は119°を測る。背面は、蝶面および腹面に対向する方向から打撃された剥離面で構成されている。サヌカイト製。2827は長さ2.1cm・幅3.2cm・厚さ0.5cm・重さ2.5g。線状打面で、背面には蝶面を留めている。サヌカイト製。2828は左側辺部を欠損し、長さ2.4cm・幅3.2cm・厚さ0.9cm・重さ3.6g。單剥離打面で、平坦部に打点があり、打角は127°を測る。背面に残る剥離面の打撃方向は、腹面の打撃方向に対して直交あるいは対向している。サヌカイト製。2829も左側辺部を欠損し、長さ2.9cm・幅3.7cm・厚さ0.7cm・重さ6.0g。複剥離打面で、稜線上に打点があり、打角は126°を計測する。背面に見える剥離面の打撃方向は、腹面と同一あるいは対向する方向である。尖頭器先端部付近の調整剥片と思われる。サヌカイト製。

2831は敲石である。長さ8.3cm・幅3.2cm・厚さ1.2cm・重さ43.5g。扁平な長方形の蝶の短辺を使用したことで大きな割れ面が生じ、放棄されたものと思われる。また表面の一部、網フセ部分には、炭化物（煤）が付着している。砂岩。

2834～2838は周堤盛土から出土した石鎚である。2834は円基無茎石鎚。先端部をわずかに欠損し、長さ2.9cm・幅1.9cm・厚さ0.3cm・重さ1.3g。色調は灰色を呈し、摩滅が著しい。サヌカイト製。2835は平基有茎石鎚。長さ4.1cm・幅2.6cm・厚さ0.4cm・重さ3.1g。表裏面には素材剥片の腹背面を大きく残しておらず、極めて薄い横長剥片の周辺を加工した石鎚である。サヌカイト製。2837は石鎚の未成品。円基石鎚か。長さ4.9cm・幅3.0cm・厚さ0.8cm・重さ11.2g。調整剥離は右側辺から先端部

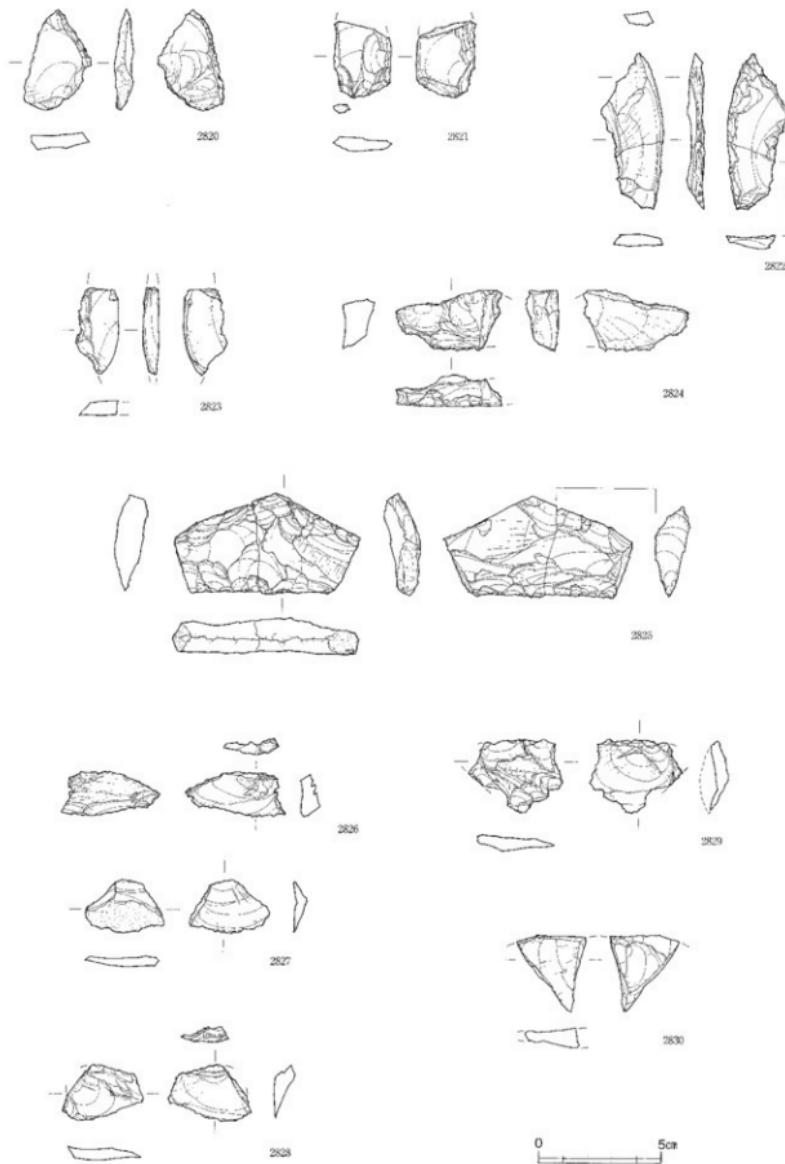


图217 坑穴建筑9出土石器（1）

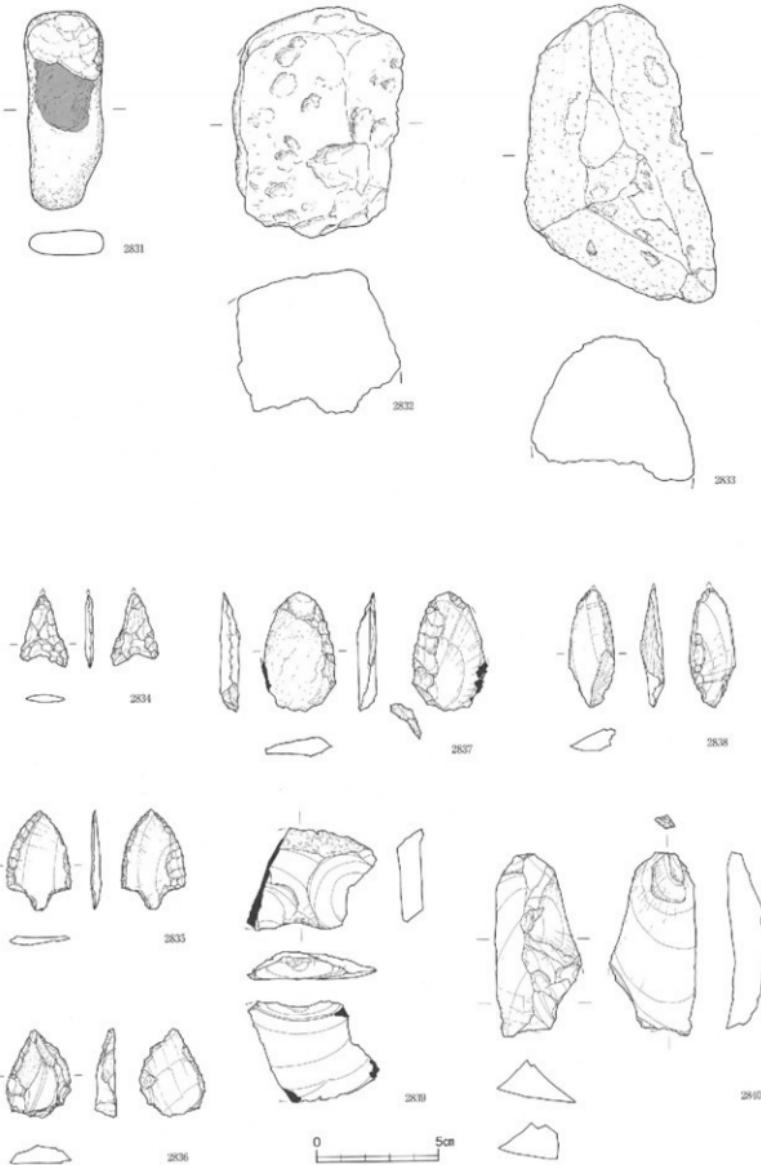


図218 穴穴建物9出土石器(2)

にかけての表裏面に見えるが、表面には礫面、裏面には素材剥片の腹面を残し、左側辺には整形のための折断面、基部には素材剥片の打面を留めている。その素材となった剥片は横長剥片であり、打面は礫面、打角は125°を測る。サスカイト製で、色調は灰色を呈している。2838も石礫の未成品。先端部をわずかに欠損し、長さ4.9cm・幅2.0cm・厚さ1.0cm・重さ6.2g。先端部および基部の一部に調整剥離が施され、尖基石礫を目指したものであろうか。素材は横長剥片である。サスカイト製。2836も石礫の未成品。長さ3.6cm・幅2.6cm・厚さ0.9cm・重さ8.0g。調整剥離は先端部・左側辺部・基部の主に表面に施され、表面と右側辺に礫面、裏面に素材剥片の腹面を留めている。平面形は幅広の涙滴形を呈しており、円基石礫を目指したものであろうか。サスカイト製。

2839・2840は周堤盛土から出土した石核と剥片である。2839は横長剥片の剥出を目的とした石核。左側辺部などを調査時に欠失しており、長さ4.3cm・幅5.3cm・高さ1.2cm・重さ20.3g。石核の素材は板状剥片で、その背面は礫面と並列する2つの大きな剥離面で構成され、腹面のポジティブな剥離面はほぼ平坦で、打瘤はあまり発達していない。石核としては、この板状剥片の打面部側に剥片剥離作業面を設定し、打面調整や側面調整は行わず、素材剥片の背面を構成する平坦な剥離面を打面として、扁平な三角形状の横長剥片を剥離している。打角は122°を計測する。なお打面には打撃クラックを留めている。サスカイト製で、色調は白灰色を呈し、風化が進行している。2840は縦長剥片。右側辺の末端部付近を欠損しており、長さ7.5cm・幅3.6cm・厚さ1.8cm・重さ36.0g。打面は小さな礫面打面で、平坦部を打擊しており、打角は78°と鋭角である。剥片の横断面形は三角形を呈し、背面の中央には稜線が通っているが、その稜線の左側は大きな1つの剥離面、右側はその剥離面を打面とする複数の剥離面であり、稜線上の打面付近には頭部調整が行われて「ツブレ」を呈している。こうした背面構成の特徴から、この剥片は、打面転位などに伴い不要となった稜状部を除去し、石核の形状を整える石核調整剥片と考えられる。サスカイト製。

2841・2844は周堤盛土から出土した2次加工ある剥片。2841は左側辺を欠損し、長さ2.5cm・幅2.5cm・厚さ0.6cm・重さ3.9g。剥片末端部の腹面側にわずかに2次加工が施されている。打面は礫面で、打角は112°を測り、右側辺に礫面を留めている。サスカイト製。2844は左側辺の一部を欠損し、長さ7.1cm・幅4.9cm・厚さ1.6cm・重さ40.0g。左側辺打面部付近の背面側に2次加工が施されている。打面は礫面打面で、打点は礫面が突出する稜線上に設定され、打角は97°を計測する。背面は打面周辺の小さな剥離面と大きく残る礫面で構成されている。サスカイト製。

2842・2846は周堤盛土から出土した微細剥離ある剥片。2842は中央部で縦方向に欠損し、長さ4.0cm・幅2.6cm・厚さ1.0cm・重さ9.8gを測る。右側辺から末端部にかけて微細剥離痕を留めている。サスカイト製。2846も中央部で縦方向に大きく欠損する。長さ6.2cm・幅3.6cm・厚さ1.4cm・重さ30.7gを測る。右側辺を除く各縦辺部は欠損面であり、整形を目的とした折断加工の可能性もある。打面側の欠損面から背面側にわずかに剥離が行われ、右側辺から末端部の欠損面にかけて微細剥離痕を留めている。サスカイト製。

2843・2845・2847～2851は周堤盛土から出土した剥片。2843は左側辺を欠損し、右側辺は調査時に欠失している。長さ3.0cm・幅3.3cm・厚さ0.5cm・重さ5.8g。打面は縦状打面で、打面側の縦辺には礫面を留めている。サスカイト製。2845は打面部を欠損し、長さ3.3cm・幅1.9cm・厚さ0.3cm・重さ2.1g。右側辺末端部に礫面を留めている。サスカイト製で、色調は灰色を呈している。2847は左側辺や末端部を欠損し、長さ2.2cm・幅2.9cm・厚さ0.5cm・重さ2.4g。折断面を打面にしており、打角

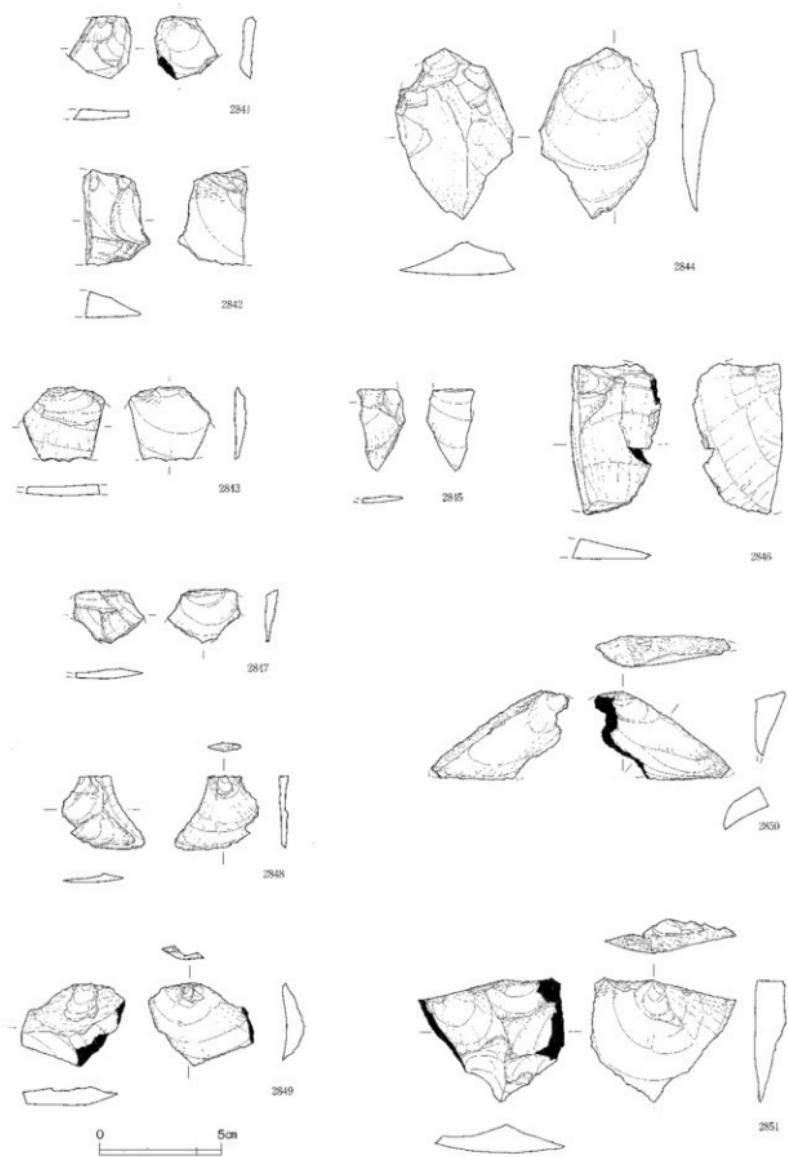


图219 墓穴建筑9出土石器（3）

は  $118^{\circ}$  を測る。サスカイト製。2848は長さ 2.9 cm・幅 3.3 cm・厚さ 0.4 cm・重さ 2.9 g。礫面打面で、打角は  $89^{\circ}$  を測る。サスカイト製。2849は両側辺を調査時に欠失し、長さ 3.3 cm・幅 4.5 cm・厚さ 0.9 cm・重さ 9.7 g。礫面打面で、打角は  $118^{\circ}$  を測り、背面には大きく礫面を留めている。サスカイト製。2850は調査時に右側辺を欠失し、長さ 3.6 cm・幅 5.5 cm・厚さ 1.2 cm・重さ 16.5 g。礫面打面で、打角は  $102^{\circ}$  を測り、左側辺に礫面を留めている。サスカイト製。2851は両側辺を調査時に欠失し、長さ 5.1 cm・幅 5.8 cm・厚さ 1.4 cm・重さ 27.1 g。礫面打面で、打点は礫面がわずかに突出する稜線上に設定され、打角は  $89^{\circ}$  を測る。背面は多方向から求心的に打撃された小さな剥離面で構成されている。剥片剥離作業面を更新する目的をもった剥片かもしれない。サスカイト製。

流路 3 (図 220) 2852~2854は流路 3 から出土した石器である。

2852は砾石。破損して小片になっており、現状の長さ 10.9 cm・幅 10.9 cm・厚さ 4.0 cm・重さ 670.0 g。上面の左半部から左側面部にかけて研磨されている。片麻岩。

2854は敲石だろうか。敲打痕は観察できないが、上下端部は敲打の際に生じた破損面と思われる。長さ 5.6 cm・幅 4.9 cm・厚さ 4.2 cm・重さ 145.0 g。側面部にはわずかに赤色顔料（朱？）が付着している。顔料の成分は分析していない。砂岩。

2853はナイフ形石器か。基部をわずかに欠損し、長さ 4.3 cm・幅 1.7 cm・厚さ 0.7 cm・重さ 4.0 g。基部の両側辺には、通常とは異なる表面から裏面に向けての調整剥離が施されている。素材は横長のいわゆる有底剥片であり、器体の左半部には素材剥片の背面の一部である底面（右核素材である板状剥片の腹面）があり、器体の右半部には素材剥片の剥出に先行して剥離された並列する 2 つの剥離面が見える。なお、器体の表面に残るこうした素材剥片背面の特徴からは、打点を直線的に後退させて連続的に目的とする剥片を剥離するのではなく、左右に移動しながら後退させていたことが判る。サスカイト製で、色調は灰色を呈し、風化が進行している。

4 層 (図 220・221) 2855~2859・2862は 4 層から出土した石器である。

2855は円礫。長さ 7.7 cm・幅 5.5 cm・厚さ 3.8 cm・重さ 230.0 g。敲打痕や研磨痕は残っていないが、例えば敲石として利用するには適当な形状・大きさである。砂岩。

2856は凹基無茎石鐵。長さ 3.7 cm・幅 2.1 cm・厚さ 0.7 cm・重さ 3.0 g。横断面形は菱形で、脇抉りは比較的深い。サスカイト製。2857は剥片。右側辺を調査時に欠失し、長さ 4.8 cm・幅 4.7 cm・厚さ 0.8 cm・重さ 13.5 g。礫面打面で、打点は角張った稜状部に設定され、打角は  $110^{\circ}$  を測る。左側辺に礫面を留め、背面は多方向からの求心的な剥離面で構成されている。サスカイト製で、色調は灰色を呈し、風化が進行している。

2858は尖頭器の未成品。基部を欠損し、長さ 11.3 cm・幅 4.2 cm・厚さ 2.9 cm・重さ 119.5 g。粗雑な整形の段階であり、尖頭器として仕上げるにはさらに厚みを減らす必要がある。器体の表面に大きく礫面を留め、裏面は全てネガティブな剥離面である。したがって、素材は直方体状の亜角礫だったかもしれない。調整剥離は段階状剥離で、側辺部は「ツブレ」を呈している。サスカイト製で、色調は白味を帯び、白色石粒をわずかに含んでいる。2859も小形尖頭器の未成品。先端部と基部を欠損し、長さ 8.6 cm・幅 3.7 cm・厚さ 1.5 cm・重さ 34.6 g。断面形は凸レンズ状で、表面の中央には稜線が通り、裏面の中央には、おそらく素材剥片の腹面に相当する平坦な剥離面を留めている。この剥離面からみると素材は継長に近い剥片であり、その打面部を基部側に設定し、裏面→表面の順序で調整剥離を施している。サスカイト製で、わずかに白色石粒を含んでいる。

2862は石錐である。つまみ部と刃部の先端を欠損し、長さ3.5cm・幅2.8cm・厚さ1.4cm・重さ8.3g。つまみ部は部厚く、刃部の横断面形は菱形を呈している。また、つまみ部の欠損面からも裏面側に小さな剥離が加えられている。サスカイト製。

第4面直上(図220・221) 2860・2861・2863・2864は第4面直上から出土した石器である。

2860は円基無茎石錐。右側の逆刺を欠損し、長さ1.8cm・幅1.2cm・厚さ0.3cm・重さ0.6g。両側刃が外側に屈曲して有段になり、脇抉りは浅く、平面形は五角形に近い。サスカイト製で、色調は灰色を呈している。2863は凸基有茎石錐。茎部を調査時に欠失し、長さ3.3cm・幅1.9cm・厚さ0.8cm・重さ4.0g。横断面形は凸レンズ状で、比較的「ずんぐり」した印象を受ける。サスカイト製で、白色石粒を含む。2864は尖基石錐。調査時に基部をわずかに欠失し、長さ5.5cm・幅1.8cm・厚さ0.6cm・重さ3.4g。横断面形は凸レンズ状で、表裏面とも中央部に稜線があり、側辺部は鋸歯状に細部調整されている。サスカイト製で、白色石粒を含む。

2861は石庖丁。長さ9.8cm・幅5.0cm・厚さ0.7cm・重さ47.4g。平面形は長方形に近く、刃部はやや内湾する直線刃であり、表裏面から砥き出された両刃である。紐穴は2つあり、その中心の間隔は1.9cmを測り、表裏両面から穿孔されている。凝灰岩製で、色調は灰色を呈している。

5層(図221) 2866は5層から出土した剥片である。左右側刃を欠損し、長さ5.9cm・幅6.4cm・厚さ1.3cm・重さ37.5g。礫面打面で、打点は平坦面に設定され、打角は92°を測る。打面から右側刃にかけて礫面を留め、背面には、腹面と同一方向および直交する方向からの剥離面が見える。サスカイト製で、色調は灰色を呈している。

6層(図221) 2865は6層から出土した剥片である。縦方向に欠損し、さらに打点周辺は調査時に欠失している。長さ3.7cm・幅1.9cm・厚さ1.3cm・重さ5.5g。欠損以前の形状は不明だが、比較的部厚い剥片で、背面には腹面に直交する剥離面があり、末端部には礫面を留めている。剥片剥離作業における石核の打面転位等に伴い、石核整形を目的とした剥片かもしれない。サスカイト製。

11層(図221) 2867~2870は下部沖積層である11層から出土した石器である。

2867は剥片。長さ2.0cm・幅2.4cm・厚さ0.8cm・重さ2.9g。打面は複剥離打面で、打点は剥離面が交叉する稜線上に設定され、ここに打撃クラックを留め、打角は108°を測る。背面には、腹面と同一方向および対向する方向からの剥離面があり、末端はヒンジを呈している。サスカイト製で、色調は灰色を呈している。2868も剥片。長さ3.8cm・幅2.7cm・厚さ0.9cm・重さ7.1g。単剥離打面で、打角は102°を計測する。背面には、腹面と同一方向の剥離面および礫面があり、縦断面形は背面側に湾曲している。サスカイト製で、色調は白色を呈し、風化が著しく進行している。2869も剥片。左側刃は調査時に欠失し、長さ4.0cm・幅3.4cm・厚さ0.9cm・重さ10.9g。礫面打面で、打角は112°を測り、末端はヒンジを呈している。背面には、腹面と同一方向および対向する方向からの剥離面が見える。サスカイト製で、色調は明灰白色を呈し、風化が進行している。

2870は石核。長さ6.2cm・幅10.2cm・高さ9.1cm・重さ670.0g。石核の原材は亜円礫と思われ、流状構造を示す層理面に沿って分割し、その分割面を剥片剥離作業面として利用している。現在の作業面上では3枚の剥片が剥離されており、当初の2回は同一打面上を横に移動して、3回目は打面を直角に転位して、打面調整を行うことなく平坦な礫面を直接打撃している。残核としてはかなりの大きさがあり、さらに剥片剥離作業を進めることは十分可能である。サスカイト製で、色調は白色を呈し、著しく風化している。

(桑野)

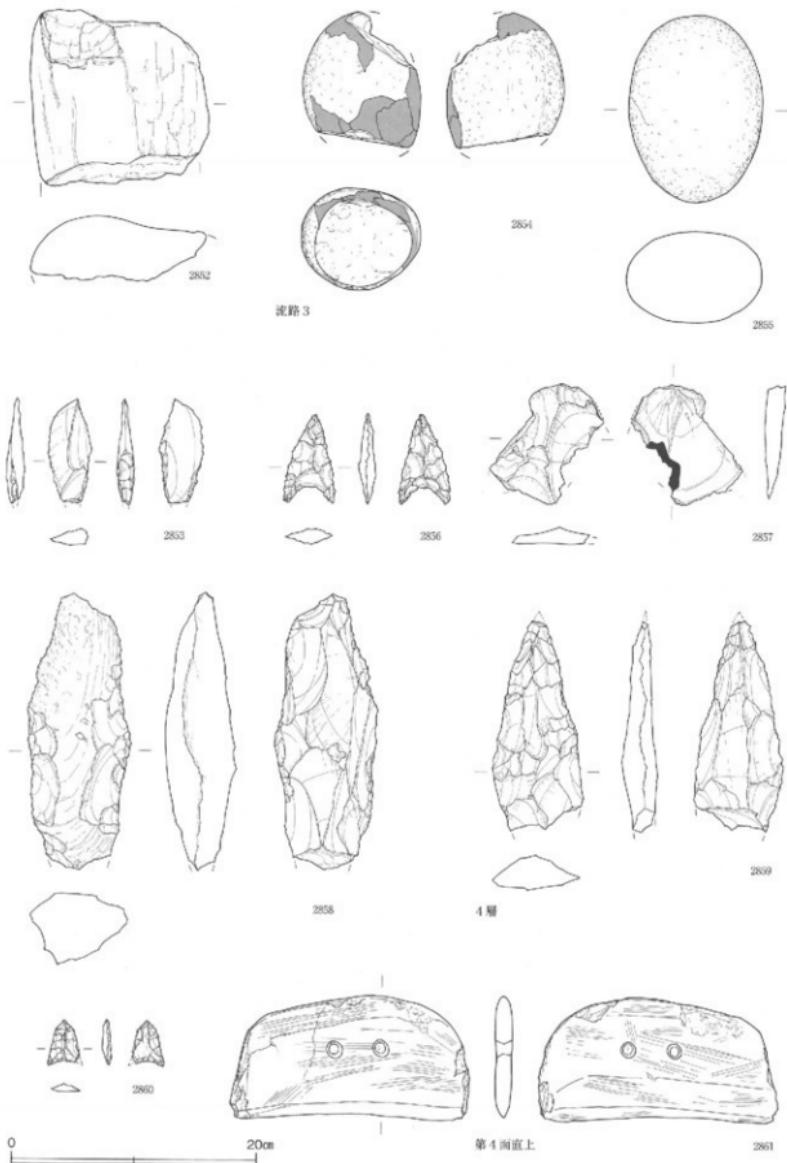
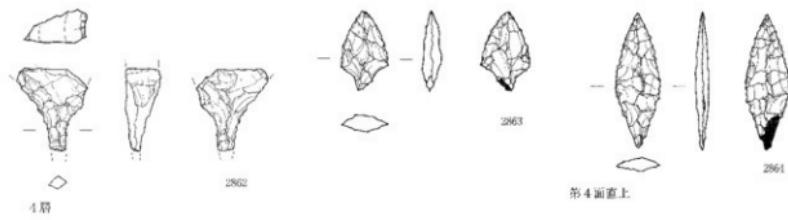
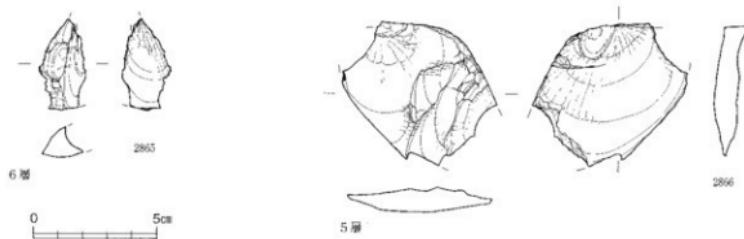


圖220 流路3 第4面直上 4層出土石器



4層

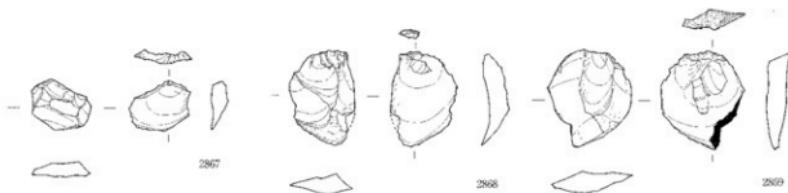
第4面直上



6層

5cm

5層



11層

0 10cm



図221 第4面直上・4～6・11・12層出土石器

### 第3節 木製品

#### (1) 出土木製品の概要

今回の調査では、1面から4面の各造構面帰属造構より中世から弥生時代後期までの広範な時期にわたって各種の木器が出土した。本節では、これらの木器について記述を行う。

#### (2) 出土木製品

図222には第1面で検出された井戸4・7、土坑31から出土した木器を掲げた。

井戸4（図222） 2871は、極目材の板状木製品である。器種の詳細は不明だが、極めて薄い造りで側縁も丁寧に面取りされていることから、曲物や折敷等の製品を構成する部材であるかもしれない。用材は未鑑定のため、不明である。

井戸7（図222） 2872・2873が出土した。2872は棒状の製品である。面取り等の調整が施された形跡も認められず、粗雑な造りではあるが、上端が炭化していたことから付け木のような性格が考えられるかも知れない。2873は杭状の木材である。井戸の肩際に貼り付くようにして出土したことから、井戸の構成部材であったかもしれない。いずれも、用材は不明である。

土坑31（図222） 2874は漆器挽である。高台は高く、外側に大きく張り出している。轆轤痕跡等は認められない。強く内湾して立ち上がる安定した器形を有しており、口縁端部は僅かに段を有している。黒漆を下地としてさらに赤漆を口縁端部及び高台、疊付を除くほぼ全面に塗布している。

朱塗りをほぼ全域にわたって施す例は16世紀以降に多く見られるが、本例については、周辺に同時期の造構・遺物が認められないことからも第1面を構成する多くの造構がそうであるように、12世紀代の所産である可能性もある。

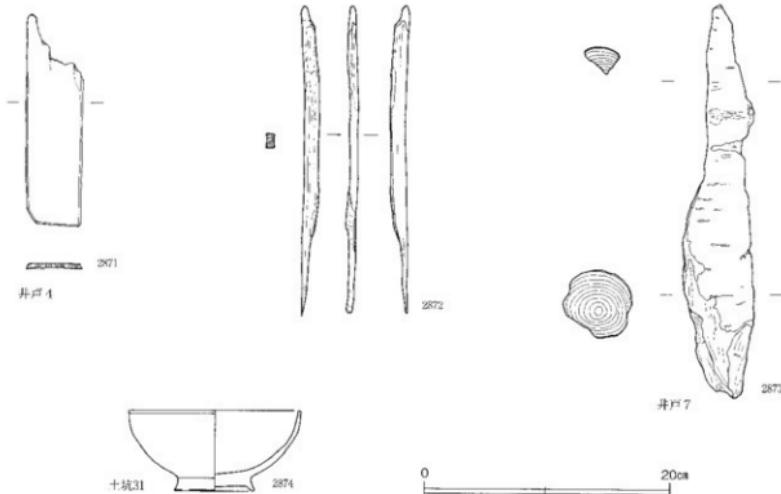


図222 井戸4・7 土坑31出土木製品

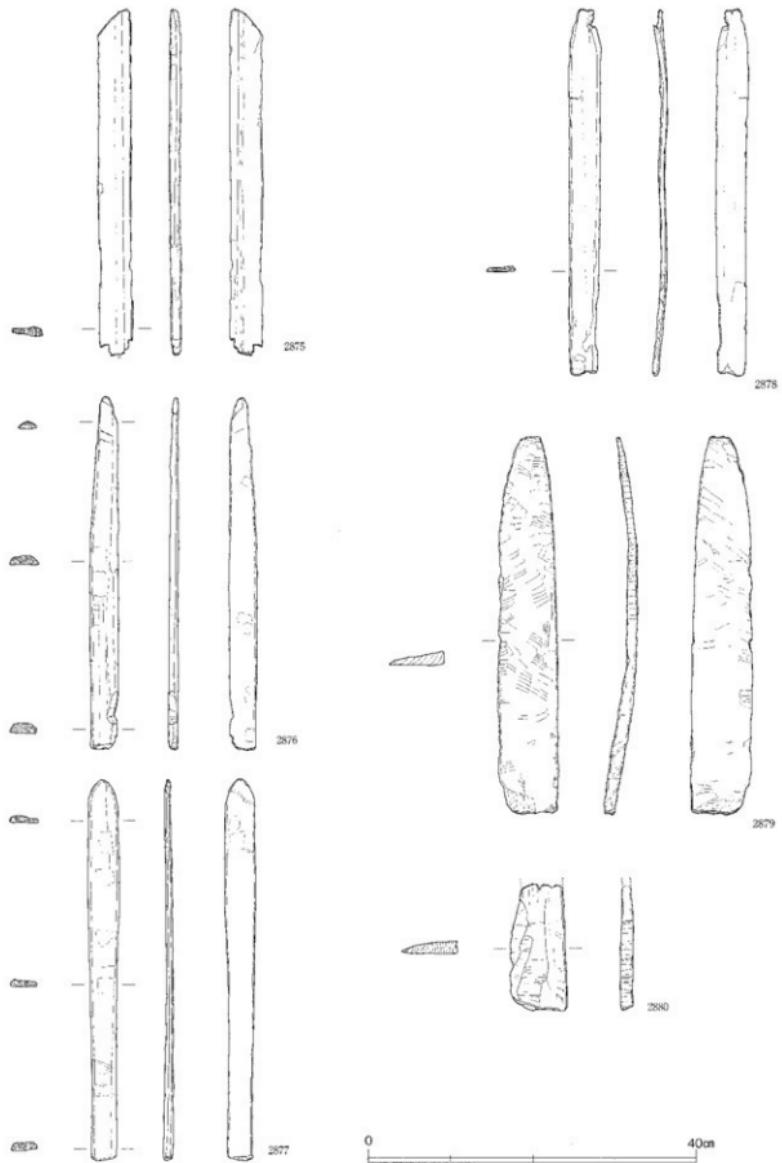


図223 井戸8出土木製品(1)

**井戸 8** (図 223 ~ 225) 2875~2892には第2面に帰属する井戸 8 から出土した木器を掲げた。井戸内埋土中より多数の木製品・木材が出土している。

2875~2878は板状木製品の中でも、端部に明瞭な面を形成するものである。その形状から刀形ないしは剣形の可能性が高いと想定できる。

2875は下端部両側面に段が設けられている。闊を表現した可能性もあるが、端部の摩滅が著しいため、詳細は不明である。

2876は下端部直上の側面に1方向から浅い「く」字状の縁り込みが設けられている。断面形状は台形を呈する。

2877はやや上端部が広がる形状を示しており、緩やかな面を形成しながら切先を表現している。

2879は板状木製品である。側面觀は緩やかに湾曲しているが、乾燥等による湾曲ではなく加工の結果としての湾曲であることがわかる。加工痕は特に凹面に顕著に認められ、幅2~3cm程度の鈍い刃先によって加工が施されている。側面は2方向からの加工痕が認められるが、丁寧な調整が施されており、加工痕の重複関係は不明瞭となっている。断面形状は直角三角形を呈し、木取りは追い極日である。用途は不明であるが、湾曲の形状から船状木製品を模したものであろうか。

樹種同定の結果、2876~2878はヒノキ、2879はシャリンバイであることが判明している。

2880は不明板状木製品である。

2881~2883は板状木製品である。形状からいずれも同様の部材であることが想定できる。いずれも5cm前後のやや厚みのある柾目材を用いる。いずれも片方の端部を欠損するために全容は不明であるが、一方の端部は鋭角に作り出されている。

2881と2882は先端部および中央部に長さ5~10cm、幅3cm程度の長方形を呈する貫穴を設けている。この2点については樹種同定の結果、ヒノキを用材としていることが判明している。

2887~2902は不明木材である。2884が端部を杭状に作り出すほかはいずれも加工痕は顕著ではないが、部分的に炭化するなど被熱痕が認められる。

2888・2889は棒状木製品である。2888は方形の断面を示す芯持ち材を用い、丁寧に面を作り出している。一端を杭状に尖らせるほか、もう一端を直交して切断し、直下の一面に「く」字状の割り込みが設けられている。ヒノキを用材とする。

2889はやや扁平な板目材を用いた材である。加工痕は明瞭ではないが、状端部に僅かな割り込みを施し、段が設けられている。

2890は大型の柾目材を用いた板状木製品である。中央部に15cm程度の割り込みが設けられているが、明瞭な貫穴の形状を示してはいない。上端部はやや炭化している。用途は不明であるが、形状の類似や貫穴の存在などから上述した2881~2883と同様の性格を有する部材の可能性がある。

2891は不明木製品である。大半は断面長方形の棒状を呈するが、上端部は扁平な範囲を呈している。

2892は不明板状木材である。扁平な柾目材を用いており、明瞭な加工痕等は認められなかった。

**竪穴建物 2** (図 226) 竪穴建物 2 の北東側主柱穴に掘えられていた柱根である。床面より上に露出していた箇所は腐食の影響によるためか細くなっている。材には直径15cm程度の芯持ち材を用いており、断面形状はやや不整な梢円形を呈している。下端部には加工痕が明瞭に残存しており、幅6cm程度の鈍い刃先痕が一定の方向に向けて連続して認められる。下端部の成形は乱雑で材に対して若干角度を有して成形されている。樹種同定の結果、材にはクヌギ節を用いていることが判明している。

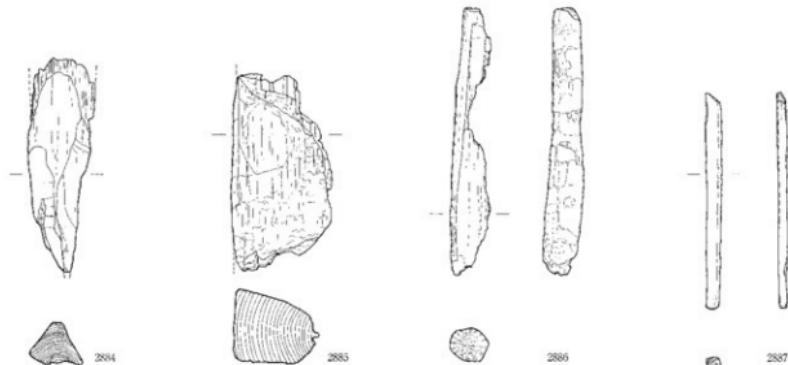
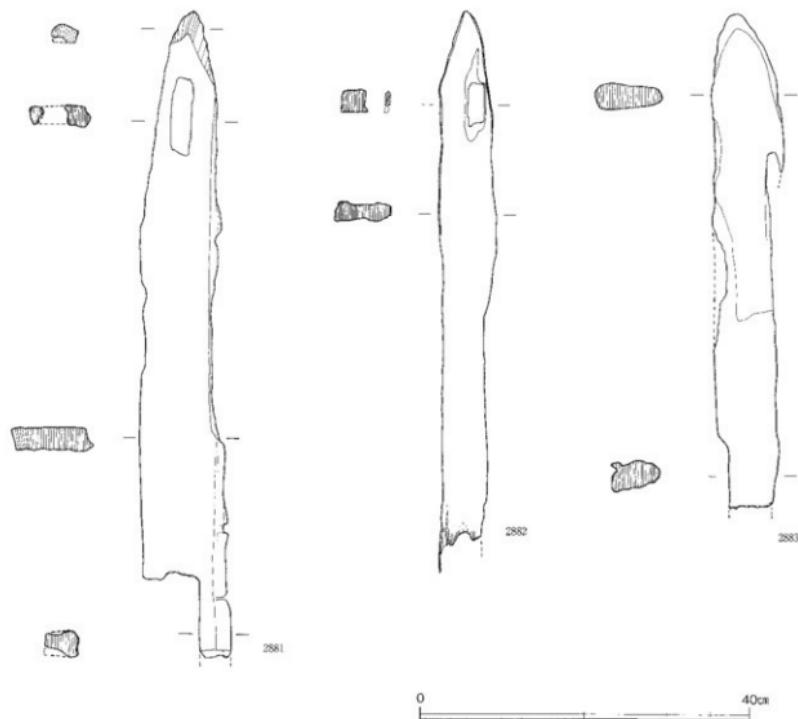


図224 井戸8出土木製品(2)

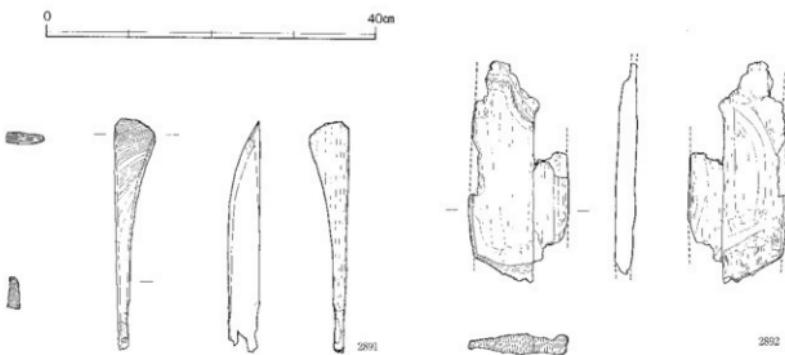
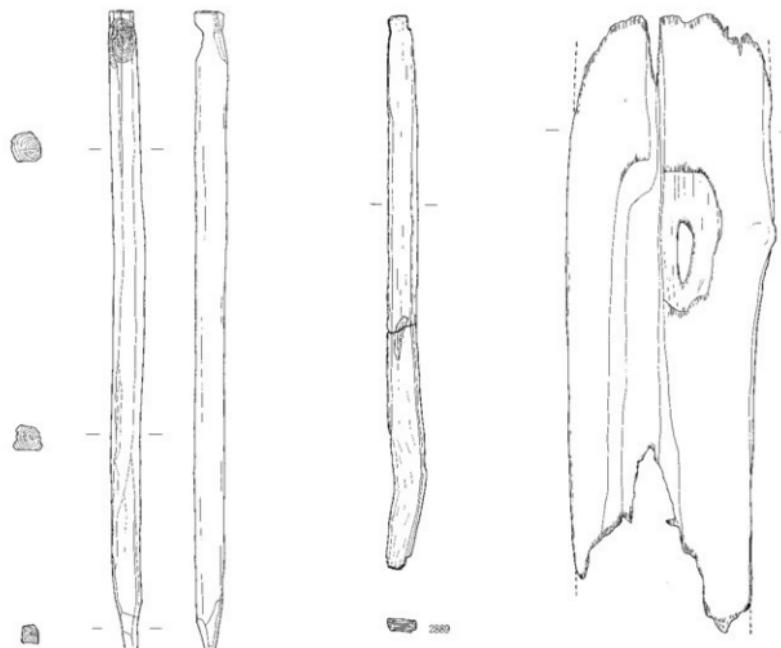


図225 井戸8出土木製品(3)

**竪穴建物 5 (図 226)** 竪穴建物 5 の南側主柱穴に据えられていた柱根である。床面より上に露出していた箇所は腐食の影響によるためか細くなっている。材には直径13cm程度の芯持ち材を用いており、断面形状は不整な梢円形を呈している。下端部付近には枝の分岐点が認められるが、乱雑に切断加工を施すのみで完全には除去しきっていない。下端部には加工痕が明瞭に残存しており、幅6cm程度の鈍い刃先痕が一定の方向に向けて連続して認められる。下端部の成形は乱雑で材に対して若干角度を有して成形されている。樹種同定の結果、材にはクヌギ節を用いていることが判明している。

**竪穴建物 6 (図 227・228)** 図 227 に掲げたものは、竪穴建物 6 の主柱穴に据えられていた柱根である。ともに床面より上に露出していた箇所は腐食の影響によるため細くなっている。

2895は、材には直径17cm程度の芯持ち材を用いており、断面形状は不整な梢円形を呈している。残存範囲の中位には枝の分岐点が認められるが、乱雑に切断加工を施すのみで完全には除去しきっていない。下端部には加工痕が明瞭に残存しており、幅3~4cm前後の鈍い刃先痕が認められる。加工痕の方向は特定の方向を指向しないが、外縁部は面取りを施すように反時計回りに連続的な加工が施されている。ただし成形は乱雑で、材に対して若干角度を有して成形されている。樹種同定の結果、材にはクヌギ節

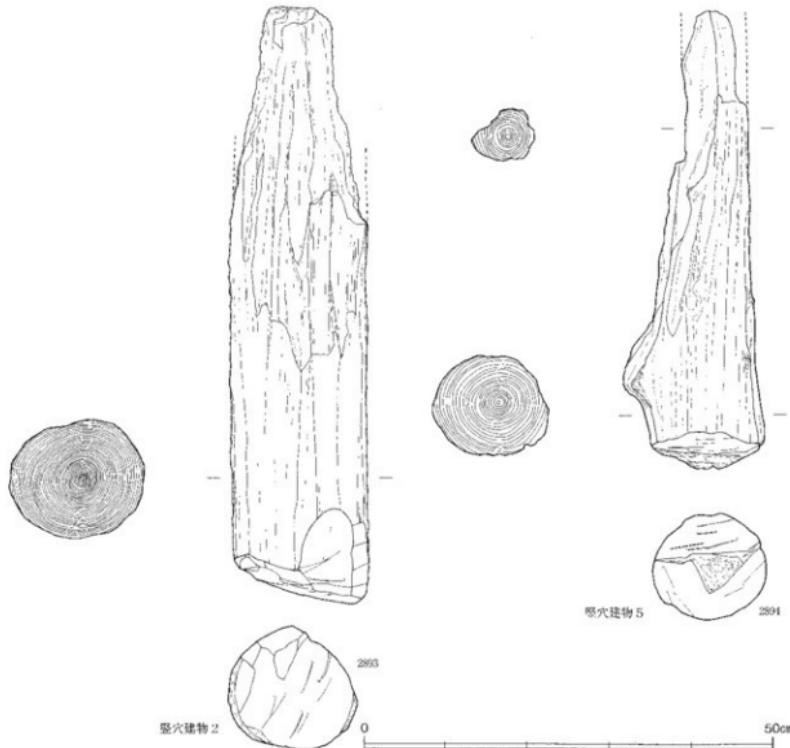


図226 竪穴建物 2・5 出土木製品

を用いていることが判明している。

2896は2895より若干小振りな材を用いており、直径15cm前後の材を用いている。材は、やや不整な梢円形の断面形状を示す芯持ち材で、表層には樹皮が残存していた。残存範囲の中位には枝の分岐点が認められるが、2895とは異なり幹からの分岐が天地逆向きとなっている。枝の分岐点は乱雑に切断加工を施すのみで完全には除去されていない。下端部には加工痕が明瞭に残存しており、幅3~4cm前後の鈍い刃先痕が認められる。加工痕の方向は大きく2方向から1点に向けて施されているが、成形は乱雑で、材に対して若干角度を有して成形されている。樹種同定の結果、材にはクヌギ節を用いていることが判明している。材の使用状況と自生状態の天地が逆転する現象は興味深い。

図228には建物内から出土した部材を掲げた。2897・2899は堀溝付近、2898は中央部を東西に走る排水溝内から出土したものである。2897・2899はクヌギ節、2898はハイノキ属を用いている。

2897・2899は板状木製品である。ともに幅12~15cm程度のミカン割材を用いている。加工痕跡は特に目立ったものは認められない。堀溝付近に落ち込むようにして出土していることから建物を構成するなんらかの構築部材で、同一の部材であった可能性もあるが、詳細は不明である。

2898は棒状木製品である。ともに端部を欠く。不整な長梢円形を示す芯持ち材を用いており、外面に

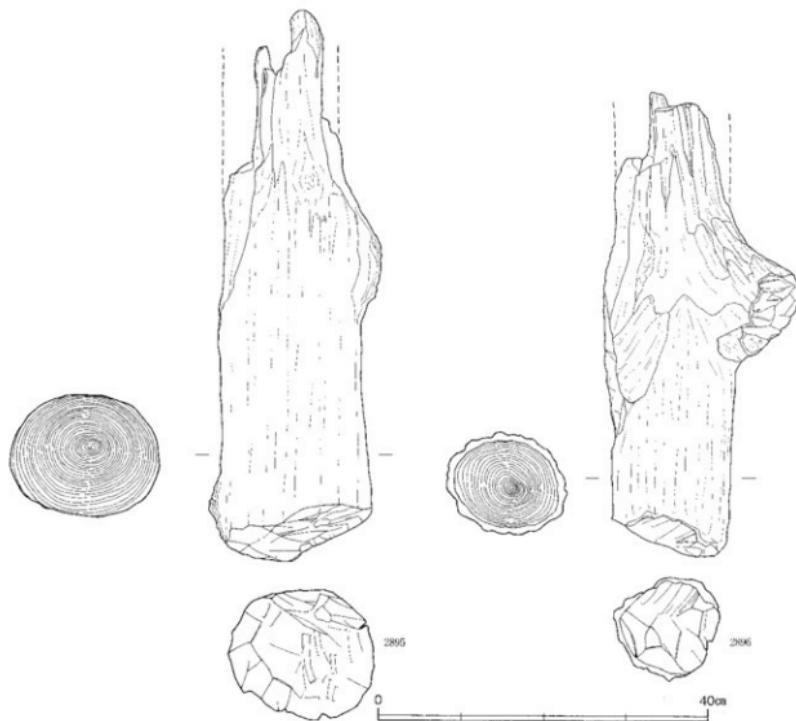


図227 壁穴建物6出土木製品(1)

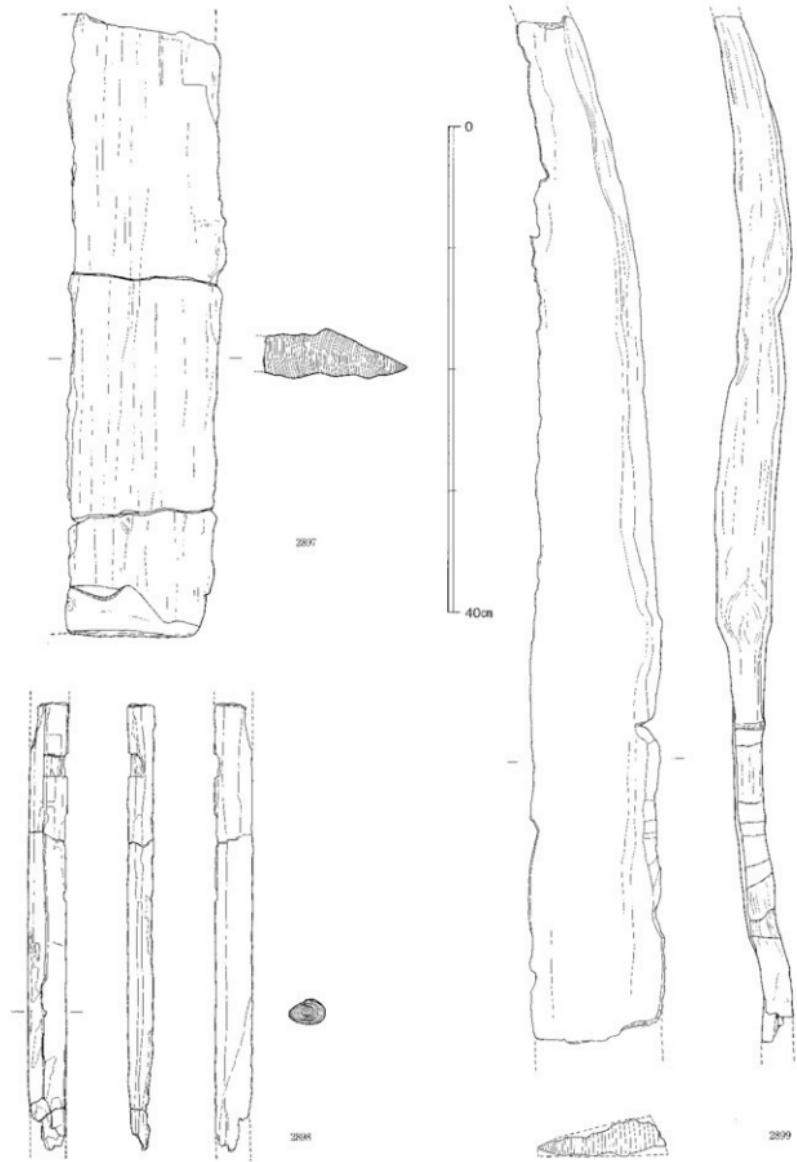


图228 髫穴建物 6 出土木製品 (2)

は特に加工が施された形跡は認められない。部分的に2cm程度の方形のホゾ穴を割り込んでいる。

**竪穴建物9(図229・230)** 図229に掲げた2900は、竪穴建物9の南東隅床面に据えられていた梯子である。第V章でも詳述したように床面を僅かに掘り込んで基部を埋めていたことから、建物の出入りに伴う梯子として据えつけられていた可能性が高い。なお、上端部は腐食による影響を受けたためか、細くなり最上部の段以上が欠損している。使用材は直径13~14cm大の芯持材の一本を利用しておらず、加工が及ばない範囲は断面がやや不整な円形を呈している。材の一側面に、やや角度の甘い「L」字状の削り込みを3箇所に施することで足がかりを作り出している。足がかり部周辺は腐食が進行していたため加工痕が不明瞭となっていたが、基部では幅3~4cmの鈍い刃先痕が一定の方向を指向せずに認められた。樹種同定の結果、用材にはコナラ節を用いていることが判明している。

2901は西側壁溝上より出土した横樋状木製品である。追板目の材用を用いており、断面形状は梢円形を示す。全体的に磨耗が激しく、加工痕は顕著には認められなかった。図上の上端部は磨耗が特に著しく、握部の存在については明らかにできなかった。下端部は残存しているが、端面には使用による磨耗が認められず、直線的な凹凸が目立つ。握部の存在が不明であるため、詳細は明らかでないが、断面形状が梢円形を示していることや端面に使用による磨耗が認められないことからも、柱よりは横樋の機能を想定するほうが妥当と考えられる。

2902は棒状を呈する礎板である。下端部に加工痕を留めるが、詳細は不明である。柱穴3から出土。

2903は板状の礎板である。追樋目材を用いる。加工痕は認められなかつたが、「L」字状に加工されている柱穴4から出土した。

2904~2908は木鍤である。建物の床面および壁溝上から出土した。出土地点としてはまとまりは認められない。いずれも直径7cm前後の輪切りにした芯持材の側面中央部に細い切り込み溝を施したものであり、2904がやや角度を有する「V」字状を呈する溝を施すほかは、形状的に大きな差異は認められない。全体的に摩滅が著しく、明瞭な加工痕は認められなかつたが、両端の面は樹芯に向かって凸状を呈していたことから、同径の材に切り込みを入れ分離させたものと想定できる。断面形状は扁平な梢円形を呈しているが、側面の一部が放射状組織に沿って割れている箇所が目立つことから埋没時の土圧を受けた結果の形状を示している可能性がある。

**井戸10(図231)** 2909は横樋状木製品である。全体的に摩滅が著しく上端部を欠くために詳細は不明である。直径8cm前後の芯持材を用い、断面円形を呈する。身部の全長が20cm前後と短いことから横樋としての機能を想定した。下端部はゆるやかな凸面を形成するが、上部とは異なり加工痕がまったく認められなかつた。摩滅の可能性もあるが、使用による磨耗の可能性を考えれば、堅性的な使用方法が想定できるかも知れない。一方、上端部はやや傾斜の急な凸面を形成しており、外縁部に僅かな平坦面を形成することから加工痕を示す可能性がある。やや摩滅しているために、握部の存在は確実ではない。

2910・2911は板状木製品である。2910は板目材、2911は樋目材を用いている。加工痕が明瞭に残存するが、製品の全容は不明である。

2912は棒状木製品である。断面形状は不整な台形を示し、板目材を用いている。上端部は尖り気味に仕上げられており、4面に加工痕が認められる。下部を欠損するため全容は不明であるが、凸状の切り込みが認められることから、天地が逆転することとなるが背負子状木製品である可能性もある。

2913は棒状木材である。上半部を欠損する。断面円形の芯持材を用い、下端部を斜めに切断加工している。なんらかの部材である可能性もあるが、詳細は不明である。

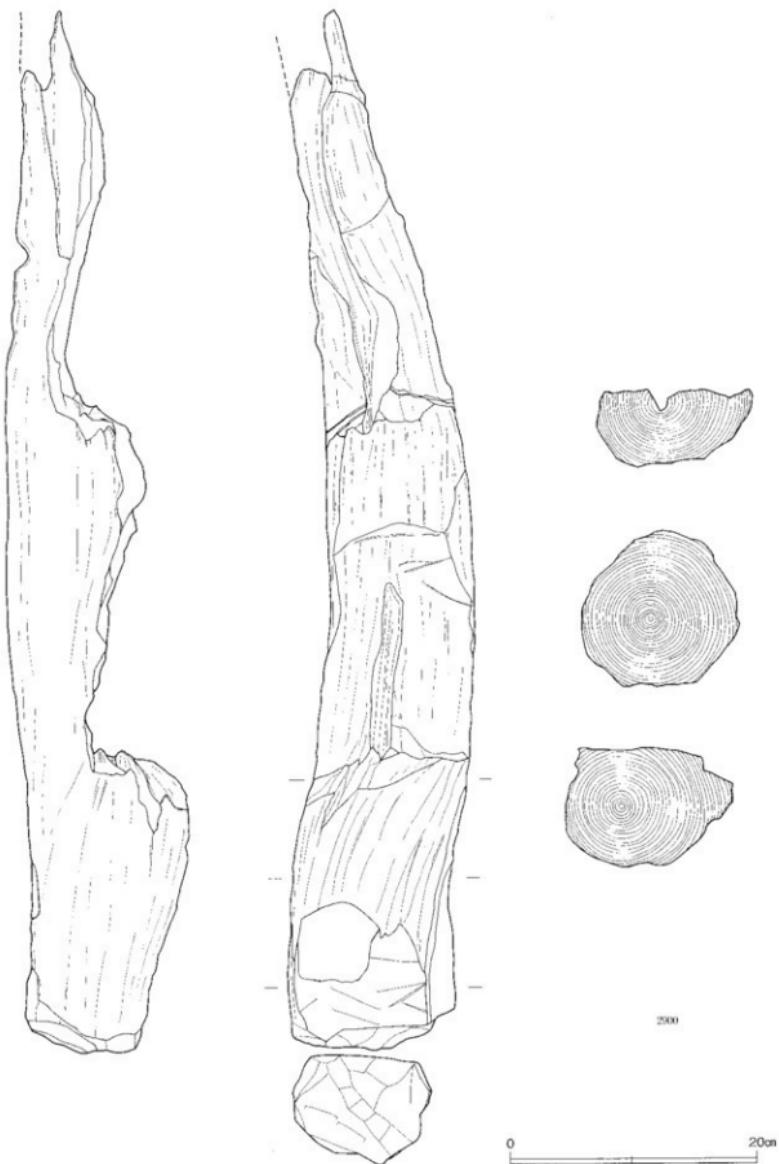


圖229 整穴建物9出土木製品（1）

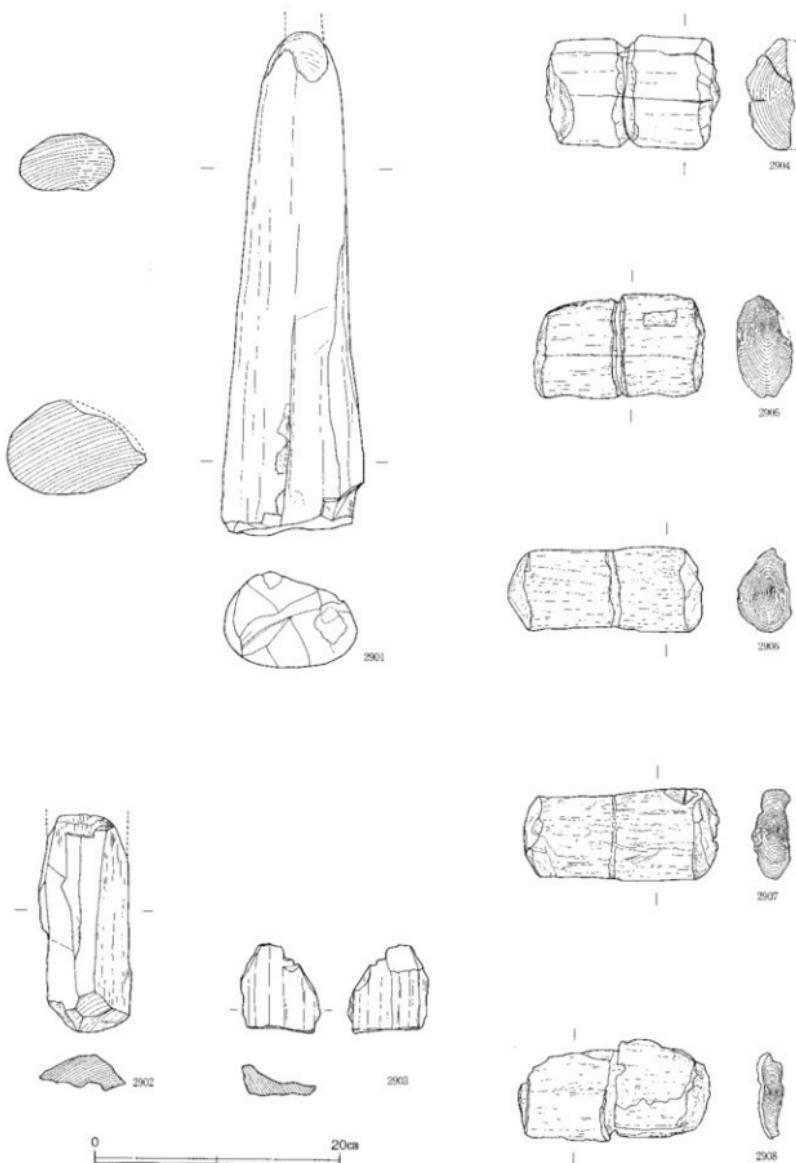


圖230 積穴建物9出土木製品（2）

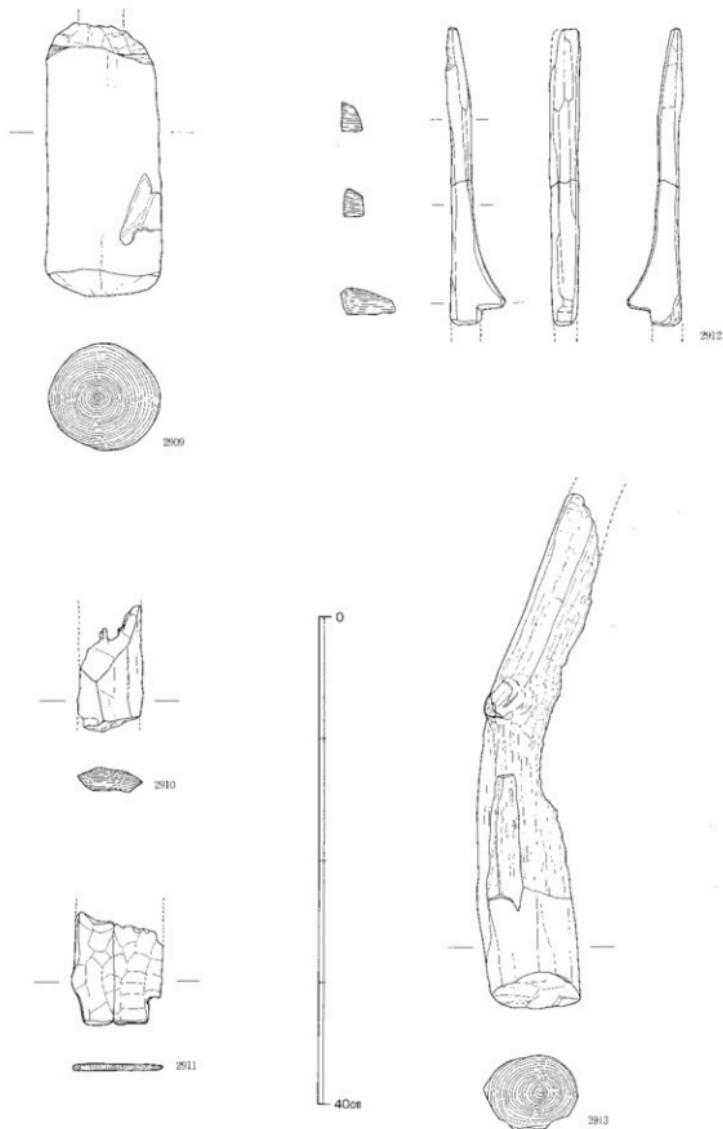


図231 井戸10出土木製品

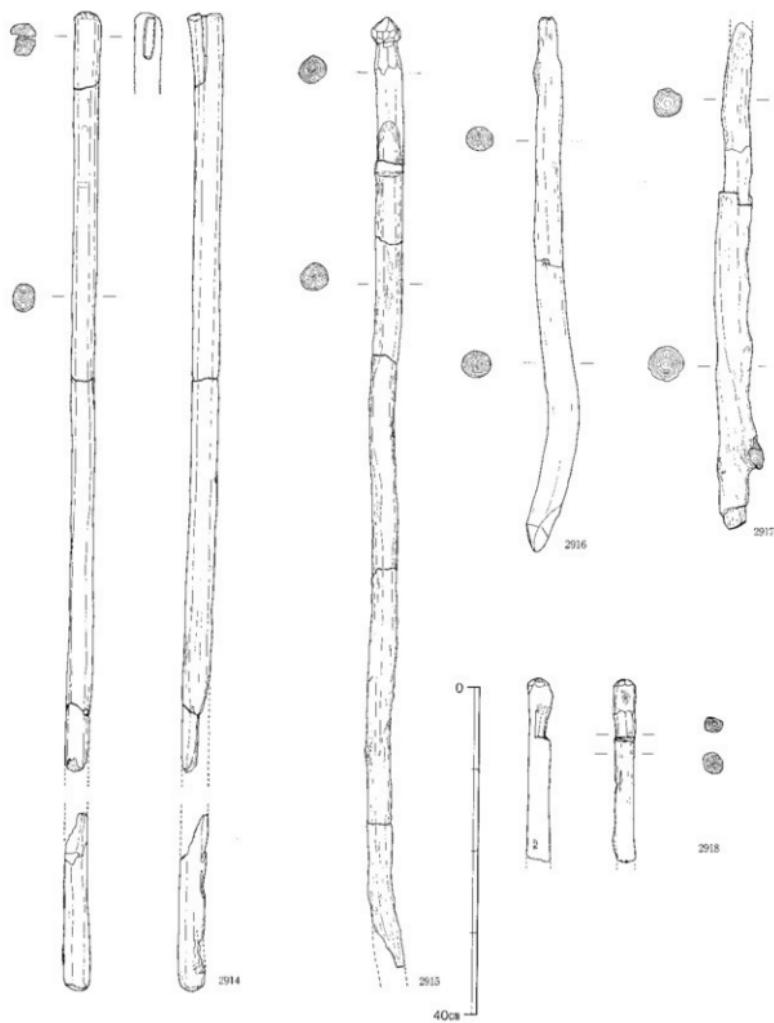


図232 貯木道構1出土木製品(1)

貯木遺構1（図232～234） 多数の木材・木製品を含む土坑である。出土木の大半は最下層から出土している。製品のほかに加工途上の未製品や原本に近い木材を多く含む点が特徴的といえる。

図232・233には棒状木製品を掲げた。農具の柄、有頭棒等がある。

2914は農具の柄である。一部を欠くために詳細な全長は不明である。断面形状がやや楕円を示す芯持材を用いる。全体的に摩滅が著しく加工痕は認められなかった。上端部には端面中央部から身部に向かって切り込みを入れ、その間に別木の楔が挟み込まれていた。下端部はやや丸みを帯びている。同様の類例が滋賀県赤野井湾遺跡より出土していることから農具の柄と断定するにいたった。

2915～2918は棒状木製品である。2915は有頭棒であるが、下端部を欠損するために製品の全容は明らかでない。直径3cm前後の断面円形の芯持材を用いる。玉葱状を呈する上端部は2cm大の加工を施すことで面を形成して多面体を呈している。材の直径や先端部の形状から天秤棒等の機能が想定できるが、一端を欠くため詳細は明らかでない。続く2916・2917・2919も同様の形状を示す棒材である可能性が高いが、端部を欠くため、詳細は不明である。2918は端部の削りこみ方法が異なる有頭棒である。材の径は2915と比してやや小振りであるが、大差はない。2915が前面を削りこむことで頭部を形成するに対して、2918は一側面を「し」字状に削り込むことで頭部を形成している。また先端部は緩やかな半球状を呈するように微細な加工が施されている。2920～2922は2915～2918のものと比較して直径5cm以上の太めの材である。2921の下端部に切斷時の加工痕が残存するほかは顕著な加工は認められない。2921は樹皮が残存していることから、加工にいたる直前段階のものと想定できる。

図234には未製品を掲げた。いずれも直径10cm前後的小径材に粗雑な加工を施した段階のものであり、加工途上の未製品である可能性が極めて高い。

2923・2924は材の径および形状の上で極めて類似するものである。幅3～4cmの鈍い刃先痕を一定方向に向けて連続的に施しており、端部は緩やかな楔状に仕上げる。

2924・2925は明瞭な加工痕跡は認められないものの、端部に粗雑な加工痕を留める。

2927は側面に緩やかな凹面を設ける直方体の柾目材である。下端部は緩やかな凸面を形成し、一定の削り込みを施した後に切断処理を行った痕跡が認められる。側面の凹面は「L」字状に削り残されており、幅3cm前後の鈍い刃先痕が一定方向に向けて施されている。切断されていることから、製品を切り離した際の残渣である可能性もあるが、側面の削りこみがあることからなんらかの部材の未製品である可能性もある。

流路3（図235～237） 流路埋土から出土したもののほかに流路の脣際に貼りつくようにして出土したものも認められた。後者に属するものとして2937や2940などの大径材が挙げられ、出土地点には一定のまとまりも認められるようである。

図235には製品を、図236・237には加工痕の残存する木材および大型の部材を掲げた。

2928は不明木製品である。下端の一部を欠くが、端部の状態からほぼ完形に近いものと想定できる。厚さ1.5cm前後の追柾目材を用いる。

全体的な造作は極めて精緻であり、前面および後面には加工痕をほとんど留めない。加えて部分的に漆の皮膜らしき痕跡が残存する箇所も見受けられた。身部中央には片方の側縁に合わせ、弧状に削り込みが施されている。側面は直線的に加工される。身部中央の縫り込みや握部状を呈する形状からほかの部材と組み合わせて使用するものである可能性もあるが、類例に乏しく、本例の機能について詳細は不明である。

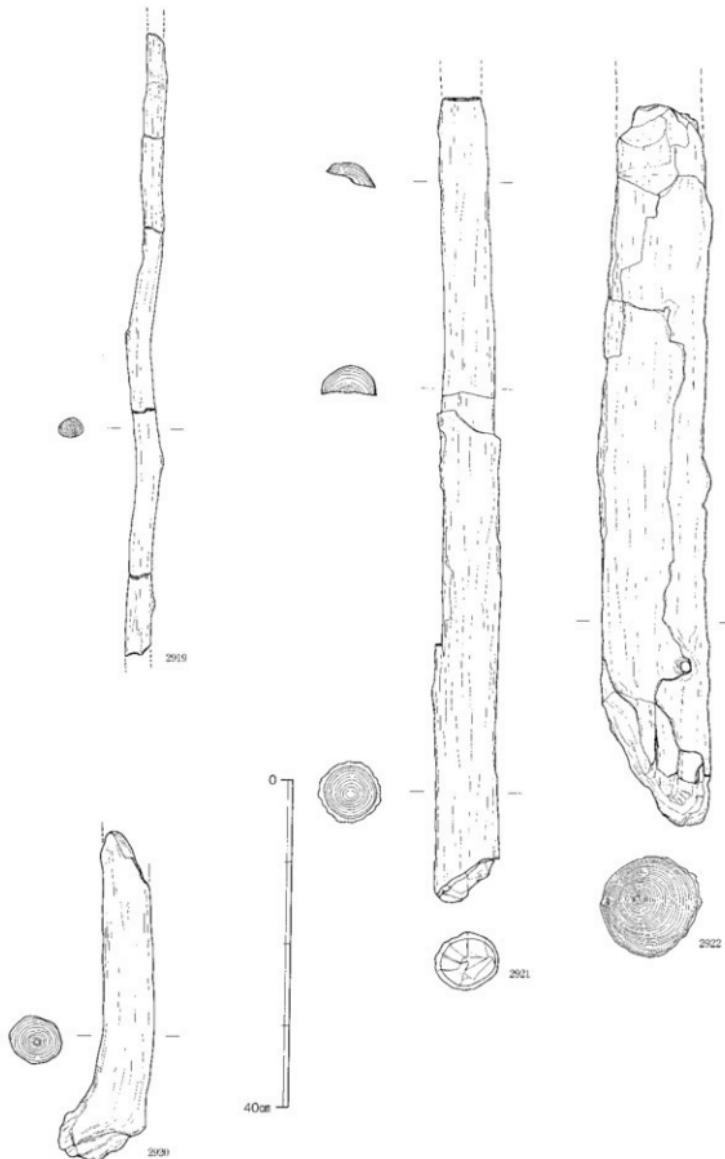
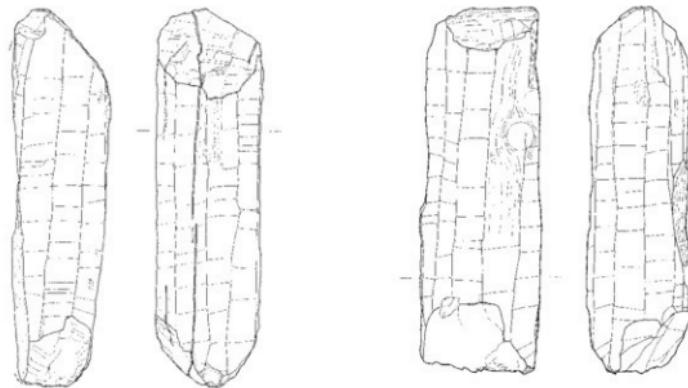


図233 肝木造構 1 出土木製品（2）



2925

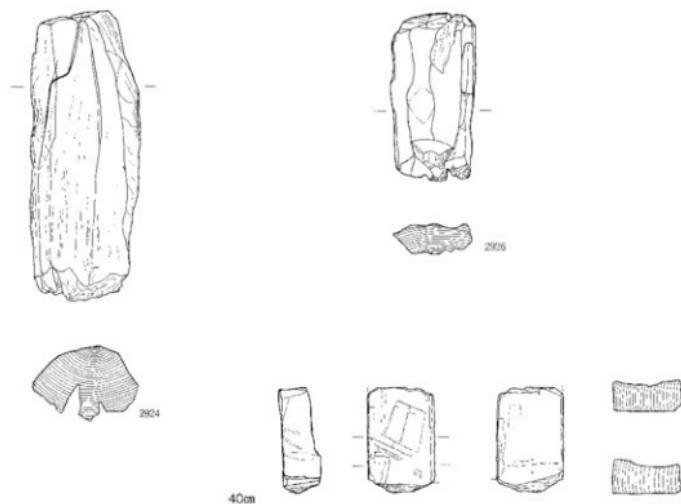


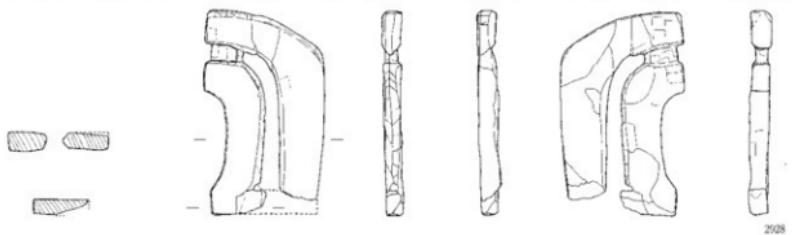
図234 貯木造構 1 出土木製品（3）

2929は有頭棒である。追査目材を用いており、断面形状は、正方形を呈する。上端部を逆「L」字状に加工する。

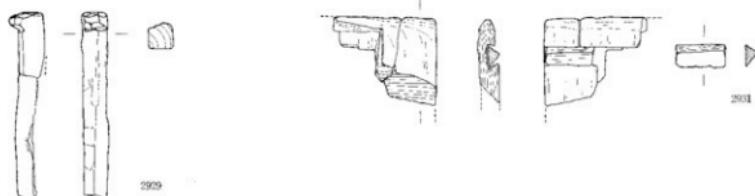
2930～2932には農具を掲げた。樹種同定の結果すべてアカガシ亜属であることが判明している。

2930は泥除けである。身部の半分および上端部の一部を欠損する。薄手で直線的な板目材を用いる。柄穴上部付近には補修孔と考えられる2個1対の円孔が3つ残存している。上端部は材に対して直角方向に欠損部位が存在していたと見られ、蟻ホゾ結合による装着方法が想定できる。

2931は大半を欠損するために製品の全容は把握し得なかったが、広鋸頭部の可能性がある。後面には断面袋状の蟻溝を設けており、内部には断面三角形のホゾが残存していた。蟻ホゾ結合による広鋸頭部



2928



2929

2931

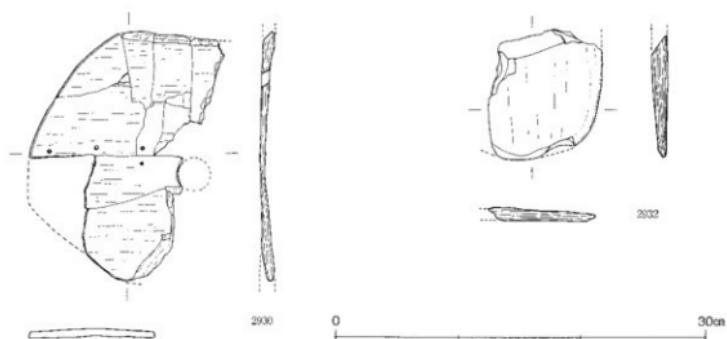


図235 流路3出土木製品(1)

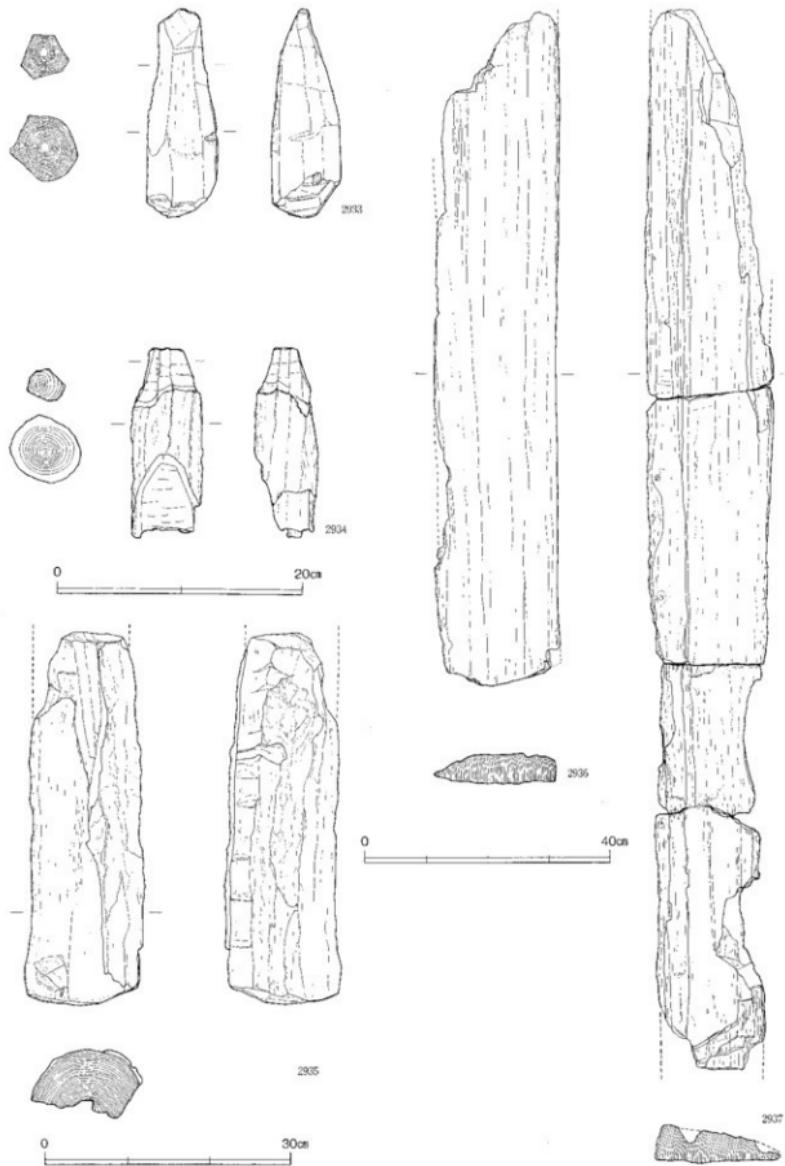
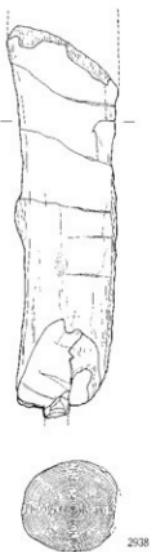
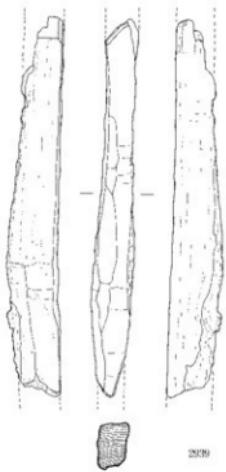


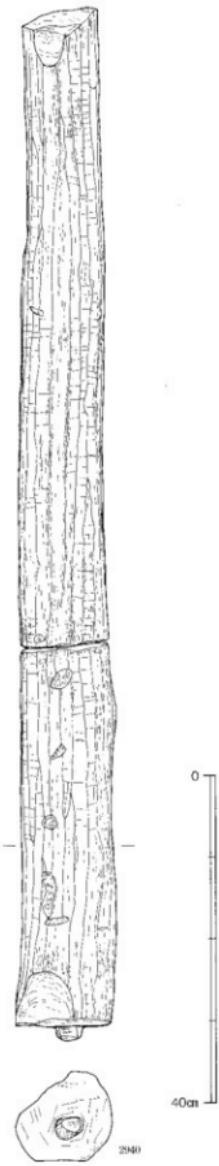
图236 流路3出土木製品（2）



2938



2939



2940

图237 流路3出土木製品（3）

は直角に作り出されることが多いことを考え、広鉄の頭部の可能性を想定するにいたった。

2932は大半を欠損し詳細は不明だが、平面形状から広鉄ないしは一本釘の刃部である可能性がある。2933～2935は棒状木製品である。2933・2934は一端を杭状に成形し、端部を直線的に切断している。加工による面が明瞭に残存することから、何らかの部材を形成しかけていたものと考えられるが、詳細は不明である。2935は摩滅が著しく、基部に切断時の加工痕が認められるほかは、目だった加工痕はない。

2936・2937は板状木材である。ともに復元径40cm以上の比較的大きな径の材をミカン割りした状態のものである。厚みは5～8cmと厚い。摩滅が著しく、前面・後面ともに側面に楔痕は認められなかった。

2938・2939は棒状木材である。2938は直径13cm前後の芯持材の端部を斜めに削り込み、4cm程度の柱状部を残して切断している。2939は辺材を不整な長方形に加工しており、部分的に加工痕が明瞭に認められる。いずれもどのような部材を意図していたかについて詳細は不明であるが、2938は後述する2940と同様のものを作り出そうとしていた可能性がある。

2940は直径15cm大の芯持材である。図上下端には断面隅円方形のホゾを作り出しておらず、柱等の部材である可能性がある。表面には連続的な加工痕が認められ、多面体を成している。また、一部の側面は平面的に仕上げられている。

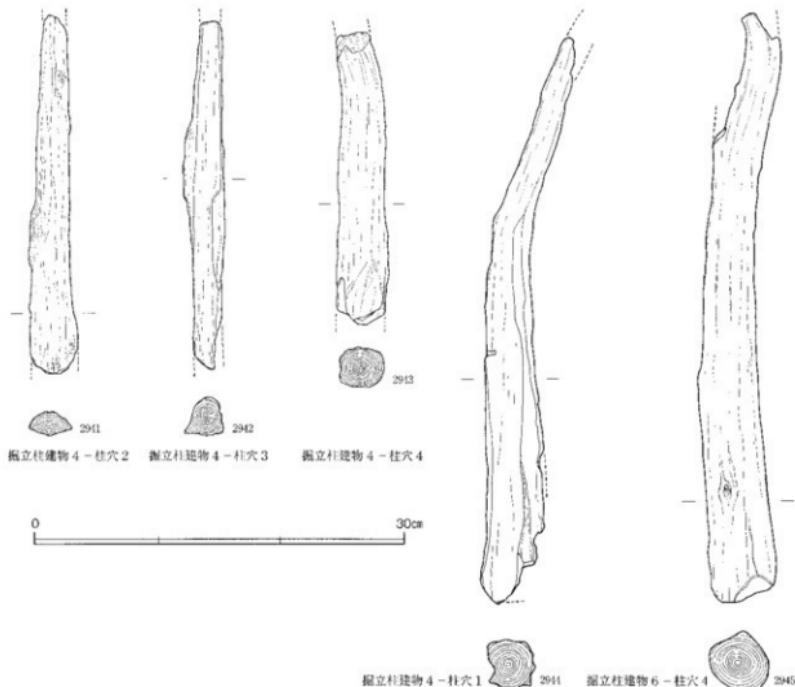


図238 挖立柱建物4・掘立柱建物6出土木製品

掘建柱建物 4 (図 238) 2941～2944は掘建柱建物 4 の各柱穴から出土した柱根である。2944は柱穴 1、2941は柱穴 2、2942は柱穴 3、2943は柱穴 4 からそれぞれ出土した。

地表面に露出していた箇所は腐食の影響を受けたためか、上部は細くなつた上に途切れている。

いずれも最大径 4～5 cm の小径の芯持材を用いる点や 2943 や 2944 のように方形に近い断面形状を示すなど、特徴的な柱材といえる。全体的に摩滅が著しく、加工痕は認められなかった。いずれも樹種同定の結果、材にはクヌギ節を用いていることが明らかとなつてゐる。

掘建柱建物 6 (図 238) 2945は掘建柱建物 6 の柱穴 4 から出土した柱根である。地表面に露出していた箇所では腐食の進行によって細くなつて途切れている。

材には断面円形を呈する直径 4～5 cm の小径の芯持材を用いてゐる。摩滅が著しく、加工痕は認められなかった。樹種同定の結果、コナラ節を用材とすることが明らかとなつてゐる。

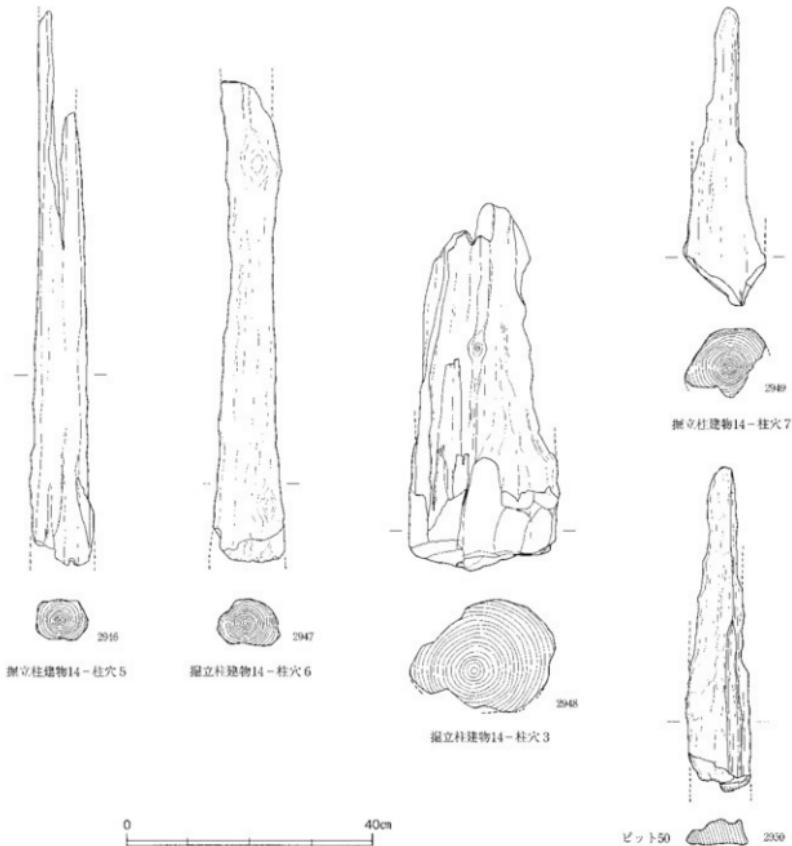


図239 掘立柱建物14 ピット50出土木製品

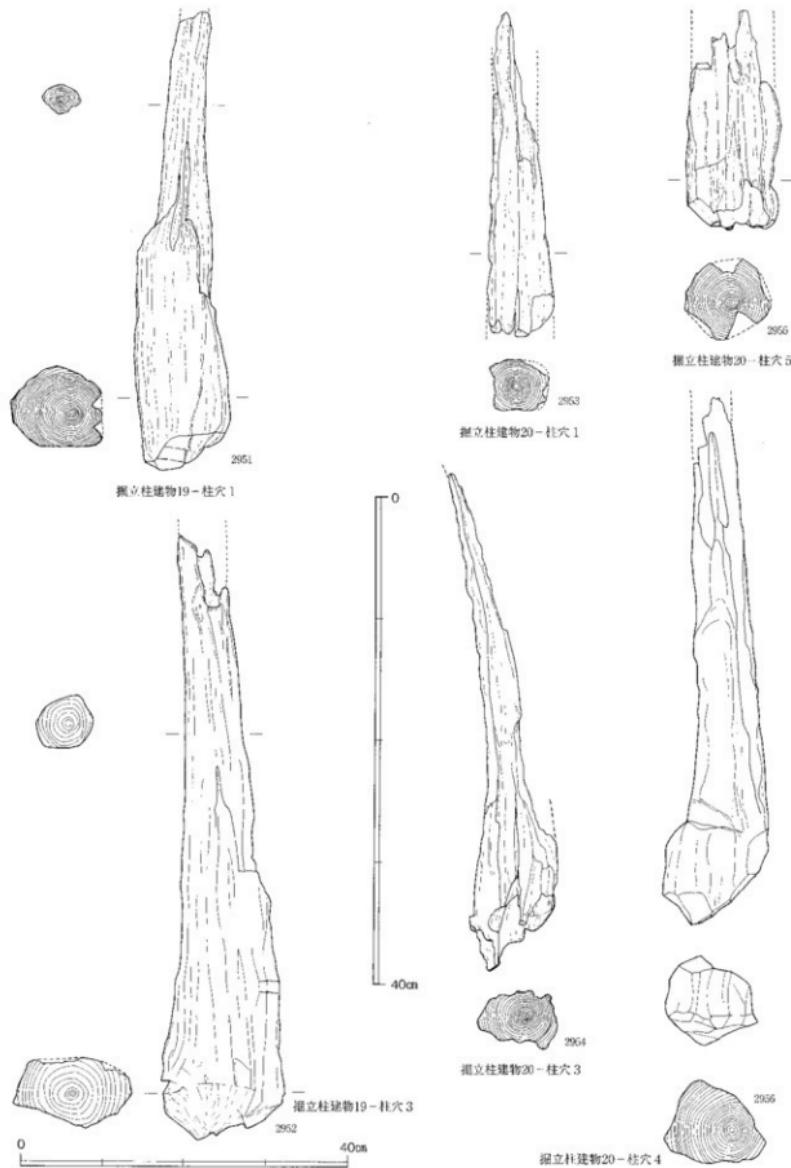


図240 掘立柱建物19 掘立柱建物20出土木製品

**掘建柱建物14（図239）** 2946～2949は掘建柱建物14の各柱穴から出土した柱根である。2948は柱穴3、2946は柱穴5、2947は柱穴6、2949は柱穴7からそれぞれ出土している。全体的に遺存状態は悪く、地表面に露出していた箇所では腐食が進行したために細くなっている。いずれの柱根も直径9～10cm前後の芯持材を用いており、断面形状は隅円長方形ないしは梢円形を示す。例外的に柱穴3から出土した2948は断面梢円形を呈する最大径24cmの大振りな芯持材を用いている。

2948に基部付近に粗雑な幅5cm前後の粗雑な刃先痕が認められるほかは、摩減が著しく、加工痕は認められなかった。

樹種同定の結果、2946・2949はコナラ節、2947はクリ、2948はクヌギ節であることが判明している。

**ピット50（図239）** 2950はピット50から出土した柱根である。

地表面に露出していた箇所では腐食の進行によって細くなっている。材は扁平な長方形を呈する径10cm前後的小振りな柵目材を用いている。摩減が著しく、加工痕は認められなかった。

**掘建柱建物19（図240）** 2951・2952は掘建柱建物19の各柱穴から出土した柱根である。2951は柱穴1、2952は柱穴3からそれぞれ出土した。

その他の掘建柱建物柱穴出土柱根と比較すると遺存状況は良好といえるが、地表面に露出していた箇所では腐食の進行によって細くなっている。材は長梢円を呈する長径12cm前後の芯持材を用いている。基部には幅5cm前後の粗い加工痕が連続的に施されている。

樹種同定の結果、2951はコナラ節、2952はクヌギ節であることが判明している。

**掘建柱建物20（図240）** 2953～2956は掘建柱建物20の各柱穴から出土した柱根である。2953は柱穴1、2954は柱穴3、2956は柱穴4、2955は柱穴5からそれぞれ出土している。

いずれも遺存状態は悪く、地表面に露出していた箇所では腐食の進行によって細くなっている。材は長径10～12cmの梢円形を示す芯持材を用いる2954～2956と、側面に面を形成し、一辺6cm前後の不整な方形を示す芯持材を用いる2953の二者に大きく分けられる。加工痕を明瞭に留める2955・2956は幅3～4cmの鈍い刃先痕を端部に形成する凸面に向けて複数方向から連続的に施している。

樹種同定の結果、2953・2954はアカガシ重属、2970・2971はクヌギ節であることが明らかとなっている。

## 第4節 土製品・鉄製品・玉

### (1) 土製品

**竪穴建物10（図241）** 2957は竪穴建物10から出土した土製品である。

不定形な形状を示し、厚みは2.5cm前後を測る。重量は84.3gを測る。前面・後面ともに表面には繊維質の痕跡をとどめている。全体的に焼きは甘く、色調は灰白色を呈し、断面は黒色を呈している。同様の土製品は竪穴建物8の埋土中からも大量に出土しているが、用途・機能について詳細は不明である。

### (2) 鉄製品

**竪穴建物8（図241）** 2958は鉄鑿である。竪穴建物8の床面から出土した。

全長10.4cm、最大幅0.8cmを測り、断面形状は身部中央で方形、端部で長方形を呈する。刃部は緩やかな山形を呈し、切先は幅0.2cm前後を測る。上端部から1.8cmの箇所で僅かに段が設けられており、

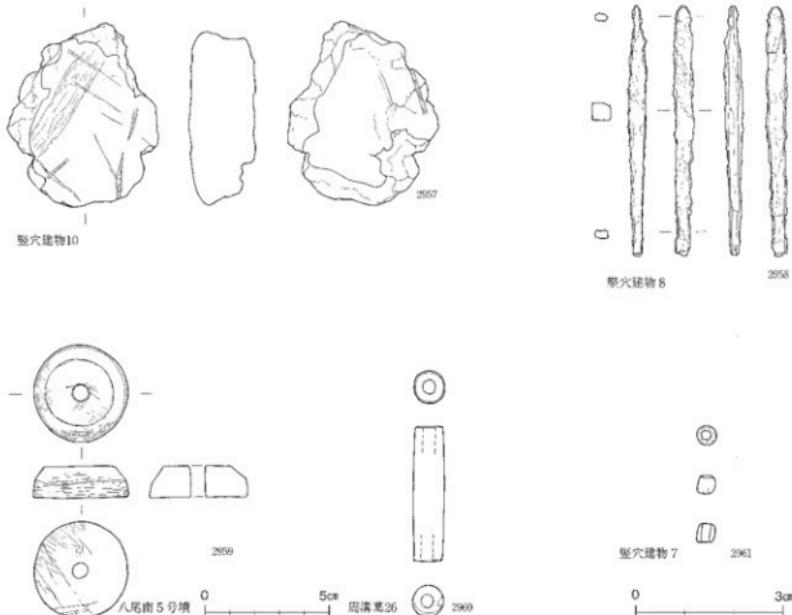


図241 周溝墓26 八尾南5号墳 堅穴建物7・8・10出土遺物

茎を形成していたものと想定できる。重量は12.2gを測る。表層に浮き出た鉛は膨れが少ない。

### (3) 玉

八尾南5号墳（図241） 2959は石製紡錘車である。八尾南5号墳の北側周溝肩部から出土した。

下端部の直径3.9cm、上端部の直径2.8cm、厚さ2.6cmを測り、孔径は0.6cmを測る。重量は33.0gを測る。上面および下面には2方向からの擦痕が認められる。

石材鑑定を経ていないため、詳細は明らかでないが、碧玉製の可能性が高い。

周溝墓26（図241） 2960は管玉である。周溝墓26の南東隅の墳丘上から出土した。

全長5.6cm、最大幅1.3cm、上端・下端面ともに直径1.1cmを測り、孔径は0.5cmを測る。重量は14.9gを測る。穿孔は片側穿孔である。上面および下面に擦痕は認められず、下面の一部に剥離痕が認められる。

石材鑑定を経ていないため、詳細は明らかでないが、碧玉製と考えられる。

堅穴建物8（図241） 2951はガラス小玉である。堅穴建物8の床面から出土した。当遺物を確認してから念のため、付近の埋土を土嚢に詰めて取り上げ、1mmメッシュの篩いを用いて洗浄を行ったが、ほかには認められなかった。

玉の規模は最大幅0.4cm、全長0.4cm、上下面ともに直径0.3cmを測り、孔径0.15cmを測る。重量は0.1gを測る。ガラス中の気泡は均質に認められ、孔に併行するように縦方向に延びていることから、管切り技法によって製作された可能性が高い。色調は淡いコバルトブルーを示す。（正岡）

## 第VII章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的と概要

本章では、今回の調査において実施した自然科学的分析について、その結果を報告する。

第2節では弥生時代を中心とする植生および土地利用のあり方を窺うための資料を蓄積する目的で実施した微化石分析の結果報告を行う。

03-1工区調査時に採取した土壤資料に含まれていた微化石（花粉・珪藻・プラントオパール）の抽出・同定の実施内容と遺跡周辺の古環境を総合的に検討した。

第3節では、当時の植生および食性を明らかにする目的で、3年間の調査中に蓄積した大形植物遺存体（種実）の同定結果を報告する。なかでも第3面の堅穴建物7床面直上および土坑1内より出土した種実が瓜であることが明らかとなり、食物残渣である可能性が高いと推測できた。当時の食性を知るうえで、重要なデータを蓄積することができたと言える。加えて第3面に帰属する各遺構、第2面に帰属する遺構出土種実の同定によって当時の植生を推定する資料を得ることができた。

第4節では03-1工区第3面で検出した堅穴建物9の床面付近の不擾乱土壤を資料として、堅穴建物の構造を明らかにすることを目的として、X線写真撮影および土壤剥片資料の作成・観察を行った結果を報告する。分析の目的は堅穴建物の壁面際に堆積した崩落による堆積土と床面および壁面の構造を資料として明示することにあり、建物の加工-機能-再加工-機能-廃棄-埋没というプロセスを復元することができ、調査時の所見を裏付ける資料を得ることができた。堅穴建物9は壁溝内や壁面の構造材が良好に残存していたことが特筆される遺構であり、堅穴建物の構造を考えるうえで重要な知見を加えることができた。

第5節では03-1工区第1面で検出した12世紀中葉の土坑墓において検出した人骨の鑑定・同定結果を報告する。分析の目的は、被葬者の年齢・性別をはじめとする情報を漏れなく引き出すことである。人骨の遺存状態は埋没土壤の影響により不良であったが、性別と概ねの年齢を導き出すことができた。

第6節では3年間の調査で蓄積した木質遺物の樹種同定結果を報告する。分析の目的は、使用用途によって起こりうる用材の選択を明らかにし、その選択が周辺植生との関係の中でどのように変容するのかという点を明らかにすることにある。第2節で報告する微化石分析の結果と合わせて考えると、弥生時代後期中葉の集落においては、農具等の堅牢さを必要とする道具以外では用材選択は周辺に自生する樹木を用いていた可能性が高いことが想定されたほか、堅穴建物の構造材の同定結果からは、1本の樹木を分割して用いることで効率良い材の利用が行われていた可能性が高いことが明らかとなるなどの成果が挙げられた。

第7節では、弥生時代後期中葉の実年代を明らかにすることを目的に、土器の器表面に付着したふきこぼれ資料をもとに炭素14年代測定法を実施した。分析に供した資料はいずれも第3面の流路3より出土したものであるが、型式的に見てもその他の第3面に帰属する土器と大差ないものである。そうした意味において出土状況および型式上の位置付けにおいても今回の調査で得られた土器群は類例に乏しい弥生時代後期中葉の土器様式を示すものと考えられ、今後の弥生時代の実年代を考えるうえで、重要な資料を蓄積することができたといえる。

(正岡)

## 第2節 繩文～弥生時代の形成地層の微化石分析

### はじめに

今回の分析調査では、八尾南遺跡における古環境復元を目的に、縄文時代後～晩期頃に成立していたとみられる埋没樹の樹種同定および縄文時代後期・晩期、弥生時代前末～中期、弥生時代後期末の花粉・珪藻・植物珪酸体分析を実施する。

### 1. 層序

#### (1) 調査区で認められた堆積相

八尾南遺跡は、河内平野南部の氾濫原上に立地する(図242)。発掘調査の結果、分析を実施した調査区では、弥生時代後期中葉～後期末の墓域や古墳時代の井戸・土坑、弥生時代中期～後期中葉の集落跡および弥生時代前期末の耕作地跡が検出されている。調査区では、現地表面下2m前後までの堆積層および現地表面下4m前後までの流路断面が観察された(図243・244)。現地調査では、これらの断面記載と分析試料の採取を行った。調査地点で認められた堆積層について、現地での肉眼観察から以下のような堆積相が認定された。これらの堆積相にもとづき堆積環境や地形発達史を記述する。堆積相については、Miall(1992・1996)の河成堆積相コードや松田(1999・2000)と中嶋ほか(2004)、人為的な擾乱堆積物の層相については、松田・パリノ・サーヴェイ(1996)の記載を参考とした。また、堆積相の形態を示すarchitectureについては、中嶋ほか(2004)に従い「外形」と表現する。

GSt：トラフ型斜交層理・葉理をなす砂礫。礫が卓越する。細粒の中礫混じりの細礫から極粗粒砂で構成される。外形は流路状の層理面を示し、下位層を侵食して累重する。

GSp：ブラー型斜交層理・葉理をなす砂礫。非常に礫がち。中粒の中礫混じりの細礫～極粗粒砂で構成される。下位層への侵食はほとんど認められない。外形はレンズ状を呈し、上の凸状の層理面を示す。

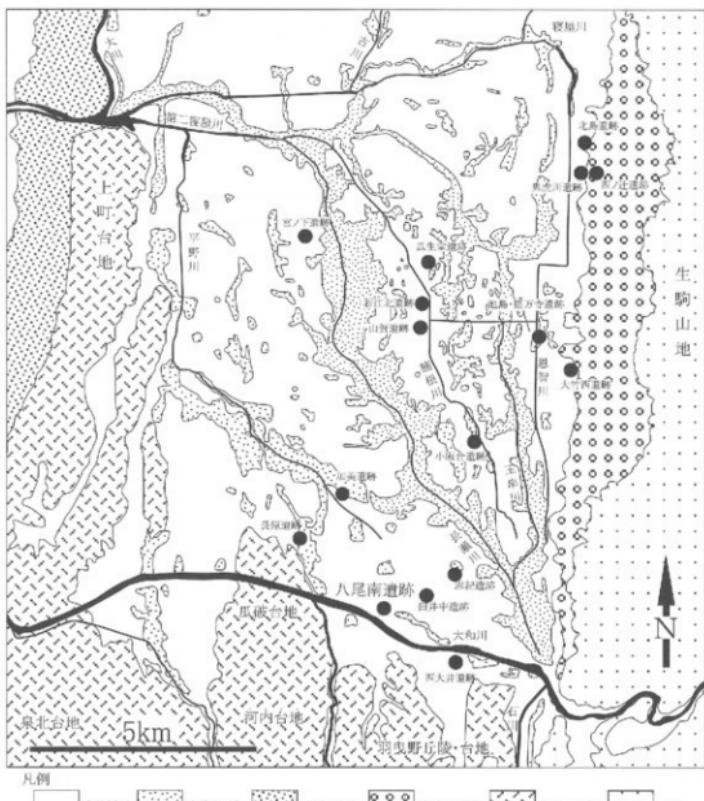
St：トラフ型斜交層理・葉理をなす礫混じり砂。おもに中粒砂～極粗粒砂からなる。外形は流路状の層理面を示すものが多いが、層状やレンズ状を呈すものも認められる。上方細粒化がよく観察される。

Sh：水平ないし低角度(10°以下)の水平葉理をなす砂。中粒砂～極粗粒砂で構成される。下位層への侵食はほとんど認められない。外形は層状、レンズ状を示す。

Sm：塊状をなす砂。細礫混じりの細粒砂～極粗粒砂で構成される。淘汰は悪い。下位層への侵食はほとんど認められない。外形は層状、レンズ状を示す。

SF1：水平葉理をなす泥混じり砂～泥質砂。不明瞭な水平葉理を持つものが多い。砂は細粒砂～粗粒砂で構成される。淘汰は悪い。下位層への侵食はほとんど認められない。外形は層状を示すものが多くあるが、流路状の外形を埋積するものも認められる。有機質に富む層相を示すものも存在する。このような層相を示す堆積相では、材および種実・葉化石が多く含まれる場合が多い。葉化石片は、水平葉理をなして挟在することが多い。砂層と泥層の互層をなす場合がある。砂層は淘汰の良い細粒砂～極粗粒砂、泥層はおもにシルトで構成される。砂泥互層ないし砂層のレンズの層厚は、5mm～数cm程度を測る。砂層をレンズ状に挟在する場合もある。

SFm：見せかけ上塊状をなす泥混じり砂～泥質砂。砂は細粒砂～粗粒砂で構成される。淘汰は悪い。下位層への侵食は認められない。外形は層状を示す。有機質に富む層相を示すものも存在する。本相では、古土壤と判断される堆積相を含む。古土壤と判断される標準では、根痕などの著しい生物擾乱や上



凡例

[White Box]	沖積低地	[Dotted Box]	沖積リッジ	[Cross-hatched Box]	沙州・浜堤	[Dashed Box]	沖積扇状地	[Square Box]	台池・丘陵	[Dots Box]	山地
-------------	------	--------------	-------	---------------------	-------	--------------	-------	--------------	-------	------------	----

図242 河内平野とその周辺の地形および八尾南遺跡の位置(地形区分は、松田2001より作成)

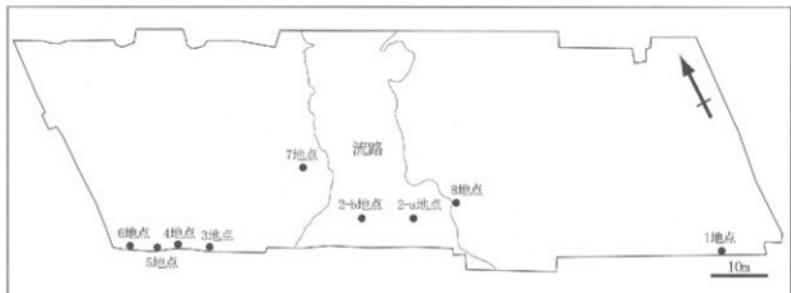


図243 八尾南遺跡分析地点の柱状図作成および試料採取位置図

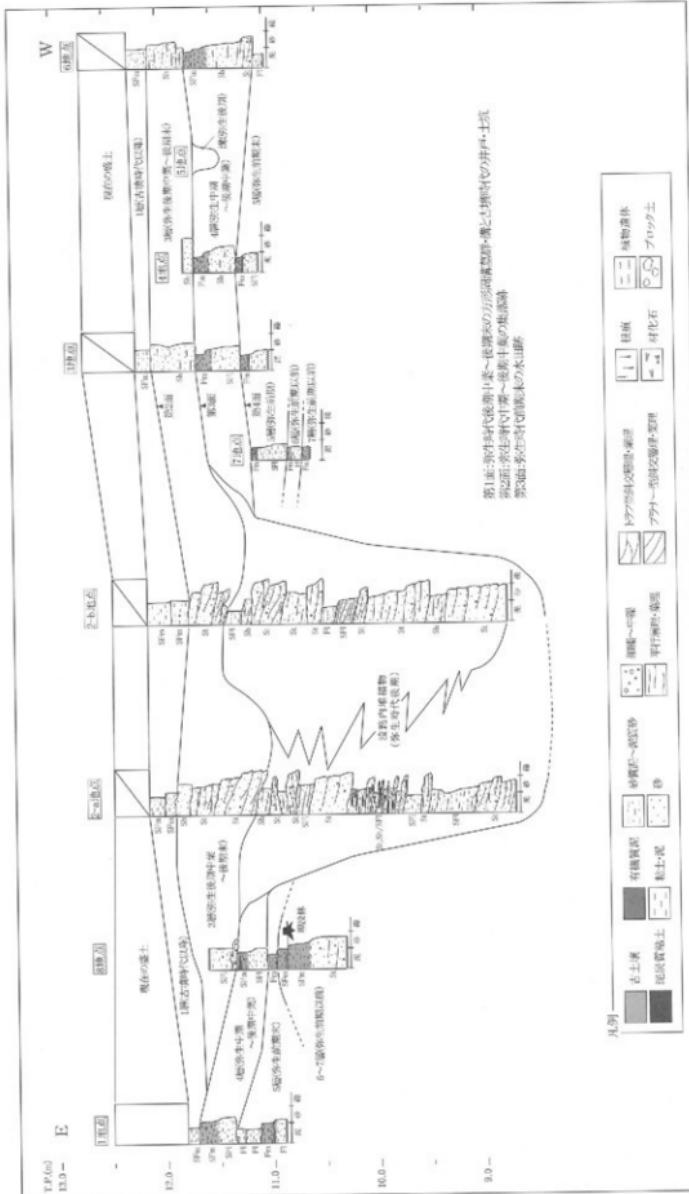


図244 八尾南遺跡分析地点の堆積物の累重状況の模式断面図

壤発達による構造が顕著に認められる。また、砂質の耕作土や遺構堆積物などの人為的擾乱堆積物も本相に含まれる。

F1：水平葉理をなす泥～砂質泥。泥はおもにシルト質粘土～粘土質シルトで構成される。下位層への侵食は認められない。外形は層状を示すものがほとんどあるが、流路状の外形を埋積するものも認められる。泥層中に細かな植物片が含まれることが多い。また、有機質に富む層相を示し、多量の植物遺体が含まれるものも存在する。

Fm：見せかけ上塊状をなす泥～砂質泥。泥はおもにシルト質粘土～粘土質シルトで構成される。下位層への侵食は認められない。外形は層状を示す。泥層中に細かな植物片が含まれる。本相では、古土壤と判断される堆積相を含む。古土壤と判断される層準では、根痕などの著しい生物擾乱や土壤発達による構造が顕著に認められる。また、泥質の耕作土や遺構堆積物などの人為的擾乱堆積物も本相に含まれる。

## (2) 調査区に累重する堆積層の特徴

調査区の最下部には、弥生時代前期以前に形成された第6～7層が存在する。本層は明瞭な上方細粒化をなす。8地点では、第6～7層が上に凸状を示す外形を持つStと、層状をなすSFm、Fmによって構成される。7地点では、8地点に比べ泥質なF1・Fmが累重する。8地点のStについて観察できたのは一部であるが、層相および粒度組成から、洪水流ないし流路内に累重した掃流砂礫であると推測される。この上部には、非常に有機質に富み、下部付近で樹木や草本による根痕と考えられる生物擾乱が顕著なSFmが載る。SFmの上部付近では、コナラ属と同定された埋没林が存在する。これらの特徴からは、SFmがSt離水後に形成された古土壤であると判断される。第6～7層の上部に累重するF1、Fmについては、その粒度組成からウォッシュロードが浮遊沈降して形成されたことが推定される。なお、ウォッシュロードとは、上流から浮遊流下してきた土砂のうち、河床に元々ほとんど含まれない泥や粘土からなる微細な荷重を指す用語である（伊勢屋、1998）。このうちFmは有機質に富み、下部付近に草本による根痕と考えられる顕著な生物擾乱が存在する。このことから、第6～7層に挟在するFmは古土壤と解釈される。

上記した堆積物の特徴から、8地点では、上に凸状をなすSt堆積によって、周囲に比べ微高地が形成され、その上部で半湿～半乾の環境下で土壤が形成されたと判断される。この時期、相対的に低所に位置する7地点では、8地点付近に比べより湿润な環境が形成されたと考えられる。これらのことから、第6～7層形成時に調査区では、島状ないし帯状に微高地が存在し、離水して土壤発達する時期を挟むするような後背湿地の堆積環境が形成されていたことが推定される。

上面で弥生時代前期の水田跡が検出された第5層では、層状の外形をなすF1・Fmが形成されている。層相および粒度組成から、F1は浮遊土砂のうち、おもにウォッシュロードからなる堆積物が滞水域で沈降して形成されたと判断される。F1上部に載るFmは、有機質に富み顕著な生物擾乱が見られることから、古土壤と判断される。本相には、未分解の植物遺体はほとんど含まれず、日本ペトロジー学会編（1997）の掘り方による分解度判定基準によると、強度に腐植化～完全に分解（H8～H10）に相当する。このことから、Fm形成時には、地表面付近で植物遺体の分解が進行するような好気的な土壤環境が維持されていたことが推定される。

上記した堆積物の特徴から、F1は後背湿地へ流れ込んだ洪水流が運搬してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積相と捉えられる。Fmは、F1で構成される後背湿地面が離水して形成された古土壤と判断

される。このような堆積相から、第5層形成時に調査区では、後背湿地の堆積環境が形成されていたことが推定される。

上面で弥生時代後期中葉の遺構が検出された第4層では、層状の外形をなすSh、SFl、Fmが形成される。Sh、SFlは上方細粒化を示す不明瞭な水平葉理をなし、浮遊土砂起源と推測される泥から細粒砂を多く含む堆積物によって構成される。層相から、Sh、SFlは掻流・懸濁流の両運搬運搬様式による堆積物を含んでいると判断される。本相は、流路からオーバーフローして調査区に流入してきた流れの弱い洪水流によって運搬されてきた堆積物の累重によって形成されたことが推定される。Sh、SFlの上部に載るFmは、古土壤と判断される。このような堆積相から、第4層形成時に調査区では、周辺に流路が存在するような氾濫原の堆積環境が形成されていたことが推定される。

調査区のほぼ中央には、第4層以下の堆積層を侵食して流路が形成されている。流路は幅15m前後、深さ2.5m前後を測る。本流路は、埋積する堆積物に含まれる土器の相対年代から、弥生時代後期に形成されたと判断される。流路内には、2-b地点で連続的に累重する主にStをなす漂筋を埋積する掻流砂礫と、2-a地点で連続的に累重する主にSFlとFlからなる流路線ないし流路隔壁を構成する堆積相が認められる。流路漂筋を埋積するStは、側方への細粒化と層相変化が観察される。SFlとFlには、多量の材および種実化石が含まれている。

上面で弥生時代後期中葉～後期末の遺構が検出された第3層では、流路状および層状の外形をなしてSFl、St、Shが形成される。流路の最上部に存在するStは側方へ細粒化を示し、Shへと漸移していく。また、遺構内などの凹地ではSFl、St、Shと逆級化成層をなす。層相と外形から、St、Shは、埋没した流路最上部に流入した洪水流によって運搬されてきた堆積物と考えられる。この第3層の上位には、古墳時代以降に形成された耕作土である第1層のSFmが存在している。

調査区で認められた以上のような堆積物の特徴から、本調査区では、流路ないし洪水による砂礫の堆積後、弥生時代前期以前ないし前期に後背湿地の堆積環境が形成されていたことが推定された。StおよびSFmを覆う後背湿地泥層は、砂礫層の上部にはほとんど認められず、周囲の低所のみを埋積している。また泥層には、所々で古土壤が挟在しており、離水して土壤発達する時期があったことが示唆された。珪藻分析結果からは、この時期の後背湿地では、ある程度の水深がある池沼などの堆積環境が形成される時期もあったことが推定される。

八尾南遺跡に隣接する長原遺跡では、趙（2001）などによって詳細な遺跡の基本層序が確立されている。埋没林が検出された古土壤のSFmを覆う第5層上面では、弥生時代前期の水面が検出されている。このことから、St上部に発達したSFmが、趙（2001）の長原遺跡標準層序による縄文時代後期～晩期に形成されたNG9C層に対比される可能性がある。これらの結果をふまえると、弥生時代前期頃に調査区周辺で形成されていた後背湿地は、堆積速度の小さな安定した堆積環境であったことが想定される。弥生時代前期末の水田は、後背湿地堆積物の最上部に存在する古土壤から検出されており、後背湿地面が離水して形成された湿性の土壤上に圃場が形成されたと考えられる。この古土壤では、微化石の保存状態が極めて不良であった。微化石分析からは、本層において好気的な土壤環境が長く形成されていたことが推定される。

弥生時代前期から後期にかけては、洪水堆積物が泥質から砂質な層相へ上方粗粒化することから、後背湿地から氾濫原へと堆積環境が変化したと考えられた。氾濫原を構成する砂質洪水堆積物の累重によつて、調査区では、弥生時代前期に比べ相対的に地表面付近がより乾燥するような環境が維持されるよ

うになったと考えられる。

弥生時代後期の居住域は、氾濫原を構成する砂質洪水堆積物の最上部付近に形成された古土壤から検出されている。調査区で確認された居住域の検出範囲内には、弥生時代後期に埋積された開析流路が存在する。開析流路は、上面で弥生時代後期が遺構検出された砂質洪水堆積物より下位層を深く侵食して形成されている。このような流路の侵食形態からは、弥生時代後期の遺構検出面となる砂質洪水堆積物の最上部の古土壤が、開析流路の形成に伴う調査区およびその周囲の氾濫原面における相対的な水位低下に伴って発達した可能性が示唆される。本流路は弥生時代後期頃に、周囲の一部の氾濫原に形成された遺構とともに埋積している。これらのことから、弥生時代後期の人間活動は、流路の開拓に伴う水位低下と土壤発達、流路の充填と氾濫原上の埋積、それに伴う水位上昇といった堆積環境変化に挾在することが推定され、上記の脈絡を土壤や地層から相互的に記載していくことが重要な課題ではないかと思われる。

以上、調査区では、弥生時代前期に安定した後背湿地が形成され、その後、弥生時代後期の流路形成を挟在して、弥生時代終末期～古墳時代初頭までに次第に砂質の洪水堆積物で覆われていくような氾濫原へと堆積環境が変化したことが認識される。このような変化は、地形的には、後背湿地から自然堤防への発達史として捉えられる。この点については、今後、該当する堆積層の分布や流路や調査区の周辺に分布する氾濫原堆積物との層序的関係を明らかにして、古地形の復元を行い検証していくことが必要であろう。

## 2. 試料

珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析に関しては、目的を考慮して、1地点、2（正確には2-a）地点、3～7地点から試料を採取・選択し分析に用いる（図245）。今回は第4面（弥生時代前期）の下位より検出された試料と、第3面（弥生時代前期の水田跡）より下位の試料を中心に、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行う。また、材同定用試料は、流路肩部から検出された埋没樹2点について実施する。

## 3. 分析方法

### （1）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施し、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原山ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、Witkowski et al.（2000）などを参照する。

同定結果は、海水生種、海～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。

堆積環境の解析は、海水～汽水生種は小杉（1988）、淡水生種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀

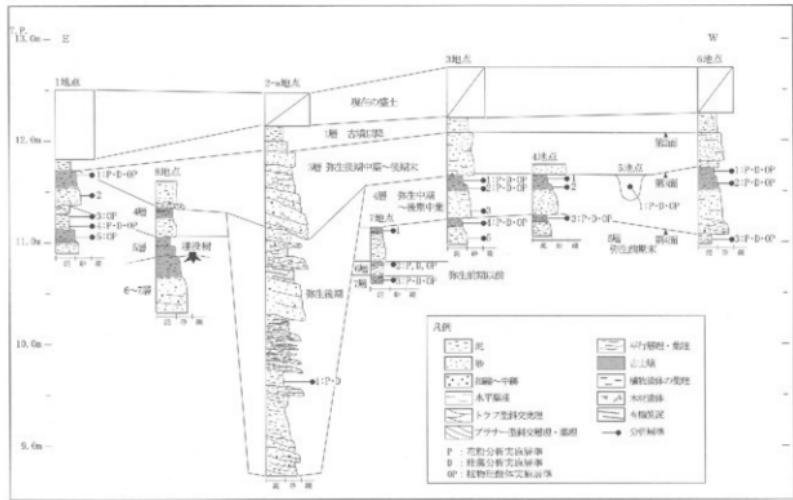


図245 八尾南遺跡の分析試料採取層準

内 (1991)、汚濁耐性は、Asai & Watanabe (1995) の環境指標種を参考とする。

## (2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、簡別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉总数、草本花粉は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

## (3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や燃料材について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の巣状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

## (4) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入しプレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

#### 4. 結果

##### (1) 珪藻分析

結果を表1、図5に示す。珪藻化石が豊富に産出する。各地点とも完形殻の出現率高い。産出分類群数は、合計で属分類群である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

###### ・1 地点

試料1・4とも珪藻化石の産出が少ない。産出種を見ると、試料1では海水泥質干潟指標種群（小杉、1988）の *Nitzschia coccineiformis*、湖沼浮遊性種群（安藤、1990）の *Aulacoseira granulata*等が産出する。海水泥質干潟指標種群とは、塩分濃度30～12‰の泥底の泥に付着生育する種群（小杉、1988）、湖沼浮遊性種群とは、水深が約1.5 m以上ある湖沼環境を指標する種群である（安藤、1990）。試料4では内湾指標種群（小杉、1988）である *Cyclotella striata-C. stylorum*、*Cyclotella stylorum*、湖沼沼沢湿地指標種群の *Aulacoseira ambigua*、湖沼浮遊性種群の *Aulacoseira granulata*、好止水性の *Aulacoseira italica*、沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）の *Eunotia praerupta* var. *bidens*、陸生珪藻A群（伊藤・堀内、1991）*Hantzschia amphioxys*等が産出する。内湾指標種群は、塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活する種群（小杉、1988）、湖沼沼沢湿地指標種群は湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現する種群、沼沢湿地付着生種群は、水深が1 m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や湿地で優勢な出現の見られる種群のことである（安藤、1990）。また、陸生珪藻A群は、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群である（伊藤・堀内、1991）。

###### ・2 地点

試料1は、珪藻化石が豊富に産出する。淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が75%と優勢だが、汽水生種も約10%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH 7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域・止水域にも普通に生育する種）が多産する。また、真+好流水性種（流水域に最もよく生育する種）や真+好止水性種（止水域に最もよく生育する種）も10%前後産出する。産出種は、とくに多産する種ではなく、流水不定性の *Diploneis parma*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、流水性で中～下流性河川指標種群（安藤、1990）の *Cymbella sinuate*、*Navicula viridula*、その変種の *N. viridula* var. *rostellata*、止水性で湖沼沼沢湿地指標種群の *Aulacoseira ambigua*等がみられる。中～下流性河川指標種群は、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群である（安藤、1990）。

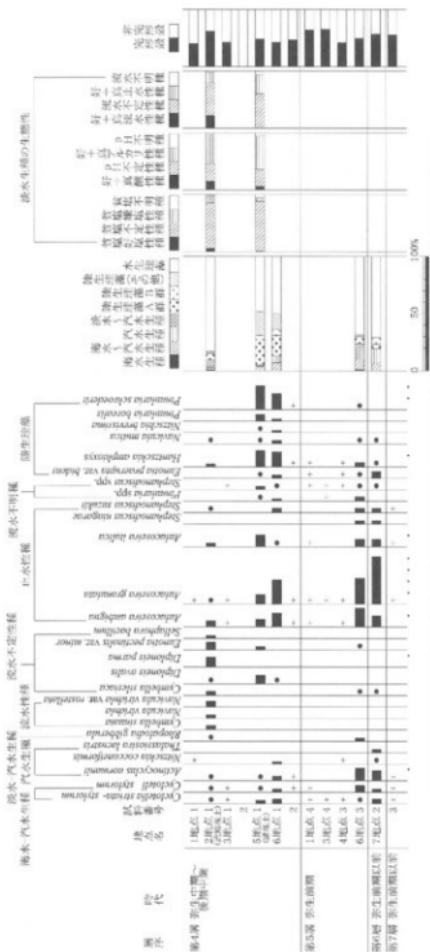
###### ・3 地点

試料1・2・4ともに珪藻化石の産出が少ない。内湾指標種群の *Cyclotella striata-C. stylorum*、*Cyclotella stylorum*、湖沼浮遊性種群の *Aulacoseira granulata*、浮遊生種に属する *Stephanodiscus* spp.等が産出する。

###### ・4 地点

表 1 硅藻分析結果（1）





海水・淡水・淡水生種・汽水生種・汽水生種・汽水生種について示す。なお、●は1970年6月、▲は1970年6月、△は1970年6月、■は1970年6月、□は1970年6月である。

図246 主要珪藻化石群集の層位分布

試料2から珪藻化石が産出したが、試料3は少ない。試料2は、水生珪藻が約70%と優占し、これに次いで汽水生種や海水～汽水生種が産出する。産出種の特徴は、湖沼浮遊性種群の *Aulacoseira granulata* が40%と検出され、湖沼沼澤湿地指標種群の *Aulacoseira ambigua*、好止水性の *Aulacoseira italicica*、湖沼浮遊性種群の *Stephanodiscus suzukii* 等を伴う。汽水生種は、浮遊性の *Actinocyclus normanii*、海水～汽水生種は内湾指標種群の *Cyclotella striata-C. stylorum* 等が産出する。なお、珪藻化石の産出の少なかった試料3は、試料2とほぼ同様の種類が産出する。

## (2) 花粉分析

結果を表3、図247に示す。5地点の試料1、6地点の試料2は花粉化石の保存が悪く、ほとんど検出されないことから、図示していない。図示していない2試料も含め、シダ類胞子の割合が、木本花粉や草本花粉の割合は一部を除いて低い。図示した試料について、木本花粉化石群集をみると、弥生時代後期の流路埋植物（2-a地点の試料1）とそれ以外で、組成が異なる。2-a地点の試料は、コナラ属アカガシ亜属の割合が高率で、コナラ属、シノキ属等を伴っており、広葉樹（特に常緑樹）主体の組成である。また、2-a地点の試料1と、3地点の試料1のみ、木本花粉の割合が高くなっている。一方、2-a地点の試料1以外の試料は、コウヤマキ属の割合が高く、モミ属やツガ属などを伴っており、針葉樹を主体とする組成である。草本花粉は、イネ科、ヨモギ属等が検出されるが、シダ類胞子に比べると、割合は低い。

## (3) 植物珪酸体分析

結果を表4・図248に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

### ・ 1 地点

栽培植物であるイネ属は、試料4と3で検出される。その含量は、試料4で短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がそれぞれ100個/g程度、試料3でそれぞれ50個/g程度である。この他、各試料からネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。また概してタケ亜科の産出が目立つ。ただし、植物珪酸体含量には層位的な違いが見られる。すなわち、試料5と4での含量が4万個/gを超えるのに対して、試料3・1では数千個/g程度である。

### ・ 3 地点

イネ属は、各試料から検出される。その含量は、短細胞珪酸体が100個/g前後、機動細胞珪酸体が200-300個/g程度である。いずれも、試料4で少ない。また試料1と2では、稲初穂に形成されるイネ属頸珪酸体も認められる。

この他、各試料からは1地点と同様な種類が認められ、タケ亜科とヨシ属の産出が目立つ。また、試料2では樹木起源珪酸体の第IVグループ（近藤・ビアスン、1981）が検出される。第IVグループは網目模様の付いた紡錘形を呈する。

### ・ 4 地点

試料3からは、イネ属が検出される。その含量は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体いずれも200個/g未満である。また同様な種類が認められ、タケ亜科とヨシ属の産出が目立つ。

### ・ 5 地点

試料1ではイネ属が検出され、その含量は4地点と同様に短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも200個/g未満である。また、タケ亜科とヨシ属の産出が目立つ。

### ・ 6 地点

試料1・2・3からは、イネ属が検出される。ただし、その含量は試料1で多い。すなわち、試料3・2では短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体それぞれが100個/g前後であるのに対して、試料1ではそれぞれ1,400個/g前後である。

また、各試料では同様な種類が認められる。試料3と1では植物珪酸体含量が4万個/gを超えて、

表 3 花粉分析結果

種類	上段(油点) 下段(試料番号)												
	1地点		2地点		3地点		4地点		5地点		6地点		
	1	4	1	2	4	3	1	3	2	3	2	3	
木本花粉	-	1	2	1	-	4	10	1	-	10	7	5	
ヤギ属	4	2	5	12	28	6	14	6	4	1	23	4	
モミ属	4	9	5	23	24	13	39	9	13	1	29	10	
マツ属(松柏科)	2	-	12	2	2	-	2	-	1	-	1	-	
マツ属(不柏)	4	2	8	3	10	7	-	1	-	11	2	2	
コウモリヤキ属	63	77	13	44	43	63	71	10	78	5	91	139	
スギ属	2	-	10	4	-	2	-	2	-	9	1	6	
イチジク(モードガヤ科)ヒノキ科	1	-	10	-	-	-	1	-	-	2	-	1	
マツモト属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	
ヤハズモドキ属	-	-	-	-	1	-	1	3	-	-	-	3	
クルマ属	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1	
タマシダ(ムーアダガ科)	3	2	10	1	-	3	2	-	-	-	1	1	
ハシバモ属	1	-	2	-	-	2	-	-	-	1	-	3	
ハシバモ属	1	-	5	-	-	1	1	-	-	-	3	1	
ブナ属	-	2	1	-	-	1	-	1	-	-	1	-	
コナラ属(コナラ科)	5	2	30	-	2	7	1	-	2	-	2	25	
コナラ属(カガミ直属)	14	6	115	17	3	25	8	1	6	-	20	50	
クリ属	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サイノキ属	-	-	13	-	-	-	1	-	-	1	2	1	
ニレ属(ケヤキ科)	2	1	1	-	1	1	2	-	-	1	1	1	
エノキ属・ムクノキ属	2	-	4	-	-	-	-	-	-	1	-	2	
ヤクシモ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
イヌクモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
アカメガシ属	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シウトリ属	5	5	-	1	-	-	-	1	-	5	2	-	
モチノキ属	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カコデ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属	2	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ツタ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
グマ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズクモ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツヅジ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カキ属	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハノノバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	
ダイカズラ属	-	1	4	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
ガマズミ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	56	25	8	5	26	80	11	3	34	-	22	12	
カヤツリグサ科	2	3	-	6	2	3	-	1	-	10	1	3	
ツユクサ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
チャエタヒルチ科(タガワヒルチ科)	1	-	-	-	1	27	11	-	2	-	26	1	
アザダ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
カサワツツジ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キンポウゲ科	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
アブラナ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バラ科	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
シソ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アリトクサ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
セリ科	-	3	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	
オナシカツラ属	1	-	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-	
オナシカツラ属	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	105	36	2	9	21	21	14	4	32	3	28	7	
ホクロクソウ属	21	-	-	1	4	-	2	1	3	-	2	1	
ヒメヨモギ属	5	8	15	-	3	7	2	2	3	-	3	6	
ダグラス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	7	
ヒカラカズラ属	1	10	1	3	6	8	11	-	6	3	3	4	
ゼンバク属	2	1	1	4	1	-	-	1	1	-	-	1	
イノトヨヒク属	2	8	-	3	4	5	-	3	1	4	3	2	
ヤシロシウモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
他のシダ類	826	707	50	44	647	1163	2893	87	522	42	3006	176	
合計	木本花粉	115	111	274	107	114	137	156	28	111	9	208	233
草本花粉	191	19	15	59	93	44	8	75	4	91	23	78	
不明花粉	5	5	13	6	3	7	7	0	2	0	1	6	
シダ類	801	726	52	51	656	1175	2890	88	532	46	5013	185	
物類(不判を除く)	1137	905	348	173	829	1405	3109	121	718	59	5312	441	

タケア科やヨシ属の産出が目立つが、試料2では植物珪酸体含量が1.4万個/gと少なく、タケア科の産出が目立つ。試料3と2では、樹木起源珪酸体の第IVグループも検出される。

#### ・7 地点

試料2と3からは、イネ属が全く認められない。植物珪酸体含量には大きな違いが見られ、試料3が16万個/gを超えるのに対して、試料2は1,000個/g未満である。試料3ではネザサ節を含むタケア

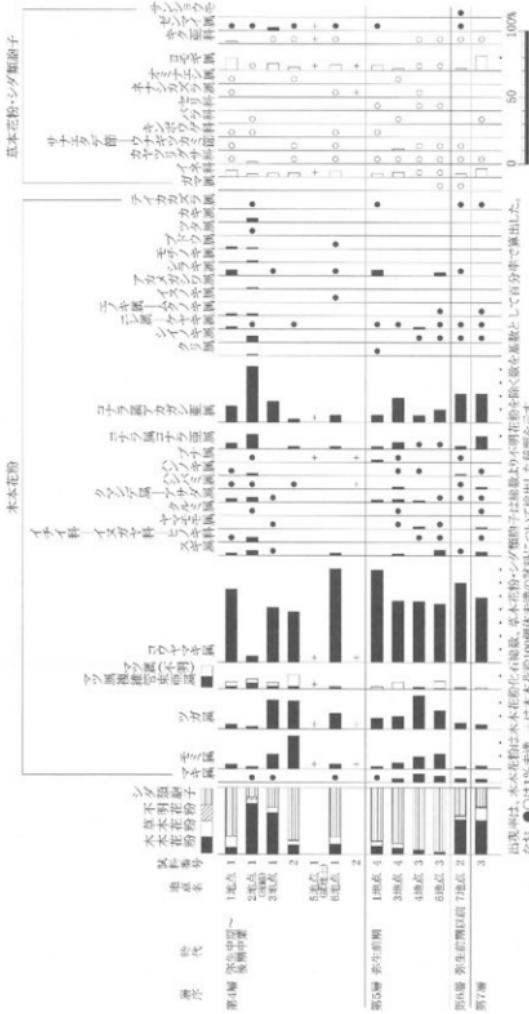


図247 主要花粉化石群集の層位分布

科の産出が顕著に目立ち、樹木起源珪酸体の第IVグループも検出される。試料2では、タケアキ科やヨシ属などがわずかに見られる。

#### (4) 樹種同定

同定の結果、材1、材2とともにコナラ属の根材である。根の部分であるため、さらに詳細な分類群の

出現率は、木本群は木本花粉化率、木本群以外は不明花粉率、○は木本花粉100個体未満群について記した値を示す。

表4 植物珪酸体分析結果

種類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

本遺跡の堆積環境の変遷を時代順に検討する。弥生時代前期以前に堆積した7地点の第7層（7地点試料3）および第6層（7地点試料2）からは、多くの珪藻化石が産出する。多産する種類は、湖沼浮遊性種群の*Aulacoseira granulata*である。本種類は、流れの影響が少なく、水深をもった場所でみられる種類である。この時期、7地点は相対的に低所に位置し、泥層を累重するような後背湿地の堆積環境が形成されたことが、層相からうかがえる。珪藻化石群集の特徴からは、ある程度の水深がある池沼などの堆積環境が形成される時期もあったことが推定される。

弥生時代前期の第5層では、6地点の試料3から多く検出されたが、4地点の試料3、3地点の試料4、1地点の試料4では珪藻化石が少なかった。調査区西側に位置する6地点の試料3では、湖沼浮遊性種群の*Aulacoseira granulata*、および湖沼沼澤湿地指標種群の*Aulacoseira ambigua*の多産によって特徴づけられる。水田面が形成されている第5層上面では、有機質に富み顕著な生物擾乱が見られることから、古土壤と判断される。今回、水田跡が検出された層準では、珪藻・花粉化石の保存が悪く、植物珪酸体においても全体の産出量が少ない。土壤中の珪酸分は、アルカリ性、流速が早い、温度が高いなどの条件下では溶けやすいことが実験的に確かめられている（千木良、1995）。また、植物珪酸体は、アルカリ性を示す水域や、乾湿を繰り返すような場所においては、風化が進み保存が悪くなる傾向がある（江口、1994、1996など）。一方、花粉化石は好気的状況下では風化されやすい（中村、1967）。これらのことから、水田耕土中の微化石は、土壤化が進行する際に風化によって一部が失われ、保存に強い種類や、多産する種類、形態的が特徴的で同定が容易な種類などが土壤中に残った可能性が高い。相対的に低所に位置する6地点のみで、ダイアグラムに表現可能な数の珪藻化石が産出しており、本地点が周囲に比べ土壤環境が湿性であったことを示唆している。上記した第5層の珪藻化石群集の特徴は、堆積物の層相観察結果と調和的な結果である。なお、一部試料で珪藻化石が検出されているが、組成をみると下位と組成が類似している。これらは母材に由来する可能性もあるが、植物珪酸体や珪藻化石の風化のメカニズムに関しては、まだ不明な点が多く断定はできない。

弥生時代中期～後期中葉の第4層についても、微化石の保存状態は全体的に悪かった。

珪藻が産出した6地点の試料1からは、湖沼浮遊性種群の*Aulacoseira granulata*、および湖沼沼澤湿地指標種群の*Aulacoseira ambigua*の多産によって特徴づけられた。他、陸生珪藻も多産する。現地所見では、周辺に流路が存在するような氾濫原であったと推定されることから、水生珪藻は、堆積時にとりこまれたものと思われる。一方、陸生珪藻については、第4層が土壤化していることから、土壤化した際に陸生珪藻が生育していた可能性がある。また微化石の保存状態が全体的に悪かったのも、土壤化の影響と思われる。

弥生時代後期に形成された流路である2地点の試料1からは、中～下流性河川指標種群を含む流水性種や流水不定性種によって特徴づけられる。なお、本層準の珪藻化石群集は、種類数が多く、優占する種類が見られない組成となっている。このような珪藻化石群集は、混合群集（堀内ほか、1996）と呼称されており、沖積低地の氾濫原堆積物で一般的に認められる特徴である。氾濫原堆積物は、様々な堆積環境下の場所から洪水時に運搬されてきた碎屑物で構成される。そのため、珪藻化石も様々な堆積環境下で生育していたものや、洪水時に侵食されて二次堆積したものが多く含まれる結果として、種類数が多く、優占する種類が見られない組成が形成されると解釈される。分析地点は、流路内に埋積する堆積層であり、層相観察と得られた珪藻化石群集が調和的であると言える。

## （2）植物珪酸体から推定される調査区およびその周辺の古植生

弥生時代前期以前の層位とされる第6層は、イネ属に出来する植物珪酸体が全く認められない。2試料ともに、湿润な場所に生育するヨシ属やコブナグサ属が見られるものの、比較的乾いた場所に生育する種類が含まれるネザサ節を含むタケアキの産出が目立った。当時の遺跡周辺には、後背湿地や微高地などが存在していたと考えられていることから、これらが水文条件に応じて棲み分けを行い、分布していたと考えられる。今回の結果をみると、調査区の近辺では第6層以下において、調査区およびその周辺で栽培種であるイネ属珪酸体が多量に地表面上に供給されるような人間活動が存在していなかったことが推定される。

弥生時代前期の水田跡とされる第4面を上面に持つ第5層では、1地点の試料5を除いて、各地点からイネ属が検出される。その含量は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体それぞれが100~200個/g程度である。水田耕作土の指標として、機動細胞珪酸体が5000個/gを超えるという基準が示されている（古環境研究所、1999）。この基準に照らすと、水田跡の検出基準から得られた植物珪酸体含量は、あまりにも低い値である。しかしながら、大阪湾岸や瀬戸内沿岸域の氾濫原上に立地する考古遺跡から検出された弥生時代前期の水田跡での植物珪酸体分析の結果の集成からは、イネ属の機動細胞珪酸体が数百個/g程度にとどまる分析結果が多いことが指摘される。

六甲山地南麓地域に位置する戎町遺跡では、イネ属機動細胞珪酸体の含量が高い試料で3,000個/g前後、少ない試料で1,000個/g前後（古環境研究所、1989）、河内平野に位置する志紀遺跡で800個/g（金原、2002）、瓜生堂遺跡で600~900個/g（古環境研究所、2004）、池島・福万寺遺跡で3,000個/g前後および1,500個/g前後の値を示すが、400個/g程度の試料も存在（辻本、2001）、岡山平野の津島遺跡で2,000個/g前後の値を示した1試料を除く他の3試料が150~350個/g前後（パリノ・サーヴェイ、2003）となる結果が得られている（図8）。

当該地域における弥生時代以降の水田跡の分析では、六甲山地南麓とその周辺地域では、玉津田中遺跡の弥生時代前期～中期で5,000個/g前後、中期で25,000~35,000個/g前後、中期～後期で7,000~12,000個/g前後（古環境研究所、2000；鈴木、2000a）、郡家遺跡の古墳時代中期で5,600個/g（古環境研究所、1990）、白水遺跡の古墳時代後期で60,000~80,000個/g前後（鈴木、2000b）、魚崎中町遺跡で古墳時代後期と推定される作土で11,000~131,000個/g前後、近世～近代で50,000~60,000個/g前後（鈴木、1996）、新方遺跡の鎌倉時代で5,900個/g（古環境研究所、2003a）、大阪平野では、志紀遺跡の弥生時代前期～古墳時代における各段階の水田面で800個/g前後、古墳時代後期～鎌倉時代初頭の各段階の水田面で2000~3000個/g前後（金原、2002）、玉櫛遺跡の奈良時代～平安時代前期で15,000~67,000個/g前後（鈴木、2003）の分析値が得られている（図8）。ちなみに、現在の耕作土の分析事例では、イネ属短細胞珪酸体が135,200個/g、機動細胞珪酸体が23,900個/gを検出した事例が報告されている（辻本ほか、2003）。

以上の結果から、弥生時代前期の水田跡については、上述した水田耕作土の指標となる機動細胞珪酸体が5,000個/g（古環境研究所、1999）の指標を大きく下回る結果が多くの遺跡から得られていることが判る。弥生時代前期以降の水田跡では、指標を超える分析事例が多いことが認識される。

近年の大坂平野の水田跡で実施された植物珪酸体分析結果では、池島・福万寺遺跡の弥生時代中期の調査例（辻本、2001・辻本・辻、2002）や勝部遺跡の弥生時代後期の調査例（辻本ほか、2003）で、イネ属珪酸体の割合が地点によってかなり差異が生じることが報告されている。池島・福万寺遺跡では、水田面のイネ属珪酸体の検出数や量が、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆

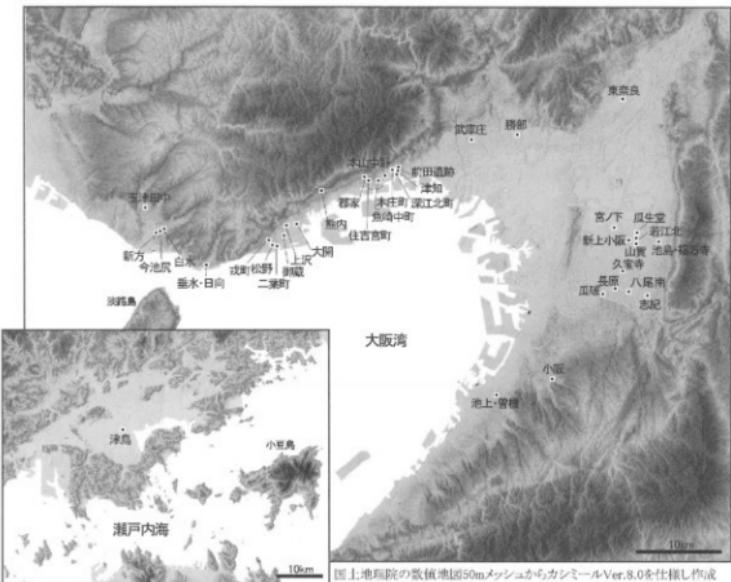


図249 本文中に引用した大阪湾岸域と岡山平野に立地する考古遺跡

単位の水田面積の違いと関連することも確認されている（外山，2002）。さらに、これまでに考古遺跡において実施された分析では、珪畔などが検出されている遺構検出面からほとんどイネ属珪酸体が検出されなかつた事例や（古環境研究所，1992 パリノ・サーヴェイ，2001・2002）、水田による稻作が行われたと判断される層準を覆う自然堆積層や隣接する遺構埋土からイネ属珪酸体が大量に検出された事例（パリノ・サーヴェイ，1996a 辻ほか，2004）なども存在する。また、水田面だけでなく明らかに畠跡遺構やそれらが存在する層準でも、イネ属珪酸体は高率で検出される場合がある（パリノ・サーヴェイ，1996b 辻ほか，2003）。これらの遺構でのイネ属珪酸体は、はたけ耕作土の母材として下位の水田耕作土や付近の水田から流れ込んだイネ属珪酸体を多量に含む泥層の使用、もしくは農業資材として敷き薬やすき込みのために圃場に持ち込まれた稻藁に由来するものと解釈される。一方、植物珪酸体は、植物珪酸体がPH値の高い場所や、乾湿を繰り返す場所で風化しやすいことが指摘されている（江口，1994・1996）。近藤・佐瀬（1986）では、種類によって溶解性に違いが認められることも指摘されている。

上記の事例から、分析から得られるイネ属機動細胞珪酸体の含量には、様々な要因が関係しているらしいことが予想される。上記した事例は、植物珪酸体化石のタフォノミーに関連する問題であると認識される。植物珪酸体だけでなく、考古遺跡でよく実施される花粉・珪藻化石などの微化石の多くは、生育場所から何らかの營力を受けて別の場所へ運搬され、遺跡を構成する堆積物や土壤中にマトリクスとして堆積したものである。そして堆積後には、様々な継成作用を受ける。そのため、微化石分析の解釈にあたっては、タフォノミーを考慮する必要があるとされている（辻誠，2000）。

以上のこととふまると、水田耕作土と推定される層準に含まれるイネ属珪酸体の含量は、弥生時代前期水田における既往の分析結果をふまると、少ない傾向にあると言えるが、今回の分析結果のみが特異に位置づけられるものではないことが指摘できる。これまでの分析結果では、今回の分析と同様に少ないながら、複数の地点でイネ属珪酸体が検出される傾向がうかがえる。なお、水田耕作土となるイネ属機動細胞珪酸体が5,000個/g指標を下回る点については、耕作期間が短い、生産性が悪いなどによって、堆積物中に植物珪酸体が多く蓄積されなかつたことが想定されることが多い。しかしながら、上述したように、植物珪酸体からの稻作の推定を行う場合には、タフォノミーを検討することなく、その有無や生産性、耕作期間について推測や可能性の示唆を行なうことは難しいと判断される。よって、遺跡形成過程や考古学的脈絡に関する詳細な位置づけを行うことなく、分析結果からのみで人間活動の側面を推測することには、大きな無理が生じると考えられる。遺跡における植物珪酸体の評価は、既往の分析結果や調査区内での相対的な結果をふまえ、遺跡形成過程の脈絡と対比させて記載していくことが望ましいと判断される。

弥生時代後期の居住域とされる第3面を上面に持つ第4層でも各地点からイネ属が認められる点が注目される。概して、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体それぞれが100~200個/g程度であるが、6地点では他の分析結果を大きく上回る1,000個/g以上の含量が得られている。第3面におけるイネ属珪酸体の産状については、今後、さらに検討する必要性があるようと思われる。第3面に構築された造構の覆土（5地点の試料1）では、3地点の試料1に近い産状が見られ、第4層が削剥されて埋積した可能性が考えられる。

### （3）遺跡周辺の古植生

花粉分析を行った第7層～第4層の古土壤では、全般に産出する花粉化石の保存状態が悪かった。これは、先にも述べたように、土壤が発達する酸化状況下では花粉化石が風化作用の影響を強く受け、分解することと関係している。花粉・胞子の風化作用に対する抵抗力は、花粉・胞子中の外壁に含まれているスプロボレニンの量にほぼ一致する（Havinga, 1964）ため、花粉に比較して、スプロボレニンの量が多いとされるシダ類胞子や外膜が厚い針葉樹花粉は風化作用の影響を受けても化石として残りやすいのである（Brooks & Shaw, 1971、徳永・山内, 1971など）。今回の各地点の結果を見ても、2地点の流路埋土（試料1）以外は、いずれも針葉樹花粉とシダ類胞子の割合が高く、風化作用の影響と判断されるため、多産したシダ類やコウヤマキ属が周辺に多数生育していたことを示しているのではない。

以上のように土壤発達のみられる堆積物の花粉分析結果は、しばしば今回のような産状を示し、植生復元を困難にしているが、次のような利点もある。土壤の場合、湖・池沼・湿地の堆積物に比較して、花粉の供給原から堆積物に取り込まれるまでの過程が単純で距離が短い場合が多く、調査地点近辺に生育している植生の影響を強く受けやすいのである。実際の森林土壤の花粉分析でも、このことが確認されており、空間的に複数地点の分析結果のバラツキなどから、調査地域の森林群落の動態を把握する上で有効な情報となることが確認されている（三浦, 1990、三宅・中越, 1998など）。考古遺跡でも本遺跡の北東方向に位置する池島・福万寺遺跡や、牛駒山西麓の扇状地に位置する讚良郡条里遺跡（辻本ほか, 2006）で、そのことを示唆する結果が得られている。例えば、池島Ⅰ期地区では、縄文時代晚期から弥生時代前期に形成された古土壤（第4黑色粘土層と呼ばれている）から、アカガシ亜属の埋没林が検出されている。その領域における花粉分析結果は、今回の結果と同様に化石の保存状態が悪いながら

も、アカガシ亜属の立木に近い場所でアカガシ亜属花粉が多産するなどの特異な産状を示しており、調査区内の植生を反している可能性が指摘されている（辻本ほか、2007）。このように土壤の花粉化石群集は局地的な植生を反映している可能性が高く、今回の八尾南遺跡の結果にもその視点から検討する。

弥生時代前期以前に形成された第7層と第6層では、各層とも1箇所の地点で花粉化石群集が確認されている。花粉化石群集は温帯性針葉樹のコウヤマキ属が優占し、次いで暖温带常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であるアカガシ亜属が多産することが特徴である。このほか、マキ属・ヤマモモ属（第7層のみ）・シノキ属・ティカカズラといった暖温帯要素のほか、クマシデ属-アサダ属・コナラ亜属・ニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹の種類を伴っている。保存状態が悪いながらも比較的多くの種類が確認されていることになる。これらの母植物が調査区ないしその近辺に生育していたかは複数地点の結果をもって評価する必要がある。しかしながら、第6層上部では調査区内に生育していたコナラ属の立木（根材）が確認されており、花粉化石で多産したアカガシ亜属や隣接したコナラ亜属はいずれもコナラ属に含まれることからみて、調査区内に成立していた林分から供給された花粉が土壤中に取り込まれている可能性が充分考えられる。花粉生産量が少ない、常緑樹林の林床や林縁に分布する常緑性ツル植物であるティカカズラなども植生構成要素として分布していた可能性がある。

弥生時代前期末の第5層では、4箇所の地点の花粉化石群集が確認されている。いずれの地点もシダ類胞子の占める割合が著しく高いが、これは先述したように風化作用に対する抵抗性が強いことによるもので、実際の植生量を反映しているものではない。また、木本花粉で多産する温帯性針葉樹のモミ属・ツガ属・コウヤマキ属も、シダ類胞子と同様に過大評価されていることは確かである。さらに、各地点の群集組成をみると、3地点でアカガシ亜属が多産すること、1地点と6地点で落葉広葉樹のシラキ属の産状が目立つなど、地点間で多少の差異が存在する。差異が認められたシラキ属は花粉生産量が少ない種類であり、花粉分析結果で多産することはほとんどない種類である。このことから、土壤形跡期間中には、調査区近辺にシラキ属の母植物が分布する時期があった可能性がある。また、アカガシ亜属は3地点で多産するものの、それ以外の地点では減少し、低率になる。このことから、第5層形成期には調査区周辺の植生が多少変化したことが推定される。

植生は、風倒、洪水、山火事などの影響を受けて変化する。このような植生を変化させることを生態学では搅乱と呼び、大きく自然搅乱と人为的搅乱に区分される。自然搅乱の種類は多様であるが、本遺跡が位置する河川流域でおこる洪水や土砂の堆積、溢水、流路移動に伴う侵食などを河川搅乱と呼ぶ。この搅乱は、その頻度と再来間隔、面積、強度により植生に与える影響が異なってくる（中静、2004）。今回の第6層から第5層で認められた植生の変化は、先述の堆積環境変化を踏まえると、調査区一帯の湿地化に起因する植生搅乱の影響を反映している可能性がある。

弥生時代中期から後期中葉にかけて形成された第4層では、4箇所の地点で花粉化石群集が確認されている。第4層の花粉化石群集は地点間のバラツキが大きく、保存状態も地点や層準によって異なる。花粉化石の保存状態は、いずれの地点も上部で良好となる傾向にある。これは第4層形成期には、調査区内に流路が形成されるが、その形成当時は河岸が離水し土壤の発達する状況にあったが、その後流路の埋積に伴って、基準面が上昇し、調査区の水位が上昇することにより風化作用の影響が弱まり、化石が状態良く保存されるようになったものと思われる。また、地点間の花粉化石群集のバラツキは、クマシデ属-アサダ属・ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、シラキ属、ブドウ属などの種類で確認される。これらの種類は、ほとんどが河畔林の構成要素

であり、調査区近辺ないし流路沿いに分布が推定される。今回の調査区の北側では、第4層形成期に生育していたクヌギ節の立木が確認されている（第Ⅴ章第6節参照）。クヌギ節は花粉化石でのコナラ亞属に含まれる種類である。現生のクヌギ節にはクヌギとアベマキがあるが、このうちクヌギは河畔林の構成要素でもあり、当時も河畔林として分布を抜けたことが推定される。ところで河川の中・下流域では、河川擾乱の影響によって、蛇行流路の内側（ポイントバー側）に流路からの距離に応じて、成立年代の古い森林が帶状に形成されていることがある（中静、2004）。今回の立木についても生長輪（年輪）を測定することで、その成立や維持機構に関する情報が得られるものと思われる。また、草本花粉において河川敷などの荒れ地に普通なヨモギ属が比較的多く産出していることからみて、調査区内の河岸は、樹木が分布していたものの、基本的には開けた場所であったことが推定される。

一方、第4層形成期に形成された流路埋植物の花粉化石群集は、上記の土壤の化石群集と種類構成の面では類似するが、出現率や保存状態が大きく異なる。流路埋植物では、還元状況下にあったことから、花粉化石の保存状態が比較的良かったものと思われる。花粉化石は掃流・浮流により運搬堆積したものが大部分と判断されることから、集水域の広い範囲の植生を反映していると考えられる。この組成から、流路の集水域にはアカガシ亞属を主とする暖温帯林が成立していたことが推定される。

以上、弥生時代以前から弥生時代後期中葉の花粉化石群集の特徴と古植生について述べてきたが、土壤層準で多産した温帶性針葉樹については、詳細は触れてこなかった。ここでは、河内平野南部に位置する考古遺跡の分析結果を含めて、温帶性針葉樹の分布について検討しておく。弥生時代前期から弥生時代後期にかけての花粉化石群集が確認されている河内平野南部に位置する考古遺跡は、池島・福万寺遺跡（辻本・辻、2002）、志紀遺跡（辻本ほか、2001）、長原遺跡（辻本・金井、2003 渡辺、2002a・2002b 那須ほか、1982）、加美遺跡（辻本ほか、2003）、など多数存在する。各地点の花粉化石群集をみると、いずれの地点もアカガシ亞属が多産し、スギ属・モミ属・柏属・イチイ科・イスガヤ科・ヒノキ科といった温帶性針葉樹とみられる針葉樹を伴う組成を示している。また、地点によっては落葉広葉樹のコナラ亞属が比較的多産する地点や、弥生時代後期層準でマツ属復雜管束亞属が増加傾向を示している地点もある（渡辺、2002b）。このような傾向の中、温帶性針葉樹についてみると、各種類の産出率や弥生時代前期から後期にかけての群集組成の層位変化パターンが地点毎で多少異なっていることが確認される。針葉樹花粉が多産する化石群集は、土壤の分析結果で多く、風化作用の影響ともみなせるが、加美遺跡や長原遺跡などでは、低湿地に位置し、花粉化石の保存状態が良好な地点でも温帶性針葉樹花粉が多産する傾向が確認されている。これらことは温帶性針葉樹花粉を供給した母植物が、一般的に言われている暖温帯から冷温帯の推移帶などの標高の高い場所ではなく、台地縁辺など低地に近い場所にも分布していたことを示唆する。今回の結果では針葉樹が過大評価されていることは確かだが、後背台地などにコウヤマキ属の母植物が分布していた可能性がある。

今回の結果では、花粉化石の保存が非常に不良であったが、上記したように一定の成果は得られた。今回の調査区では、弥生時代後期の流路堆植物に種実や材化石が多く含まれていることが観察される。種実や材化石などの大型植物化石は、花粉に比べて局地性の強い植生を示唆する場合があり、今後、流路堆植物に含まれる大型植物化石も含めた解析を行っていくことで、遺跡およびその周辺の景観復元を行っていく際のより詳細な基礎データが得られるものと考えられる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社

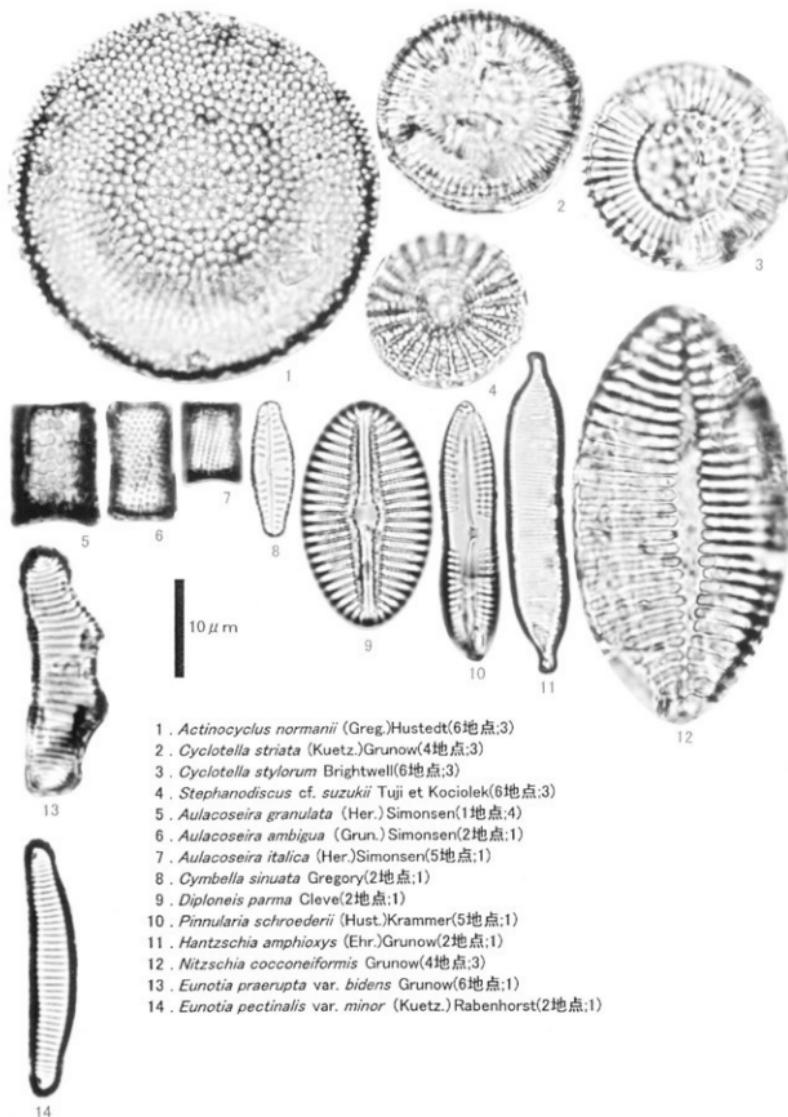
辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・伊藤良永）

## 引用文献

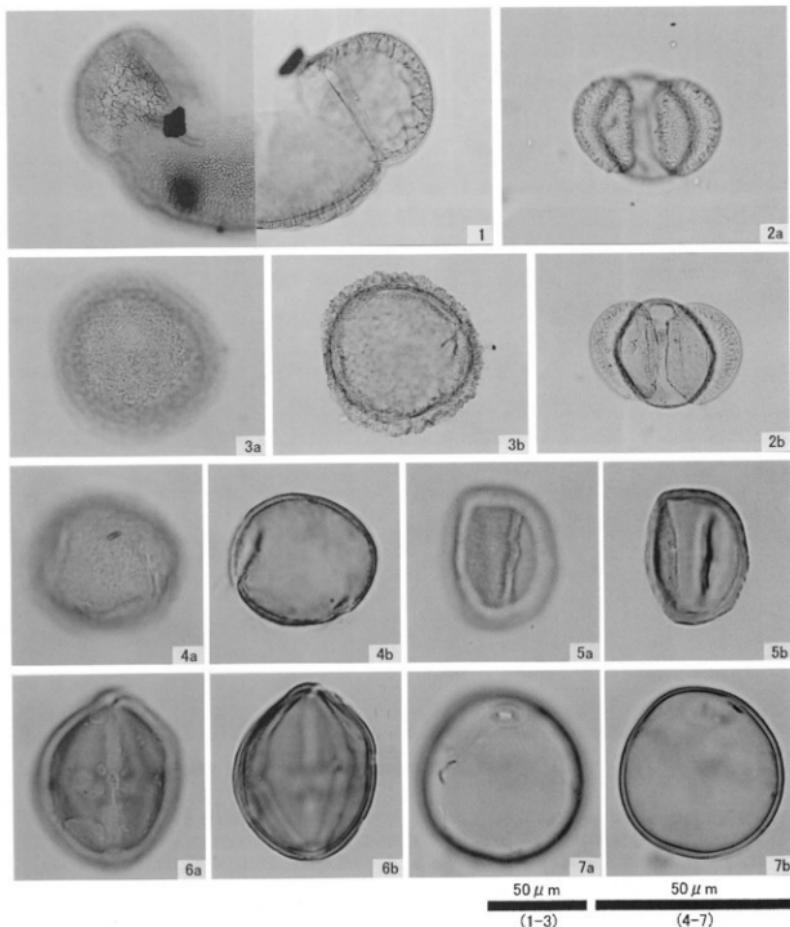
- 安藤一男, 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1996. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- Brooks, J. & Shaw, G. 1971. Recent developments in the chemistry, biochemistry, geochemistry and post-tetrad ontogeny of sporopollenin derived from pollen and spore exines. "Pollen Development and Physiology"
- 趙 智清, 2001. 長原遺跡の標準層序. 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書 VI 1996年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書」. (財)大阪市文化財協会, p.7-22.
- 千木良 雅弘, 1995. 風化と崩壊. 20Mp. 近未來社.
- 江口誠一, 1994. 沿岸域における植物珪藻体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして. 種生誌研究, 2, 19-27.
- 江口 誠一, 1996. 沿岸域における植物珪藻体の風化と堆積物のpH値. ベトロジスト, 40, 81-84.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998. 塚山の藻類 硅藻類. 塚山植物誌. 塚山教育委員会, 527-600.
- Habinga, A.J. 1964. Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores. *Pollen et Spores*, 6: 621-635.
- 井上 智博, 2003. 目的と概要. 「尺度遺跡II・国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書」. (財)大阪府文化財センター, 153.
- 伊勢屋 ふじ子, 1998. ウォッシュロード・堆積学辞典. 堆積学研究会編. 初創書店, 297.
- 伊藤 良永・堀内 誠示, 1991. 隆生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, 23-45.
- 金原 正子, 2002. 志紀遺跡3区における古環境復元. 「志紀遺跡(その2・3・5・6)大阪府芦八尾城紀住宅 建て替え事業に伴う発掘調査報告書」. (財)大阪府文化財調査研究センター, 209-23.
- 小杉 正人, 1988. 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四回研究, 27, 1-20.
- 古環境研究所, 1989. ブラントオパール分析調査報告書. 「戎ヶ遺跡第1次発掘調査小観察」. 神戸市教育委員会, 103-110.
- 古環境研究所, 1990. ブラントオパール分析. 「郡家遺跡 神戸市東灘区所在御影町中地区第3次調査概報」. 神戸市教育委員会, 59-65.
- 古環境研究所, 1999. ブラント・オパール分析から見た静岡バイパス関連踏跡. 静岡・清水平野の埋没 古環境情報「考古学的調査と自然科学分析資料 建設省地質調査資料から見た古環境の様相」――般国道1号線バイパス周辺文化財発掘調査1984~1993年. (財)静岡県埋蔵文化財調査研究会, 83-86.
- 古環境研究所, 2000. 神戸市玉津田中遺跡(平野地区13次調査)における自然科学分析. 「玉津田中遺跡 調査報告書 第8・10・12・13・15次調査・官前田中跡整理工事に伴う埋蔵文化財調査」. 神戸市教育委員会, 77-94.
- 古環境研究所, 2003. 新方遺跡第44次調査における自然科学分析. 「今池尻遺跡 新方遺跡 平松地点-発掘調査報告書」. 神戸市教育委員会, 231-250.
- 古環境研究所, 2004. 瓜生堂遺跡における植物珪藻体・花粉・珪藻分析. 「瓜生堂遺跡1近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-考察・分析・写真図版編-」. (財)大阪府文化財センター, 645-676.
- 近藤 錬三・佐藤 降, 1986. 植物珪藻体分析. その特性と応用. 第四回研究, 25, 31-64.
- Krammer, K. 1992. PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. JCramer, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986. Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988. Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae. Bacillariaceae. Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a. Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales. Fragilariacese. Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b. Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthacae. Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 松田順一郎, 1999. 瓜生堂第40次調査における河川堆積作用の変化. 「瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘報告書-電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告書」. (財)東大阪市文化財協会, 93-105.
- 松田順一郎, 2000. 八尾市小阪合遺跡における弥生時代~古代の河川堆積作用と地形発達. 「小阪合遺跡・都市基盤整備公園八尾畠地整備に伴う発掘調査報告書」. (財)大阪府文化財調査研究センター, 259-276.
- 松田順一郎・パリノ・サーゲイ, 1996. 「北島遺跡の耕作地と古環境 -寝屋川南部流域植竹ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書」. (財)東大阪市文化財協会, 157p.
- Miall, A.D. 1992. Alluvial Deposits, in Walker, R.G. and James, N.P. (ed) Facies Models. Geological association of Canada, 119-142.
- Miall, A.D. 1996. The Geology of fluvial deposits:Sedimentary facies, basin analysis, and petroleum Geology. Springer, 582p.
- 三浦 修, 1990. 森林土壤の花粉分析 -方法論的問題と森林群落の動態研究への適用. 植生史研究, 5, 3-18.

- 三宅 尚・中越信也, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態・発生史研究, 6, 1, 15-30.
- 中村 篤, 1967, 花粉分析, 古今書院, 23p.
- 中野 透, 2004, 森のスケッチ, 日本の森林・多様性の生物学シリーズ①, 東海大学出版会, 236.
- 中嶋雅宏・中山勝博・百原 新・塙慶 実, 2004, 中新統士岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動 - 岐阜県多治見市人制地地区的例 -, 地質学報誌, 110, 204-221.
- 日本ペトロジーアカデミー, 1997, 土壌調査ハンドブック 改訂版, 博文社, 169p.
- パリノ・サーヴェイ, 1996a, 珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元、「北島遺跡の耕作地と古環境」 - 群馬県南部流域植付ボンブ塩土工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書 -, (財)大田原市文化財協会, 71-130.
- パリノ・サーヴェイ, 1996b, 自然科学分析、「上千ヶ遺跡跡跡区西亀有1丁目12番地地点発掘調査報告書」, 跡跡区遺跡調査会, 242-275.
- パリノ・サーヴェイ, 2001, 亀里平原遺跡の自然科学分析、「亀里平原遺跡 主要地方道前橋・長瀬線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 343-353.
- パリノ・サーヴェイ, 2002, 横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析、「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡・北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 第1分冊 (本文編)」, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 133-155.
- パリノ・サーヴェイ, 2003, 関山県境・競技場改修に伴う自然科学分析、「沼田遺跡 国山岡山県境上競技場改修に伴う発掘調査 (第2分冊)」, 関山県教育委員会, 523-539.
- 鈴木茂, 1996, 魚崎中町遺跡 (第3次調査) のプラント・オパール, 「魚崎中町遺跡 (第3次調査)」, 神戸市教育委員会, 37-41.
- 鈴木茂, 2000a, 水田遺構とその周辺のプラント・オパール分析, 「玉津田中遺跡調査報告書」 第8・10・
- 12・13・15次調査 - 宮前田中塙塗造工事に伴う埋蔵文化財調査一-, 神戸市教育委員会, 169-175.
- 鈴木茂, 2000b, 神戸市白水遺跡のプラント・オパール, 「白水遺跡第3・6・7次 河津大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書」, 神戸市白水特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書その2, 神戸市教育委員会, 87-90.
- 鈴木茂, 2003, 植物珪酸体分析, 「王墓遺跡II - 大阪府宮茨木住宅 (建て替え) 新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財センター, 160-167.
- 外山秀一, 2002, 池島・福万寺遺跡の立地と環境, 「池島・福万寺遺跡2 (福万寺I期地区) - 級河川恩加川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書・分析・考察欄」, (財)大阪府文化財センター, 411-429.
- 鶴永 重元・山内 毅子, 1971, 花粉・胞子・化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 辻 康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文, 2003, 戸畠市内に所在する考古遺跡の自然科学分析, 「守田遺跡 (第128地点) 発掘調査報告書・集落東端部の様相と知見」, 戸畠市教育委員会, 135-163.
- 辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀, 2004, 付章 前田遺跡の自然科学分析, 「前田遺跡 (第20地点) 発掘調査概要報告書・弥生前駆水田跡の構造と水利の窓」, 戸畠市教育委員会, 1-36.
- 辻本裕也, 2001, IFJ97-3 調査区の花粉・植物珪酸体分析, 「池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X X VI - IFJ97-3 調査区の概要 -」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 120-131.
- 辻本裕也, 2001, 自然科学分析の成果, 「長岡京跡・物集草塚跡周辺遺跡」, (財)向日市埋蔵文化財センター, 202-212.
- 辻本裕也・辻 康男, 2002, 池島・福万寺遺跡の古環境復元, 「池島・福万寺遺跡2 (福万寺I期地区) 一級河川恩加川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書・分析・考察欄」, (財)大阪府文化財センター, 361-410.
- 辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司, 2003, 自然科学分析の成果, 「郡部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 151-192.
- 辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司, 2002, 志紀遺跡における純文時代から中世の古環境分析 - 6B 区の調査成果を中心にして, 志紀遺跡 (その2・3・5・6) - 大阪府宮八尾志紀作蛇建替え事業に伴う発掘調査報告書 (第2分冊) : 605-613, 財團法人大阪府文化財センター.
- 辻本裕也・田中義文・辻 康男・伊藤良永・馬場健司, 2004, 小阪合遺跡 (第2次) 発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析, 「小阪合遺跡 (その2) 八咫鏡 (隕石) 埋蔵文化財発掘調査 (第2次)」, (財)大阪府文化財センター, p.180-216.
- 辻本裕也・金井慎司, 2003, 長原遺跡の自然科学分析, 「大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告 VI 2000年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪市文化財協会, 67 - 82.
- 渡辺正巳, 2001, 第1節 長原遺跡東北地区における花粉・珪藻分析, 「大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告 IV 1998年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪市文化財協会, 79-88.
- 渡辺正巳, 2002a, 第2節 NG00-11次調査区に係わる花粉分析, 「大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 IX 市営長吉長原東第2住宅建設工事に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪市文化財協会, 56-65.
- 渡辺正巳, 2002b, 第1節 長原遺跡東北地区における花粉・珪藻・プランクトンオパール分析, 「大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 V 1999年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査 報告書」, (財)大阪市文化財協会, 87-96.
- Wiktorowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D., 2000, Iconographia Diatomologica 7.
- Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G., 881p

图版 1 珊藻化石



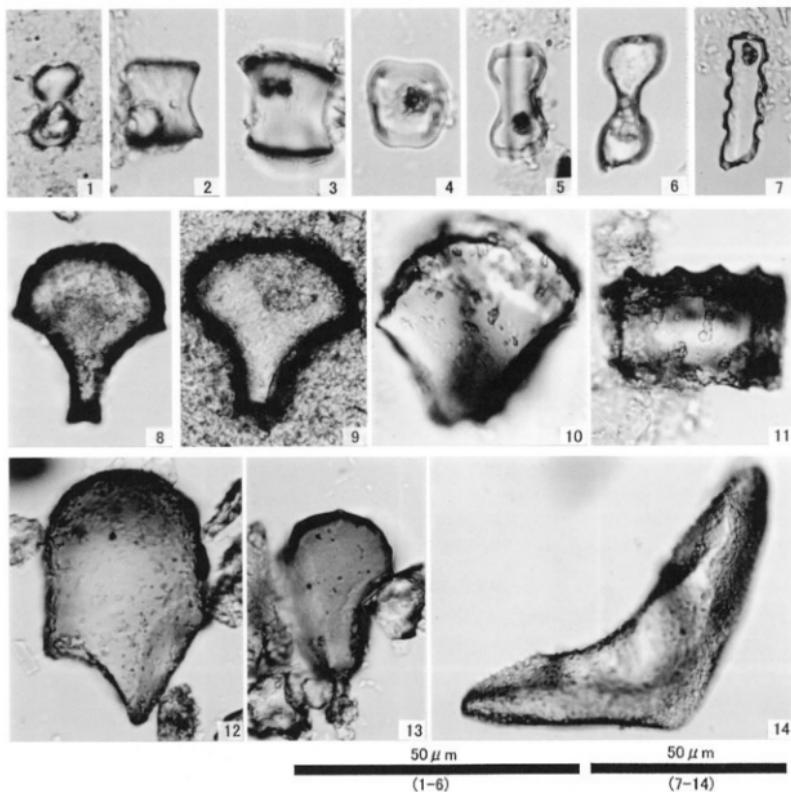
図版2 花粉化石



1. モミ属(2地点;1)  
3. ツガ属(2地点;1)  
5. アカガシ亜属(2地点;1)  
7. イネ科(2地点;1)

2. マツ属複維管束亞属(2地点;1)  
4. コナラ亜属(2地点;1)  
6. カキノキ属(2地点;1)

図版3 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体(1地点;3)
3. ネザサ節短細胞珪酸体(7地点;3)
5. コブナグサ属短細胞珪酸体(4地点;3)
7. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体(5地点;3)
9. イネ属機動細胞珪酸体(1地点;3)
11. ネザサ節機動細胞珪酸体(1地点;4)
13. ウシクサ族機動細胞珪酸体(6地点;2)
2. ネザサ節短細胞珪酸体(1地点;4)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(4地点;3)
6. ススキ属短細胞珪酸体(4地点;3)
8. イネ属機動細胞珪酸体(5地点;1)
10. ネザサ節機動細胞珪酸体(7地点;3)
12. ヨシ属機動細胞珪酸体(4地点;3)
14. 樹木起源第IVグループ(6地点;2)

### 第3節 第3面竪穴建物9の堆積地層分析

#### はじめに

分析調査の目的は、八尾南遺跡で検出された竪穴建物9の堆積物について、土壤微細形態学的な観察を行い、建物の形成および埋没過程に関する情報を得ることにある。

考古遺跡における堆積物・土壤の形成過程、特に遺構の形成・埋没過程の検討では肉眼観察では確認できない情報も多く、X線写真を用いたメソスケールの堆積物の構造記載や、土壤薄片を用いたマクロスケールでの堆積物の観察記載を行うことの有用性が指摘されている (Baraham, 1995 Courty et al, 1989)。

#### 1. 試料

竪穴建物9における資料採取位置を図1に示す。分析資料は、発掘調査担当者により不搅乱柱状資料として南側・北側の2箇所から採取されたものを使用する。

#### 2. 分析方法

##### (1) X線写真撮影

採取した不搅乱試料は、厚さ1cmまで板状に成形し、湿润状態のまま、管電圧50kvp、電流3mA、照射時間270秒のX線強度条件においてX線写真撮影を実施した。撮影は元興寺文化財研究所の協力を得た。X線写真的記載は、堆積物について宮田ほか (1990)、土壤について佐藤 (1990 a・b)、森ほか (1992)、成岡 (1993)などを参考とする。

##### (2) 土壤薄片

土壤薄片作成試料は、80°Cで1日間乾燥した後、樹脂（ペトロボキシおよびシアノボンド）で固化を行い、片面の研磨を実施した。固化および研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ70μm程度まで研磨を行い、カナダバルサムによりカバーガラスを接着した。土壤薄片の記載は、久馬・八木久証監修 (1998) の「土壤薄片記載ハンドブック」を参考とする。

#### 3. 各地点の堆積物の特徴

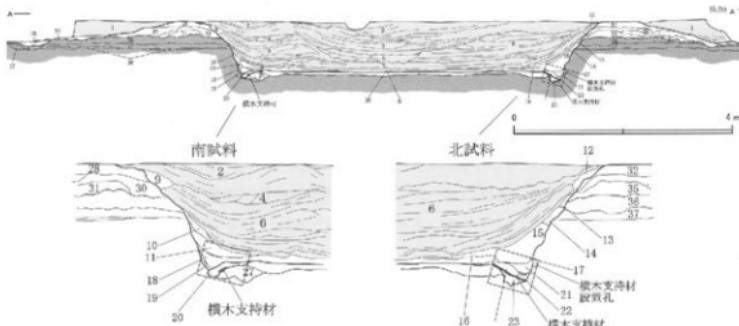


図250 分析位置

### (1) 南側壁溝地点

南壁試料のX線写真およびトレース図を図251に示す。分析試料の肉眼観察およびX線写真的観察結果から、上位より層準1～8の8つの層に区分される。各層の特徴について以下に記載する。

**層準1**：灰オリーブ色を呈する細粒砂シルト質極細粒砂からなる。葉理構造が発達し、有機物の葉理および暗灰色シルト質砂の微小ブロック土の薄層を挟在する。葉理は不連続で、波打っている状況が確認される。現地調査を行っていないので特定できないが、地盤動による変形の可能性がある。また、壁斜面に堆積する暗灰色シルト質砂の微小ブロックは、堅穴の周囲の土壤に由来するとみられる。大きさは3mm程度であり、その間隙はこれらの破片と砂により充填されている。また、これらの葉理をなす堆積物は逆級化成層をなすことから、河川の氾濫堆積物と推定される。

**層準2**：暗灰色を呈する極粗粒砂・細礫混じりシルト質細粒砂～細粒砂質泥からなる。最下部には壁溝の回りから流入した葉理をなす堆積物が認められる。これらは壁面側で不明瞭となる。その上位には、黒褐色を呈する細礫混じり砂質シルトのブロック土が堆積する。ブロック土の大きさは1cm程度で亜角状～亜円状をなすものが主体をなす。その間隙は板粗粒砂ないしシルト片に閉まれている。ブロック土内には初生の堆積構造は認められず、さらに細かい集合体が確認される。堆積状況は、凹地部分で最も厚くなり、斜面側で薄くなる。また不明瞭ながら葉理状の構造をなしているように見える。これらのことから、黒褐色を呈する細礫混じり砂質シルトのブロック土は、堅穴斜面側から供給された崩積性の堆積物であり、雨水などの影響を受けて再堆積している部分も存在する可能性が高い。

**層準3**：黒色を呈する砂質シルトのブロック土からなる。ブロック土は大きさ1cm程度の亜角状から亜円状の形状をなす。ブロック土に初生の堆積構造はみられず、さらに小さい集合体が確認される。また、ブロック土間の間隙は砂粒や植物遺体で充填されている。本層準は遺構内に流れ込んだ周囲の土壤が起源と判断される。また、ブロック土は上位の堆積物の圧密の影響を受け、扁平になっているもののがみられる。これは層準3形成後のある時期に遺構内が水没した時に変形したものと思われる。

**層準4**：暗灰色から暗褐色を呈するシルト質砂・砂礫からなり、植物遺体を多く含む。本層準の堆積物は、次に述べる層準5の床面構成堆積物の支持材脱落後に移動した砂層を覆う、崩積性の堆積物である。壁斜面側には細粒サイズの小礫が混じる極粗粒砂～中粒砂と亜角状を呈した暗灰色シルト質砂からなるブロック土が、崖錐状に堆積する。このうち、後者のブロック土は、より小さな亜角状をなすブロック土が集合している状況が確認される。人為的な盛土堆積物などで特徴的に認められる構造でもあり、周堤帶構成堆積物が崩落、堆積したものである可能性が考えられ、このブロック土の内側に堆積する砂層については壁体崩壊後、堅穴建物の壁面を構成していた堆積物に由来する可能性がある。植物遺体については由来は不明であるが、建物構築材の一部である可能性は否めない。

**層準5**：壁体を構成していた粘土と植物遺体である。上部では遺構のベース堆積物に接合している状態で残存しているが、写真中央から下半部にかけては壁から剥がれて、さらに引きちぎれて壁溝に向かって脱落している。粘土の内側には遺構のベースをなす堆積物の砂粒が充填されている。さらに壁溝部分に到着した粘土は先端がL字状に屈曲している状況が確認される。おそらく、壁体が脱落する時には遺構内に水が溜まっていたものと思われる。

**層準6**：支持材の上位を覆っていた、床面を構成する堆積物である。支持材が壁溝に落ち込んだ際、その上位を覆っていた堆積部が支持材脱落とともに移動したものと思われる。この堆積物は細粒の小礫と細礫が混じるシルト質粗粒砂～細粒砂のブロック土と、亜角～角状（極端なものは3角錐）をなす5

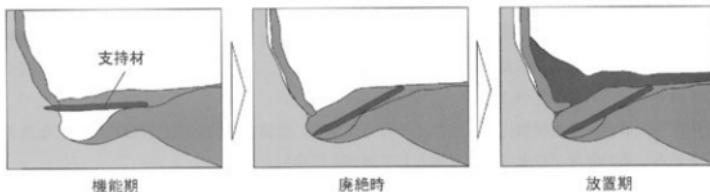
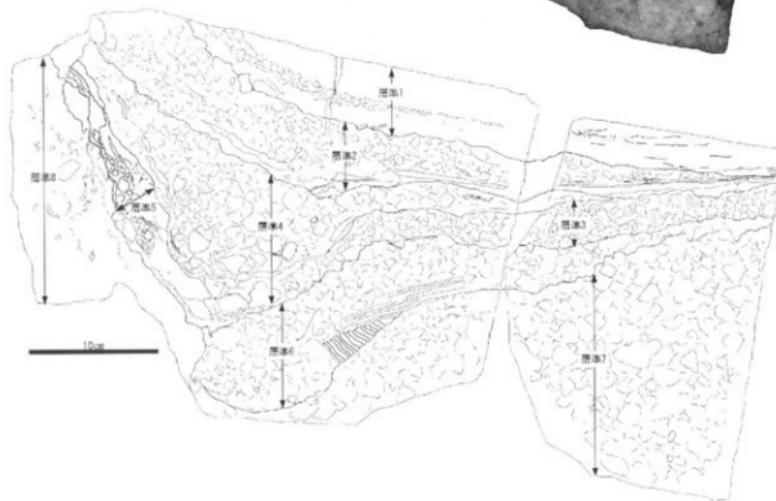
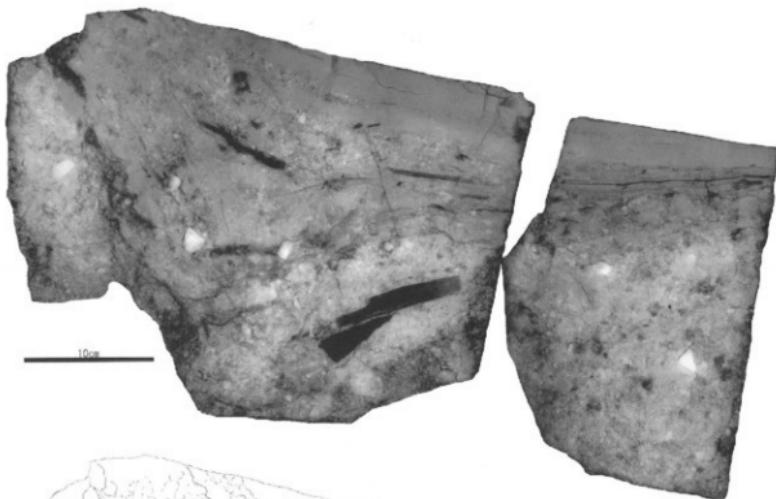


図251 南側壁溝地点のX線写真とトレース図および壁溝埋没過程

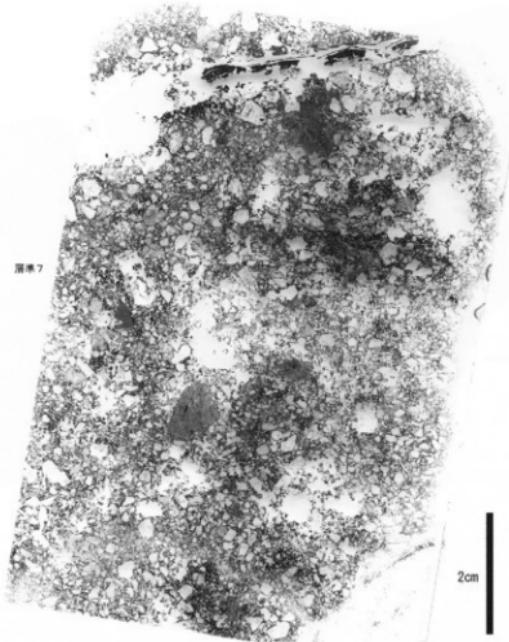


図 252 南側壁溝試料層準 7 の土壤薄片写真

mm程度の灰色シルトブロック土がわずかに混じる、人為的攪拌による堆積物である。この堆積物は層準7と極めて類似する層相を示すが、崩積時に全体的に間隙が開いている。

層準7：上記した層準6と同様に人為的に攪拌された堆積物からなる。細粒の小礫と細礫が混じるシルト質粗粒砂～細粒砂のブロック土と、亜角～角状（極端なものは3角錐）をなす5mm程度の灰色シルトブロック土がわずかに混じる、人為的攪拌による堆積物である。土壤薄片の観察でも、同様のことが確認される。植物遺体なども取り込まれており、ブロック土も観察される。このような堆積物の層相は自然状態で形成されることはなく、明らかに人為的な堆積物といえる。この堆積物の住居内側への広がりは不明であるが、後述する北壁の壁溝地点では確認されていないことから、南側壁溝を構築する前段階の溝などを埋め戻した堆積物の可能性がある。

層準8：遺構のベースをなす堆積物。細粒の小礫・細礫・シルト混じり粗粒砂層からなる。植物根痕が確認されるが、特に顕著な人為的な擾乱などは認められない。ただし、淘汰が比較的良好く、乾くと簡単にくずれるという特徴をもつ。

以上の南側壁溝試料の堆積物に記載した。その結果から、南側の遺構形成過程は次のようなステージに区分される。その埋没プロセスを模式図として図251に示した。

- ・ステージ1：構築時・機能期

壁溝を掘削し、床面を整地する段階である。層準7は人為的に攪拌されている堆積物からなり、南側

壁向地点では溝の拡幅が行われた可能性がある。最終段階の駿溝は、不定形なU字型で表面は凹凸が著しい。この溝の上位に支持材が置かれ、その上位を堆積物で覆っていた。

・ステージ2：廃絶時

壁溝の支持材が壁溝内に落ち込む、支持材の上位を覆っていた堆積物（層準6）が、支持材に沿って滑り落ちる。さらにその後（時間間隔が存在する可能性もある）、壁体が脱落する。

・ステージ3：放置期

崩積性および雨水などの流れ込みにより遺構が埋没していく時期。層準2・3・4の形成期が相当する。数回の堆積期が存在し、住居廃絶後の放置されていた期間の存在を示す。

・ステージ4：埋没期

当時西側を流下していた流路が氾濫を起こし、氾濫堆積物によって埋没していく時期。層準1より上の堆積物形成期が相当する。

## (2) 北側壁溝地点

層準1：黒褐色を呈する細粒砂混じり粘土質シルトのブロック土からなる。ブロック土間の隙間は小さく接合している状態にある。そのため、遠目には塊状をなす粘土層に見えるが実際にはブロック土からなる。このブロック土は1cm程度の大きさを主体とし、亜角から亜円状の形状をなす。上位層から伸びる植物根痕も密に確認される。また、このシルトブロック土とは別に長径5cm程度のシルト質砂（この中にもさらに細粒のブロック土が存在する）が同時に取り込まれている状況が観察される。これらのブロック土は崩積性の堆積物と判断されるが、隙間密度が低いことを踏まえれば、水中での堆積が推定される。すなわち当時の遺構内には雨水が溜まっている状態にあった可能性がある。

層準2：層準1と同様にブロック土からなるが、本層準のブロック土は細礫を多く混じえるシルト質砂からなる。大きさは1cm程度の亜角状をなす。遺構のベースをなす堆積物とほぼ粒径は同じである。ブロック土の配置は規則性がなくランダムであり、折り重なるように堆積している。放置期に形成された崩積性の堆積物と判断される。壁溝の凹地部分には細礫混じりの粘土質シルトブロック土が確認される。このブロック土は層準1のような堆積状況を示している。このことから、溝底付近に水が溜まっていた可能性がある。さらにこの粘土質シルト層直下には、三日月状に移動した細礫混じり砂層が確認される。これは、円弧状に全体が移動しており、人為的にこのような構造が形成される確率は低く、放置期以降に物理的な影響（例えば地震動など）を受けて変形しているものと思われる。

層準3：層準2と基本的には同じ崩積性のブロック土からなる堆積層準である。細礫・極粗粒砂～粗粒砂を多く含むこと、支持材が脱落後に最初に溜まった堆積物である。植物遺体も挟在する。また、ブロック土の直軸方向の配向性は、斜面下部方向を示すものが多い。堆積後にクリープしている可能性もある。

層準4：支持材の上面を覆っていた床面構成堆積物である。南側壁溝の層準6と同じ様相を示し、小礫と細礫が混じるシルト質粗粒砂～細粒砂のブロック土と、亜角～角状をなす5mm程度の灰色シルトブロック土が混じる、人為的攪拌による堆積物である。支持材が壁溝内の斜面下部に移動、再堆積した堆積物である。

層準5：層準4と同時期に形成された堆積物で、層相も類似している。小礫と細礫が混じるシルト質粗粒砂～細粒砂のブロック土と、亜角～角状をなす5mm程度の灰色シルトブロック土が混じる、人為的攪拌による堆積物である。壁溝内側の斜面から崩落したものも存在する可能性がある。なお、壁溝底の

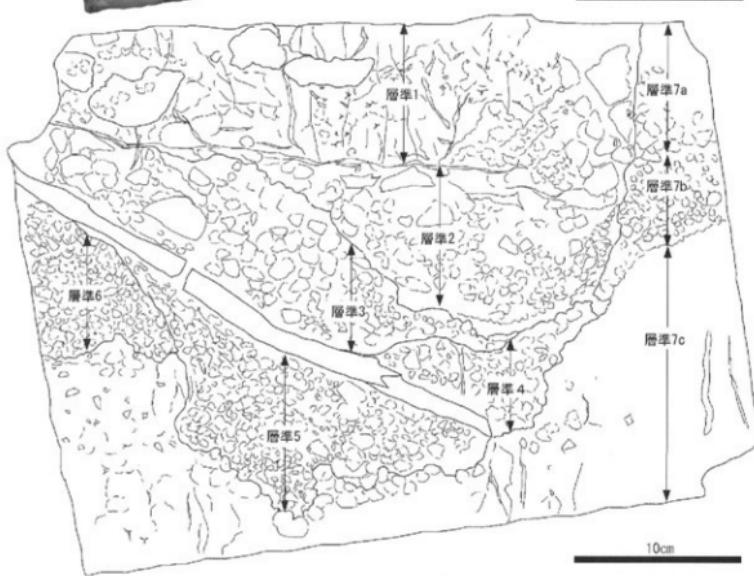
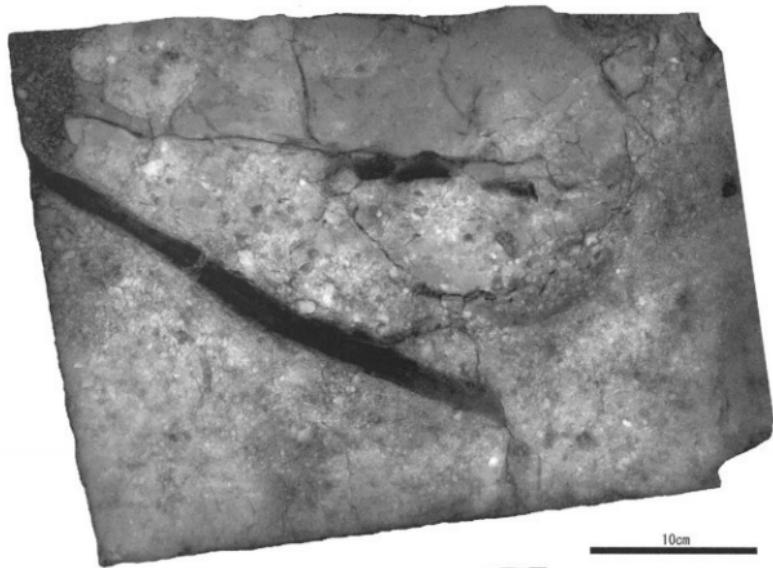


図 253 北壁壁溝試料のX線写真とトレース図

形状は著しく凹凸のある形状をなしている。これは加工時の状況を示している。

層準6：床面構成堆積物である。細粒の小礫と細螺が混じるシルト質粗粒砂から細粒砂のブロック上と、亜角～角状（極端なものは3角錐）をなす5mm程度の灰色シルトブロック土がわずかに混じる、人為的攪拌による堆積物である。植物遺体が混じる。約100ほどの層厚をもっている。

層準7：堅穴建物のベースをなす堆積物。細粒の小礫・細螺・シルト混じり粗粒砂層からなる。植物根痕が確認されるが、特に顕著な人為的な擾乱などは認められない。また、南側壁向地点で確認された壁向内側の擾乱も存在しない。さらに、堅穴壁側には支持材を打ち込んでいた擾乱の痕跡が確認される。この部分のみ、堆積物の密度が粗くなっている。そのため、X線写真では黒く写っている。壁体構築時の加工痕である。

以上のことから、北側壁溝の遺構埋没過程は次のようなステージに区分される。

・ステージ1：構築時・機能期

構築時には堅穴の壁に孔を空け、支持材を突き刺していた。その支持材の上位は堆積物で覆われていた。壁溝は、U字型ではなく、箱形を呈しており、表面の凹凸が著しい。本地点では、壁溝の掘削は1回のみの可能性がある。溝底の形状をみると、多少拡幅している可能性もあるが、堆積状況からは判断がつかなかった。

・ステージ2：廃絶時

基本的に状況は、南側壁側に類似する。すなわち、壁溝の支持材が壁溝内に落ち込む、支持材の上位を覆っていた堆積物（層準4）が、支持材に沿って滑り落ちる。本地点では壁体は確認することができなかった。層準2に含まれる粘土質シルトブロックがその残骸である可能性もあるが、判然としなかつた。

・ステージ3：放置期

崩積性および雨水などの流れ込みにより遺構が埋没していく時期。層準2・3・4の形成期が相当する。数回の堆積期が存在し、建物廃絶後の放置されていた期間の存在を示す。

・ステージ4：埋没期

当時西側を流下していた流路が氾濫を起こし、氾濫堆積物によって埋没していく時期。層準1より上位の堆積物形成期が相当する。

#### 4. 壁溝の埋没過程について

今回の調査地域の堆積環境変遷は、自然科学分析第1節で詳述した。それによると、弥生時代前期から後期にかけては、洪水堆積物が泥質から砂質な層相へ上方粗粒化することから、後背湿地から氾濫原へと堆積環境が変化した。氾濫原を構成する砂質洪水堆積物の累重によって、調査区では、弥生時代前期に比べ相対的に地表面付近がより乾燥するような環境が維持されるようになったと考えられる。

今回調査を行った弥生時代後期の居住域は、氾濫原を構成する砂質洪水堆積物の最上部付近に形成された古土壤から検出されている。また、調査区で確認された居住域の検出範囲内には、弥生時代後期に埋積された開析流路が存在する。造構検出面となる砂質洪水堆積物の最上部の古土壤が、開析流路の形成に伴う調査区およびその周囲の氾濫原面における相対的な水位低下に伴って発達した可能性がある。本流路は弥生時代後期頃に、周囲の一部の氾濫原に形成された遺構とともに埋没している。

以上の堆積環境の変遷を踏まえると、今回調査を行った建物の機能期から埋没期にかけての調査区基

準面が上昇傾向にあったことになり、廃絶理由もそのことが大きく関係している可能性が高い。ここでは、これら地形変化と、上述してきた南側と北側壁溝試料の観察結果から、壁溝の形成・埋没過程についてまとめを行う。

堅穴建物の床が掘り込まれている堆積物は氾濫堆積物からなる。床面近くの層準の粒径は、かなり粗い碎屑物からなり、乾燥すると、脆く崩れやすい性質であった。堅穴床面は、調査した範囲であるが植物遺体混じりのシルト質砂で整地している。その厚さは100程度である。同時に壁溝が構築されている。北側壁溝のX線写真では、壁側に支持材を支えた孔が確認された。床面には平行の位置に孔があけられており、その上位に整地層が覆っていた。なお、壁溝の形状は、2箇所とも凹凸が著しく、丁寧な調整は行っていなかった。廃絶後には、この支持材が壁溝内に崩壊する。この崩壊の原因としては、上記の調査地域の水紋条件の変化を考慮すると、水位の上昇にともない、壁溝下部から壁が崩れはじめ、内側に脱落した可能性がある。北側壁溝については、壁溝の壁側斜面が抉られているように見えるが、特定するには至らない。この点については現地調査時の結果を踏まえて、慎重に評価する必要がある。明らかになった埋没過程について以下に示す。

まず、溝を覆っていた支持材が脱落し、支持材上に存在した堆積物が溝に流れ込んだ。その後、南側試料では、壁の崩壊が起り、貼付けてあった壁体が崩落する。崩落と同時に壁体と壁の間の部分も崩れ、その上を覆う。北側の溝も基本的には同様の埋没過程をたどるが、壁体は確認されなかった。このことは両者で壁の崩落のタイミングに時期ズレが生じていたことを示しているのかもしれない。南側の壁体は落ち込むと同時にL時状に曲がっている。この状況を踏まえると、崩落時、後に壁溝内には水が溜まっており、水分を含んだ状態で折れ曲がった可能性がある。

その後、かつての床面や溝の落ち込みには、建物周囲の土壌が崩落したり、流れ込む時期が存在した。この土壌は有機質に富む黒色堆積物などで、いずれも初生の堆積構造をもたないブロック土からなることから、周辺の土壌が由来であると判断した。周囲盛土も含まれている可能性が充分考えられる。

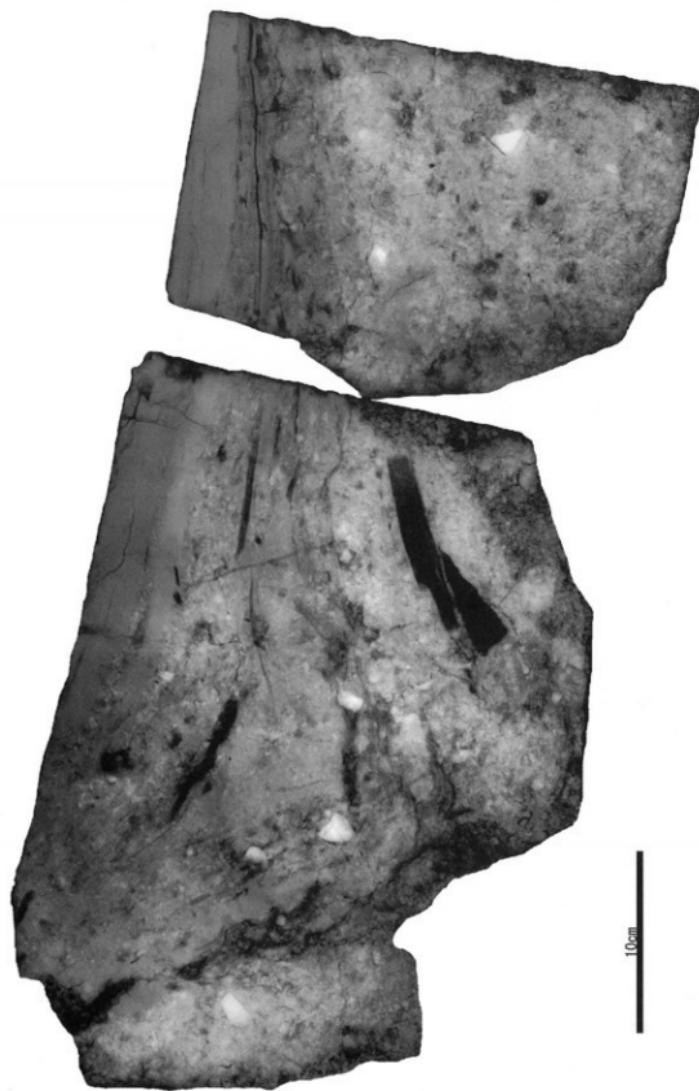
その後、流路埋没期に本造構も氾濫堆積物によって完全に埋没するが、それまでにも数回の氾濫の影響を受けていたことが今回の結果からも確認された。

(パリノ・サーヴェイ株式会社 辻本裕也)

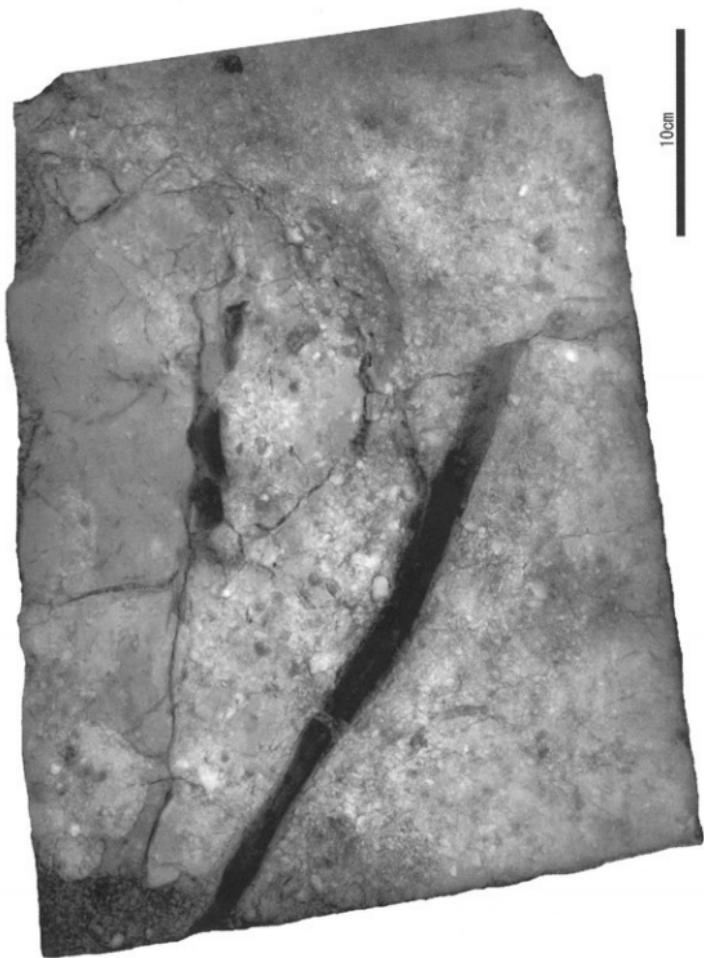
## 引用・参考文献

- Barham, A.J., 1995, Methodological approaches to archaeological context recording. *Archaeological Sediments and Soils: Analysis, Interpretation and Management*.  
Courtney, M.A., Goldberg, P. and Macphail, R.L., 1989, *Soils and Micromorphology in archaeology*. Cambridge : Cambridge University Press, 344p.  
Gregory J.Retallick 2001 Soils of the Past An introduction to paleopedology. BlakwellScience, 404p.  
平山良治, 2002, 現在土壤肥料科学の新面 [13] -十塙微細形態学の前編-, 農業および園芸, 77, 55-64.  
久馬・剛・八木久義監修, 1989, 土壤薄片記載ハンブック. 博文社, 176p.  
宮出雄一郎・山村恒夫・鶴谷・淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・施浜秀一, 1990, 淡水生デルタの形成過程 -琵琶湖愛知川河口部を例として- 2. 地質構成と堆積相. 地質学雑誌, 96, 839-858.  
森・他寸志, 2000, 壁X線による赤褐色土壌中の構木機構の解明. 土壌の物理性, No.63, 59-65.  
森・他寸志・滋賀哲子・岩東憲治・渡辺紹智・丸山利輔, 1992, 土地利用による土壤同僚構造の差異 -壁X線による観察を中心として- . 土壌の物理性, No.66, 19-27.  
成岡 市, 1993, 土壌粒間隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前報. 日本国土壤肥料科学雑誌, 64-1, 90-97.  
成岡 市・岩田尊夫・鶴村正治, 2000, 関東ローム層における粒間隙の透水、通気および排水機能. 農業土木学会論文集, No.208, 63-71.  
Rapp, Gandy Hill, C., 1998, *Geoarchaeology: The Earth-Science Approach to Archaeological Interpretation*. Yale University Press, 274p.  
齊羅文氣, 1993, 壁X線写真観察法. 第四紀試料分析法2 研究対象分析法日本第四紀学会講, 東京大学出版会, 103-108.  
佐藤幸一, 1990a, 八郎潟干拓地重耕・木田土の粒間隙の発達とその意義. 農業土木学会誌, 60, 25-30.  
佐藤幸一, 1990b, 八郎潟干拓地における畑道と草連土壌の粒間隙の発達とその意義. 農業土木学会誌, 60, 287-292.

図版4 南側壁溝資料のX線写真



図版5 北側壁溝資料の軟X線写真



## 第4節 弥生～古墳時代遺構出土種実の同定

### はじめに

今回の分析調査では、弥生時代後期前半の諸遺構および古墳時代中期の遺構から出土した種実の種類を知り、当時の植物利用に関する情報を得る。

### 1. 試料

試料は、弥生時代後期前半の堅穴建物（試料番号1～6）・井戸（試料番号7）・流路（試料番号8～9）と、古墳時代中期の井戸（試料番号10～11）から出土した種実遺体である。各試料の詳細は、結果と共に表1に示す。

### 2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実などの大型植物遺体を抽出する。現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川, 1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか, 2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を求めて表1に示す。分析後の植物遺体は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

### 3. 結果

アラカシ、アカガシ亜属、コナラ属、ツブライジイ近似種、ブドウ属、ブドウ科、ハイノキ属、カヤツリグサ科、エノキグサや、栽培植物のモモ、イネ、マメ類、エゴマなどのシソ属、メロン類、ヒヨウタン類などの種実が計384個検出された他に、木の芽、炭化材、不明炭化物、昆蟲などが確認された（表1）。以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

#### <木本>

##### ・アラカシ (*Quercus glauca* Thunberg) ブナ科コナラ属アカガシ亜属

果実と殻斗が検出された。果実は黒褐色、卵状楕円体。長さ9mm、径8cm程度。果実頂部の花柱や柱頭を欠損する。頂部には殻斗の圧痕である輪状紋がみられ、輪状紋は突出せず、同心円状に薄く肩に広がる。果皮表面は平滑で微細な縫筋がみられる。果実基部を包む殻斗は灰褐色、3-4段の輪状紋をもつ。岡本（1973）は、アラカシの輪状紋は突出せず、薄く肩に広がる特徴を報告していることから、同様の特徴を持つ個体をアラカシと同定した。

##### ・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

幼果、果実、殻斗が検出された。幼果は茶褐色、径6mm程度の楕状で、表面には3-4段の輪状紋が配列する。果実は灰褐色、長さ1.7cm、径1.1cm程度の卵状楕円体。果実頂部に輪状紋が認められるが、アラカシとは区別される個体や、種の同定根拠となる柱頭が完全に残っていない個体をアカガシ亜属とした。果実基部には淡褐色、径5mm程度の円形で雄管束の穴が輪状に並ぶ着点がある。果皮表面は平滑で微細な縫筋がみられる。

なお、果実頂部を欠損し、輪状紋の有無が認められない個体をコナラ属(*Quercus*)とした。

##### ・ツブライジイ近似種 (*Castanopsis* cf. *cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイ属

果実が検出された。黒褐色、球状広卵体で径5-6mm程度。頂部は尖り、基部を占める着点は灰褐色、円状不定形。果皮は薄く、表面には光沢があり、細く浅い溝が縦列する。1個の基部には果実を包む殻斗の破片が残存する。殻斗は灰褐色、表面には数個の突起の横輪が同心円状に配列し、短毛が密生

表5 大型植物遺体分析結果

試料番号	調査区名	遺構名 採取番号	時期	同定結果					
				分類群	学名	部位	状態	個数	備考
1	022工区	堅大建物6(前庭)	弥生時代後期中期	アカガシ属	<i>Quercus rubra</i> Cyclobalanopsis	果実	12		
				コナラ属	<i>Quercus</i>	果実	被片	7	
				ゴマフ属	<i>Quercus</i>	果実	被片	1	赤泥
				ブドウ属	<i>Vitis</i>	種子	96		
				ブツクサ属	<i>Pitcairnia</i>	種子	破碎	3	
				イモ	<i>Oryza sativa</i>	胚乳	炭化	12	断付過2個
				カキノグサ科	<i>Cyperaceae</i>	果実	1		
				マメ科	<i>Leguminosae</i>	種子	炭化	1	
				エキナタチ	<i>Acetosella austriaca</i>	種子	1		
				ジンコ属	<i>Perilla frutescens</i> var. <i>japonica</i>	果実	5		
				シソ属	<i>Perilla</i>	果実	1		
				木の葉				6	
				柏木材					
				イモ	<i>Oryza sativa</i>	胚乳	炭化	13	断付過1個
				鬼矢木				2	
	022工区	堅大建物6(中央土坑)	弥生時代後期中期	ヒメクサ属	<i>Lagenaria siceraria</i>	種子	60	室内2個	
				ハスノイ属	<i>Circium mello</i>	種子	61	マクワシノイ属	
				木の葉				1	
				炭化材				32	
				不明炭化物				1	
				窓庇				1	
	024工区	堅大(造作)(土蔵)	弥生時代後期中期	ヒメクサ属	<i>Lagenaria siceraria</i>	果実	被片	40	第1箇所被片を含む
						種子	3		
	022工区	堅大(造作)(土蔵)	弥生時代後期中期	モモ属	<i>Prunus persica</i>	核	被片	1	半分
				ハスノイ属	<i>Aesculus turbinata</i>	果実	1	通称破壊部の種子摩耗	
				アカシ	<i>Quercus glauca</i>	果実・被片	2		
				アカガシ属	<i>Quercus rubra</i> Cyclobalanopsis	幼果	2		
				コナラ属	<i>Quercus</i>	果実	被片	1	
				ゴマフ属	<i>Castanopsis cf. cuneifolia</i>	果実	2		
				ハスノイ属	<i>Symplocos</i>	種子	1	基部欠損	
				ヒメクサ属	<i>Lagenaria siceraria</i>	種子	2		
	022工区	井戸口8	古墳時代中期	モモ	<i>Prunus persica</i>	核	変形	14	果実16個
						被片	2		
	021工区	井戸口2	古墳時代中期	ヒメクサ属	<i>Lagenaria siceraria</i>	種子	9		

する。

#### ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクランボ属

果実、核（内果皮）が検出された。茶褐色、広楕円体でやや偏平。長さ2.0～2.6cm、幅2cm、厚さ1.8～2.0cm程度。頂部はやや尖り、基部は切形。果皮は薄く（厚さ1～2mm程度）、表面は粗面。果実内部にみられる核は、基部に湾入した溝と、表面に1本の明瞭な縫合線がある。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線に沿って半分に割れた個体がみられる。また、縫合線上にネズミなどの齧歯類によると考えられる食痕が認められる個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。

#### ・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

果実が検出された。灰褐色、歪な倒卵体。長さ3.8cm、径3.3cm程度。果実頂部はやや尖り、基部は切形。果皮は厚く、スポンジ状で弾力があり、表面には皮日状の斑点がある。基部と頂部を結ぶ3本の溝に沿って基部が破損しており、内部に種子が確認される。種子は偏球体、表面には赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、割れ方は不規則。

#### ・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。灰～黒褐色、広倒卵体、側面観は半倒卵形。基部の溝の方に向かって細くなり嘴状に尖る。径4.45mm程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は樹状。なお、同定根拠となる背面を欠損した破損個体を、ブドウ科 (*Vitaceae*) とした。

#### ・ハイノキ属 (*Symplocos*) ハイノキ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、倒卵状長楕円体。長さ1cm、径6mm程度。基部を欠損する。内果皮は木質で表面に浅い隆条が縱列する。

#### ＜草本＞

- ・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。長さ5mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切状凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の隆条が縱列する。表面に顆（果）の破片が付着している個体もみられる。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が規則的に縱列する。

- ・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。淡褐色、三稜状倒卵体。長さ2.8mm、径2mm程度。頂部の柱頭部分はわずかに伸びて湾曲する。基部は切形。果皮表面は微細な網目模様が配列する。

- ・マメ類 (*Leguminosae*) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色、長楕円体。長さ6.5mm、径5mm程度。腹面の子葉合わせ日上に長楕円形の脇がある。種皮表面はやや平滑で光沢があるが、焼け膨れ、崩れている。

- ・エノキグサ (*Acalypha australis L.*) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、倒卵体。長さ1.7mm、径1.5mm程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には細かい粒状の凹みが密布しづらつく。

- ・エゴマ [*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica* Hara] シソ科シソ属

果実が検出された。茶褐色、倒卵形。径1.8~2.5mm程度。果実基部には大きな脇点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。なお、径1.8mm未満の1個をシソ属 (*Perilla*) とした。

- ・メロン類 (*Cucumis melo L.*) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。長さ6.5mm、幅3~4mm程度と、藤下(1984)の基準による中粒のマクワ・シロウリ型（長さ6.1~8.0mm）に該当する個体が多い。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縱長の細胞が密に配列する。

- ・ヒヨウタン類 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒヨウタン属

果実の破片と種子が検出された。果実は茶褐色、完形ならば球形やナス形、首の長いフラスク形やヘビのように長いものまで様々。破片はやや丸みがあり、大きさは5.5cm以下。径1cm程度の円形の脇がある破片が1個、果柄の破片が数個確認された。果皮表面はやや平滑で光沢があり、内面は淡灰褐色、スポンジ状。断面は柵状で厚さ3mm程度。種子は淡灰褐色、長さ1.2cm、幅6mm、厚さ1.5mm程度の倒広皮針形でやや偏平。頂部は角張り、基部は切形で脇と発芽口がある。種子表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い稜にある2本の縫線がみられる。

#### 4. 考察

弥生時代後期前半の各遺構から検出された種実のうち、イネ、マメ類、エゴマ、ヒヨウタン類、メロン類、モモは栽培のため渡来した種類である。いずれも食用となるが、ヒヨウタン類は、容器等として使われる方が一般的である。ヒヨウタン類は、堅穴建物9・排水溝から果実が検出されている。脇や果柄が一つづつみられるので、1個体が分解した可能性が高いが、果実の形状に関しては、細片化しているため不明である。

ブドウ属は、周辺の山野に自生したと推測される。果実が多汁で生食可能であることから、植物質食

料としての利用が考えられる。

アカガシ亜属、ツブライジイは、常緑広葉樹である。アラカシなどは二次林を構成する場合もあるが、大部分は安定した森林を構成する樹木である。前報の花粉化石群集でも、多産しており、周辺に生育していたものと思われる。なお、これらは食用可能であり、収量が多く、貯蔵が利くことから、当時の植物質食料として重要であったと思われる。また、流路3から検出されたトチノキも、重要な可食植物である。ツブライジイは生食可能で、アカガシ亜属も茹であることによって食用となるが、トチノキはアルカリ（木灰など）を使って煮るなど複雑な行程を必要とする。

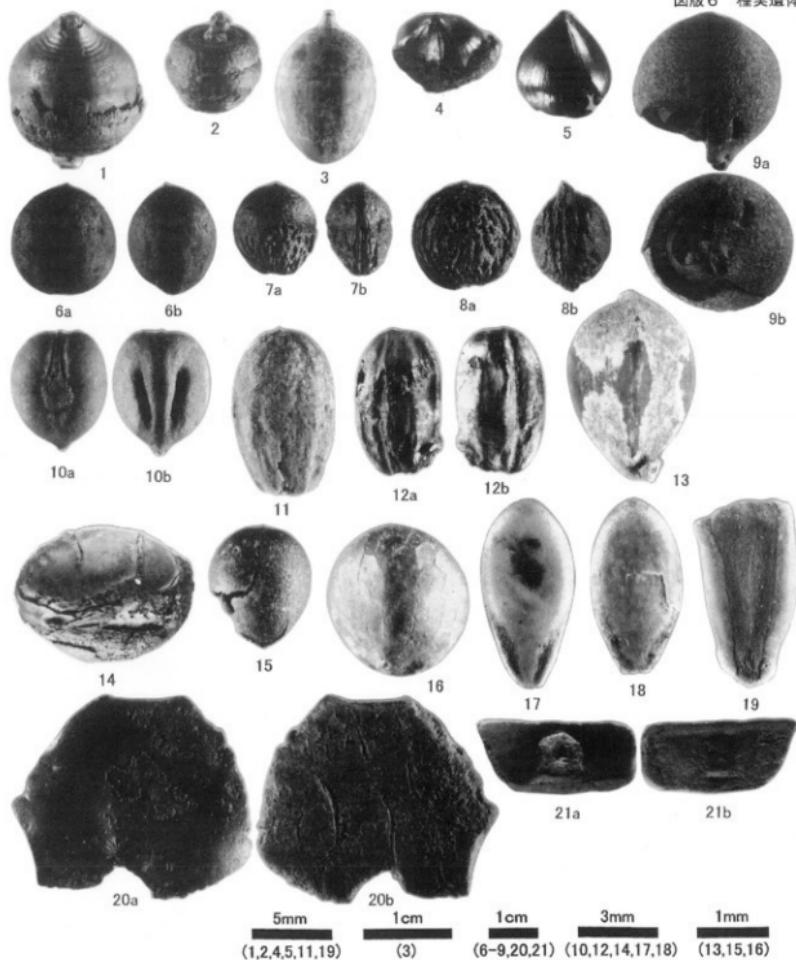
遺構から検出されたヒヨウタン類、メロン類、ブドウ属、イネは出土状況からして、当時の生活残渣が廃棄されたり、そのまま放置されたりして残存したものと思われる。一方、アカガシ亜属、ツブライジイ、トチノキは検出数が少なく、幼果を含む種類もあり、人為的に割られたかどうかも不明である。したがって、これらは自然に埋積したものと思われるが、いずれも有用な種実であり、近くで入手しやすかったことから、当時の人々が利用していた可能性は高い。本遺跡周辺の考古遺跡における弥生時代後期の古植生に関する情報では、暖温帶性常緑広葉樹林の主要素であるアカガシ亜属が多産している地点が多く（辻本・辻、2002など）、離水した場所に平地林と呼べる林分が存在した可能性がある。

（パリノ・サーヴェイ株式会社 松元美由紀）

## 引用文献

- 藤下 典之. 1984. 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 古文化財の自然科学的研究. 古文化財総集委員会編. 同朋会, 638-654.
- 石川茂雄. 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志. 2000. 日本植物種子図鑑. 東北大学出版社, 642p.
- 岡本薰治. 1973. どんぐりのはなし(3). Nature Study, 19卷8号. 大阪市立自然科学博物館編. 大阪自然科学研究会, 7-10.
- 辻本裕也・辻 康男. 2002. 池島・福万寺遺跡の古環境復元「池島・福万寺遺跡2(福万寺Ⅰ期地区)」一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編」.(財)大阪府文化財センター, 361-410.

図版6 種実遺体



1. アラカシ近似種 果実・穂斗(399流路)
2. アカガシ亞属 幼果(399流路)
3. アカガシ亞属 果実(竪穴建物8(東側溝))
4. ツブライジ近似種 果実(399流路)
5. ツブライジ近似種 果実(399流路)
6. モモ 果実(243井戸)
7. モモ 果実・核(243井戸)
8. モモ 核(243井戸)
9. トチノキ 果実(100流路)
10. ブドウ属 種子(竪穴建物8(埋土下層))
11. ハイノキ属 核(399流路)
12. イネ 胚乳(竪穴建物8(埋土下層))
13. カヤツリグサ科 果実(竪穴建物8(埋土下層))
14. マメ類 種子(竪穴建物8(埋土下層))
15. エノキグサ 種子(竪穴建物8(埋土下層))
16. エゴマ 果実(竪穴建物8(埋土下層))
17. メロン類 種子(竪穴建物6(炉跡))
18. メロン類 種子(竪穴建物6(炉跡))
19. ヒヨウタン類 種子(竪穴建物6)
20. ヒヨウタン類 果実(403排水溝(周堤外))
21. ヒヨウタン類 果実(403排水溝(周堤外))

## 第5節 中世土坑墓出土人骨の分析

八尾市若林町に位置する八尾南遺跡から出土した12世紀前半の人骨の保存状態は悪い。

遺存していた骨格は、頭頸部と胸部を除いた下位の椎骨と仙骨、四肢骨である。遺失している頭頸部から胸部には溝の遺構があり、土坑の大きさを考慮するとこれらの部位は埋葬後に破壊されたと考えられる。埋葬姿勢は、頭を西にした仰臥位で、左上肢は伸展し、下肢は股関節を開いて胡坐をかいたような状態である。しかし、下肢の場合、埋葬時には両足をそろえ膝を屈曲して立てていたが土圧などにより、膝が開いた可能性もある。

部位の同定ができた骨は、左の上肢と第11胸椎以下の骨格であった。椎骨は第11胸椎から第5胸椎の椎弓板で仙骨の左半分が遺存し、椎弓と仙骨の一部は連結していた。上肢は、左側の全ての骨が連結しており、特に手根骨が関節していたため、鎖骨、上腕骨、尺骨、桡骨および大・小菱形骨を除く手根骨と第II～V中手骨が同定できた。

下肢は左側の保存がよく、寛骨と仙骨が関節した状態で出土し、大腿骨、脛骨、腓骨および距骨と踵骨を除く、足根骨と第I～III中足骨がみられた。右下肢は、股関節の一部と大腿骨、脛骨と腓骨、足根骨、第II～V中足骨が同定できた。

性の判定が可能な左寛骨がほぼ完全な形態で遺存していたので、大坐骨切痕の角度から男性と推測した。

四肢骨の長骨は骨端の破損が大きく、長径の計測はできなかったが、左脛骨の骨幹のみ骨計測ができる、中央横断示数が69.4、脛（扁平）示数が69.3で、いずれの示数も広脛に近い中脛であった。

謝辞

人骨のクリーニングと整理に御尽力いただいた高志こころさんに感謝の意を表します。

(大阪市立大学 安部みき子)

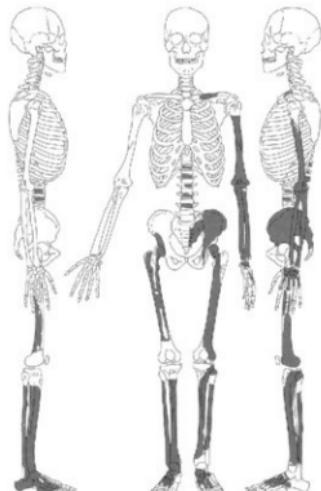


図254 骨格遺存部位 (アミセ標印は骨骼進行部位を示す)

表6 左脛骨の骨計測値

骨幹中央矢状径	30.52 mm	栄養後位最大径	34.18 mm
中央横径	21.19 mm	栄養孔横径	23.70 mm
中央横断示数	69.4	脛（扁平）示数	69.3



第11胸椎～第4胸椎・仙骨・右光骨（背面面より撮影）

図版8 第1面土坑墓1出土人骨(2)



1：上腕骨・橈骨・尺骨（左） 2：肱骨・大頭骨（右） 3：胫骨・腓骨（左） 4：足根骨・中足骨（右）（背面より撮影）

## 第6節 八尾南遺跡出土木製品の樹種

### 1. はじめに

八尾南遺跡より出土した木製品 253 点について樹種同定を行なった。これらは古墳時代の遺構である井戸 8 から出土した 8 点を除きすべて弥生時代後期前半の遺構にともなうものである。このうち 150 点は堅穴建物 9 にともなう構造部材で、いずれもほぼ現位置を保った状態で出土した一括資料であることから、堅穴建物の内部構造や木材利用の様相について知るうえで貴重な示唆を与える。また、このほか堅穴建物 8 棟と掘立柱建物 5 棟の柱穴に一部残存していた柱材や、貯木遺構および流路から出土した加工材にも、建築部材あるいは建築部材と推定される部材が多く割合を占める傾向にあり、本遺跡における木製品を特徴付けている。今回、これらの部材について樹種同定を行うとともに、木取りや法量についても検討を行なった。その結果、弥生時代における木材利用、特に建物の構築工程という点において興味深い結果を得ることができた。本稿では、先ず樹種同定の結果を示し、八尾南遺跡における木製品の樹種傾向と用材選択について若干の考察を行う。そのうえで次に、堅穴建物 9 に用いられた部材の樹種と木取り、法量から建物内施設の構造を構築する際の木材利用について検討する。

### 2. 樹種同定の方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接縫断面）、柾目面（放射断面）の 3 断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフランで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

各試料の木材組織は、後に示す顕微鏡写真の通りであり、以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』(I)(II)に従った<sup>1)</sup>。樹種同定は木沢が行い、伊東隆夫先生（京都大学名誉教授）の御教示を得た。なお、報告する樹種同定結果のうち 35 点は、中原計氏（徳島大学埋蔵文化財調査室）による成果であり、今後合わせて報告することをお許しいただいた。以降本稿で用いる木材各部位の呼称については図 255 にしたがっている。

### 3. 樹種同定結果

同定を行なった木製品の樹種は、針葉樹 1 種、広葉樹 13 種（属、亜属、節を含む）に大別できる（表 7・8～12）。

以下に、各樹種の植生および樹形の特徴を記すとともに同定の根拠とした木材組織の概要を記す。なお、試料数の多い樹種については紙幅の都合もあり個々の同定所見は割愛した。

#### ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

《ヒノキ科 Cupressaceae》

〔植生分布〕暖帯：本州（福島県以南の主として太平洋側）・四国・九州（屋久島まで）

〔樹形〕常緑高木。直幹性で樹高 30m、胸高直径 1m に達する

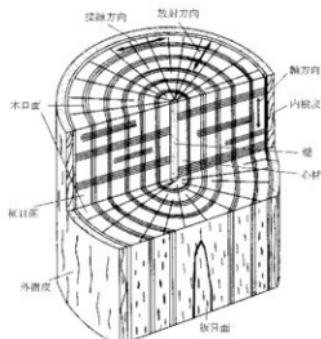


図 255 木材の基本方向と基本断面

深澤和三「樹体の解剖」1997 より転載（一部改変）

いざれの試料も仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞よりなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に点在する。分野壁孔はヒノキ型が見られる。放射組織は單列で1~8細胞高である。

**ヤナギ属** *Salix L.* 《ヤナギ科 Salicaceae》

〔植生分布〕 暖帯、温帯：北海道・本州・四国・九州

〔樹形〕 落葉高木または低木

2941（建築部材？）では直径約100 μm、その他は直径50~60 μmの管孔が単独ないし2~3個複合して、年輪内に均一に分布する散孔材。道管は單穿孔を有する。道管放射組織間壁孔は大きく篩状を呈し、放射組織は單列異性。

**クヌギ節** *Quercus L. Sect. Cerris Loudon* 《ブナ科 Fagaceae》

〔植生分布〕 暖帯：本州（岩手県、山形県以南）・四国・九州・沖縄

〔樹形〕 落葉高木。樹高15m、胸高直径60cmに達する

同定の結果、最も多くを占めた樹種である。堅穴建物9にともなう部材を含めると約66%がクヌギ節であった。本樹種の木材組織的特徴は直径約300 μmを超える大形の管孔が孔圈部に1~数列配列し、孔圈外において管孔の径が急激に減じる環孔材である。孔圈外における小道管は厚壁で円形を呈し、放射方向に並ぶ。道管は單穿孔。道管放射組織間壁孔は柵状を呈する。放射組織は平伏細胞よりなる同性で單列放射組織と広放射組織を有する。

**コナラ節** *Quercus L. Sect. Prinus Loudon syn.*

表7 八尾南遺跡

出土木製品の樹種

樹種	点数
ヒノキ	6 (0)
クヌギ節	167 (122)
アカガシ亜属	22 (12)
シイ属	20 (12)
コナラ節	12 (1)
クリ	2 (0)
ヤナギ属	5 (1)
ハイノキ属	3 (0)
ムクロジ	2 (0)
シャシャンボ	1 (0)
シャリンバイ	1 (0)
タイミンチバナ	1 (0)
ツバキ属	1 (0)
クワ属	1 (0)
同定不可	9 (7)
合計	253 (155)

\* ( ) 内は堅穴建物9にともなう  
木製品の出土数

《ブナ科 Fagaceae》

〔植生分布〕 温帯下部、暖帯：北海道・本州・四国・九州

〔樹形〕 落葉高木。樹高15m、胸高直径60cmに達する

直径300~350 μmの管孔が孔圈部に1~3列配列する環孔材。孔圈外において小道管は薄壁で角張っており放射状あるいは火炎状に集合して分布する。道管は單穿孔。放射組織は全て平伏細胞よりなる同性で單列放射組織と広放射組織を有する。

**アカガシ亜属** *Quercus L. Subgen. Cyclobalanopsis Oerst.*

《ブナ科 Fagaceae》

〔植生分布〕 暖帯：本州（宮城県、新潟県以南）・四国・九州

〔樹形〕 常緑高木。樹高20m、胸高直径70cmに達する

直径約150 μmの管孔が単独で放射方向に配列する放射孔材。道管は單穿孔。道管放射組織間壁孔は大型の柵状を呈する。放射組織は概ね平伏細胞よりなる同性で單列放射組織と広放射組織を有する。

**クリ** *Castanea crenata Sieb. et Zucc.*

《ブナ科 Fagaceae》

〔植生分布〕 温帯下部、暖帯：北海道（西南部）、本州・四国・九州

〔樹形〕 落葉高木。幹は直立し樹高17m、胸高直径80cmに達する

直径300 μm以上の管孔が孔圈部に配列し、漸次径を減じる環孔材。孔圈外では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。道管は單穿孔。放射組織は平伏細胞からなる同性で通常單列であるが、まれに2列となる。2911（板状木製品）は道管径約220 μm、2947（柱）は道管径約180 μmとやや小形であるがいざれも上記のクリの特徴が見られる。

シイ属 *Castanopsis* Spach

《ブナ科 Fagaceae》

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky

〔植生分布〕 暖帯、亜熱帯：本州（関東以西）・四国・九州・沖縄

〔樹形〕 常緑高木。樹高25m、径1.5 mに達する

スダジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky var. *Sieboldii* Nakai

〔植生分布〕 暖帯：本州（福島県、新潟県佐渡以南）・四国・九州・沖縄

〔樹形〕 常緑高木

シイ属はスダジイとツブラジイに分けられる。木材組織的な特徴において両者の識別は可能であるが試料の状態によって識別が困難なものはシイ属として括して記した。

ツブラジイは直径 250  $\mu\text{m}$  に達する管孔が孔圈部の接線方向に不連続に配列し、漸次径を減じて放射方向に集団をなす環孔性の放射孔材。晩材部では小型で薄壁の角張った小道管が集団をなし、しばしば火炎状に配列する。道管は單穿孔を有する。放射組織は平伏細胞よりなる同性で単列放射組織と、ときに集合放射組織が見られる。2886（用途不明木製品）、豊穴建物 6 出土の未掲載資料 1 点のほか、豊穴建物 9 関連部材の壁横 46~49、65、75、77にはツブラジイの典型的な特徴である集合放射組織が見られる。

スダジイは直径 200  $\mu\text{m}$  に達する管孔が孔圈部の接線方向に不連続に配列し、漸次径を減じて放射方向に集団をなす環孔性の放射孔材。晩材部では小型で薄壁の角張った小道管が集団をなし、しばしば火炎状に配列する。道管は單穿孔を有する。放射組織は平伏細胞よりなる同性で単列である。

クワ属 *Morus* L.

《クワ科 Moraceae》

〔植生分布〕 溫帶から亜熱帯：北海道・本州・四国・九州

〔樹形〕 落葉高木または低木。樹高12m、胸高直径60cmに達する

直径約 220  $\mu\text{m}$  の管孔が単独ないし 2~3 個複合し、1~5 列で孔圈を形成する環孔材。孔圈外において小道管は 2~6 個が斜線状、接線状に複合して散在する。小道管内壁にらせん肥厚が見られる。道管は單穿孔を有し、周囲状柔細胞が発達している。放射組織は異性で 1~6 細胞列。柾目面において平伏細胞と直立細胞が見られる。

ツバキ属 *Camellia* L.

《ツバキ科 Theaceae》

〔植生分布〕 暖帯：本州・四国・九州

〔樹形〕 常緑の低木または高木。樹高 5~6 m、高いものは 18m に達し、胸高直径 50cm に達する

2909（横柵状木製品）は直径約 40  $\mu\text{m}$  の管孔が単独または 2~3 個複合して年輪内に均一に分布する散孔材。管孔の径は、早材部で若干大きく晩材への移行とともに減じる傾向が見られる。道管は階段穿孔を有する。木織維壁はきわめて厚い。放射組織は異性で 1~3 細胞列。柾目面において平伏細胞と直立細胞が見られる。板目面において放射柔細胞内に結晶を確認することができる。

シャリンバイ *Rhaphiolepis indica* L.

《バラ科 Rosaceae》

〔植生分布〕 暖帯：本州（山形県、宮城県以西）・四国・九州・小笠原・沖縄

〔樹形〕 常緑の低木または小高木。樹高 1~4 m

直径約 30~40  $\mu\text{m}$  の管孔が年輪内に単独ないし 1~2 個複合して年輪内に均一に分布する散孔材。道管は單穿孔と階段穿孔を有する。放射組織は 1~2 細胞列で平伏細胞と方形細胞からなる異性である。柾目面と板目面において軸方向柔細胞内に結晶が見られる。道管放射組織間壁孔はやや大形である。

ムクロジ *Sapindus Mukorossi* Gaertn.

《ムクロジ科 Sapindaceae》

〔植生分布〕暖帯、亜熱帯：本州（中部以西）・四国・九州・沖縄

〔樹形〕落葉高木。樹高18m、胸高直径60cmに達する

2927（未製品）は直徑約170  $\mu\text{m}$  の管孔が年輪の初めに配列する。2928（用途不明木製品）は直徑約250  $\mu\text{m}$  の管孔が孔圈部に単独ないし2個複合して配列する。いずれも道管の隔壁は厚い。孔圈外では小道管が集合して散在する。小道管の内壁にらせん肥厚が見られる。軸方向柔組織は顕著で周間状、翼状を呈する。道管は單穿孔を有する。放射組織は1～3細胞列で平伏細胞よりなる同性である。

シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunberg

《ツツジ科 Ericaceae》

〔植生分布〕暖帯：本州（関東南部、東海道、石川県以西）・四国・九州

〔樹形〕常緑の低木または高木。樹高2～5m

堅穴建物1出土の木柵は直徑30～40  $\mu\text{m}$  の管孔が2～3個複合し、年輪内に均一に分布する散孔材。道管には單穿孔と階段穿孔が有り、階段の数が1本の本種特有の階段穿孔も見られる。放射組織は單列と多列とが存在し、單列は直立細胞からなる。また、多列放射組織は異性で6～8細胞列が多く時に10列が見られる。多列部の多くは平伏細胞よりなり上下縁辺部は直立細胞からなる。木繊維壁は厚壁でらせん肥厚が見られる。

タイミンタチバナ *Myrsine Seguinii* Lév.

《ヤブコウジ科 Myrsinaceae》

〔植生分布〕暖帯南部、亜熱帯：本州（千葉県以西）・四国・九州・沖縄

〔樹形〕常緑の大形低木または小高木。樹高10mに達する

直徑約50  $\mu\text{m}$  の管孔が単独ないし2～4個複合して年輪内に均一に分布する散孔材。道管は單穿孔を有する。放射組織は異性で1～13細胞列。柾目面において平伏細胞、方形細胞、直立細胞が見られる。

ハイノキ属 *Symplocos* Jacq.

《ハイノキ科 Symplocaceae》

クロバイ *Symplocos pruriifolia* Sieb. et Zucc.

〔植生分布〕暖帯：本州（関東地方以西）・四国・九州・沖縄

〔樹形〕常緑高木。大きいものは樹高10m、幹直徑30cm以上に達する

ハイノキ *Symplocos myrtacea* Sieb. et Zucc.

〔植生分布〕暖帯：本州（近畿地方以西）・四国・九州

〔樹形〕常緑の小高木

直徑30～40  $\mu\text{m}$  の管孔が単独あるいは2～4個複合して年輪内に均一に分布する散孔材。しばしばビスフレックが見られる。放射組織は柾目面において平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性で板目面において1～3列を有する。道管は階段穿孔を有し、道管放射組織間整孔は対列状を呈する。

2898（建築部材？）にはビスフレックが見られる。放射組織は1～2細胞列が多く、ハイノキに近い特徴を有する。2914（農具柄）は板目面における放射組織で1～3細胞列が多く見られクロバイの可能性が高い。

#### 4. 八尾南遺跡出土木製品の樹種傾向

同定を行なった253点中、針葉樹は古墳時代の井戸8より出土したヒノキ6点のみであり、そのほか弥生時代後期前半の遺構にともなう資料は全て広葉樹であった。まとまったデータを得られた、これら弥生時代の木製品の樹種傾向を見ると、先ず注目されるのは、クヌギ節（167点）が全体の約66%を占め突出して多い点である。続くアカガシ亜属（22点）、シイ属（20点）、コナラ節（12点）にクリ（2

点)を加えるとブナ科の樹種は全体の約88%となる。先学による研究の蓄積によって、弥生時代の河内平野から出土する木製品において、ブナ科の材が優占することはすでに知られているが、今回同定を行なった資料中に針葉樹材が確認されなかった点は興味深い。木製品の出土数を造構別の内訳でみると竪穴建物9にともなう部材・製品が155点と最も多く、流路3から25点、貯木造構1から15点、井戸10から5点、その他の建物造構において44点となる(表8~12)。貯木造構や流路、井戸からの出土材にも建築部材と考えられる加工木が含まれており、こうした状況から八尾南遺跡より出土した木製品の特徴として、建築部材あるいはその可能性が高い部材の割合が大きい点を上げることが出来る。この点を踏まえたうえで、本遺跡より出土した木製品の樹種について、建築部材とその他の器種に分けて概観する。

#### (1) 建築部材の樹種

杭材など加工が行なわれた割合の少ない材が遺跡の近隣から入手されたと考えられることは、近年報告された瓜生堂遺跡における木製品と自然木の樹種同定結果に基づく分析から中原氏らによって指摘されている<sup>2)</sup>。八尾南遺跡周辺の弥生時代中期から後期を中心とした遺跡において、建築部材および杭材などの土木材が比較的まとまって出土した事例を検討すると、建築部材の樹種傾向は土木材のそれに一致する傾向が見られる。先述のように、各遺跡におけるブナ科の樹種は建築部材と土木材のいざれにおいても共通して見られ、出土数は他の樹種を上回る傾向にある。しかし、より詳細に検討すれば鬼虎川遺跡では、第5次調査によって確認されたアカガシ亜属の杭材を除けば、ブナ科の材が圧倒的に他の樹種を凌駕するまでには至っていない<sup>3)</sup>。同遺跡の第7次調査では弥生時代中期の掘立柱建物にともなう柱材の樹種が明らかにされており、これによって柱材にはアカガシ亜属やコナラ節などブナ科の材のはかにクスノキやシャンボ、サカキ、モミ属、マツ属などが用いられる<sup>4)</sup>。鬼虎川遺跡ではこれら異なる樹種の材を同一建物に使用しており、同様の状況は若江北遺跡にも見ることができる。ただし、樹種の構成はコナラ節とヤマグワ(クワ属)が多く、クヌギ節、タブノキ、ヒノキ、マツ属が加わり鬼虎川遺跡とは異なる傾向が見られる<sup>5)</sup>。このような建物造構にともなう柱材の樹種傾向の違いは用材の入手先である集落近隣における植生の違いを反映していると考えられ、杭材などの土木材と同じ地域から材を入手していたことを予想させる。八尾南遺跡では竪穴建物2・5・6において主柱にクヌギ節材が用いられており、掘立柱建物にはクヌギ節のほかにコナラ節、アカガシ亜属、クリを確認することができた。いずれの樹種も周辺の他遺跡において柱材として利用されるものであるが、若江北遺跡や鬼虎川遺跡では針葉樹も含めてブナ科以外の材が用いられているのに対し、本遺跡ではブナ科の樹種に限定されている点で特徴的である。

八尾南遺跡で出土した建築部材には柱材のほかに梯子がある。梯子は、竪穴建物9の壁際に据付けられた状態で検出され(2900)、樹種はコナラ節である。後述するように、竪穴建物9には柱材が残存せず、壁溝や中央土坑に伴う部材の樹種にはクヌギ節、アカガシ亜属、シイ属と限られており、コナラ節は梯子のみに用いられていた。周辺遺跡における梯子の樹種には宮ノド遺跡でトネリコ属<sup>6)</sup>、西岩田遺跡でサカキ<sup>7)</sup>、巨摩庵寺遺跡でモミ属<sup>8)</sup>、瓜生堂遺跡でヒサカキ<sup>9)</sup>がそれぞれ確認されている。

各遺跡におけるこれらの樹種は杭材としても用いられていることから、ここでも杭材の樹種傾向と一致する傾向が見られる。なお、竪穴建物1の排水施設として木樋(未掲載資料)に用いられていたシャンボや、そのほかムクロジ、ヤナギ属も周辺遺跡では杭材などとしての出土事例が確認されており比較的入手しやすい材であったと考えられる。

## (2) そのほかの器種に用いられた樹種

建築部材を除き、用途を推定し得る資料は限られておりブナ科以外に確認された樹種も少ない。これまでの研究によって用材の傾向を知り得る器種として横樋が出土している。八尾南遺跡では井戸10より出土した棒状木製品(2916)にツバキ属を用いており、同様の事例は瓜生堂遺跡、恩智遺跡<sup>10)</sup>、巨摩磨寺遺跡に見られるほか、池上遺跡<sup>11)</sup>でも確認されている。また、流路3より出土した鋤？(2932)あるいは泥除け(2930)にアカガシ亜属が用いられている点も従来知られている用材選択の傾向に合致している。一方堅穴建物9より出土した木鍤(2904)にはクヌギ節が用いられるが、周辺の遺跡では若江北遺跡でアカガシ亜属、亀井遺跡でエノキ、西岩田遺跡ではカヤを用いた事例が報告されている。樹種が確認されている事例は限られているが、木鍤の用材選択には横樋ほど明確な傾向が見られず、近隣において入手し易い材のなかで比較的堅硬で重い樹種が選択されたと考えられる。

## 5. 堅穴建物9にともなう部材の樹種

堅穴建物9では柱材等主要な構造材は残されていなかったものの、建物内部の壁溝や中央土坑および排水溝の構造を知り得る部材が一括して良好な状態で出土した。調査の結果、本建物では少なくとも一度の改修工事が行なわれたと考えられており、改修前の遺構面から壁溝を廻る横木材の一部が(以後堅横材と略)、改修後の遺構面からは壁横材および中央土坑、排水溝施設部材が検出されている。これら150点について行った樹種同定の結果と、部材の断面形状から理解される木材の分割方法、さらには出土状況等から建物内施設構築時の木材利用について検討する。

### (1) 改修前遺構(壁溝壁横材) (図256)

建物を廻る壁溝の南面と北面および西面の排水溝付近において壁横材23点が検出された。部材は全てクヌギ節である。南面には樹皮が残存する心持ち材(枝状の材)と半截材が用いられるのに対し、北面では分割材を中心に用いている。このうちNo15～No20には外樹皮こそ残存していないものの、一部に内樹皮が残り、丸木を放射方向にミカン割りした後に、髓付近を割り取った心去り材と考えられる。心持ち材の直径は1.5～2.5cmであるのに対して半截材の直径は3～4cmと若干太く、材を半截することによって法量を揃えようとした意識がみられる。また、北面の心去り材も多くは幅と厚さが2～3cmを測り近似値に加工されている。

### (2) 改修後遺構(壁溝壁横材) (図257)

建物を廻る壁横材106点と中央土坑および排水溝にともなう施設材21点が検出された。樹種同定の結果、壁横材はクヌギ節が77点と最も多く、アカガシ亜属12点、シイ属12点(ツブライ 8点含む)、同定不可(いずれも広葉樹)は7点であった。アカガシ亜属とシイ属を用いた部材は建物の北面にのみ使われており、すべてミカン割り材である。両樹種とも部材の法量は幅が2cm前後と近似値を得るのに対し、厚さは0.5～2.5cmとややばらつきがある<sup>12)</sup>。部材の幅の長さから復元直径4～5cmほどの丸木を割ったと考えられる(図258)<sup>13)</sup>。一方、クヌギ節の壁横材は東面と西面、および南面の3面と北面の一部に用いられている。出土状況を検討した結果ミカン割り材は建物の南東隅と北西隅を境にして北東側に集中しているのに対し、心去り材は対面する南西側に集中する。また心持ち材と半截材はこれらの境界付近に用いられており、いずれも直徑約2～3cmの枝状の材である(18、19、21、84)。心去り材の多くは柵目取りで、一部に樹皮が残存するものはミカン割り材の間に点在する(24、31、39)。これは改修前の壁横材と同様に、丸木をミカン割りした後に髓付近を割り取ったと考えられる。図258に示した壁横材の法量からはミカン割り材が用いられる建物北東側においてクヌギ節の部材とシイ属、アカガシ

亜属の部材の法量が若干異なることが分かる。建物東側のクヌギ節を用いたミカン割り材は幅3~4cmが多いのに対し、北面の材は2cm前後に集中している。このことからクヌギ節は直径7cm前後、シイ属とアカガシ亜属は直径4cm前後の丸木材を割ったと考えられる。さらにこれらミカン割り材の幅（丸木の半径に相当）が近似値を示すことによって、同じ材から割ったことが予測される。なお、ミカン割り材の法量が近似値を示すのに対し、心去り材の法量には若干ばらつきがある。使用された原木の直径を復元することは難しいが、木口面における年輪の状態や部材の幅値（放射方向の長さ）が2~4cmほどであることから、ミカン割り材に用いられた丸木よりも太く、少なくとも直径6cm以上の材を加工した

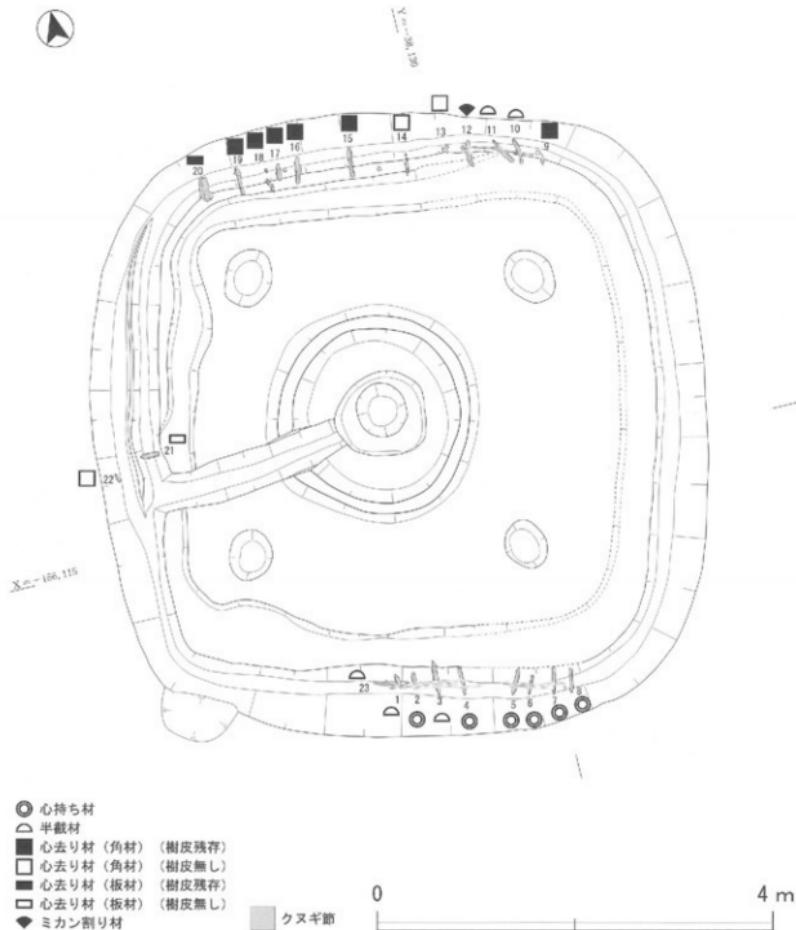


図256 壁穴建物9（改修前遺構面）建物内部施設材の樹種と木取り

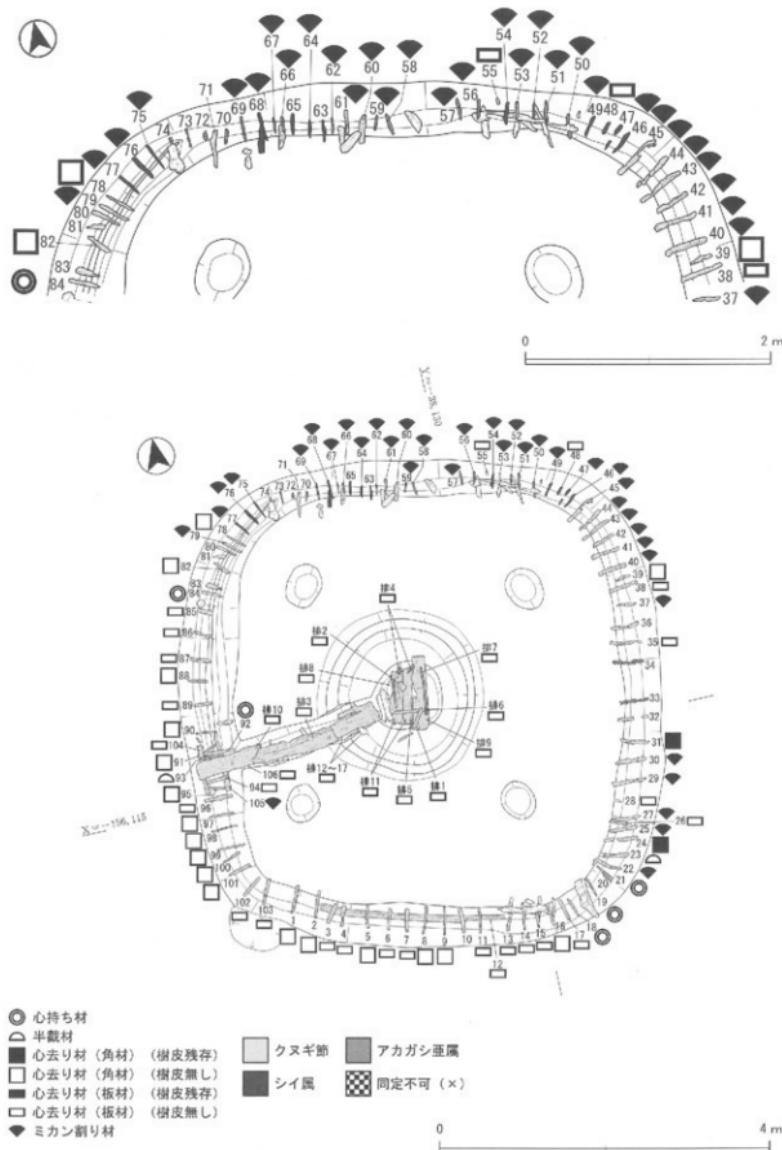


図 257 積穴建物 9（改修後遺構面）建物内部施設材の樹種と木取り

ことが考えられる。

### (3) 改修後遺構（中央土坑・排水溝施設材）（図256）

中央土坑とそれに付属する排水溝の施設材はすべてクヌギ節である。大半の木取りは柾目取りで放射方向に薄く割り、板材としている。排水溝施設材No.1、6、7の部材にはミカン割りの後に髓付近を割り取った状態をみることができる。No.2の木取りは追柾目で辺材部分を用いており、一部に内樹皮が残存している。排水溝施設材として用いられた部材は木取りに共通性があるものの法量にはばらつきがある。このうち、排水溝上の蓋板（No.3、10）と中央土坑内の木棒底板（No.9、11）が幅18~23cmと最も大きい。これらの部材には樹皮と髓は残されておらず、原本の直径を復元することは困難であるが、板材の幅から少なくとも直径は40cmを越えると推定される。本遺跡の木製品中では、流路3より出土した板状木材（2936・2937）と竪穴建物6の周壁内壁の建築部材（2897・2899）とが同じくクヌギ節材であり、やはりこうした大径材を利用したものである。

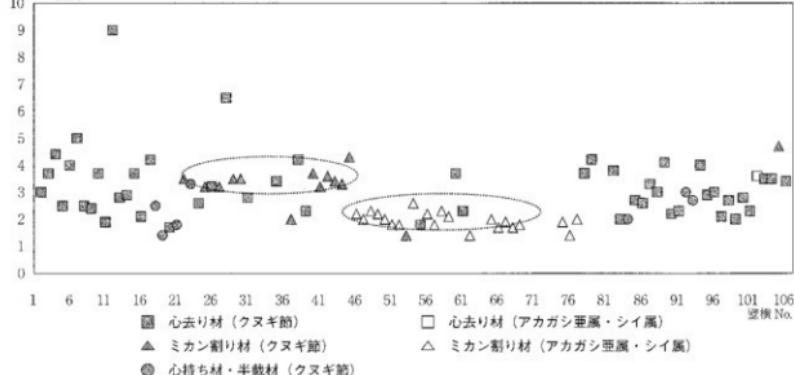
### (4) 竪穴建物9の施設部材による木材利用

壁溝および中央土坑、排水溝より出土した部材の樹種と木取りの検討によって以下の知見を得ることができた。

- ① 部材の樹種はクヌギ節を主とし、シイ属、アカガシ亜属は建物の一部にのみ用いられる。これらの中にはクヌギ節と他の2樹種とで分布に偏りがある（北面ではクヌギ節の出土数は少なく、シイ属とアカガシ亜属の部材が主体となる）
- ② 壁横材の木取りには心持ち材、半截材、ミカン割り材、心去り材があり、それぞれ出土位置に連続性が見られる
- ③ ミカン割り材は樹種ごとに部材の幅が近似値を示すことから、小径の丸木をその場で割って用いたとも考えられ、作業工程の連続性が見られる
- ④ 建物の西面と南面から出土する心去り材の法量は概ね近い値を有しており、これらが一括して割られた可能性もある。部材の状態から、東面のミカン割り材を上回る直径の材より割り取られたと

幅(部材放射方向)

(cm)



考えられる

⑤ 排水溝施設材には一部に直径40cmを越える大径材より割り取られた材が用いられる  
①～⑤により、壁溝および中央土坑、排水溝施設の構築について次の工程を想定することが可能である。すなわち壁溝では先ずクヌギ節材を一定の大きさに割り、建物南西側を中心に敷設する。建物の東面にはやや小径のクヌギ節材をミカン割りして配置する。北面はクヌギ節材を用いるが、多くはシイ属とアカガシ亜属によって補う。北面にのみシイ属とアカガシ亜属が使われた理由は明らかではないが、豊横材を敷設する過程においてクヌギ節材が不足したため応急的に他の樹種の枝材で代用されたとも考えられる。また、北面のみ何らかの理由で後に別材によって補強された可能性もある。さらに壁溝の施設部材における樹種と木取りからは建物内部施設の構築に作業の連続性を読み取ることができる。

## 6. 小結

八尾南遺跡より出土した木製品は農具や工具、容器など生活に係わる器種が少ない一方で、建物造構にともなう柱材など建築部材を多く含むという特徴を有する。樹種同定の結果、建物造構にともなう建築部材にはクヌギ節が最も多く、ほかにはコナラ節、アカガシ亜属、クリ、シイ属などブナ科の材に限られていた。クヌギ節は掘立柱建物や堅穴建物の柱材など主要な構造部材のほかに、堅穴建物9で検出された建物内部の施設材としても利用されている。

特に堅穴建物6と堅穴建物9の施設材では大径材をミカン割りして、板材として用いているほか、枝状の材を丸木または半截して利用するなど用途に応じて材を分割、加工していた状況を確認することができる。貯木造構や流路からもクヌギ節をはじめ、コナラ節、アカガシ亜属、シイ属の材が出土するが、伐採後樹皮を残したままの丸木(2921、2924ほか)や表面を荒く面取りした柱状の材(2925、2926、2933、2934ほか)、有頭棒状の材(2916ほか)などが主体である。流路3より出土した2936はクヌギ節の大径材をミカン割りして板状に加工したもので、上記の堅穴建物6や堅穴建物9の板材とは木取り・法量においても類似する。今回樹種同定を行なった資料中には、貯木造構や流路において、農具などの製作を目的としたアカガシ亜属の原材料や未製品は確認されておらず、大径材はクヌギ節のみであった。先にも述べたように堅穴建物9では中央土坑や排水溝施設にこうしたクヌギ節の板材が利用されているほか、壁溝施設の部材にも枝状材の端部のみを加工した丸木のほか半截材、ミカン割り材、心去り材など多様な加工段階を示す部材が施設構築作業の一連の流れを表すように出土している。このことから、貯木造構1より出土したクヌギ節をはじめとする加工木は伐採後保管され、施設部材等への利用など必要に応じて適当な材が選択され、作業工程に合わせてその場で加工されたとも考えられよう。最後に八尾南遺跡において、クヌギ節材は出土数の多さからも手近に入手が可能で、なおかつ利用度が高い樹種であったと考える。

一方で、先述のように今回同定を行なった木製品中、弥生時代後期の造構にともなう資料に針葉樹が含まれていなかったことは興味深い点である。同時期の河内平野の遺跡からは杭材や建築部材、用途不明板材等にしばしば針葉樹材が含まれる<sup>10</sup>。今回の結果が偶然によるものか、あるいは八尾南遺跡近隣の植生や木材入手の方法に起因するものか現段階で結論を出すことは難しい。今後、遺跡周辺の調査が進み、木製品の樹種に関するデータが蓄積されることによって解明されることを期待したい。

(財団法人元興寺文化財研究所 木沢直子)

## 註

- 1) 北村四郎、村田源 1979 「原色日本植物図鑑」木本編（I）（II）
- 2) 中原計・秋山浩三 2004 「樹種からみた集落環境と弥生木器生産－瓜生空 99-01 調査区における木製品・自然木の同定検討から－」『瓜生堂遺跡 1－考察・分析・写真図版編－』（財）大阪府文化財センター・調査報告書類 106 種
- 3) 林昭一・島地謙・植田弥生 1988 「IV. 出土木製品の樹種（第4次・5次）」『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ』遺物編 木製品（財）東大阪市・文化財協会
- 4) 伊東隆夫・林昭一・植田弥生 1984 「鬼虎川遺跡から出土した建築用材の樹種」『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3－遺構編－』（財）東大阪市・文化財協会
- 5) 畠谷巳三郎 1983 「6 東大阪市若江北遺跡 SB501 の炭化材と柱根」『若江北』近畿白動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会・（財）人阪文化財センター
- 6) バリノ・サーゲイ イルクス会社 1990 「6 出土木製品の樹種」『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』第1分冊 東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会
- 7) 松田隆嗣 1983 「第5節 西岩田遺跡出土木製品の樹種について」『西岩田』近畿白動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会・（財）人阪文化財センター
- 8) 松田隆嗣 1982 「V 瓜生堂・豆摩寺遺跡出土木製品の樹種について」『豆摩・瓜生堂』近畿白動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 （財）人阪文化財センター
- 9) 2) に同じ
- 10) 畠谷巳三郎 1980 「第7節 恩智遺跡から出土した木製品の樹種」『恩智遺跡』一級河川恩智川改修工事に伴う恩智遺跡発掘調査報告書 瓜生堂遺跡調査会
- 11) 松田隆嗣 1980 「木製遺物の樹種について」『池上・四ツ池遺跡第六分冊自然遺物』（財）大阪府文化財センター
- 12) 遺物北面から出土した壁掛材はいずれも土中での乾燥によってもろくなってしまった。出土木材は乾燥すると接線方向に大きく収縮する特性が見られることから、これらの部材は本来 1cm以上の厚みを有していたと考えられる。本稿ではこの点を踏み、各部材の法則を検討する際に接線方向の幅はあくまでも参考とし、放射方向の幅を中心に取り上げた。
- 13) 木遺物の施設部材の多くは断面形状と木取りの観察から木利を放射方向に分割するミカン割り法によって分割されたと考えられる。部材の幅の長さが放射方向の長さに相当するため、分割前の木材の直徑を推定する際に参考とすることができる
- 14) 2) において中原氏らは瓜生堂遺跡周辺の植生復元を行なっている。このなかで弥生時代後期～南北式期にかけてはクヌギ節、コナラ節、アカガシ節、シイ属が滋生する雰囲的な状況を想定し、二葉松類も多く見られることが指摘している

## 引用・参考文献

- 島地謙・伊東隆夫 1982 「図説木材編集」
- 林昭三 1991 「日本麻木材顯微鏡写真集」京都大学木質科学研究所
- 深澤和三 1997 「樹体の解剖」
- 伊東隆夫 1995 「日本麻木業樹材の解剖学的記載」 I 「木材研究・資料」第 31 号別刷 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1996 「日本麻木業樹材の解剖学的記載」 II 「木材研究・資料」第 32 号別刷 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1997 「日本麻木業樹材の解剖学的記載」 III 「木材研究・資料」第 33 号別刷 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1998 「日本麻木業樹材の解剖学的記載」 IV 「木材研究・資料」第 34 号別刷 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1999 「日本麻木業樹材の解剖学的記載」 V 「木材研究・資料」第 35 号別刷 京都大学木質科学研究所
- 岡本茂史 2005 「弥生時代における墳穴住居の構造」 2004 年度（財）大阪府文化財センター・日本民家集落博物館共同研究委員会「住居に関する総合的研究（3）」
- 正岡大実 2004 「八尾南遺跡の発掘調査について－弥生時代後期の遺構を中心に－」第 10 回近畿ブロック埋蔵文化財研究会資料集
- 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1993 「河内平野遺跡群の動態」 VI 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
- 東大阪市 1999 「瓜生堂遺跡・若江北・山賀遺跡発掘調査報告書－電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財分布地の調査報告」
- 大阪府教育委員会・財团法人大阪文化財センター 1987 「久宝寺南」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
- 飯塚武司 2004 「弥生時代の木器生産を巡る諸問題」『考古学研究』51 ~ 1

## 謝辞

樹種同定については伊東隆夫先生（京都大学名誉教授）より御教示を得た。サンプリングおよび永久プレパラートの作製には山本純子氏のご助力を得た。またサンプリング作業と資料の実見に際して正岡大実氏、鶴山まり氏より御協力と、本遺跡の調査概要全般については岡本茂史氏、正岡大実氏〔（財）大阪府文化財センター〕より御教示いただいた。最後となりましたが、以上の方々に記して感謝の意いたします。

## 付記

・樹種同定に関する一連の成果は岡本茂史氏、正岡大実氏（財团法人大阪府文化財センター）のご依頼を受け、木沢が平成18年度京都大学生存圈研究所生存圏データベース（材鑑調査室）共同利用研究※により行ったものである。樹種同定に用いた現生材標準標本はいずれも同室保管標準プレパラート（KY

Ow) に因っている。また顕微鏡写真撮影は同室施設を利用して行った。一部、走査型電子顕微鏡による炭化材の同定と写真撮影は元興寺文化財研究所の施設を利用した。

- \* 講題番号 ZAIKAN-11 「出土木製品から見た建物の構造と用材選択に関する研究」  
 ・作製した永久プレラートは全て(財)大阪府文化財センターに保管されている。  
 ・竪穴建物 6 および流路 3 より出土した木製品35点の樹種同定は中原計氏(徳島大学埋蔵文化財調査室)が行い、一部顕微鏡撮影を本沢が行った。

表8 出土木製品一覧表(1)

規範番	出土遺構	器種	時期	樹種	顕微鏡写真No.	備考
2876	井戸 8	刀形	古墳	ヒノキ	1	
2877	井戸 8	刀形	山塊	ヒノキ	2	
2878	井戸 8	刀形	内燃	ヒノキ	3	
2879	井戸 8	船形木製品	古墳	シャリソバ	4	
2881	井戸 8	気泡木製品	古墳	ヒノキ	5	
2882	井戸 8	炭化木製品	古墳	ヒノキ	6	
2886	井戸 8	川原小町木製品	古墳	フクジ	7	
2888	井戸 8	有縫縫	古墳	ヒノキ	8	
2893	井戸洗面 2・柱穴 1	柱	弥生	クヌギ	9	
2894	竪穴建物 5・柱穴 2	柱	弥生	クヌギ	10	
2895	竪穴建物 6・柱穴 1	柱	弥生	クヌギ	11	
2896	竪穴建物 6・柱穴 2	柱	弥生	クヌギ	12	
2897・2898	竪穴建物 6(壁面)	虎芦冠?	弥生	クヌギ	13・15	尚現向堅の執筆(西側)
2898	井戸洗面 6・目水導	埋蔵木材	弥生	ハイキノキ	14	
2900	竪穴建物 9	棒	弥生	コナラ	16	
2901	竪穴建物 9	埋蔵木製品	弥生	クヌギ	17	
2902	竪穴建物 9・柱穴 3	板柾	弥生	クヌギ	18	
2903	竪穴建物 9・柱穴 4	板柾	弥生	クヌギ	19	
2905	ピット 30	柱	弥生	クヌギ	20	
2904	竪穴建物 9	木棟	弥生	クヌギ	21	
2905	井戸 10	埋蔵木製品	弥生	ツルモ	22	
2910	井戸 10	板柾木製品	弥生	クヌギ	23	
2911	井戸 10	板柾木製品	弥生	タリ	24	
2912	井戸 10	神木木製品	弥生	クヌギ	25	
2913	井戸 10	埋蔵木材	弥生	クヌギ	26	
2914	(木)木造物:	漆喰	弥生	ハイノノキ	27	
2915	野木造物 1	神木木製品	弥生	シイ属	28	
2916	野木造物 1	神木木製品	弥生	シイ属	29	
2917	野木造物 1	神木木製品	弥生	クヌギ	30	
2918	野木造物 1	神木木製品	弥生	シイ属	31	
2919	野木造物 1	神木木製品	弥生	シイ属	32	
2920	野木造物 1	神木木製品	弥生	クヌギ	33	
2921	野木造物 1	神木や漆喰	弥生	クヌギ	34	
2922	野木造物 1	神木木製品	弥生	クヌギ	35	
2923	野木造物 1	土蔵	弥生	コラガ	36	
2924	野木床構 1	木棟品	弥生	コナラ	37	
2925	野木造物 1	木棟品	弥生	コナラ	38	
2926	野木造物 1	木棟品	弥生	ヤクモ	39	
2927	野木造物 1	木棟品	弥生	ムラロジ	40	
2928	流路 3	片道不明小輪品	弥生	ムラロジ	41	
2929	流路 3	石發揮	弥生	ムラロジ	42	
2930	流路 3	泡吹	弥生	アカシキ	43	
2931	流路 3	広葉樹頭部?	弥生	アカシキ	44	
2932	流路 3	広葉?	弥生	アカシキ	45	
2933	流路 3	神木木製品	弥生	クヌギ	46	
2934	流路 3	埋蔵木製品	弥生	クヌギ	47	
2935	流路 3	神木木製品	弥生	クヌギ	48	
2936・2937	流路 3	板柾木材	弥生	クヌギ	49・50	複数
2938	流路 3	板柾木材	弥生	クヌギ	51	
2939	流路 3	板柾木材	弥生	コナラ	52	
2940	吉路 3	埋材?	弥生	クヌギ	53	
2941	獨立立柱物 4・柱穴 2	柱	弥生	クヌギ	54	
2942	獨立立柱物 4・柱穴 3	柱	弥生	クヌギ	55	
2943	獨立立柱物 4・柱穴 4	柱	弥生	クヌギ	56	
2944	獨立立柱物 4・柱穴 1	柱	弥生	クヌギ	57	
2945	独立立柱物 6・柱穴 4	柱	弥生	コナラ	58	
2946	独立立柱物 14・柱穴 6	柱	弥生	コナラ	59	
2947	独立立柱物 14・柱穴 6	柱	弥生	タリ	60	
2948	独立立柱物 14・柱穴 3	柱	弥生	クヌギ	61	
2949	独立立柱物 14・柱穴 7	柱	弥生	コナラ	62	
2951	独立立柱物 19・柱穴 1	柱	弥生	コナラ	63	
2952	独立立柱物 19・柱穴 3	柱	弥生	クヌギ	64	
2953	独立立柱物 20・柱穴 1	柱	弥生	アカシキ	65	
2954	独立立柱物 20・柱穴 3	柱	弥生	アカシキ	66	

表9 出土木製品一覧表（2）

器物名	出土遺構	品種	時期	種類	認定駆逐具名	備考
2955	御守住御所 2 住六 6	住坐	住坐	タケシ鉄	67	
2956	御守住御所 2 大 1	凡	住坐	タケシ鉄	68	
未記載	櫛穴鍬形 8	片並刃木製	住坐	タブ端	69	
未記載	片並刃木製	住坐	シテ裏	70		
未記載	櫛穴鍬形・外型 8	住坐	ヤクナ瀬	71		
大刀鉗	笠小鉢形 1	住坐	シャンテン	72		
大刀鉗	中大鉢形 6	住坐	アカガシ直置	北村田辺の村 1		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	内置不釘	北村田辺の村 2		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	アカガシ直置	北村田辺の村 3		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	アカガシ直置	北村田辺の村 4		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	タブ平置	掛水内西面材 1		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	タブ平置	掛水内西面材 2		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	タブ平置	掛水内西面材 3		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	タブ平置	掛水内西面材 5		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	タブ平置	掛水内西面材 6		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	ハイノリ鉄	73	掛水内西面材 7	
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	アカガシ直置	掛水内西面材 8		
大刀鉗	笠小鉢形 6	住坐	フツラツイ	掛水内西面材 9		
未記載	笠小鉢形 6	住坐	タブ平置	五輪塔塔基 2 位付 1		
未記載	笠小鉢形 6	住坐	タミシミシチバナ	74	五輪塔塔基 2 位付 2	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置	同上	同上	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	コラチ鉄		同上	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	シテ裏		同上	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	コラチ鉄		北村田辺の村 1	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		北村田辺の村 2	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	アカガシ直置		北村田辺の村	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		桂	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 1	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 2	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 3	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 4	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 5	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 6	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 7	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 8	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置		立木または机 9	
未記載	柳葉鍬形 6	住坐	タブ平置	75	机	

表 10 壇穴建物 9 内部施設観察表（1）

被験名	No.	被験性別	年齢	身長 (cm)	体重 (kg)	厚さ (cm)	断面形状	木部材	先端部加工有無	樹皮	備考	構造	認識結果
愛理	愛理	1	445	24	17	台形	枝目	欠損のため不規	—	肉付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	2	421	30	15	台形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	角付タイプ	クメギョウ		
愛理	愛理	3	360	37	12	長方形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	枝付タイプ	クメギョウ	76	
愛理	愛理	4	—	44	9.5	長方形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	現付タイプ	クメギョウ	77	
雅理	雅理	5	—	25	12	台形	枝目	欠損のため不規	—	角付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	6	335	40	12	長方形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	7	228	50	10	長方形	枝目	欠損のため不規	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	8	405	25	13	台形	枝目	欠損のため不規	—	角付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	9	405	24	15	台形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	角付タイプ	クメギョウ	78	
雅理	雅理	10	340	37	0.8	枝目	—	欠損のため不規	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	11	386	19	0.7	長方形	枝目	欠損のため不規	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	12	2560	40	18	長方形	枝目	欠損のため不規	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	13	225	28	0.9	長方形	枝目	欠損のため不規	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	14	217	29	0.7	長方形	枝目	欠損のため不規	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	15	149	37	0.6	長方形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	16	340	21	13	台形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	角付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	17	342	42	0.7	長方形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	18	290	25	17	圓錐形	心材部分	枝状に穴をもつ(角を落とす) (4箇所)	枝付	枝付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	19	225	14	13	円形	心材部分	欠損のため不規	残存	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	20	—	17	0.8	—	枝目	欠損のため不規	残存	現付タイプ	クメギョウ		
愛理	愛理	21	198	18	18	圓錐	心材部分	欠損のため不規	枝付	枝付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	22	410	25	18	ミカタ型	枝目	欠損のため不規	残存	クメギョウ			
雅理	雅理	23	235	33	1.5	半円形	子葉	欠損のため不規	残存	枝付タイプ (赤褐色化)	クメギョウ		
雅理	雅理	24	261	26	12	台形	枝目	欠損のため不規	残存	肉付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	25	—	32	2.6	ミカタ型	枝目	欠損のため不規	残存	クメギョウ			
雅理	雅理	26	268	32	0.6	長方形	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	27	220	33	1.8	ミカタ型	枝目	欠損のため不規	—	現付(赤褐色化)	クメギョウ		
雅理	雅理	28	270	6.5	12	長方形	枝目	欠損のため不規	—	現付タイプ	クメギョウ		
雅理	雅理	29	445	35	11	ミカタ型	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	残存	クメギョウ			
雅理	雅理	30	—	35	0.8	ミカタ型	枝目	枝状に穴をもつ(角を落とす)	残存	クメギョウ			

表 11 壁穴建物 9 内部施設観察表 (2)

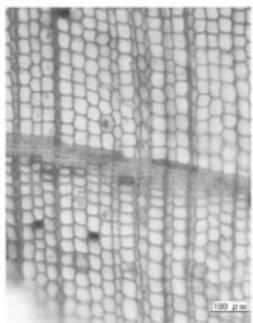
施設名	No.	既存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	断面形状	木取り	先端部加工有無	座位置	備考	坐標	測定箇所 等級No.
壁構	壁構 31	338	28	12	凸形	板目	欠損のため不明	既存	丸材タイプ	クメギ第	80
壁構	壁構 32	—	—	0.5	—	—	欠損のため不明	—	原形復元不可能	クメギ第	81
壁構	壁構 33	—	—	0.2	—	—	欠損のため不明	—	表拌のみ残存、 裏側削り欠け跡	同定不可	
壁構	壁構 34	—	—	0.1	—	—	欠損のため不明	—	裏拌のみ残存、 裏側削り欠け跡	内窓不可	
壁構	壁構 35	—	34	0.6	長方形	板目	欠損のため不明	—	板材タイプ、 原形復元不可能	クメギ第	
壁構	壁構 36	—	—	0.1	—	—	欠損のため不明	—	裏拌のみ残存、 裏側削り不可能	クメギ第	
壁構	壁構 37	180	20	0.9	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	—	クメギ第	
壁構	壁構 38	414	42	0.5	長方形	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	—	丸材タイプ	クメギ第	
壁構	壁構 39	126	23	0.5	長方形	板目	既存のため不明	既存	板材タイプ	クメギ第	81
壁構	壁構 40	425	37	1.5	ミカン型	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	クメギ第		
壁構	壁構 41	445	32	1.2	ミカン型	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	クメギ第		
壁構	壁構 42	315	36	1.2	ミカン型	板目	既存のため不明	既存	クメギ第		
壁構	壁構 43	255	34	1.5	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	クメギ第		
壁構	壁構 44	115	35	2.1	ミカン型	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	クメギ第		
壁構	壁構 45	225	12	1.4	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	クメギ第		
壁構	壁構 46	256	22	0.6	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	—	—	クメギ第	
壁構	壁構 47	130	20	0.6	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	クメギ第	
壁構	壁構 48	178	23	0.5	長方形	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	—	板材タイプ、 熟成(表面軟化)	クメギ第	
壁構	壁構 49	225	22	0.9	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	クメギ第	82
壁構	壁構 50	90	20	0.7	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	—	アカガシ直属	
壁構	壁構 51	125	18	0.9	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	アカガシ直属		
壁構	壁構 52	186	18	1.1	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	アカガシ直属		
壁構	壁構 53	216	14	1.2	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	クメギ第		
壁構	壁構 54	234	26	0.9	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	シイ直	83
壁構	壁構 55	90	18	0.4	長方形	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	—	丸材タイプ	クメギ第	
壁構	壁構 56	215	22	1.3	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	アカガシ直属	84
壁構	壁構 57	195	18	0.6	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	アカガシ直属	
壁構	壁構 58	208	23	0.9	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	アカガシ直属	
壁構	壁構 59	155	21	0.9	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	—	アカガシ直属	85
壁構	壁構 60	200	37	1.4	ミカン型	板目	欠損のため不明	—	—	クメギ第	
壁構	壁構 61	216	23	0.5	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	クメギ第	
壁構	壁構 62	120	14	0.5	ミカン型	板目	欠損のため不明	既存	—	アカシ直属	
壁構	壁構 63	—	18	0.3	—	—	欠損のため不明	—	—	シイ直	
壁構	壁構 64	—	13	0.2	—	—	欠損のため不明	—	—	原形復元不可能	
壁構	壁構 65	195	20	0.2	ミカン型	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	—	シイ直	86
壁構	壁構 66	130	17	0.5	ミカン型	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	—	アカガシ直属	
壁構	壁構 67	115	19	0.6	ミカン型	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	—	アカガシ直属	
壁構	壁構 68	243	17	0.6	ミカン型	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	—	シイ直	87
壁構	壁構 69	220	18	1.1	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	アカガシ直属	
壁構	壁構 70	—	21	0.2	—	—	欠損のため不明	—	表面のみ残存、 原形復元不可能	同定不可	
壁構	壁構 71	—	25	0.5	—	—	欠損のため不明	—	表面のみ残存、 原形復元不可能	クメギ第	
壁構	壁構 72	—	23	0.2	—	—	欠損のため不明	—	表面のみ残存、 原形復元不可	同定不可	
壁構	壁構 73	—	16	0.1	—	—	欠損のため不明	—	欠損のため不可	アカガシ直属	
壁構	壁構 74	—	16	0.1	—	—	欠損のため不明	—	表面のみ残存、 原形復元不可	同定不可	
壁構	壁構 75	210	19	1.3	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	板材(既存状)	クメギ第	88
壁構	壁構 76	165	14	0.5	ミカン型	板目	欠損のため不明	—	—	シイ直	
壁構	壁構 77	254	20	1.3	ミカン型	板目	既存を既存に穴あらせる (角を落とす)	既存	—	クメギ第	
壁構	壁構 78	308	37	2.5	長方形	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	—	丸材タイプ	クメギ第	
壁構	壁構 79	200	42	0.9	ミカン型	板目	欠損のため不明	—	—	クメギ第	
壁構	壁構 80	—	14	0.3	—	—	欠損のため不明	—	原形復元不可	クメギ第	
壁構	壁構 81	—	19	0.5	—	—	欠損のため不明	—	原形復元不可	クメギ第	
壁構	壁構 82	118	28	2.0	三角形	板目	既存に穴あらせる(角を落とす)	既存	丸材タイプ	クメギ第	89
壁構	壁構 83	—	20	0.5	—	—	欠損のため不明	—	原形復元不可能	クメギ第	
壁構	壁構 84	315	20	1.5	円形	心地木材	両端を既存に穴あらせる (4箇)	既存	板材タイプ、 熟成(表面軟化)	クメギ第	
壁構	壁構 85	133	27	0.3	ミカン型	板目	欠損のため不明	—	—	クメギ第	

表 12 穴穴建物 9 内部施設観察表 (3)

造構名	No.	現存高	幅	厚さ	断面形状	木取り	先端部加工有無	樹皮	備考	樹種	樹高 写真No.		
壁構	壁構 86	298	26	0.5	以方形	粗目	先頭のため不明	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 57	292	33	0.6	方木筋	粗目	欠損のため不明	—	樹材タイプ	クヌギ類	90		
壁構	壁構 88	276	30	1.5	台形	粗目	先端にため不明	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 89	218	41	0.4	以方形	粗目	欠損のため不明	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 90	290	22	2.9	台形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 91	340	23	1.0	台形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 92	260	39	0.7	椎円形	粗目	—	残存	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 93	203	22	0.6	円形	粗目	先端にため不明	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 94	350	49	0.3	以方形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	樹材タイプ	クヌギ類	91		
壁構	壁構 95	333	29	2.1	円形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 96	365	38	0.8	方木筋	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 97	343	21	1.7	円形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 98	370	17	1.0	台形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	樹材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 99	380	20	1.5	台形	粗目	画面を横に見せせる(角を落とす)	—	角材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 100	326	28	1.2	台形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 101	560	23	1.0	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 102	365	36	0.7	長方形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材タイプ	クヌギ類	92		
壁構	壁構 103	330	23	1.0	長方形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 104	638	35	1.0	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 105	824	47	1.0	ミカド形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 106	290	24	0.6	ミカド形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材タイプ	クヌギ類	93		
壁構	壁構 107	135	34	1.3	十四型	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	クヌギ類		
壁構	壁構 108	224	24	2.1	内円形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	板材タイプ	クヌギ類	
壁構	壁構 109	333	36	1.6	内円形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	板材タイプ	クヌギ類	
壁構	壁構 110	330	22	2.2	内円形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	板材タイプ	クヌギ類	94
壁構	壁構 111	265	25	1.8	内円形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	板材タイプ	クヌギ類	95
壁構	壁構 112	203	26	2.2	内円形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	板材タイプ	クヌギ類	
壁構	壁構 113	267	20	2.0	内円形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	板材タイプ	クヌギ類	
壁構	壁構 114	240	23	2.3	内円形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	板材タイプ	クヌギ類	96
壁構	壁構 115	345	34	1.6	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	角材タイプ	クヌギ類	
壁構	壁構 116	275	45	2.5	円形	手取	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	角材タイプ	クヌギ類	
壁構	壁構 117	290	38	1.7	十四型	手取	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	角材タイプ	クヌギ類	
壁構	壁構 118	245	35	1.8	内円形	手取	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	角材タイプ	クヌギ類	98
壁構	壁構 119	290	30	3.0	内円形	手取	板状に劣化する(角を落とす)	—	角材のため不明	残存	角材タイプ	クヌギ類	99
壁構	壁構 120	305	93	2.0	長方形	粗目	—	—	板材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 121	226	43	1.0	長方形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 122	270	21	1.4	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材タイプ	クヌギ類			
壁構	壁構 123	294	32	1.3	内円形	手取	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材タイプ	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 1	325	47	1.0	長方形	粗目	板状を横に見せせる(角を落とす)	—	板材タイプ	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 2	80	9.5	2.8	方木筋	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材の軸用	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 3	1730	190	3.9	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材の軸用	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 4	110	29	1.4	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材の軸用	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 5	—	26	1.6	以方形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材の軸用	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 6	420	45	2.4	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板材の軸用	クヌギ類	100		
中央土坑	排水溝 7	640	35	1.2	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	木棒(束)	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 8	310	31	2.1	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	木棒(束)	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 9	950	180	2.2	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	木棒(束)	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 10	860	216	2.2	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	木棒(束)	クヌギ類	101		
中央土坑	排水溝 11	790	238	0.9	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	木棒(束)	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 12	260	47	2.0	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	木棒(束)タイプ	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 13	—	—	—	—	—	板状の材	—	開穴不可				
中央土坑	排水溝 14	78	41	1.2	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板木	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 15	365	50	1.5	杏形	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板木	クヌギ類	102		
中央土坑	排水溝 16	—	65	0.6	方木筋	粗目	板状に劣化する(角を落とす)	—	板木	クヌギ類			
中央土坑	排水溝 17	—	—	—	—	—	板溝の材	—	開穴不可				
中央土坑	排水溝 18	—	—	—	—	—	板溝の材	—	開穴不可				
中央土坑	排水溝 19	—	—	—	—	—	板溝の材	—	開穴不可				
中央土坑	排水溝 20	—	—	—	—	—	加工品	—	加工品	クヌギ類	104		
中央土坑	排水溝 21	—	—	—	—	—	加工品	—	加工品	マツキ類	105		

図版9 跳微鏡写真(1)

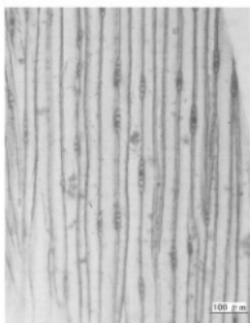
No 1



木口面

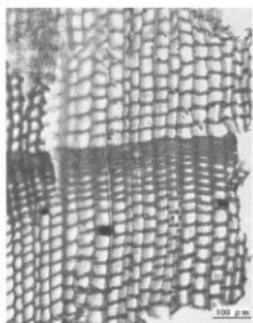


柾目面



板目面

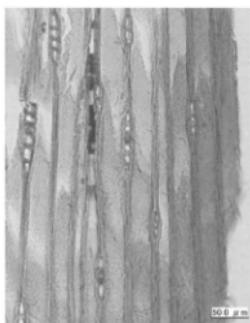
No 2



木口面

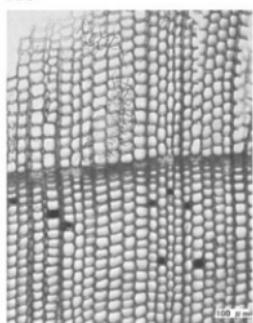


柾目面

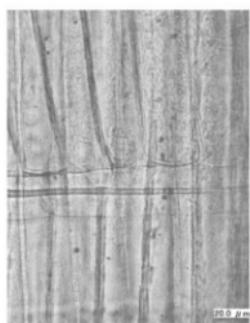


板目面

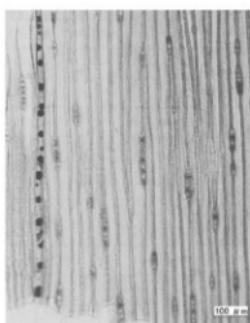
No 3



木口面



柾目面

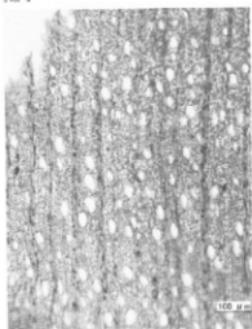


板目面

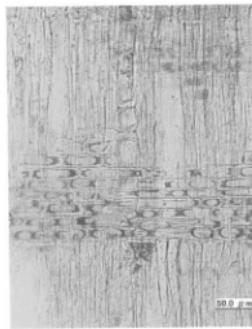
顕微鏡写真No.	出土遺構	搭載No.	器種	樹種
No 1	井戸 8	2876	刀形	ヒノキ
No 2	井戸 8	2877	刀形	Chamaecyparis obtusa Sieb. et Zucc.
No 3	井戸 8	2878	刀形	Chamaecyparis obtusa Sieb. et Zucc.

図版10 頭微鏡写真(2)

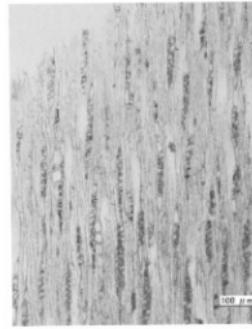
No.4



木口面

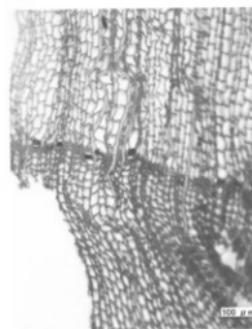


柾目面

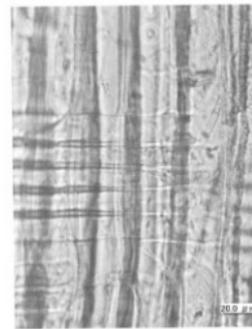


板目面

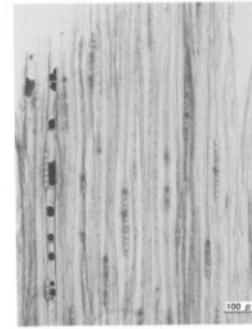
No.5



木口面

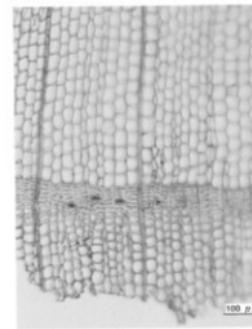


柾目面



板目面

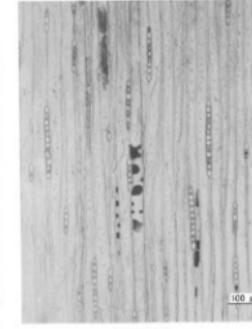
No.6



木口面



柾目面

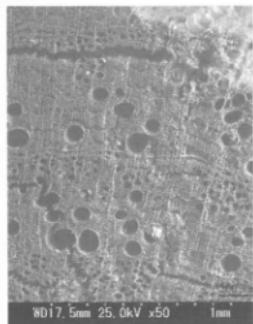


板目面

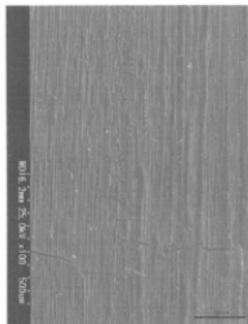
頭微鏡写真No.	出土遺構	捲戻No.	器種	樹種
No.4	井戸8	2879	船形木製品	<i>Rhaphiolepis indica</i> L.
No.5	井戸8	2881	板状木製品	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Sieb. et Zucc.
No.6	井戸8	2882	丸状木製品	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Sieb. et Zucc.

図版11 頸微鏡写真(3)

No.7

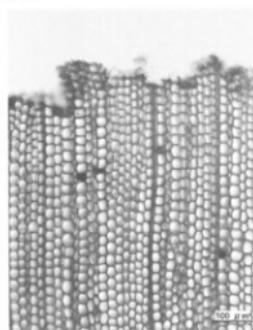


木口面

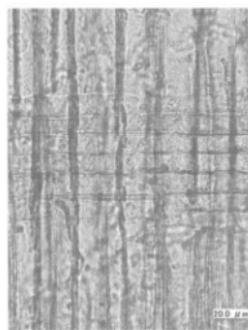


板目面

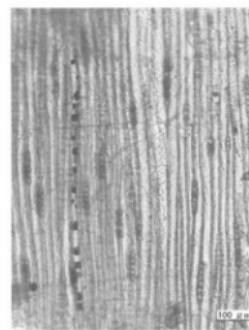
No.8



木口面

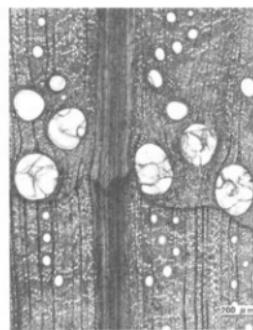


板目面



板目面

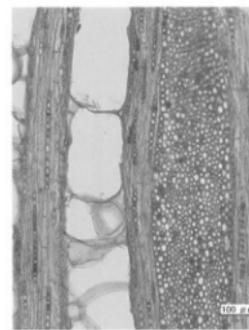
No.9



木口面



板目面



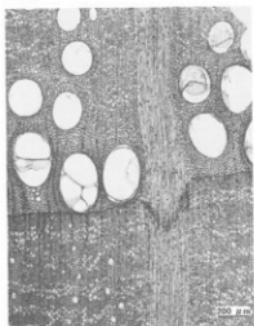
板目面

顕微鏡写真No.	出土遺構	掲載No.	器種	樹種
No.7	井戸8	2886	用済不明木製品	ツブライ
No.8	井戸8	2888	有隙様	ヒノキ
No.9	壁穴建物2	2893	往	クヌギ

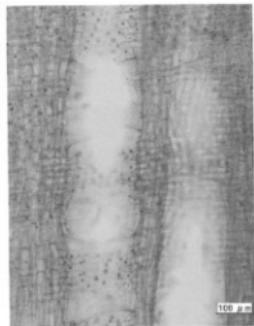
*Castanopsis cuspidata* Schottky  
*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc.  
*Quercus* L. Sect. *Cerris* Loudon

図版12 頸微鏡写真(4)

No.10



木口面



板目面



板目面

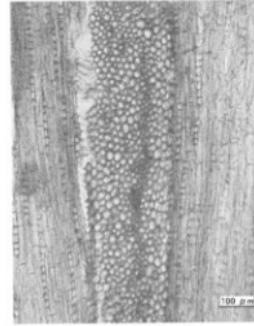
No.11



木口面

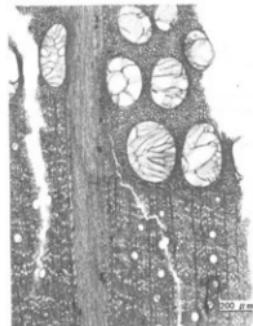


板目面



板目面

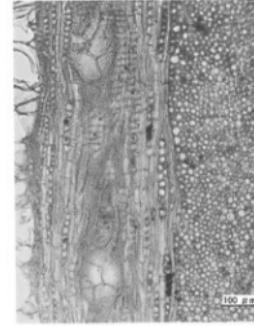
No.12



木口面



板目面

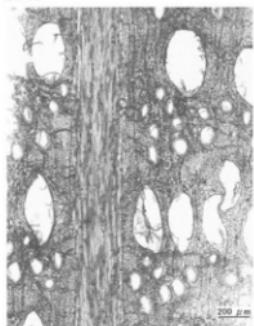


板目面

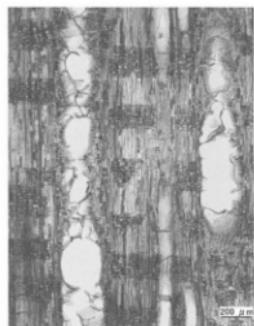
顕微鏡写真No.	出土遺構	周載No.	器種	樹種
No.10	堅穴建物 5	2894	柱	クスギ節
No.11	堅穴建物 6	2995	柱	クスギ節
No.12	堅穴建物 6	2996	柱	クスギ節

図版13 顕微鏡写真(5)

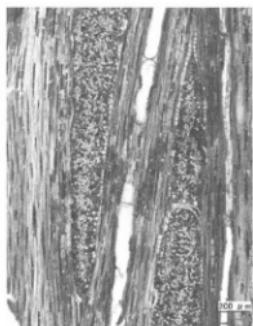
No.13



木口面

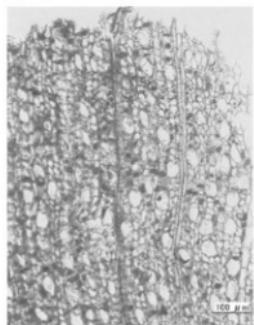


板目面

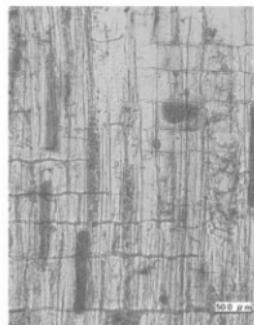


板目面

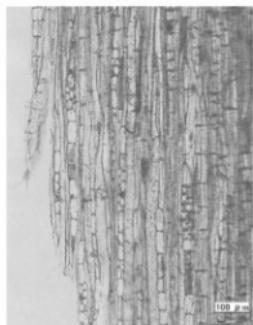
No.14



木口面

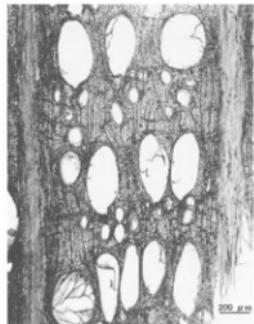


板目面



板目面

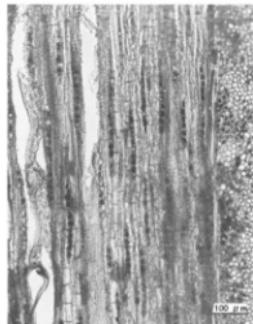
No.15



木口面



板目面

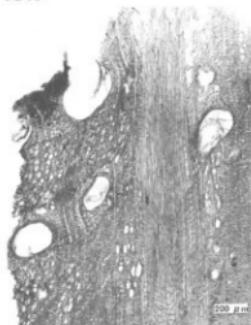


板目面

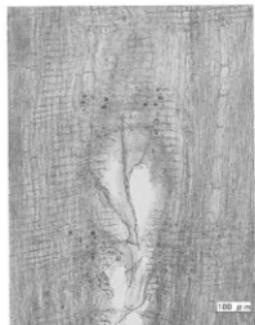
顕微鏡写真No.	出土遺構	撮影No.	器種	樹種
No.13	多穴埴物6(櫻型)	2897	鉢底部材?	クヌギ筋 <i>Quercus L. Sect. Cerris Loudon</i>
No.14	多穴埴物6-桺木床	2898	鉢底部材?	ハイノキ属 <i>Symplocos Japo.</i>
No.15	多穴埴物6(櫻型)	2899	鉢底部材?	クヌギ筋 <i>Quercus L. Sect. Cerris Loudon</i>

図版14 頸微鏡写真(6)

No.16



木口面



板目面



板面

No.17



木口面

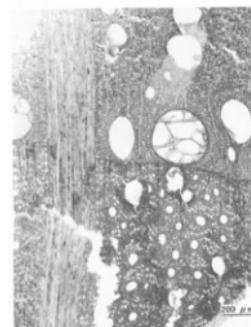


板目面



板面

No.18



木口面



板目面

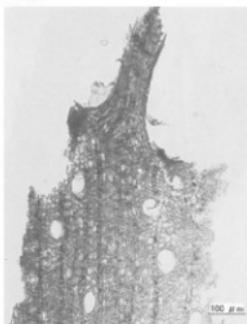


板面

顎微鏡写真No.	出土遺構	揭露No.	器種	樹種
No.16	櫻穴建物 9	2900	桃子	コナラ節 <i>Quercus L. Sect. <i>Prinus</i> Loudon syn.</i>
No.17	櫻穴建物 9	2901	楓樹材製品	クヌキ節 <i>Quercus L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon</i>
No.18	櫻穴建物 9	2902	檜皮	タヌキ節 <i>Quercus L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon</i>

図版15 顯微鏡写真(7)

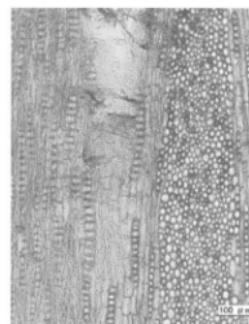
No.19



木口面



柾目面

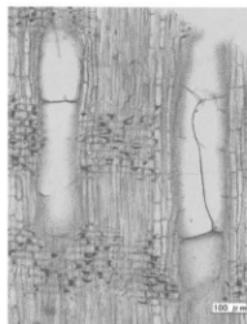


板目面

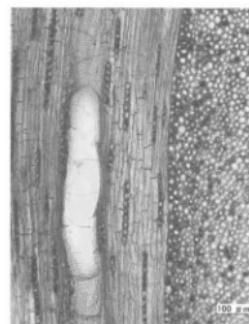
No.20



木口面

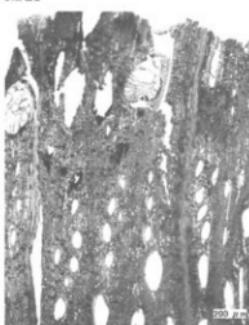


柾目面

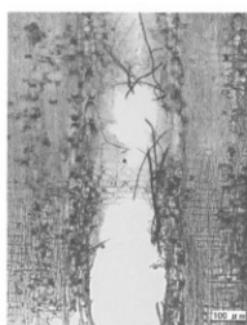


板目面

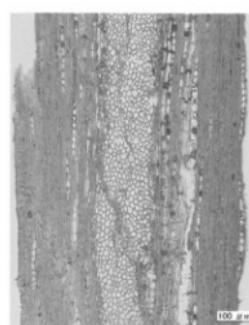
No.21



木口面



柾目面

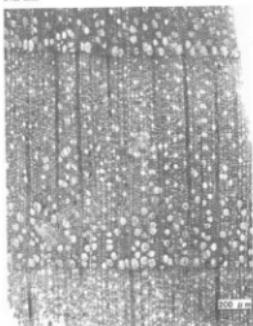


板目面

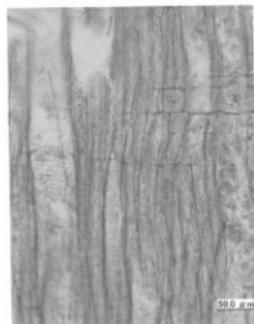
顯微鏡写真No	出土遺物	標番No	器種	種類
No.19	堅穴遺物9	2903	櫟板	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.20	ピット50	2950	柱	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.21	堅穴遺物9	2904	木鍤	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版16 頭微鏡写真(8)

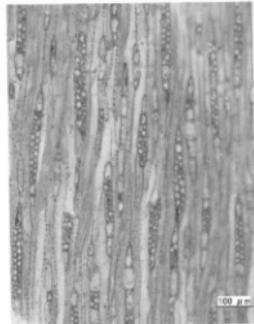
No. 22



木口面



柾目面



板目面

No. 23



木口面

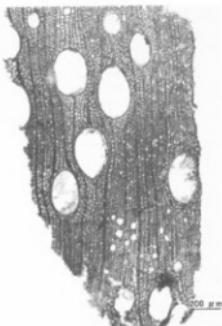


柾目面



板目面

No. 24



木口面



柾目面

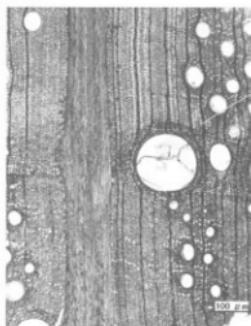


板目面

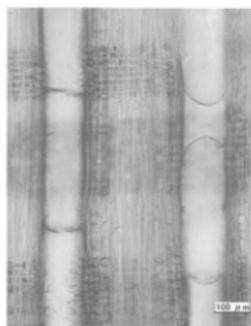
頭微鏡写真No.	出土遺物	発掘No.	器種	樹 種
No. 22	井戸10	2909	櫛類状木製品	<i>ツバキ</i> 属
No. 23	井戸10	2910	板状木製品	<i>クヌギ</i> 属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No. 24	井戸10	2911	板状木製品	<i>ク</i> <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.

図版17 跳微鏡写真(9)

No. 25



木口面

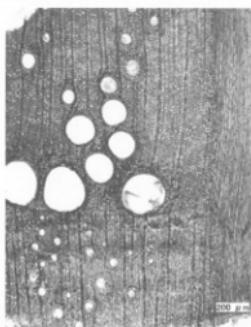


柾目面



板目面

No. 26



木口面

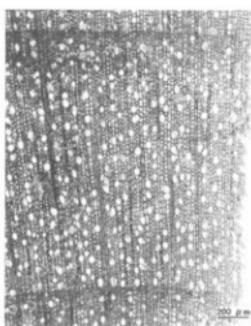


柾目面



板目面

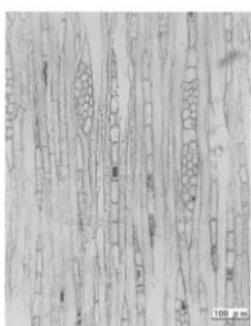
No. 27



木口面



柾目面

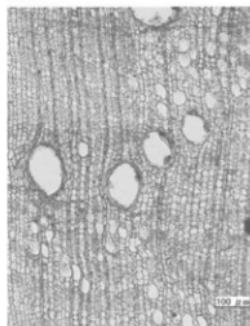


板目面

跳微鏡写真No.	出土遺構	掲載No.	器種	樹種
No. 25	井戸 10	2912	地衣木製品	<i>クメギ節</i>
No. 26	井戸 10	2913	地衣木材	<i>クメギ道</i>
No. 27	序木遺跡 1	2914	真貝類	<i>ハイノキ属</i>
				<i>Quercus L. Sect. Cerris Loudon</i>
				<i>Quercus L. Sect. Cerris Loudon</i>
				<i>Symplocos [acq.]</i>

図版18 細微鏡写真(10)

No.28



木口面

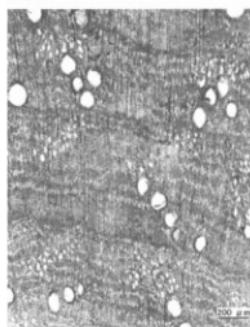


柾目面

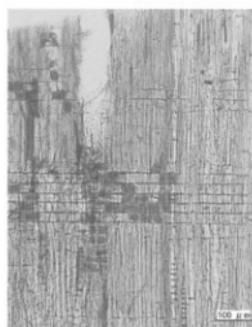


板目面

No.29



木口面

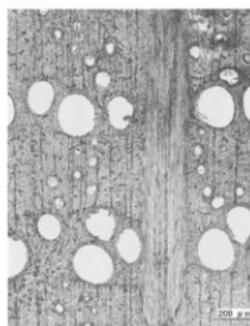


柾目面

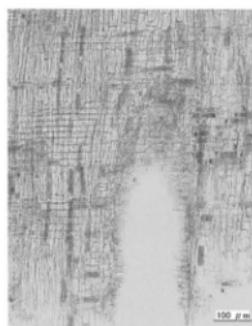


板目面

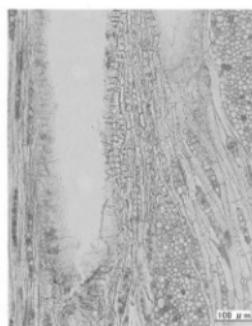
No.30



木口面



柾目面

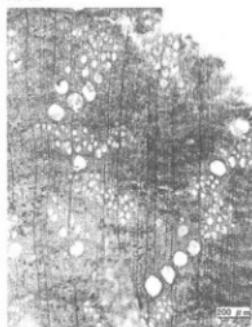


板目面

顯微鏡写真No.	出土遺構	規範No.	種類	樹種
No.28	竹木道築1	2915	被状木質品	シイ属 <i>Castanopsis</i> Spach
No.29	竹木道築1	2916	被状木質品	シイ属 <i>Castanopsis</i> Spach
No.30	竹木道築1	2917	被状木質品	クヌギ属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版19 離微鏡写真(11)

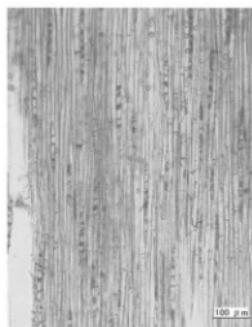
No 31



木口面

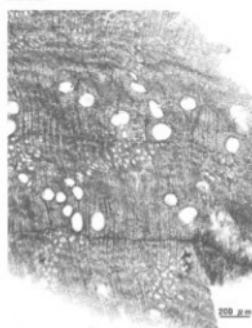


柾目面

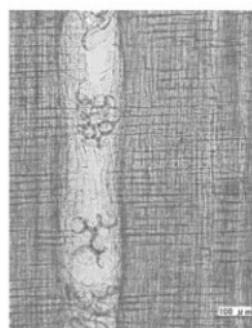


板目面

No 32



木口面

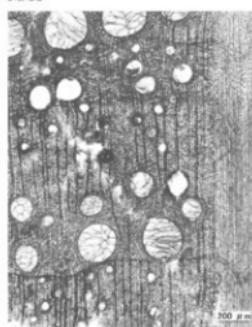


柾目面

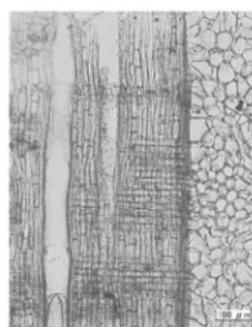


板目面

No 33



木口面



柾目面

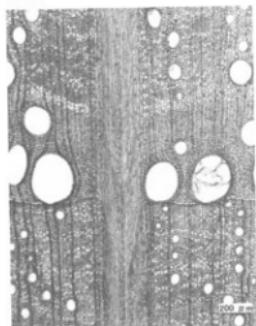


板目面

離微鏡写真No.	出土遺構	掘削No.	器種	樹種
No. 31	竹木遺構 1	2918	棒状木製品	シイ属 <i>Castanopsis</i> Spach
No. 32	竹木遺構 1	2919	棒状木製品	シイ属 <i>Castanopsis</i> Spach
No. 33	竹木遺構 1	2920	棒状木製品	クヌギ属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版20 顕微鏡写真(12)

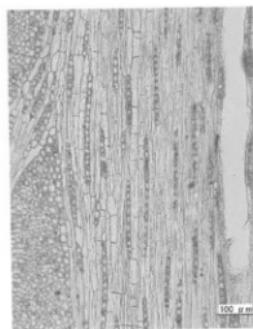
No.34



木口面

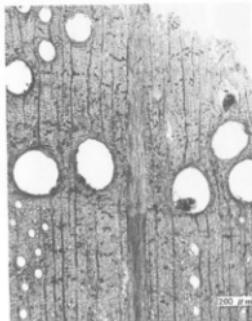


桿目面



板目面

No.35



木口面

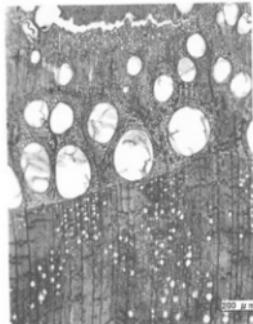


桿目面



板目面

No.36



木口面



桿目面



板目面

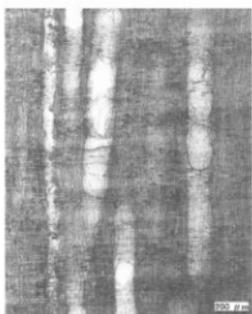
顕微鏡写真No.	出土遺構	撮影No.	品種	樹種
No.34	肝木遺構 I	2921	棒状大環孔	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.35	肝木遺構 I	2922	棒状大環孔	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.36	肝木遺構 I	2923	未製品	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Pinus</i> Loudon syn.

図版21 顕微鏡写真(13)

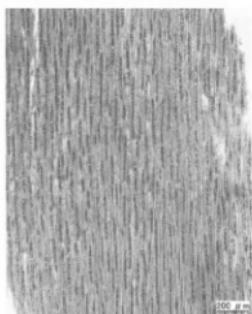
No.37



木口面

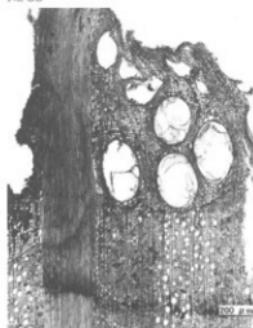


柾目面

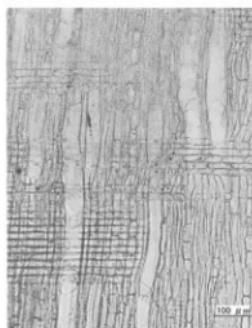


板目面

No.38



木口面

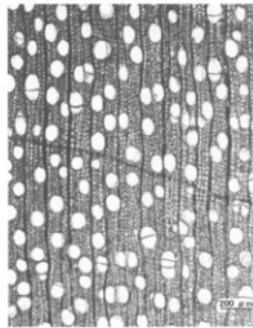


柾目面

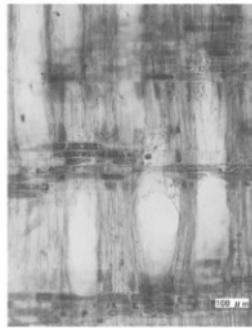


板目面

No.39



木口面



柾目面

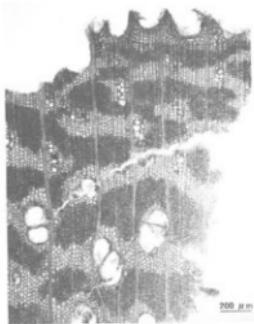


板目面

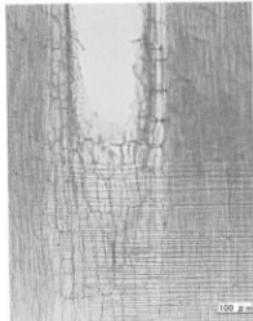
顕微鏡写真No.	出土遺構	用範No.	基種	樹種
No.37	貯木遺構 1	2924	未製品	コナラ属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Prinus</i> Loudon syn.
No.38	貯木遺構 1	2925	未製品	コナラ属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Prinus</i> Loudon syn.
No.39	貯木遺構 1	2926	未製品	ヤナギ属 <i>Salix</i> L.

図版22 顕微鏡写真(14)

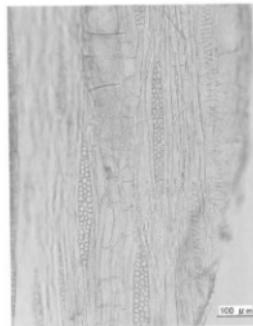
No.40



木口面

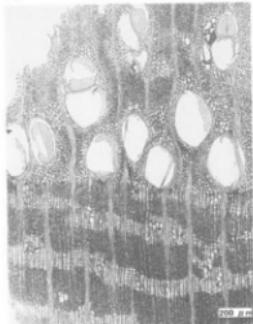


梢目面



板目面

No.41



木口面

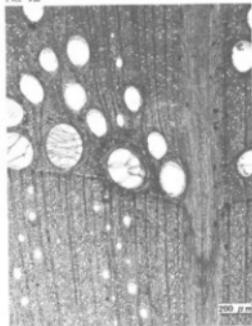


梢目面



板目面

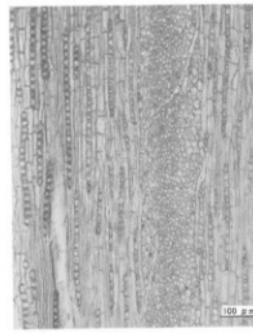
No.42



木口面



梢目面

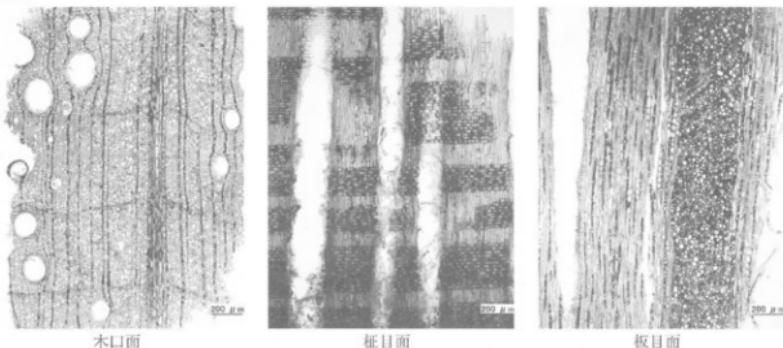


板目面

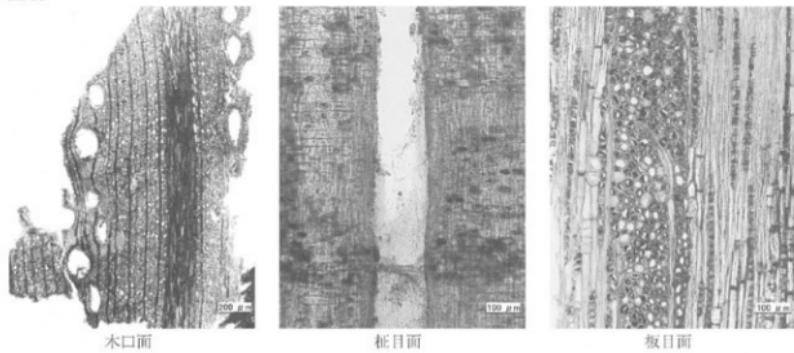
顕微鏡写真No.	出土場所	掲載No.	器種	樹種
No.40	貯木池旁	2927	木製品	ムクロジ <i>Sapindus Mukorossi</i> Gaertn.
No.41	運路3	2928	用途不明木製品	ムクロジ <i>Sapindus Mukorossi</i> Gaertn.
No.42	運路3	2929	有頭桿	クヌギ節 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版23 跳微鏡写真(15)

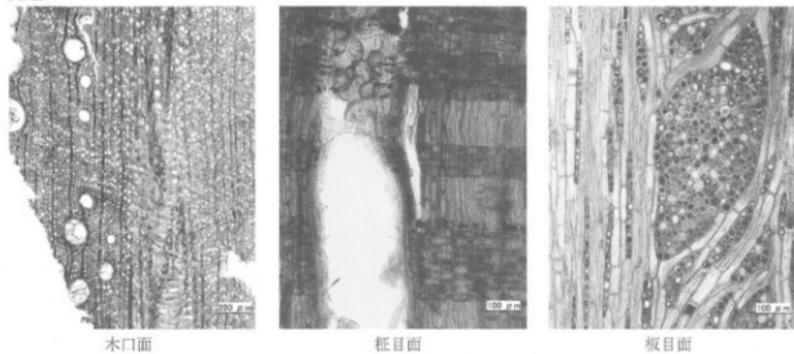
No.43



No.44



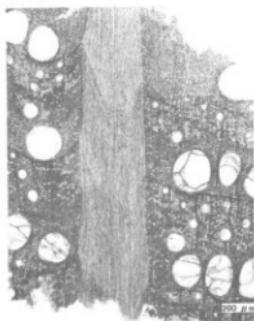
No.45



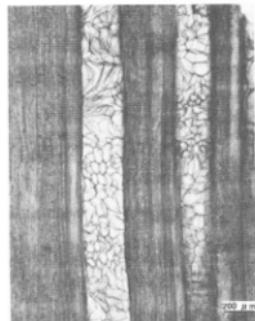
跳微鏡写真No.	出土遺構	掲載No.	器種	樹種
No.43	渡路3	2930	丸孔?	<i>Quercus</i> L. Subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
No.44	渡路3	2931	広葉頭部?	<i>Quercus</i> L. Subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
No.45	渡路3	2932	広葉?・謎?	<i>Quercus</i> L. Subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>

図版24 跳微鏡写真(16)

No.46



木口面



柾目面

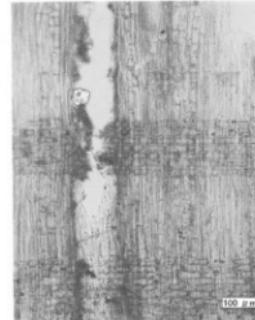


板目面

No.47



木口面

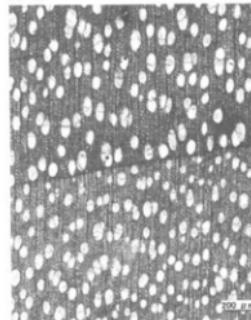


柾目面

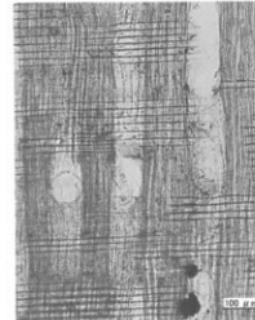


板目面

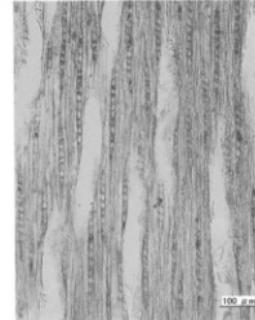
No.48



木口面



柾目面

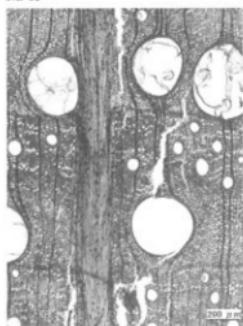


板目面

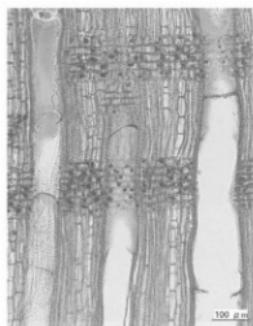
跳微鏡写真No.	出土遺物	撮影No.	器種	樹種
No.46	泥炭3	2933	棒状木製品	<i>Quercus L. Sect. Cerris</i> Loudon
No.47	泥炭3	2934	棒状木製品	<i>Quercus L. Sect. Cerris</i> Loudon
No.48	泥炭3	2935	棒状木製品	<i>Salix L.</i>

図版25 顕微鏡写真(17)

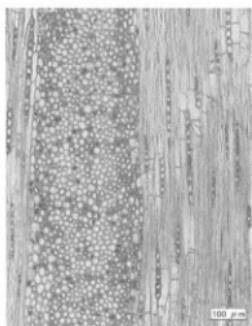
No 49



木口面



柾目面



板目面

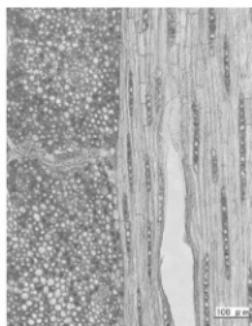
No 50



木口面

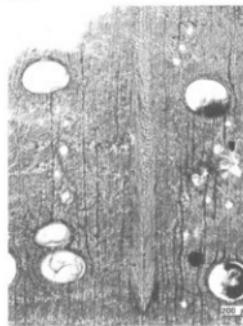


柾目面



板目面

No 51



木口面



柾目面

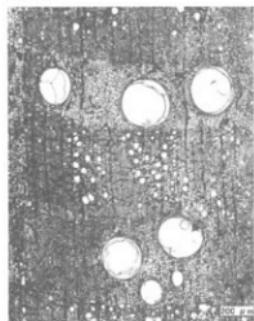


板目面

顕微鏡写真No	出土場所	掲載No	基種	術種
No 49	流路3	2936	板状木材	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No 50	流路3	2937	板状木材	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No 51	流路3	2938	板状木材	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版26 顕微鏡写真(18)

No.52



木口面

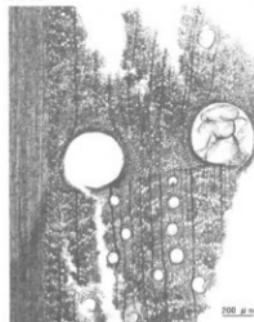


杠目面

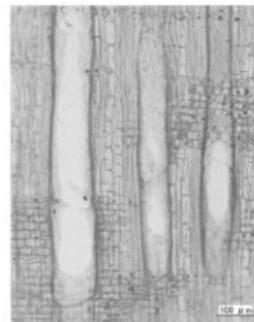


板目面

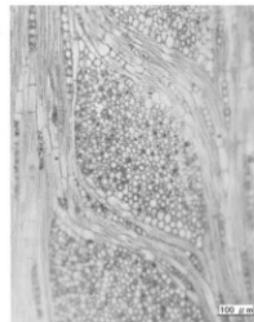
No.53



木口面

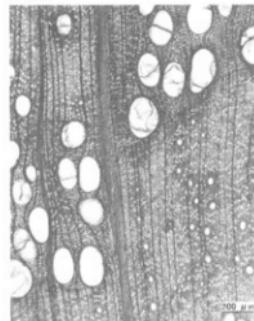


杠目面

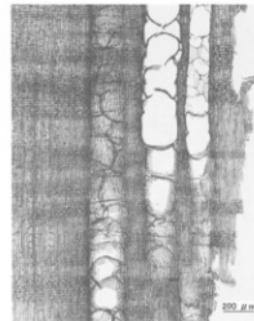


板目面

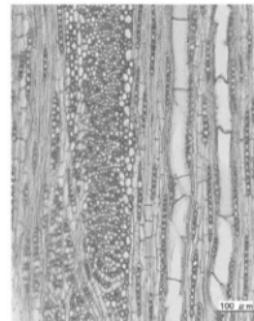
No.54



木口面



杠目面

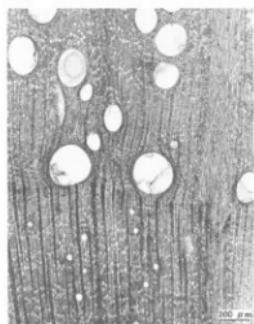


板目面

顕微鏡写真No.	出土遺場	標題No.	種類	學種
No.52	波路3	2939	栎木材	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Prius</i> Loudon syn.
No.53	波路3	2940	部材?	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.54	獨立柱建物4柱穴2	2941	牛	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版27 頂微鏡写真(19)

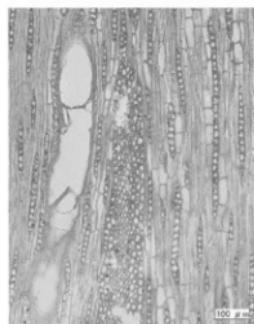
No.55



木口面

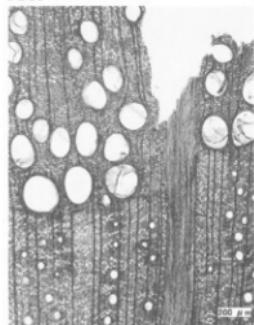


柾目面



板目面

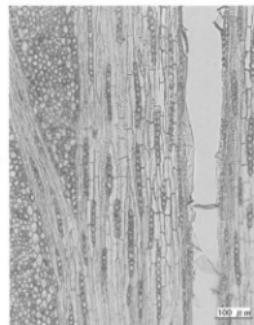
No.56



木口面

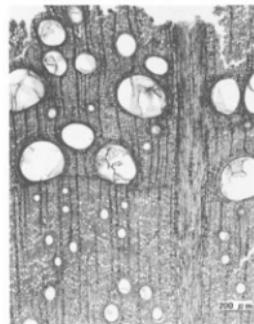


柾目面

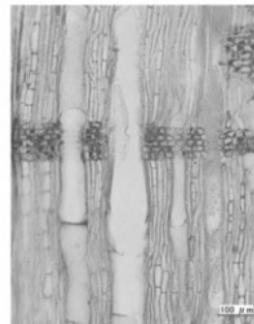


板目面

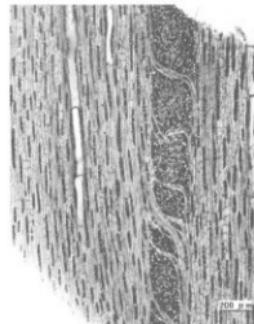
No.57



木口面



柾目面

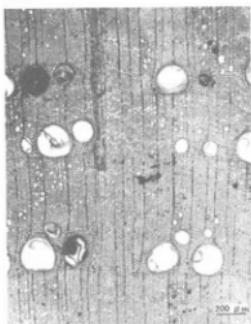


板目面

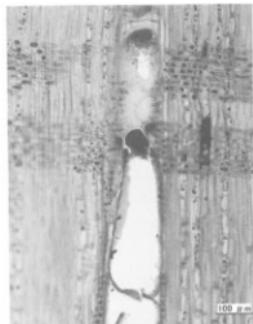
顕微鏡写真No.	出土遺構	捲戻No.	器種	樹種
No.55	掘立柱建物4柱穴3	2942	柱	クヌキ属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.56	掘立柱建物4柱穴4	2943	柱	クヌキ属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.57	掘立柱建物4柱穴1	2944	柱	クヌキ属 <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版28 観微鏡写真(20)

No.58



木口面

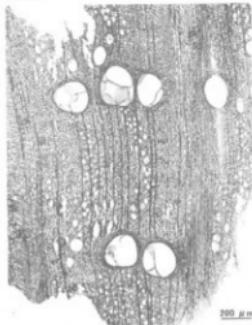


柾目面



板目面

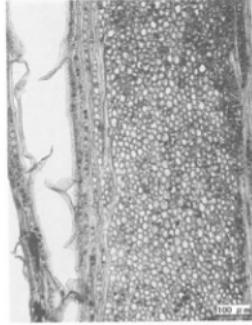
No.59



木口面

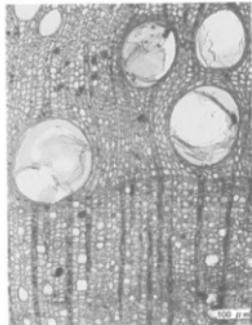


柾目面



板目面

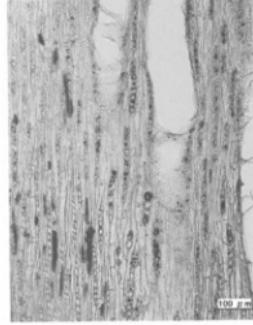
No.60



木口面



柾目面

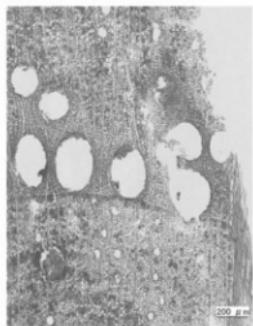


板目面

観微鏡写真No.	出土遺物	指標No.	委種	樹種
No.58	獨立柱頭物 6 杖穴 4	2945	桺	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Prinus</i> Loudon syn.
No.59	獨立柱頭物 14 杖穴 5	2946	コナラ節	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Prinus</i> Loudon syn.
No.60	獨立柱頭物 14 杧穴 6	2947	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.

図版29 頂微鏡写真(2)

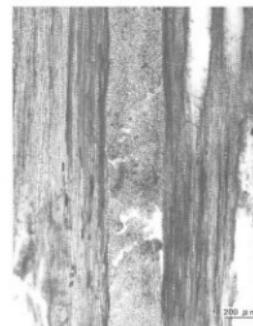
No. 61



木口面

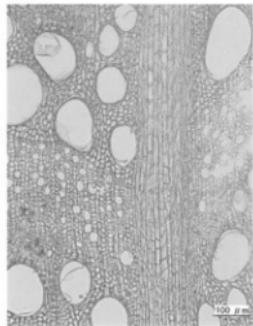


柾目面



板目面

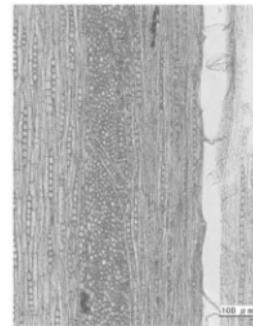
No. 62



木口面

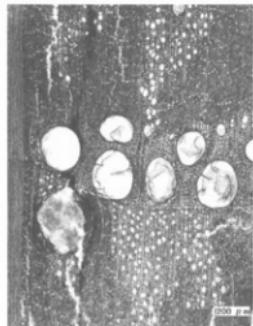


柾目面



板目面

No. 63



木口面



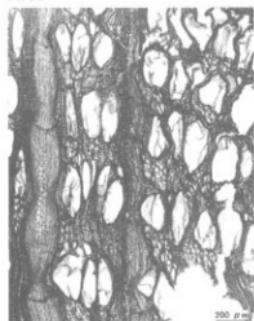
柾目面



板目面

顯微鏡写真No.	出土遺構	測定No.	器種	樹種
No. 61	掘立柱建物 14 杖穴 3	2948	杖	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No. 62	掘立柱建物 14 杖穴 7	2949	杖	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Prinus</i> Loudon syn.
No. 63	掘立柱建物 19 杖穴 1	2951	杖	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Prinus</i> Loudon syn.

No. 64



木口面

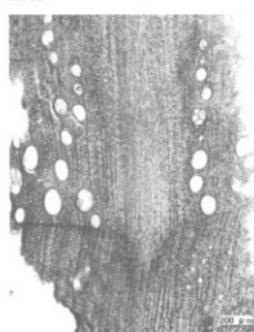


柾目面

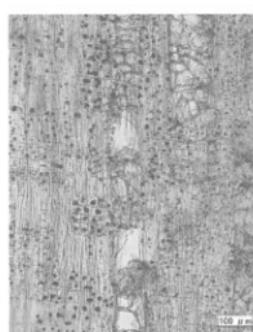


板目面

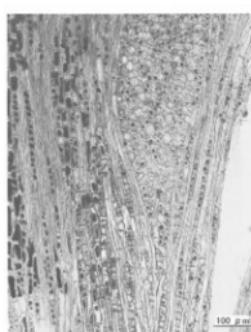
No. 65



木口面

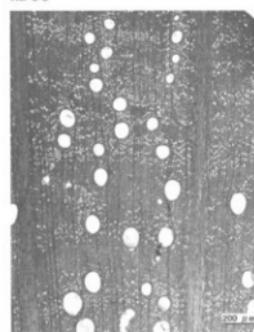


柾目面



板目面

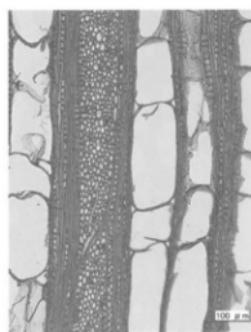
No. 66



木口面



柾目面

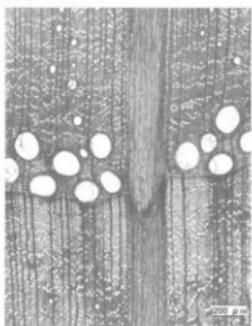


板目面

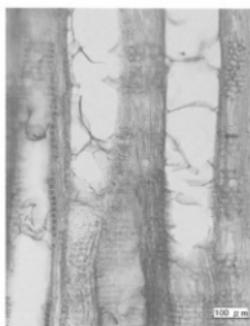
顎微鏡写真No.	出土遺構	撮影No.	器種	樹種
No. 64	獨立柾物 19 穴六 3	2952	柱	<i>クヌギ節</i> <i>Quercus L. Sect. Cerris Loudon</i>
No. 65	獨立柾物 20 穴六 1	2953	柱	<i>アカガシ亞属</i> <i>Quercus L. Subgen. Cyclobalanopsis</i>
No. 66	獨立柾物 20 穴六 3	2954	柱	<i>アカガシ亞属</i> <i>Quercus L. Subgen. Cyclobalanopsis</i>

図版31 視微鏡写真(23)

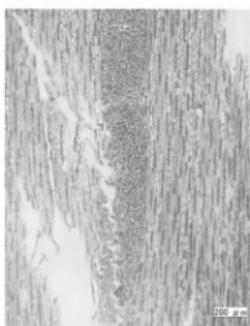
No.67



木口面

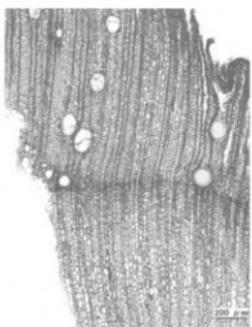


柾目面

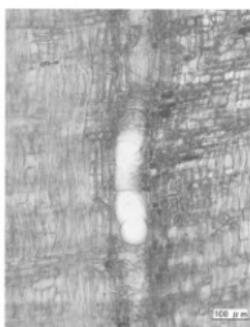


板目面

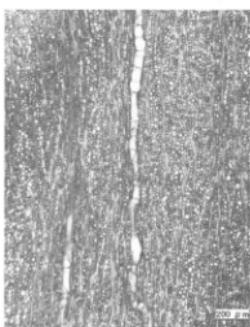
No.68



木口面

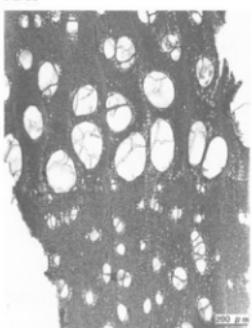


柾目面

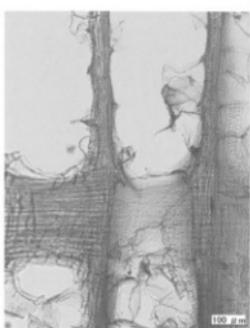


板目面

No.69



木口面



柾目面

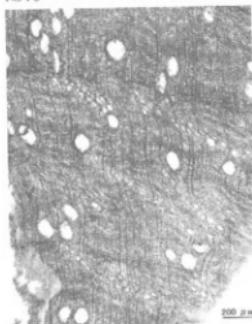


板目面

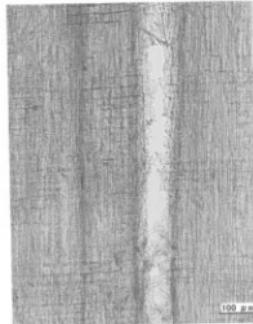
顕微鏡写真No.	出土場所	捲戻No.	器種	樹種
No.67	掘立柱遺物 20柱穴 6	2955	柱	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.68	掘立柱遺物 20柱穴 4	2956	柱	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.69	多穴建物 8	未掲載	用途不明木製品	<i>Morus</i> L.

図版32 視微鏡写真(24)

No. 70



木口面

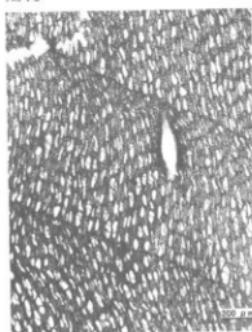


柾目面

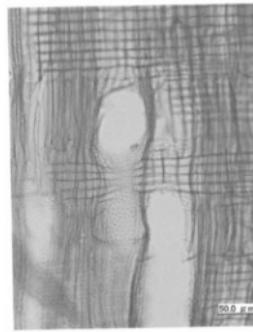


板目面

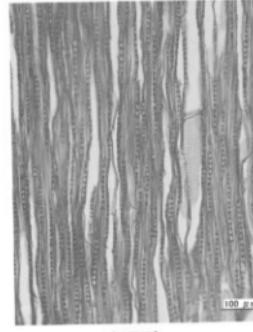
No. 71



木口面

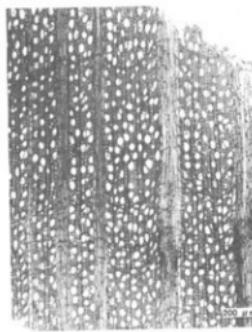


柾目面

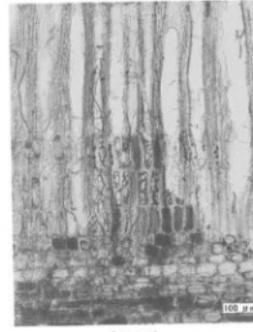


板目面

No. 72



木口面



柾目面

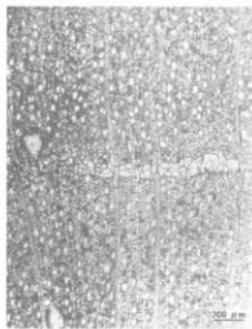


板目面

顕微鏡写真No.	出土遺構	発掘No.	種類	樹種
No. 70	野木遺構 1	未記載	有孔材?	<i>シイ属</i>
No. 71	壁穴遺物 7 - 外面土坑 6	未記載	建築部材?	<i>ヤナギ属</i>
No. 72	壁穴遺物 1	未記載	木塊	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunberg

図版33 頸微鏡写真(25)

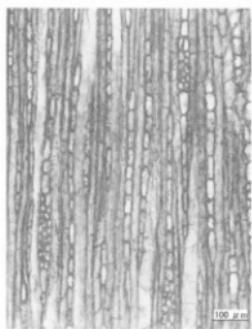
No.73



木口面

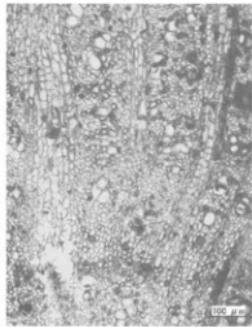


柾目面

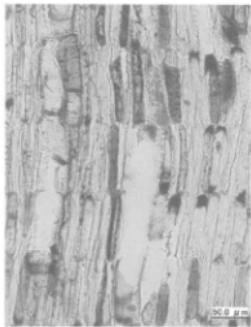


板目面

No.74



木口面

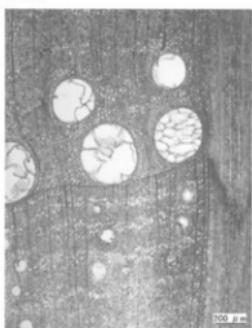


柾目面



板目面

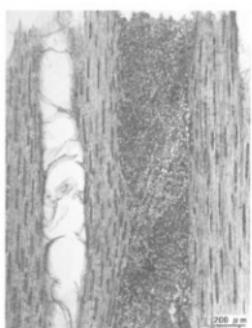
No.75



木口面



柾目面



板目面

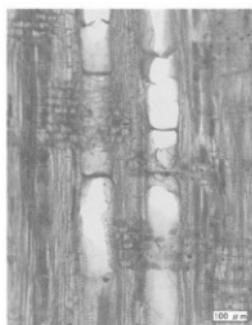
顕微鏡写真No.	出土遺構	掲載No.	器種	樹種
No.73	竪穴建物 6	未掲載	-	<i>Symplocos</i> Jacq.
No.74	竪穴建物 6	未掲載	-	<i>Myrsine Seguinii</i> Lév.
No.75	流跡 3	未掲載	-	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版34 頸微鏡写真(26)

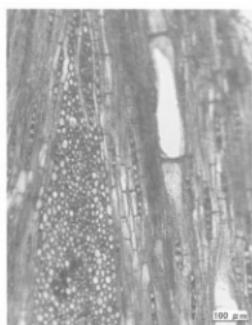
No. 76



木口面

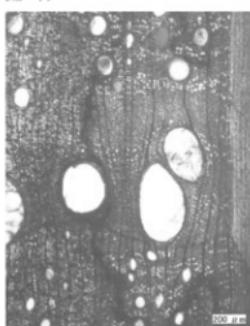


柾目面

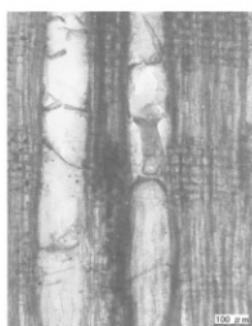


板目面

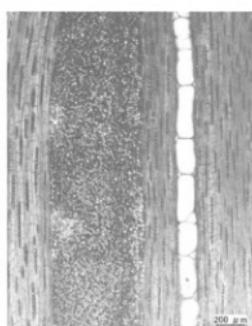
No. 77



木口面

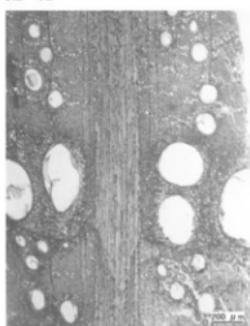


柾目面



板目面

No. 78



木口面



柾目面

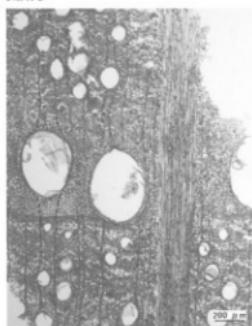


板目面

顎微鏡写真No.	出土遺物	No.	樹種
No. 76	多穴鉢物 9 - 塵泥	櫟 3	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No. 77	多穴鉢物 9 - 塘泥	櫟 4	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No. 78	多穴鉢物 9 - 塘泥	櫟 9	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版35 覚微鏡写真(27)

No.79



木口面

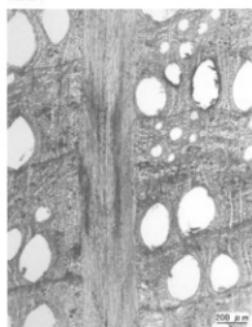


柾目面



板目面

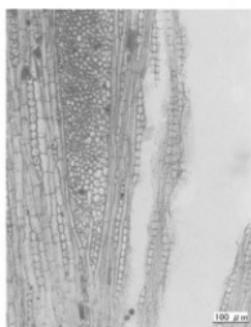
No.80



木口面

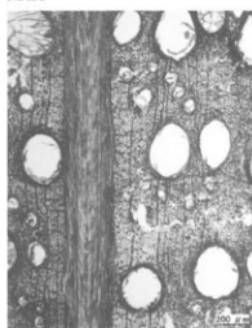


柾目面



板目面

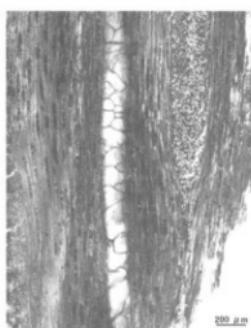
No.81



木口面



柾目面

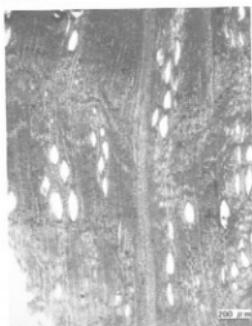


板目面

顯微鏡写真No.	出土遺物	No.	樹種
No.79	堅穴埴物 9・墳溝	遺漏16	<i>クヌギ</i> 節
No.80	堅穴埴物 9・墳溝	遺漏31	<i>クヌギ</i> 節
No.81	堅穴埴物 9・墳溝	遺漏39	<i>クヌギ</i> 節

図版36 要微鏡写真(28)

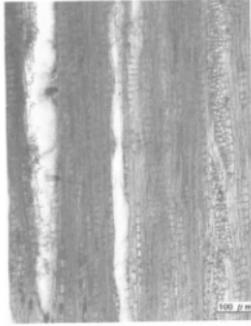
No.82



木口面



柾目面



板目面

No.83



木口面

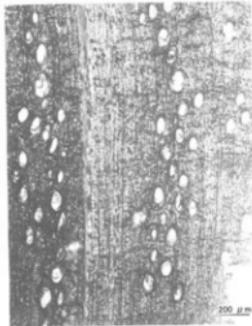


柾目面



板目面

No.84



木口面



柾目面

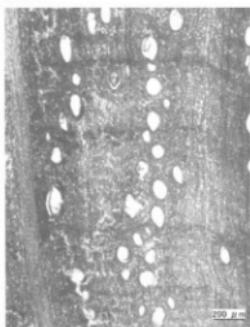


板目面

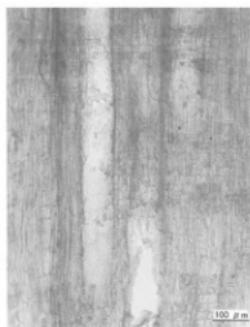
要微鏡写真No.	出土遺構	No.		樹種
No.82	堅穴建物9-堅溝	堅標 49	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
No.83	堅穴建物9-堅溝	堅溝 54	シイ属	<i>Castanopsis</i> Soach
No.84	堅穴建物9-堅溝	堅溝 56	アカガシ属属	<i>Quercus</i> L. Subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>

図版37 頸微鏡写真(29)

No 85



木口面



柾目面



板目面

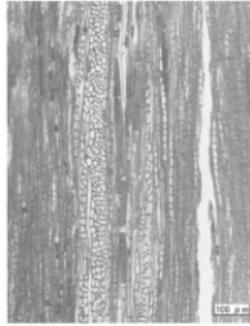
No 86



木口面



柾目面



板目面

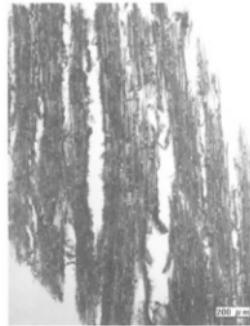
No 87



木口面



柾目面

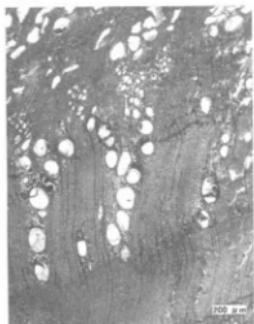


板目面

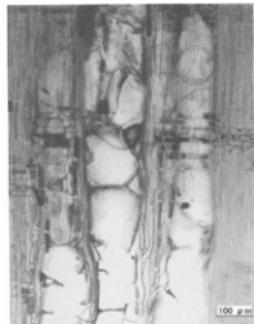
顕微鏡写真No.	出土遺構	No.	樹種
No.85	櫻穴遺物 9 - 嵌溝	壁根 59	アカガシ亜属 <i>Quercus L. Subgen. Cyclobalanopsis</i>
No.86	櫻穴遺物 9 - 嵌溝	壁根 63	ツブライ
No.87	櫻穴遺物 9 - 嵌溝	壁根 68	シイ属 <i>Castanopsis</i> Schottky Spach

図版38 領微鏡写真(30)

No.88



木口面



柾目面



板目面

No.89



木口面



柾目面

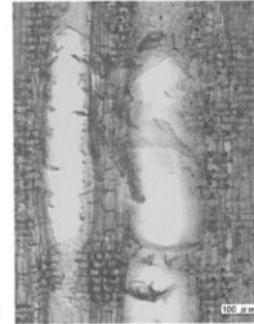


板目面

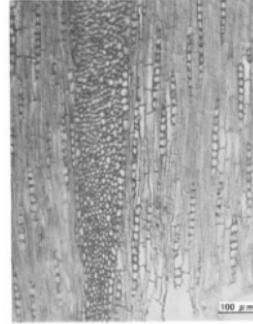
No.90



木口面



柾目面



板目面

顕微鏡写真No.	出土遺構	No.	樹種
No.88	堅穴埴物9-被漆	断面75	<i>Casuarina cuspidata</i> Schottky <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.89	堅穴埴物9-被漆	断面82	<i>Casuarina cuspidata</i> Schottky <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.90	堅穴埴物9-被漆	断面87	<i>Casuarina cuspidata</i> Schottky <i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版39 頸微鏡写真(31)

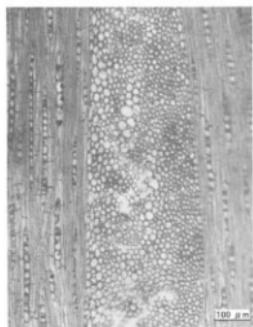
No.91



木口面



桿面

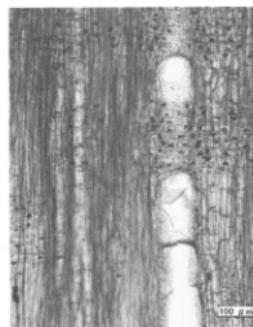


板面

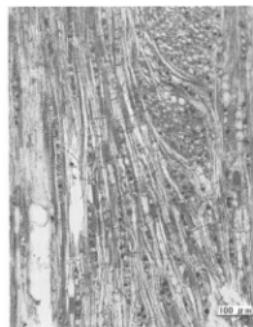
No.92



木口面

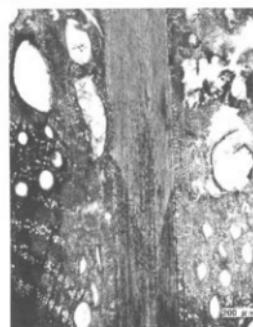


桿面

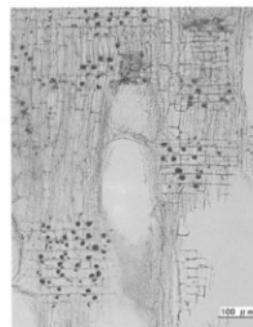


板面

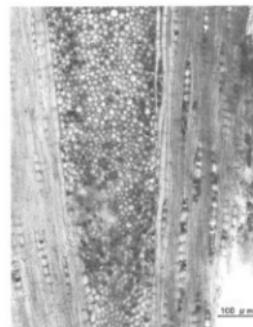
No.93



木口面



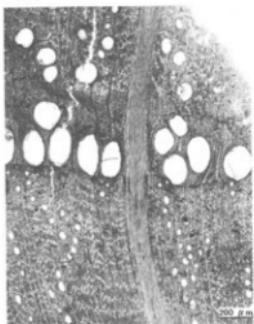
桿面



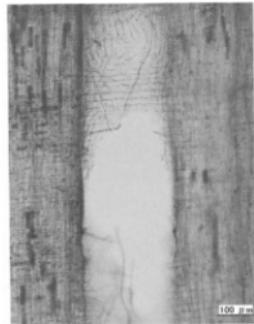
板面

顎微鏡写真No.	出土遺構	No.	樹種
No.91	竪穴建物9-壁溝	94	<i>クヌギ</i> 節
No.92	竪穴建物9-壁溝	102	<i>クヌギ</i> 節
No.93	竪穴建物9-壁溝	106	<i>クヌギ</i> 節

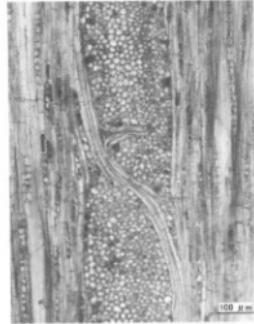
No. 94



木口面

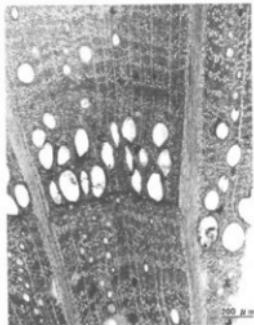


桿面



板面

No. 95



木口面

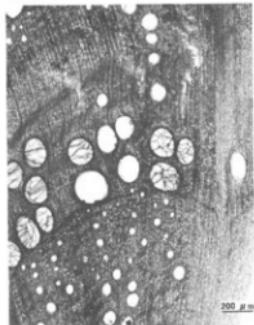


桿面

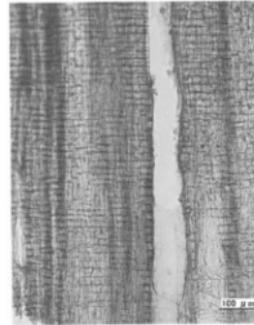


板面

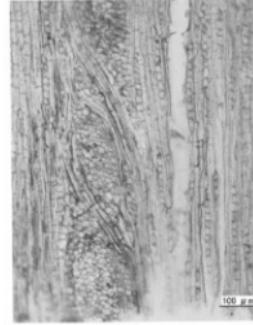
No. 96



木口面



桿面

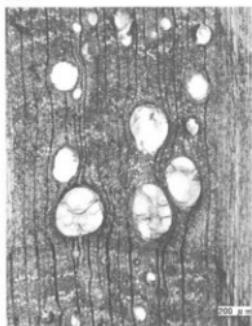


板面

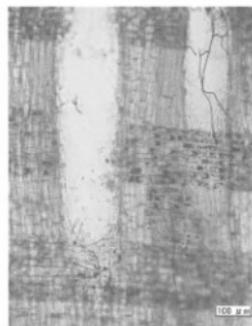
顕微鏡写真No.	出土遺構	No.	指 種
No. 94	櫟穴遺物 9 - 塚溝	改修前 4	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No. 95	櫟穴遺物 9 - 墓溝	改修前 5	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No. 96	櫟穴遺物 9 - 墓溝	改修前 8	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版41 跡微鏡写真(33)

No.97



木口面

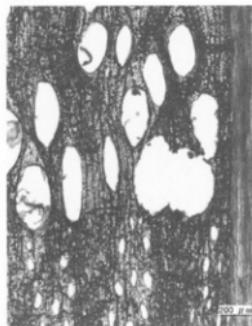


杁目面



板目面

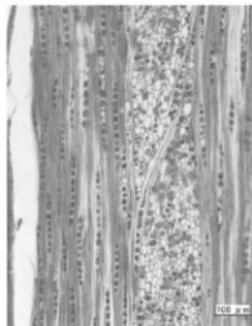
No.98



木口面

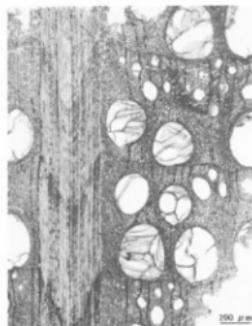


杁目面



板目面

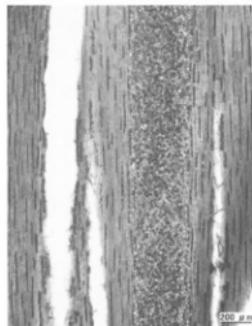
No.99



木口面



杁目面



板目面

顯微鏡写真No.	出土遺物	No.	樹種
No.97	空穴埴物9・壺溝	改修前 15	<i>Quercus L. Sect. Cerris</i> Loudon
No.98	空穴埴物9・壺溝	改修前 18	<i>Quercus L. Sect. Cerris</i> Loudon
No.99	空穴埴物9・壺溝	改修前 19	<i>Quercus L. Sect. Cerris</i> Loudon

図版42 観微鏡写真(34)

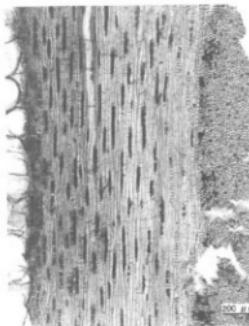
No.100



木口面



径目面



板目面

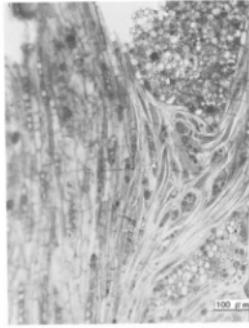
No.101



木口面

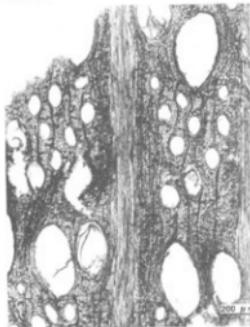


径目面



板目面

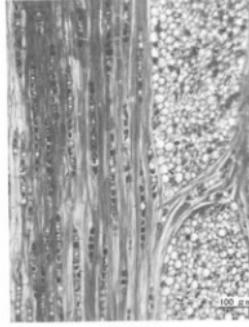
No.102



木口面



径目面

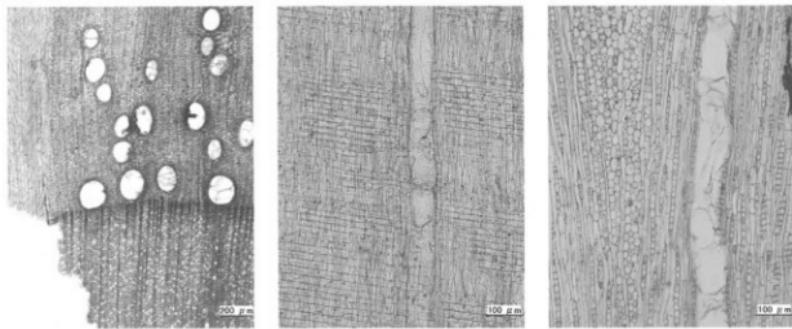


板目面

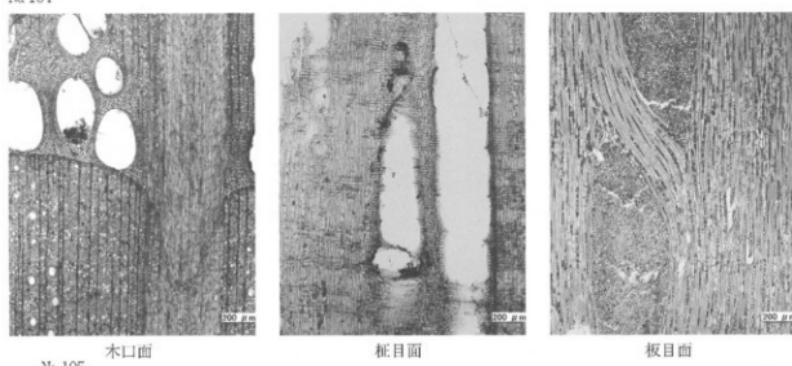
観微鏡写真No.	出土遺物	No.	樹種
No.100	櫻穴建物 9 - 中央土坑	排水溝 6	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.101	櫻穴建物 9 - 中央土坑	排水溝 10	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon
No.102	櫻穴建物 9 - 中央土坑	排水溝 15	<i>Quercus</i> L. Sect. <i>Cerris</i> Loudon

図版43 顕微鏡写真(35)

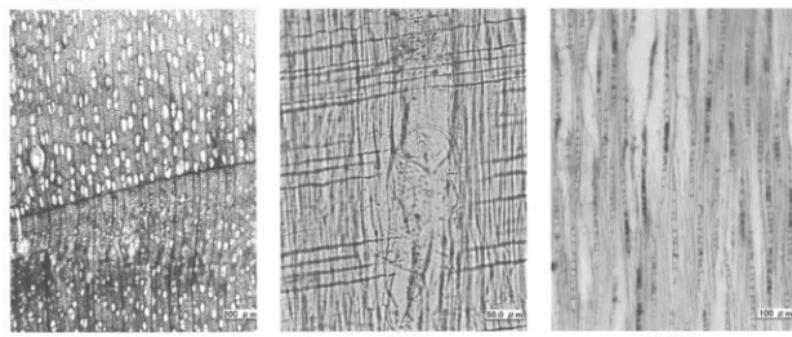
No 103



No 104



No 105



木口面

柾目面

板目面

顕微鏡写真No.	出土遺物	No.	樹種
No 103	竪穴建物 9 - 中央土坑	排水溝 18	<i>クメギ</i> 節 <i>Quercus L. Sect. Cerris Loudon</i>
No 104	竪穴建物 9 - 中央土坑	排水溝 20	<i>クヌギ</i> 節 <i>Quercus L. Sect. Cerris Loudon</i>
No 105	竪穴建物 9 - 中央土坑	排水溝 21	<i>ヤナギ</i> 属 <i>Salix L.</i>

## 第7節 大阪府八尾南遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定

### 1. はじめに

八尾市八尾南遺跡出土の弥生時代後期の土器付着物を、加速器を用いて年代測定を試みた。なお、試料記号はOSFとした。OSは大阪、Fは大阪府文化財センターの意味である。

土器付着物は、2005年度に大阪府文化財センターにおいて、小林謙一・新免歳靖・宮田佳樹・遠部慎が、他の遺跡出土試料とともに採取した。資料の出土層位や大凡の所属土器型式は、大阪府文化財センター秋山浩三氏ほかの見解によるものである。

試料の前処理は、年代グループが行い、測定は(株)パレオ・ラボによるものである。測定結果は計測値(補正)とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となつた較正曲線を示した。

今回の年代測定の目的は、この遺跡の年代を調べることであるが、同時に弥生後期土器の実年代を推定することが可能な測定結果を得ることができた。

### 2. 採取試料と炭化物の処理

八尾南遺跡からは、土器9個体から12試料の土器付着物を採取した。土器のうち3個体は、部位を逸えて2試料づつ採取した。前処理した結果、土器付着物6個体から9試料(OSF-316, 317はa胴部内面とb胴部外面を、318はa口縁部外面とb胴部外面を別々に測定した)の年代測定を行うことができた。

八尾南遺跡の測定対象とした試料付着土器は、厚い洪水砂層に覆われた弥生時代後期遺構面の流路から出土したものである。

### 3. 炭化物の処理

試料については、註1)に示す手順で試料処理を行った。前処理の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において新免、燃焼とグラファイト化の作業は、(株)パレオ・ラボに委託した。

### 4. 測定結果と曆年較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、(株)パレオ・ラボ(機関番号PLD)に委託した。

測定結果は、註2)に示す方法で、同位体効果を補正し、曆年較正年代を算出した。

### 5. 測定結果について

#### 5-1 海洋リザーバー効果の可能性について

土器付着物の<sup>14</sup>C値についてみると、ほとんどは-25~-26%と、通常の陸生植物に由来する可能性を示す。OSF-318bと319のみが-24%とやや重い測定値を示し、同一時期とされる他の土器付着物に比べ年代的にやや古い。深海の中には古い大気が溶け込んでおり、海流によってあがつてくるため、海産の動植物に由来する炭素は、陸生の試料より、数百年古くなることがあり、海洋リザーバー効果と呼ばれる。<sup>14</sup>C値も陸生の植物よりも重いことが知られている。OSF-318b, 319の付着炭化物は、海産物のお焦げの可能性があると思われる。OSF-318bについては後述するように、年代的にわずかに古めであり、海産物が混じった汁状の食べ物の吹きこぼれなどを考慮する必要があろう。

## 5-2 部位別の測定値

OSF-316, 317, 318については、同一個体の部位の異なる付着物を測定している。OSF-316, 317については、 $1\sigma$ の誤差範囲内で重なる測定値が得られており、ほぼ同一の結果が得られたといえる。OSF-318については、b 腔外面付着物 C 年代で50年古い測定値であるが、 $2\sigma$ の誤差範囲内には納まる。ただし、 $\delta^{13}\text{C}$  値が腔外面付着物はやや重く、海洋リザーバー効果の影響をわずかに受けている可能性も考えられる。

## 5-3 暗年較正年代

測定結果の較正年代を見ると、上述した海洋リザーバー効果の影響が考えられるOSF-318b, 319以外は、おむね同一の時期を示している。較正年代で見ると、やや古いOSF-320は紀元前1世紀を含むが、ほかは紀元1年以降に最も高い確率が集中し、ほぼ紀元1世紀に含まれることが見て取れる。瓜生堂遺跡をはじめとする、これまでの測定例と照らすと（今村2004など）、弥生時代後期河内V・2～3期の曆年代として、整合的であると考える。

この分析は、平成17年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築一」（研究代表 西本豊弘）の成果を用いている。

曆年較正については今村峯雄の方法に従った。

本稿は、概要について西本豊弘（国立歴史民俗博物館）、註1)について宮田佳樹、新免敬精（歴博）の記載をもとに、小林謙一（歴博）が執筆した。

（国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ

小林謙一）

表13 試料の重量と炭素量(mg)

試料番号	採取量	処理量	回収量	回収/処理	前処理後	燃焼	ガス	含有率	炭素量/処理
OSF 315	91.54	52.27	20.81	39.8%	良	4.90	3.09	63.1%	25.1%
OSF 316-a	44.45	44.45	19.70	44.3%	良	7.60	3.94	51.8%	23.0%
OSF 316-b	74.60	74.60	33.26	44.6%	良	5.38	3.37	62.6%	27.9%
OSF 317-a	136.03	56.62	41.93	74.1%	良	7.60	4.73	62.2%	46.1%
OSF 317-b	22.30	22.30	12.51	56.1%	良	5.40	3.32	61.5%	34.5%
OSF 318-a	74.28	74.28	11.12	15.0%	良	6.10	3.76	61.6%	9.2%
OSF 318-b	104.99	52.91	14.40	27.2%	良	4.30	2.20	51.2%	13.9%
OSF 319	27.88	27.88	6.58	23.6%	良	4.30	2.50	58.1%	13.7%
OSF 320	66.62	66.62	7.63	11.5%	良	5.20	3.06	58.8%	6.7%

採取量・処理量・回収量・燃焼は、炭化物の重量(mg)、ガスは二酸化炭素の炭素相当量(mg)、

回収/処理は回収量/処理量(%)、含有率はガス/燃焼(%)

表14 測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関	$\delta^{13}\text{C}$ ‰	${}^{\circ}\text{C}$ BP (補正值)	暦年較正 cal BC + cal AD		
				(%) は確率密度		
OSF 315	PLD・4990	- 25.3	1985 ± 25	40 cal BC	-	cal AD 65 94.8%
OSF 316-a	PLD・4991	- 26.3	1955 ± 25	35 cal BC	-	30 cal BC 1.4%
				20 cal BC	-	10 cal BC 2.5%
				cal AD 1	-	cal AD 85 87.0%
				cal AD 105	-	cal AD 120 4.4%
OSF 316-b	PLD・4992	- 26.9	1940 ± 20	cal AD 20	-	cal AD 90 83.4%
				cal AD 100	-	cal AD 125 11.6%
OSF 317-a	PLD・4993	- 26.0	1990 ± 25	40 cal BC	-	cal AD 65 95.1%
OSF 317-b	PLD・4994	- 27.1	1985 ± 25	40 cal BC	-	cal AD 65 95.2%
OSF 318-a	PLD・4995	- 25.3	1955 ± 25	35 cal BC	-	30 cal BC 1.4%
				20 cal BC	-	10 cal BC 2.5%
				cal AD 1	-	cal AD 85 87.0%
				cal AD 105	-	cal AD 120 4.4%
OSF 318-b	PLD・4996	- 24.0	2005 ± 20	45 cal BC	-	cal AD 30 86.2%
				cal AD 35	-	cal AD 50 8.9%
OSF 319	PLD・4997	- 24.0	2230 ± 25	385 cal BC	-	345 cal BC 21.9%
				320 cal BC	-	205 cal BC 73.5%
OSF 320	PLD・4998	- 25.4	2025 ± 25	95 cal BC	-	cal AD 30 91.2%
				cal AD 35	-	cal AD 50 3.7%

表15 炭素14年代測定試料一覧

試料番号	報告番号	出土区	部位	時代	時期
OSF 315	2455	第3面 谷2-e域	胴外面	弥生後期	河内V・2~3期
OSF 316-ab	2412	第3面 流路3 右岸e域	胴内面(a)・胴外面(b)	弥生後期	河内V・2~3期
OSF 317-ab	2575	第3面 流路3 上層	胴内下面(a)・胴外面(b)	弥生後期	河内V・2~3期
OSF 318-ab	2295	第3面 流路3 左岸c・1域	口縁外面(a)・胴外上面(b)	弥生後期	河内V・2~3期
OSF 319	2456	第3面 谷2-e域	胴外面	弥生後期	河内V・2~3期
OSF 320	2440	第3面 谷2-a域	胴外面	弥生後期	河内V・2~3期

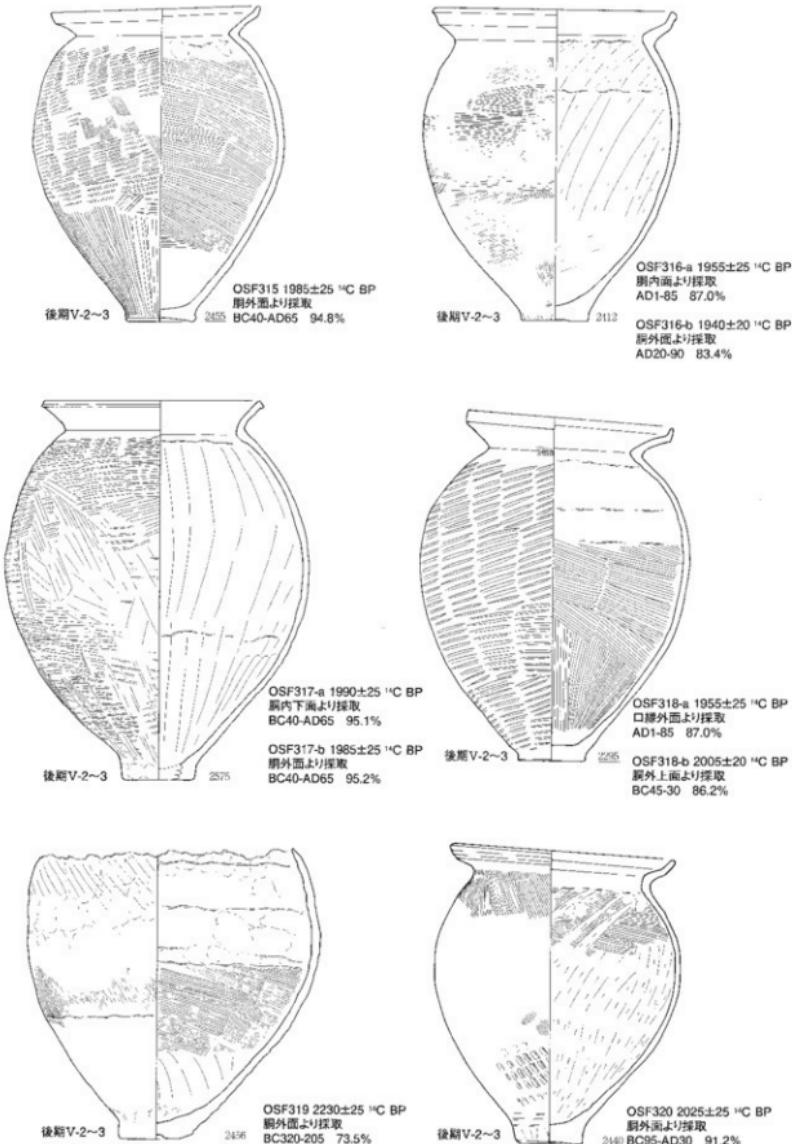


図259 炭素年代測定試料採取土器

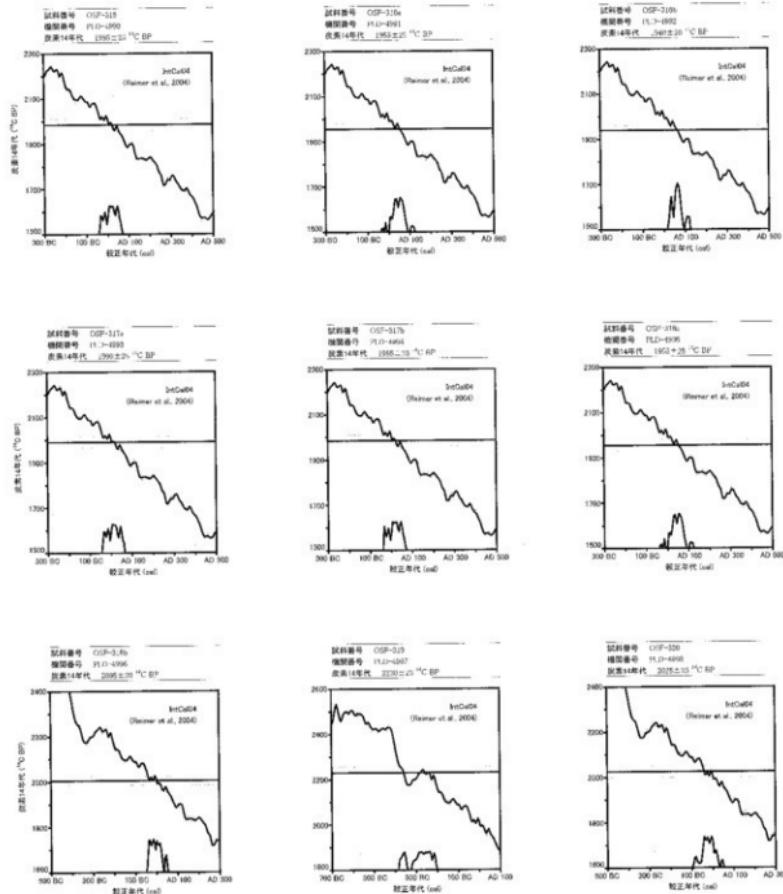
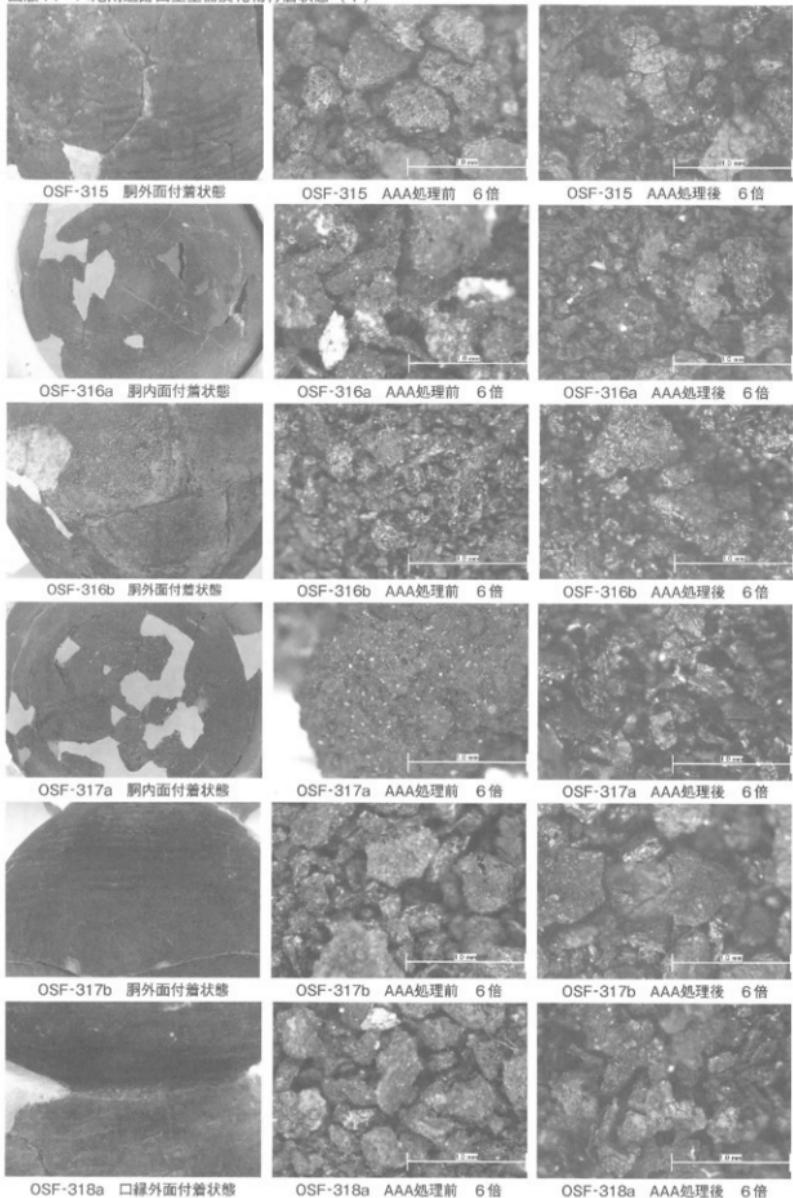


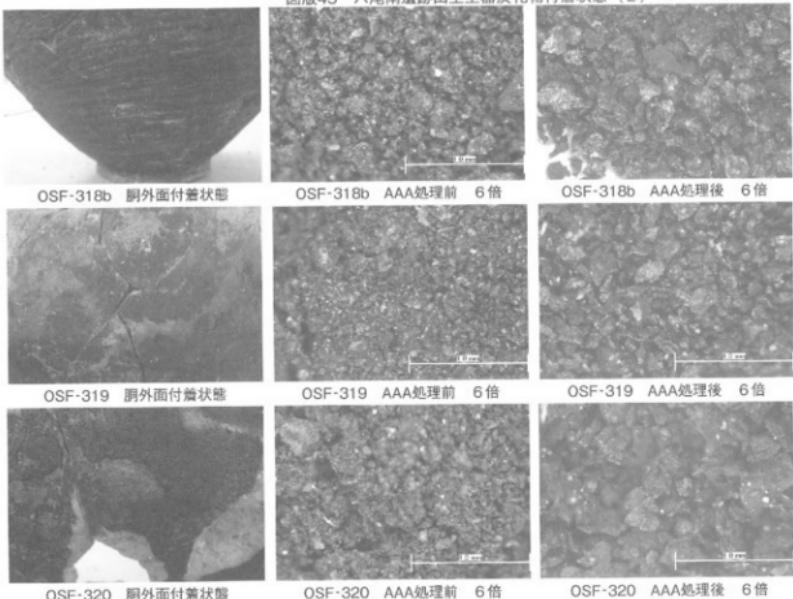
図260 八尾南遺跡測定試料の曆年較正確率密度分布図

※土器の時期は、統て後期V-2～3

図版44 八尾南遺跡出土土器炭化物付着状態（1）



図版45 八尾南遺跡出土器炭化物付着状態（2）スケールの1mmは4mmの長さ



<註>

1) 前処理：酸・アルカリ・液による化学洗浄（AAA処理）。

①AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）。さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目0.01N、3回目以降0.1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（1N-HCl、12時間）を行ってアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した（4回）。

試料の重量について、AAA処理を行った量（処理量）、処理後回収した量（回収量）、二酸化炭素を得るために燃焼した量（燃焼量）、精製して得られた二酸化炭素の量に相当する炭素量（ガス）をmg単位で、処理した量に対する回収量の比（回収/処理）、燃焼量に対する炭素相当量の比（含有率）、処理量に対する炭素相当量の比、すなわち前者と後者の積（炭素量/処理）を%で、表2に記す。今回測定できた試料は、OSF-192、214、216、230をのぞき、炭素含有率が50~60%と高い炭素含有率であり、良好な年代測定用試料ということができる。OSF-192、214、230は含有率が30%弱とやや不良であるが、土器付着物としては特に不良とはいえない。一方、OSF-216は、明らかに炭素含有率が不良であり、本文でも述べるように、不純物が多いなど結果的に年代測定用試料としては不適切な試料であった可能性が高い。

②二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封

じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

③グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

15mgの炭素量を目標にグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉でおよそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

2) 年代データの<sup>14</sup>C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した<sup>14</sup>C年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことが多いが、本稿では<sup>14</sup>C BPとする）。<sup>14</sup>C年代を算出する際の半減期は、5568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比により、<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比に対する同位体効果を調べ補正する。<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比）に対する千分率偏差δ<sup>13</sup>C（パーミル、‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比によって補正する。補正した<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比から、<sup>14</sup>C年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional Ageとされることが多い）。δ<sup>13</sup>C値については、加速器による測定は同位体効果補正のためであり、必ずしも<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比を正確に反映しないこともあるため、前処理したサンプルを分与して、（株）昭光通商に委託し、安定同位体質量分析計により、δ<sup>13</sup>C値を測定した。

測定値を較正曲線IntCal04（<sup>14</sup>C年代を曆年代に修正するためのデータベース、2004年版）（Reimer et al. 2004）と比較することによって曆年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、曆年代の推定確率分布として表す。曆年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCAL（OxCal Programに準じた方法）を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦cal BCで示す。（ ）内は推定確率である。図は、各試料の曆年較正の確率密度分布である。

#### ＜参考文献＞

- 今村峯雄 2004 「課題番号13308009基盤研究（A・1）（一般）縄文弥生時代の高精度年代体系の構築」  
Reimer, Paula J. et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP Radiocarbon 46(3). 1029-1058(30).  
M. Sakamoto, et al. 2004 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224: 298-301.

## 第Ⅷ章 総 括

### 第1節 遺跡の構造変遷

#### 1. はじめに

本書では2002～2004年度の3か年にわたり発掘調査を実施した八尾南遺跡の調査成果を述べてきた。本節では、八尾南遺跡の各時期の遺構・遺物のあり方を総合的に検討し、その構造がどのように変遷していったかを総括する。なお、第VI章まで述べてきたように、本遺跡の築落構造は地形環境のあり方と密接に関連を有しながら変遷していったことが想定できるため、総括にあたっては、本文中の記述とは異なるが下位の遺構面から順にその成果をまとめていくこととする。

#### 2. 各時期の土地利用

後期旧石器時代 11・12層とした下部沖積層が相当する。主な成果としてはサヌカイト剥片が出土したことが挙げられる。11層は明瞭灰ないしは明紫灰色粘土であり、層中にAT火山灰層をブロック状に含む、極めてしまりの良い地層である。また、11・12層には乾痕が顕著に認められ、これらの層準が長期にわたって安定した地表面であった可能性が高いことを示している。

調査上の制約もあり、部分的なトレンチ調査であったため、当時の微地形について詳細は不明であるが、設定したトレンチ内では南東側に谷地形が存在し、全体としては北西-南東方向にわずかな傾斜を有することが明らかとなっている。

遺構は特に認められなかった。サヌカイト剥片が出土した地層は11層を中心としており、部分的に12層からも認められたが、土壤の擾乱によって混入したものと考えられることから、AT火山灰層降下後に人間活動が行われたことを示している。

出土した遺物は石器があり、すべて風化が進行したサヌカイトである。主に剥片を主体とするが、石核が1点認められた。層中より出土したものに製品は認められなかつたが、該当する層準を削り込んでいる流路の最下部からナイフ形石器が出土している。

当遺跡は、従前より旧石器時代の遺物包含層が認められる遺跡として著名であったが、その分布範囲は第II章第3節で述べたように遺跡範囲中央部に限定されていた。今回の調査ではブロックなどの顯著なものは認められなかつたが、旧石器時代の遺物包含層が遺跡の南限である本工区まで及んでいたことを確認したという点において重要な成果を挙げることができた。

縄紋時代 5b～10層とした地層と、第5・6面が相当する。主な調査成果としては、洪水作用によって地形の変更が頻繁に起こっていた状況を確認することができたことが挙げられる。

調査上の制約もあり、調査地西側の02-1工区に平面調査が限定されたが、南東-北西方向の傾斜を基本として、その傾斜が水成堆積物の堆積によって次第に明瞭になっていく様子も併せて確認できた。

このことを裏付けるように、5b～10層はそれぞれが水成堆積物と、それを母材とする土壤化層であることを確認しており、さらに第6面で検出した流路4と第5面で確認した凹地2の関係に見られるように、それぞれを埋没させる堆土は、極粗砂～中疊までの粗粒の堆積物を主体としている。

このように縄紋時代には、流速の早い大規模な洪水が当該時期に発生したことが想起できる。これら

の堆積物によって地形の逆転現象が生じ、以後の微地形の大きな形成要因となっていることは、すでに第V章において述べたとおりである。

出土した遺物は少なく、6層中と第3面流路3の混入資料として縄文時代晩期末の長原式に位置付けられる深鉢口縁部片が少量出土した程度であり、頻繁な自然地形の改変に象徴されるように人間活動が低調であったことを示している。

**弥生時代前期末～中期初頭** 第4面が相当する。主な調査成果としては、03-1工区2調査区を除く各工区のはば全域で短冊形の水田畦畔を検出し得たことが挙げられる。今回の調査において本格的な人間活動の痕跡が認められる最も古い時期の遺構面である。

遺構面の微地形は調査区南東隅及び南西隅が最も高く、北側中央部にかけて低くなっていく様相を示している。また、縄文時代の堆積によって調査区西側中央部に位置していた谷状の凹地は平坦地となっているが、細かく見ると依然として地形の凹凸が激しいことが確認できた。

本面では、調査区のはば全域に及ぶ水田跡を確認した。

検出した水田は、微地形に合わせて幹線となる畦畔を配置し、その間を直交方向に枝線を配して一筆8～120mの水田面を形成していたことがわかった。

水田造成に当たっては、地形の凹凸が少ない緩斜面を開田の基準として選んでいたよう、上述した凹凸がある調査区西側中央部に位置していた凹凸のある区域周辺は、水田經營には適さなかったようであり、畦畔は認められていない。

なお、南東隅の微高地では、畦畔そのものは認められなかったものの、畦畔の痕跡が一部で認められた。わずかではあるが、水成層である4b層が上部を覆っていたことから、土壤化層である4a層に削平を受けたことは想定し難い。微高地をも用いた水田經營が最終埋没時の段階よりも前の段階で可能であったことを示すものであろう。

灌漑は南北方向に直線的に伸びる堤を持つ溝と、微高地に畦畔沿いに存在する溝とによって行われており、これらの溝から、部分的に設けられた水口によって引水を行い、畦越しの灌漑を行い最終的に地表面へ排水するという構造をとっていたことが判明した。畦による区画の形状はややいびつであるが、おおむね短冊形を示す形状の整ったもので、一筆当たりの面積は最小で約6m<sup>2</sup>、最大で約120m<sup>2</sup>を測る。

ほぼ全域が水田面であることを反映するように、遺物の出土量は目立って少ない。わずかに弥生土器の壺と考えられる底部片と石庖丁が出土したに留まる。

今回検出した水田畦畔の区画と同様の水田造成方法を探る例は、東大阪市池島・福万寺遺跡、京都市左京区京都大学構内遺跡などで検出されている弥生時代前期～中期初頭の水田区画があり、当該期の水田遺構検出例が希少であることを考えると、重要な基礎資料を得ることができたと言える。

**弥生時代後期中葉** 第3・3b面が相当する。当遺跡の成果のうち、特に注目すべき成果が挙がった時期であり、4a層とした土壤層の上面が第3面、その下面が第3b面に該当する。主な成果としては、居住域と生産域から構成される集落を検出したことが挙げられる。加えて、厚い洪水砂の堆積によって当時の旧地表面が良好に残存していたことが当遺構面の特徴であり、中でも周堤と呼称される高まりを備える堅穴建物は、極めて多くの知見をもたらす良好な資料であった。これについては、次節において類例を交えて総括を行う。

主要な遺構は、調査区中央部を南から北方向に走行する流路を境に、東に4棟、西に6棟の堅穴建物を確認したほか、掘立柱建物が29棟、平地建物が2棟、井戸3ないし4基、貯木遺構1、水田跡、水路

が検出できた。また、このほか多くの溝・土坑・ピットを検出している。さらに、旧地表面からは、多数の土器が貼りついた状態で出土している。特徴的なのは完形に近い土器が一定のまとまりをもって認められることである。これに加え、遺構の凹凸に關係なく出土することも特徴の一つである。そのため、一部の遺構出土土器は、厳密には遺構出土の土器ではない場合もある。

検出遺構のうち、居住に伴うものとして、竪穴建物は、標高上もっと高い地点を外すようにしてつくられており、地形的に不安定と考えられる流路3の縁にも營まれていた。それぞれの建物は基本的にそれぞれ20m前後の距離を開けて等間隔に営まれていた。例外的に竪穴建物2・3および9・10は近接して位置しているが、竪穴建物3は無主柱の建物であること、竪穴建物9に改修の痕跡が認められ、10の周堤壠がやや狭くつくられていることなどの諸点をもって、集落が営まれ始めた当初から隣接して位置していたものではない可能性が高い。また、このうち竪穴建物8は唯一周間に周堤を有さない無主柱の建物で、特徴的である。本遺構からは、鐵盤、砥石などの遺物も出土しており、その他の竪穴建物とは性格を違っている可能性が想定できる。さらに、竪穴建物9は床面直上および壁溝内より多くの石器製品・未製品・剥片が確認できた。

掘立柱建物は全部で29棟が検出できており、大半を第3b面において確認した。掘立柱建物の規模は小さく、4×1間のやや大型の掘立柱建物15を除けば、いずれも3×2間の建物を主体として、2×1間、1×1間程度のものである。特徴的なものは桁行間の柱間が異なる建物が存在することで、入口を構成する平地式の建物であった可能性があることである。

さらに、掘立柱建物19では建物内に焼土面を確認できたことから、平地土間式の建物の存在が想定できる。それぞれの柱穴はいずれも小振りである。

平地建物は、想定2m前後の正方形に近い平面プランを有する隅円方形の周溝の存在によって2棟存在すると想定できた。

井戸は10・11・12が西側居住域の中央部に隣接して位置しており、西側居住域で共用されていた可能性が高い。また井戸9は西側居住域の南西端で検出した。井戸10・11は周囲に高さ10cm前後の盛土を施している点が特徴的であった。雨水の流入等を防止する役割を持たせていたものと考えられる。

水田は西側居住域のさらに西側に位置するわずかな地形の低まりを利用して営まれていた。今回の調査区ではその一部を確認したに過ぎないが、本来は南側に導水施設を持ってさらに展開していたことが予測される。今回の調査でも導水施設は確認できており、西側居住域との境を画する溝47・48・49が相当すると考えられ、部分的に水口が設けられていた。今回の調査では、谷状を示す微地形に合わせるようにして畔を配し、最も低い地点で水口が設けられており、その先には排水溝である溝46が位置していた。

貯木遺構は西側居住域の中央部、流路3に面して位置している。流路の走向方向とは直交する軸を有しており、内部からは多くの木器製品・未製品・原木の類が放置された状態で出土した。製品としては有頭棒が認められたのみである。対象とする製品とは規模が異なるが、未製品・原木と一連の作業工程を示す遺物が確認できたことから、貯木遺構であると想定できた。

遺物は、前述したように地表面に貼りつくようにして出土した、多数の土器のほか、木器、石器、鐵器、玉と賞・量ともに豊富に認められた。

出土した土器の構成は、壺31%・甕15%・鉢14%・高杯19%・器台4%と壺が突出して多く、器台が少ないほかは概ね近似する。それぞれの土器が示す型式は概ね近似しており、河内V-2~3様式に取

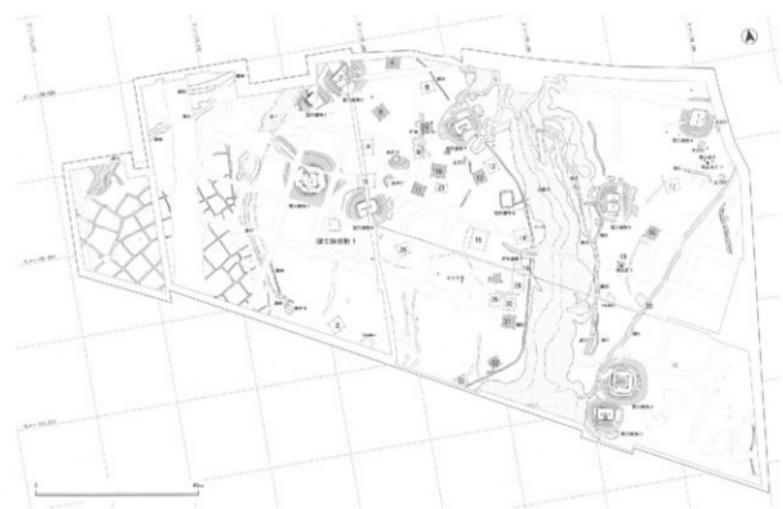


図261 弥生時代前期末～中期遺構配置図（上）　弥生時代後期中葉遺構配置図（下）

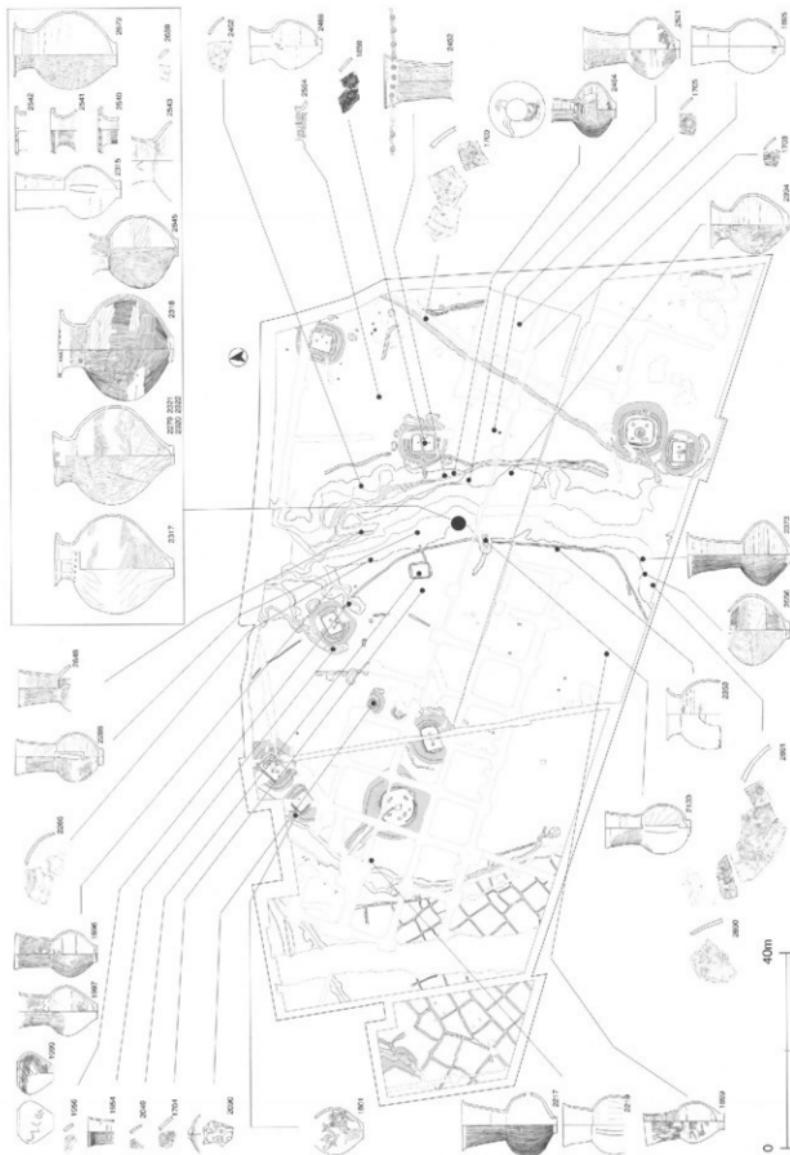


図262 弥生時代後期中葉絵画土器・記号紋土器出土位置図

まるようである。その一方で、長頸壺などでは、わずかながら型式差が認められ、その他の器種においても長頸壺ほど顕著ではないものの、若干ながら型式差が認められる。

遺構の検出状況が短期間機能－廃棄された可能性があるということを併せて考えると、型式推移の早さが必ずしも時期差を示さない可能性が想定できる。出土遺構別に見ると、竪穴建物7の外周土坑からは有孔鉢が多い等といった遺構別の組成上の特徴もわずかに認められるが、特に日立った組成差を示す訳ではなく、使用の場を示すものとは考えにくい。

特筆すべき遺物としては、まず絵画・記号紋土器の存在が挙げられる。もっとも注目すべき遺物として、竜をモチーフとしたと考えられるものがある。その他の絵画土器は、河内V-2~3様式という帰属時期が示すように弥生時代後期以降に認められる絵画土器の特徴として、記号化したものが多い。一方で、竜をモチーフとする絵画土器については、表現手法が精緻である点が挙げられる。

本遺跡の北側に位置する龜井遺跡では、横方向の上弦の弧線が施される例が認められる。春成氏の提示した記号化の過程に則れば、この弧線は鹿を示すものと考えられ、これは自然界と陸を示す要素として位置付けられている。

一方、八尾南遺跡では、これらのモチーフを元とする記号紋は斜線と直線の組み合わせによる建物が多く、陸の要素が建物に置き換えが成されているということになる。こうした遺跡単位での陸・海・空の各構造を機軸としたモチーフの置き換えがどのような経緯で形成されたかということについては、今後の資料のさらなる蓄積と近畿地方全体を見渡した上での遺跡単位程度の小地域差と領域の設定が必要と考えられる。

以上のように、第3・3b面では、短期間の間に營まれ、放棄されたと見られる弥生時代後期中葉の集落を検出することができた。残念ながら墓域を検出することはできなかったが、居住域・生產域を構成する各遺構が展開する状況を確認できたことが大きな成果と言え、貯木遺構の存在も含め、集落の一単位として集落像を想定することのできる、極めて良好な資料であると言える。加えて、春成氏が提示した環濠集落の解体に伴う、集落の分散化と農耕儀礼の変容という観点〔春成1991b〕からも、絵画土器の出土は極めて意義深い。

**弥生時代後期末～古墳時代初頭** 第2面が相当する。3層掘削中に検出し得た遺構も、当該期に属する可能性が高い。検出し得た遺構面は異なるが、出土遺物の示す年代観からも、ほぼ同じ時期に帰属する遺構であると考えることが可能であるため、ここでは一括して記述しておく。

微地形は南東・南西端から北端中央部へ向かって緩く傾斜する。その中でも調査区西側に位置する流路1へ向かってわずかに谷状地形を示している。

主な成果としては、多量に廃棄された土器を含む流路を境として西側に居住域、東側に墓域を検出したことが挙げられる。特に墓域では前方後方形を呈する周溝墓を含め、36基以上に及ぶ多数の周溝墓を検出し、当該期の墓制を考える上で、重要な知見を得ることができた。

主要な遺構としては、700個体以上を数える多量の土器の廃棄が認められた流路・竪穴建物・掘立柱建物・井戸・周溝墓が認められ、そのほかに多数の溝・土坑・ピットを検出している。

検出遺構のうち、居住域に伴うものとしては竪穴建物・掘立柱建物・井戸を検出した。これらの遺構は掘立柱建物23が調査区東端、36が流路1の東側に位置するほかは、すべて流路1の西側に位置しており、後述する墓域と居住域が分けられていた可能性が高い。

墓域に伴うものとしては、周溝墓がある。検出し得た総数は36基以上を数え、調査区の大半を墓域と

して占有する、一大墓域であることを確認した。周溝墓は大半が方形ないしは長方形の平面プランを示すものであるほか周溝墓21・30は前方後方形を示している。このほかに周溝が3辺のみに巡るものも見受けられた。陸橋部が設けられる周溝墓は主体を占めず、陸橋の設置位置は、短辺側の中央部よりに設けられている。

周溝墓の規模は大型のもの（周溝墓10・20・25・26・35）、中型のもの（周溝墓1・3・4）、小型のものの3者があり、大型のものは概ね10m以上の距離を開けており、その間を埋めるように中型の周溝墓が、小型のものは大型のものに密接な位置に、それぞれ造墓されているという傾向が認められる。

周溝墓は連結するものについては、溝を共有しており、それぞれの周溝埋土に重複関係は認められなかった。

以上の居住域と墓域を画するものとして、流路1が存在する。前述したように埋土中から700個体以上を数える大量の土器が出土し、完形のものが大半を占めることや平面位置、垂直位置の上でもまとまりを有していることから、廃棄行動が行われたものと想定し得た。この流路は第2面では検出することができない流路であることが断面観察の結果明らかとなっている。しかしながら、埋土中に含まれる土器は後述するように帰属時期の上から第2面検出遺構中に含まれる土器に近似し、その中でも最古相を示すことから、第2面の墓域・居住域と極めて相関性が高いと考えることができる。

遺物の上では各周溝墓から出土した土器のほかに、流路1、溝40から出土した多量の土器が注目できる。流路1や溝40から極めて多くの土器が出土するのに対して、各周溝墓における土器出土量は希薄である。周溝墓内出土遺物に乏しいため、それぞれの周溝墓が帰属する時期、造墓活動の順番については、明らかでない部分が多い。したがって溝40と各周溝墓の相対的な関係がどのように有機的に関連しているのかという点について、明らかにできれば、本遺跡における葬送のあり方を示すことができる。

そこで、第2面と3層中遺構面に帰属する各遺構出土土器の編年的な位置づけを通して、本遺跡において検出した墓域の展開を考える上で手がかりとして土器を見ていくこととしたい。近年、中河内地域における弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器編年は杉本編年〔杉本2001・2006〕を筆頭に、西村氏の様相整理〔西村2006〕、原田編年〔原田2003〕など精緻さを増し、極めて短いスパンで時期区分が設定されている。それらの編年根拠となっている主要器種は有稜高杯や壺である。特に有稜高杯の杯部の口頭比・口稜比を属性として形態変化を読み取る手法は、比田井克人氏の成果〔比田井1985〕以来、当該期の土器を考える上で、極めて重要な属性として広く用いられており、型式変化とも良く呼応することから、その有効性も実証されている〔西村1996・原田2003〕。そこで、主に周溝墓・土坑の資料に加え、溝40と流路1をその対象として、その中に含まれる有稜高杯の示す法量的な属性を図264に示した。この図からは、近隣に所在し、有効な資料数が確保できている久宝寺遺跡の資料、既存の編年根拠となっている資料のドットを示しているほか、同様の分析が行われている例として、地域は異なるが、下出遺跡の検討結果も合わせて表示している。この結果から読み取ることとして、流路1と溝40が資料数に比例するように、互いがラップするような値を示す土器が多く、その間を埋めるように周溝墓・土坑出土資料が位置する状況が認められた。標識資料との比較からは、本遺跡出土資料は河内VI-1様式から庄内I式までの間に位置付けられ、その間にはVI-2様式（北鳥池下層式（庄内0式）を含む）の1小様式が存在しており、大別して3つの小様式が存在している。一方、現段階において最も精緻な杉本編年では、様相12～20までの9様相がこれに相当する。杉本編年においては、資料的な制約も手伝って

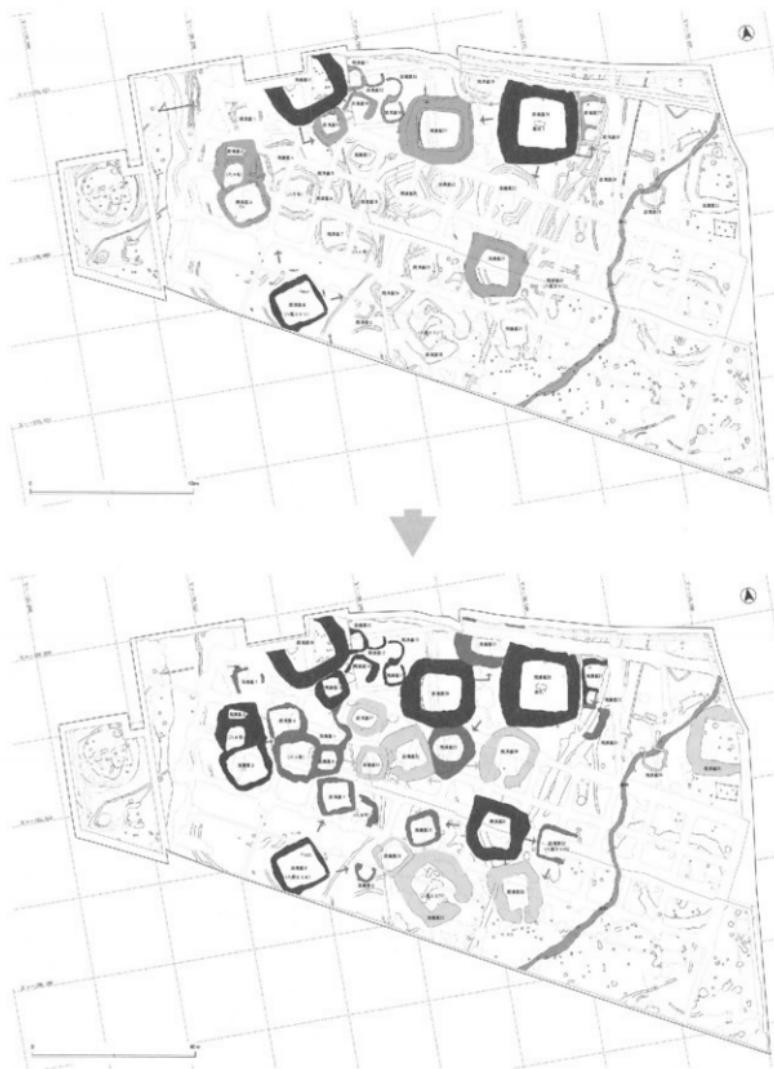


図263 弥生時代後期末から古墳時代初頭遺構配置図・変遷図

か、基準となる有稜高坏の位置づけがやや不明瞭なため、詳細は明らかでないが、図示した久宝寺遺跡土器集積出土資料を検討した原田氏の北鳥池下層式の再検討を基に比較検討すると、久宝寺遺跡資料は大きくは河内VI-2様式から北鳥池下層式の中に3段階が認められる。細かな相連点はあるものの、杉本・原田両氏とともに大別1小様式を3段階に細分するという点では合致している。そこで当遺跡出土のものを検討すると、①流路1出土資料と周溝墓8・10出土資料を基とする口縁比70~80・口縁比15~20を示すもの、②流路1の一部と溝40の北側を中心とする一部、周溝墓13・16・31を基とする口縁比68~75・口縁比18~23を示すもの、③溝40の一部と周溝墓22・29、S X13出土資料を基とする口縁比63~68・口縁比21~25を示すもの、溝40の南側を中心とする一部と周溝墓18・29の一部出土資料を基とする口縁比50~63・口縁比24~30の大きく4つの範囲にピークを持つことが読み取れる。④は庄内1式の成立と目される刑部土坑S X01出土土器と同じ範囲に位置することから、庄内1式に相当すると考えられ、①は既存の編年における河内VI-2様式以後の値を示すことから、①~③に示す各範囲は原田氏や杉本氏の提示した庄内0式（北鳥池下層式）の3細分に相当する可能性が高い。

このように概ね4段階程度に分けられる遺構の時期区分から当遺跡における墓群形成について復元を行ふと、①流路1への廃棄行動とともに周溝墓8・10・26などの大型周溝墓が20~30m程度の距離をあけて造墓される。②溝40の開削と北側を中心とする土器の廃棄。周溝墓10の南・東側に小型の周溝墓13・16が、周溝墓26と周溝墓8からほぼ等間隔の地点に周溝墓31が造墓される。③溝40への土器の廃棄。中型の周溝墓22・29などが周溝墓20や26に隣接するように造墓。④溝40への土器の廃棄。小型の周溝墓18、前方後方形周溝墓の造墓。以上の4つの段階が設定できる。高坏が出土していないため、詳細は述べていないが、その他の土器形式の型式差とその併行関係から、これらの4段階にすべての周溝墓を当てはめると、弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけて、自然地形の改変（3層の堆積）→土器廃棄行動（流路1）と定着（堅穴建物11・井戸5・掘立柱建物）、それと相前後して始まる造墓活動が北側に位置する大型の周溝墓（周溝墓10・26）を中心に、周辺の空闊地を埋めるようにして大きく南側へと推移していく状況が復元できた。各周溝墓の帰属時期を決定するべき土器の出土量が限定される中での推論であり、大まかな傾向を示したに過ぎないが、溝40に含まれる土器のうち、型式的に新相を示す庄内1式段階以降のものを含む率が高くなっていることも、このことの証左となろう。

なお、余談ではあるが、下田遺跡との相關性を確認しておくと、法量上の数値は、いずれも下田遺跡の方が一段階ずつ遅れる結果となっており、こうした違いが、時期差によるものであるのか、地域差に起因するものであるのかという点については、更なる資料の蓄積と、検討を加える必要がある。どの時期・段階をもって庄内式の成立とみなすかという点については、本書では触れないが、古墳時代の始まりを考えるうえで、極めてデリケートな問題を含む時期であるだけに、重要な基礎資料を得ることができたと言える。

**古墳時代中期～後期** 第2面が相当する。埋土は主に砂礫を多く含む黄灰色シルトを基調とする。

微地形は南東・南西端から北端中央部へ向かって緩く傾斜する。その中でも調査区西側に位置する流路1へ向かってわずかに谷状地形を示している。

検出遺構そのものはそれほど多くはないが、古墳・井戸・溝を検出し得た。同一面において検出した弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の周溝墓群の埋土の堆積状況と出土遺物から、当該期には、依然として方形周溝墓の造墓によって形成された凹凸がわずかに残っていたようであり、古墳などの大振りな遺構はそれらをすべて外した位置につくられている。

検出した遺構のうち、古墳は全部で3基以上が確認でき、研究会1次調査によって確認できていた古墳も含めると、総数で5基となる。墳形は、周溝の形状から、円形（古墳1）、方形（古墳2・八尾南4・5号墳）、帆立貝形（古墳3）の3者が認められ、そのうち方形の古墳2は周溝が「コ」字形を呈する小規模墳である。周溝内に含まれる遺物は少ないが、古墳1・2が5世紀後葉から6世紀初頭までに、古墳3が6世紀前半で築造されたことが明らかとなっており、墓域の形成にあたって西から東へという動きが認められる。

井戸は3基認められ、いずれも遺物を多く含み、人為的に埋め戻された様子が窺われる。埋土中には桃核やヒヨウタンの種などの種子類も含まれており、古墳築造と相前後した時期に祭祀が行われた可能性が想定できる。このほか、調査区を南西～北東方向に微地形を無視して延びる溝（溝28）を確認した。この溝は弥生時代後期末～古墳時代初頭の周溝墓を破壊しながら延びている。性格は不明であるが、微地形が中央部に向かって凹であることを考え併せると排水のために掘削された可能性も想定できる。

出土遺物の上では、井戸や土坑を中心にまとまった数量が出土しており、当該期の良好な資料を得ることができた。特に須恵器は伴わないものの、須恵器出現前後に帰属すると考えられる土師器が一定出土しており、当該期の土器編年の基礎資料となる資料を得ることができた。

**古代** 第2面に帰属する。埋土は主に2層が落ち込んだものである。主体を占めるものではなく、7～11世紀までの遺物が出土した。検出遺構そのものはそれほど多くはないが、出土遺物の上では、溝を中心て一定量出土しており、当該期の良好な資料を得ることができた。

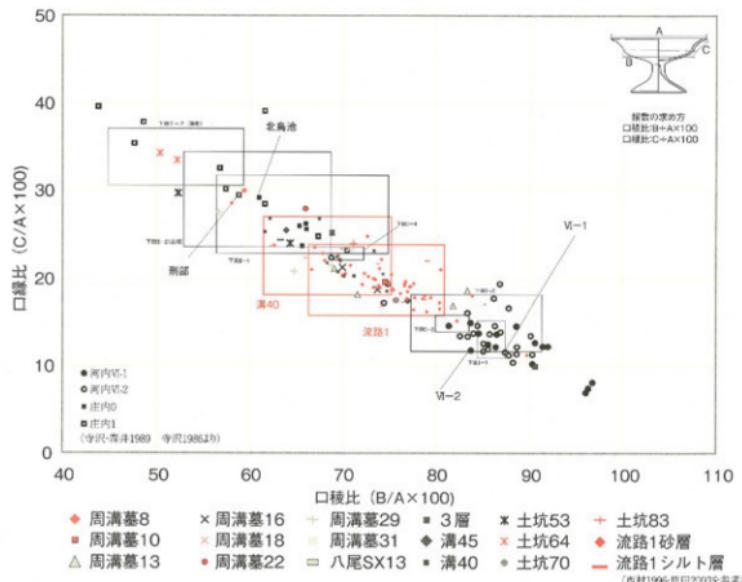


図264 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭高坏法量指數グラフ

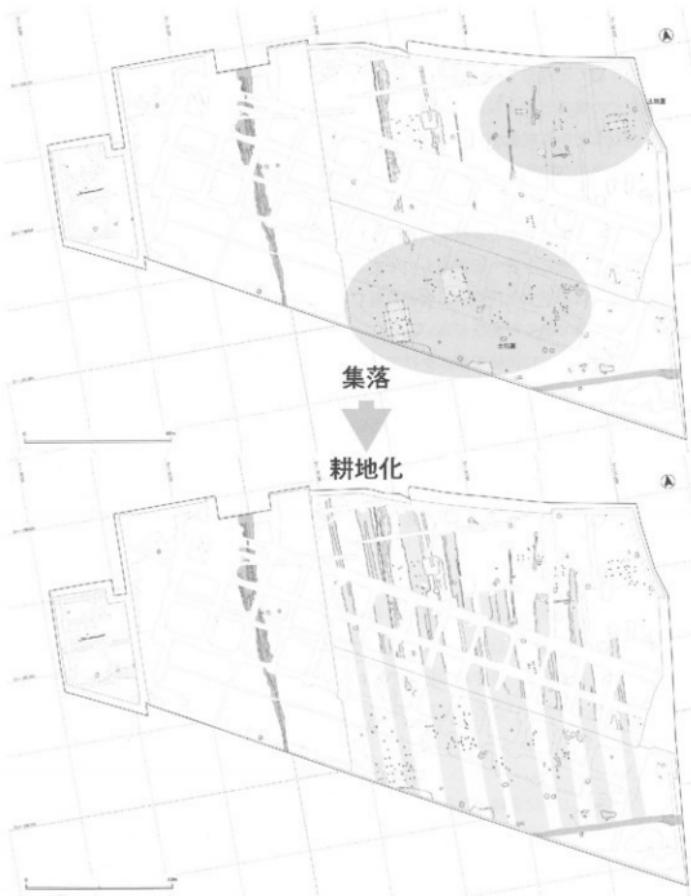


図265 中世前期・中世～近世遺構配置図・変遷図

中世 第1面が相当する。埋土は1層ないしはオリーブ灰～灰黄色シルトである。

微地形は南～北へと緩やかに傾斜する地形を示す。主な成果としては、11世紀末～12世紀中葉にかけての居住城と墓、耕作に伴う溝を検出したことが挙げられる。

遺構の上では、調査区中央部南側に位置する大形の掘立柱建物24の存在が特徴的である。四面庇の建物と想定できる掘立柱建物24は、3間×2間の柱配置をとる。付近に区画溝等の機能が想定できる溝が認められなかつたため詳細は明らかでないが、これらの大形の掘立柱建物の近辺で土坑墓が認められたことは興味深い。鑑定の結果、土坑墓に埋葬されていた人物は、成人の男性であったことが判明している。

出土遺物の上では、井戸や土坑を中心にまとまった数量が出土しており、当該期の良好な資料を得ることができた。出土した土器の大半は、南北に伸びる溝14と土坑14からの遺物が大半を占めるが、いずれも瓦器椀の編年観で和泉型Ⅰ～Ⅲ～Ⅱ～Ⅲ期の所産のものが多く認められることから概ね11世紀末から12世紀中葉までの集落と考えられる。土坑14の出土土器は12世紀中葉のものを主体としており、多数の土器・石を含むことから廃棄土坑である可能性が高く、集落の廃絶に伴って掘削された可能性が高い。このことから、集落の存続期間を12世紀中葉までには廃絶されていたものと想定することが可能である。

また、このほか第V章において詳述したように、条里地割に即した坪境の水路と見られる溝が調査区西側で南北方向に、調査区東側で東西方向に認められた。これらの溝は1層上部を起源とする土を埋土とすることから、後述する中世～近世のものである可能性もあるが、最下部の埋土が1層上部ではなく、わずかに出土した遺物が示す年代観が11世紀以前であったことから、集落の成立と前後して耕地の拡大が行われた際の坪境溝である可能性が高い。

以上のように11世紀末～12世紀中葉にかけて機能した集落を検出した。

近隣に所在する遺跡で同時期の集落には、大阪市長原遺跡と今回の調査区南東側に位置する藤井寺市津章遺跡があり、集落域の形成と耕作地の拡大という…連の現象を理解するための重要な資料を得ることができたと想定できる。

中世～近世 第1面が相当する。埋土は1層の上部が落ち込むものである。

微地形は南～北へと緩やかに傾斜する地形を示す。主な成果としては、耕作に伴う遺構を検出したことが挙げられる。

検出遺構としては、南北方向に延びる幅の広い耕作溝群や直交する擬似畦畔を検出した。

出土遺物の上では、耕作溝内および1層中からわずかに遺物が認められ、溝内から出土したものに瓦質土器を含むことから、14世紀以後に帰属するものと考えることができる。

当該時に帰属する遺構は、耕作地の拡大が行われた状況を示しており、条里地割に沿った方向にのびる南北方向の溝は、幅が広いことから島畠などの土地利用が行われた可能性を示唆している。

### 3. おわりに

以上、概観してきたように各時代を通じて極めて多くの知見を加えることができた。特に、弥生時代後期中葉に位置付けられる第3・3b面において検出した集落は、短期間に形成され、廃棄されたものと想定でき、当該期の集落のあり方について重要なデータを示すものであると同時に、厚い洪水堆積物によって守られた堅穴建物を中心とする各遺構の示す構造はほぼ当時の状況を明瞭に留めるものであることから、今後の弥生時代後期集落の検討において基礎的な資料となることが予測される。加えて質・量ともに豊富に認められた遺物は、資料数に乏しい当該期の編年的な位置づけを示す標準資料となり得るものである。さらに、水に関する遺構から出土した絵画土器の存在は当該期の祭祀のあり方を示す良好な資料であるとともに、極めて精緻なタッチによる具象的な表現手法は、絵画土器研究にも大きく寄与することのできる資料であると言うことができる。

このほかに旧石器時代の遺物包含層の確認、弥生時代前期～中期の水田、弥生時代～古墳時代への移行期の墓刷、古代末～中世前期にかけての耕作地の拡大と集落の成立など、河内平野南部地域の歴史を考えるうえで、極めて貴重な多くの知見を加えることができた。

(正岡)

## 第2節 弥生時代後期の竪穴建物について

### 1. はじめに

今回の調査成果の中で最も注目すべき遺構として、弥生時代後期中葉の遺構面である第3面で検出した竪穴建物群が挙げられる。北流する流路を挟んでその両岸に構築された10棟の竪穴建物は、遺構面全体が厚い洪水堆積物に覆われ、旧地表面がほぼ当時に近い状態で残されていたこともあって遺存状況が極めて良好で、第V章で報告した各竪穴建物についての調査所見は、今後、竪穴建物の構造を復元していくうえで第一級の資料になるものと考えられる。

そこで本節では、今回の調査で得られた竪穴建物の構造に関する情報を施設ごとに改めて取り上げ、各地の類例【岡本茂2006】や関連遺構も参考にしつつ、若干の検討を行うこととしたい。

### 2. 竪穴と竪穴外施設

**竪穴建物の立地** 竪穴建物の諸施設について触れる前に、それぞれの建物が構築された土地条件、すなわち旧地表面の微地形を再度確認しておきたい。

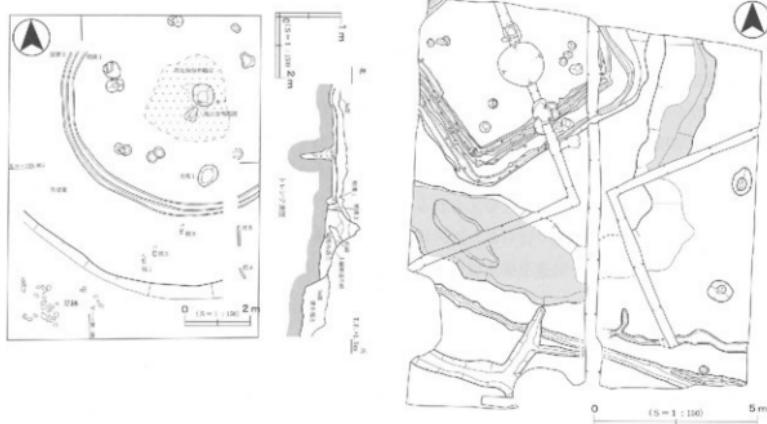
第V章第4節の冒頭でも述べたように、竪穴建物群が確認された第3面の地形は、基本的に下位の第4面のそれを踏襲しており、居住域中央を流れる流路3を境として、東側は南東から北西、西側は南西から北東方向へ向かって緩やかに傾斜していた。ただし、流路の東岸では元来標高の高い南東側を中心にして土砂が供給されて比高差が拡大する一方で、西岸では第4面において最も標高が高かった西端部で土砂堆積があり進行せず、逆に中央部は中央南側から土砂の供給があったためか舌状に高くなっている。地形的に逆転が生じている。

そのような上地条件の下、東・西両居住域に分かれて分布している竪穴建物は、地形的に最も高い場所には構築されず、むしろ図121からも判るようにその外縁の緩傾斜地を選地しており、八尾南集落の1つの特徴とも言えよう。

**竪穴の掘削** 竪穴建物の構築場所が決定されると、次に実行されるのは竪穴の掘削である。通常、我々が調査を行う集落遺跡では、旧地表面を含む遺構上部が後世の削平によって大きく失われていることが多く、近年、及川良彦氏が改めて削平模式図で示したように【及川2004a】、竪穴建物と称しながらも竪穴の周壁の高さが数十cm、時には壁溝のみが巡っているだけの例が大半を占めている。このことは同時に、遺構が本来保有していたと予想される数多くの情報が欠落していることを物語っており、竪穴建物の立体構造を復元していくうえで大きな障壁となっている。これを克服するためには、及川氏が進めているような旧地表面が良好に遺存する遺跡検出例との比較や、地形変更のより少ない事例の再検討が不可欠となろう【及川2004b】。その点から、当時の地表面が明確に把握し得た本遺跡の調査成果は、冒頭でも記したようにまさしく前者の最良な事例の1つとなるものである。

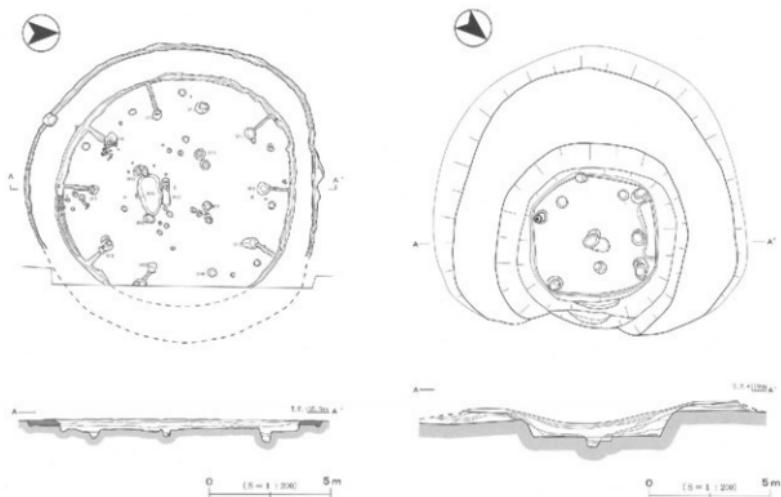
竪穴の掘削深度に関しては、火山災害によって廃絶した集落として知られる群馬県渋川市黒井峯遺跡【子持村教委1991】で旧地表面から1.4m前後、同じく渋川市中筋遺跡【渋川市教委1988】で0.7m前後という報告が行われているが、本遺跡の場合0.6m前後が平均で、竪穴建物2が最も深く0.8m、竪穴建物10では0.45m前後であった。

なお、いずれの竪穴建物にも、竪穴の掘削土と推定されるシルト層主体のブロック土によって厚さ0.05~0.2mの貼床が施されていたが、竪穴建物1・9では床下となる竪穴掘り方の底面で周壁際を巡



1. 若江北遺跡(大阪府東大阪市)  
5次調査 平地住居 1

2. 長原遺跡(大阪府大阪市)  
NG89-8区 整穴住居



3. 東本遺跡(愛媛県松山市)  
4次調査 2区 SB203

4. 妻木晩田遺跡(島根県淀江町)  
洞ノ原地区D区 8号住居跡

図266 周堤・周溝(外周土坑)を有する建物(1)

る溝状遺構が掘削されていた。竪穴建物1・9は、後述するように東・西居住域に1棟ずつ分布する大型・中型建物であり、除湿対策などを目的として特に念入りに施工されたものであろうか。同様の遺構は群馬県でも知られ、飯島義雄氏によって取り上げられている〔飯島2005〕。

竪穴の平面形態と主柱配置 改めて述べるまでもなく、竪穴建物とは地面に穴を掘削してその上に屋根を架けた半地下式の建築物であり、竪穴の平面形態と屋根を支持する主柱の配置は、これまで竪穴建物の時代的な変化や地域的差異を考究する重要な属性とされてきた。

今回、本遺跡で確認された竪穴建物は、竪穴の平面形態と主柱配置から以下の4つに区分することが可能である。

- ①径8m前後の不整円形を呈し、5本主柱のもの〔竪穴建物1〕
  - ②一辺約7mの隅丸方形を呈し、4本主柱のもの〔竪穴建物9〕
  - ③長辺5~6m、短辺3.5~4.5mほどの長方形あるいは小判形を呈し、長辺と平行に2本の主柱を有するもの〔竪穴建物2・4~7・10〕
  - ④長辺4~4.4m、短辺3.3mの長方形を呈し、無主柱のもの〔竪穴建物3・8〕
- 壁溝内側における床面積は、①が42m<sup>2</sup>（約26畳）、②が25m<sup>2</sup>（約15畳）、③が12.5~15.3m<sup>2</sup>（7~9畳程度）、④が9.3・9.8m<sup>2</sup>（6畳前後）を調り、その広さによってそれぞれ大型・中型・小型・極小型に区分することが可能である。

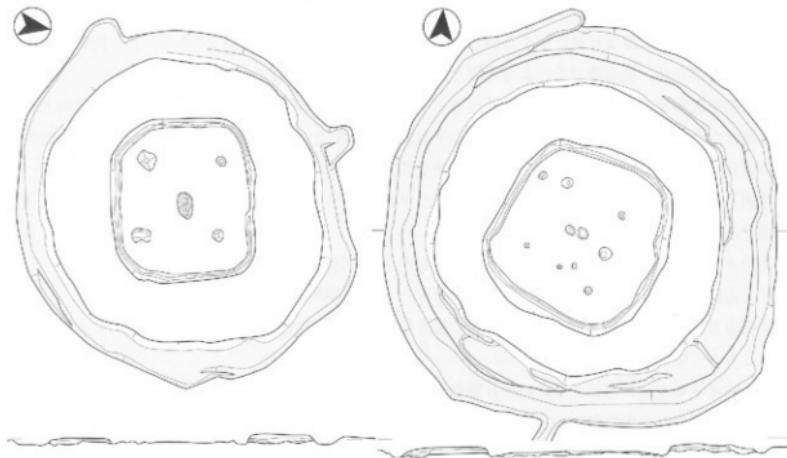
このうち、③の小型建物は、過半数を超える東・西3棟ずつの計6棟が検出され、八尾南集落における一般的な住まいであったと推定される。2本主柱を有する長方形建物は、これまでに本遺跡に近接する大阪府大阪市長原（城山）遺跡や同枚方市星丘遺跡など、河内地域の弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡で数例が知られているが〔三好2006〕、本遺跡のように集落を構成する主体的な建物遺構として確認された例は初めてであり、出現の経緯や系譜を明らかにすることが今後の課題となろう。

なお、竪穴外施設ではないものの主柱に関して付言すると、今回の調査では3棟の建物で計4本の主柱基部が遺存していた。柱の太さは径14~18cmで、黒井峯遺跡の調査成果などから竪穴建物の柱径はせいぜい20cm程度が一般的とされてきた従来の見解を裏付けることとなった。主柱穴の大きさは、基部が確認されたものが上端で長径0.25~0.32mであるのに対し、他は0.35~0.6mと大きくなっている。柱を抜き取る際には、柱を回すなどして柱穴を広げている可能性が考えられる。

周堤の検出 竪穴建物8を除く9棟の竪穴外周で周堤が確認され、弥生時代集落の建物としては、終戦前後に調査が実施された静岡県静岡市登呂遺跡〔日本考古学学会1954〕以来のまとまった良好な成果となった。

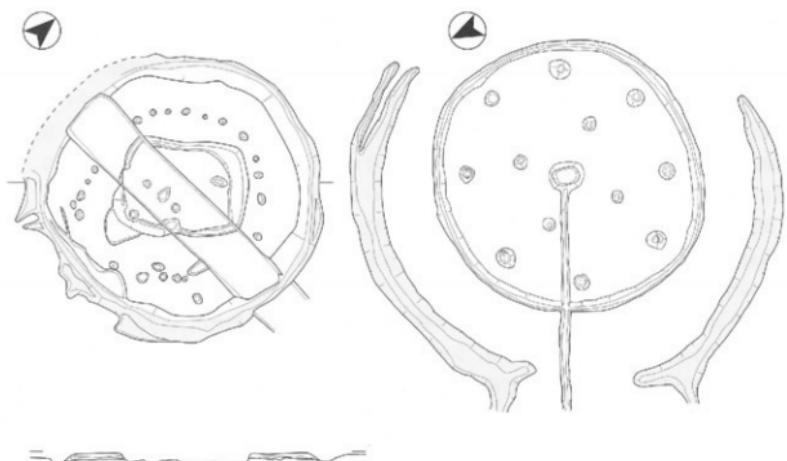
検出された周堤はいずれも旧地表面である4層の上面に盛土によって築かれ、盛土には竪穴や外周土坑・排水溝などの掘削排土と考えられる、シルト層を主体とした細粒の土砂のブロック混合土が用いられていた。堤は残りの良い箇所では断面台形を呈し、幅2~3m、高さ0.2~0.4mを平均的な大きさとするが、竪穴の周縁際では周堤盛土の崩落・流入土と考えられる土層の堆積が認められることから、本来の堤の上端はもう少し上位であった可能性が高い。その場合、0.65~1.0mであった堤上端から床面までの深さは、さらに数値を増すことになろう。また、黒井峯遺跡では入口付近を特に高く盛っているという所見が示されているが、本遺跡の場合は、立地の影響からか、旧地表面の低い側を他よりも高く盛り上げている傾向を看取することができた。

なお、かつて藤田憲司氏が言及したように〔藤田1984〕、周堤の外縁までを1棟の竪穴建物の占有面



1. 下老子笠川遺跡(富山県福岡町) A 7 地区 SI02

2. 下老子笠川遺跡 A 7 地区 SI01



3. 下老子笠川遺跡 A 8 地区 SI201

4. 八里向山A遺跡(石川県小松市) SI02

0 (S = 1 : 360) 10m

図267 周堤・周溝(外周土坑)を有する建物(2)

積と捉えた場合、堅穴建物 1 で 160m<sup>2</sup> 以上、堅穴建物 9 で 110m<sup>2</sup> 以上となり、小型・極小型の堅穴建物でも 60~70m<sup>2</sup>・45m<sup>2</sup> と、堅穴の床面積と比較して 5 倍前後に拡大している。

**周溝・外周土坑** 周壁から一定の距離を置いて堅穴を囲繞する溝状構造で、近畿地方以西の地域においては、内周溝（＝壁溝）と区別するために「外周溝」と呼称して、早くから建物遺構に付随する遺構として認識されてきた。さらに、堅穴と溝との間に周堤の存在を指摘する意見〔武田1998〕も示され、近年では、堤の存在を前提に「周堤溝」と呼ばれるものもある〔濱田2002〕。

一方、東海地方東部以東の東日本では、1990年代後半以降、主として低地遺跡で検出された方形周溝墓の再検討を通じて「周溝をもつ建物」の存在が指摘され〔飯島1998・2003・2004、及川2002・2004a・2004b・松井2002ほか〕、飯島義雄氏は、本遺跡と同様の条件下で周堤を有する堅穴建物が良好な状態で検出された長原遺跡例〔今津1990・1991〕を参考として、周溝の内側に周堤の存在を想定している。事実、本遺跡や長原遺跡以外にも、近年の登呂遺跡の再調査〔静岡市教委2000~2004、岡村2002〕や富山県高岡市下老子篠川遺跡〔助富山県文化振興財団埋文事務所2006〕において周堤・周溝の両者を有する建物が確認され、周溝のみが検出された静岡県御前崎市南谷遺跡〔浜岡町2003〕や石川県小松市八里向山A遺跡〔小松市教委2004〕・同県珠洲市柏原ミツハシ遺跡〔助石川県埋文セ2004〕においても、断面観察によって周溝内側に堤が存在していたことが報告されている。

さらに、西日本と同様に1970年代末から資料の蓄積が進んでいた北陸地方では、19棟の「周溝をもつ建物」が検出された下老子篠川遺跡の調査を担当した岡本淳一郎氏によって、同地方のみならず全国を視野に入れた形式分類と変遷が示されている〔岡本淳1997・2003・2005・2006〕。

本遺跡で検出した堅穴の周囲を土坑数基が周溝状に巡る例は、岡本氏の形式分類の「土坑式堅穴建物」（最新の分類では「広溝式堅穴建物 - 土坑型」）に当たるなり、本書で「外周土坑」という用語を用いた理由もここに求められる。同氏の集成作業に掲れば、「土坑式」は大阪府守口市八雲遺跡〔大阪府教委1987〕や福井県坂井市下屋敷遺跡〔福井県教育庁埋文セ1988〕の検出例から、「周溝をもつ建物」の中では最も古い弥生時代中期前葉から中葉初頭に出現し、その後、近畿地方では中期後葉の兵庫県三田市有鼻遺跡〔兵庫県教委1999〕、後期中葉の本遺跡と、断続的ながら継続して存在している。

一方、岡本氏が「広溝式」と呼ぶ幅広の溝が巡る例も、飯島氏の復元モデルの基となった長原遺跡の後期例（開口型）をはじめ、大阪府東大阪市瓜生堂遺跡の中期後半例（開口型）〔大阪府教委・助大阪文セ1980〕や前述した長原（城山）遺跡の後期中葉例〔大阪府教委・助大阪文セ1986〕、さらには同羽曳野市尺度遺跡の古墳時代初頭例（開口・圓錐型）〔助大阪府文調セ1999・助大阪府文セ2003〕で知られ、最近では弥生時代後期後半の東大阪市新上小阪遺跡において、開口型の広溝式建物が 2 棟検出されている〔助大阪府文セ2005〕。大阪府以外でも滋賀・岡山・香川の各県で検出例が報告されており〔近藤2005、津山市教委1982、香川県教委・日本道路公团1987など〕、弥生時代中期後半以降、中国・四国・近畿の広い範囲にわたって分布していることが判る。

さらに岡本氏が最新の分類で溝幅 0.7 m 以下と基準を改めた「狭溝式」も、大阪府高槻市紅茸山遺跡の後期例（馬蹄型）〔原口1973・1977〕のほか、岡山県岡山市百間川原尾島遺跡の後期中葉（開口型）と後期末（馬蹄型）の各例〔建設省岡山河川工事事務所・岡山県教委1994〕、鳥取県淀江町妻木晚田遺跡の後期後半例（馬蹄型）〔濱田2002〕、福岡県農前市田代後遺跡の後期末例（馬蹄型）〔福岡県教委1994〕などが知られ、先の 2 形式よりやや後出して西日本地域全体に広がっている。また、紅茸山や妻木晚田遺跡例など丘陵上の高地に立地するものが出現している点もこの類の特徴であろう。

周溝の性格・機能に関しては、西日本では早くから雨落溝と認識され、岡本氏や松井一明氏からは防護や排水機能が想定されている。こうした見方はほぼ正鶴を射ているものと推定されるが、及川氏が指摘するように同一集落であってもすべての建物に周溝が伴うわけではなく、その差異の究明が今後の課題となろう。なお、本遺跡の場合、外周土坑は念入りな水対策を講じていた大・中型の堅穴建物1・9や極小型の3・8に認められず、住居と捉えた堅穴建物2・4・6・7・10の小型建物のみに伴っており、建物の機能差が周溝の有無に関わっていた可能性を示唆している。

### 3. 堅穴建物の諸施設

堅穴内の埋積状況から看取されるように、堅穴建物の発達は洪水禍災が直接的原因となったわけではなく、洪水堆積物による埋没が始まるまでは、上屋の解体・移転→周堤盛土・周壁の崩落・流入という過程が入るだけ時間的猶予が存在していた。そのため今回の調査においては、上屋に関する情報を得ることはほとんどできなかったが、堅穴内の諸施設については、周壁際で三角形状に堆積した流入土や冠水によると推定される細粒の堆積物に保護されて、重要な情報が数多く残されていた。

**壁構造** 堅穴建物の壁については、床面に遺存していた建築部材や焼失建物内の炭化材・炭化物、壁溝底面に残された杭痕跡などの検討から、板壁や土壁（塗り壁）、アンペラ状の繊物や植物繊維による網代で表面を覆った網代壁などが復元されている。

板壁に関しては、近年行われた登高遺跡1~49号住居跡の再調査において床面を一周する深さ0.15~0.2 mほどの板の据え跡が確認され、1949年（第4次）調査で床面上に遺存していた板材端部の位置と据え跡の検討から、これらの板材がかつて都出北呂志氏によって想定【都出1975】されていた板壁の羽目板であることが確実となった。今回の調査においても、堅穴建物4の壁溝底面の一部で板材の据え跡の可能性がある帯状の穴が連続して認められたが、他の堅穴建物では検出し得なかつたため、可能性を指摘するに留めたい。

一方、鳥取県内では弥生時代後期を中心に150例を超える焼失堅穴建物の調査が行われ、淀江・大山両町の斐木晩田遺跡では、米子市古市宮ノ谷山遺跡の焼失建物の周壁際で確認された網代状の炭化物を根拠として、洞ノ原地区で整備・復元された土屋根堅穴建物の周壁に杉皮で編んだ網代をあしらっている【畠田2004】。このような周壁を網代で覆った例は黒井峯遺跡でも知られ、竈を除いた周壁の全周で白色の珪酸化した植物繊維による網代が検出されている。なお、幅1cmのこの植物繊維は周堤盛土下の旧地表面においても認められたことから、網代は盛土で押されて吊り下げられ、さらに自然石や細かい砂粒が集まって膨らんだ部分が周壁と網代の間で点々と存在していたことから、何らかの網代を押さえる構造が存在していたと推測されている。また、同じく古墳時代の例ではあるが、大阪府阪南市亀川遺跡においては、床面上部で部分的に見られた暗赤褐色細砂層が周壁に沿って幅0.05~0.1mの帯状に巡り、床面には炭化した亀甲状の植物繊物と非常に細い棒材が散乱していたこと、壁溝底面で径0.05m以下の小穴が認められたことから、周壁に土を塗った後に内装材として繊物を貼り、棒材でこれを押さえないと推定しており【助大阪府文セ2002】、同様な壁体構造は中筋遺跡でも確認されている。

さて、堅穴建物9の調査では、周壁の下半に斜方向に貼り付けられたヨシ類の茎束が確認され、堅穴の周壁には何らかの内装を施していたことが、遺構という具体例を通して改めて実証された。茎束が壁面に貼りついたままのところでは、表面が傷んで網代状に編まれているか否か判然としなかったが、剥落して壁溝上に転落したものの中には、確実に編んでいる箇所も認められた。茎束は黒色の粘質土を挟ん

で数枚貼られていたが、これが一度の施工によるのか、あるいは数度の補修を反映しているのかは明らかにできなかった。また、亀川遺跡で見られたような棒状の材は一切認められず、黒井峯遺跡で言及された貼り壁の押さえについては不明とせざるを得ない。

**壁溝** かつては竪穴建物内の除湿、あるいは浸透水の排水のための溝と考えられていたが、溝底面に杭や板材を打ち込んだ痕跡と考えられる小穴が存在する例が少なからず認められることから、近年では、登呂遺跡例のように羽日板の据え付けや土壁・草壁の芯・支柱となる杭の打ち込みに関係する小溝と捉えられるようになってきている〔大文セ2005〕。

こうした中、今回調査を行った竪穴建物9では、貼床施工時に蜜柑割りや半截あるいは板・角状に分割して作った小板材を壁溝に直交して水平に渡し、その上に植物の茎葉や木の樹皮を被せて蓋をしていったことが明らかとなり、壁溝が除湿・排水のための暗渠溝であったことが判明した。横木に用いる材が簡略化されてはいるものの、同様の暗渠構造は竪穴建物2・6においても確認されており、八尾南集落の中ではかなり一般化な造作と言えそうである。したがって、今後の竪穴建物の調査においては、壁溝底面における小穴の有無のみならず、周壁下部に蓋受け材を刺した痕跡などが存在していないかどうかの観察を行うことが必要となろう。

**中央土坑** 北陸地方以西の弥生時代の竪穴建物に普遍的に見られる遺構で、床面中央に設けられているために「中央ピット」とも呼称されている。都出比呂志氏は、内壁や底面に被熱赤変が認められない一方で、坑内に炭と灰の堆積が多く見られるこの遺構に対し、灰を媒介物としてその上で火を使用する火鉢や円炉裏と同様の構造を想定し、「灰穴炉」と呼んで西日本に特徴的な炉構造と捉えた〔都出1985〕。また、宮本長二郎氏は、中央ピットに貯蔵穴と同様に2段掘りとなって蓋受けを有する例や柱痕跡を遺す例が存在していることなどから、多様な機能を想定している〔宮本1990〕。

本遺跡の場合、検出された中央土坑は平面規模と深度から以下の2類に大別される。1つは小型建物である竪穴建物2・4・6・7・10で確認されたもので、長径は0.6~1.0mと比較的大きいものの、深さは0.1m前後と浅い肌状を呈する（A類）。坑内にはもれなく炭化物層が堆積しているほか、灰層や焼土ブロックを含むものも見られ、炭化物層の下面や壁に被熱の影響と推定される変色が認められたことから、炉の可能性が高いと考えられる。なお、報文中でも記したように、メロン類の種子やイネの胚乳といった食物残滓と考えられる植物遺体が炭化物層の中から見つかっていることも注目されよう。

一方、大・中型である竪穴建物1・9の床面中央には、径1.15~1.8m、深さ0.5~0.8mの大形土坑（B類）が2~3段掘りによって掘削されていた。いずれの土坑にも溝が接続し、さらに竪穴建物9では、周囲に土堤を巡らせ、段掘りした2段目の段に載るように板材を相欠口で方形に組み合わせた箱状の構造物が置かれていた。竪穴建物1の土坑底には炭化物層が堆積し、上段肩部の一部に赤色化も認められたが、9には炭化物・灰層は存在せず、代わりに貼り壁や敷物に用いていた植物繊維が細粒化したものと推定される黒色有機物層が土坑上段に堆積していた。最近調査された弥生時代中期の大坂府寝屋川市太秦遺跡〔助大阪府七2006〕を例に挙げるまでもなく、中央土坑に溝が接続した竪穴建物例は枚挙に暇がないが、洞ノ原地区西側丘陵で実施された妻木晩出遺跡第4次調査検出の住居跡2では、土坑を挟んだ北東側にも細い溝が接続していることから、この細溝から少しづつ水が注がれ、上端部を発する溝によって土坑内に溜まる水の上澄みを排水していたと仮定している〔濱田2004〕。このように考えれば、竪穴建物9の坑内に箱状の木製構造物が据えられていた点も十分理解できよう。ただし、B類土坑の中にも状況的に炉と見なすべきものが数多く存在し、後述のように中央土坑を発する溝の排水機

能を否定する意見もあることから、中央土坑の機能を単純に捉えることは控えるべきであろう。

屋内土坑 竪穴建物 5 を除く小型竪穴建物において確認された施設で、南もしくは東側の長辺周壁際のほぼ中央に設けられていた。形状・規模とも他とは様相が異なる竪穴建物 6 を除けば、土坑の大きさは長辺（長辺）0.6～1.0 m、深さ0.3～0.5 m弱で、竪穴建物 7・10では上方下円の2段に掘られ、2も不定形ではあるものの2段掘りとなっていた。このうち竪穴建物10の土坑では、上段に蓋と推定される植物繊維が残存しており、当該造構が貯蔵穴であった可能性が高いことを示している。

排水溝 竪穴建物内から屋外へ延びる溝状造構で、1・3・6・9の4棟の竪穴建物で検出された。溝の起点については、前述の中央土坑の他に竪溝や屋内土坑の例があるが、いずれも周壁から外側の0.4～0.75 mをトンネル状に掘り抜き、竪穴建物 1 では溝内に木桶を据え、9 では棒状の材と多量の枝やヨシ類の茎束を敷き詰めたうえで、その上に周堤盛土を施していた。また、竪穴建物 6・9 では、屋内部分の溝の上面に蓋を被せていた。

溝の機能については、竪穴建物 1・3 が谷 1、6 が谷 2、9 が流路 3 と接続し、そこへ向かって溝底も傾斜していることから、建物内から屋外へ排水するための施設であったと考えられるが、岡山県勝央町小中遺跡の報告では、当該造構が沖積地の遺跡では確認されず、丘陵上の遺跡のみに見受けられること、火所と認識し得る中央土坑に連結し、埋土中に炭化物・灰などを含む例が認められること、周壁外側のみならず屋内床面でも暗渠構造を探るものが存在することなどから、排水が目的の施設ではなく、竪穴建物内に空気を送るために設けられたと解釈している〔岡山県教委1997〕。平成17年度に調査が行われた同県岡山市百間川兼基遺跡で排水溝が備わった弥生時代後期末の竪穴建物が確認されたように〔岡山県古代吉備文化財センター2005〕、沖積地の遺跡においても排水溝が付設された竪穴建物は存在しており、立地面から排水機能を否定するのは無理であろう。また、トンネルとなった周堤下の溝内に棒材などを詰め込んでいた竪穴建物 9 のように、通気には明らかに不都合な例が存在することも、前述の解釈には不利であろう。排水施設と捉えた場合の問題点はむしろ、同一集落においてもすべての竪穴建物に排水溝が備わっているわけではない、換言すれば排水溝を必要とする理由は何か、という点であろう。

なお、八尾南遺跡例と同様に周壁外側をトンネルで掘り抜いた例が、小中遺跡や妻木晩田遺跡〔濱田2002〕、古墳時代の大坂府交野市・枚方市の上の山遺跡〔助大阪府文七2007〕・静岡県浜松市大半遺跡〔助浜松市文化協会1992〕・群馬県伊勢崎市三和工業団地Ⅰ遺跡〔飯島2004〕といった諸遺跡で検出されており、妻木晩田遺跡の調査を担当した濱田竜彦氏は、トンネルと蓋を併用して暗渠排水溝を作り、その上に本遺跡と同様に周堤盛土を施していたと想定している〔濱田2004〕。また、上部の削平によって本来存在していた周堤やトンネルの天井部が失われていた場合、本遺跡の調査所見から溝の埋土が周壁から一定の長さ分異なっている可能性が高いことから、周堤の存否を判断するうえで排水溝の埋土をよく観察することが重要となろう。

入 口 関東地方の弥生時代の竪穴建物で確認される、妻側周壁際の梯子あるいは階段を据え付けたピットがよく知られているほか〔小宮1990〕、長原遺跡例の周堤から尻尾状に張り出したスロープ、妻木晩田遺跡例の周壁に加えられた階段状の掘り込み〔淀江町教委2000〕、鳥取県倉吉市霜山遺跡例の竪穴隅部の周壁外に付け加えられた通路状の階段〔倉吉市教委1985〕も、それぞれ入口に関連する施設と推定されている。さらに黒井峯遺跡では、階段状のステップや周堤上に盛土を施して竪の予状の敷物を施した施設が知られており、両側には網代による壁が存在していたと考えられている。なお、長原遺跡

例では周堤を囲繞する周溝が張り出し部分で途切れており、周溝の開口部が入口の位置を知る手掛かりとなることを示している。

上に挙げた例を参考にすると、堅穴建物1の周塁南東側に設けられた三角形状の張り出しや、外周土坑が途切れ、堤外縁の傾斜が緩くなった堅穴建物6の東側周堤の中央部も、建物の入口であった可能性が考えられよう。また、梯子が据え付けられた状態で検出された堅穴建物9の堅穴南東隅では、他の箇所よりも土砂の流入が顕著であったことから、すでに述べたように梯子を昇った周堤上に土砂を用いた何らかの入口施設が存在し、上層を解体する際に取り壊された可能性が想定される。

なお、堅穴建物9と同様に方形堅穴隅部の柱位置に入口が想定されている猫山遺跡例では、根鈴智津子氏によって主柱と周壁との距離が最も広くなっていることが指摘されているが〔根鈴2004〕、堅穴建物9に関しても、梯子を降りたところにある柱穴3と南東隅部の周壁との間が最も広くなっていた。

#### 4. おわりに

以上、八尾南遺跡で検出した堅穴建物を構成する諸施設について、現時点での研究状況や各地の類例などを織り交ぜながら紹介してきた。限られた調査期間の中でどの程度拾い上げることができたか心許ないが、同じ1棟の堅穴建物といえども通常の集落遺跡のそれとは比較にならないほどの情報量を内包しており、これまでに述べてきた調査所見が、今後の堅穴建物の構造研究に大きく寄与することは間違いないであろう。

しかしながら、建物の立体構造を復元するうえで最も重要な上屋構造に関しては、今回の調査を通じても把握することができなかった。最後にこの点の見通しを述べて、本節の結びとしたい。

榛名山の火山噴出物下に眠っていた古墳時代のムラとして著名となった黒井峯遺跡や中筋遺跡では、炭化しながらも多数遺存していた上屋の構造材・屋根材の検出状況や周堤の損傷具合などから、堅穴建物の屋根には茅（草）と土がサンドイッチで葺かれ、周堤は周壁からやや外側の地表面に置かれた垂木尻を固定するために構築されていたことが示されている。

また、焼失建物の良好な例が確認されている、妻木晚田遺跡をはじめとする鳥取県下の弥生時代後期の諸遺跡〔浅川1994・2000〕や富山県富山市打出遺跡〔小黒2005〕では、堅穴内に残された垂木などの炭化材と焼上層の関係から土屋根構造を想定している。ただし、周堤の構築時期に関しては、中筋型が垂木を配した後と考えているのに対し、妻木晚田では堅穴の掘削後と捉えており、同じ土屋根建物といえども、復元された建物の外観はかなり相違している。

一方、本遺跡では建物の放棄時に屋根を解体し、主だった建築部材が運び出されていた可能性が高いにもかかわらず、周堤には中筋遺跡で確認された地割れなどの損傷は認められなかった。加えて、堅穴建物2・4では周堤外縁で屋根構造と関連すると想定される多数の小穴が確認されたことから、今津啓子氏が行った長原遺跡例の復元案のように、屋根の下端が周堤を越えてその外側に位置する、中筋例とは異なる上屋の構築手順・構造が採用されていたと推定される。群馬県下で検出されている周堤が、帳に対して高さが低く、総じて低平な印象を与えるのに対し、本遺跡の遺存良好な例では整った台形を呈しているといった形状の違いも、上屋の構築方法や構造の差異を反映している可能性があろう。ただし、土葺きの如何については、杉本清美氏が自身調査された寝屋川市高柳遺跡例で行ったように〔杉本2006〕、焼失建物の検出状況の詳細な検討を通じて判断を下す必要があろう。

（岡本）

## 引用・参考文献

- 秋山浩三 1999 「近畿における弥生化の具体相」考古学研究会岡山例会委員会編『論争・古備』 考古学研究会  
浅川滋男 1994 「燒失縫穴住居の復元 - A S I 01とB S I 20にみる二段伏屋式構造-」『南谷人山遺跡Ⅱ 南谷29号墳』  
浅川滋男 2000 「奈良山地のS.I.-43上部構造」『東木晚田遺跡発掘調査報告Ⅳ <創ノ原・松尾地域区>』 大山スイス村界  
隈文化財発掘調査会・大山町教育委員会  
飯島義雄 1998 「小瀬代代御廟における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 群馬県立博物館  
飯島義雄 2003 「人間々崩伏状地に立地する唐埴田遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『利根川』21・25 利根川  
同人  
飯島義雄 2004 「所蔵「三工業園地」遺跡型の「周溝をもつ建物」の構造」  
『財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』22 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
飯島義雄 2005 「「周溝をもつ建物」における掘り方の選別の意義」前橋市地上に立地する横手早畠遺跡における例を中心として」『群馬古字手稿』15 郡馬土器研究会  
一瀬和夫 1988 「八宝寺・加美遺跡の吉式土器」『大阪文化財論集 - 文財団大阪府文化財センター設立15周年記念論集』(財)大阪府文化財センター  
今津啓子 1990 「長原遺跡出土の周堤をもつ堅穴住居」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第21回)資料』 大阪文化財センター  
今津啓子 1991 「砂利敷き土器代代御廟による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 89-8)」略報』『平成元年度 大阪市内埋蔵文化財証明書調査報告書』  
李本隆裕 1980 北山遺跡出土時の再整理』『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』 東大阪市遺跡保護調査会  
(財)石川県埋蔵文化財センター 2004 『珠洲市柏原ミハシ遺跡 柏原ジッチャン遺跡』  
**大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会**  
1984 a 「八百代丘断第7事に伴う長原遺跡発掘調査概要」『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1984 b 「長原遺跡発掘調査(N G 82-12)」略報』『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1985 a 「馬場塚マンション新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 83-3)」略報』『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1985 b 「増田共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 83-41)」略報』『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1985 c 「仲東遺跡奥庭町に伴う長原遺跡発掘調査(N G 83-54)」略報』『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1985 d 「古内新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 83-63)」略報』『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1986 「古内・平氏による店舗付住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 84-17)」略報』『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1987 a 「城下マンション(仮称)建設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 85-23)」略報』『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1987 b 「大同ドリソニア倉庫兼事務所建設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 85-35)」略報』『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1988 a 「城下マンション(仮称)建設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 86-16)」略報』『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1988 b 「城下邸裡工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 86-24)」略報』『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1989 「平和産業(株)による共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 87-26)」略報』『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1990 a 「森美那氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 88-18)」略報』『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1990 b 「松出氏によるマンション建設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 88-19)」略報』『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1990 c 「長原遺跡2丁目における遺構確認調査(N G 88-41)」略報』『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1991 a 「官本松代氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 89-36)」略報』『平成3年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1991 b 「中谷芳藏氏による建築工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 90-62)」略報』『平成3年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1992 c 「野口自由園エレベーター増設に伴う長原遺跡発掘調査(N G 91-15)」略報』『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1996 a 「大坂氏による延築工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 94-61)」略報』『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
1996 b 「(株)大京による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 95-72)」略報』『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
2002 「石川島建材工業(株)による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 00-55)」略報』『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
**(財)大阪市文化財協会**  
1978 - 1982 「大阪市遺跡発掘調査報告書」  
1982 「長原遺跡発掘調査報告書Ⅰ」  
1983 「長原遺跡発掘調査報告書Ⅲ」  
1989 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅰ」  
1990 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ」  
1991 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ」  
1992 a 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅴ」  
1992 b 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ」  
1992 c 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告V」  
1993 a 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告V」  
1993 b 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告VI」  
1994 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告VII」  
1995 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告VIII」  
1997 a 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告IX」  
1997 b 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告X」  
1997 c 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告XI」  
1999 a 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告II」  
1999 b 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告XII」

- 1999 c 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告X III」  
 1999 d 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告X IV」  
 1999 e 「長原遺跡発掘調査報告VI」  
 2000 「長原遺跡東部地区発掘調査報告III」  
 2001 「長原遺跡東部地区発掘調査報告IV」  
 2002 a 「長原遺跡東部地区発掘調査報告V」  
 2002 b 「長原遺跡発掘調査報告VI」  
 2002 c 「長原遺跡発掘調査報告VII」  
 2003 a 「長原遺跡発掘調査報告VIII」  
 2003 b 「長原遺跡東部地区発掘調査報告VI」  
 2004 a 「長原遺跡東部地区発掘調査報告VII」  
 2004 b 「長原遺跡発掘調査報告VIII」  
 2005 a 「長原遺跡東部地区発掘調査報告VII」  
 2005 b 「長原遺跡発掘調査報告VIII」  
 2006 a 「長原遺跡東部地区発掘調査報告IX」  
 2006 b 「長原遺跡発掘調査報告X V」  
 (財)大阪府文化財調査並研究センター 1999 「尺度遺跡」
- (財)大阪府文化財センター  
 2002 「龜山遺跡」  
 2003 「尺度遺跡 II」  
 2003 「古墳出現期の土器と年代」  
 2005 「男平遺跡」  
 2005 「新上小原遺跡現地見学会資料」  
 2006 「太秦遺跡・太秦古墳群II」  
 2007 「上の山遺跡」
- 大阪府教育委員会  
 1988 「八尾山遺跡発掘調査概要」  
 1989 「八尾山遺跡・旧石器出土品 3 地点 大阪府文化財報告書第36報」  
 1991 「八尾山遺跡発掘調査概要 I」  
 1993 「八尾山遺跡 II 旧石器出土品 6 地点の調査 大阪府文化財報告書第44報」  
 1987 「府営八雲北住土建替工事に伴う八雲遺跡発掘調査概要」  
 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター  
 1978 「長原・近畿自動車道大津・吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」  
 1980 a 「瓜生堂・近畿自動車道天理・吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」  
 1980 b 「瓜生堂・城山・近畿自動車道天理・吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」  
 1986 a 「城山 (その1)」近畿自動車道天理・吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」  
 1986 b 「城山 (その2)」近畿自動車道天理・吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」  
 1986 c 「城山 (その3)」近畿自動車道大津・吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」  
 大庭重信 1999 「方形周溝墓制からみた銅内弥生時代中期の層位構造」『国家形成の考古学』 大阪大学考古学研究室  
 岡村 涉 2002 「特別史跡登呂遺跡 - 関西周辺考古学会シンポジウム資料集 静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学学会
- 岡本英史 2006 「周辺を巡らした建物 - 弥生時代の住居構造 - 」『財团法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立古代文化博物館・大阪府立近づ飛鳥博物館』  
 2004年度共同研究成果報告書』
- 岡本淳一郎 1997 「周溝をもつ建物」について『財团法人大阪府文化財センター  
 調査事務所』  
 岡本淳一郎 2003 「周溝をもつ建物」の基礎的研究』『富山大学考古学研究会論集 鮎川氣樓 - 秋山進午先生古稀記念 -』  
 秋山進午先生古稀記念論集刊行会  
 岡本淳一郎 2005 「周溝をもつ建物の分類と系譜』『中部弥生時代研究会第11回例会発表要旨集 弥生時代建物の地域性と系譜』 中部弥生時代研究会  
 岡本淳一郎 2006 「周溝をもつ建物の分類と系譜』『下老子・坪川進午発掘調査報告 - 一越東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書 V - (第五分冊 自然科學分析・考察編)』(財)富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所  
 岡山県考古学財團財政センター 2005 「百戸川兼基跡現地説明会 - 一越東「野に生きた人々の歴史と暮らしへ」』  
 小黒智久 2005 「富山県打出遺跡」『考古学研究』 第52巻第1号 考古学研究会  
 及川良彦 2002 「住居と獨立柱建物 (関東) - 関東地方の弥生時代集落の様相 - 』『静岡県考古学会シンポジウム資料集 静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会  
 及川良彦 2004 a 「方形周溝墓のねじる問題 - 関東地方の高地遺跡の再検討 (5) - 基と住居の誤認 - 』『シンポジウム字津木原遺跡発掘40周年記念 方形周溝墓研究の今 資料集 II』 方形周溝墓シンポジウム実行委員会  
 及川良彦 2004 b 「深い矢穴、浅い矢穴 - 旧石器表面の考古学のために - 』『原始・古代日本の集落』 同成社  
 香芝市二上山神物饗殿 1996 「奈良県人の鳥馴れと紀号」『奈良県立歴史考古学研究所附属博物館特別展回録 第26回』  
 脇部明牛・施本裕行 1986 「弥生人のメッセージ - 絵巻と紀号」『奈良県立歴史考古学研究所附属博物館特別展回録 第26回』  
 香川県教育委員会・日本道路公團 1987 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第3章 矢ノ塚遺跡」  
 小松市教育委員会 2004 「八里町山陰跡群」  
 京崎寛 1997 「初期群集墳の形成過程 - 河内長浜古墳群の被葬者像をもとめて - 』『立命館大学考古学論集』 立命館考古学論集刊行会  
 2001 「道路状況標と「縫齒溝道」 - 長原遺跡の交通史的検討 - 』『立命館大学考古学論集 II』 立命館考古学論集刊行会  
 會吉市教育委員会 1985 「獣山遺跡 - 第3次発掘調査概報 - 』  
 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1994 「百間川原尾島遺跡 3 沖川放水路 (百間川) 改修工事に伴う発掘調査」  
 小松市教育委員会 2004 「八里町山陰跡群」  
 小宮健雄 1990 「往まいの入口」『季刊考古学第32号 特集 古代の住居 - 純文から古墳へ - 』 雄山閣  
 子持村教育委員会 1991 「保山峯遺跡発掘調査報告書」  
 近藤 広 2005 「近江における弥生時代の建物」『中部弥生時代研究会第11回例会発表要旨集 弥生建物の地域性と系譜』 中部  
 弥生時代研究会  
 横井久之 1993 a 「第3節 長原遺跡の土器埋納遺構 - 飛鳥 - 平安時代』 財团法人大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書 VI』  
 1993 b 「長原古墳群の調査』 財团法人大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書 VI』  
 佐藤 隆 1992 「平安時代における長原遺跡の動向』 財团法人大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書 V』  
 関連市教育委員会 2000~2004 「特別史跡登呂遺跡 発掘調査概要報告書 I~IV』

- 浜川市教育委員会 1988 「中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書」
- 菅原康夫・梅木謙一編 2000 「弥生土器の様式と編年 四国編」木耳社
- 杉本厚典 2003 「八尾市・長原・城山遺跡における弥生器皿群の変遷 - 春生時代から古墳時代にかけての地域社会の様相 - 」『大阪歴史博物館・研究紀要』第2号 財團法人大阪市文化財協会
- 2001 「河内における弥生時代中期から古墳時代初期にかけての土器の形式編年と様式」『研究紀要 第4号』(財) 大阪市文化財協会
- 杉本清美 2006 「彌生住居の上部構造に関する基礎的考察」『研究調査報告』第4集 (財) 大阪府文化財センター
- 高橋工 1993 「小さきいわれと共に原代遺跡へ - 原代200分類を発見 - 」『奈火』44号 財團法人大阪市文化財協会
- 武田光正 1998 「彌生住居跡の諸問題」『九州懇研セミナー道聞室埋蔵文化財調査報告52 甘木市所在宮原遺跡V』福岡県教育委員会
- 田中清美 1992 a 「河内平野の開拓と弥生文化」『考古学叢書』第4集 考古学を学ぶ会
- 1992 b 「河内潟周辺における弥生文化的な差異探求」『突奇美と淡賀川』
- 中里土器研究会編 1995 「河内・土器・陶磁器」真難社
- 郡出比呂志 1975 「堅穴式住居の削堤式・壁体」考古学研究 第22巻第2号 考古学研究会
- 郡出比呂志 1985 「弥生時代住居の「壁と窓」」『日本書・日本文化研究論集』人間大学文学部
- 津市教育委員会 1982 「京急・竹・竹」
- 寺井 誠 2006 「第1章 長原古墳群集成」財團法人大阪府文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』X V
- 寺井 誠 1986 「畿内式古土器の編年と二・三の問題」『欠部遺跡 余良原立極原考古学研究所』
- 寺井 誠 1989 「「河内地盤」の「耕牛上器」の様式と繋り」『近畿縦観』木耳社
- (財)富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2000 「「老子坂川遺跡発掘調査報告 - 一能地自動車道延設に伴う埋蔵文化財発掘報告V - 」
- 西村 少 1996 「第6章 和泉北部の古式土器部と地域社会」『下田遺跡』(財) 大阪市文化財調査研究センター
- 日本考古学会 1954 「祭器・木編」
- 根鉢智津子 2004 「大坂町と倉吉市の集落」第1回大坂道シンポジウム 山陰地方の掲立柱建物 - 弥生・古墳時代』
- 浜岡町教委 2003 「南谷遺跡 澄標碑」
- 濱田彦彦 2002 「河内風土地区西側丘陵の発掘調査概要 - 水木曳出遺跡第4次調査 - 」『水木曳出遺跡発掘調査研究報告2001』鳥取県教育委員会
- 畠田稔彦 2004 「弥生時代の集落と建物の復元 - 萩木畠田遺跡と青谷上古寺地遺跡 - 」
- (財)浜松市文化協会 1992 「佐鳴湖岸遺跡調査研究 本文編 I・II」
- 原口正二 1973 「紅葉山遺跡」『高崎市史 第6章考古学編』高崎市役所
- 原口正三 1977 「第二章第3節 古墳遺跡への動脈」『高崎市史 第1巻本編 I』高崎市役所
- 原川昌則 1995 「第2章 地理、歴史的環境」、「第4章 まとめ」財團法人八尾市文化財調査研究会編『八尾山遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告』
- 1993 「器種分類について」、「第5章 まとめ」『八尾市坪庭文化財発掘調査報告 久宝寺(第1次測定)』(財)八尾市文化財調査研究会
- 2003 「第5章第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半-古墳時代初期前半(庄内式古相)の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書 - 大阪危急都市拠点地区竜谷東西線4工区に伴う - 』(財)八尾市文化財調査研究会
- 春成秀樹 1991 a 「角のない底」「日本における初期弥生文化の成立」横山浩一先生追憶記念論文集II 文獻出版
- 1991 b 「船形から紀号へ - 弥生時代における農耕礼仪の変遷 - 」『回立歴史民俗博物館研究報告第35集』第一法螺出版
- 広瀬信也 1998 「『煮張遺跡』大阪府教育委員会
- 兵庫県教育委員会 1999 「北摂二ノイカウ内遺跡調査報告書IV - 有馬遺跡(1) - 」
- 藤田恭司 1984 「集落裏の集落裏成 - 一築石遺跡の基礎作業として - 」『考古学研究』第31巻第2号 考古学研究会
- 藤田二郎 1982 「弥生時代の記文」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ
- 福井県教育庁埋蔵文化財センター 1988 「「星雲遺跡・堺江」発掘調査」
- 福岡県教育委員会 1994 「一般国道10号線福井浦路踏切埋蔵文化財調査報告 第3集 団後遺跡、西・町田遺跡、炭山遺跡」
- 玉岡勝一・松本岩雄編 1992 「弥生七子の様式と編年」山陽・山陰編 木耳社
- 松井一明 2002 「堅穴住居と掲立柱建物 - 一部解説下における弥生時代集落の変遷」『静岡県考古学会シンポジウム資料 真静園講座における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会
- 松本百合子・久保和利 1993 「右側門の家 - 長原遺跡の調査 - 」『奈火』45号 財團法人大阪市文化財協会
- 吉澤泰史 2002 「遺物系条目遺跡(高麗北遺跡)」『遺物系条目遺跡(高麗北遺跡)』発掘調査概要・IV - 大阪府四條畷市所在 - 人阪府教育委員会
- 宮本長二郎 1990 「「べべ」状遺跡「境内施設」」『陪葬考古学第32号』特集 古代の住居 - 一編文から古墳へ - 』雄山閣
- 三好孝一 2006 「河内地盤」『第55回埋蔵文化財研究集会・弥生集落の成立と開拓 発表要旨集』埋蔵文化財研究会・第55回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 森岡秀人・西村 歩織 2006 「古式・馬器の年代学」(財) 大阪府文化財センター
- 八尾市教育委員会
- 1981 「八尾南遺跡、大阪府遺跡発掘調査概要」八尾市文化財調査報告6
- 1985 「「4. 八尾南遺跡の調査」若林町3丁目 117~119」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書八尾市文化財調査報告11』
- 1989 a 「「7. 八尾南遺跡(63~084)」の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告19昭和63年度国庫補助事業
- 1989 b 「「8. 八尾南遺跡(63~075)」の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告19昭和63年度国庫補助事業
- 1989 c 「「八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書1」八尾市文化財調査報告平成元年度国庫補助事業」
- 1995 a 「「19. 八尾南遺跡(94~125)」の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告31平成6年度国庫補助事業
- 1995 b 「「20. 八尾南遺跡(99~433)」の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告31平成6年度国庫補助事業
- 1996 a 「「15. 八尾南遺跡(94~577)」の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告33平成7年度国庫補助事業
- 1996 b 「「16. 八尾南遺跡(95~248)」の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告33平成7年度国庫補助事業
- 2000 「「11. 八尾南遺跡(99~332)」の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告42平成11年度国庫補助事業
- 2003 a 「「31. 八尾南遺跡(2001~358)」の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告48平成14年度国庫補助事業

- 度回應補助事業】  
2003 b 「32. 八尾南遺跡（2001- 419）の調査」「八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告48平成14年度回應補助事業】
- 八尾市教育委員会・淀川法人八尾市文化財調査研究会 2000 「IV 八尾南遺跡第25次調査（Y S99-25）」「八尾市立埋蔵文化財センター報告1」
- （財）八尾市文化財調査研究会  
1983 「第4章八尾南遺跡（西木の本4丁目11番地）」|「八尾市埋蔵文化財発掘調査要綱1980・1981年度（財）八尾市文化財調査研究会報告2」
- 1984 「3.八尾南遺跡」「昭和58年度事業概要報告（財）八尾市文化財調査研究会報告5」
- 1985 a 「II八尾南遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査要綱昭和59年度（財）八尾市文化財調査研究会報告6」
- 1985 b 「I八尾南遺跡（第2次調査）」「昭和59年度事業概要報告（財）八尾市文化財調査研究会報告7」
- 1985 c 「3.八尾南遺跡（第4次調査）」「昭和59年度事業概要報告（財）八尾市文化財調査研究会報告7」
- 1987 「6.八尾南遺跡（第6次調査）」「昭和61年度事業概要報告（財）八尾市文化財調査研究会報告14」
- 1988 a 「7.八尾南遺跡（第5次調査）」「八尾市文化財調査研究会報告昭和62年皮（財）八尾市文化財調査研究会報告16」
- 1988 b 「9・10.八尾南遺跡（第9次調査）」「八尾市文化財調査研究会報告昭和62年度（財）八尾市文化財調査研究会報告16」
- 1988 c 「II八尾南遺跡（第10次調査）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（財）八尾市文化財調査研究会報告40」
- 1988 d 「VI八尾南遺跡第7次調査（Y S87-7）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ附（財）八尾市文化財調査研究会報告41」
- 1989 a 「21.八尾南遺跡（第11次調査）」「八尾市文化財調査研究会報告昭和63年度（財）八尾市文化財調査研究会報告25」
- 1989 b 「23.八尾南遺跡（第13次調査）」「八尾市文化財調査研究会報告昭和63年度（財）八尾市文化財調査研究会報告25」
- 1989 c 「24.長原遺跡（第1次調査）」「八尾市文化財調査研究会報告昭和63年度（財）八尾市文化財調査研究会報告25」
- 1990 a 「八尾南遺跡（第14次調査）」「八尾市文化財調査研究会報告平成元年度（財）八尾市文化財調査研究会報告28」
- 1990 b 「6.八尾南遺跡（Y S89-15）」「八尾市文化財調査研究会報告平成元年度（財）八尾市文化財調査研究会報告28」
- 1990 c 「7.八尾南遺跡（Y S89-16）」「八尾市文化財調査研究会報告平成元年度（財）八尾市文化財調査研究会報告28」
- 1993 「30.八尾南遺跡第18次調査（Y S92-18）」「平成4年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告書」
- 1994 「Ⅴ八尾南遺跡第19次調査（Y S93-19）」「（財）八尾市文化財調査研究会報告43」
- 1995 a 「I八尾南遺跡第8次調査（Y S87-8）」「八尾南遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告47」
- 1995 b 「II八尾南遺跡第12次調査（Y S88-12）」「八尾南遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告47」
- 1995 c 「III八尾南遺跡第17次調査（Y S90-17）」「八尾南遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告47」
- 1996 a 「Ⅳ八尾南遺跡第20次調査（Y S94-20）」「八尾市文化財調査研究会報告50」
- 1996 b 「Ⅴ八尾南遺跡第22次調査（Y S95-22）」「（財）八尾市文化財調査研究会報告54」
- 1996 c 「Ⅵ八尾南遺跡第24次調査（Y S95-24）」「（財）八尾市文化財調査研究会報告54」
- 1998 「VI八尾南遺跡第21次調査（Y S94-21）」「（財）八尾市文化財調査研究会報告61」
- 1999 「IV八尾南遺跡第23次調査（Y S95-23）」「（財）八尾市文化財調査研究会報告63」
- 八尾南遺跡調査会 1981 「八尾南遺跡」
- 山田隆一 1993 「第7章 まとめ」「八尾南遺跡 II 旧石器出土第6地点の発達」大阪府文化財調査報告書第44号大阪府教育委員会
- 山田隆一 2006 「大阪府出土の麻岐・阿波・播磨系土器」「ふたかみ堺馬回国シンボジウム 6 馬回国時代の阿波・讃岐・播磨と大和 材料編」香芝市教育委員会・香芝市二ノ山博物館
- 山本 邦 1981 「第10章 総括」「八尾南遺跡・大阪市高速電気軌道2分標建設に伴う発掘調査報告書」八尾南遺跡調査会
- 淀江町教育委員会 2000 「安木野遺跡・前原地区、淀川川岸遺跡発掘調査報告書」
- 米田敏幸 1981 「庄内式土器の細分私案」「八尾南遺跡」八尾南遺跡調査会
- 米田敏幸 1985 「河内内の庄内式と搬入土器について」「考古学論叢 第1集」
- 米田敏幸 1991 「2. 土器器の編年 1近畿」「古墳時代の研究 6 土器と須恵器」壁山開
- 米田敏幸 1994 「河内における庄内式土器の編年」「庄内式土器研究Ⅶ」庄内式土器研究会
- 若林邦彦 1999 「筋壺章第2節 河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷」「河内平野遺跡群の動態Ⅱ」大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター

表17 遺構番号対応表(1)

調査年度	遺構番号	新遺構番号	発掘構造面	調査年度	遺構番号	新遺構番号	帰属遺構面
02-2	15	掘立柱建物 22-柱穴 1	第1面	02-2	207	土坑 20	第1面
02-2	16	掘立柱建物 22-柱穴 2	第1面	02-2	320	土坑 21	第1面
02-2	17	掘立柱建物 22-柱穴 3	第1面	02-2	53	土坑 22	第1面
02-2	20	掘立柱建物 22-柱穴 4	第1面	02-2	247	土坑 23	第1面
02-2	19	掘立柱建物 22-柱穴 5	第1面	02-2	285	土坑 24	第1面
02-2	18	掘立柱建物 22-柱穴 6	第1面	02-2	251	土坑 25	第1面
02-2	40	掘立柱建物 22-柱穴 7	第1面	03-1	279	土坑 26	第1面
03-1	268	掘立柱建物 24-柱穴 1	第1面	03-1	159	土坑 27	第1面
03-1	363	掘立柱建物 24-柱穴 2	第1面	03-1	437	土坑 28	第1面
03-1	307	掘立柱建物 24-柱穴 3	第1面	03-1	233	土坑 29	第1面
03-1	240	掘立柱建物 24-柱穴 4	第1面	03-1	158	土坑 30	第1面
03-1	244	掘立柱建物 24-柱穴 5	第1面	03-1	405	土坑 31	第1面
03-1	306	掘立柱建物 24-柱穴 6	第1面	03-1	86	土坑 32	第1面
03-1	305	掘立柱建物 24-柱穴 7	第1面	03-1	91	土坑 33	第1面
03-1	303	掘立柱建物 24-柱穴 8	第1面	03-1	63	土坑 34	第1面
03-1	302	掘立柱建物 24-柱穴 9	第1面	03-1	49	土坑 35	第1面
03-1	333	掘立柱建物 24-柱穴 10	第1面	03-1	43	土坑 36	第1面
03-1	359	掘立柱建物 24-柱穴 11	第1面	03-1	92	土器埋納土坑 1	第1面
03-1	356	掘立柱建物 24-柱穴 12	第1面	03-1	398	土器埋納土坑 2	第1面
03-1	289	掘立柱建物 24-柱穴 13	第1面	02-2	156	ビット 1	第1面
03-1	292	掘立柱建物 24-柱穴 14	第1面	02-2	163	ビット 2	第1面
03-1	295	掘立柱建物 24-柱穴 15	第1面	03-1	206	ビット 3	第1面
03-1	355	掘立柱建物 24-柱穴 16	第1面	03-1	147	ビット 4	第1面
03-1	288	掘立柱建物 24-柱穴 17	第1面	03-1	130	ビット 5	第1面
03-1	290	掘立柱建物 24-柱穴 18	第1面	03-1	115	ビット 6	第1面
03-1	294	掘立柱建物 24-柱穴 19	第1面	02-2	195	ビット 7	第1面
02-2	170	井戸 1	第1面	02-2	197	ビット 8	第1面
03-1	174	井戸 2	第1面	02-2	198	ビット 9	第1面
02-2	46	井戸 3	第1面	02-2	196	ビット 10	第1面
03-1	234	井戸 4	第1面	02-2	194	ビット 11	第1面
03-1	196	野鹿 1	第1面	02-2	30	ビット 12	第1面
03-1	90	土坑墓 1	第1面	02-2	31	ビット 13	第1面
02-2	54	土坑墓 2	第1面	02-2	32	ビット 14	第1面
02-1	1	溝 1	第1面	02-2	33	ビット 15	第1面
03-1	1	溝 2	第1面	02-2	34	ビット 16	第1面
02-2	128	溝 3	第1面	02-2	38	ビット 17	第1面
02-2	130	溝 4	第1面	02-2	7	ビット 18	第1面
02-2	133	溝 5	第1面	02-2	35	ビット 19	第1面
02-2	134	溝 6	第1面	02-2	8	ビット 20	第1面
02-2	215	溝 7	第1面	02-2	45	溝 25	第2面
02-2	190	溝 8	第1面	02-2	330	掘立柱建物 23-柱穴 1	第2面
02-2	211	溝 9	第1面	02-2	331	掘立柱建物 23-柱穴 2	第2面
02-2	216	溝 10	第1面	02-2	332	掘立柱建物 23-柱穴 3	第2面
02-2	131	溝 11	第1面	02-2	333	掘立柱建物 23-柱穴 4	第2面
03-1	266	溝 11	第1面	02-2	339	掘立柱建物 23-柱穴 5	第2面
02-2	2	溝 12	第1面	02-2	336	掘立柱建物 23-柱穴 6	第2面
02-2	169	溝 13	第1面	02-2	337	掘立柱建物 23-柱穴 7	第2面
02-2	51	溝 14	第1面	02-2	336	掘立柱建物 23-柱穴 8	第2面
03-1	89	溝 15	第1面	03-1	73	井戸 6	第2面
02-1	4	土坑 1	第1面	03-1	10	井戸 7	第2面
02-1	14	土坑 2	第1面	02-2	243	井戸 8	第2面
02-1	2	土坑 3	第1面	03-1	686	古墳 1	第2面
02-1	3	土坑 4	第1面	03-1	689	古墳 2	第2面
02-2	129	土坑 5	第1面	03-1	20	古墳 3	第2面
02-2	135	土坑 6	第1面	02-2	240	古墳 3	第2面
02-2	168	土坑 7	第1面	02-2	49	溝 27	第2面
02-2	171	土坑 8	第1面	02-2	59	溝 28	第2面
02-2	132	土坑 9	第1面	03-1	221	溝 28 (八尾 SX - 13)	第2面
03-1	438	土坑 10	第1面	02-2	63	溝 36	第2面
03-1	220	土坑 11	第1面	02-2	274	土坑 58	第2面
03-1	251	土坑 11	第1面	02-2	296	土坑 59	第2面
03-1	205	土坑 12	第1面	02-2	299	土坑 60	第2面
03-1	166	土坑 13	第1面	03-1	88	土坑 64	第2面
03-1	137	土坑 14	第1面	03-1	87	土坑 65	第2面
02-2	47	土坑 15	第1面	03-1	26	土坑 74	第2面
02-2	55	土坑 16	第1面	02-2	290	土器埋納土坑 3	第2面
02-2	64	土坑 17	第1面	02-2	244	土器埋納土坑 4	第2面
02-2	199	土坑 18	第1面	03-1	11	土器埋納土坑 5	第2面
02-2	200	土坑 19	第1面	02-1	30	ビット 23	第2面

表18 遺構番号対応表(2)

調査年度	遺構番号	新遺構番号	隸属遺構番	調査年度	遺構番号	新遺構番号	隸属遺構番
02-2	256	ピット24		第2面	02-2	245	溝29
02-2	324	ピット25		第2面	02-2	246	溝30
03-1	94	ピット26		第2面	02-2	291	溝31
03-1	706	堅穴建物11		第2面	02-2	70	溝32
03-1	741	堅穴建物11-柱穴1		第2面	02-2	298	溝33
03-1	740	堅穴建物11-柱穴2		第2面	02-2	68	溝34
03-1	739	堅穴建物11-柱穴3		第2面	02-2	66	溝35
03-1	738	堅穴建物11-柱穴4		第2面	02-2	67	溝37
03-1	688	井戸5		第2面	02-2	65	溝40
02-1	23	八尾南4号墳		第2面	03-1	167	溝40
02-1	20	八尾南5号墳		第2面	03-1	210	溝38
03-1	339	八尾南6号墳		第2面	03-1	72	溝39
02-1	22	周溝基1		第2面	03-1	65	溝41
02-1	24	周溝基2		第2面	03-1	120	溝42
02-1	56	周溝基3		第2面	03-1	33	溝43
02-1	21	周溝基4		第2面	03-1	14	溝44
02-1	1	周溝基5		第2面	03-1	702	土坑37
02-1	19	周溝基6		第2面	03-1	700	土坑38
02-1	SX-7	周溝基7		第2面	03-1	707	土坑39
02-1	74	周溝基8		第2面	03-1	709	土坑40
02-1	67	周溝基9		第2面	03-1	724	土坑41
02-1	15	周溝基10		第2面	03-1	727	土坑42
02-2	178	周溝基11		第2面	02-1	98	土坑43
02-2	181	周溝基12		第2面	02-1	34	土坑44
02-1	16	周溝基13		第2面	02-2	36	土坑45
02-2	176	周溝基14		第2面	02-2	108	土坑46
02-2	180	周溝基15		第2面	02-1	92	土坑47
02-2	179	周溝基16		第2面	02-1	66	土坑48
02-1	17	周溝基17		第2面	02-1	70	土坑49
02-2	143	周溝基17		第2面	03-1	287	土坑49
02-1	18	周溝基18		第2面	03-1	277	土坑50
02-2	142	周溝基18		第2面	03-1	278	土坑51
02-2	56	周溝基19		第2面	03-1	272	土坑52
02-2	177	周溝基20		第2面	03-1	328	土坑53
02-2	140	周溝基21		第2面	02-2	174	土坑54
02-2	141	周溝基22		第2面	03-1	177	土坑55
02-1	270	周溝基23		第2面	03-1	178	土坑56
03-1	275	周溝基24		第2面	02-2	297	土坑57
02-1	SX-9	周溝基24		第2面	02-2	61	土坑61
03-1	276	周溝基25		第2面	02-2	305	土坑62
02-2	57	周溝基26		第2面	03-1	261	土坑63
02-2	343	周溝基26-墓壙		第2面	03-1	589	土坑66
02-2	84	周溝基27		第2面	03-1	110	土坑67
02-2	252	周溝基28		第2面	03-1	85	土坑68
02-2	246	周溝基29		第2面	03-1	131	土坑69
02-2	147	周溝基30		第2面	03-1	50	土坑70
03-1	242	周溝基31		第2面	03-1	8	土坑71
02-2	173	周溝基31		第2面	03-1	40	土坑72
02-2	250	周溝基32		第2面	03-1	32	土坑73
03-1	160	周溝基32		第2面	03-1	7	土坑75
03-1	176	周溝基33		第2面	03-1	12	土坑76
02-2	294	周溝基34		第2面	03-1	13	土坑77
02-2	60	周溝基35		第2面	03-1	685	落ち込み1
02-1	109	土器埋設遺構1		第2面	02-1	97	落ち込み2
02-2	185	土器埋設遺構2		第2面	03-1	271	落ち込み3
02-2	184	土器埋設遺構3		第2面	03-1	692	ピット21
02-2	186	土器埋設遺構4		第2面	03-1	704	ピット22
03-1	687	溝16		第2面	02-1	112	溝路1
02-1	53	溝16		第2面	02-2	94	溝路2
02-1	25	溝17		第2面	03-1	421	溝路2
02-1	46	溝18		第2面	02-2	353	土坑78
02-1	89	溝19		第2面	03-1	747	掘立柱建物34-柱穴1
02-1	83	溝20		第2面	03-1	746	掘立柱建物34-柱穴2
02-1	87	溝20		第2面	03-1	749	掘立柱建物34-柱穴3
02-2	145	溝21		第2面	03-1	749	掘立柱建物34-柱穴4
02-1	73	溝21		第2面	03-1	745	掘立柱建物35-柱穴1
03-1	340	溝21		第2面	03-1	753	掘立柱建物35-柱穴2
02-1	69	溝22		第2面	03-1	752	掘立柱建物35-柱穴3
03-1	344	溝23		第2面	03-1	742	掘立柱建物35-柱穴4

表19 遺構番号対応表(3)

調査年度	遺構番号	新遺構番号	帰属遺構類	調査年度	遺構番号	新遺構番号	帰属遺構類
03-1	252	溝24	第2面	03-1	744	掘立柱建物35—柱穴5	第3面
02-2	81	溝26	第2面	03-1	753	掘立柱建物35—柱穴6	第3面
03-1	751	掘立柱建物35—柱穴7	3層中	02-2		竪穴建物6—外周土坑1	第3面
02-1	122	掘立柱建物36—柱穴1	3層中	02-2		竪穴建物6—外周土坑2	第3面
02-1	123	掘立柱建物36—柱穴2	3層中	02-2		竪穴建物6—外周土坑3	第3面
02-1	124	掘立柱建物36—柱穴3	3層中	02-2		竪穴建物6—外周土坑4	第3面
02-1	126	掘立柱建物36—柱穴4	3層中	02-2		竪穴建物6—外周土坑5	第3面
02-1	127	掘立柱建物36—柱穴5	3層中	02-2		竪穴建物6—外周土坑6	第3面
02-1	125	掘立柱建物36—柱穴6	3層中	02-2		竪穴建物6—排水溝	第3面
02-2	397	ピット27	3層中	02-2	380	竪穴建物7	第3面
02-2	399	ピット28	3層中	02-2		竪穴建物7—柱穴1	第3面
02-2	400	ピット29	3層中	02-2		竪穴建物7—柱穴2	第3面
02-2	355	ピット30	3層中	02-2		竪穴建物7—中央土坑	第3面
02-2	356	ピット31	3層中	02-2		竪穴建物7—土坑1	第3面
02-2	357	ピット32	3層中	02-2	390	竪穴建物7—外周土坑1	第3面
02-2	358	ピット33	3層中	02-2	389	竪穴建物7—外周土坑2	第3面
02-2	360	ピット34	3層中	02-2	381	竪穴建物7—外周土坑3	第3面
02-2	362	ピット35	3層中	02-2	382	竪穴建物7—外周土坑3	第3面
02-2	363	ピット36	3層中	02-2	387	竪穴建物7—外周土坑4	第3面
02-2	364	ピット37	3層中	02-2	391	竪穴建物7—外周土坑5	第3面
02-2	365	ピット38	3層中	02-2	383	竪穴建物7—外周土坑6	第3面
02-2	366	ピット39	3層中	02-2	392	竪穴建物8	第3面
02-2	367	ピット40	3層中	02-2	401	竪穴建物8—排水溝	第3面
02-2	359	ピット41	3層中	03-1	400	竪穴建物9	第3面
02-2	368	ピット42	3層中	03-1		竪穴建物9—柱穴1	第3面
02-2	361	ピット43	3層中	03-1		竪穴建物9—柱穴2	第3面
03-1	452	ピット44	3層中	03-1		竪穴建物9—柱穴3	第3面
02-1	114	竪穴建物1	第3面	03-1		竪穴建物9—柱穴4	第3面
02-1	133	竪穴建物1	第3面	03-1		竪穴建物9—排水溝	第3面
02-1	115	竪穴建物1—排水溝	第3面	03-1		竪穴建物9—中央土坑	第3面
02-1		竪穴建物1—中央土坑	第3面	03-1	401	竪穴建物10	第3面
02-1	133⑧	竪穴建物1—柱穴1	第3面	03-1		竪穴建物10—柱穴1	第3面
02-1	133⑨	竪穴建物1—柱穴2	第3面	03-1		竪穴建物10—柱穴2	第3面
02-1	133⑩	竪穴建物1—柱穴3	第3面	03-1		竪穴建物10—中央土坑	第3面
02-1	133⑪	竪穴建物1—柱穴4	第3面	03-1		竪穴建物10—土坑1	第3面
02-1	133⑫	竪穴建物1—柱穴5	第3面	03-1	420	竪穴建物10—外周土坑1	第3面
02-1	133⑬	竪穴建物1—柱穴6	第3面	03-1	423	竪穴建物10—外周土坑2	第3面
02-1	133⑭	竪穴建物1—柱穴7	第3面	02-1	130	井戸9	第3面
02-1	133⑮	竪穴建物1—柱穴8	第3面	02-2	386	井戸10	第3面
02-1	133⑯	竪穴建物1—柱穴9	第3面	02-2	385	井戸11	第3面
02-1	110	竪穴建物2	第3面	02-2	388	貯蔵槽1	第3面
02-1	135	竪穴建物2	第3面	02-2	666	焼土面1	第3面
02-1		竪穴建物2—中央土坑	第3面	02-2	109	焼土面2	第3面
02-1	135⑥	竪穴建物2—柱穴1	第3面	02-2	110	焼土面3	第3面
02-1	135⑦⑧	竪穴建物2—柱穴2	第3面	02-1	117	溝45	第3面
02-1	135⑨	竪穴建物2—土坑3	第3面	03-1	750	溝46	第3面
02-1	135⑩	竪穴建物2—土坑4	第3面	02-1	119	溝46	第3面
02-1	135⑪	竪穴建物2—土坑5	第3面	02-1	128	溝47	第3面
02-1	135⑫	竪穴建物2—土坑6	第3面	02-1	129	溝48	第3面
02-1	135⑬	竪穴建物2—柱穴1	第3面	02-1	128	溝49	第3面
02-1	135⑭	竪穴建物2—柱穴2	第3面	02-2	402	溝50	第3面
02-2	134	竪穴建物2	第3面	03-1	422	溝50	第3面
02-1	111	竪穴建物3	第3面	02-2	374	溝51	第3面
02-1	136	竪穴建物3	第3面	03-1	406	溝52	第3面
02-1	120	竪穴建物3—排水溝	第3面	02-2	374	溝52	第3面
02-1	116	竪穴建物4	第3面	03-1	407	溝53	第3面
02-1	134	竪穴建物4	第3面	02-2	345	溝54	第3面
02-1		竪穴建物4—中央土坑	第3面	03-1	402	溝54	第3面
02-1		竪穴建物4—土坑1	第3面	02-2	354	溝55	第3面
02-1		竪穴建物4—外周土坑1	第3面	02-2	410	土坑79	第3面
02-2		竪穴建物4—外周土坑2	第3面	02-2	97	土坑80	第3面
03-1		竪穴建物4—外周土坑3	第3面	02-2	98	土坑81	第3面
02-2		竪穴4	第3面	02-2	352	土坑82	第3面
02-1		竪穴建物4—柱穴1	第3面	02-2	384	台地1	第3面
02-2		竪穴建物4—柱穴2	第3面	03-1	417	ピット45	第3面
02-2	95	竪穴建物5	第3面	02-1	113	谷1	第3面
02-2		竪穴建物5—柱穴1	第3面	02-2	100	溝路3	第3面
02-2		竪穴建物5—柱穴2	第3面	03-1	399	溝路3	第3面
02-2	350	竪穴建物6	第3面	02-2	407	谷2	第3面

表20 漆绘番号対応表 (4)

調査年度	調査番号	新調査番号	帰属遺構面	調査年度	漆绘番号	新調査番号	帰属遺構面
02 - 2	1	1	第3面	02 - 1	219	平地建物 1	第3 b 面
02 - 2	2	2	第3面	02 - 2	672	平地建物 2	第3 b 面
02 - 2	3	3	第3面	02 - 1	234	掘立柱建物 1 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 2	4	4	第3面	02 - 1	236	掘立柱建物 1 - 柱穴 2	第3 b 面
02 - 1	238	238	第3 b 面	02 - 2	528	掘立柱建物 10 - 柱穴 7	第3 b 面
02 - 1	239	239	第3 b 面	02 - 2	529	掘立柱建物 10 - 柱穴 8	第3 b 面
02 - 1	240	240	第3 b 面	02 - 2	570	掘立柱建物 11 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 1	237	237	第3 b 面	02 - 2	571	掘立柱建物 11 - 柱穴 2	第3 b 面
02 - 1	235	235	第3 b 面	02 - 2	572	掘立柱建物 11 - 柱穴 3	第3 b 面
02 - 1	232	232	第3 b 面	02 - 2	573	掘立柱建物 11 - 柱穴 4	第3 b 面
02 - 1	233	233	第3 b 面	02 - 2	574	掘立柱建物 11 - 柱穴 5	第3 b 面
02 - 1	218	218	第3 b 面	02 - 2	575	掘立柱建物 11 - 柱穴 6	第3 b 面
02 - 1	217	217	第3 b 面	02 - 2	576	掘立柱建物 11 - 柱穴 7	第3 b 面
02 - 1	216	216	第3 b 面	02 - 2	577	掘立柱建物 11 - 柱穴 8	第3 b 面
02 - 1	213	213	第3 b 面	02 - 2	578	掘立柱建物 11 - 柱穴 9	第3 d 面
02 - 1	214	214	第3 b 面	02 - 2	579	掘立柱建物 11 - 柱穴 10	第3 d 面
02 - 1	215	215	第3 b 面	02 - 2	580	掘立柱建物 11 - 柱穴 11	第3 d 面
02 - 1	151	151	第3 b 面	02 - 2	581	掘立柱建物 11 - 柱穴 12	第3 b 面
02 - 2	596	596	第3 b 面	02 - 2	582	掘立柱建物 11 - 柱穴 13	第3 b 面
02 - 2	597	597	第3 b 面	02 - 2	583	掘立柱建物 11 - 柱穴 14	第3 b 面
02 - 2	598	598	第3 b 面	02 - 2	584	掘立柱建物 11 - 柱穴 15	第3 b 面
02 - 2	599	599	第3 b 面	02 - 2	585	掘立柱建物 11 - 柱穴 16	第3 b 面
02 - 2	600	600	第3 b 面	02 - 2	586	掘立柱建物 11 - 柱穴 17	第3 b 面
02 - 1	244	244	第3 b 面	02 - 2	587	掘立柱建物 11 - 柱穴 18	第3 b 面
02 - 1	162	162	第3 b 面	02 - 2	539	掘立柱建物 12 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 1	243	243	第3 b 面	02 - 2	540	掘立柱建物 12 - 柱穴 2	第3 b 面
02 - 2	414	414	第3 b 面	02 - 2	541	掘立柱建物 12 - 柱穴 3	第3 d 面
02 - 2	415	415	第3 b 面	02 - 2	542	掘立柱建物 12 - 柱穴 4	第3 b 面
02 - 2	416	416	第3 b 面	02 - 2	543	掘立柱建物 12 - 柱穴 5	第3 d 面
02 - 2	417	417	第3 b 面	02 - 2	544	掘立柱建物 12 - 柱穴 6	第3 b 面
02 - 2	418	418	第3 b 面	02 - 2	548	掘立柱建物 12 - 柱穴 7	第3 b 面
02 - 2	419	419	第3 b 面	02 - 2	546	掘立柱建物 12 - 柱穴 8	第3 b 面
02 - 2	466	466	第3 b 面	02 - 2	537	掘立柱建物 12 - 柱穴 9	第3 b 面
02 - 2	467	467	第3 b 面	02 - 2	538	掘立柱建物 12 - 柱穴 10	第3 b 面
02 - 2	468	468	第3 b 面	02 - 2	554	掘立柱建物 13 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 2	469	469	第3 b 面	02 - 2	555	掘立柱建物 13 - 柱穴 2	第3 b 面
02 - 2	470	470	第3 b 面	02 - 2	556	掘立柱建物 13 - 柱穴 3	第3 b 面
02 - 2	471	471	第3 b 面	02 - 2	553	掘立柱建物 13 - 柱穴 4	第3 b 面
02 - 2	472	472	第3 b 面	02 - 2	560	掘立柱建物 13 - 柱穴 5	第3 d 面
02 - 2	473	473	第3 b 面	02 - 2	636	掘立柱建物 14 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 2	451	451	第3 b 面	02 - 2	637	掘立柱建物 14 - 柱穴 2	第3 d 面
02 - 2	452	452	第3 b 面	02 - 2	638	掘立柱建物 14 - 柱穴 3	第3 b 面
02 - 2	453	453	第3 b 面	02 - 2	639	掘立柱建物 14 - 柱穴 4	第3 b 面
02 - 2	454	454	第3 b 面	02 - 2	635	掘立柱建物 14 - 柱穴 5	第3 d 面
02 - 2	455	455	第3 b 面	02 - 2	634	掘立柱建物 14 - 柱穴 6	第3 b 面
02 - 2	456	456	第3 b 面	02 - 2	633	掘立柱建物 14 - 柱穴 7	第3 b 面
02 - 2	481	481	第3 b 面	02 - 2	632	掘立柱建物 14 - 柱穴 8	第3 b 面
02 - 2	393	393	第3 b 面	02 - 2	645	掘立柱建物 15 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 2	394	394	第3 b 面	02 - 2	646	掘立柱建物 15 - 柱穴 2	第3 b 面
02 - 2	396	396	第3 b 面	02 - 2	647	掘立柱建物 15 - 柱穴 3	第3 b 面
02 - 2	395	395	第3 b 面	02 - 2	649	掘立柱建物 15 - 柱穴 4	第3 b 面
02 - 2	482	482	第3 b 面	02 - 2	649	掘立柱建物 15 - 柱穴 5	第3 b 面
02 - 2	504	504	第3 b 面	02 - 2	644	掘立柱建物 15 - 柱穴 6	第3 b 面
02 - 2	505	505	第3 b 面	02 - 2	643	掘立柱建物 15 - 柱穴 7	第3 d 面
02 - 2	506	506	第3 b 面	02 - 2	642	掘立柱建物 15 - 柱穴 8	第3 b 面
02 - 2	507	507	第3 b 面	02 - 2	641	掘立柱建物 15 - 柱穴 9	第3 b 面
02 - 2	503	503	第3 b 面	02 - 2	640	掘立柱建物 15 - 柱穴 10	第3 d 面
02 - 2	502	502	第3 b 面	02 - 2	676	掘立柱建物 16 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 2	501	501	第3 b 面	02 - 2	674	掘立柱建物 16 - 柱穴 2	第3 b 面
02 - 2	500	500	第3 b 面	02 - 2	675	掘立柱建物 16 - 柱穴 3	第3 b 面
02 - 2	512	512	第3 b 面	02 - 2	677	掘立柱建物 16 - 柱穴 4	第3 b 面
02 - 2	513	513	第3 b 面	02 - 2	680	掘立柱建物 17 - 柱穴 1	第3 b 面
02 - 2	514	514	第3 b 面	02 - 2	681	掘立柱建物 17 - 柱穴 2	第3 b 面
02 - 2	515	515	第3 b 面	02 - 2	682	掘立柱建物 17 - 柱穴 3	第3 b 面
02 - 2	516	516	第3 b 面	02 - 2	683	掘立柱建物 17 - 柱穴 4	第3 b 面
02 - 2	517	517	第3 b 面	02 - 2	684	掘立柱建物 17 - 柱穴 5	第3 b 面
02 - 2	518	518	第3 b 面	02 - 2	685	掘立柱建物 17 - 柱穴 6	第3 b 面
02 - 2	510	510	第3 b 面	02 - 2	686	掘立柱建物 17 - 柱穴 7	第3 b 面
02 - 2	511	511	第3 b 面	02 - 2	687	掘立柱建物 17 - 柱穴 8	第3 b 面

表21 遺構番号対応表（5）

摘要年度	遺構番号	新遺構番号	縦属遺構面	調査年度	遺構番号	新遺構番号	縦属遺構面
02-2 522	掘立柱建物 10-柱穴 1	第3 b 面	02-2 692	掘立柱建物 18-柱穴 1	第3 b 面		
02-2 523	掘立柱建物 10-柱穴 2	第3 b 面	02-2 693	掘立柱建物 18-柱穴 2	第3 b 面		
02-2 524	掘立柱建物 10-柱穴 3	第3 b 面	02-2 694	掘立柱建物 18-柱穴 3	第3 b 面		
02-2 525	掘立柱建物 10-柱穴 4	第3 b 面	02-2 695	掘立柱建物 18-柱穴 4	第3 b 面		
02-2 526	掘立柱建物 10-柱穴 5	第3 b 面	02-2 696	掘立柱建物 18-柱穴 5	第3 b 面		
02-2 527	掘立柱建物 10-柱穴 6	第3 b 面	02-2 697	掘立柱建物 18-柱穴 6	第3 b 面		
02-2 690	掘立柱建物 18-柱穴 7	第3 b 面	03-1 553	掘立柱建物 31-柱穴 8	第3 b 面		
02-2 691	掘立柱建物 18-柱穴 8	第3 b 面	03-1 554	掘立柱建物 31-柱穴 9	第3 b 面		
02-2 699	掘立柱建物 18-柱穴 9	第3 b 面	03-1 578	掘立柱建物 32-柱穴 1	第3 b 面		
02-2 706	掘立柱建物 19-柱穴 1	第3 b 面	03-1 579	掘立柱建物 32-柱穴 2	第3 b 面		
02-2 707	掘立柱建物 19-柱穴 2	第3 b 面	03-1 580	掘立柱建物 32-柱穴 3	第3 b 面		
02-2 708	掘立柱建物 19-柱穴 3	第3 b 面	03-1 581	掘立柱建物 32-柱穴 4	第3 b 面		
02-2 709	掘立柱建物 19-柱穴 4	第3 b 面	03-1 583	掘立柱建物 32-柱穴 5	第3 b 面		
02-2 704	掘立柱建物 19-柱穴 5	第3 b 面	03-1 584	掘立柱建物 32-柱穴 6	第3 b 面		
02-2 703	掘立柱建物 19-柱穴 6	第3 b 面	03-1 574	掘立柱建物 32-柱穴 7	第3 b 面		
02-2 711	掘立柱建物 20-柱穴 1	第3 b 面	03-1 575	掘立柱建物 32-柱穴 8	第3 b 面		
02-2 712	掘立柱建物 20-柱穴 2	第3 b 面	03-1 576	掘立柱建物 32-柱穴 9	第3 b 面		
02-2 713	掘立柱建物 20-柱穴 3	第3 b 面	03-1 577	掘立柱建物 32-柱穴 10	第3 b 面		
02-2 717	掘立柱建物 20-柱穴 4	第3 b 面	03-1 582	掘立柱建物 32-柱穴 11	第3 b 面		
02-2 716	掘立柱建物 20-柱穴 5	第3 b 面	03-1 514	掘立柱建物 33-柱穴 1	第3 b 面		
02-2 715	掘立柱建物 20-柱穴 6	第3 b 面	03-1 515	掘立柱建物 33-柱穴 2	第3 b 面		
02-2 714	掘立柱建物 20-柱穴 7	第3 b 面	03-1 516	掘立柱建物 33-柱穴 3	第3 b 面		
02-2 557	掘立柱建物 21-柱穴 1	第3 b 面	03-1 517	掘立柱建物 33-柱穴 4	第3 b 面		
02-2 558	掘立柱建物 21-柱穴 2	第3 b 面	03-1 518	掘立柱建物 33-柱穴 5	第3 b 面		
02-2 559	掘立柱建物 21-柱穴 3	第3 b 面	03-1 523	掘立柱建物 33-柱穴 6	第3 b 面		
02-2 560	掘立柱建物 21-柱穴 4	第3 b 面	03-1 519	掘立柱建物 33-柱穴 7	第3 b 面		
03-1 457	掘立柱建物 26-柱穴 1	第3 b 面	03-1 522	掘立柱建物 33-柱穴 8	第3 b 面		
03-1 458	掘立柱建物 26-柱穴 2	第3 b 面	03-1 520	掘立柱建物 33-柱穴 9	第3 b 面		
03-1 459	掘立柱建物 26-柱穴 3	第3 b 面	02-2 496	井戸 12	第3 b 面		
03-1 460	掘立柱建物 26-柱穴 4	第3 b 面	02-1 186	溝 56	第3 b 面		
03-1 461	掘立柱建物 26-柱穴 5	第3 b 面	02-1 150	溝 57	第3 b 面		
03-1 462	掘立柱建物 26-柱穴 6	第3 b 面	02-1 178	溝 57	第3 b 面		
03-1 463	掘立柱建物 26-柱穴 7	第3 b 面	02-1 150	溝 58	第3 b 面		
03-1 456	掘立柱建物 26-柱穴 8	第3 b 面	02-2 626	溝 59	第3 b 面		
03-1 661	掘立柱建物 27-柱穴 1	第3 b 面	02-2 628	溝 60	第3 b 面		
03-1 662	掘立柱建物 27-柱穴 2	第3 b 面	02-2 658	溝 61	第3 b 面		
03-1 663	掘立柱建物 27-柱穴 3	第3 b 面	03-1 439	溝 61	第3 b 面		
03-1 664	掘立柱建物 27-柱穴 4	第3 b 面	03-1 444	溝 61	第3 b 面		
03-1 533	掘立柱建物 28-柱穴 1	第3 b 面	03-1 445	溝 61	第3 b 面		
03-1 532	掘立柱建物 28-柱穴 2	第3 b 面	03-1 446	溝 62	第3 b 面		
03-1 531	掘立柱建物 28-柱穴 3	第3 b 面	03-1 447	溝 63	第3 b 面		
03-1 530	掘立柱建物 28-柱穴 4	第3 b 面	02-2 765	溝 64	第3 b 面		
03-1 529	掘立柱建物 28-柱穴 5	第3 b 面	03-1 454	溝 64	第3 b 面		
03-1 528	掘立柱建物 28-柱穴 6	第3 b 面	02-2 766	溝 65	第3 b 面		
03-1 527	掘立柱建物 28-柱穴 7	第3 b 面	02-2 701	溝 66	第3 b 面		
03-1 526	掘立柱建物 28-柱穴 8	第3 b 面	02-2 678	溝 67	第3 b 面		
03-1 536	掘立柱建物 29-柱穴 1	第3 b 面	02-1 142	土坑 83	第3 b 面		
03-1 537	掘立柱建物 29-柱穴 2	第3 b 面	02-2 478	土坑 84	第3 b 面		
03-1 538	掘立柱建物 29-柱穴 3	第3 b 面	02-2 411	土坑 85	第3 b 面		
03-1 539	掘立柱建物 29-柱穴 4	第3 b 面	03-1 455	土坑 86	第3 b 面		
03-1 540	掘立柱建物 29-柱穴 5	第3 b 面	03-1 440	土坑 87	第3 b 面		
03-1 541	掘立柱建物 29-柱穴 6	第3 b 面	03-1 450	土坑 88	第3 b 面		
03-1 542	掘立柱建物 29-柱穴 7	第3 b 面	02-1 187(246)	ピット 46	第3 b 面		
03-1 535	掘立柱建物 29-柱穴 8	第3 b 面	02-2 612	ピット 47	第3 b 面		
03-1 544	掘立柱建物 30-柱穴 1	第3 b 面	02-2 665	ピット 48	第3 b 面		
03-1 545	掘立柱建物 30-柱穴 2	第3 b 面	02-2 631	ピット 49	第3 b 面		
03-1 546	掘立柱建物 30-柱穴 3	第3 b 面	02-2 734	ピット 50	第3 b 面		
03-1 547	掘立柱建物 30-柱穴 4	第3 b 面	03-1 677	ピット 51	第3 b 面		
03-1 548	掘立柱建物 30-柱穴 5	第3 b 面	02-1 242	溝 68	第4面		
03-1 549	掘立柱建物 30-柱穴 6	第3 b 面	02-1 245	溝 68	第4面		
03-1 550	掘立柱建物 30-柱穴 7	第3 b 面	03-1 763	溝 68	第4面		
03-1 543	掘立柱建物 30-柱穴 8	第3 b 面	02-2 673	溝 69	第4面		
03-1 555	掘立柱建物 31-柱穴 1	第3 b 面	03-1 670	溝 69	第4面		
03-1 556	掘立柱建物 31-柱穴 2	第3 b 面	02-2 767	溝 70	第4面		
03-1 557	掘立柱建物 31-柱穴 3	第3 b 面	02-2 669	溝 71	第4面		
03-1 558	掘立柱建物 31-柱穴 4	第3 b 面	03-1 453	溝 71	第4面		
03-1 559	掘立柱建物 31-柱穴 5	第3 b 面	02-1 291	凹池 2	第5面		
03-1 565	掘立柱建物 31-柱穴 6	第3 b 面	02-1 296	流路 4	第6面		
03-1 560	掘立柱建物 31-柱穴 7	第3 b 面					

## 付編 大和川右岸堤防の調査－若林地区三箇用水樋門撤去に伴う－

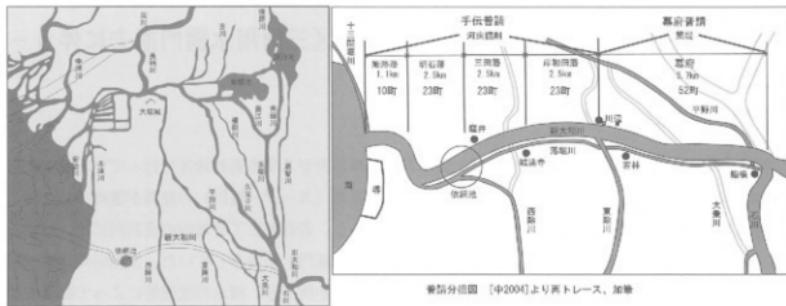
### 第1節 調査に至る経過

今回の調査は、国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所が八尾市若林地区で行っている新大和川堤防の補修工事に伴うものである。当地区では、高規格堤防（スーパー堤防）の整備が進められているとともに、八尾市の「防災ステーション」が計画されている。若林町三丁目地内の堤防内には、昭和24年に設置され、現在は使用されていない遊休樋門「三箇用水樋門」が現存していた。大和川河川事務所の報告によると、大和川にはこのような遊休樋門が府内に9か所あり、雨水の浸透等によって破壊すると周辺地域に浸水被害を及ぼすことが予測されるため、撤去することが緊ましいと考えられている【大和川河川事務所2006】。この三箇用水樋門の撤去にあたって堤防を開削する必要があり、これに併せて堤防の断面観察を行うことになった。作業について、大和川河川事務所と大阪府教育委員会が平成18年1月11日に行った協議の結果、近接地区を調査していた財団法人大阪府文化財センターが工事の進捗状況を見ながら文化財調査を行うことになった。2月15日に掘削を開始し、堤防の調査は2月21日、3月3・4日の3日間行った。同6日には、工事関係及び文化財調査関係者向けの現地見学会を開催し、85名の参加者を得た。

### 第2節 大和川の付け替え

現在の大和川は、柏原市付近で最大の支流である石川と合流し、西流して大阪湾に注いでいる。この大和川は1704年（宝永元）に付け替えられた人工河川であり、付け替え以前の大和川は、石川と合流する柏原から北に向かって流れ、八尾や東大阪付近で分流や合流を繰り返し、河内平野全体に網の目のように広がりながら大坂城付近で淀川へ注ぎ込んでいた（図270上段左）。河内平野は東から西への土地の傾斜が小さいため、平野部を流れる河川の流れには勢いがなく、大雨や高潮による増水や堤防の決壊が度々起きた。また、江戸時代になると、山林の開発に伴う木々の伐採によって山地の土砂が河川に流入して大井川化が進み、周辺の人々は甚大な被害を被っていた。その被害をなくすため、1657年（明暦3）、河内国今米村（現東大阪市今米）の庄屋中甚兵衛らは、柏原からまっすぐ西に大和川を流し、堺港で直接大阪湾に注がせる計画を立て、幕府への請願を行った。付け替えを望む賛成派と、新川流路になって土地が潰される村々の反対派との係争は実に半世紀近くに及んだ。付け替えの請願、反対派の迷惑訴え、計画白紙が何度も繰り返され、この間、幕府が堤防の補修や淀川の拡幅など応急処置的な工事を行ったものの、度々起こる水害を防ぐ有効な手立てが打ち出せず、ついに1703年に付け替えが決定した。付け替えは1704年2月27日着工、10月13日完成という約8か月でのスピード工事で行われた。付け替えに関する記録は甚兵衛の残した文書類・絵図類からなる「中家文書」をはじめ数多く残されている。以下の文章は〔中1993・2004〕の記述を参考にした。

大和川の付け替えは、柏原から大坂湾に至る東西131町（14.3km）、川幅200mに及び、幕府直轄による普請と諸藩による手伝普請で行われた（図270上段右）。付け替えは当初、姫路藩本多中務大輔忠国を手伝大名とし、目付大久保甚兵衛忠香、小姓組伏見主水為信の両名を普請奉行として着工したが、



付図賛久前の大和川 [名古屋市歴史資料館2004]より再トレー、加筆

新大和川工事の分担と幕府貢の費用割合見附 [中2004]

工事区域	長さ	工事責任者	報(貢目)	金銭(両)
大和川・ 荒劍川 御手代 官寄品場	① 船橋村領~川邊村領 (52町 (3120間))	大久野基兵衛忠等 (江戸大目付 1200石) 伏見江水木信 (江戸目付 1500石) 万年長兵部 (大目・代官)	770余	12,933余
	② 川邊村領~城道寺村領 (23町 (1380間))	間藤義次守 (熊野神社和田源主 6万石)	3,635.8余	60,599余
	③ 城道寺領~底井村領 (23町 (1380間))	九鬼大尉守 (西山三出屋源主 3.6万石)		
	④ 底井村領~浅香山谷口 (23町 (1380間))	松平安左衛門佐 (伊賀明照源主 6万石)		
	⑤ 浅香山谷口~足立町 (10町 (600間))	本多小野大輔忠国 (越後郡路源主 15万石)	106	1,766余
	計	川上堺切~川下海切 (131町 (7860間))	猪谷右近門佐 (和州高取源主 2.5万石)	4,697.8余
付帯工事	狹山西除川切通 (大乗川傍流) 城道寺村水道 十三間堀川延長	徳山城守 (丹波守源主 2.3万石)	52.8	880余
合計				4750.6余
				78,175余

場所	積量(両/軸)(両)	馬路(両)	高き(度)(両)	長さ(間)	土押(坪)	歩掛(人)	入数(人)
天守切~堀内(三河)	15	3	3	2900	78200	5	391500
天守切~川口(三河)	13	2	2.5	2900	58000	5	260000
堀内~三河守北方	[50~100]		(0.5~1)	750	43750	6.5	284375
堀内~西井筋(北陸)	15	3	3	900	74300	5	121500
堀内~西井筋(南陸)	13	3	2.5	900	18000	5	90000
西井筋~絲右衛門池東半角	50		-1	1900	85000	6	570000
城石門池東~浅香山谷口	50		(1~2)	400	60000	8	480000
浅香山谷口~堀内	50		2	2900	78200	5	391500
堀内~堀内	10	2	3	635	7565	4	36245
堀内~堀内(無通)	16	2	2	635	7565	4	36245
堀内~西井筋(南陸)	3	1	1	3800	76000	3	22800
堀内~方路	-15		-1	1500	22500	6	135000
合計					201320	976280	
					221250	1469375	
						2445655	

川連新幹線構造の内容 [狭山池博物館2004]

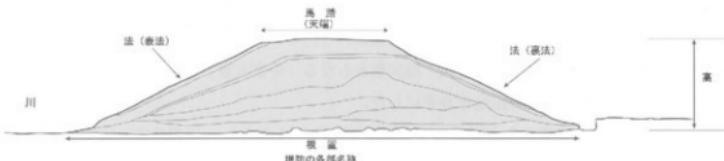


図268 堤防善請関連記録

表16 大和川付け替え関連年表【八尾市立歴史民俗資料館2004】に加筆、省略

付け替え前

1614年（慶長19年） 大坂冬の陣→河内の村々が焼かれる

1615年（慶長20年） 大坂夏の陣→河内の山手の村々も続報される

※戦乱や開発によって山地の木々が伐採され、大坂の土砂が河川に流入しはじめる→川床上升

1620年（元和6年） 河内で洪水（船原村で堤決壊）

1625年（寛永2年）ごろ 大和川の堤防、川床を削ぐ始める。→50年後には3.6m川床が上昇

1633年（寛永10年）～1652年（水治元年）

※数年ごとに河内で洪水がおこる

1657年（明暦3年） 河内国今村米庄臣中曾兵衛、江口幕府に大和川付け替えを訴え出る

1660年（萬治3年） 諸国大旱水害により、幕府範囲を検分する。畿内でも検分が行われ、この時に大和川付け替え事前調査が行われる（第1回検分）

1665年（寛文5年）ごろ 大和川の堀廻、川床削ぐがある。→10年後には1.8m上昇

1671年（寛文11年） 大和川付け替え検分が再び行われる（第2回検分）

1674年（延宝2年） 河内で洪水（法善寺前二重堤決壊、木幡・荒江・吉田川などの堤決壊）

※「寛年大洪水」とよばれ、堤防35箇所が切れる大被害を被り、以降水害被害が拡大する。

1675年（延宝3年） 河内で洪水。大和川の堤防、川床削ぐがある

1676年（延宝4年） 河内で洪水。大和川付け替え検分が再度行われる（第3回検分）。流れ地予定の農民が訴状を提出。

1683年（天和3年） 河内で洪水。幕府、権現石見守正体らに抵津河内農園の水路高見を命じ伊奈平十郎、河村瑞賢らに施行させる。反対派、訴状を提出。大和川の付け替え検分が行われたが（第4回検分）、付け替えの必要なしとされ、以後は横領ご法度になる→付け替え推進派激減

1684年（天和4年） 河村瑞賢が淀川の改修作をはじめると

1686年（貞享3年） 河村瑞賢による大和川河口の改修工事が行われる。久宝寺・玉瀬・瀬江・恩智川の堤防築

1698年（元禄11年） 河村瑞賢による宇治川、木津川、淀川、神崎川、大源木津川、中津川などの工事がはじまる

1703年（元禄16年） 畿府、付け替えを決定

付け替え工事

1704年（宝永元年）

(2月27日) 告請開始（本多家川下書請、浅香谷口～足立町の新大和川および落雁川の開墾10町）

(3月21日) 大和川付替請書手伝大名齋藤藩主本多忠大輔忠国御死

(3月30日) 喜連村にいた告請奉行衆が河内国志紀郡大田村に移転する（川上書請船橋村～川辺村の新人和川および落雁川の開墾52町）

(4月1日) 損害田明石落松平直常、和泉堀岸田兼岡部長泰、抵津國三田藩九鬼隆方が後任の手伝大名に決定

(4月18日) 損害田明石落松平直常（麻生村～浅香谷口の新大和川および落雁川の開墾23町）、和泉堀岸田兼岡部長泰（川辺村～城邊寺村の新大和川および落雁川の開墾23町）、抵津國三田藩九鬼隆方（城邊守村～麻井村の新大和川および落雁川の開墾23町）に引き渡される

(4月29日) 告請所が河内国志紀郡大田村から抵津國佐吉郡喜連村に移転

(6月2日) 告請所が抵津國佐吉郡喜連村から抵津國佐吉郡喜連村に移転

(10月15日) 大和川初遷終了（告請完成）

3月に本多氏が亡くなり、普請が中断した。しかし、4月には和泉国岸和田藩岡部美濃守長泰、摂津国三田藩九鬼大和守隆方、播磨国松平左兵衛佐直常の三大名による後継の手伝普請が決定し、幕府普請工事分と姫路藩普請区間を除いた区間を三等分して分担する形で工事が再開された（図270中段）。

付け替えの工法は、地形の問題から柏原から川辺村までは築堤による川付けで、川辺村から海までは開鑿による川付けとなった。また、旧大和川に流れ込んでいた諸河川の排水のため新たに「落堀川」が開削された。落堀川は、船橋から新川の南堤に沿って浅香谷口までの長さ121町（約13.2km）、幅16間（約30m）で付けられ、谷口で新川に合流させた（図270上段）。

### 第3節 既往の調査成果

大和川堤防の調査はこれまでに、左岸となる藤井寺市域で藤井寺市教育委員会による調査が2件、右岸となる大阪市域で財团法人大阪市文化財協会による調査が1件の計3件が実施され（図271）、いずれも過去の築堤の様子が判明している。これら各調査の成果を、刊行されている概報・報告書などから簡単にまとめる。なお、築堤当初の堤防の規模は、中家文書の「川造新川普請大見積書」の記載（図270中段）によると、左岸（南堤）は、根置（堤防下場）13間（23.4m）、馬踏（堤防上場）3間（5.4m）、高2.5間（4.5m）、右岸（北堤）は、根置15間（27m）、馬踏3間（5.4m）、高3間（5.4m）で、北堤の方が大きい計算になっていた。北堤と南堤の大きさの違いは、付近の地形が南北に傾斜しているため、北堤の水当たりの方が強くなることを考慮したものとみられるが、北堤の向うに広がる都市大阪を水害から守る政治的意味合いを含んでいたとも考えられている〔岩城2005〕。

**小山平塹遺跡地点（図272）** 1987年に小山雨水ポンプ場放流渠建設工事に伴う小山平塹遺跡の発掘調査が藤井寺市小山で実施された。この調査では、根置21.5m（12間）、高3.6m（2間）、馬踏5.4m（3間）を測る築堤当初の堤が検出され、その規模は中家文書に記された数値よりも小さかった。また、杭列が南側1列、北側3列、地面に対して垂直に打たれているのが確認され、南北杭列間の距離は13間で、その部分から積まれた砂層を追いかけた馬踏は幅3間となり文献とほぼ一致するが、高さが5.4mでやや高くなるという（図272太線部分）。付近では、築堤後間もない1716年（正徳6年）に5尺（1.5m）の嵩上げ改修が行われていることが文献から確認できるため、高い部分は改修時の堤に相

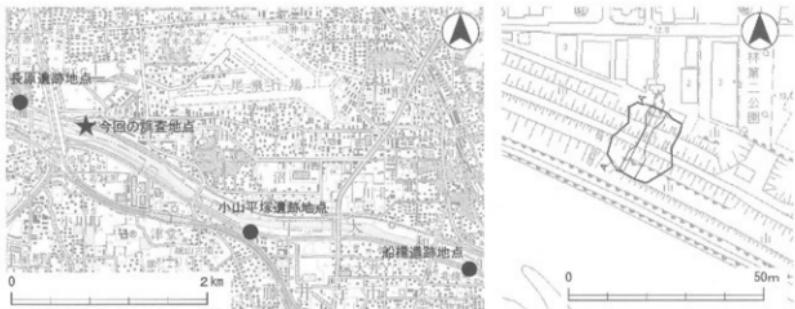
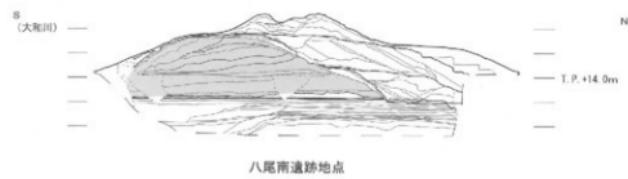


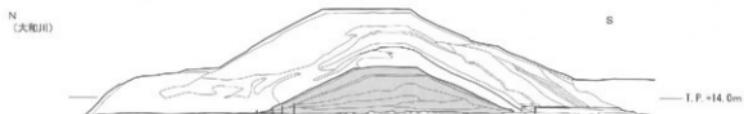
図269 調査地点と既往の堤防調査地点



八尾南遺跡地点



船橋遺跡地点 [山田2004]より再トレース \*一部山田氏の表示により加筆



小山平塚遺跡地点 [山田2004]より再トレース



長原遺跡地点 [田中・瀬尾・経川1994]より再トレース

宝永元年 (1704) の盛土を示す

0 20m

図270 既往の調査地点との比較

当すると見られている。また、築堤に際しては、掘り込みや整地などを行っておらず、畠の歴と思われる旧耕土層が残り、付け替えに際して堤幅部の川床も掘削されていなかったという。これらは築堤工事の早急性を示唆するものとされている〔藤井寺市教育委員会1988、藤井寺市1999a〕。

また、この南北杭列とは異なり、やや北方向に振る杭列3列と、堤に平行するが途中で切れる杭列200本が川側で見つかっており、当初、水流緩和の施設や船着場施設の一部と考えられていたが、これは前者に相当する、堤防に当たる水を減速し、堤防の浸食や決壊から守る「杭出し水制」という工法であることが判明している〔中2004、大阪府立伏山池博物館2004〕。

**船橋遺跡地点（図272）** 1999年に北条雨水ポンプ場建設工事に伴う船橋遺跡の発掘調査が藤井寺市北条で実施された。調査で明らかとなった築堤当初の堤の規模は、根置約19m、馬踏約5m、高約3.6mであった。これは根置で比較した場合、中家文書より4.4m、小山平塚遺跡地点で検出された堤よりも2.5m小さかった。この数値の差は、中家文書の規模が堤の標準を示したものであって、実際は上流域に行くにしたがって、その規模を減じたのではないかと考えられている。

また、この調査では築堤後数回にわたって堤の補強が行われたこと確認されている。この補強に使われた土砂は、築堤当初のシルト質土と違って、大きな礫の混じる砂であり、川底に堆積した川砂を使ったものと考えられている。砂でできた堤防は、大水によって堤が崩落し始めた際には、水に洗い流された部分に堤防上部の土砂を崩し落として自動的に補修する役目を果たすため、理に適った材料選びをしていると考えられている〔藤井寺市1999b〕。

**長原遺跡地点（図272）** 1994年に「笠守樋」の撤去に伴う長原遺跡の発掘調査が大阪市平野区川辺で実施された〔田中2004〕。笠守樋は、大和川の付け替えによって南からの水源を絶たれた川辺村が灌漑用水の確保のために新たに設けた用水樋で、近年まで使用されていた。調査地は東除川と交差する付近にある。

この調査では高さが築堤時の表土面から約3m、断面形は小高い丘状を呈する築堤当初の堤が検出され、堤の最上部で旧表土層が確認されている。盛土は、堤の川側から土砂を5~6層ほど堤の中心部が高くなるように積み上げられていたが、版築などの形跡は確認されていない。堤の規模が小さい理由として、長期間風雨にさらされ表土が削られたためと推定している〔田中・瀬尾・細川1994〕。

#### 第4節 今回の調査成果

今回の調査地点は（以下、「八尾南遺跡地点」と呼称）、長原遺跡地点のある旧川辺村の東隣、旧若林村にあたる場所である。若林村は大和川の付け替えで村を南北に分断され、多くの土地や田畠が河床となった。大和川で分断されながらも、松原市北若林、松原市恵我村として存在していたが、近くに橋がないなどの理由から、北若林は昭和39年に八尾市に編入され現在に至っている。

今回の調査の目的が樋門の撤去であったため、堤防全体の断ち割りは行われず、堤両端は調査範囲外となってしまったが、西側断面で確認した現在の盛土を含む堤防全体の大きさは、根置32m、高さ8mであり、杭列等は確認できなかった。そのうち、築堤当初の規模は、根置推定26m、馬踏5.4m、高5.4mであり、その規模は、中家文書に記された数値とはほぼ一致する。また、堤直下の面には島畠とみられる旧耕作土が残っていた。このことから築堤に際して、掘り込みや整地を行わず、掘り出した土を直に盛り上げていったことが窺えた。

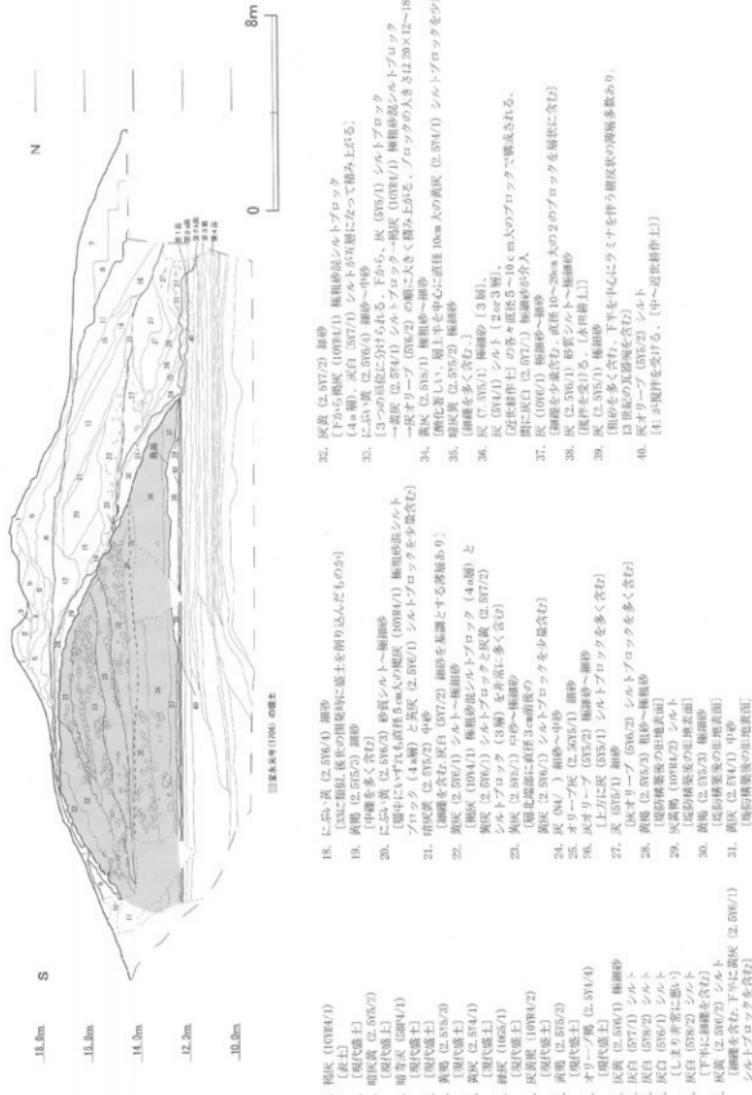


図271 大和川右岸堤防断面

築堤作業の単位は、幅20cm×12~18cmのブロック土を盛り上げ構成されていた。旧耕土以下を順に掘り下げながら堤に盛り上げたとみられ、下方に酸化土壌と洪水砂層を起源とする黄灰から褐灰色砂質ブロックと水成堆積を起源とする灰色粘土ブロック、上方に灰色粘土ブロックと暗色帶層を起源とする暗灰色粘土ブロックが多く混じる。この暗色帶層は今回の八尾南遺跡の調査において、第2面で検出した大方形周溝墓等の遺構の埋土と同一と考えている。このブロック土の大きさからは、当時の作業単位が想定できた。藤井寺市船橋遺跡の調査では、10~30cm角の方形の小ブロックからなる多数の痕跡が残る近世の粘土探掘土坑が検出されている。築で規則的に方形のブロックを切り出していく作業を繰り返したとみられる〔岡本2005〕。調査地周辺の土を同じような方法で切り出し、盛土に使用したと考えられる。ブロックの角が丸く見えるのはモッコで運んでいる時に転がったり、盛土した際に足などで踏んだりしたためであろう。また、盛土途中で一時作業が中断したと考えられるシルト質土の薄層が見られた（図273 破線））。記録によると、本多氏が亡くなつて後任が決まるまで普請作業が止まつたと言われており〔藤井寺市教育委員会1988〕、この層が記録の時期に相当するのではないかと推測している。

## 第5節 考察

『川邊新川普請大見積書』によれば、築堤盛土と河床掘削の両方を行う地区は存在せず、築堤に使用した土は河床掘削を行った地域から運んでもかなうよう考えられていた。しかし、河床掘削地から築堤場所へ土砂を運ぶ労力や築堤に必要な土量が計算通りに足りたのか疑問があった。果して今回の調査で検出した堤の土質を観察すると、堤構築面以下に見られる地層と同質であった。過去の調査例から堤の規模が場所によって異なることが明らかになったと同様に、築堤に使用する土の確保方法も見積通りに行っていない場合があったと考えられそうである。

堤の盛土方法は、4地点ともに川方向から土を運んで盛り上げる方法を数回の単位に分けて行っている。版築などを行ったと考えられる痕跡は見つかっていない。土留めの杭が見つかっている小山平塚遺跡地点では、初期の段階でまず根置の幅に合わせて土を盛り、盛土の幅を決定してから順に堤の中心付近が高くなるように積み上げ、最終的には法面と頂部を一気に作りだしている様子が確認できる。長原遺跡・八尾南遺跡地点においても、根置付近の盛土の様子が小山平塚遺跡地点と似ている。あらかじめ根置の幅通りに盛土を行う方法を探ったと考えられそうである。八尾南遺跡地点の盛土は、北側（陸側）の法面近くで頂部が高くなるように積み上げ、最後の段階で川側にまとまった盛土をして、断面台形に仕上げている。長原遺跡地点では頂部がはっきりせず、同じような単位でなだらかな丘状に作られている。ただし、船橋遺跡地点では、他の3地点とは異なり、盛土を根置幅に合わせず、小さな単位の盛土を外側に順に広げていくように積んでいる様子が想定される。頂部は八尾南遺跡地点と同様に陸側の法面近くにあると見られるが、未検出のため明らかではない。作業的に見て、後になるほど盛土を行う部分が斜面になり、効率が困難になったと思われるが、川側の法面を一気に覆うことで強度は他地点よりも強くなっていると考えられる。

堤の強度は、1. あらかじめしっかりした土台を作る。2. 浸水や圧力に強い土で堤を作る。3. 土留め杭で崩落を防ぐ、といった工夫などで増すと考えられる。この観点から見れば、小山平塚遺跡地点の堤が工法的にしっかりしているようである。船橋遺跡地点は馬踏から浸水したら亀裂が入りやすい危険性を感じられる。この2地点は川の上流付近にあるため、特に水流が激しく、築堤後もなく、近隣

の堤防が決壊したことから、嵩上げによる修復が行われているが、一方下流側の長原遺跡・八尾南遺跡地点では近現代に入るまで腹付けや嵩上げなどが行われなかつたとみられ、旧地表面が風雨にさらされた様子が確認された。

最後に、この調査の契機となった三箇用水樋門について触れておきたい。三箇用水樋門の前身は、「王水川」と呼ばれる用水から引いた樋であったとみられる。王水川とは、古くは王水井路と呼ばれた灌漑用水路であり、石川の水を古市郡碓井村（現羽曳野市）で取水し、応神天皇陵の南側にある菅原八幡宮の境内を経て、応神天皇陵の西側で大乗川より分流した後、北西に流れ、流域の村々の田を潤していた〔藤井寺市1998〕。この王水川の末は、若林村まで至って平野川に合流しており、若林村と川辺村は王水川に王地丸樋を設置し、用水に利用していた。しかし、付け替え後は新川に遮断され、新たに開削された落堀川に合流したため、用水源が絶たれてしまった。

新大和川の右岸に位置することになる村々では、付け替えによって、それまで灌漑用水として使用していた南からの水源が遮断されることから、水の確保が問題となつた。そこで新大和川の上流から下流までの北堤には、数多くの樋口の設置が許可されたという〔棚橋2006〕。また、南堤の樋から水を導くための「向樋」も設けられた。

新たな用水を確保するために若林村では、付け替え以前に使用していた樋を元に、長原・川辺・若林三ヶ村立会樋を作つて用水組合を結成し、王水川の代わりに新大和川や落堀川から用水を引くようになつた。この樋は、幕末の絵図では「字三箇樋」と記されている〔石原2003〕。今日まで改修されながらもその名が残つたのであろう。

（木村）

## 引用・参考文献

- 石原佳子 2003 「第2節 馬池と八箇用水－近世大和川北岸地域の水利事情－」『長原・瓜畠遺跡発掘調査報告XX』財团法人大阪市文化財協会  
岡本茂史 2005 『船橋遺跡II』財团法人大阪府文化財センター  
大阪府立狭山池博物館 2004 「近畿を拓いた土木技術」  
岩城卓二 2005 「畿内・近国の河川支配－大和川堤防を中心に」『歴史学研究 第42号』大阪教育大学  
柏原市歴史資料館 2004 「大和川付け替え300周年記念 大和川－その永遠の流れ－」  
国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所 2006 「若林地区堤防補修工事（堤防掘削）実施中 一堤防の弱点 三箇樋門の撤去～」  
阪田政功 1997 「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』と農書院  
伊中清美・瀬尾真由美・細川富貴子 1994 「大和川の堤防調査」『葬火51号』財团法人大阪市文化財協会  
田中清美 2004 「大和川堤防と笠守樋の調査」『大和川付け替え300周年記念企画展 II 文化財講演資料』  
棚橋利光 2006 「大和川付け替え後の用水問題（1）」『河内どんこう75号』八尾市文化協会  
中野幸 1993 「大和川の付け替 改流ノート」  
中野兵衛 2004 「甚兵衛と大和川」大阪書籍  
藤井寺市 1999 a 「広報ふじいでら」第356号1999年1月号  
藤井寺市 1999 b 「広報ふじいでら」第357号1999年2月号  
藤井寺市 1998 「藤井寺市史」第2巻  
藤井寺市教育委員会 1988 「大和川左岸堤部及び小山平塚遺跡発掘調査概要」  
八尾市立歴史民俗資料館 2004 「大和川付け替えと八尾」  
山出幸弘 2004 「大和川堤防の制化」『大和川付け替え 300周年記念企画展 II 文化財講演資料』

# 報告書抄録

ふりがな 書名	やおみなみ いせき 八尾南遺跡					
副書名	大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター測量報告書					
シリーズ番号	第172集					
著者名	同本茂史・森脇美佐子・桑野一幸・木村まり・正岡大実					
編集機関	(財)大阪府文化財センター					
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel072-299-8791					
発行年月日	2008年3月10日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	緯度・経度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
やおみなみいせき 八尾南遺跡	おおさかふやおし 大阪府八尾市	27212	北緯34度35分 33秒 東経135度35分 01秒	2000.05.18～ 2000.10.31 2001.04.20～ 2002.03.29 2002.01.01～ 2004.02.27	3180m <sup>2</sup> (02-1) 4763m <sup>2</sup> (02-2) 3550m <sup>2</sup> (03-1)	大和川改修 (高規格堤防)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
八尾南遺跡	耕作地	中世～近世	水路・土坑・溝	陶器壺・土師器・石製品	併存する幅広の溝を確認。	
	耕作地・居住城・墓地	古代末～中世	掘立柱建物・土塁墓・溝・土坑・ビット	陶器壺・瓦器・土師器・須恵器・木製品・石製品	差里地帯に即した構・上坑墓を近辺に伴う掘立柱建物の検出。	
	古墳	古墳時代中期～後期	古墳・溝・土坑・井戸	須恵器・土師器・木製品・石製品・種実	帆立貝形を含む3基以上の古墳周溝の確認。種実を伴う数を入れた祭祀井戸の確認。	
	居住城・墓域	弥生時代後期 末～古墳時代初頭	周溝墓・溝・土坑・井戸・藍穴建物・掘立柱建物・流路	弥生土器・土師器・木製品・石製品	前方後方形を含む方形周溝墓を36基確認。完彩の土器を大量に含む溝・流路の確認。墓域西側に広がっていた可能性のある居住城の一部を確認。	
	居住城・生產城	弥生時代後期 前半	堅穴建物・掘立柱建物・井戸・水路・溝・土坑・水出吐門・ビット	弥生土器・木製品・石製品・飲食器・ガラス玉・十石製品	厚い洪积砂に埋没した居住城と生產城からなる集落の検出。周溝を備える堅穴建物の検出。縄西土器の出土。	
	生產城	弥生時代前頭 末～中期初頭	水田畦畔・水路・溝	弥生土器・石製品	調査区ほぼ全城に広がる水田を確認。	
	集落	後期旧石器		サヌカイト石核・剥片	下部冲積層層において石核・剥片を検出。	
大和川右岸堤防	堤防	近世			宝永元年(1704)に付け替えが行われた新大和川の堤防規模を確認。	
要約	2002～2004年の3年にわたりて調査を実施し、旧石器時代から中世にかけて遺跡と説く遺構面を検出した。中でも、厚い洪积砂によって埋没した弥生時代後期遺構面では、居住城と生產城が後の削平を受けることなく、ほぼ当時のまま残存しており、当該期の集落像を考える上で、極めて重要な成果を得ることができた。このうちの堅穴建物は周間に堤を備えており、こうした周堤を有する建物の検出例は全国的にみても極めて希少であることから、堅穴建物の構造を考える上でも、重要な資料を得ることができている。 このほか弥生時代前期から中崩初期の遺構面では、調査区のほぼ全城に堅穴と並んで配置された小区画用水を確認した。尚該期の良好な小区画構造は現例も少ないことから、基礎的な資料として重要である。 さらに、弥生時代後期から古墳時代初期の藍穴建物の藍溝雨においては、調査区全城に廣間する墓域を検出した。検出した周溝墓の总数は36墓を数え、中には前方後方形を呈するものも含まれていた。 遺物の上では、弥生時代後期の遺構面から出土した縄向土器が特筆される。特に竜をモチーフとしたと考えられる土器は、從来知られている類例と比較しても挙めて具象的な表現手法を用いており、注目される。					

(財) 大阪府文化財センター発掘調査報告書 第172集

## 八 尾 南 遺 跡

第2分冊（遺物・分析・総括編）

- 大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

発行年月日／2008年3月10日発行

編集・発行／財團法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／三星商事印刷株式会社  
京都市中京区新町通竹屋町下ル介財天町300

